

茨城県教育財団文化財調査報告第133集

(仮称)島名・福田坪地区特定土地区画
整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ

熊の山遺跡
(中巻)

平成10年3月

茨城県
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第133集

(仮称)島名・福田坪地区特定土地区画
整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ

くま の やま 遺 跡
熊 の 山 遺 跡
(中 卷)

平成10年3月

茨 城 県
財団法人 茨城県教育財団

中 卷 目 次

② 奈良・平安時代	241
③ 時期不明	548
(2) 掘立柱建物跡	557
(3) 土坑	559
(4) 大形竪穴状遺構	577
(5) 溝	584
(6) 不明遺構	586
(7) 遺構外出土遺物	587
3 8区の遺構と遺物	596
(1) 竪穴住居跡	596
① 古墳時代	596
② 奈良・平安時代	618
③ 時期不明	654
(2) 掘立柱建物跡	658
(3) 土坑	659
(4) 井戸	662
(5) 溝	667
(6) 遺構外出土遺物	668
第4節 まとめ	670
付 章	
熊の山遺跡出土赤色物質の成分分析	673
熊の山遺跡竈灰層の自然科学分析	675
熊の山遺跡出土須恵器壺Gの胎土分析	678

中 卷 挿 図 目 次

第198図 第134号住居跡実測図	241	第205図 第139号住居跡出土遺物実測図	246
第199図 第134号住居跡出土遺物実測図	242	第206図 第140号住居跡実測図	249
第200図 第135号住居跡実測図	243	第207図 第140号住居跡出土遺物実測図	250
第201図 第135号住居跡出土遺物実測図	243	第208図 第144号住居跡実測図	252
第202図 第136号住居跡実測図	244	第209図 第144号住居跡出土遺物実測図	253
第203図 第136号住居跡出土遺物実測図	244	第210図 第145号住居跡出土遺物実測図	254
第204図 第139号住居跡実測図	245	第211図 第145号住居跡実測図	255

第212图	第146号住居跡実測図	256	第250图	第178号住居跡出土遺物実測図	300
第213图	第146号住居跡出土遺物実測図	257	第251图	第180・181号住居跡実測図	301
第214图	第147号住居跡実測図	258	第252图	第180号住居跡竈実測図	302
第215图	第147号住居跡出土遺物実測図	259	第253图	第180号住居跡出土遺物実測図	303
第216图	第148号住居跡実測図	260	第254图	第182・183号住居跡実測図	305
第217图	第148号住居跡出土遺物実測図	261	第255图	第182・183号住居跡竈実測図	306
第218图	第149号住居跡出土遺物実測図	262	第256图	第182号住居跡出土遺物実測図	307
第219图	第149・150号住居跡実測図	263	第257图	第183号住居跡出土遺物実測図	309
第220图	第150号住居跡出土遺物実測図	264	第258图	第184号住居跡実測図	311
第221图	第151号住居跡実測図	266	第259图	第184号住居跡出土遺物実測図	311
第222图	第151号住居跡出土遺物実測図	267	第260图	第185号住居跡実測図	312
第223图	第153号住居跡実測図	269	第261图	第185号住居跡出土遺物実測図	313
第224图	第153・154号住居跡出土遺物実測図	272	第262图	第186号住居跡実測図	314
第225图	第154号住居跡実測図	272	第263图	第186号住居跡出土遺物実測図	315
第226图	第155号住居跡実測図	273	第264图	第187・199号住居跡実測図	317
第227图	第155号住居跡出土遺物実測図	274	第265图	第187号住居跡出土遺物実測図	318
第228图	第156号住居跡実測図	276	第266图	第188・194号住居跡実測図	319
第229图	第156号住居跡出土遺物実測図	276	第267图	第188号住居跡出土遺物実測図	320
第230图	第157号住居跡実測図	278	第268图	第189号住居跡実測図	322
第231图	第157号住居跡出土遺物実測図	279	第269图	第189号住居跡出土遺物実測図	323
第232图	第158号住居跡実測図	280	第270图	第191号住居跡実測図	324
第233图	第158号住居跡出土遺物実測図	280	第271图	第191号住居跡出土遺物実測図	325
第234图	第160号住居跡出土遺物実測図	281	第272图	第192号住居跡実測図	326
第235图	第161号住居跡実測図	282	第273图	第192号住居跡出土遺物実測図	327
第236图	第161号住居跡出土遺物実測図	283	第274图	第193号住居跡実測図	328
第237图	第164号住居跡実測図	285	第275图	第193号住居跡出土遺物実測図(1)	329
第238图	第164号住居跡出土遺物実測図	286	第276图	第193号住居跡出土遺物実測図(2)	330
第239图	第166・167号住居跡実測図	287	第277图	第195号住居跡出土遺物実測図	332
第240图	第166号住居跡竈実測図	288	第278图	第199号住居跡出土遺物実測図	334
第241图	第166号住居跡出土遺物実測図	288	第279图	第200号住居跡実測図	335
第242图	第169号住居跡実測図	291	第280图	第201号住居跡実測図	336
第243图	第169号住居跡出土遺物実測図	292	第281图	第201号住居跡出土遺物実測図	336
第244图	第171号住居跡実測図	294	第282图	第202・203号住居跡実測図	337
第245图	第172号住居跡実測図	295	第283图	第202号住居跡出土遺物実測図	338
第246图	第172号住居跡出土遺物実測図	296	第284图	第205・206号住居跡実測図	340
第247图	第177号住居跡実測図	297	第285图	第205号住居跡出土遺物実測図	341
第248图	第177号住居跡出土遺物実測図	298	第286图	第207・208号住居跡実測図	342
第249图	第178号住居跡実測図	300	第287图	第207・208号住居跡竈実測図	343

第288图	第207号住居跡出土遺物実測図……………344	第326图	第236号住居跡出土遺物実測図……………392
第289图	第208号住居跡出土遺物実測図……………346	第327图	第236号住居跡実測図……………393
第290图	第209・210号住居跡実測図……………348	第328图	第237号住居跡・出土遺物実測図……………395
第291图	第209号住居跡出土遺物実測図……………349	第329图	第238・239号住居跡実測図……………396
第292图	第210号住居跡出土遺物実測図……………350	第330图	第238号住居跡出土遺物実測図……………397
第293图	第214・222号住居跡実測図……………351	第331图	第240号住居跡実測図……………399
第294图	第214号住居跡出土遺物実測図……………352	第332图	第240号住居跡出土遺物実測図……………400
第295图	第216号住居跡実測図……………353	第333图	第241号住居跡実測図……………401
第296图	第216号住居跡出土遺物実測図……………354	第334图	第241号住居跡出土遺物実測図……………402
第297图	第217・218号住居跡実測図……………356	第335图	第242号住居跡実測図……………403
第298图	第217号住居跡竈実測図……………357	第336图	第242号住居跡出土遺物実測図……………404
第299图	第217号住居跡出土遺物実測図(1)……………358	第337图	第244号住居跡実測図……………405
第300图	第217号住居跡出土遺物実測図(2)……………359	第338图	第244号住居跡出土遺物実測図(1)……………406
第301图	第219号住居跡実測図……………362	第339图	第244号住居跡出土遺物実測図(2)……………407
第302图	第219号住居跡出土遺物実測図……………362	第340图	第245号住居跡実測図……………409
第303图	第220号住居跡実測図……………364	第341图	第245号住居跡出土遺物実測図……………410
第304图	第220号住居跡出土遺物実測図……………365	第342图	第246号住居跡実測図……………412
第305图	第221号住居跡実測図……………367	第343图	第246号住居跡出土遺物実測図……………412
第306图	第221号住居跡出土遺物実測図……………368	第344图	第247・248号住居跡実測図……………413
第307图	第223号住居跡実測図……………370	第345图	第247号住居跡出土遺物実測図……………414
第308图	第223号住居跡出土遺物実測図……………372	第346图	第249号住居跡実測図……………416
第309图	第224号住居跡実測図……………373	第347图	第249号住居跡竈実測図……………417
第310图	第224号住居跡出土遺物実測図……………374	第348图	第249号住居跡出土遺物実測図(1)……………418
第311图	第225・226号住居跡実測図……………375	第349图	第249号住居跡出土遺物実測図(2)……………419
第312图	第225号住居跡出土遺物実測図……………376	第350图	第251号住居跡出土遺物実測図……………422
第313图	第226号住居跡出土遺物実測図……………377	第351图	第252号住居跡実測図……………423
第314图	第227号住居跡出土遺物実測図……………378	第352图	第252号住居跡出土遺物実測図……………423
第315图	第227号住居跡実測図……………379	第353图	第254号住居跡実測図……………425
第316图	第229号住居跡実測図……………380	第354图	第254号住居跡出土遺物実測図……………426
第317图	第229号住居跡出土遺物実測図……………380	第355图	第257号住居跡実測図……………428
第318图	第230号住居跡実測図……………381	第356图	第257号住居跡出土遺物実測図……………428
第319图	第230号住居跡出土遺物実測図……………382	第357图	第258号住居跡実測図……………429
第320图	第232号住居跡実測図……………383	第358图	第258号住居跡出土遺物実測図……………430
第321图	第232号住居跡出土遺物実測図……………384	第359图	第261号住居跡出土遺物実測図……………432
第322图	第233号住居跡実測図……………387	第360图	第262号住居跡出土遺物実測図……………434
第323图	第233号住居跡出土遺物実測図……………388	第361图	第264号住居跡出土遺物実測図……………435
第324图	第234号住居跡実測図……………389	第362图	第264・265号住居跡実測図……………436
第325图	第234号住居跡出土遺物実測図……………390	第363图	第265号住居跡出土遺物実測図……………437

第364图	第266号住居跡実測図	439	第402图	第300号住居跡出土遺物実測図	491
第365图	第266号住居跡出土遺物実測図	439	第403图	第301号住居跡実測図	492
第366图	第268号住居跡実測図	440	第404图	第301号住居跡出土遺物実測図	493
第367图	第268号住居跡出土遺物実測図	441	第405图	第302号住居跡実測図	494
第368图	第269号住居跡実測図	443	第406图	第302号住居跡出土遺物実測図	495
第369图	第269号住居跡出土遺物実測図	444	第407图	第303号住居跡実測図	496
第370图	第270号住居跡実測図	446	第408图	第303号住居跡出土遺物実測図	497
第371图	第270号住居跡出土遺物実測図	447	第409图	第304号住居跡実測図	499
第372图	第271号住居跡出土遺物実測図	448	第410图	第304号住居跡出土遺物実測図	500
第373图	第271号住居跡実測図	449	第411图	第306号住居跡出土遺物実測図	502
第374图	第272号住居跡実測図	451	第412图	第307号住居跡実測図	504
第375图	第272号住居跡出土遺物実測図	452	第413图	第307号住居跡出土遺物実測図	505
第376图	第273号住居跡出土遺物実測図	453	第414图	第308号住居跡実測図	508
第377图	第275号住居跡出土遺物実測図	454	第415图	第308号住居跡出土遺物実測図	509
第378图	第275・276号住居跡実測図	455	第416图	第310号住居跡実測図	510
第379图	第276号住居跡出土遺物実測図	457	第417图	第310号住居跡出土遺物実測図	511
第380图	第277号住居跡出土遺物実測図	458	第418图	第311号住居跡実測図	513
第381图	第278・279号住居跡実測図	460	第419图	第311号住居跡出土遺物実測図	514
第382图	第278号住居跡出土遺物実測図	461	第420图	第312・333号住居跡実測図	516
第383图	第282号住居跡実測図	462	第421图	第312号住居跡出土遺物実測図	517
第384图	第282号住居跡出土遺物実測図	463	第422图	第313号住居跡実測図	518
第385图	第284・285号住居跡実測図	464	第423图	第313号住居跡出土遺物実測図	519
第386图	第284号住居跡出土遺物実測図	465	第424图	第314号住居跡実測図	520
第387图	第285号住居跡出土遺物実測図	466	第425图	第314号住居跡出土遺物実測図	520
第388图	第287号住居跡出土遺物実測図	468	第426图	第315号住居跡実測図	521
第389图	第291号住居跡出土遺物実測図	470	第427图	第315号住居跡出土遺物実測図	522
第390图	第293号住居跡出土遺物実測図(1)	472	第428图	第317号住居跡実測図	524
第391图	第293号住居跡出土遺物実測図(2)	473	第429图	第317号住居跡出土遺物実測図	525
第392图	第294号住居跡実測図	476	第430图	第319号住居跡実測図	526
第393图	第294号住居跡出土遺物実測図	477	第431图	第319号住居跡出土遺物実測図	527
第394图	第296号住居跡実測図	479	第432图	第320号住居跡実測図	529
第395图	第296号住居跡出土遺物実測図	480	第433图	第320号住居跡出土遺物実測図	529
第396图	第297号住居跡出土遺物実測図	481	第434图	第321号住居跡出土遺物実測図	530
第397图	第298号住居跡実測図	482	第435图	第322号住居跡出土遺物実測図	531
第398图	第298号住居跡出土遺物実測図	483	第436图	第322号住居跡実測図	532
第399图	第299号住居跡実測図	486	第437图	第324号住居跡出土遺物実測図	534
第400图	第299号住居跡出土遺物実測図	487	第438图	第326号住居跡実測図	535
第401图	第300号住居跡実測図	490	第439图	第326号住居跡出土遺物実測図	535

第440图	第329号住居跡実測図……………536	第475图	第3号大形竪穴状遺構・ 第181号土坑実測図……………582
第441图	第329号住居跡出土遺物実測図……………537	第476图	第3号大形竪穴状遺構 出土遺物実測図……………583
第442图	第333号住居跡出土遺物実測図……………538	第477图	第13号溝断面図……………584
第443图	第335号住居跡出土遺物実測図……………539	第478图	第13号溝出土遺物実測図……………584
第444图	第335号住居跡実測図……………540	第479图	第14号溝出土遺物実測図……………585
第445图	第337号住居跡実測図……………542	第480图	第15号溝断面図……………585
第446图	第337号住居跡出土遺物実測図……………543	第481图	第3号不明遺構出土遺物実測図……………586
第447图	第339号住居跡実測図……………545	第482图	6区遺構外出土遺物実測図(1)……………588
第448图	第339号住居跡出土遺物実測図……………545	第483图	6区遺構外出土遺物実測図(2)……………589
第449图	第340号住居跡実測図……………547	第484图	6区遺構外出土遺物実測図(3)……………590
第450图	第340号住居跡出土遺物実測図……………547	第485图	6区遺構外出土遺物実測図(4)……………591
第451图	第203号住居跡出土遺物実測図……………548	第486图	6区遺構外出土遺物実測図(5)……………592
第452图	第263号住居跡出土遺物実測図……………548	第487图	第506号住居跡実測図……………597
第453图	第263号住居跡実測図……………549	第488图	第506号住居跡出土遺物実測図……………598
第454图	第280・283号住居跡実測図……………550	第489图	第504・508号住居跡実測図……………599
第455图	第280号住居跡出土遺物実測図……………550	第490图	第508号住居跡出土遺物実測図……………600
第456图	第338号住居跡出土遺物実測図……………551	第491图	第509号住居跡出土遺物実測図……………600
第457图	第6号掘立柱建物跡出土遺物実測図……………557	第492图	第510号住居跡実測図(1)……………602
第458图	第6号掘立柱建物跡実測図……………558	第493图	第510号住居跡実測図(2)……………603
第459图	第129号土坑出土遺物実測図……………559	第494图	第510号住居跡出土遺物実測図(1)……………605
第460图	第134・137号土坑出土遺物実測図……………560	第495图	第510号住居跡出土遺物実測図(2)……………606
第461图	第144号土坑実測図……………561	第496图	第515号住居跡出土遺物実測図……………609
第462图	第144号土坑出土遺物実測図……………562	第497图	第516号住居跡出土遺物実測図……………610
第463图	第145号土坑出土遺物実測図……………563	第498图	第502・516号住居跡実測図……………611
第464图	第208号土坑出土遺物実測図……………564	第499图	第526号住居跡実測図……………613
第465图	第215号土坑出土遺物実測図……………565	第500图	第526号住居跡出土遺物実測図……………613
第466图	6区土坑実測図(1)……………568	第501图	第527号住居跡出土遺物実測図……………615
第467图	6区土坑実測図(2)……………569	第502图	第527号住居跡実測図……………616
第468图	6区土坑実測図(3)……………570	第503图	第527号住居跡竈実測図……………617
第469图	6区土坑実測図(4)……………571	第504图	第500・505号住居跡実測図……………619
第470图	6区土坑出土遺物実測図(1)……………572	第505图	第500号住居跡出土遺物実測図……………619
第471图	6区土坑出土遺物実測図(2)……………573	第506图	第501号住居跡実測図……………621
第472图	第1・2号大形竪穴状遺構・第1号 大形竪穴状遺構出土遺物実測図……………578	第507图	第501号住居跡出土遺物実測図……………622
第473图	第2号大形竪穴状遺構出土遺物 実測図(1)……………579	第508图	第503号住居跡実測図……………624
第474图	第2号大形竪穴状遺構出土遺物 実測図(2)……………580	第509图	第503号住居跡出土遺物実測図……………625
		第510图	第504号住居跡出土遺物実測図……………627

第511図	第507号住居跡出土遺物実測図……………628	第530図	第524号住居跡出土遺物実測図……………650
第512図	第507号住居跡実測図……………629	第531図	第525号住居跡出土遺物実測図……………651
第513図	第512号住居跡出土遺物実測図……………630	第532図	第525号住居跡実測図……………652
第514図	第512号住居跡実測図……………631	第533図	第511号住居跡実測図……………655
第515図	第513号住居跡実測図……………632	第534図	第514号住居跡実測図……………655
第516図	第513号住居跡出土遺物実測図……………633	第535図	第518号住居跡実測図……………656
第517図	第517号住居跡出土遺物実測図……………634	第536図	第530号住居跡実測図……………657
第518図	第517号住居跡実測図……………635	第537図	第4号掘立柱建物跡実測図……………659
第519図	第519号住居跡出土遺物実測図……………636	第538図	第314号土坑・出土遺物実測図……………660
第520図	第519号住居跡実測図……………637	第539図	第300号土坑出土遺物実測図……………660
第521図	第520号住居跡実測図……………639	第540図	8区土坑実測図……………662
第522図	第520号住居跡出土遺物実測図……………639	第541図	第4号井戸実測図……………663
第523図	第521・523号住居跡実測図……………641	第542図	第4号井戸出土遺物実測図……………664
第524図	第521・523号住居跡竈実測図……………642	第543図	第5号井戸・出土遺物実測図……………665
第525図	第521号住居跡出土遺物実測図……………643	第544図	第6号井戸・出土遺物実測図……………666
第526図	第522号住居跡実測図……………645	第545図	第16号溝断面図……………667
第527図	第522号住居跡出土遺物実測図……………646	第546図	第16号溝出土遺物実測図……………668
第528図	第523号住居跡出土遺物実測図……………648	第547図	8区遺構外出土遺物実測図……………669
第529図	第524号住居跡実測図……………649		

中 卷 表 目 次

表4	熊の山遺跡6区住居跡一覧表……………552
表5	熊の山遺跡6区土坑一覧表……………575
表6	熊の山遺跡6区大形竪穴状遺構一覧表……………583
表7	熊の山遺跡6区溝一覧表……………585
表8	熊の山遺跡8区住居跡一覧表……………657
表9	熊の山遺跡8区土坑一覧表……………661
表10	熊の山遺跡8区井戸一覧表……………667

② 奈良・平安時代

第134号住居跡 (第198図)

位置 調査6区北西部, L14h5区。

規模と平面形 一辺が[3.30]mの方形と推定される。

主軸方向 [N-104°-E]

壁 上面は削平され確認できなかった。

床 中央部が踏み固められている。

竈 東壁中央部に付設されている。規模は袖幅67cm, 長さ86cmで, 壁外への掘り込みは62cm, 平面形は三角形である。火床部は径17cmの円形でわずかに掘りくぼめられている。

竈土層解説

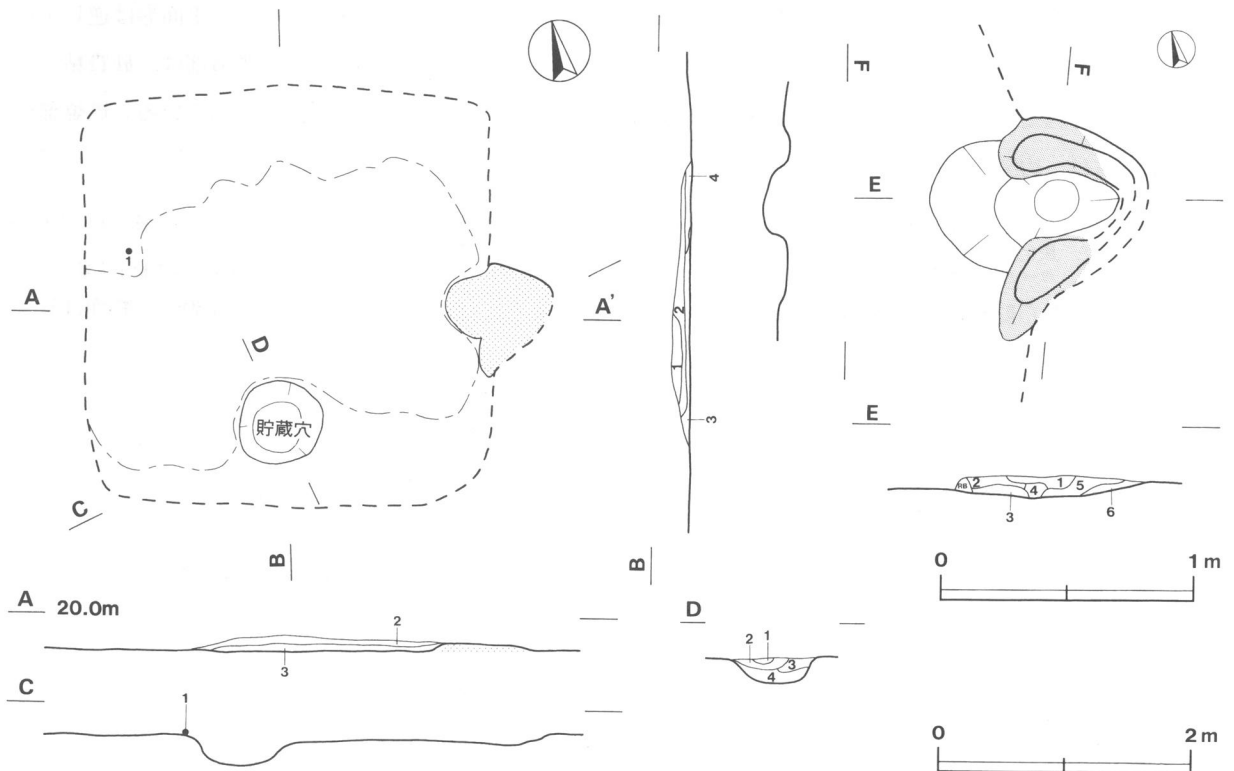
- 1 黒褐色 焼土粒子多量, 焼土中・小ブロック・炭化粒子中量, 焼土大ブロック微量
- 2 黒褐色 炭化粒子少量, 焼土粒子微量
- 3 黒色 焼土粒子多量, 粘土ブロック少量, 焼土粒子微量
- 4 暗褐色 炭化粒子多量, 焼土粒子中量
- 5 暗褐色 炭化粒子・焼土粒子少量, 焼土小ブロック微量
- 6 褐色 炭化粒子・焼土粒子少量, ローム小ブロック微量

貯蔵穴 中央部から南寄りに位置する。径68cmの円形, 深さは20cmで, 平坦な底面から外傾して立ち上がり, 断面は逆台形である。

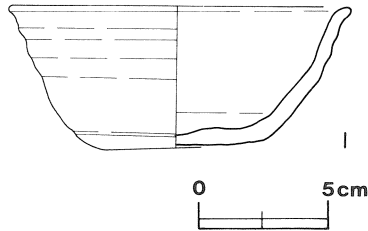
貯蔵穴土層解説

- 1 赤褐色 焼土小ブロック中量, ローム粒子・砂少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量, 炭化物・焼土小ブロック少量
- 3 褐色 ローム粒子・炭化物・焼土粒子少量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化物少量

覆土 4層からなる。ローム粒子, 焼土粒子を多量に含む土層からなり, 人為堆積と思われる。



第198図 第134号住居跡実測図



第199図 第134号住居跡出土遺物
実測図

土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量
- 2 極暗褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量, 炭化粒子・焼土粒子微量
- 4 暗褐色 焼土粒子多量, 炭化粒子中量, ローム粒子微量

遺物 土師器片75点, 須恵器片5点が出土している。圧倒的に土師器の割合が高い。図示できた遺物は, 第199図1の土師器碗のみで, 西壁寄りの床面から出土している。

所見 本跡の時期は, 竈が東壁に付設されていることや出土遺物から平安時代の10世紀前葉と思われる。

第134号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第199図 1	坏 土師器	A 13.5 B 5.6 C 6.3	平底。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部は外反する。	体部内・外面ロクロナデ。底部回転糸切り。底部は分厚い。	砂粒 橙色 不良	P31 60% 西壁際床面

第135号住居跡 (第200図)

位置 調査6区北西部, L14i5区。

重複関係 第194号住居跡を掘り込んでおり, 本跡が新しい。

規模と平面形 一辺が[3.00]mの方形と推定される。

主軸方向 [N-84°-E]

壁 上面は削平され, わずかに西壁が10cmの高さで残存しているのみである。

床 竈前面から貯蔵穴までの間が踏み固められている。

竈 東壁中央部に付設されている。規模は袖幅87cm, 長さ90cm, 壁外への掘り込みは45cm, 平面形は逆U字形である。天井部, 両袖部共に削平されており, 確認できたのは煙道部と火床面である。煙道部は, 砂質粘土によって構築されている。火床部は長径62cm, 短径50cmの楕円形で, 10cmほど掘りくぼめられている。燃焼部から煙道部へは, 約53度の角度で急激に立ち上がっている。

竈土層解説

- | | |
|--------------------------------------|-----------------------------------|
| 1 暗黒褐色 焼土粒子・小ブロック・粒子少量, 炭化粒子微量 | 3 赤褐色 焼土粒子多量, 焼土中・小ブロック中量, 炭化粒子少量 |
| 2 黒褐色 炭化粒子少量, 焼土粒子・小ブロック・炭化物・ローム粒子微量 | 4 黒褐色 炭化粒子・焼土粒子少量 |
| | 5 赤褐色 焼土粒子・焼土小ブロック多量, 炭化粒子少量 |

貯蔵穴 西壁から約50cm中央寄りに位置し, 竈と同一線上にある。径が68cmの円形で深さは30cm, 断面はU字形である。

貯蔵穴土層解説

- | | |
|----------------------|-------------------------|
| 1 褐色 焼土粒子微量 | 3 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量 |
| 2 褐色 焼土粒子・ローム小ブロック少量 | |

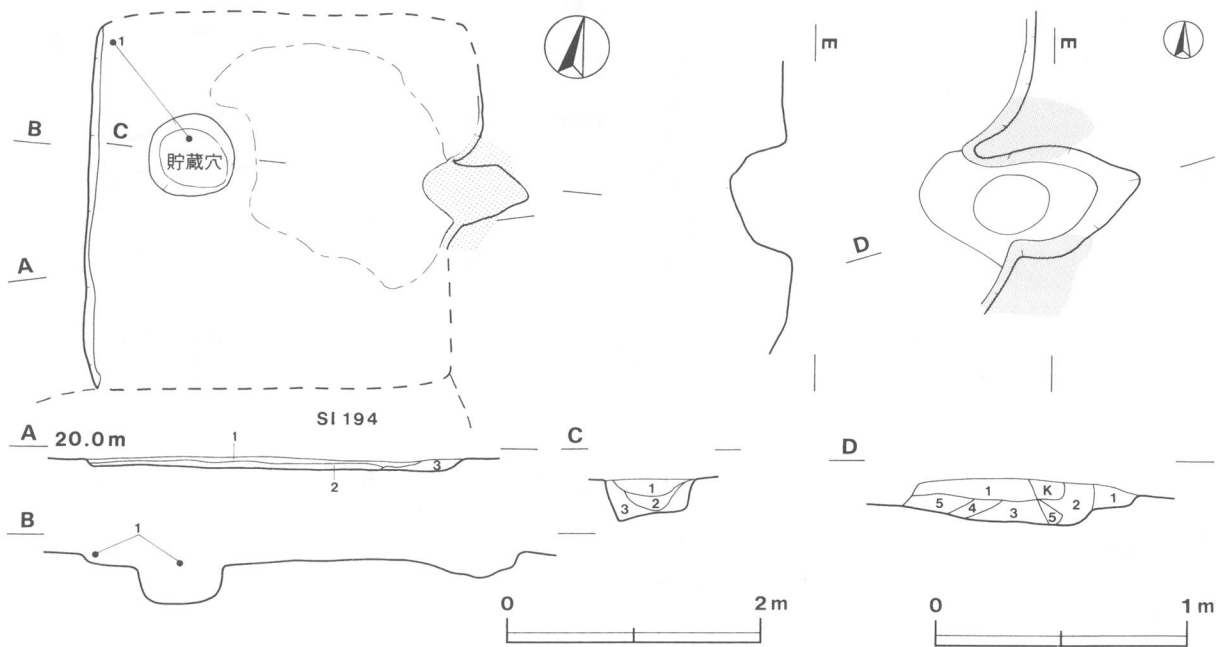
覆土 3層からなり, 人為堆積と考えられる。

土層解説

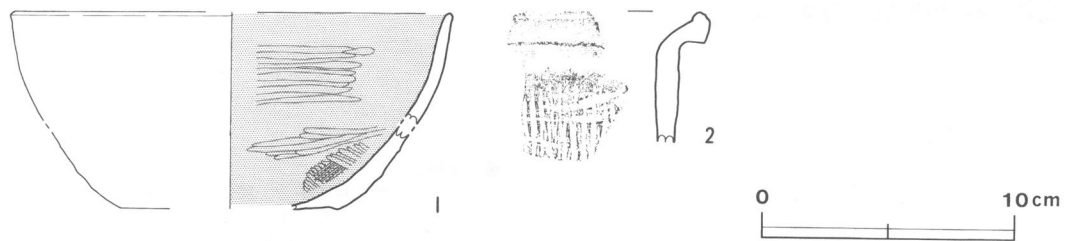
- | | |
|----------------------------|---------------------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 3 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子少量・炭化粒子中量 |
| 2 黒褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | |

遺物 土師器片123点, 灰釉陶器片1点である。削平が激しく, 図示できた遺物は第201図1の土師器坏のみである。1は, 貯蔵穴覆土上層と北西コーナーから出土したものが接合している。2は須恵器甕の口縁部片で体部は縦方向の平行叩きが施されている。

所見 本跡は, 竈が東壁に付設されていること, 坏類は土師器に限定されることなどから, 時期は平安時代の10世紀以降と考えられる。



第200図 第135号住居跡実測図



第201図 第135号住居跡出土遺物実測図

第135号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第201図 1	坏 土師器	A[17.5] B(7.8) C[8.5]	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎気味に立ち上がり口縁部にいたる。口縁端部は丸くおさまる。	口縁部及び体部外面ロクロナデ。体部内面黒色処理・ヘラ磨き。底部回転系切り。	長石・小石・砂粒 外面橙色・内面黒色 普通	P32 30% 貯蔵穴 北西コーナー

第136号住居跡 (第202図)

位置 調査6区北西部, L14f6区。

重複関係 第137号住居跡の上部に構築されており, 本跡の方が新しい。

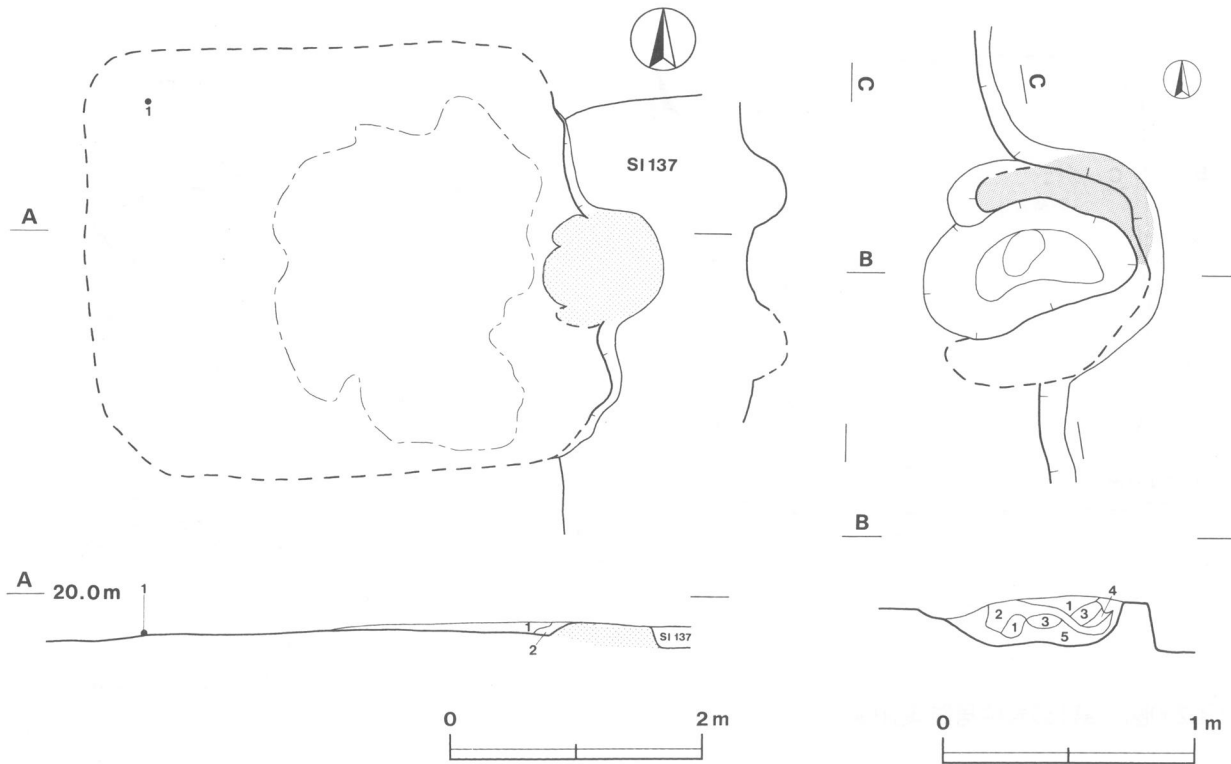
規模と平面形 耕作による削平によって規模や平面形は明確でないが, 現存する床や竈の状況から長軸[4.00]m, 短軸[3.00]mの長方形と推定される。

主軸方向 [N-80°-E]

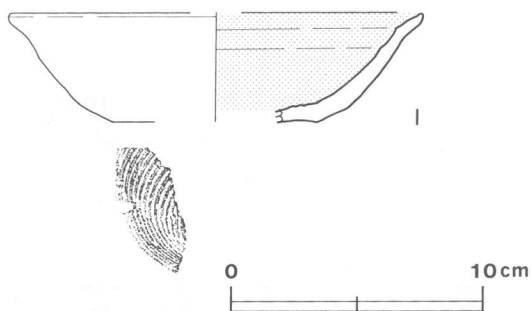
壁 上面は削平され, わずかに竈付近が残存しているのみである。

床 竈前面から中央部にかけて踏み固められている。

竈 東壁中央部に付設されている。左袖が一部遺存するが, 煙道部や天井部は残っていない。規模は幅100cm, 長さ95cmで, 東壁を45cm掘り込んでいる。火床部は長径50cm, 短径20cmの楕円形で, 5cmほど掘りくぼめられ



第202図 第136号住居跡実測図



第203図 第136号住居跡出土遺物実測図

ている。

竈土層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子中量, 炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子・焼土粒子・山砂少量, 焼土小ブロック微量
- 3 赤褐色 焼土粒子・小ブロック多量, 焼土大・中ブロック微量
- 4 暗褐色 炭化粒子・焼土粒子少量
- 5 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子中量, ローム粒子少量

覆土 2層からなり, 人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子・焼土粒子微量

遺物 削平が激しかったため, 出土した遺物は, 土師器坏片3点, 甕片23点, 須恵器甕片1点であった。このうち図示できたのは, 第203図1の土師器坏のみである。出土位置は, 北西コーナーの床面である。

所見 遺物は破片が多く, 時期を決定するのは難しいが, 東壁に竈を付設することや出土遺物等から, 平安時代の10世紀以降と考えたい。

第136号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第203図 1	坏 土師器	A[16.0] B(4.3) C[8.0]	上げ底気味の平底。体部は内彎気味に立ち上がり, 口縁部は外反する。	内・外面ロクロナデ。底部回転系切り。内面赤彩。	砂粒 外面にぶい黄橙色 内面赤褐色 普通	P33 30% 北西コーナー床面

第139号住居跡（第204図）

位置 調査6区北部，L14g8区。

重複関係 第137・138号住居跡の上に構築していることから，本跡は137・138号住居跡より新しい。

規模と平面形 長軸[3.55]m，短軸[2.95]mの長方形である。

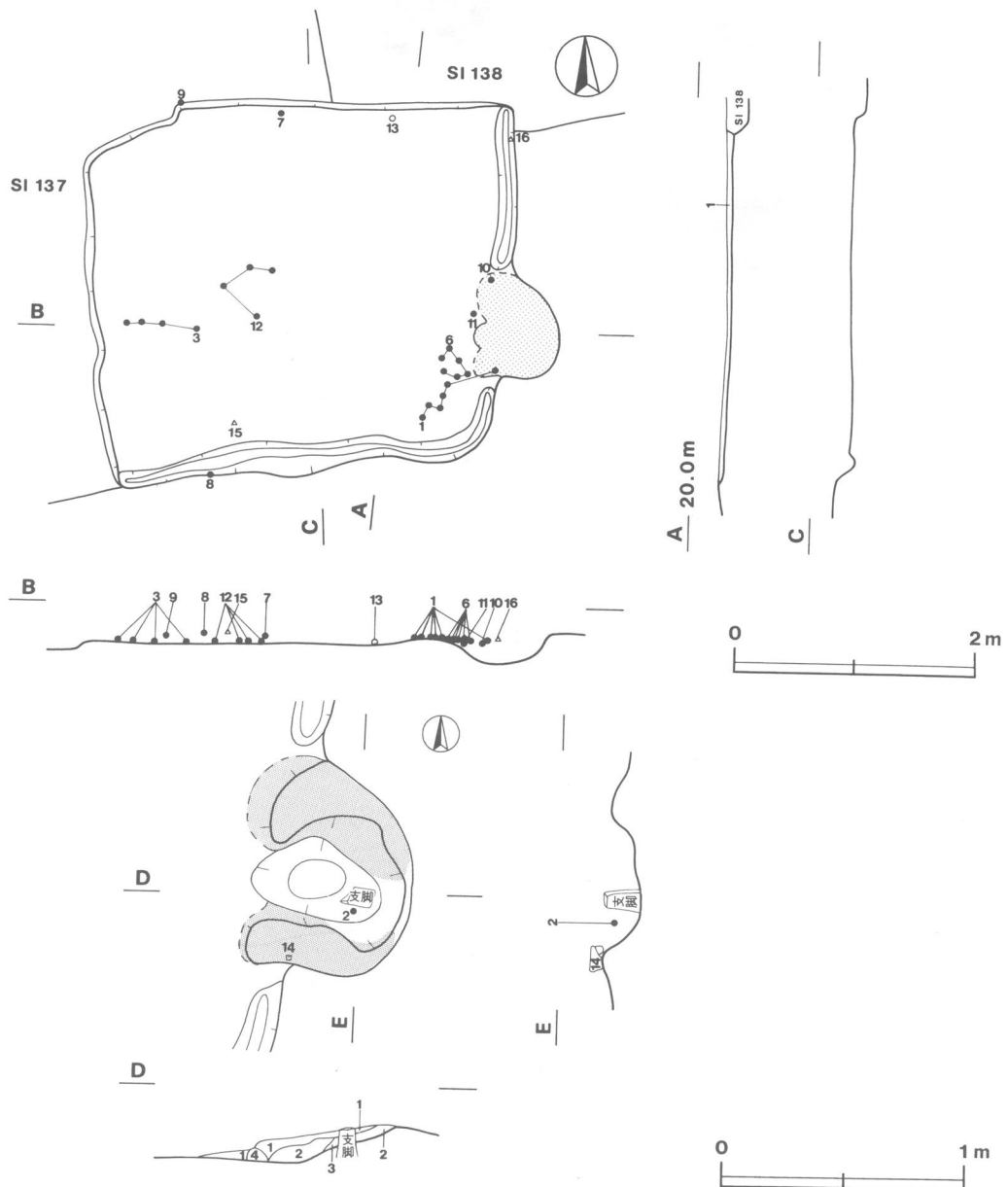
主軸方向 N-100°-E

壁 南壁・東壁で確認され，壁高は8～12cmで，外傾して立ち上がる。

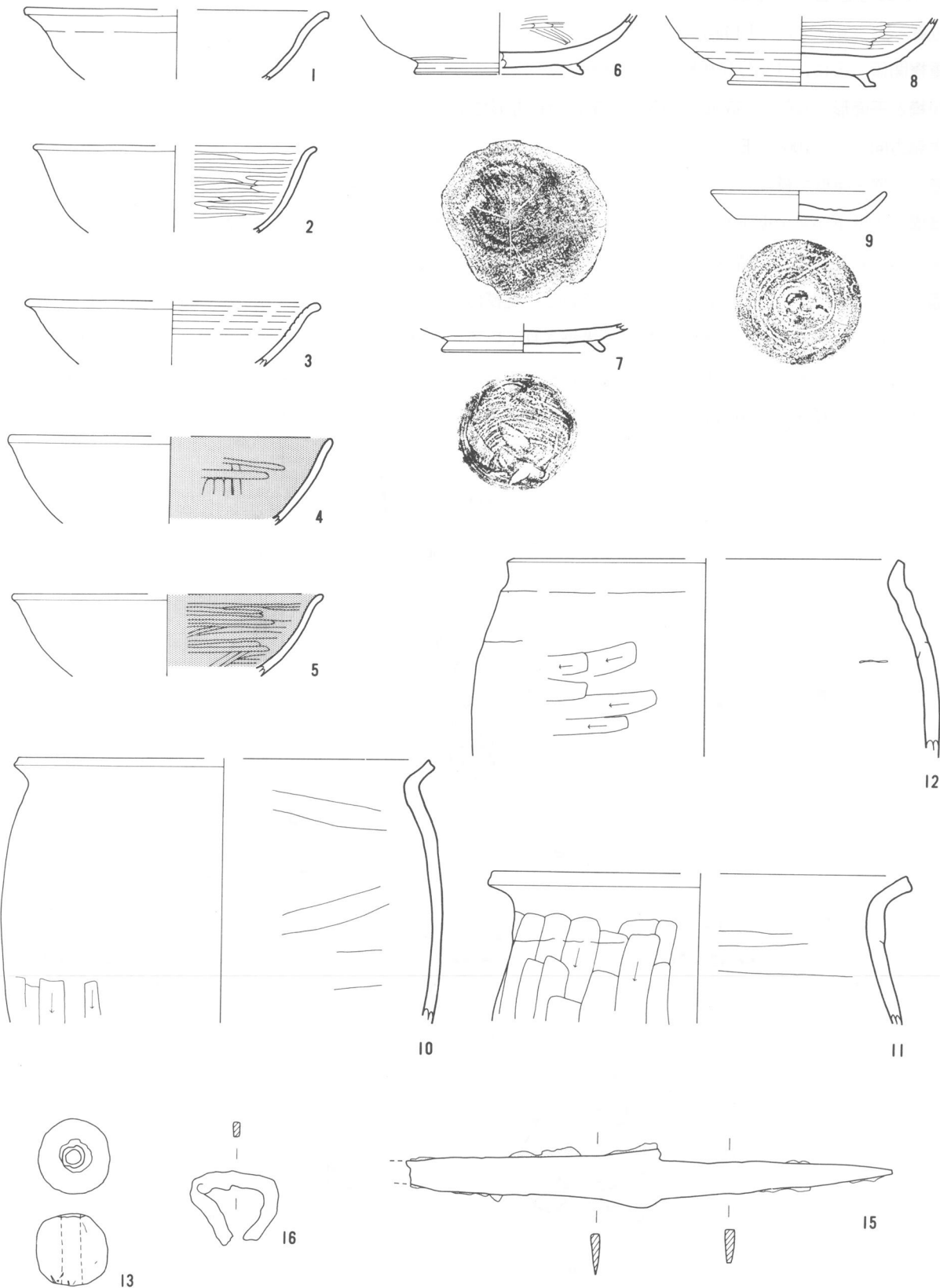
壁溝 東壁下から南壁下を巡っている。上幅15～28cm，下幅3～10cm，深さ6cm，断面形はU字形である。

床 遺存状況は悪く，踏み固められている面は見られない。

竈 東壁の南東コーナー寄りに付設されている。規模は袖幅84cm，長さ67cm，壁外への掘り込みは47cmで，平面形は逆U字形である。両袖部は粘土で構築されているが，袖部上面は削平されており残りは良くない。袖の補強材として右袖から雲母片岩が出土している。また，支脚としても雲母片岩が使用されている。火床部は，長径23cm，短径16cmの楕円形に掘り込まれ，燃焼部奥から煙道部は20度の角度で緩やかに立ち上がっている。



第204図 第139号住居跡実測図



13·15·16 s = 1/2

0 10cm

第205图 第139号住居跡出土遺物実測図

竈土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子・焼土小ブロック・粘土ブロック少量
- 3 赤褐色 ローム粒子・焼土小ブロック・粘土ブロック少量
- 4 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子中量, 焼土小ブロック少量

覆土 削平が激しく1層しか確認できなかった。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック・炭化粒子・焼土粒子少量, 炭化物微量

遺物 土師器片275点, 灰釉陶器片1点, 鉄滓2点が出土している。上部の削平が激しかったわりには遺物の残りがよく, 比較的まとまった状態で床面や覆土最下層から出土している。第205図1土師器坏は, 竈付近の床面から出土したものと竈内覆土上層から出土したものが接合したものである。2の土師器坏は竈内から, 3の土師器坏は西壁際床面から, 6の土師器高台付椀, 10, 11の土師器甕は竈付近の床面から, 7の土師器高台付坏, 9の土師質土器皿, 13の土玉は北壁際の床面から, 8の土師器高台付椀は南壁際覆土下層, 12の土師器甕は西寄りの床面, 14の竈構築材は, 竈右袖部覆土上層, 15の刀子は南壁寄り覆土上層からそれぞれ出土している。7の土師器高台付坏は, 底部内面に線刻がなされている。

所見 遺物をみると, 須恵器は全く見られず, 土師器のみで構成されていること, 土師器坏・高台付坏は, 内面黒色処理されているものが多いこと, 量的には少ないが土師質土器がみられること等から, 本跡の時期は平安時代の10世紀以降と考えられる。

第139号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第205図 1	坏 土師器	A[15.4] B(3.6)	口縁部片。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部は強く外反する。	内・外面ロクロナデ。	緻密, 砂粒にぶい黄褐色 良好	P42 10% 竈覆土, 竈前面床
2	坏 土師器	A[14.4] B(4.5)	口縁部片。体部は内彎して立ち上がり, 口縁端部は外反する。	外面ロクロナデ。内面ヘラ磨き。	砂粒・スコリア・雲母 橙色 良好	P43 10% 竈覆土上層
3	坏 土師器	A[14.8] B(3.3)	口縁部片。体部は内彎して立ち上がり, 口縁端部は強く外反する。	内・外面ロクロナデ。内面は工具を使用したナデと思われ, 何条もの沈線のような工具痕を残す。	砂粒・スコリア・雲母にぶい黄褐色 良好, 内面煤附着	P44 10% 西壁際床面
4	坏 土師器	A[16.4] B(4.5)	口縁部片。体部は内彎して立ち上がり, 口縁端部は外反する。	外面ロクロナデ。内面黒色処理・ヘラ磨き。	緻密, 雲母 外面橙色・内面黒色 普通	P45 10% 覆土上層
5	坏 土師器	A[15.8] B(4.2)	口縁部片。体部は内彎して立ち上がり, 口縁端部は外反する。	外面ロクロナデ。内面黒色処理・ヘラ磨き。	緻密, 雲母 外面にぶい黄褐色 内面黒色 良好	P46 10% 覆土上層
6	高台付椀 土師器	B(3.2) D 8.6 E 0.5	底部から体部にかけての破片。体部は丸みをもって大きく開く。高台は低く大きく外に開き接地面は内側。	外面ロクロナデ。内面ヘラ磨き。高台貼り付け後ナデ。	緻密, 雲母 明褐色 良好	P47 20% 竈前面床面
7	高台付坏 土師器	B(1.5) D 8.1 E 0.8	高台部片。高台は低く, 大きく外に開く。接地面は内側にある。	内面ヘラ磨き。底部外面回転糸切り後雑なナデ。高台貼り付け後ナデ。底部内面に線刻。	緻密, 雲母にぶい橙色 良好	P48 20% 北壁際下層
8	高台付椀 土師器	B(3.6) D 7.6 E 0.6	高台部から体部にかけての破片。体部は丸みをもって立ち上がる。高台はハの字状に外に開く。	体部下端回転ヘラ削り後, ロクロナデ。底部内面ヘラ磨き。高台貼り付け後ナデ。	砂粒にぶい黄褐色 普通	P49 30% 南壁際下層
9	小皿 土師器	A 8.8 B 1.5 C 6.4	平底。体部はわずかに内彎気味に立ちあがり, 口縁部にいたる。	底部内面から体部外面ロクロナデ。底部外面回転ヘラ切り後無調整。	雲母・スコリア 橙色 良好	P50 100% 北壁際覆土下層

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第205図 10	甕 土師器	A[21.0] B(13.7)	体部から口縁部にかけての破片。口縁部でくの字状に折れて外反する。口唇部に平坦面がある。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面上位ナデ、下位ヘラ削り。内面ヘラナデ。	長石・小礫 赤褐色 普通	P51 10% 竈周辺床面
11	甕 土師器	A[21.2] B(7.7)	体部から口縁部にかけての破片。体部は緩やかに立ち上がり、口縁部でくの字状に屈曲し、口唇部は断面三角形を呈する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面縦方向のヘラ削り。体部内面ヘラナデ。	砂粒・長石・石英 にぶい黄橙色 普通	P52 10% 竈前面床面
12	甕 土師器	A[19.8] B(10.2)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり中位に最大径をもつ。口縁部は短く外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横方向のヘラ削り。体部内面ヘラナデ。	砂粒・長石 にぶい黄褐色 普通	P53 10% 西寄り床面

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	径(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
13	土玉	2.5	2.6	0.7	15	北壁際床面	DP3 100%

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
14	竈構築材	18.7	13.5	9.2	2840	竈右袖部覆土上層	Q3 雲母片岩 実測図なし
15	刀子	(16.5)	2.2	0.4	(30)	南壁寄り上層	M2
16	不明鉄製品	(2.5)	3.0	0.2	(4.48)	北東コーナー床面	M3

第140号住居跡（第206図）

位置 調査6区北部，L14ds区。

重複関係 第141号住居跡を掘り込んでいることから，本跡が第141号住居跡より新しい。

規模と平面形 長軸4.80m，短軸4.40mの方形である。

主軸方向 N-4°-E

壁 壁高は18~20cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 上幅12~21cm，下幅5~12cm，深さ5~10cm，断面形は逆台形である。竈を除き全周している。

床 床面中央部が踏み固められており，わずかに高くなっている。

竈 北壁中央に付設されている。規模は袖幅133cm，長さ110cm，壁外への掘り込み30cmで，平面形は三角形である。両袖は粘土，砂，ローム粒子を混ぜて構築されている。火床部は長径50cm，短径25cm，深さ8cmの楕円形に掘り込まれている。燃焼部奥から煙道部は55度の急角度で立ち上がっている。

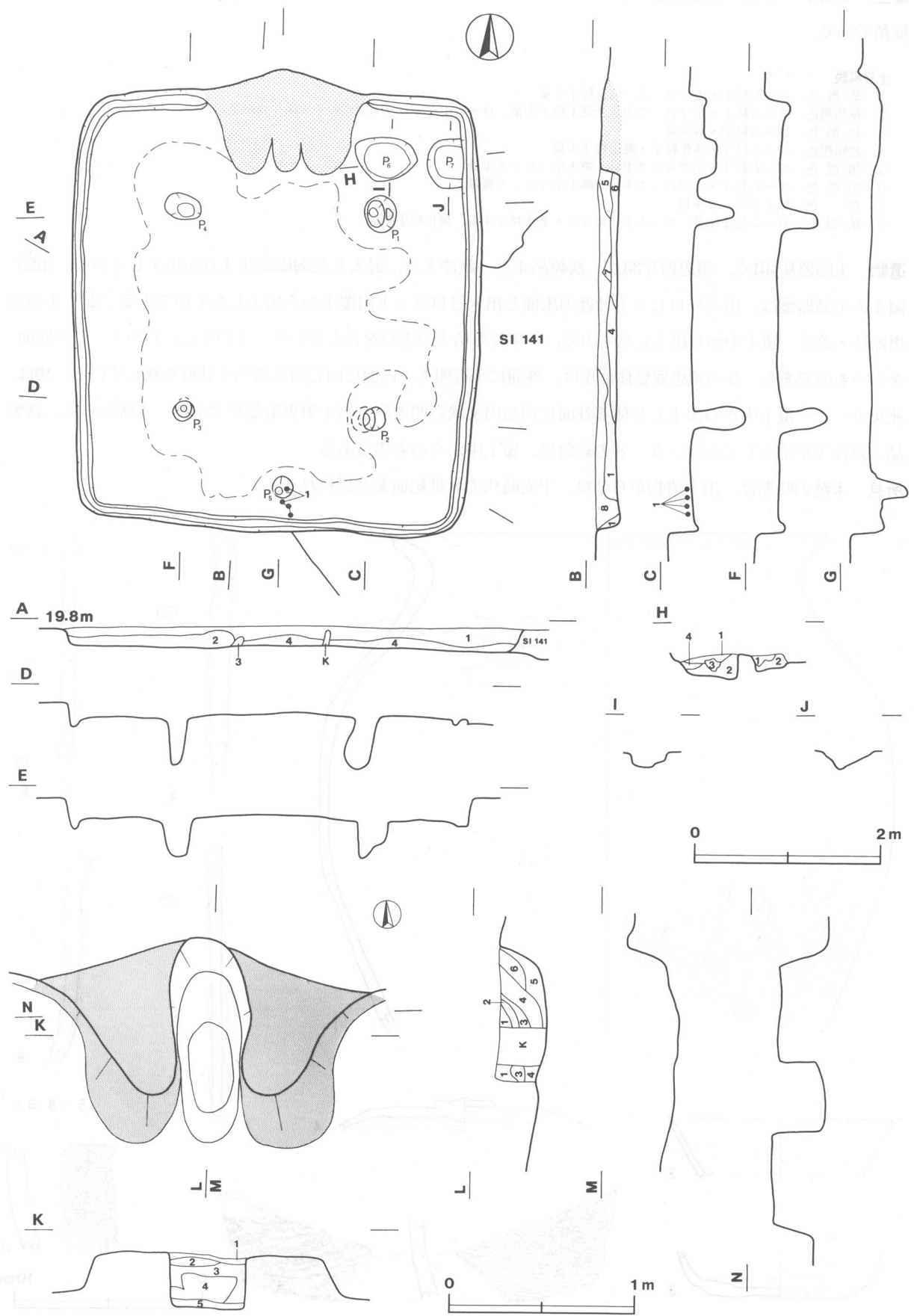
竈土層解説

- | | |
|---------------------------|---------------------------|
| 1 暗褐色 焼土粒子中量，ローム粒子・砂少量 | 4 赤褐色 焼土粒子多量 |
| 2 暗赤褐色 焼土粒子多量，ローム粒子中量，砂少量 | 5 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子中量 |
| 3 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子中量 | 6 暗褐色 炭化粒子中量，ローム粒子・焼土粒子少量 |

ピット 7か所(P₁~P₇)。P₁~P₄は，径35~40cmの円形，深さ40~60cmで，主柱穴と思われる。P₅は，南壁から約30cm内側に位置し，竈と同一線上に並んでいる。径25cmの円形，深さ38cmで出入口施設に伴うピットと思われる。P₆は竈右袖脇に位置し，長径70cm，短径50cmの楕円形の落ち込みで深さ12cmである。覆土には炭化粒子，焼土ブロックが含まれていることから，竈の灰を掻き出すためのピットの可能性が考えられる。P₇は，北東コーナー部に位置する径55cmの円形，深さ8cmの皿状の落ち込みで，性格は不明である。

P₆・P₇土層解説

- | | |
|------------------------------|----------------------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子・焼土小ブロック少量 | 3 褐色 ローム粒子・ローム小ブロック・炭化粒子少量 |
| 2 褐色 ローム粒子・ローム中ブロック中量，炭化粒子少量 | 4 褐色 ローム粒子中量，炭化粒子少量 |



第206图 第140号住居跡实测图

图例表 出土器物表 041号 图例表

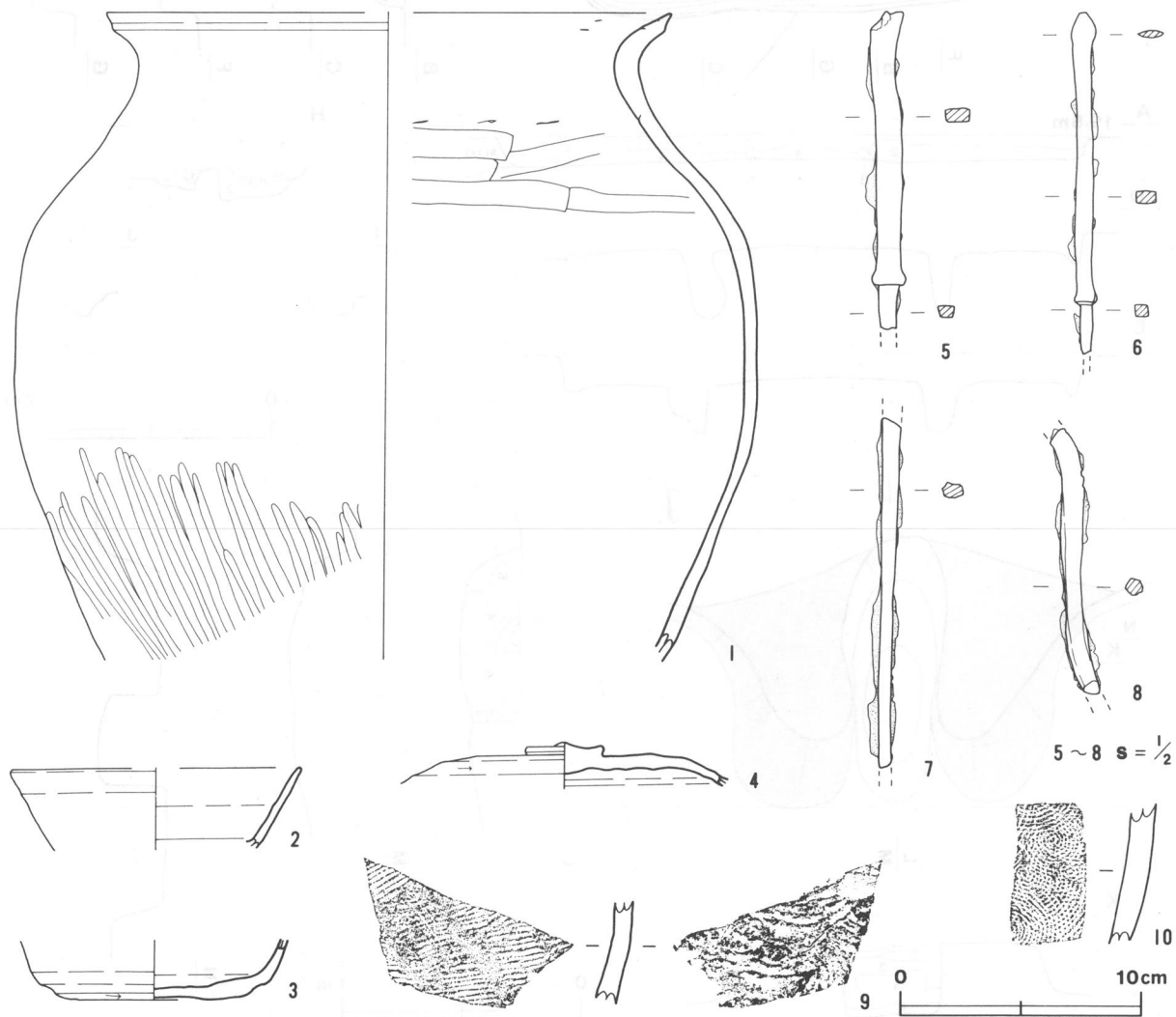
覆土 8層からなる。床面付近には、ロームブロック、焼土粒子、炭化粒子を含む極暗褐色土が堆積する人為堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・小ブロック、焼土粒子少量
- 2 極暗褐色 ローム粒子・小ブロック中量、焼土粒子少量、ローム中ブロック・炭化粒子・炭化物微量
- 3 暗褐色 ローム粒子・砂少量
- 4 極暗褐色 ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子少量
- 5 暗褐色 ローム粒子・小ブロック中量、焼土小ブロック少量
- 6 暗褐色 ローム粒子・小ブロック中量、焼土小ブロック微量
- 7 褐色 粘土ブロック少量
- 8 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量

遺物 土師器片461点、須恵器片33点、鉄製品4点、鉄滓1点、混入した陶磁器片4点が出土している。第207図1の土師器甕は、出入りロピット付近の床面と出入りロピット内覆土から出土したものである。2～4の須恵器杯・蓋は、覆土中から出土したもので、いずれも胎土の雲母を含んでいる。3の杯はいわゆる「二次底面」をもつものである。9の須恵器甕体部片は、外面に平行叩き、内面に同心円状の当て具痕を残している。10は、北東コーナー覆土中から出土した体部外面に同心円文状の叩き痕を残す須恵器甕片である。本跡からは、鉄製品、鉄滓等が出土しており、5～8の鉄釘は、覆土中からのものである。

所見 本跡の時期は、出土遺物から奈良、平安時代の8世紀前葉と思われる。



第207図 第140号住居跡出土遺物実測図

第140号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第207図 1	甕 土師器	A[23.6] B(21.7)	体部から口縁部片。体部は丸みをもって立ち上がり、最大径を中位にもつ。口縁部は外反し、口唇部は上方につまみあげられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面下位へラ磨き。体部内面へラナデ。	砂粒・小礫 にぶい黄橙色 良好	P54 30% 出入りロビット 覆土下層
2	坏 須恵器	A[12.0] B(3.4)	口縁部片。口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面ロクロナデ。	砂粒・長石・雲母 黄灰色 普通	P55 10% 覆土中
3	坏 須恵器	B(2.5) C 8.2	底部片。平底。体部は開き気味に立ち上がる。二次底面をもつ。	体部内・外面ロクロナデ。底部外面回転へラ削り。	砂粒・雲母 橙色 普通	P56 10% 覆土中
4	蓋 須恵器	B(2.0) G(0.7) F(3.2)	口縁部欠損。天井部は低く扁平で、口縁部は短く屈曲する。つまみは扁平なボタン状である。	天井部内面ロクロナデ。天井部外面回転へラ削り。	砂粒・雲母 灰色 普通	P57 10% 覆土中

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
5	釘	(8.9)	0.8	0.4	(9.3)	覆土中	M4
6	釘	(9.5)	0.7	0.3	(8.55)	覆土中	M5
7	釘	(9.7)	0.9	0.5	(12)	覆土中	M6
8	釘	(7.4)	1.1	0.5	(11)	覆土中	M7

第144号住居跡（第208図）

位置 調査6区北部，L14g9区。

重複関係 第143号住居跡の上に構築し、さらに、本跡の上には第145・146・147号住居跡が構築されていることから、本跡は第143号住居跡より新しく、第145・146・147号住居跡より古い。

規模と平面形 長軸4.04m，短軸[3.70]mの方形である。

主軸方向 [N-0°]

壁 壁高は10～26cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 重複のため確認できなかった北壁を除いた壁下を巡っている。上幅15～22cm，下幅6～8cm，深さ約5cmで、断面形はU字形である。

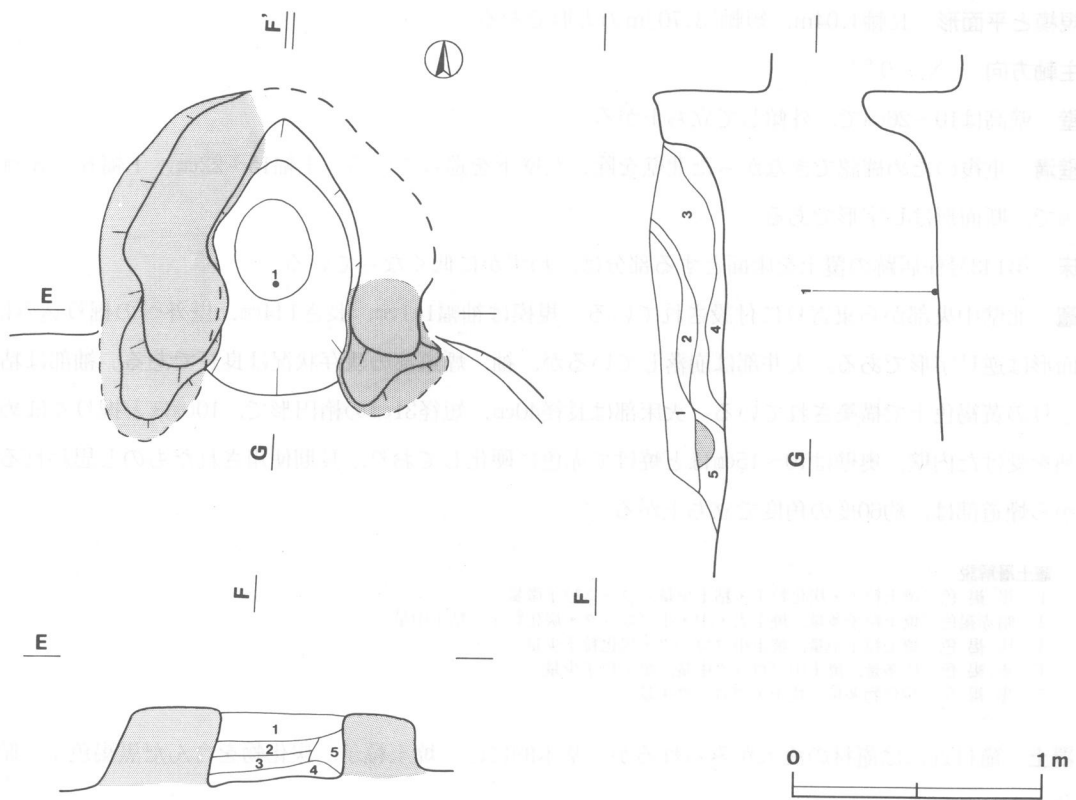
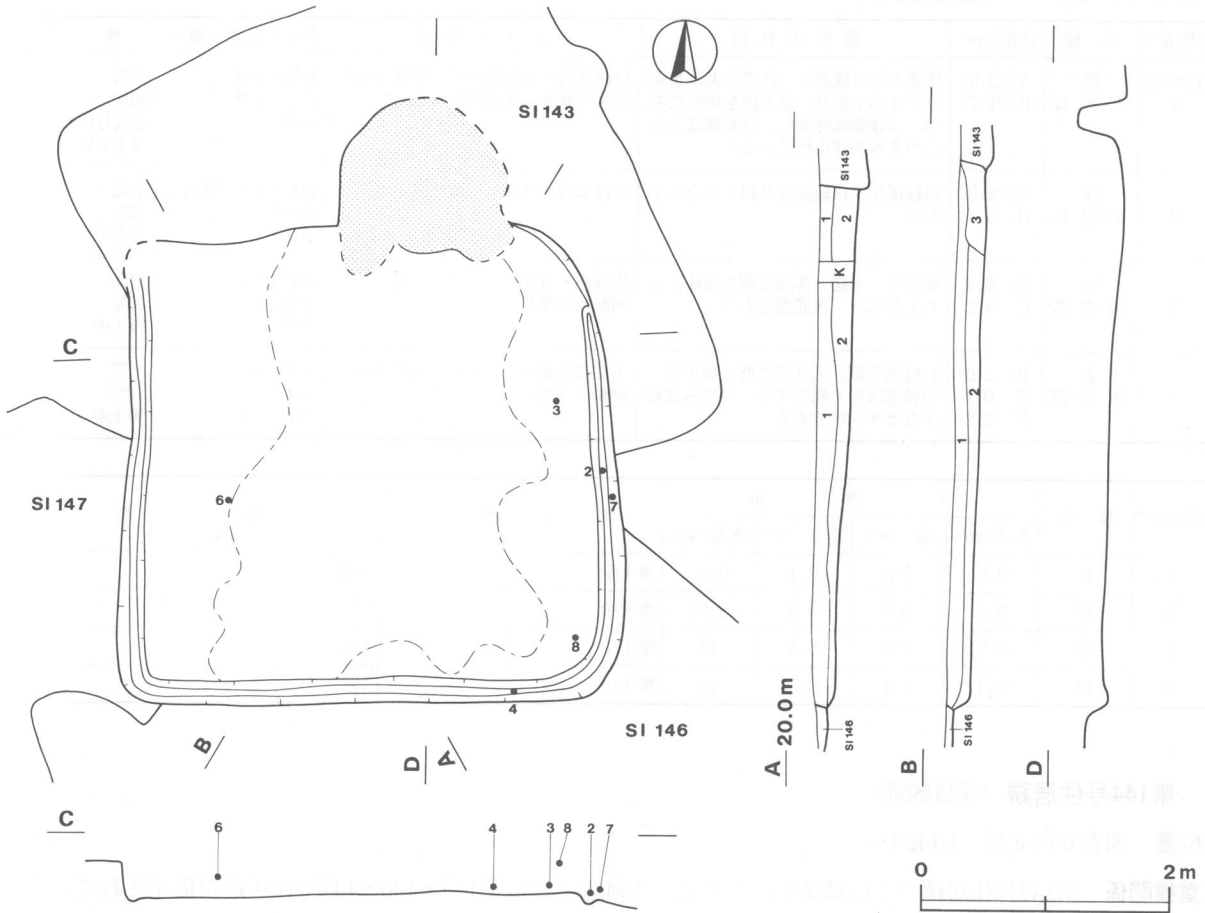
床 第143号住居跡の覆土を床面とする部分は、わずかに低くなっている。

竈 北壁中央部から東寄りに付設されている。規模は袖幅141cm，長さ144cm，壁外への掘り込みは105cm，平面形は逆U字形である。天井部は崩落しているが、袖，煙道部の残存状況は良好である。袖部は粘土と山砂混じりの黄褐色土で構築されている。火床部は長径40cm，短径31cmの楕円形で、10cmほど掘りくぼめている。火熱を受けた内壁，奥壁は10～15cmほど焼けて赤色に硬化しており、長期使用されたものと思われる。燃焼部奥から煙道部は、約60度の角度で立ち上がる。

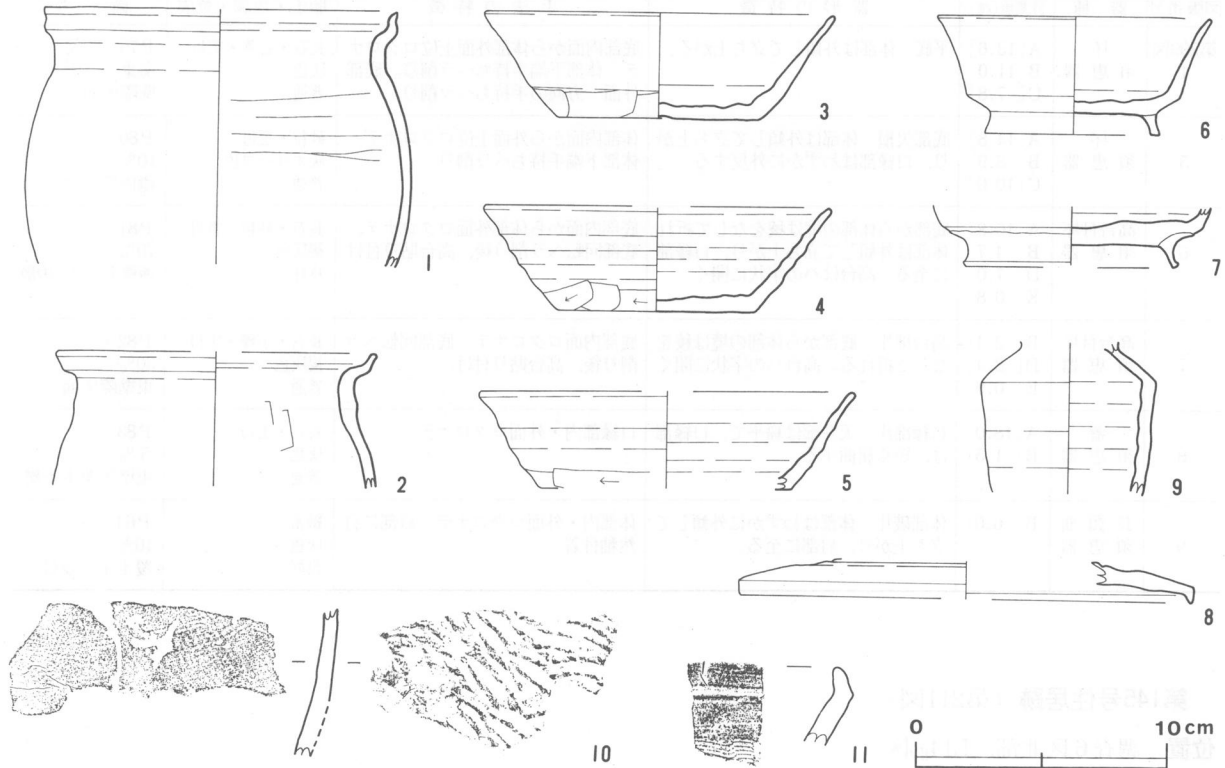
竈土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・粘土少量，ローム粒子微量
- 2 暗赤褐色 焼土粒子多量，焼土大・中・小ブロック・炭化粒子・粘土中量
- 3 灰褐色 焼土粒子中量，焼土小ブロック・炭化粒子少量
- 4 赤褐色 灰多量，焼土中ブロック中量，焼土粒子少量
- 5 黒褐色 炭化物多量，焼土小ブロック中量

覆土 竈付近には竈材の流入がみられるが、基本的には、焼土粒子，炭化物を含んだ黒褐色土，暗褐色土が主体となっている。



第208图 第144号住居跡実測図



第209図 第144号住居跡出土遺物実測図

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量，炭化粒子微量
- 2 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子少量，炭化物・ローム粒子微量
- 3 暗褐色 粘土・焼土粒子・炭化粒子多量，ローム粒子微量

遺物 土師器片390点，須恵器片70点が出土している。第209図1の土師器小形甕は竈内覆土下層，5の須恵器坏は竈内覆土中から，2の土師器小形甕，3の須恵器坏，7の高台付坏は東壁際床面から，4の須恵器坏は南東コーナー床面からそれぞれ出土している。6の須恵器高台付坏は，西壁寄り覆土中層から，8の須恵器蓋は東壁際覆土上層から出土したものである。9の須恵器長頸瓶はいわゆる「壺G」であり，覆土中のものである。10の須恵器甕体部片は，竈内覆土中から出土したもので，内面に同心円状の当て具痕を残している。11は細片のため全体の器形ははっきりしないが，おそらく須恵器甕の口縁部と考えられる。

所見 本跡の時期は，出土遺物から奈良時代から平安時代にかけての8世紀後葉と考えられる。

第144号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第209図 1	小形甕 土師器	A[14.0] B(10.2)	体部から口縁部にかけての破片。体部は緩やかな丸みを持ち，口縁部は直立する。口唇部は上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ナデ，内面ヘラナデ。	長石・石英・砂粒 明赤褐色 普通	P76 15% 竈内覆土下層
2	小形甕 土師器	A[12.6] B(5.4)	体部上位から口縁部にかけての破片。体部は緩やかに立ち上がり，口縁部はくの字状に屈曲する。口唇部は直立し，口唇部直下に沈線が巡る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ナデ，内面ヘラナデ。内面にヘラ当て痕が残る。	長石・石英 灰褐色 普通	P77 5% 東壁際床面
3	坏 須恵器	A 13.8 B 4.2 C 8.0	平底。体部は外傾して立ち上がる。器壁は厚い。	底部内面から体部外面上位ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部外面一方向の手持ちヘラ削り。	長石・石英・小礫・ 雲母 黄灰色 良好	P78 80% 東壁際床面

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第209図 4	坏 須恵器	A[13.6] B 11.0 C[7.8]	平底。体部は外傾して立ち上がる。	底部内面から体部外面上位ロクロナデ。体部下端手持ちへら削り。底部外面一方向の手持ちへら削り。	長石・石英・雲母 灰色 普通	P79 50% 南東コーナー 壁際床面
5	坏 須恵器	A[14.8] B 3.9 C[10.0]	底部欠損。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	体部内面から外面上位ロクロナデ。体部下端手持ちへら削り。	砂粒・雲母 灰オリーブ色 普通	P80 10% 竈内覆土中
6	高台付坏 須恵器	A 10.8 B 4.7 D 7.0 E 0.8	底部から体部の境は稜をなして折れ、体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。高台はハの字状に開く。	底部内面から体部外面ロクロナデ。底部回転へら削り後、高台貼り付け。	長石・砂粒・雲母 褐灰色 良好	P81 70% 西壁寄り覆土中層
7	高台付坏 須恵器	B(2.4) D[8.4] E 0.9	高台破片。底部から体部の境は稜をなして折れる。高台ハの字状に開く。	底部内面ロクロナデ。底部回転へら削り後、高台貼り付け。	長石・小礫・雲母 褐灰色 普通	P82 30% 東壁際床面
8	蓋 須恵器	A[18.0] B(1.5)	口縁破片。天井部は扁平で、口縁部は、短く屈曲する。	口縁部内・外面ロクロナデ。	長石・雲母 灰色 普通	P83 5% 東壁際覆土上層
9	長頸瓶 須恵器	B(6.0)	体部破片。体部はわずかに外傾して立ち上がり、肩部に至る。	体部内・外面ロクロナデ。肩部に自然釉付着。	緻密 灰色 良好	P64 10% 覆土中 壺G

第145号住居跡（第211図）

位置 調査6区北部，L14g9区。

重複関係 第143・144・146・147号住居跡の上に構築していることから，本跡が最も新しい。

規模と平面形 一辺が[3.40]mの方形と推定される。

主軸方向 [N-70°-E]

壁 上面は削平され，壁は残存していない。

床 全体的に軟質である。

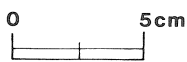
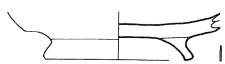
竈 北東壁に付設されている。規模は袖幅78cm，長さ80cm，平面形は逆U字形である。両袖は粘土が主体となって構築されている。火床部は，長径34cm，短径18cmの楕円形で深さ10cmに掘り込まれている。煙道部は40度の角度で立ち上がっている。

竈土層解説

- 1 暗褐色 粘土ブロック中量，焼土粒子少量
- 2 黒褐色 焼土粒子中量
- 3 極暗褐色 焼土粒子少量，焼土小ブロック微量
- 4 暗赤褐色 焼土粒子多量，炭化粒子中量，焼土小ブロック・炭化小ブロック少量，焼土中ブロック微量
- 5 黒褐色 焼土粒子中量
- 6 褐色 焼土粒子多量，炭化粒子中量

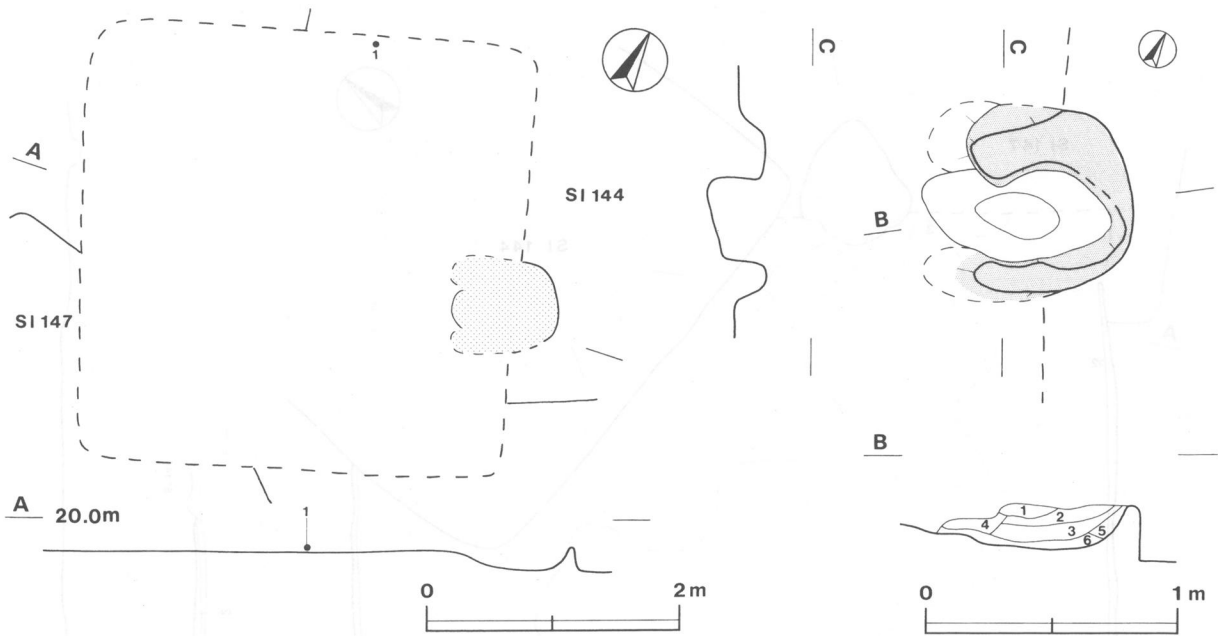
覆土 上面の削平が激しいため，確認できなかった。

遺物 遺物は非常に少なく，土師器片6点である。図示できたものは第210図1の土師器高台付坏のみで，東壁付近覆土下層から出土したものである。



第210図 第145号住居跡
出土遺物実測図

所見 出土遺物が少なく，遺構の残りも良くないため時期を決定するのは困難であるが，重複している住居跡の中で最も新しいことや遺物から，平安時代の10世紀前葉と考えられる。



第211図 第145号住居跡実測図

第145号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第210図 1	高台付坏 土師器	B (1.9) D 5.8 E 0.8	高台部破片。高台部はハの字状に開く。	底部内面へラ磨き。高台貼り付け後ロクロナデ。	砂粒・雲母 橙色 普通	P84 20% 東壁付近覆土下層

第146号住居跡 (第212図)

位置 調査6区北部, L14h9区。

重複関係 第143・144・147号住居跡の上部に構築している。また、本跡の上部には第145号住居跡が構築され、さらに第148号住居跡が本跡を掘り込んでいる。これらから本跡は第143・144・147号住居跡より新しく、第145・148号住居跡より古い。

規模と平面形 長軸6.10m, 短軸[5.20]mの長方形と推定される。

主軸方向 [N-49°-W]

壁 壁高は8~10cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。南東壁は、第148号住居跡に掘り込まれ壊されている。

床 中央部が踏み固められている。第144号住居跡の覆土を床面とする北コーナー部は軟質である。

竈 北西壁南寄りに付設されている。規模は袖幅89cm, 長さ100cm, 壁外への掘り込みは70cm, 平面形は逆U字形である。袖部と煙道部は粘土で構築されている。火床面は径35cmの円形である。

竈土層解説

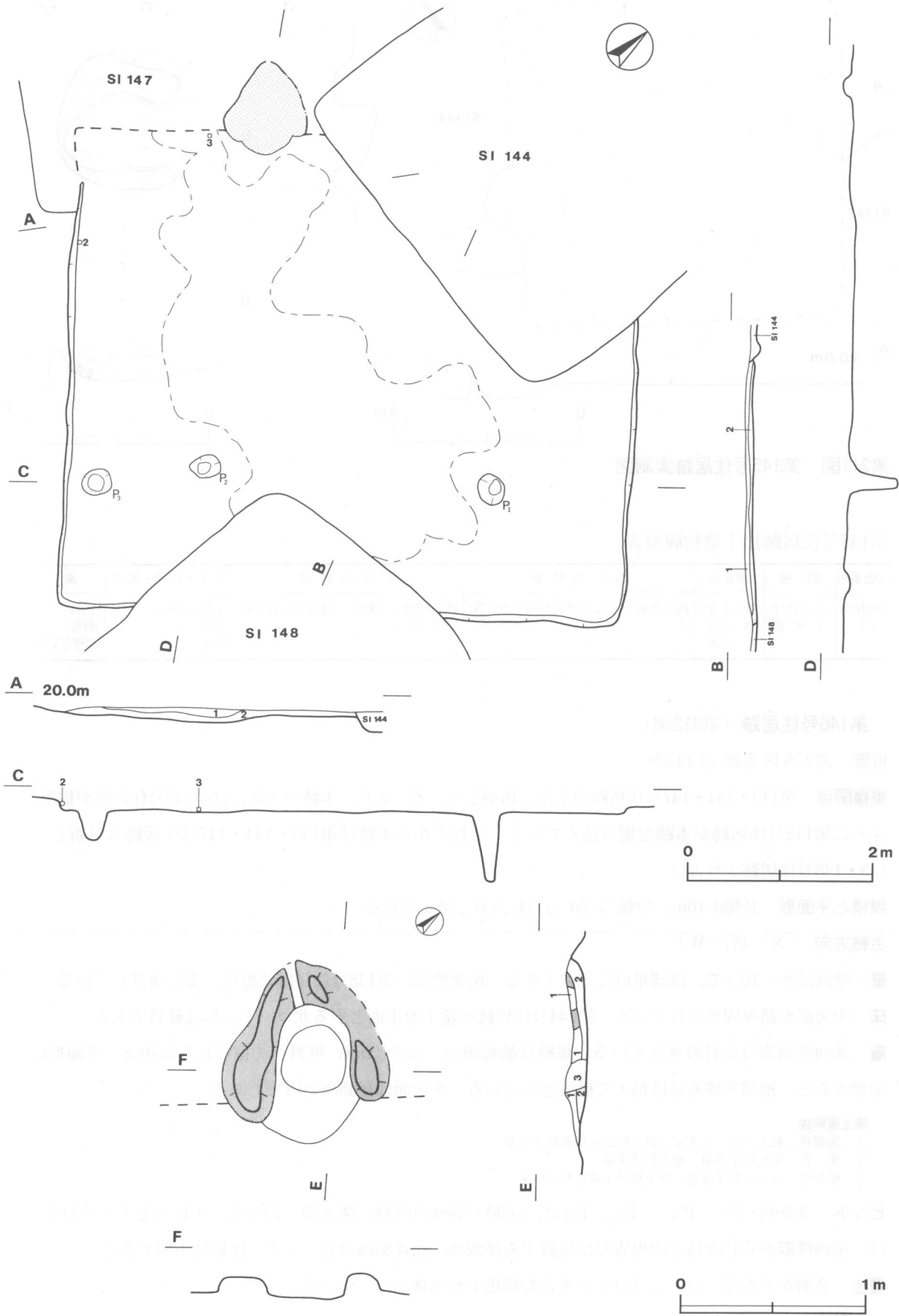
- 1 黒褐色 粘土ブロック多量, 焼土粒子・炭化粒子中量
- 2 黒色 炭化粒子多量, 焼土粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子少量

ピット 3か所(P₁~P₃)。P₁, P₂は、径30~35cmの円形, 深さ53~73cmで、主柱穴と考えられる。P₃は、南西壁際から15cmほど中央寄りに位置する径32cm, 深さ30cmのピットで、性格は不明である。

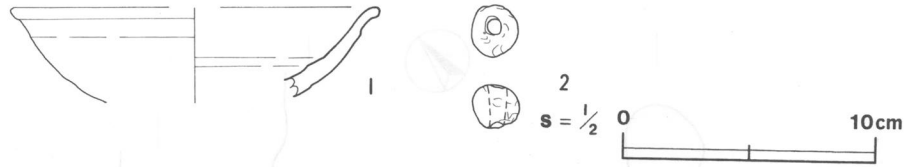
覆土 2層からなる。ロームブロックを含む褐色土が主体となっている。

土層解説

- 1 褐色 ローム小ブロック少量, ローム中ブロック微量
- 2 褐色 ローム小ブロック少量, ローム大ブロック微量



第212図 第146号住居跡実測図



第213図 第146号住居跡出土遺物実測図

遺物 土師器片95点、須恵器片20点、土製品1点、石製品1点が出土している。第213図1の土師器杯は竈内覆土中から、3の雲母片岩は左袖部床面から出土している。3は火熱を受けており、竈の支脚として使用されていたものと考えられる。2の小玉は、南西壁床面から出土している。

所見 本跡の時期は、遺構の重複関係と出土遺物から平安時代の10世紀前半と考えられる。

第146号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第213図 1	坏 土師器	A[14.4] B(3.8)	底部欠損。体部は丸みをもって開き 気味に立ち上がり、口縁部は外反す る。	内・外面ロクロナデ。	砂粒・雲母 橙色 普通 内・外面煤付着	P85 40% 竈内覆土中

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	径(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
2	小玉	1.1	1.4	0.5	1.56	南西壁床面	DP4 100%

図版番号	種別	計測値					出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
3	支脚	10.8	4.9	6.3	—	316	左袖部床面 雲母片岩	Q6 支脚転用 実測図なし

第147号住居跡 (第214図)

位置 調査6区北部, L14h9区。

重複関係 第144号住居跡の上に構築し、さらに、本跡の上には第145・146号住居跡が構築されている。このことから本跡は、第144号住居跡より新しく、第145・146号住居跡より古い。

規模と平面形 一辺が[3.70]mの方形と推定される。

主軸方向 [N-40°-W]

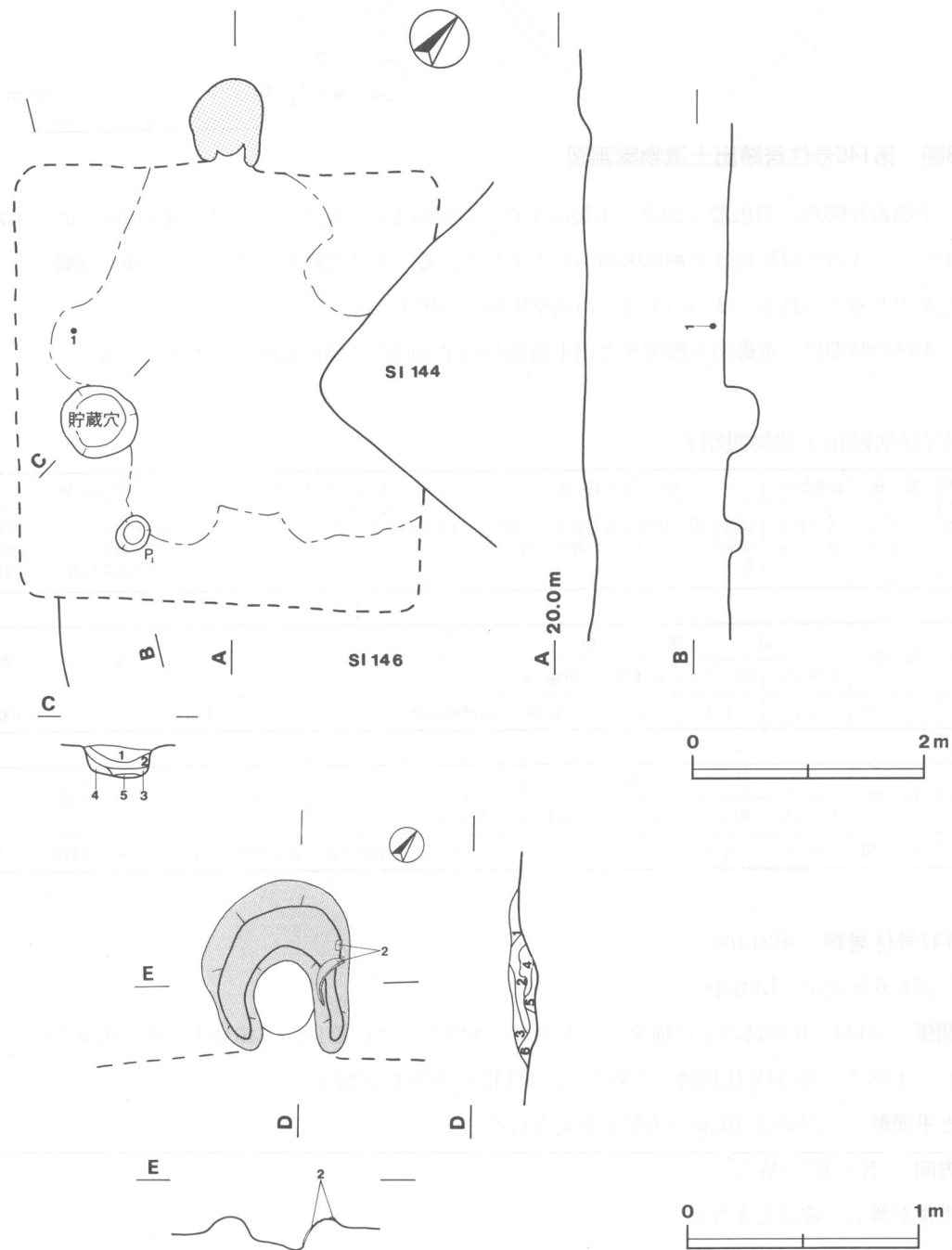
壁 重複が激しく確認できなかった。

床 中央部が踏み固められている。第146号住居跡の覆土を床面とする南東部は軟質で、他の部分より床が沈んでいる。

竈 北西壁中央部に付設されている。規模は袖幅64cm、長さ72cm、平面形は逆U字形である。袖部は砂質粘土で構築されており、右袖には土師器甕が補強材として使用されていた。火床部は径30cmの円形で、4cmほど掘りくぼめられている。

竈土層解説

- 1 黒褐色 粘土中量, 焼土小ブロック・粒子・炭化粒子少量, 焼土大ブロック微量
- 2 黄褐色 粘土多量, 焼土小ブロック少量
- 3 暗褐色 粘土・焼土小ブロック・粒子少量, 炭化粒子微量
- 4 黄褐色 焼土粒子多量, 粘土・炭化粒子少量, 炭化物微量
- 5 褐色 焼土粒子中量, 炭化粒子少量
- 6 暗褐色 炭化粒子中量, 焼土粒子少量, 粘土微量



第214図 第147号住居跡実測図

ピット 1か所(P₁)。P₁は、径30cmの円形、深さ14cmで、支柱穴と考えられる。

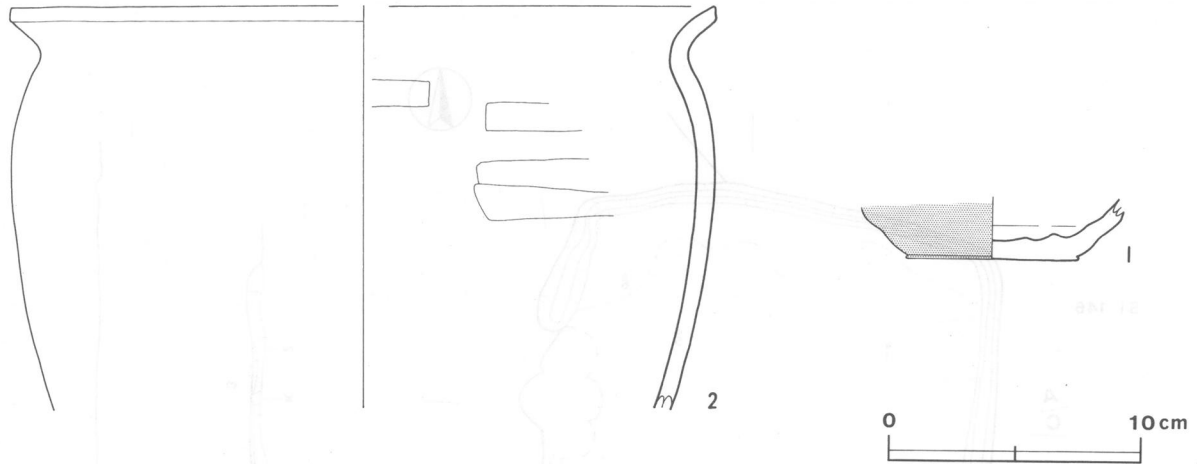
貯蔵穴 中央部から南西壁寄りに位置する。径58cmの円形、深さ30cmである。

貯蔵穴土層解説

- | | | | |
|------|-----------------|---------|---------------------|
| 1 褐色 | ローム粒子少量, 焼土粒子微量 | 4 明褐色 | ローム小ブロック少量, ローム粒子微量 |
| 2 褐色 | ローム粒子少量, 炭化粒子微量 | 5 にぶい褐色 | ローム粒子中量, ローム粒子微量 |
| 3 褐色 | ローム粒子少量 | | |

覆土 上面の削平が激しく確認できなかった。

遺物 遺物は非常に少なく、土師器片13点のみである。第215図1の土師器碗は、貯蔵穴付近から、2の土師器甕は右袖内から出土したものである。特に2の甕は倒立した状態で出土し、袖の芯の補強材として使用され



第215図 第147号住居跡出土遺物実測図

ていたものである。

所見 本跡の時期は、出土遺物から平安時代の10世紀前葉と考えられる。重複関係にある第146号住居跡も10世紀前半に比定できるが、切り合い関係からみて本跡の方が先行する住居跡と考える。

第147号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第215図 1	碗 土師器	B〔2.0〕 C〔6.6〕	底部片。平底。体部はわずかな丸みをもって外方に立ち上がる。器壁は厚い。	内面ロクロナデ。底部回転糸切り後、無調整。外面黒色処理。	砂粒 外面黒色・内面橙色 良好	P88 10% 貯蔵穴付近
2	甕 土師器	B〔28.0〕 C〔16.0〕	体部から口縁部にかけての破片。体部は緩やかに立ち上がり、口縁部でくの字状に折れて短く外反する。口唇部に平坦面がある。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ナデ、内面ヘラナデ。	長石・石英・砂粒・ 雲母 にぶい黄褐色 普通	P89 10% 竈内

第148号住居跡（第216図）

位置 調査6区北部，L14io区。

重複関係 本跡は、第146号住居跡を掘り込んでおり、第146号住居跡、本跡の順に新しい。

規模と平面形 長軸4.70m，短軸3.60mの長方形である。

主軸方向 N-91°-E

壁 掘り込みが浅いため、壁高は2～5cmで、ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝 上幅10～30cm，下幅3～13cm，深さ3～8cm，断面形は逆台形で、全周している。

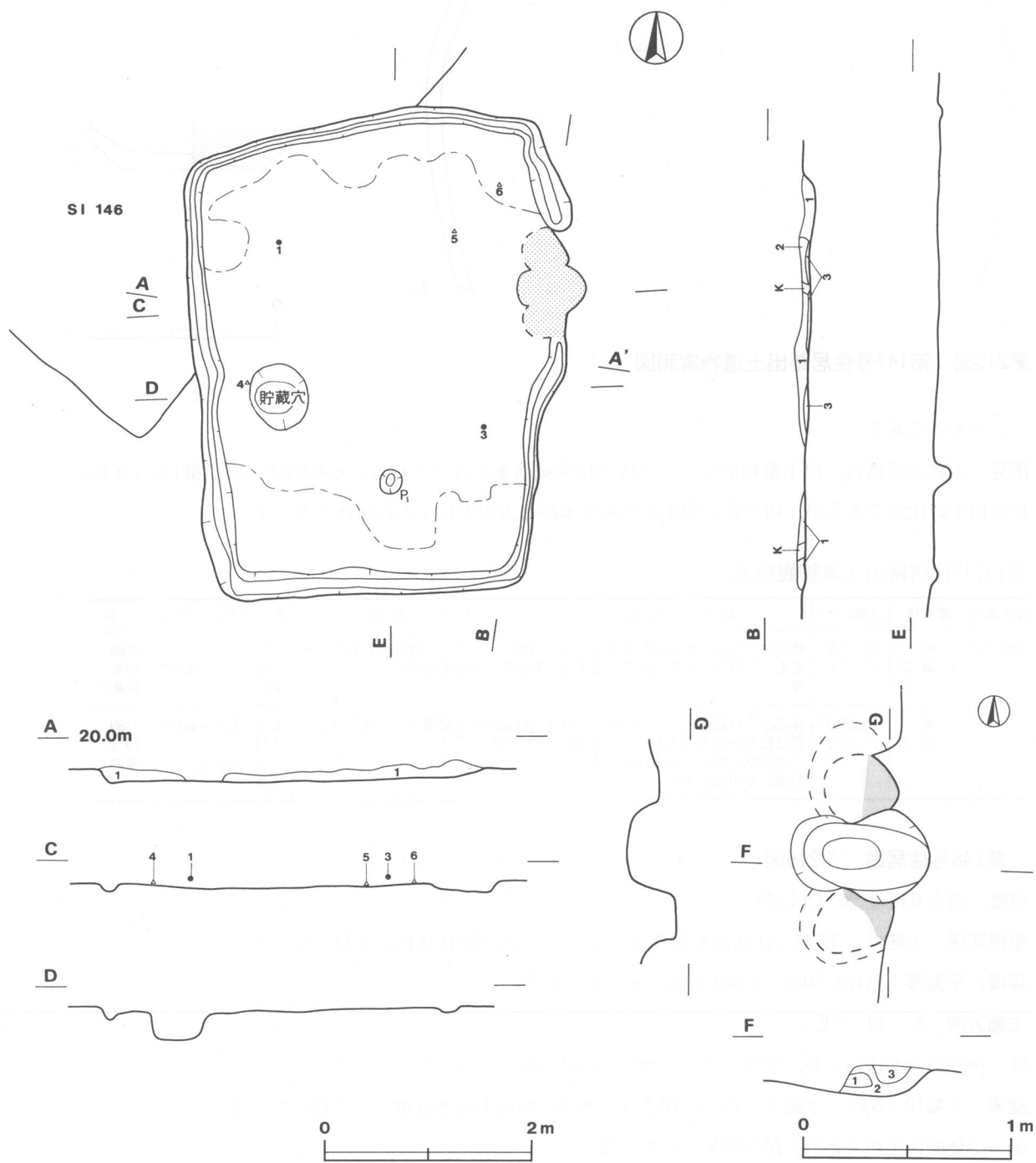
床 全体的に平坦であり、踏み固められている。

竈 東壁中央部から北寄りに付設されている。規模は袖幅117cm，長さ87cm，壁外への掘り込みは20cmで平面形は逆U字形である。袖部は、東壁からロームを掘り残して芯材として、その周りに粘土を貼り付けて構築している。火床面は長径25cm，短径13cmの楕円形で5cmほど掘りくぼめている。

竈土層解説

- 1 灰褐色 粘土中量，焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 2 極暗褐色 ローム粒子中量，焼土小ブロック・炭化粒子少量，焼土中ブロック微量
- 3 暗赤褐色 炭化粒子中量，粘土・焼土小ブロック少量

ピット 1か所(P₁)。P₁は、南壁から100cmほど中央寄りにある径21cmの円形，深さ17cmのピットである。位置と形状から出入り口施設に伴うピットと考えられる。



第216図 第148号住居跡実測図

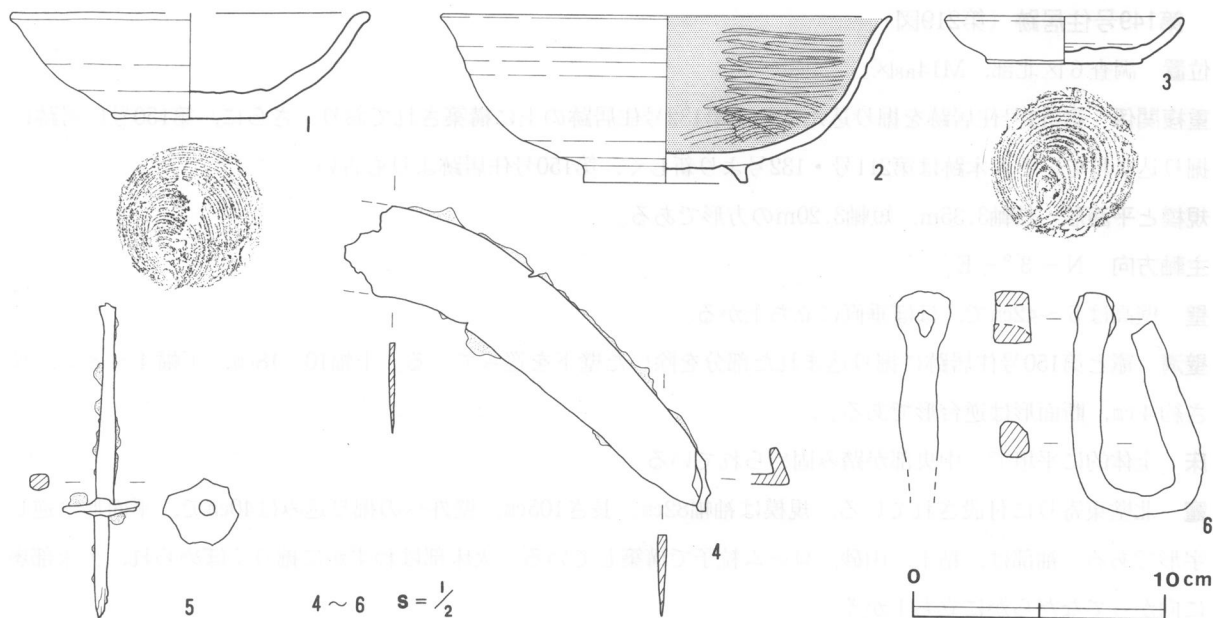
貯蔵穴 西側中央部寄りに位置する。径62cmの円形、深さ30cmである。

覆土 上面の削平が激しく覆土は薄い。

土層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック・焼土粒子少量
- 2 褐色 粘土ブロック中量, ローム粒子少量
- 3 褐色 焼土粒子中量, ローム粒子少量

遺物 土師器片792点, 鉄製品3点が出土している。第217図1の土師器坏は北西部覆土下層から, 3の土師器



第217図 第148号住居跡出土遺物実測図

小皿は南東部覆土下層から出土している。4の鉄鎌は西壁際床面，5の紡錘車は北東部床面，6の不明鉄製品は北東部床面から出土している。

所見 本跡は住居形態からみても他の住居跡とは異なっている。東側に竈を付設し，南北に長い住居跡であり，出入り口施設と思われるピットも竈に対して正面ではなく，脇から出入りするかたちである。遺物はすべて土師器であり，土師質土器もみられる。土師器高台付碗の高台は低く，環状になったものである。これらのことから本跡は，平安時代の10世紀後葉から11世紀代の時期のものと考えられる。

第148号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第217図 1	坏 土師器	A [14.0] B 4.2 C 6.0	平底。突出した底部から体部は内彎しながら大きく外に開く。口縁部は外反する。器壁は厚い。	底部内面から体部外面ロクロナデ。底部回転系切り後，無調整。	緻密，微粒にぶい橙色良好	P90 70% 北西部覆土下層
2	高台付碗 土師器	A 17.6 B 6.7 D 6.4 E 0.5	体部は丸みをもって立ち上がり，口縁部は外反する。高台は短い。	口縁部外面ロクロナデ。内面黒色処理・ヘラ磨き。高台貼り付け後，ナデ。底部外面に回転系切り痕が残る。	緻密，砂粒外面にぶい黄橙色内面黒色良好	P91 80% 覆土中
3	小皿 土師器	A 9.2 B 1.9 C 6.2	平底。突出した底部から，内彎気味に立ち上がり，口縁部にいたる。端部は丸くおさまる。器壁は厚い。	底部内面から体部外面ロクロナデ。底部外面回転系切り後，無調整。	砂粒橙色良好	P92 85% 南東部覆土下層

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
4	鎌	(11.7)	2.9	0.2	(26)	西壁際床面	M9
5	紡錘車	(8.3)	(2.0)	0.5	(8.25)	北東部床面	M10
6	不明鉄製品	(5.9)	1.4	1.0	(25)	北東部床面	M11

第149号住居跡（第219図）

位置 調査6区北部，M14a8区。

重複関係 第211号住居跡を掘り込んでいる第132号住居跡の上に構築されており，さらに，第150号住居跡に掘り込まれている。本跡は第211号・132号より新しく，第150号住居跡よりも古い。

規模と平面形 長軸3.35m，短軸3.20mの方形である。

主軸方向 N-3°-E

壁 壁高は5～42cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 竈と第150号住居跡に掘り込まれた部分を除いた壁下を巡っている。上幅10～18cm，下幅4～8cm，深さ約4cm，断面形は逆台形である。

床 全体的に平坦で，中央部が踏み固められている。

竈 北壁東寄りに付設されている。規模は袖幅82cm，長さ105cm，壁外への掘り込みは40cmで，平面形は逆U字形である。袖部は，粘土，山砂，ローム粒子で構築している。火床部はわずかに掘りくぼめられ，火床部奥に向かってなだらかに立ち上がる。

竈土層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子少量，焼土小ブロック・炭化粒子・ローム粒子・山砂微量
- 2 暗赤褐色 焼土粒子中量，炭化粒子・ローム粒子・山砂微量
- 3 暗赤褐色 焼土粒子多量，焼土小ブロック・炭化粒子・ローム粒子・山砂微量
- 4 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子・山砂微量
- 5 暗赤褐色 焼土粒子・山砂少量，焼土小ブロック・炭化粒子・ローム粒子微量
- 6 褐色 山砂中量，焼土粒子少量，炭化粒子・ローム粒子微量
- 7 暗褐色 山砂・焼土粒子少量，焼土小ブロック・炭化粒子・ローム粒子微量
- 8 黒褐色 ローム粒子少量，山砂微量
- 9 黒褐色 山砂中量，焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量，粘土微量

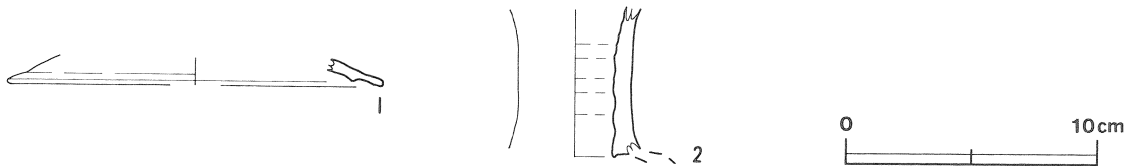
覆土 2層からなる。ローム粒子・ロームブロックを含む人為堆積である。

土層解説

- 1 極褐色 ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
- 2 極褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，ローム大・中ブロック微量

遺物 土師器片63点，須恵器片13点が出土している。第218図1の須恵器蓋，2の須恵器長頸瓶は覆土中からのものである。

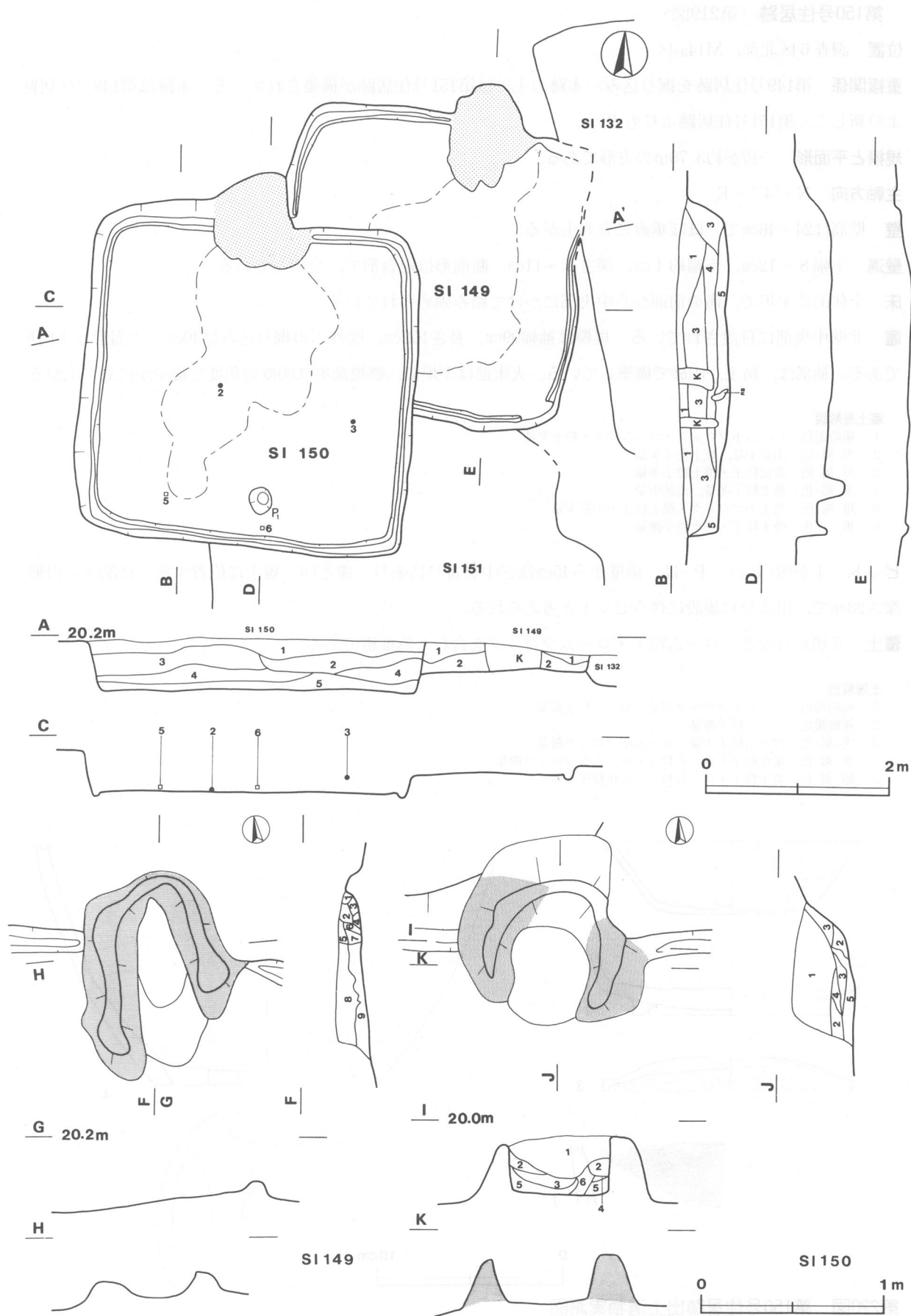
所見 本跡の時期は，出土遺物と重複関係から奈良時代と思われる。須恵器蓋にかえりが付くことから，奈良時代の8世紀前葉と考えられる。



第218図 第149号住居跡出土遺物実測図

第149号出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第218図 1	蓋 須恵器	A[14.8] B(1.1)	口縁部片。なだらかに口縁部にいたる。端部内面に短いかえりが付く。	内・外面ロクロナデ。	長石・砂粒・雲母 灰色 良好	P94 10% 覆土中
2	長頸瓶 須恵器	B(5.9)	頸部片。頸部はほぼ直立する。	内・外面ロクロナデ。内面はロクロ目が強い。内・外面自然釉。	緻密，微粒 灰白色 良好	P95 10% 覆土中



第219图 第149·150号住居跡实测图

第150号住居跡（第219図）

位置 調査6区北部，M14a8区。

重複関係 第149号住居跡を掘り込み，本跡の上には第151号住居跡が構築されている。本跡は第149号住居跡より新しく，第151号住居跡よりも古い。

規模と平面形 一辺が約3.70mの方形である。

主軸方向 N-4°-E

壁 壁高は24~46cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 上幅8~12cm，下幅約4cm，深さ5~11cm，断面形は逆台形で，全周している。

床 全体的に平坦で，竈の前面から中央部にかけて踏み固められている。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は袖幅99cm，長さ102cm，壁外への掘り込みは40cm，平面形は半円形である。袖部は，粘土，山砂で構築している。火床部は平坦で，燃烧部奥は30度の角度で緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

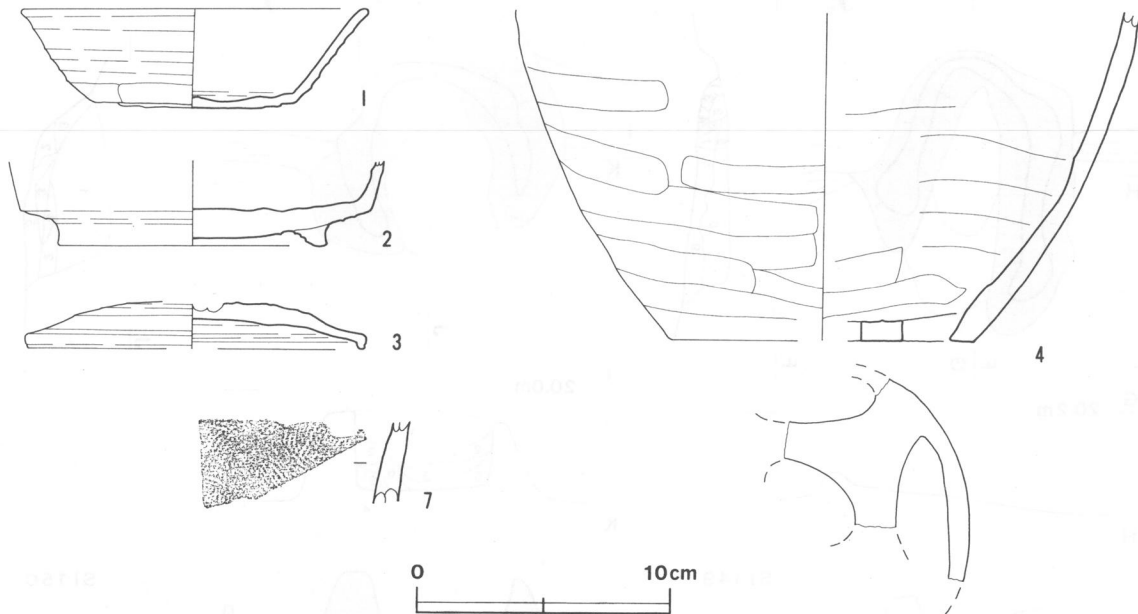
- 1 極暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・粘土少量
- 2 黒褐色 山砂中量，焼土粒子少量
- 3 黒褐色 炭化粒子・焼土粒子多量
- 4 黒褐色 焼土粒子多量，山砂中量
- 5 暗褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・山砂少量
- 6 褐色 焼土粒子・炭化粒子微量

ピット 1か所(P₁)。P₁は，南壁から45cmほど中央寄りにあり，竈と同一線上に位置する。径30cmの円形，深さ23cmで，出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 5層からなる。ローム粒子・ロームブロックを含む人為堆積である。

土層解説

- 1 極暗褐色 ローム小ブロック少量，ローム粒子微量
- 2 極暗褐色 ローム粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
- 4 黒褐色 炭化粒子・ローム粒子・ローム小ブロック微量
- 5 暗褐色 焼土粒子・ローム粒子・炭化粒子少量



第220図 第150号住居跡出土遺物実測図

第150号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第220図 1	坏 須恵器	A 13.7 B 4.1 C 8.0	平底。体部は外へ直線的に開きながら立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。	底部内面から体部外面ロクロナデ。体部外面下端手持ちへら削り。底部外面回転へら削り。回転へら切り後、一方向の雑なナデ。	砂粒・小礫・雲母 青灰色 良好	P107 60% 覆土中
2	高台付坏 須恵器	B(3.4) D 10.4 E 0.9	高台部片。底部と体部との境は稜をもって折れる。高台はわずかに外に開きふんばる。	底部内面ロクロナデ。底部回転へら削り後、高台貼り付け。	砂粒・雲母 灰オリーブ色 普通	P98 30% 中央部床面
3	蓋 須恵器	A[13.2] B(1.9)	つまみ欠損。天井部は低く扁平で器壁が厚い。口縁部は短く屈曲する。口縁端部に1条の沈線がめぐる。	天井部内面から口縁部外面ロクロナデ。天井部外面回転へら削り。	長石・砂粒・雲母 暗灰色 普通	P99 60% 東寄り覆土中層
4	甌 須恵器	B(13.2) C[12.0]	多孔式。体部は外傾して立ち上がる。	体部外面横方向へら削り。体部内面へらナデ、内面下端へら削り。	長石・小礫・雲母 橙色 普通	P18 20% 覆土中

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
5	竈構築材	17.6	11.4	4.9	1370	南壁寄りの覆土下層	Q7 雲母片岩 実測図なし
6	竈構築材	10.0	9.5	5.3	790	南壁寄りの覆土下層	Q8 雲母片岩 実測図なし

遺物 土師器片43点、須恵器片50点、雲母片岩2点、及び混入した陶磁器片1点が出土している。第220図2の須恵器高台付坏は中央部床面、3の須恵器蓋は中央部から東寄りの覆土中層、1の須恵器坏、4の須恵器甌は覆土からそれぞれ出土している。5、6の雲母片岩は、南壁寄りの覆土下層から出土したものであるが、火熱を受けており、おそらく竈の構築材として使用されていたのであろう。7の須恵器甕体部片は、外面に同心円状の叩き痕を有するものである。

所見 本跡の時期は、遺構の重複関係と出土遺物から奈良時代の8世紀中葉と考えられる。

第151号住居跡（第221図）

位置 調査6区北部，M14a8区。

重複関係 第152号住居跡の上部に構築し、第150号住居跡が第195号住居跡を掘り込み、本跡がその上部に構築されているので、第152・195号住居跡、第150号住居跡、本跡の順に新しい。

規模と平面形 長軸4.30m、短軸[3.10]mの長方形である。

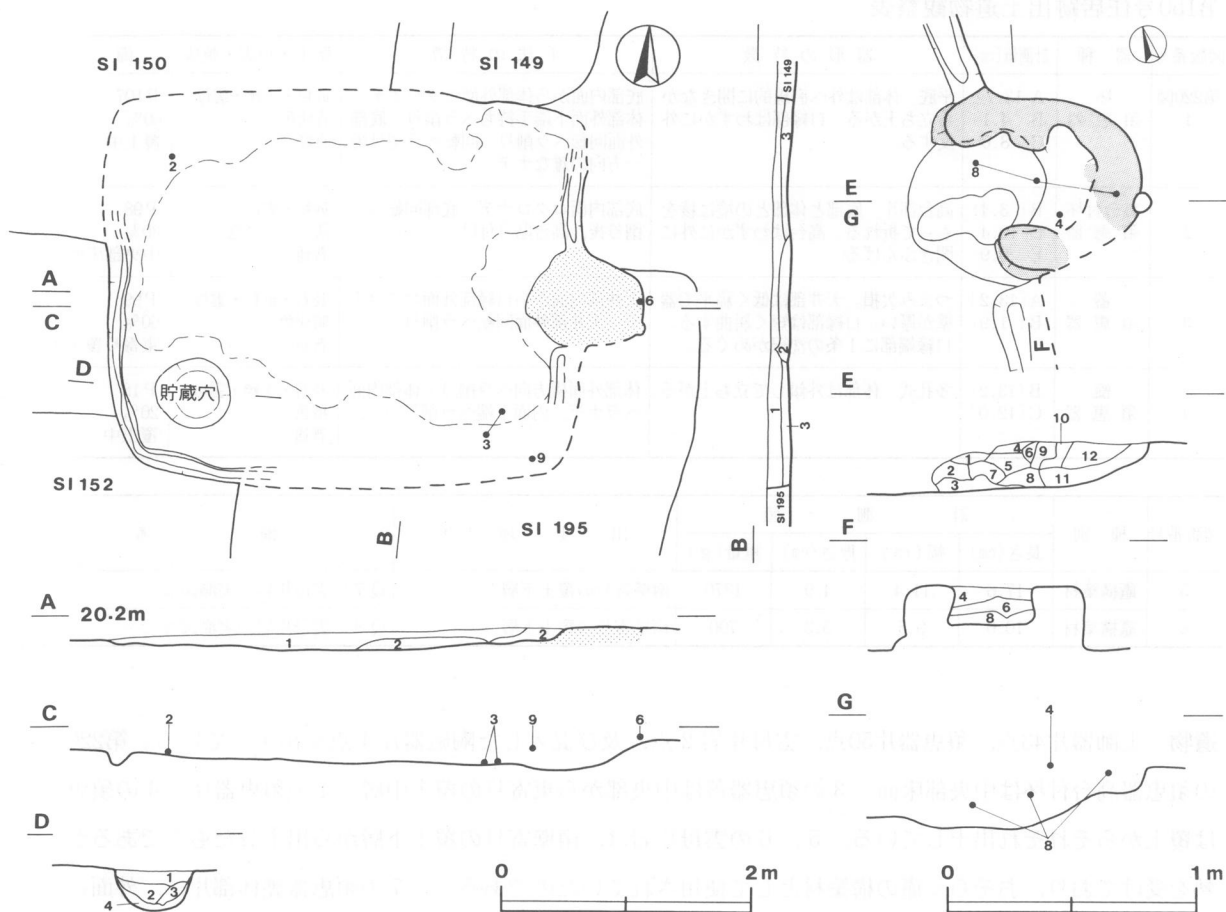
主軸方向 N-89°-E

壁 壁高は2～18cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 重複のため確認できたのは西壁下から南西コーナーにかけてと東壁下の一部である。上幅10～18cm、下幅約3～5cm、深さ約11cm、断面形は逆台形である。

床 平坦で、全体的に踏み固められている。

竈 東壁中央部に付設されている。規模は袖幅70cm、長さ94cm、壁外への掘り込みは45cm、平面形は逆U字形である。袖部、天井部が若干削平されてはいるものの、比較的良好で、両袖、煙道部天井、煙出し口などが確認できた。袖部や天井部は灰白色の粘土で構築されている。左袖には土師器甕体部と雲母片岩が芯材として埋め込まれていた。火床部は長径40cm、短径25cm、深さ5cmの楕円形に掘り込まれている。煙道部は30度の角度で立ち上がる。



第221図 第151号住居跡実測図

竈土層解説

- 1 褐色 炭化粒子中量, 粘土小ブロック・焼土粒子・炭化物・ローム小ブロック少量
- 2 褐色 粘土小ブロック・炭化粒子中量, 炭化物少量, 焼土粒子微量
- 3 暗赤褐色 炭化粒子中量, 焼土粒子少量, 焼土小ブロック・炭化物・粘土小ブロック微量
- 4 灰褐色 焼土中・小ブロック・粘土小ブロック少量
- 5 灰褐色 焼土粒子少量, 粘土小ブロック微量
- 6 灰褐色 焼土小ブロック・焼土粒子少量, 粘土小ブロック微量
- 7 にぶい橙色 焼土中・小ブロック・炭化物・粘土中ブロック少量
- 8 橙色 焼土小ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量, 焼土粒子・炭化物微量
- 9 赤褐色 焼土粒子・ローム粒子中量
- 10 褐色 焼土粒子中量, ローム粒子少量
- 11 暗褐色 焼土小ブロック多量, 焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 12 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量, 粘土小ブロック少量

貯蔵穴 南西コーナーに位置する。径60cmの円形, 深さ32cm, 断面形はU字形である。

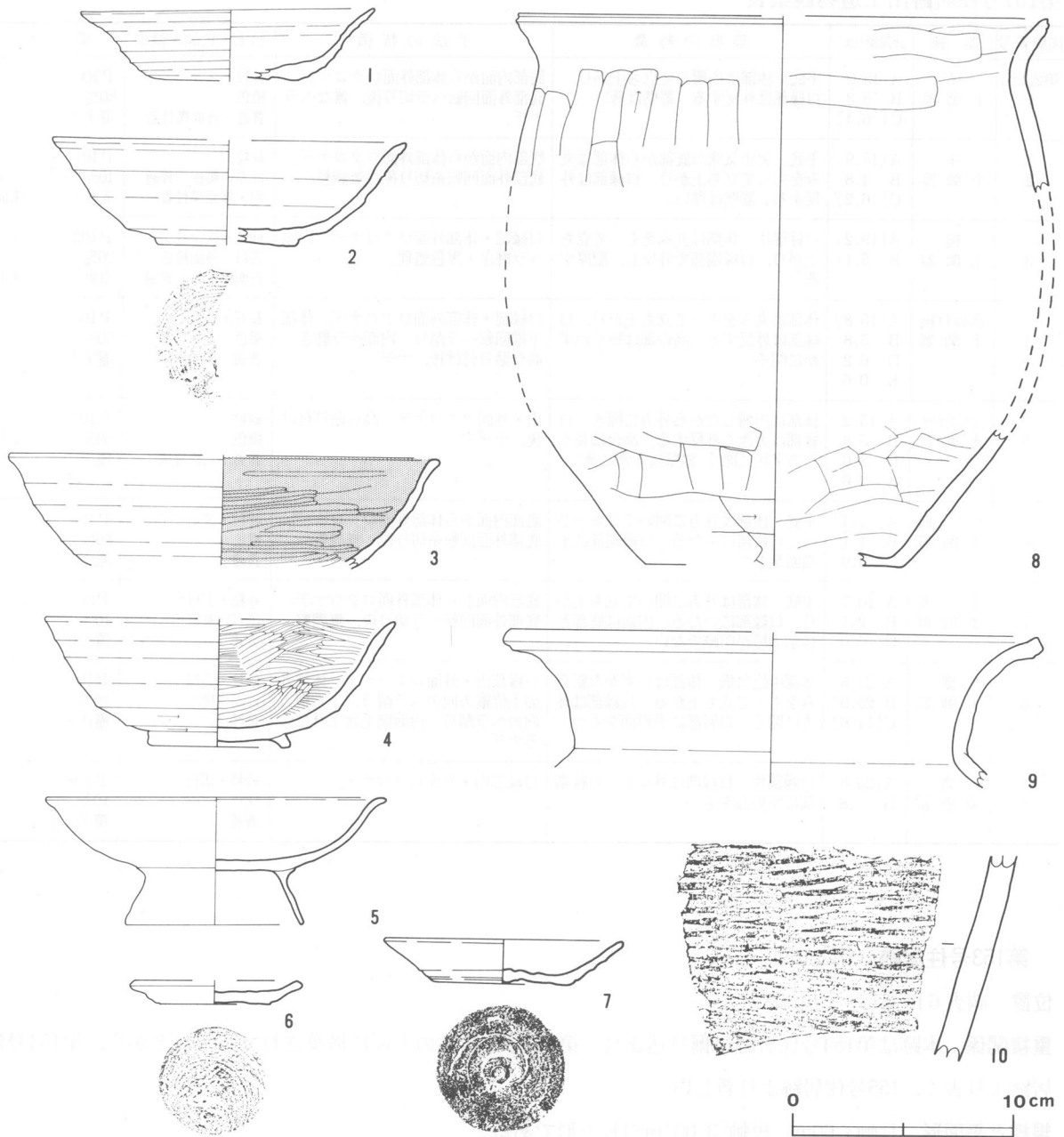
貯蔵穴土層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子・炭化物微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量, ローム中・小ブロック微量
- 3 褐色 ローム粒子中量, ローム中ブロック・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック・炭化粒子微量

覆土 3層からなる。竈付近には竈材の流入がみられる。

土層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 粘土ブロック中量, ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック微量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック微量



第222図 第151号住居跡出土遺物実測図

遺物 土師器片323点，須恵器片40点，雲母片岩5点，羽釜把手1点，及び混入した縄文土器片1点が出土している。第222図1の土師器杯，5の土師器足高高台杯は覆土中から出土し，二次焼成を受けている。2の土師器杯，3の土師器碗は，北西コーナー，南東コーナー床面からそれぞれ出土している。2の外面には煤が付着している。4の土師器高台付碗は，竈の天井部に伏せた状態で置かれていた。6の土師器小皿，7の土師器小皿は竈内覆土から出土したものである。8の土師器甕は，竈内覆土から出土している。9の須恵器甕は，南東コーナー覆土上層から出土したものであるが，混入品と思われる。10の須恵器甕片は，中央部の床面直上から出土している。図示できなかったが，中央部付近床面からは雲母片岩が2点出土している。土層にも竈材の流入が見られるので，袖の芯材に使用されたものと考えられる。

所見 本跡から出土した供膳具は，土師器碗，足高高台杯，環状高台碗の3種，皿，小皿である。これらの出土遺物と重複関係から，本跡の時期は平安時代の10世紀後葉と考えられる。

第151号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第222図 1	坏土師器	A 13.2 B 3.3 C [6.4]	平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。器壁は薄い。	底部内面から体部外面ロクロナデ。底部外面回転ヘラ切り後、雑なヘラナデ。	砂粒・スコリア 橙色 普通 外面煤付着	P 100 80% 覆土中
2	坏土師器	A [15.9] B 4.8 C [6.2]	平底。突出気味の底部から体部は丸みをもって立ち上がり、口縁部は外反する。器壁は厚い。	底部内面から体部外面ロクロナデ。底部外面回転系切り後、無調整。	砂粒 にぶい褐色 普通 内・外面煤付着	P 101 40% 北西コーナー床面
3	碗土師器	A [19.2] B (5.1)	口縁部片。体部は丸みをもって立ち上がり、口縁端部で外反し、肥厚する。	口縁部・体部外面ロクロナデ。内面ヘラ磨き・黒色処理。	砂粒・スコリア・ 雲母 外面橙色 内面黒色 普通	P 102 20% 南東コーナー床面
4	高台付碗土師器	A [15.8] B 5.8 D 6.2 E 0.6	体部は丸みをもって立ち上がり、口縁部は外反する。高台部は短くわずかに開く。	口縁部・体部外面ロクロナデ。体部下端回転ヘラ削り。内面ヘラ磨き。高台貼り付け後、ナデ。	長石・砂粒 褐色 普通	P 103 60% 竈天井部
5	足高高台坏土師器	A 15.2 B 5.8 D 8.0 E 2.6	体部は内彎しながら外方に開き、口縁部は大きく外反する。高台は長くハの字状に開く。器壁は非常に薄い。	内・外面ロクロナデ。高台貼り付け後、ナデ。	砂粒 橙色 普通 二次焼成	P 104 60% 覆土中
6	小皿土師器	A [7.4] B 1.1 C 5.0	平底。体部は外方に開いて立ち上がり、口縁部にいたる。口縁端部に平端面をもつ。	底部内面から体部外面ロクロナデ。底部外面回転系切り後、無調整。	砂粒・スコリア 橙色 普通	P 105 60% 竈内
7	小皿土師器	A 10.7 B 2.1 C 6.0	平底。体部は外方に開いて立ち上がり、口縁部にいたる。内面は底部と体部の境が明瞭でない。	底部内面から体部外面ロクロナデ。底部外面回転ヘラ切り後、無調整。	砂粒・雲母 にぶい黄褐色 普通	P 96 70% 覆土中
8	甕土師器	A [23.8] B [25.0] C [11.6]	体部中位欠損。体部はわずかな膨らみをもって立ち上がる。口縁部は外方に開く。口唇部に平坦面をもつ。	口縁部内・外面ロクロナデ。体部外面上位縦方向のヘラ削り、下端横方向のヘラ削り。内面刷毛状工具によるナデ。	砂粒・雲母 にぶい橙色 良好	P 106 10% 竈内
9	甕須恵器	A [23.8] B (6.8)	口縁部片。口縁部は外反し、口縁端部に平坦面をもつ。	口縁部内・外面ロクロナデ。	砂粒・雲母 灰色 普通	P 109 10% 覆土上層

第153号住居跡（第223図）

位置 調査6区北部，L14i8区。

重複関係 本跡は第154号住居跡に掘り込まれ、第155号住居跡の上部に構築されていることから、第154号住居跡より古く、155号住居跡より新しい。

規模と平面形 長軸3.60m，短軸[3.00]mの長方形である。

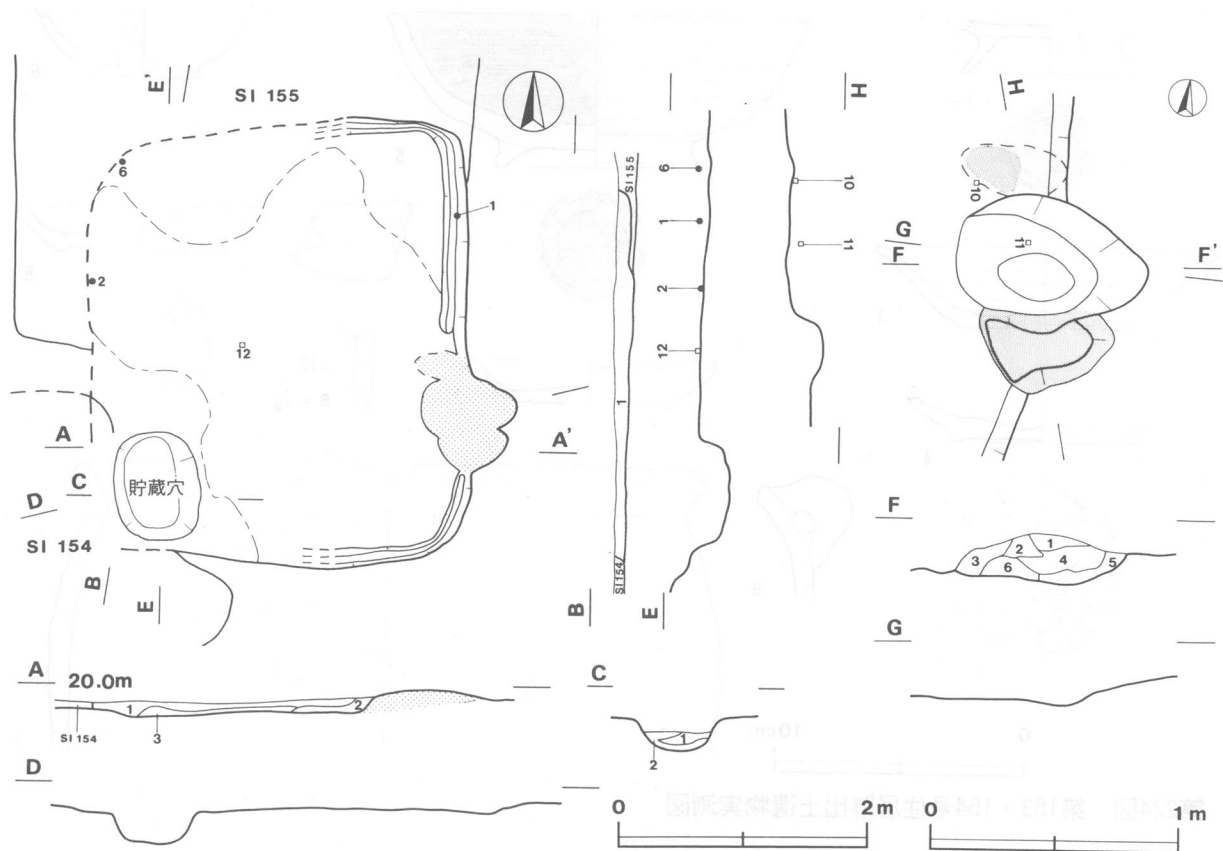
主軸方向 N-88°-E

壁 壁高は約10cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。重複のため残存しているのは、北東コーナーから東壁を通り南南東コーナーまでの部分である。

壁溝 重複のため確認できたのは北東コーナーから東壁を通り南東コーナーの壁下を巡る部分である。上幅8~21cm，下幅4~7cm，深さ約5cm，断面形はU字形である。

床 第155号住居跡の覆土を床面とする部分は、わずかに低くなっている。

竈 東壁中央部から南寄りに付設されている。規模は袖幅100cm，長さ76cm，壁外への掘り込みは33cm，平面形は三角形である。袖部は東壁からロームを掘り残して芯材とし、その周りに粘土を貼り付けて構築している。左袖は粘土が削平され、袖芯材のロームが露出していた。火床部は長径32cm，短径18cmの楕円形で4cmほど掘りくぼめられ、火床部奥に向かってなだらかに立ち上がる。竈内と左袖東に1点ずつ雲母片岩がみられ、火熱を受けていることから支脚として使用していたものと考えられる。



第223図 第153号住居跡実測図

竈土層解説

- | | |
|---------|---|
| 1 極暗赤褐色 | 焼土小ブロック・焼土粒子少量 |
| 2 暗褐色 | 焼土粒子中量, 焼土中・小ブロック少量 |
| 3 黒褐色 | 焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 4 にぶい橙色 | 砂粒多量, 焼土小ブロック・焼土粒子・ローム小ブロック少量, 炭化粒子微量 |
| 5 赤褐色 | 焼土小ブロック・焼土粒子中量, 焼土中ブロック・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量 |
| 6 黒褐色 | ローム小ブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |

貯蔵穴 南西コーナーに位置する。長径90cm, 短径70cmの長方形, 深さ28cm, 断面形は逆台形である。

貯蔵穴土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------------------|-------|------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子多量, ローム小ブロック中量, ローム中ブロック少量 | 2 暗褐色 | ローム小ブロック中量 |
|-------|---------------------------------|-------|------------|

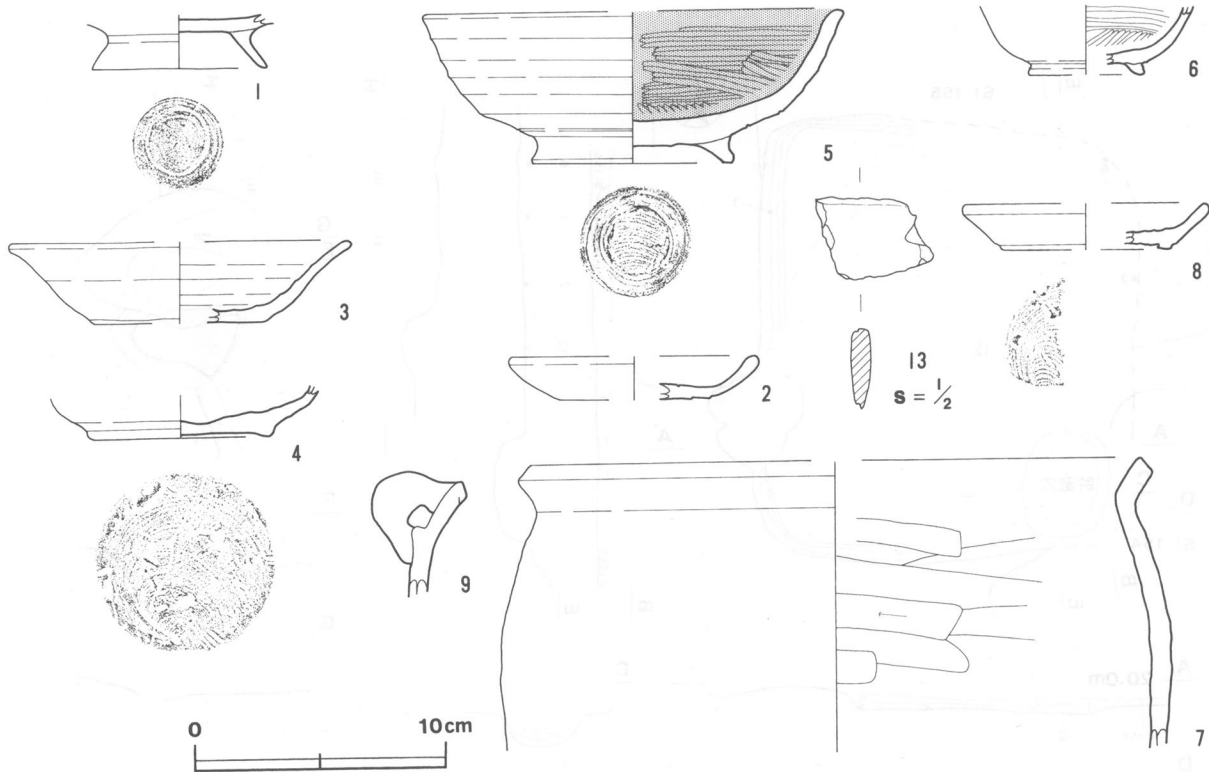
覆土 3層からなり, 人為堆積である。

土層解説

- | | |
|-------|-------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | 焼土粒子中量, 炭化粒子少量, ローム粒子微量 |
| 3 黒褐色 | 焼土粒子・炭化粒子少量, ローム粒子微量 |

遺物 土師器片331点, 土師質土器片1点, 雲母片岩3点, 鉄滓2点が出土している。第154号住居跡と重複しているため遺物が混入しているものが多い。第224図1の土師器碗高台部は北東コーナー床面から, 2の土師器小皿は北西部床面から出土している。10は左袖床面から, 11は竈内から, 12は中央部床面から出土し, いずれも火熱を受けており支脚として使用されていたと考えられる。3の土師器坏, 4の土師器碗, 5の土師器高台付碗は覆土一括の遺物で本跡に属するものか第154号住居跡のものかは明らかではないが, 器種, 形態から考えて本跡のものと考えてよいだろう。

所見 本跡の時期は, 須恵器が伴わず土師器のみで構成されること, 土師器小皿が出現すること, 第155号住居跡より新しいことなどから平安時代の10世紀以降と考えられる。



第224図 第153・154号住居跡出土遺物実測図

第153・154号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第224図 1	高台付碗 土師器	B [2.2] D 7.0 E 1.5	高台部片。高台はハの字状に外方に開く。	内面黒色処理・ヘラ磨き。底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け。	砂粒 外面黄橙色 内面黒色 普通	P133 10% 北東コーナー床面
2	小皿 土師器	A [9.6] B 1.7 C [6.0]	平底。体部はわずかに内彎気味に立ち上がり、口縁部に至る。端部は肥厚する。	底部内面から体部外面ロクロナデ。底部外面回転ヘラ削り後、無調整。	砂粒・スコリア 橙色 普通	P134 15% 北西部床面
3	坏 土師器	A [13.4] B 3.2 C [7.0]	平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	底部内面から体部外面ロクロナデ。底部外面回転ヘラ削り後、無調整。	砂粒・スコリア 雲母 橙色 普通	P135 20% 覆土中
4	碗 土師器	B [2.0] C 7.0	底部片。上げ底気味の平底。突出した底部から体部は内彎して立ち上がる。	底部内面ロクロナデ。底部外面回転系切り後、無調整。	長石 にぶい橙色 普通	P140 40% 覆土中
5	高台付碗 土師器	A [16.4] B 6.1 D 7.8 E 1.1	体部は丸みをもって立ち上がり、口縁部に至る。高台は低く、断面は三角形を呈する。全体的に分厚い。	口縁部内面から体部外面ロクロナデ。体部内面黒色処理・ヘラ磨き。体部下端外面回転ヘラ削り。高台貼り付け。底部中央に回転系切り痕を残す。	砂粒 外面にぶい黄橙色 内面黒色 普通 二次焼成	P136 50% 覆土中
6	高台付碗 土師器	B [2.8] D [4.6] E 0.5	口縁部欠損。体部は丸みをもって立ち上がる。高台は短く外に開く。	体部外面ナデ、内面ヘラ磨き。高台貼り付け。	緻密、スコリア にぶい橙色 良好	P141 30% 覆土中
7	甕 土師器	A [24.2] B (11.6)	体部上位から口縁部片。体部は緩やかに立ち上がり、口縁部は短く外に開き、端部に平坦面をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ナデ、内面ヘラナデ。	長石・石英・小礫 橙色 普通	P137 5% 甕左袖
8	小皿 土師器	A [9.5] B 1.9 C [6.6]	平底。体部は外傾して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。	底部内面から体部外面ロクロナデ。底部外面回転系切り後、無調整。	緻密、細砂 浅黄橙色 良好	P138 20% 覆土中
9	内耳鍋 土師質土器	B [5.0]	口縁部片。口縁部は外傾する。耳数不明。	口縁部内・外面ナデ。	長石・石英 にぶい赤褐色 普通	P139 5% 貯蔵穴内覆土中

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第224図10	支脚転用	6.1	4.7	3.3	124	左袖床面	Q10 雲母片岩 実測図なし
11	支脚転用	4.5	4.0	2.5	60	竈内	Q11 雲母片岩 実測図なし
12	支脚転用	4.4	3.3	2.5	39	中央部床面	Q12 雲母片岩 実測図なし
13	不明鉄製品	(3.1)	2.2	0.5	(7)	覆土	M12

第154号住居跡（第225図）

位置 調査6区北部，L14j7区。

重複関係 本跡は第153号住居跡を掘り込み，第156号住居跡の上部に構築されていることから，第153・156号住居跡より新しい。

規模と平面形 長軸4.30m，短軸[2.90]mの長方形である。

主軸方向 N-91°-E

壁 壁高は15～18cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。削平のため北壁は確認できなかった。

壁溝 確認できたのは南東コーナーから南壁下を通り，西壁下を巡る部分である。上幅8～17cm，下幅4～8cm，深さ約3cm，断面形は逆台形である。

床 全体的に平坦で，中央部が踏み固められている。

竈 東壁中央部から南寄り，南東コーナー近くに付設されている。右袖から煙道部にかけては削平されており，残存部は，左袖部と火床部である。規模は袖幅[90]cm，長さ98cm，壁外への掘り込みは35cm，平面形は三角形と推定される。火床部は長径30cm，短径25cmの楕円形で7cmほど掘りくぼめられ，火床部奥に向かってなだらかに立ち上がる。

竈土層解説

- 1 暗褐色 粘土ブロック中量，焼土小ブロック・焼土粒子少量
- 2 暗赤褐色 ローム粒子多量

ピット 3か所(P₁～P₃)。P₁は径26cmの円形，深さ16cm，P₂は径20cmの円形，深さ12cmで，支柱穴と考えられる。P₃は，径30cmの円形，深さ16cmで，出入り口施設に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴 南壁中央部に位置する。径73cmの円形，深さ35cm，断面形は逆台形である。

貯蔵穴土層解説

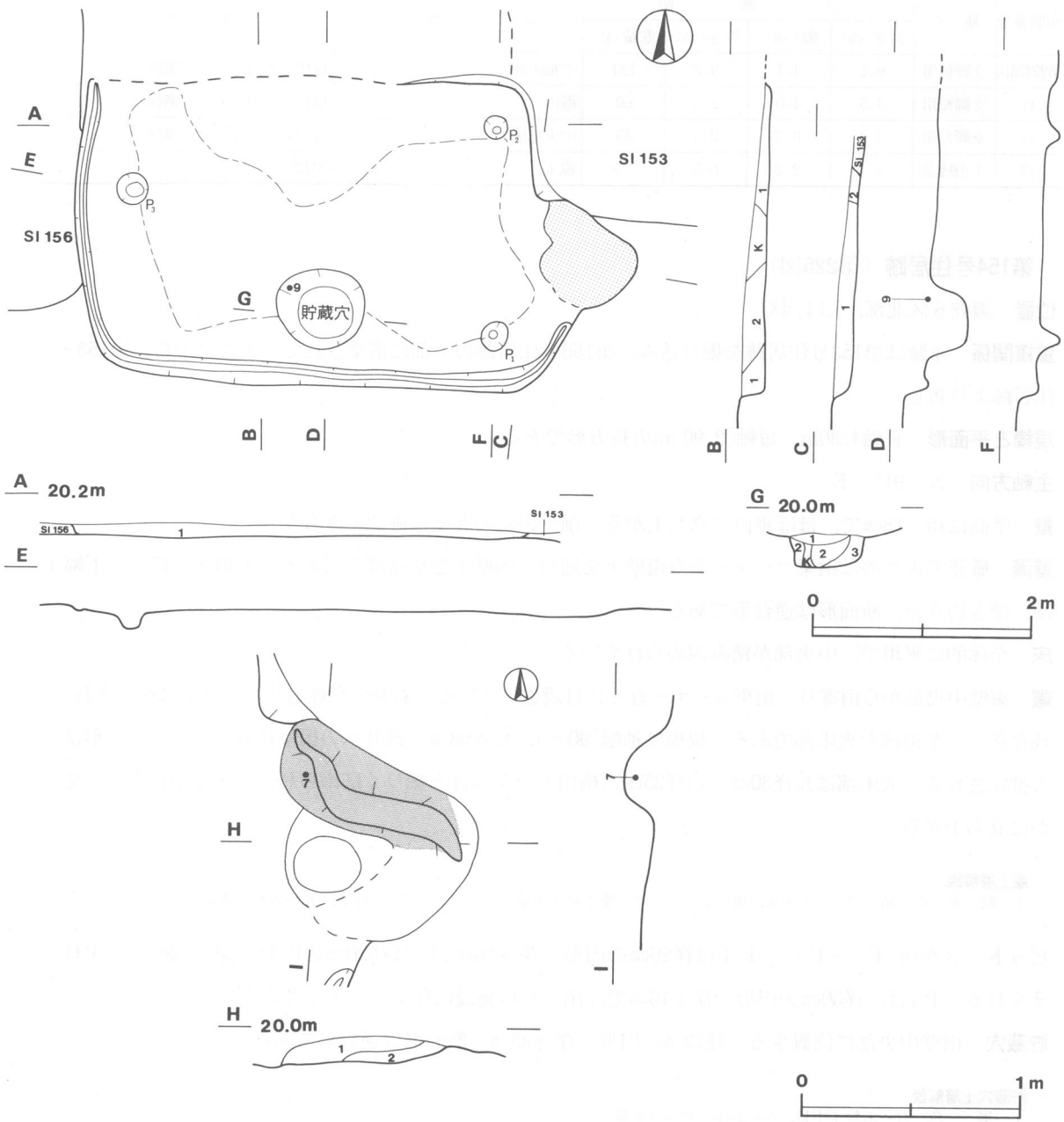
- 1 褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
- 2 褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック微量
- 3 褐色 ローム粒子・ローム小ブロック中量

覆土 2層からなり，人為堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
- 2 暗褐色 焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量，ローム中ブロック微量

遺物 土師器片286点，鉄製品1点，鉄滓2点が出土している。第153号住居跡と重複していたことと，覆土が薄く遺構がとらえにくかったことで，遺物も混入しているものが多い。第224図7の土師器甕片は竈左袖から出土し，補強材として使用されていたものである。9の土師質土器内耳鍋片は貯蔵穴内覆土中から出土している。8の土師器小皿は覆土中から出土したものであるが，本跡に属するものか第153号住居跡に属するものなのか明らかではないが，器種から考えて本跡のものと考えてよいだろう。



第225図 第154号住居跡実測図

所見 本跡の時期は、出土遺物からみると土師器のみで構成される時期である。内耳鍋、土師器小皿が見られる段階であることから平安時代の10世紀以降と考えられる。さらに重複関係から第153号住居跡より新しい時期であるので、10世紀以降でも第153号住居跡より後出する時期である。

第155号住居跡 (第226図)

位置 調査6区北部, L14i8区。

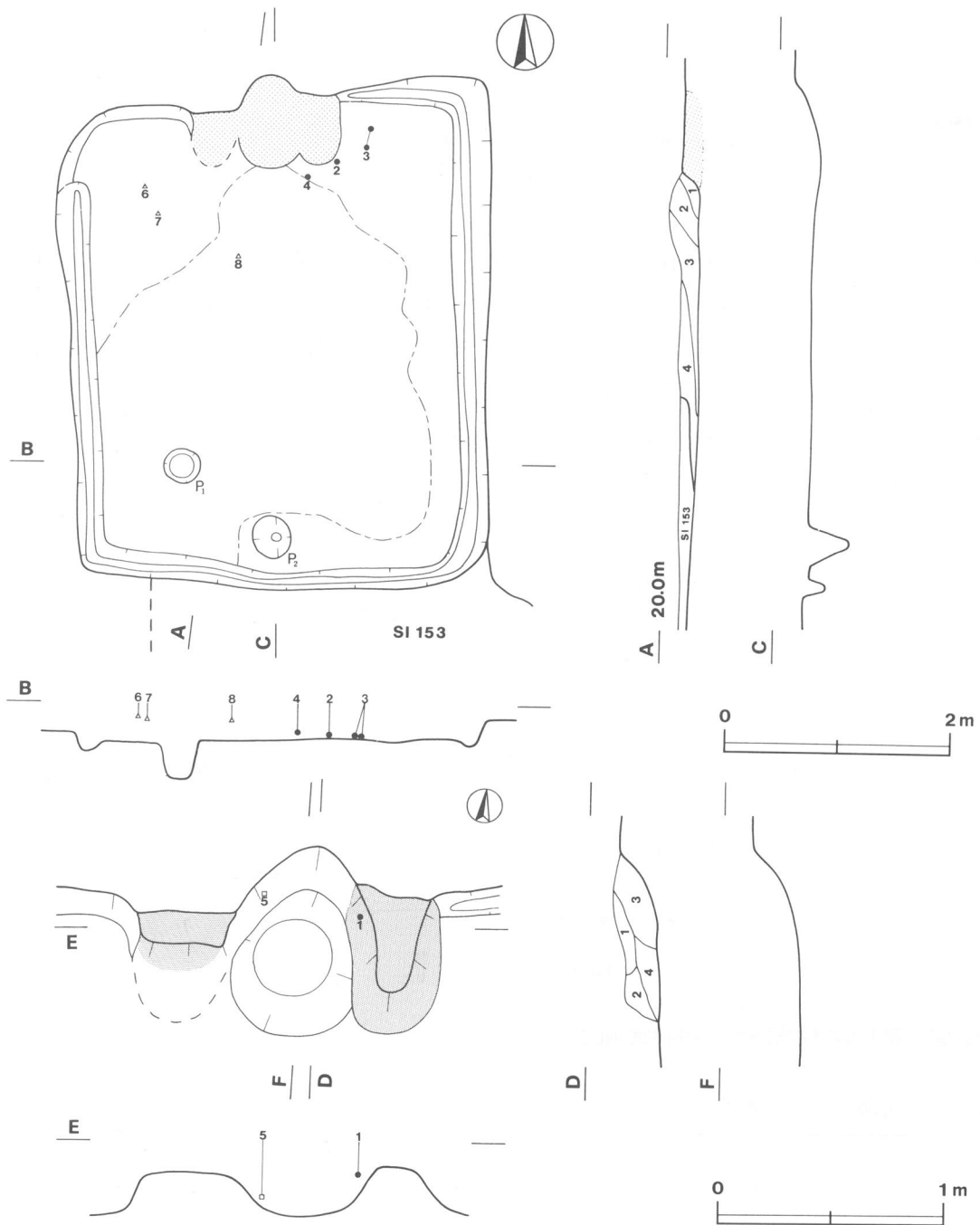
重複関係 本跡の上部には第153号住居跡が構築されていることから, 本跡が古い。

規模と平面形 長軸4.50m, 短軸3.64mの長方形である。

主軸方向 N-0°

壁 壁高は6~18cmで, 外傾して立ち上がる。

壁溝 北西コーナーを除いて全壁下を巡っている。上幅12~16cm, 下幅3~9cm, 深さ5~8cm, 断面形は逆台形である。



第226図 第155号住居跡実測図

床 全体的に平坦で、南寄りから中央部にかけて踏み固められている。

竈 北壁中央部に付設されている。左袖は攪乱を受けているため、規模は袖幅[137]cm、長さ83cm、壁外への掘り込みは25cm、平面形は三角形と推測される。袖部は北壁に山砂混じりの粘土を貼り付けて構築している。火床部は径34cmの円形でわずかに掘りくぼめられ、火床部奥に向かってなだらかに立ち上がる。

竈土層解説

- 1 暗赤褐色 山砂少量、焼土粒子微量 3 灰褐色 焼土粒子・焼土小ブロック・炭化物・ローム小ブロック・山砂少量
2 灰褐色 山砂中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量 4 赤褐色 焼土粒子中量、炭化物・炭化粒子・山砂・粘土ブロック少量

ピット 2か所(P₁、P₂)。P₁は径32cmの円形、深さ36cm、断面形は円筒形で、主柱穴と考えられる。P₂は南壁際から35cmの所に位置し、竈と同一線上に並んでいる。径35cmの円形、深さ36cmで出入り口施設に伴うピットと考えられる。

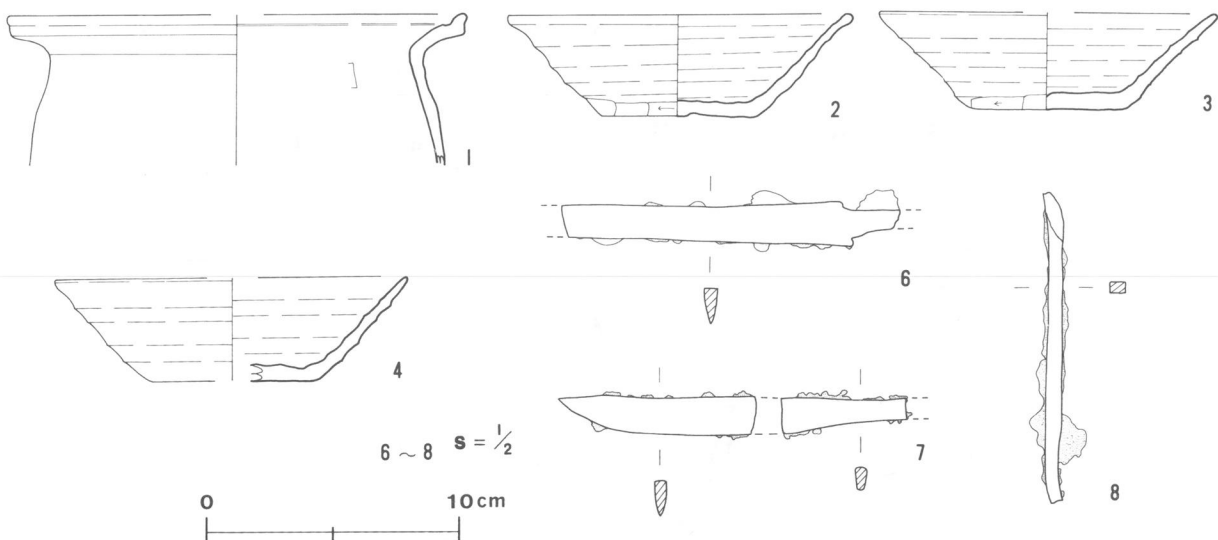
覆土 4層からなり、人為堆積である。

土層解説

- 1 極暗褐色 焼土粒子多量、炭化粒子中量、焼土小ブロック・ローム粒子少量
2 暗褐色 ローム粒子・粘土ブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量
3 極暗褐色 炭化粒子・ローム粒子少量、焼土粒子・炭化物微量
4 極暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子微量

遺物 土師器片186点、須恵器片147点が出土している。第227図1の土師器甕、5の雲母片岩は竈内から出土している。いずれも竈の構築材の一部と考えられる。2～4の須恵器坏はいずれも竈の前面の床面から覆土下層で出土している。胎土には雲母が含まれているので、新治産の須恵器である。6、7の刀子は北西覆土上層から、8の鉄釘は、中央部覆土上層から出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から平安時代の9世紀後葉と考えられる。



第227図 第155号住居跡出土遺物実測図

第155号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第227図 1	甕 土師器	A[18.0] B(6.0)	体部上位から口縁部片。体部は緩やかに立ち上がる。口縁部は外へ大きく折れ、口唇部は上方につまみ上げられる。内面直下に沈線がある。	口縁部内・外面横ナデ。	長石・砂粒・雲母 明赤褐色 普通	P142 10% 竈内

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第227図 2	坏 須恵器	A 13.6 B 4.2 C 6.0	平底。体部は外へ大きく開きながら立ち上がる。口縁部は外反する。	底部内面から体部外面ロクロナデ。体部下端手持ちへら削り。底部外面回転へら切り後、一方向のへら削り。	長石・石英・雲母 灰色 普通	P143 70% 竈前面覆土下層
3	坏 須恵器	A[13.2] B 3.9 C 6.0	平底。体部は外反しながら立ち上がり口縁部に至る。	底部内面から体部外面ロクロナデ。体部下端手持ちへら削り。底部外面回転へら切り後、一方向のへら削り。	長石・石英・雲母 灰オリーブ色 普通	P144 30% 竈前面床面
4	坏 須恵器	A[13.8] B 4.1 C[6.4]	平底。体部は外に大きく開きながら立ち上がり口縁部に至る。	底部内面から体部外面ロクロナデ。体部下端手持ちへら削り。底部外面回転へら切り後、一方向のへら削り。	長石・雲母 灰色 普通	P145 30% 竈前面覆土下層

版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
5	竈構築材	5.2	3.3	3.8	85	竈内	Q13 雲母片岩 実測図なし
6	刀子	(8.9)	1.3	0.4	(11)	北西寄り覆土上層	M13
7	刀子	(8.5)	1.0	0.3	(9)	北西寄り覆土上層	M14
8	釘	(8.3)	0.4	0.3	(7)	中央部覆土上層	M15

第156号住居跡（第228図）

位置 調査6区北部，L14j6区。

重複関係 第154号住居跡が本跡の上部に構築されていることから，本跡が古い。

規模と平面形 長軸3.35m，短軸[3.20]mの方形である。

主軸方向 N-88°-E

壁 壁高は6～20cmで，緩やかに外傾して立ち上がる。

床 中央部が踏み固められ，わずかに高い。

竈 第154号住居跡によって壊されており，竈の痕跡しか確認できなかった。東壁中央部から南寄り，南東コーナー近くに付設され，火床部は径29cmの円形と推定される。

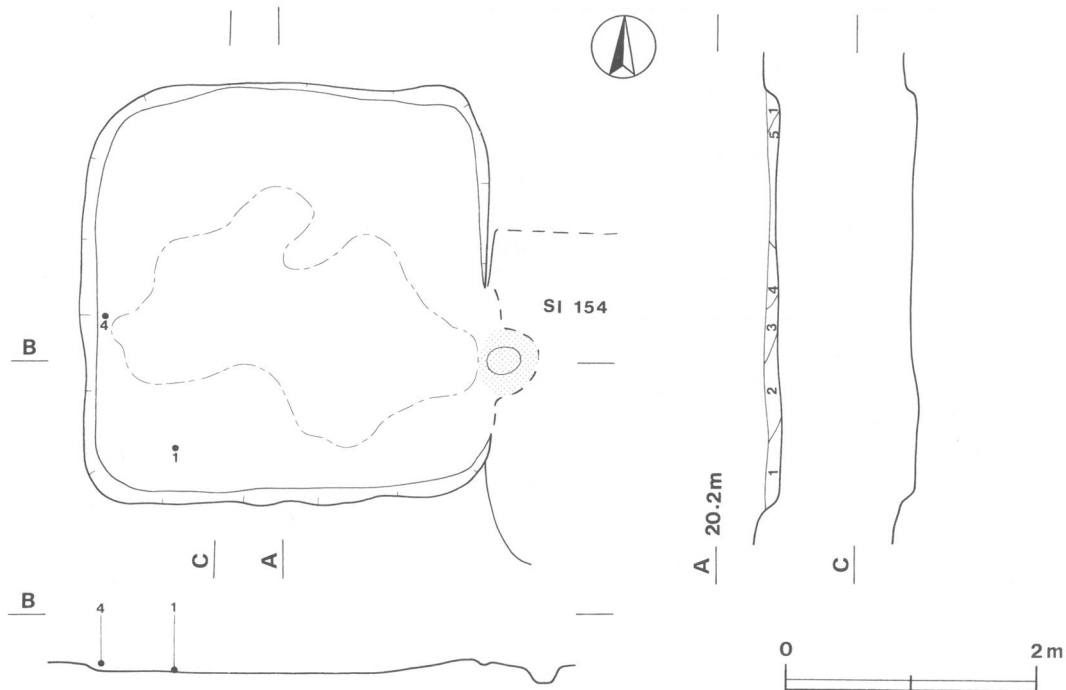
覆土 5層からなる。自然堆積と考えられる。

土層解説

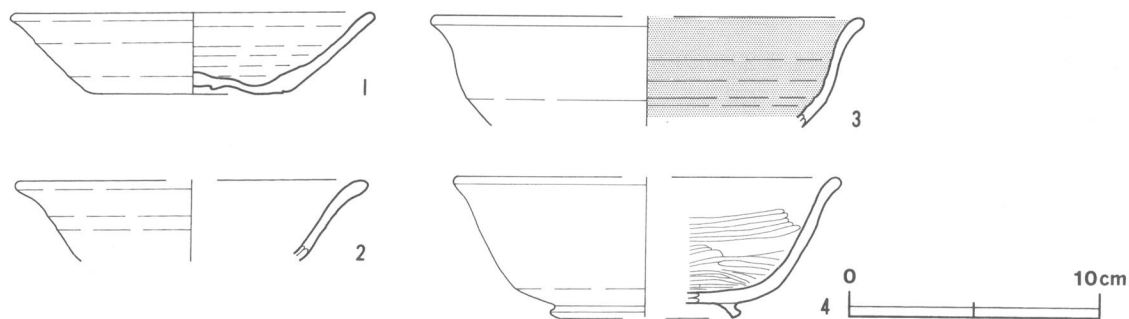
- 1 黒褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
- 2 黒褐色 ローム粒子・ローム小ブロック中量
- 3 黒褐色 ローム粒子中量，ローム中ブロック少量
- 4 暗褐色 ローム粒子多量
- 5 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック中量

遺物 土師器片142点，須恵器片66点，鉄滓1点，混入した縄文土器片1点が出土している。第229図1の土師器坏は南西コーナー付近床面から，4の土師器高台付椀は西壁寄り覆土から，2の土師器坏，3の土師器椀は覆土中から出土している。

所見 本跡の時期は，出土遺物から平安時代の10世紀以降と考えられる。



第228図 第156号住居跡実測図



第229図 第156号住居跡出土遺物実測図

第156号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第229図 1	坏 土師器	A 14.0 B 3.3 C 7.8	平底。体部は外へ大きく開きながら立ち上がり、口縁部に至る。器壁は薄い。	底部内面から体部外面ロクロナデ。底部外面回転ヘラ切り後、雑なナデ。	砂粒・スコリア・雲母 橙色 普通 内・外面煤附着	P146 70% 南西コーナー床面
2	坏 土師器	A[13.6] B(3.2)	口縁部から体部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がる。口縁部は外反し、端部は肥厚する。	内・外面ロクロナデ。	砂粒・スコリア・雲母 橙色 普通 内・外面煤附着	P147 20% 覆土中
3	碗 土師器	A[16.8] B(4.4)	口縁部から体部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がる。口縁部は外反し、端部は玉縁状に肥厚する。	外面ロクロナデ。内面黒色処理。	砂粒・スコリア 外面にふい橙色 内面黒色 普通	P148 10% 覆土中
4	高台付碗 土師器	A[15.0] B 5.6 D[6.8] E 0.6	体部は丸みをもって立ち上がり、口縁部は外反する。高台は環状で、短く外に開く。	口縁部内面から体部外面ロクロナデ。体・底部内面ヘラ磨き。高台貼り付け。	砂粒・スコリア にふい橙色 良好	P149 40% 西壁寄り覆土下層

第157号住居跡（第230図）

位置 調査6区北部，L15i1区。

重複関係 第167号住居跡を掘り込んでいることから，本跡が新しい。

規模と平面形 長軸3.70m，短軸3.38mの方形である。

主軸方向 N-5°-E

壁 壁高は10～16cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 北壁及び北東コーナーを除く壁下を巡っている。上幅10～20cm，下幅3～7cm，深さ4～6cm，断面形はU字形である。

床 全体的に平坦で，中央部が踏み固められている。

竈 北壁中央部から東寄り，北東コーナー近くに位置する。左袖から煙道部の一部は攪乱を受けて壊されている。規模は袖幅90cm，長さ145cm，壁外への掘り込みは68cmでかなり煙道が長い。火床部は長径42cm，短径36cmの楕円形で，火床部奥に向かってなだらかに立ち上がる。

竈土層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子・ローム粒子少量，炭化材微量
- 2 赤褐色 ローム粒子多量，焼土粒子・焼土小ブロック中量
- 3 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子中量，山砂少量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量，焼土粒子・粘土粒子少量

覆土 2層からなる。焼土粒子，焼土小ブロックを含む暗褐色土の覆土であり，人為堆積と考えられる。

土層解説

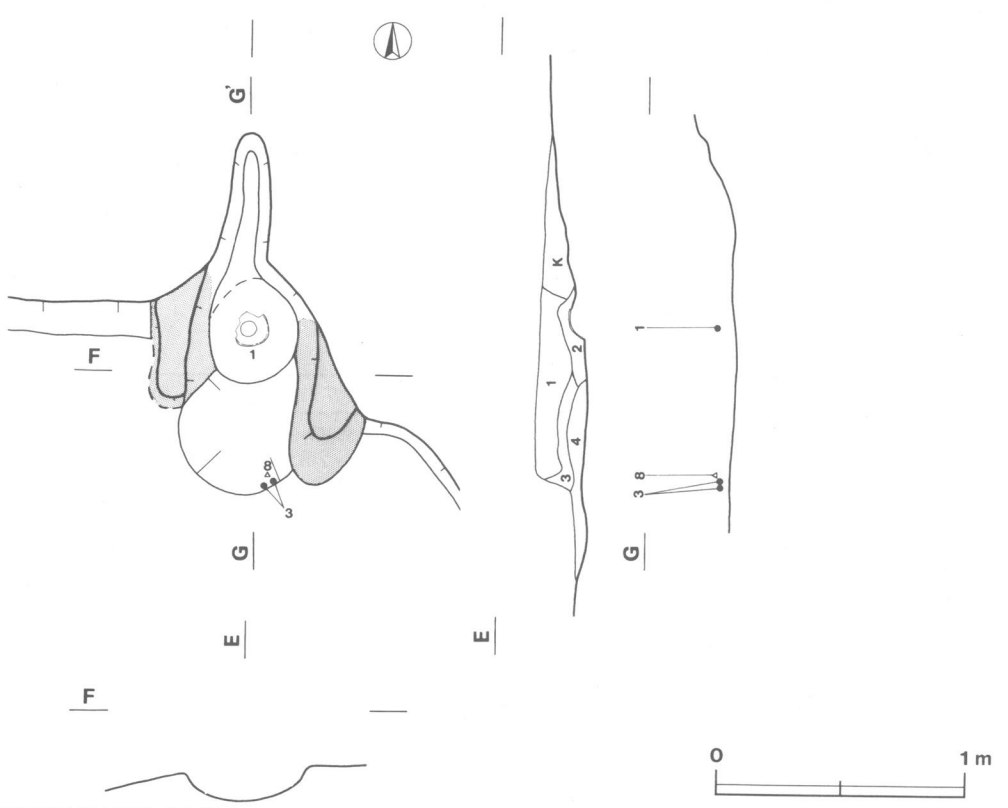
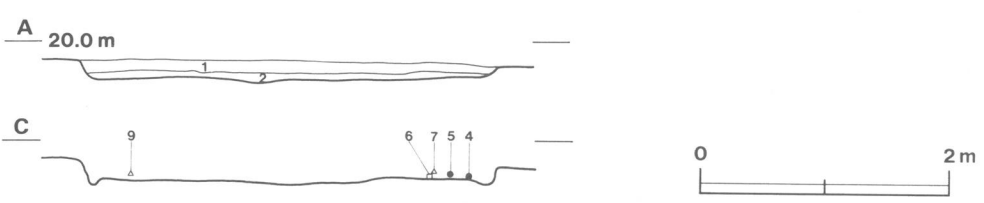
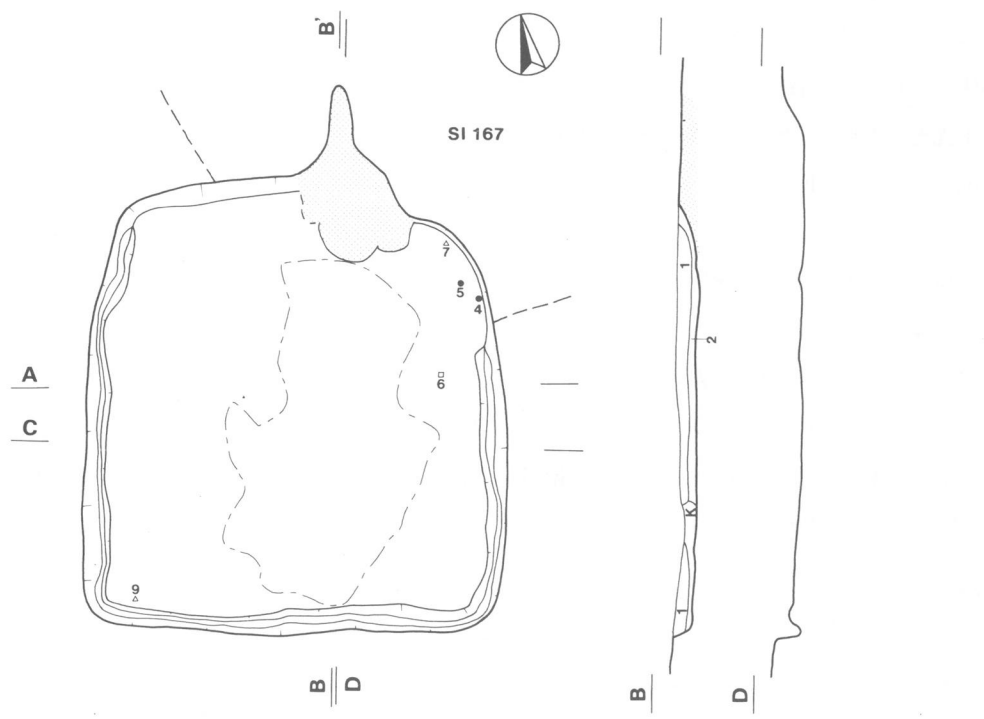
- 1 暗褐色 焼土小ブロック中量
- 2 暗褐色 焼土粒子中量

遺物 土師器片171点，須恵器片28点，置き竈1点，鉄製品3点，鉄滓3点が出土している。第231図1の土師器坏は竈火床部に伏せた状態で出土している。4の須恵器坏片，6の砥石，7の刀子，8の不明鉄製品は，北東コーナー床面及び覆土下層から，3の土師器甕は，竈前面覆土下層から，9の鉄鏝は，南西コーナー覆土下層から，それぞれ出土している。5の須恵器蓋は，混入と思われる。10は体部外面に格子叩きを施し，補修孔とみられる焼成後に穿孔された部分が2か所みられる。1か所は内面から外面まで貫通しているが，もう1か所は穿孔途中で内面が凹んだ状態である。須恵器は胎土に雲母が含まれ新治産のものである。

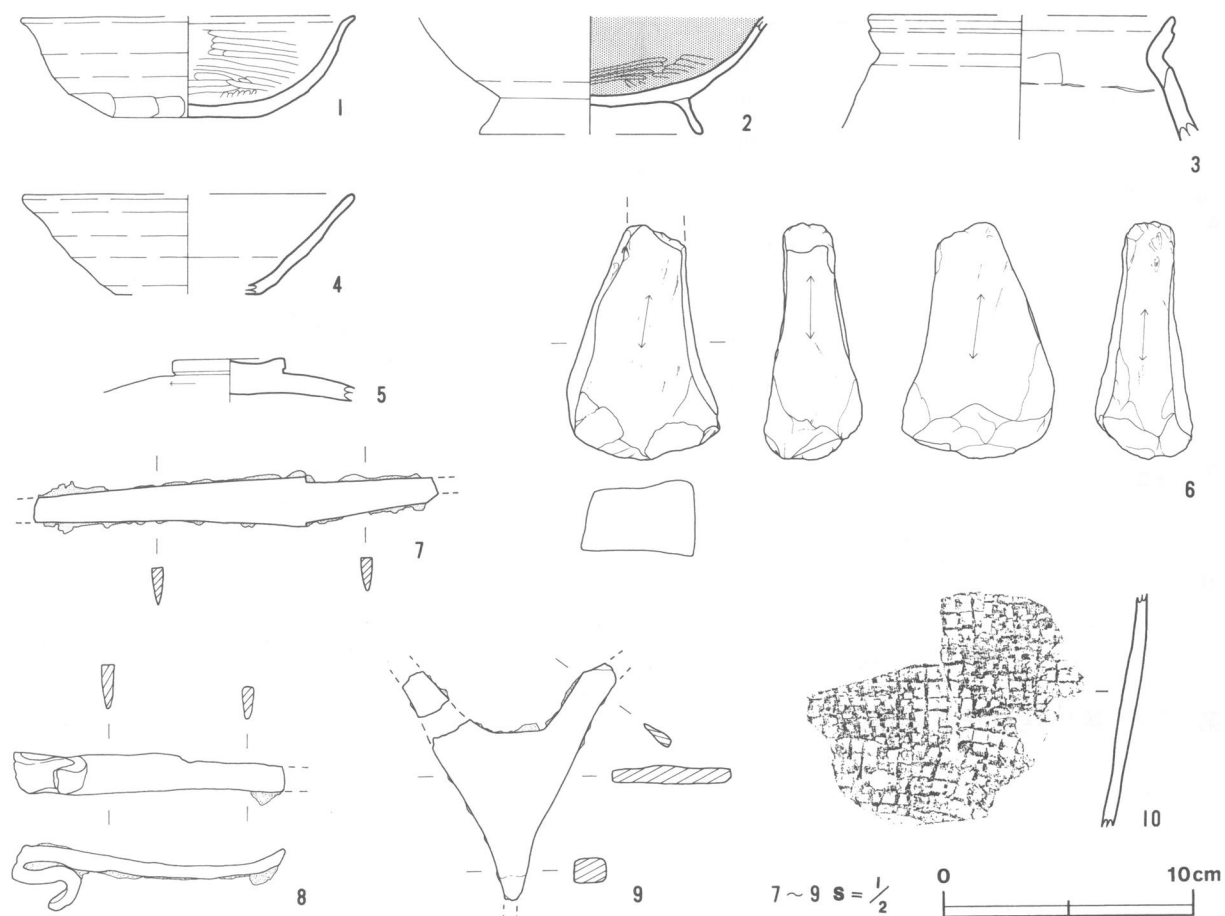
所見 本跡の時期は，出土遺物から平安時代の9世紀後葉と考えられる。

第157号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第231図 1	坏 土師器	A[13.2] B 4.0 C 6.0	平底。体部は丸みをもって立ち上がる。口縁部は外反する。口唇部内面はうちぞぎ状で，稜をもつ。	口縁部内面から体部外面ロクロナデ。体部下端手持ちへら削り。体部内面へら磨き。底部外面一方向へら削り。	砂粒・雲母 橙色 良好 内面煤付着	P150 60% 竈火床面
2	高台付碗 土師器	B(4.7) D[8.8] E 1.4	口縁部欠損。体部は丸みをもって立ち上がる。高台は薄く長くハの字状に開く。	体部外面ロクロナデ。底・体部内面黒色処理・へら磨き。高台貼り付け。	微粒・雲母 外面橙色・内面黒色 普通 外面煤付着	P151 30% 覆土中
3	甕 土師器	A[12.0] B(4.9)	口縁部片。体部は緩やかに立ち上がる。口縁端部は上方につまみ上げられる。口唇部外面直下に沈線がある。	口縁部内・外面ロクロナデ。体部内面へらナデ。	長石 明赤褐色 普通	P152 10% 竈前面覆土下層
4	坏 須恵器	A[13.0] B 4.0 C[5.8]	口縁部から底部にかけての破片。体部は外に大きく開きながら立ち上がり，口縁部に至る。	内・外面ロクロナデ。	長石・雲母 灰白色 不良	P153 10% 北東コーナー床面
5	蓋 須恵器	B(1.8) F 4.4 G 0.6	つまみから天井部。つまみは扁平なボタン状を呈する。器壁は厚い。	天井部外面回転へら削り，内面ロクロナデ。	長石・雲母 灰白色 普通	P154 10% 北東コーナー覆土 下層



第230图 第157号住居跡実測図



第231図 第157号住居跡出土遺物実測図

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第231図6	砥石	(9.5)	6.1	3.9	(212)	北東コーナー床面	Q14 砂岩
7	刀子	(10.6)	1.6	0.3	(16)	北東コーナー覆土下層	M17
8	不明鉄製品	(7.1)	(1.8)	1.8	(12)	竈前面覆土下層	M18
9	鉄鏃	(6.3)	(5.6)	0.3~0.6	(19)	南西コーナー覆土下層	M19

第158号住居跡 (第232図)

位置 調査6区北端部, L15d2区。

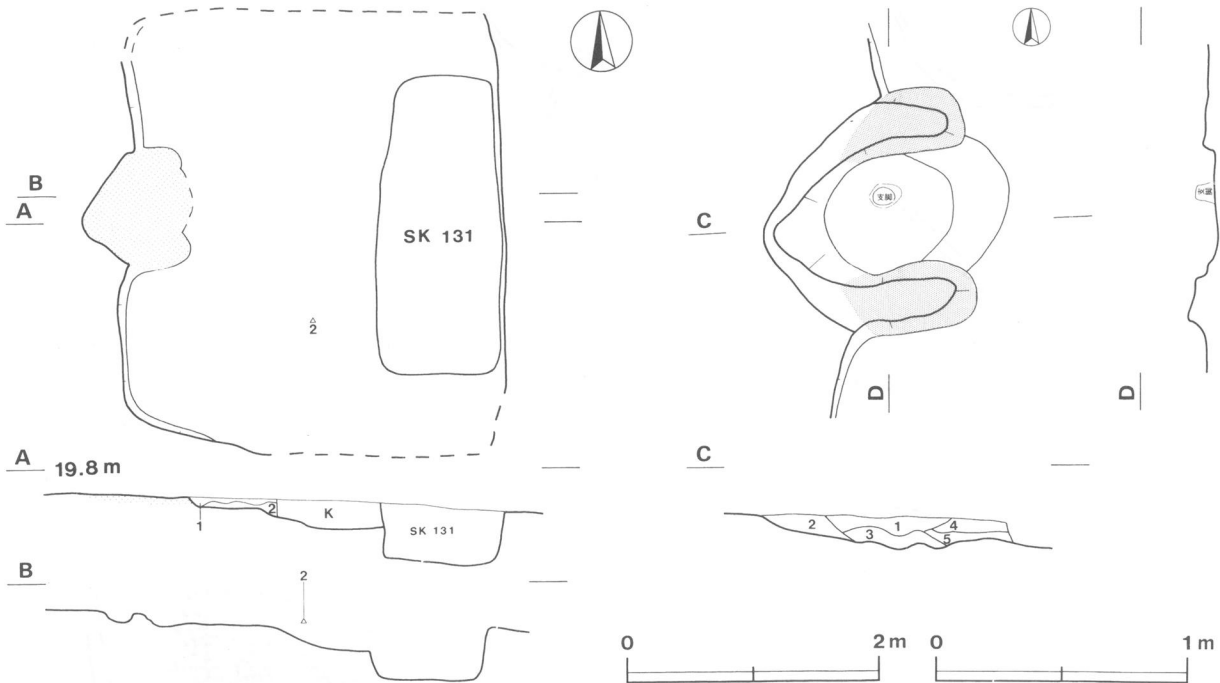
重複関係 第131号土坑に掘り込まれていることから, 本跡が古い。

規模と平面形 住居跡の東半分を第131号土坑と攪乱により壊されているため, 規模は明確ではない。一辺が[3.40]mの方形と推定される。

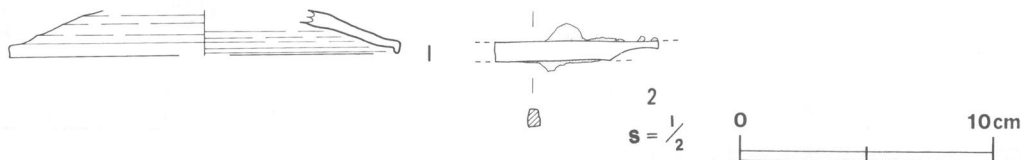
主軸方向 [N-88°-W]

壁 壁高は約8cmで, ほぼ垂直に立ち上がる。

床 遺存状態は悪く, 踏み固められている面は見られない。



第232図 第158号住居跡実測図



第233図 第158号住居跡出土遺物実測図

第158号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第233図 1	蓋 須恵器	A[15.4] B(1.8)	口縁部破片。天井部は低く扁平で、口縁部は短く屈曲する。	天井部外面回転ヘラ削り。口縁部内・外面クロナデ。	砂粒・雲母 灰色 普通	P155 10% 覆土中

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
2	刀子	(4.3)	0.6	0.4	(5)	中央部覆土下層	M20

竈 西壁中央部に付設されている。規模は袖幅96cm、長さ100cm、壁外への掘り込みは38cmで、平面形は三角形である。火床部は長径51cm、短径45cmの楕円形に掘り込まれている。燃焼部奥から煙道部への立ち上がりは緩やかである。火床部には土製支脚が残っていた。

竈土層解説

- 1 暗褐色 焼土中ブロック・焼土粒子中量、炭化粒子少量
- 2 暗褐色 焼土中ブロック・焼土粒子・炭化粒子中量、ローム小ブロック・粘土粒子少量
- 3 赤褐色 焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物中量、ローム小ブロック・粘土ブロック少量
- 4 褐色 粘土粒子多量、焼土粒子・炭化粒子中量、焼土小ブロック少量
- 5 暗褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック中量

覆土 2層からなる。

土層解説

- 1 褐色 焼土粒子少量
- 2 灰褐色 焼土粒子少量

遺物 土師器片114点、須恵器片11点、鉄製品1点が出土している。すべて覆土中からの細片であるので、図示できたのは第233図1の須恵器蓋、2の刀子の2点である。

所見 本跡の時期は、出土遺物から奈良時代の8世紀後葉と考えられる。

第160号住居跡（第96図）

位置 調査6区北端部、L15ds区。

重複関係 第159号住居跡を掘り込んでいることから、本跡が新しい。

規模と平面形 長軸[3.30]m、短軸[3.12]mの方形と推定される。

主軸方向 [N-6°-W]

壁 壁高は約30~40cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。東、南壁は削平され、残存していない。

床 中央部がわずかに高く、踏み固められている。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は袖幅108cm、長さ87cm、壁外への掘り込みは18cmで、平面形は半円形である。袖部は山砂混じりの粘土で構築されている。火床部は長径30cm、短径22cmの楕円形で、4cmほど掘りくぼめられている。燃烧部奥から煙道部へは30度の角度で立ち上がる。

竈土層解説

- 1 極暗褐色 山砂多量、焼土粒子少量
- 2 暗赤褐色 焼土粒子多量
- 3 橙褐色 粘土多量
- 4 極暗褐色 焼土粒子・炭化粒子中量、山砂少量
- 5 暗褐色 山砂・粘土中量、焼土粒子・炭化粒子少量

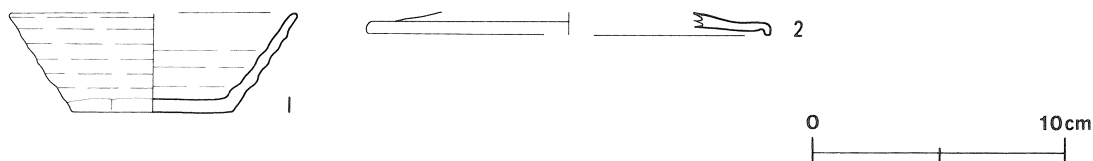
覆土 ロームブロックを含む褐色土の一層である。

土層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量、ローム中ブロック少量、ローム小ブロック微量

遺物 土師器片64点、須恵器片3点出土している。覆土が薄かったためか遺物量は少なく、図示できたのは2点のみである。第234図1の須恵器坏は左袖際床面から、2の須恵器蓋は覆土中から出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から奈良時代の8世紀中葉と考えられる。



第234図 第160号住居跡出土遺物実測図

第160号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第234図 1	坏 須恵器	A[11.2] B 3.9 C 6.4	平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部にいたる。	底部内面から体部外面ロクロナデ。体部下端・底部外面手持ちへら削り。	砂粒・雲母 灰色 良好	P164 50% 左袖際床面
2	蓋 須恵器	A[14.0] B(0.9)	口縁部片。口縁部は短く屈曲する。	内・外面ロクロナデ。	砂粒・雲母 にぶい橙色 二次焼成	P165 5% 覆土中

第161号住居跡（第235図）

位置 調査6区北端部，L15_{e2}区。

重複関係 第131号住居跡を掘り込み，第162号住居跡の上部に構築られていることから，本跡は第131・162号住居跡より新しい。

規模と平面形 長軸[3.30]m，短軸3.12mの方形と推定される。

主軸方向 [N-91°-E]

壁 壁高は約10cmで，外傾して立ち上がる。南東コーナーから南壁は重複のためとらえることができなかった。

床 中央部から北寄りか踏み固められている。第162号住居跡の覆土を床面とする南壁寄りは沈んでいる。

竈 東壁中央部に付設されている。削平により煙道部，火床部は残存していない。袖部の痕跡が構築材の粘土の拡がりで見える。推定規模は袖幅85cm，長さ68cmである。

ピット 3か所(P₁~P₃)。P₁，P₂の柱穴の掘り方は，径60~65cmの円形，深さ18~29cm，断面形は逆台形である。P₃は長径100cm，短径55cmの楕円形，深さ29cm，断面形は逆台形である。いずれも支柱穴と思われるが柱痕は確認できなかった。住居廃棄時に抜き取ったと推定される。

P₁土層解説

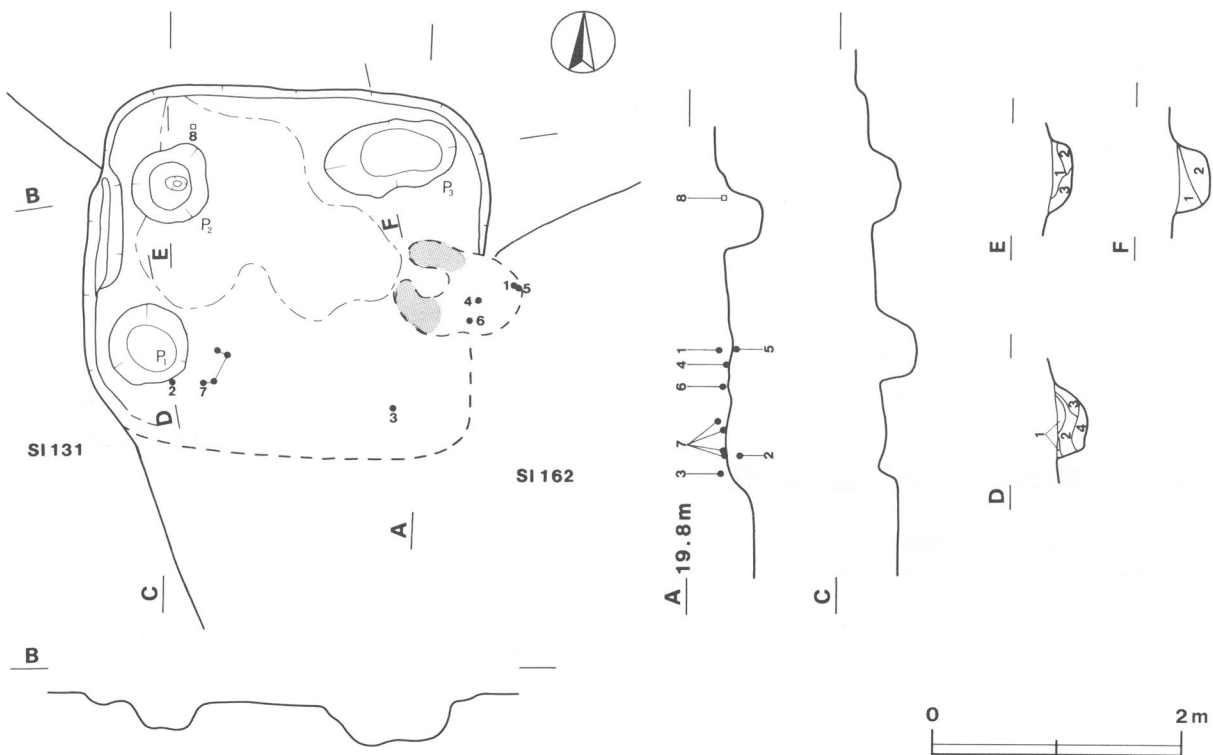
- | | |
|--------------------|-----------------|
| 1 暗褐色 焼土粒子・ローム粒子少量 | 3 暗褐色 ローム粒子少量 |
| 2 黒褐色 ローム粒子・粘土粒子微量 | 4 褐色 ローム小ブロック少量 |

P₂土層解説

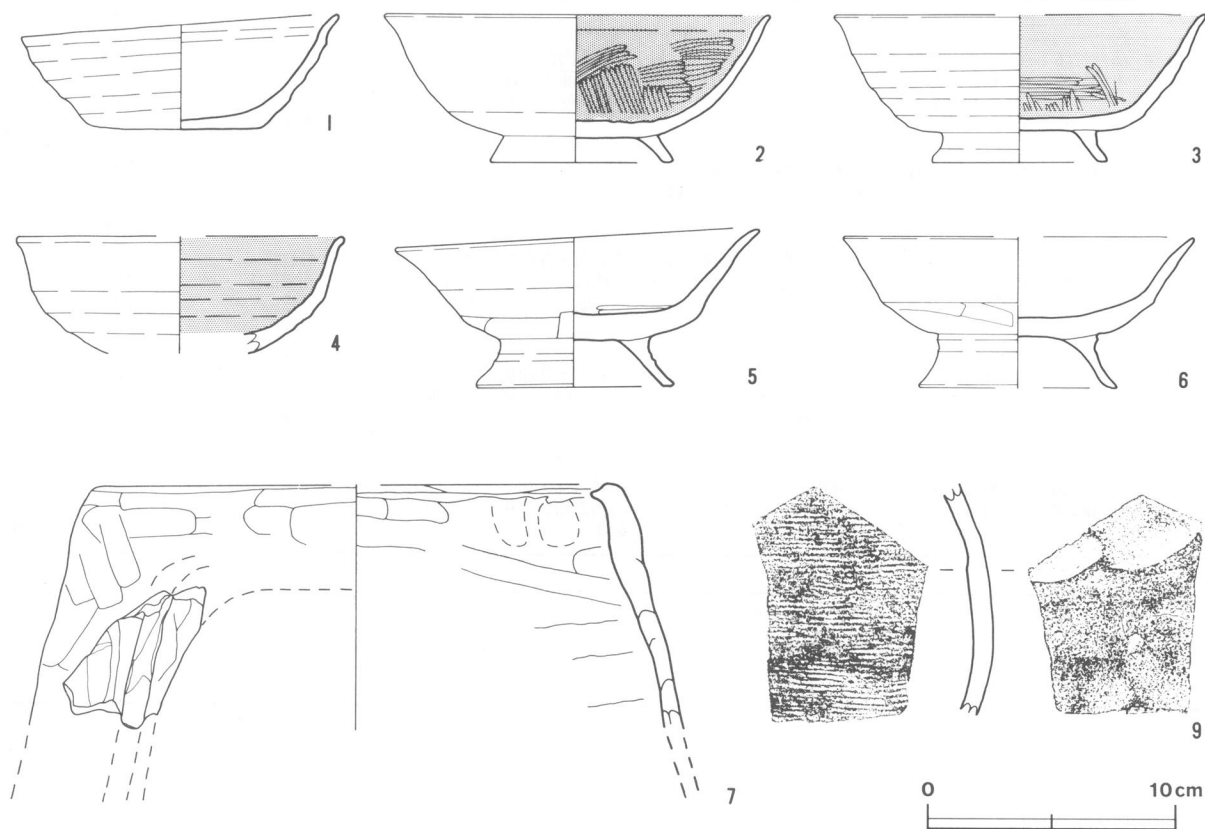
- | | |
|--------------------|------------------------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子中量 | 3 極暗褐色 ローム粒子多量，粘土粒子少量，炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 ローム粒子・粘土粒子中量 | |

P₃土層解説

- | | |
|--------------|-------------------------|
| 1 暗褐色 炭化粒子微量 | 2 暗褐色 ローム小ブロック少量，炭化粒子微量 |
|--------------|-------------------------|



第235図 第161号住居跡実測図



第236図 第161号住居跡出土遺物実測図

覆土 上面の削平が激しかったため、確認できなかった。

遺物 土師器片85点、須恵器片1点が出土している。1の土師器杯、4の土師器碗、5、6の土師器足高高台杯は、削平された竈の痕跡部分床面から出土している。2の土師器高台付杯は、P₁内周辺の床面から出土したものが、それぞれ接合している。3は南東コーナー覆土下層から出土している。2、3は黒色処理、ヘラ磨きが施され、特に2の底部内面には、黒色処理、ヘラ磨き後、線刻がなされている。7は土師器置き竈の破片で、掛け口と底の一部分がP₁周辺覆土下層から出土している。8の雲母片岩は北西コーナー床面から出土したもので、強く火熱を受けた痕跡があり、竈からは離れた位置からの出土であるが竈構築材の可能性がある。9の須恵器甕片は、本跡から出土した唯一の須恵器であるが、混入と考えられる。

所見 本跡から出土した遺物はほとんどが土師器である。黒色処理された土師器碗、足高高台杯、置き竈など平安時代でも新しい時期の様相を示している。本跡の時期は、須恵器生産が衰退し、土師器が主体となる平安時代でも10世紀以降と考えられる。

第161号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第236図 1	土師器 杯	A 12.8 B 4.7 C 6.8	平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。内面の体部と底部との境は不明瞭。	口縁部から体部内・外面ロクロナデ 底部外面ヘラ削り、内面雑なヘラナデ。	砂粒 橙色 普通	P166 90% 竈覆土下層
2	土師器 高台付杯	A 15.4 B 6.0 D 7.4 E 1.1	体部は丸みをもって立ち上がり、口縁部に至る。口縁部内面に弱い稜をもつ。高台は外に開く。	口縁部・体部外面ロクロナデ。体部内面黒色処理・ヘラ磨き。底部外面回転ヘラ削り後、高台貼り付け。内面に線刻あり。	長石・砂粒・雲母 外面にぶい黄橙色 内面黒色 普通	P167 80% P ₁ 周辺

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第236図 3	高台付坏 土 師 器	A[14.9] B 6.0 D 7.0 E 1.3	体部は丸みをもって立ち上がり、口縁部に至る。口縁部内面に弱い稜をもつ。高台は外に開く。	口縁部内面から体部外面ロクロナデ 体部内面黒色処理・ヘラ磨き。底部 外面回転ヘラ削り後、高台貼り付け。	砂粒 外面にぶい褐色 内面黒色 普通	P168 60% 南東コーナー 覆土下層
4	碗 土 師 器	A[13.0] B(4.7)	口縁部から体部にかけての破片。 体部は内彎して立ち上がり、口縁部 は外反する。	外面ロクロナデ。内面黒色処理。	長石 外面にぶい褐色 内面黒色 普通	P169 20% 竈火床面
5	足高高台坏 土 師 器	A 14.6 B 6.3 D 7.8 E 2.0	体部は外に大きく開き、口縁部は強 く外反する。高台は長く、ラッパ状 に外に開き、わずかに反る。	体部内・外面ロクロナデ。体部下端 手持ちヘラ削り。底部内面雑なナデ。 高台貼り付け後、ナデ。	砂粒 明赤褐色 普通	P170 90% 竈火床面
6	足高高台坏 土 師 器	A[14.0] B 6.1 D[8.0] E 2.2	体部は外に大きく開き、口縁部は外 反する。高台は薄手で長く、ラッパ 状に外に反る。体部下端に稜を有す。	体部内・外面横ナデ。体部下端手持 ちヘラ削り。底部内面雑なナデ。	砂粒 褐色 普通	P171 40% 竈火床面
7	置き 竈 土 師 器	A[20.2] B(9.9)	掛け口部、庇破片。体部は内傾し、 掛け口に至り、焚き口部周辺に隆帯 を貼り付けて巡らす。	掛け口部・体部外面ヘラ削り。掛け 口内面指頭押圧。体部内面ヘラナデ。 隆帯貼り付け。	長石・石英・砂粒 暗赤褐色 普通 煤付着	P172 10% P1周辺覆土下層

図版番号	種 別	計 測 値				出 土 地 点	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
8	竈構築材	9.2	8.0	2.0	162	北西コーナー床面	Q15 雲母片岩 実測図なし

第164号住居跡（第237図）

位置 調査6区北部，L15g4区。

重複関係 第165・168号住居跡を掘り込んでいることから，本跡は第165・168号住居跡より新しい。

規模と平面形 長軸4.70m，短軸4.40mの方形である。

主軸方向 N-2°-E

壁 壁高は10～12cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝 東壁北半分を除いた壁下を巡っている。上幅12～25cm，下幅4～11cm，深さ4～11cm，断面形はU字形である。

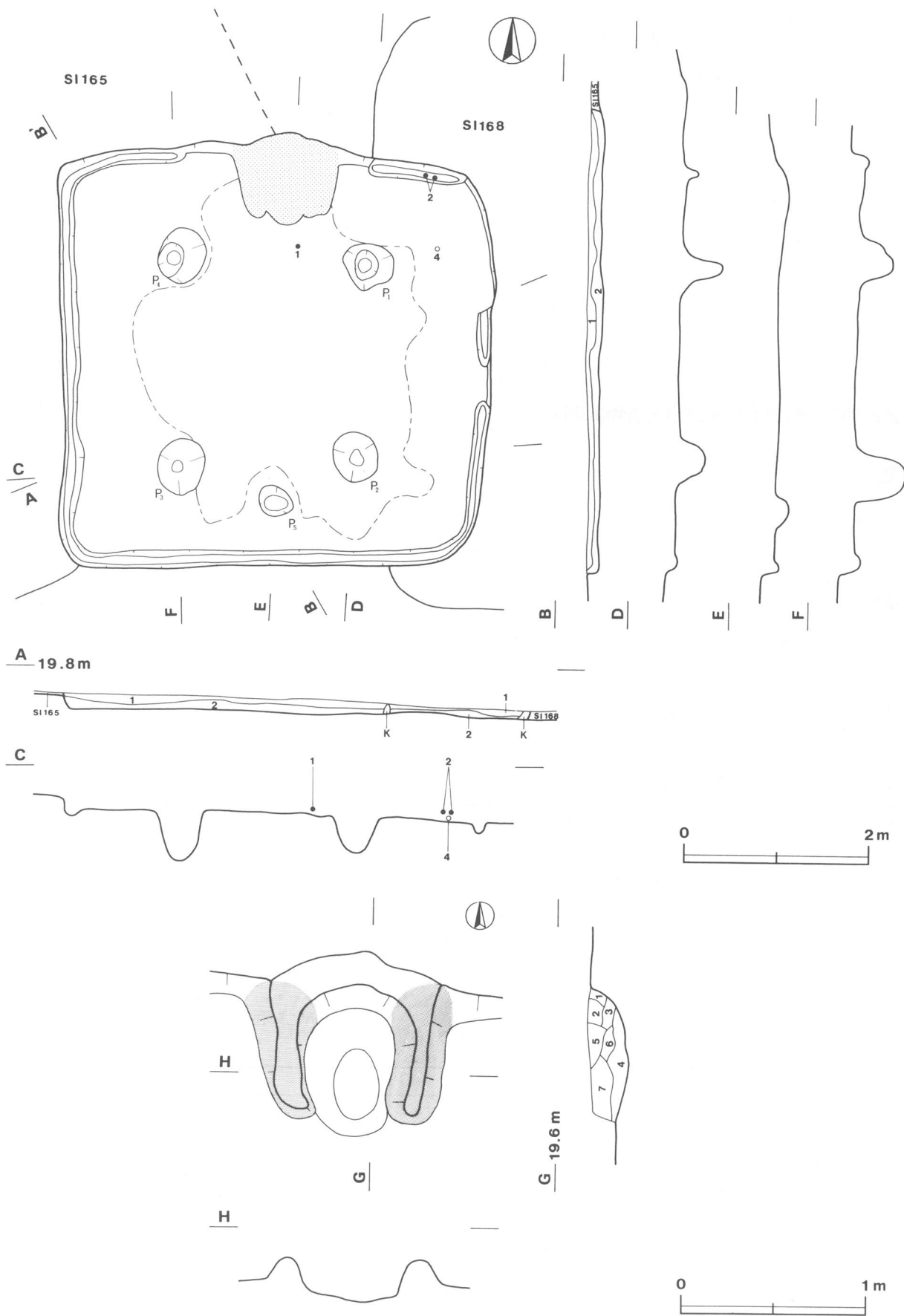
床 全体的に平坦で，出入り口ピットから竈にかけての中央部が踏み固められている。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は袖幅110cm，長さ110cm，壁外への掘り込みは15cmで，平面形は逆U字形である。袖部は山砂混じりの粘土を北壁に貼り付けて構築されている。火床部は長径40cm，短径25cmの楕円形で，深さ6cmほど掘りくぼめている。燃焼部奥から煙道部へは35度の角度で立ち上がる。

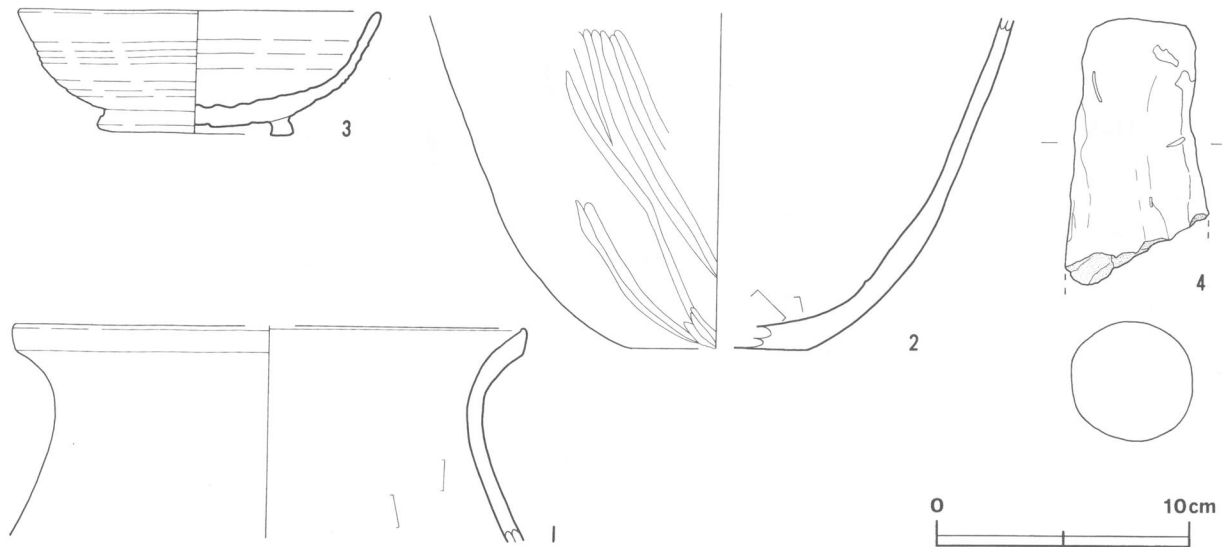
竈土層解説

- 1 褐色 ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子・山砂少量，粘土微量
- 3 暗赤褐色 焼土粒子・ローム粒子少量，炭化物・粘土微量
- 4 暗赤褐色 焼土粒子中量，炭化物・ローム粒子少量，焼土小ブロック・ローム小ブロック・粘土微量
- 5 黒褐色 焼土粒子少量，炭化物・ローム粒子微量
- 6 赤褐色 焼土粒子中量，ローム粒子少量，焼土小ブロック・炭化粒子・粘土微量
- 7 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量，ローム粒子微量

ピット 5か所(P₁～P₅)。P₁～P₄は径12～35cm，深さ39～54cmで，支柱穴と考えられる。これらの支柱穴では，径55～60cmの掘り方が確認できた。P₅は南壁中央の壁際から43cmほど内側に位置し，竈と同一線上に並んでいる。径35cmの円形，深さ16cmで出入り口施設に伴うピットと考えられる。



第237图 第164号住居跡実測图



第238図 第164号住居跡出土遺物実測図

覆土 2層からなり、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 極暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物 土師器片333点、須恵器片2点、土製品1点が出土している。ほとんどの遺物は下層の第2層から出土している。第238図1の土師器甕は竈前面部から、2の土師器甕、4の土製支脚は北東コーナーから、3の須恵器高台付坏は、出入りロピット付近から出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から奈良時代の8世紀中葉と考えられる。

第164号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第238図 1	甕 土師器	A [20.2] B (8.4)	体部から口縁部にかけての破片。体部はなだらかに立ち上がる。口縁部は外反し、端部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ナデ、内面ヘラナデ。	砂粒・雲母 橙色 普通	P182 5% 竈前面覆土下層
2	甕 土師器	B (13.2) C [7.0]	底部から体部にかけての破片。平底。体部はなだらかに立ち上がる。	体部外面ヘラ磨き、内面ヘラナデ。底部内面にはヘラ当て痕を残す。	砂粒・雲母 にぶい褐色 普通 煤付着	P183 10% 北東コーナー 覆土下層
3	高台付坏 須恵器	A 14.2 B 5.0 D 7.6 E 0.8	丸底気味の底部。底部と体部の境は緩やかな稜をなして立ち上がる。高台は太く短く接地面は平坦である。	底部内面から体部外面ロクロナデ。外面のナデは工具痕が明瞭。底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け。	長石・砂粒 灰色 良好 二次焼成	P184 70% 出入りロピット 付近覆土下層

図版番号	種別	計測値			出土地点	備考
		長さ(cm)	径(cm)	重量(g)		
4	支脚	(10.6)	4.9~5.5	(233)	北東コーナー覆土下層	DP7

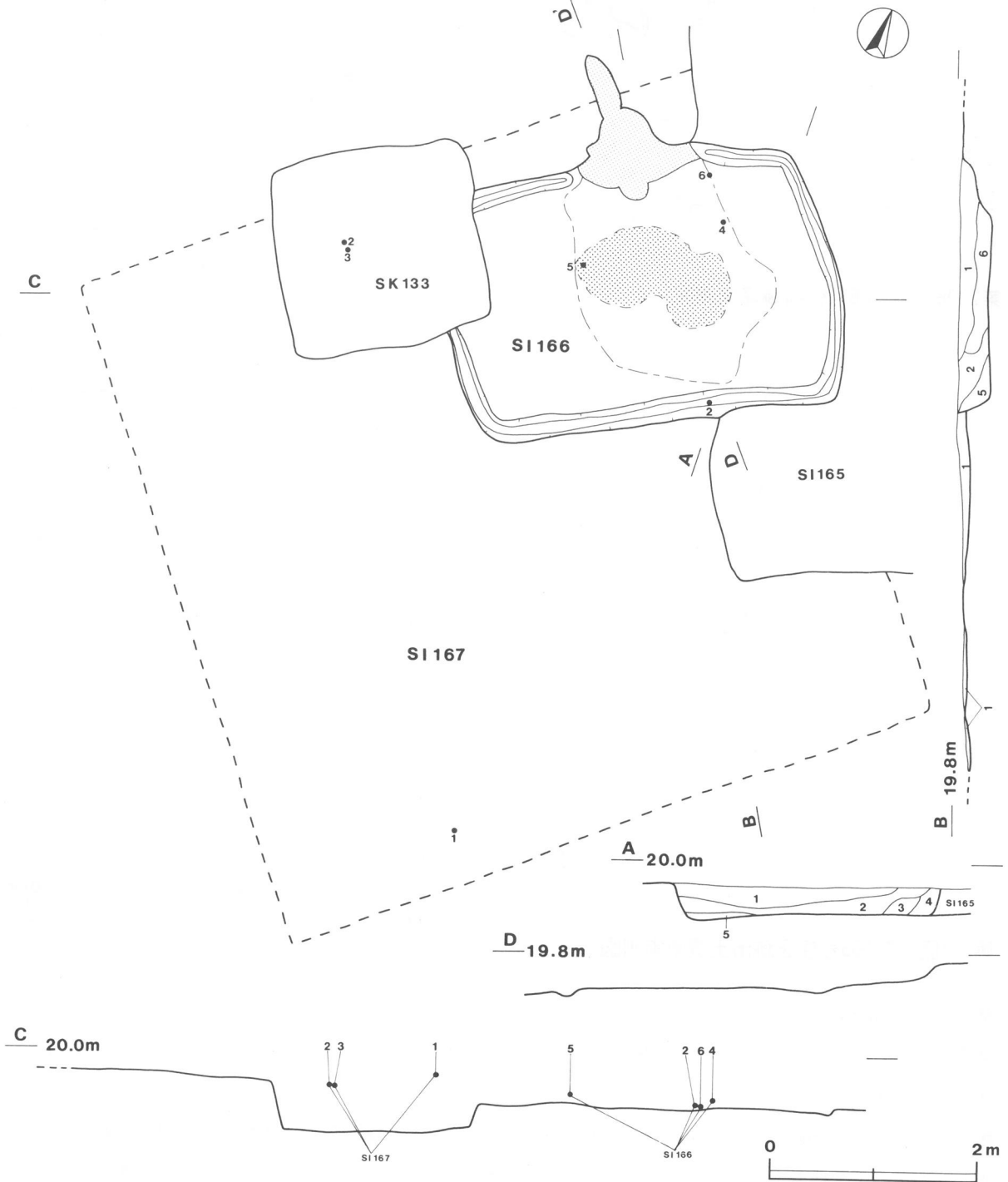
第166号住居跡 (第239・240図)

位置 調査6区北部, L15h2区。

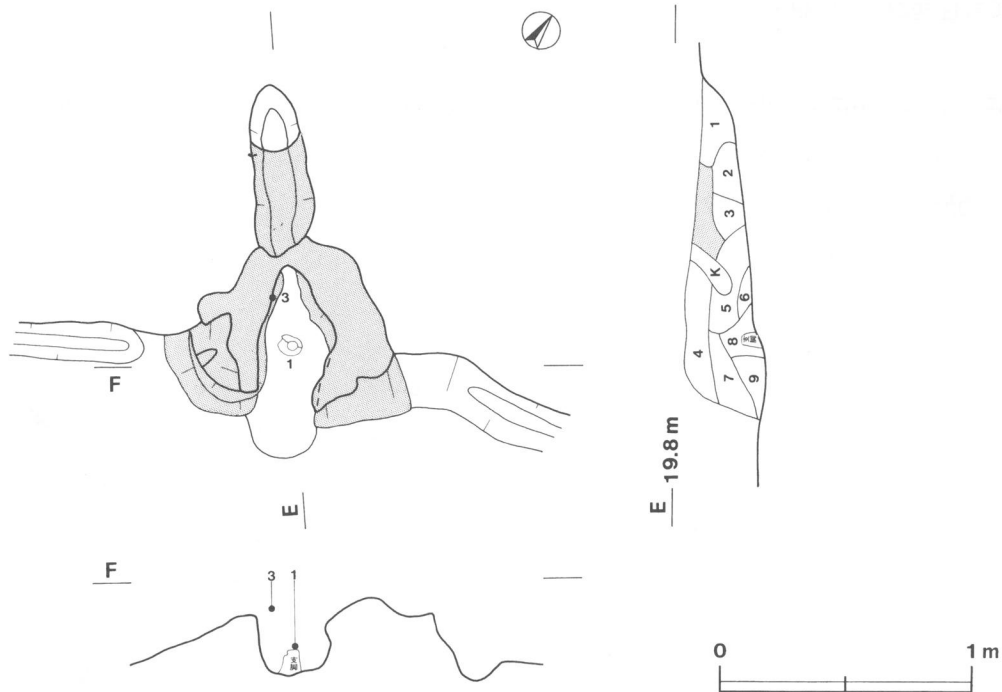
重複関係 第165・167号住居跡を掘り込み, 第133号土坑に掘り込まれていることから, 本跡は第165・167号住居跡より新しく, 第133号土坑より古い。

規模と平面形 長軸3.78m, 短軸2.50mの長方形である。

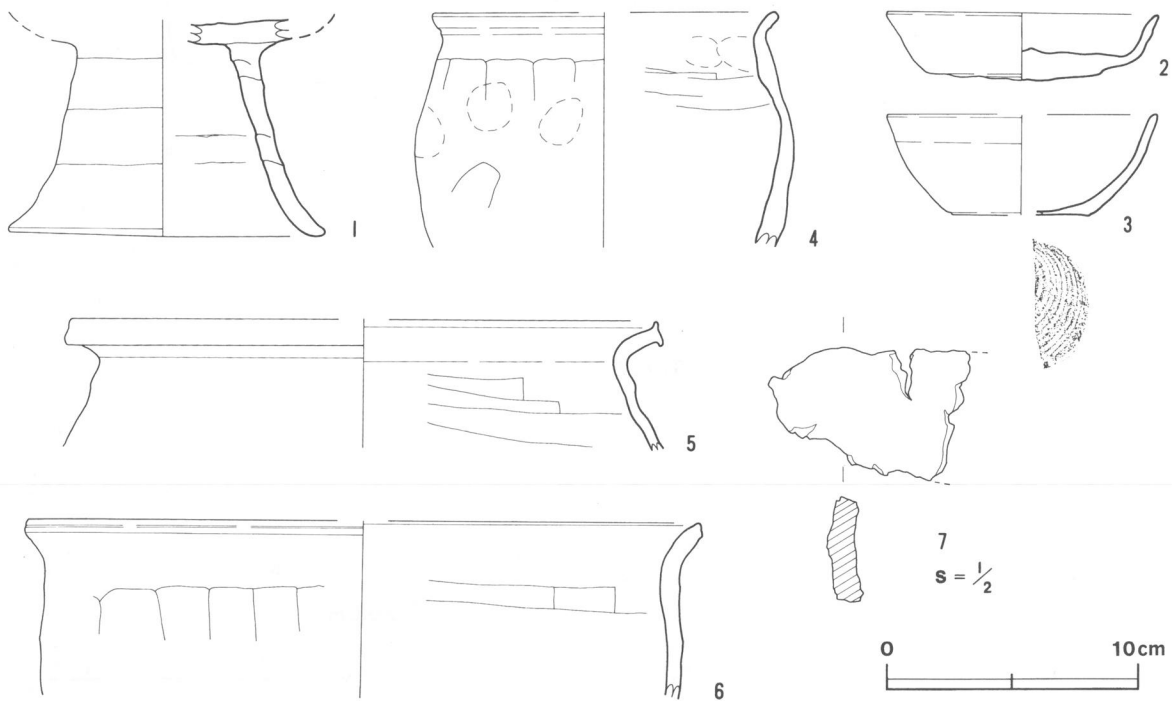
主軸方向 N-33°-W



第239図 第166・167号住居跡実測図



第240図 第166号住居跡竈実測図



第241図 第166号住居跡出土遺物実測図

壁 壁高は約29cmで外傾して立ち上がる。

壁溝 第133号土坑に壊されている南西壁北半分を除いた壁下を巡っている。上幅11~26cm, 下幅3~12cm, 深さ5cm, 断面形は逆台形である。

床 出入り口部から竈にかけての中央部が踏み固められている。中心部には約10cmの厚さの焼土塊がみられる。

竈 北西壁のやや西コーナー寄りに位置する。規模は袖幅92cm, 長さ148cmである。煙道部は地山をトンネル状に70cmほど掘り込んで構築し, 遺存状態は良好である。天井から袖部は灰白色の粘土で構築され, 天井の一

部が遺存しており、天井の補強材として土師器坏、甕が用いられている。また、支脚としては足高高台の高台部が転用されている。

竈土層解説

- 1 黒褐色 炭化粒子・焼土粒子中量, 焼土小ブロック少量
- 2 極暗褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子多量
- 3 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子多量
- 4 暗褐色 焼土粒子・粘土ブロック微量
- 5 灰褐色 焼土粒子・炭化粒子少量, 焼土小ブロック・炭化物・粘土ブロック微量
- 6 暗褐色 炭化粒子・粘土ブロック少量, 炭化物微量
- 7 暗褐色 焼土粒子・粘土ブロック少量
- 8 暗褐色 粘土ブロック中量, 焼土粒子少量
- 9 灰褐色 焼土粒子中量, 炭化粒子・粘土ブロック少量, 焼土小ブロック微量

覆土 6層からなる。最下層には焼土塊が堆積し、中層, 上層には炭化粒子, 焼土粒子, ロームブロックが含まれており人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量, ローム大・中ブロック微量
- 2 極暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量, ローム中ブロック微量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 5 極暗褐色 ローム粒子多量, ローム大・中ブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 6 黒褐色 焼土大ブロック多量, 炭化粒子中量

遺物 土師器片288点, 須恵器片35点, 鉄製品1点が出土している。第241図1の土師器足高高台部は竈覆土中層から出土し, 支脚として使用されていたものである。3の土師器碗は残存している竈天井部から出土しており, 天井補強材と思われる。2の土師器小皿は完形品で口縁部には煤が付着している。南東壁際から斜位の状態出土している。4の土師器小形甕は北東寄り覆土下層から, 6の土師器甕は北コーナー床面から, 5の土師器甕は中央部の焼土塊内から出土している。7の不明鉄製品は覆土中からのものである。

所見 本跡は, 長い煙道部をもち, 東西に長い長方形の住居である。当遺跡では, このタイプの住居跡は他には見られない。出土遺物にも特異性がみられ, 足高高台も他のものと比べると非常に長い。時期は, 須恵器生産が終焉を迎える頃で, 足高高台や皿が出現する時期で, 平安時代の10世紀以降と考えられる。本跡の床面には焼土塊が, 覆土下層には焼土ブロックが含まれており, 焼失住居である。

第166号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第241図 1	足高高台 土師器	D 13.5 E 8.6	高台部のみ。高台は長くラップ状に開き, 裾部でわずかに外反する。端部は丸くおさまる。	内・外面横ナデ。	砂粒 橙色 普通	P189 20% 支脚転用 竈火床面
2	小皿 土師器	A 10.8 B 2.7 C 8.0	平底。体部は外方に開いて立ち上がり, 口縁部に至る。底部内面の凹凸が激しい。	底部内面から体部外面ロクロナデ。底部外面回転ヘラ切り後, 無調整。	長石・砂粒 橙色 良好 口縁部煤付着	P190 100% 南東壁際
3	碗 土師器	A[10.7] B 4.0 C[5.3]	平底。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部に至る。器壁は薄い。	底部内面から体部外面ロクロナデ。底部外面回転系切り。	長石・砂粒 橙色 良好	P191 20% 竈天井部
4	小形甕 土師器	A[13.6] B(9.8)	体部上位から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面縦方向のヘラ削り, 一部指頭押圧。体部内面ヘラナデ。	長石・砂粒 橙色 普通	P192 10% 北東寄り覆土下層
5	甕 土師器	A[23.2] B(5.1)	口縁部片。口縁部は体部に対しほぼ直角に外反し, 端部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面ロクロナデ。体部内面ヘラナデ。	砂粒・雲母 にぶい黄褐色 普通 外面煤付着	P193 10% 焼土塊内
6	甕 土師器	A[26.6] B(7.0)	体部上位から口縁部の破片。体部は緩やかに立ち上がり, 口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面縦方向のヘラ削り, 内面ナデ。	砂粒・雲母 にぶい黄褐色 普通	P194 10% 北東コーナー床面

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第241図7	不明鉄製品	(5.3)	3.5	0.8	(25)	覆土中	M22

第169号住居跡 (第242図)

位置 調査6区北部, L15h6区。

重複関係 第168号住居跡を掘り込んでおり, 本跡が新しい。

規模と平面形 長軸5.30m, 短軸4.83mのほぼ方形である。

主軸方向 N-2°-E

壁 壁高は8~12cmで外傾して立ち上がる。

壁溝 上幅11~28cm, 下幅4~9cm, 深さ4~7cm, 断面形は逆台形で, 全周している。

床 出入り口部から支柱穴の内側の中央部が踏み固められて, わずかに高い。

竈 北壁中央部に2基確認し, 西側の竈2が古く, 竈1へ作り替えをしている。竈1の規模は袖幅100cm, 長さ62cmで, 壁外への掘り込みはほとんどない。袖部は山砂混じりの粘土で構築されている。火床部は長径21cm, 短径15cmの楕円形で, 約5cmほど掘りくぼめられている。竈2の規模は, 袖幅102cm, 長さ92cmと推定される。両袖は壊されており遺存状況は悪く, 40cmの円形の火床部が残っているのみである。

竈1土層解説

- 1 にぶい褐色 焼土粒子・ローム粒子中量, 炭化粒子少量
- 2 赤褐色 焼土粒子多量, 焼土小ブロック中量, ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 3 明赤褐色 焼土粒子中量, 焼土小ブロック少量, 焼土中ブロック微量
- 4 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量

竈2土層解説

- 1 黄褐色 山砂・粘土ブロック中量, 焼土小ブロック少量
- 2 灰褐色 焼土中・小ブロック・焼土粒子・ローム中ブロック・ローム粒子・山砂・粘土粒子少量
- 3 明赤褐色 焼土大・小ブロック・炭化粒子・炭化物・ローム中ブロック少量, 炭化粒子微量
- 4 褐色 炭化粒子中量, 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・山砂少量

ピット 5か所(P₁~P₅)。P₁~P₄は, 径25~34cmの円形, 深さ25~46cmで, 支柱穴と考えられる。P₅は 径45cmの円形, 深さ44cmで, 出入り口施設に伴うピットと考えられる。

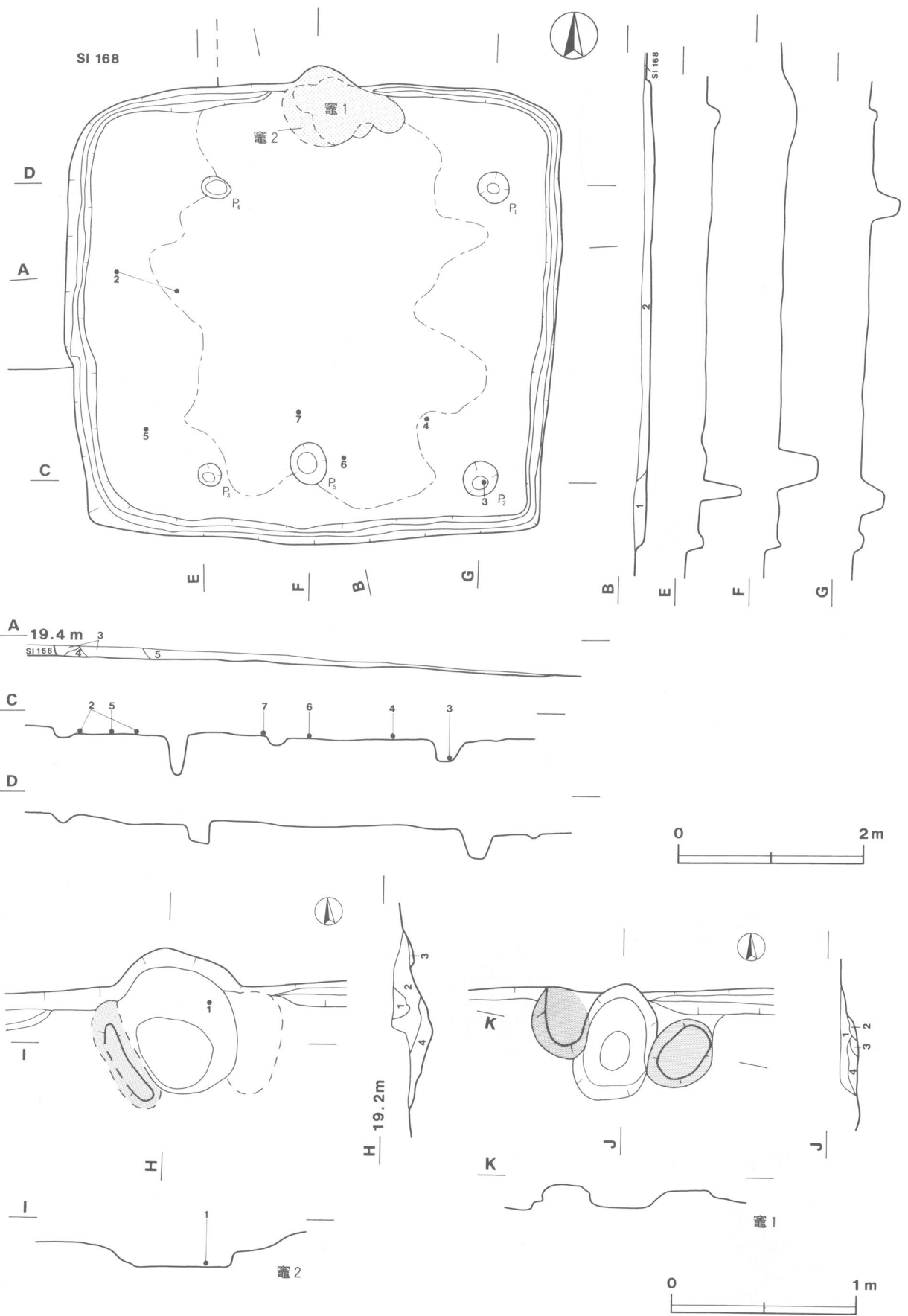
覆土 5層からなり, 人為堆積である。

土層解説

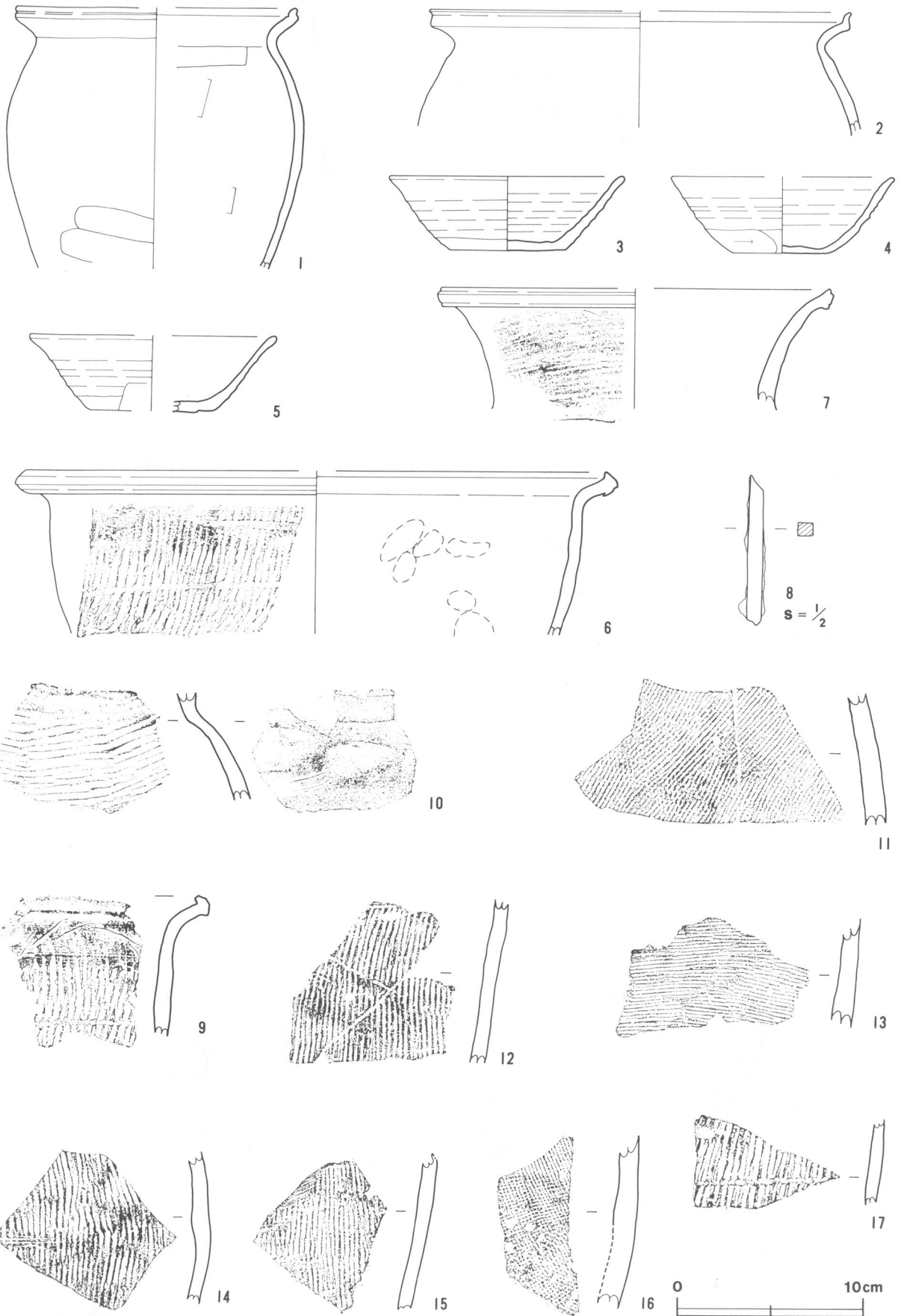
- 1 暗褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量, 焼土粒子・ローム小ブロック微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子微量
- 5 暗褐色 炭化粒子・ローム粒子少量, 焼土粒子・ローム小ブロック微量

遺物 土師器片337点, 須恵器片119点, 鉄製品1点, 石5点が出土している。ほとんどの遺物は床面から出土している。第243図1の土師器甕は竈火床面奥から, 2の土師器甕は西部から, 4の須恵器坏は南東部から, 5の須恵器坏, 13, 15の須恵器甕片は南西部から, 6, 7の須恵器甕は南部から, 9~11, 16の須恵器甕片は中央部からそれぞれ出土している。3の須恵器坏はP₂の底面に正位で, 石を2個のせたような状態で出土している。

所見 本跡の時期は出土遺物から, 平安時代の9世紀中葉と考えられる。



第242図 第169号住居跡実測図



第243图 第169号住居跡出土遺物実測図

第169号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第243図 1	甕 土師器	A[15.0] B(14.1)	体部から口縁部の破片。体部は緩やかに内彎して立ち上がる。口縁部はくの字状に折れ、端部は上方につまみ上げられ、口唇部に沈線が巡る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後、ナデ。体部内面ヘラナデ。	長石・砂粒・雲母 明赤褐色 普通	P200 10% 竈火床面
2	甕 土師器	A[22.6] B(6.3)	体部から口縁部の破片。体部は緩やかに立ち上がる。口縁部はくの字状に折れ、端部は短くつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。	長石・砂粒・雲母 褐色 普通	P201 10% 西部覆土中
3	坏 須恵器	A 10.6 B 4.0 C 5.2	平底。体部は外に開きながら立ち上がり、口縁部は外反する。器壁は厚い。	底部内面から体部外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部外面回転ヘラ削り後、外周手持ちヘラ削り。	長石・砂粒・雲母 褐色 良好	P202 80% P2底面
4	坏 須恵器	A[11.3] B 4.1 C 5.2	平底。体部は外に開きながら立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。器壁は薄い。	底部内面から体部外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部外面一方向手持ちヘラ削り。	長石・砂粒・雲母 灰白色 普通	P203 50% 南東部覆土下層
5	坏 須恵器	A[13.2] B 4.1 C[6.6]	平底。体部は開きながら立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	底部内面から体部外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。	長石・砂粒・雲母 にぶい黄色 不良	P204 20% 南西部覆土中
6	甕 須恵器	A[30.2] B(8.8)	体部上位から口縁部の破片。体部は緩やかに外方に開きながら立ち上がる。口縁部は体部に対しほぼ直角に外反し、端部はつまみ上げられている。口縁部直下に沈線が巡る。	口縁部内・外面ロクロナデ。体部外面縦の平行叩き。内面指頭押圧。	長石・砂粒・雲母 明黄褐色 普通	P205 10% 南部覆土中
7	甕 須恵器	A[21.0] B(6.5)	口縁部片。口縁部は強く外反する。端部に凸帯が巡る。	口縁部内面・端部外面ロクロナデ。口縁部外面横の平行叩き。	長石・砂粒・雲母 灰黄褐色 普通	P206 10% 南部覆土中

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
8	不明鉄製品	(5.4)	0.6	0.4	(6.65)	覆土中	M23

第170号住居跡（第104図）

位置 調査6区北部、L15g5区。

重複関係 第168号住居跡の上面に構築されており、本跡が新しい。

規模と平面形 長軸[3.56]m、短軸[3.21]mのほぼ方形と推定される。

主軸方向 [N-0°]

壁 壁高は約6cmで外傾して立ち上がる。上部の削平のため残存しているのは北西コーナーのみである。

壁溝 上幅約22cm、下幅約10cm、深さ4cmで、残存部は北西コーナーの壁下のみである。

床 中央部から北寄りの竈前方部が踏み固められて、わずかに高い。

竈 北壁中央部に付設されている。削平されており遺存状況は大変悪く、火床部、袖部、煙道部、天井部共に壊されている。

覆土 確認できたのは1層のみである。

土層解説

1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量

遺物 上面の削平が激しかったため遺物の残りが悪く、土師器片21点のみである。器種は土師器坏、甕であるが図示できるものはない。

所見 本跡は、遺物が細片なため時期を決定するのは困難である。重複関係から古墳時代前期に比定できる第168号住居跡より新しいこと、竈が付設されていることや出土遺物などから、平安時代と考えられる。

第171号住居跡（第244図）

位置 調査6区北東部，M15a8区。

規模と平面形 長軸[4.43]m，短軸[3.76]mの長方形と推定される。

主軸方向 N-4°-E

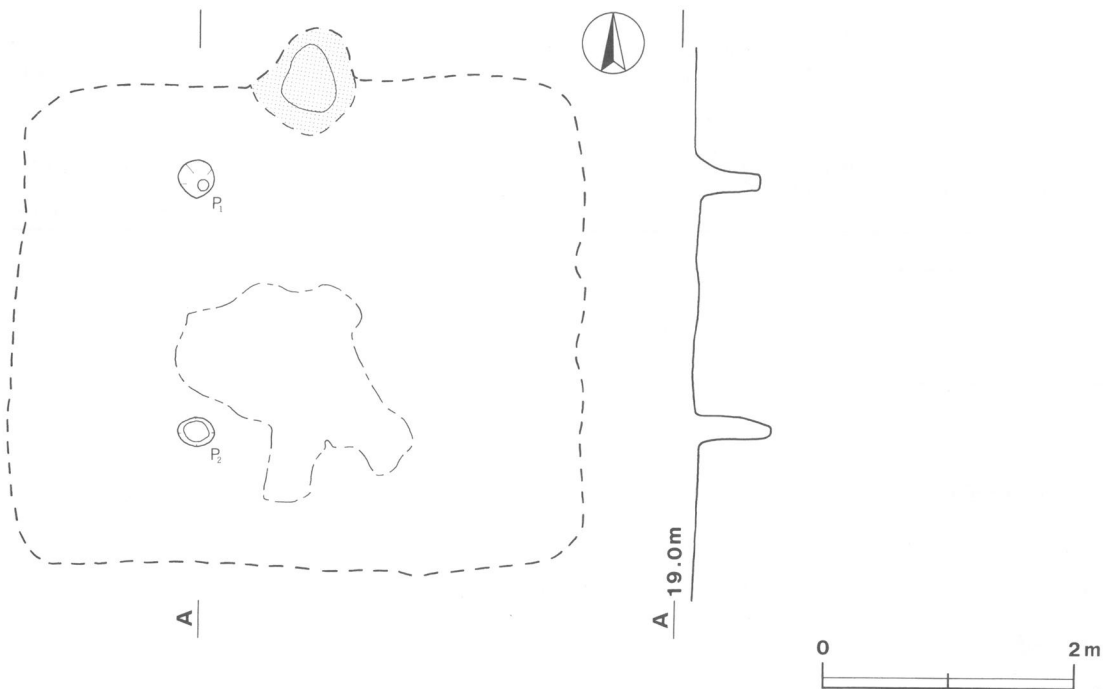
床 中央部から南寄りがわずかに高く，踏み固められている。

ピット 2か所(P₁，P₂)。P₁は，径30cmの円形，深さ50cm，P₂は，長径30cm，短径24cmの楕円形，深さ60cmで主柱穴と考えられる。

竈 北壁中央部に付設されている。大部分削平されており，火床部の範囲が確認できただけである。

遺物 上面が削平されているため，土師器片5点が出土したのみである。器種は土師器坏，甕であるが，図示できるものはない。

所見 本跡は，遺物が細片なため時期を決定するのは困難であるが，竈が付設されていることや出土遺物片などから，平安時代と考えられる。



第244図 第171号住居跡実測図

第172号住居跡（第245図）

位置 調査6区北東部，M15a9区。

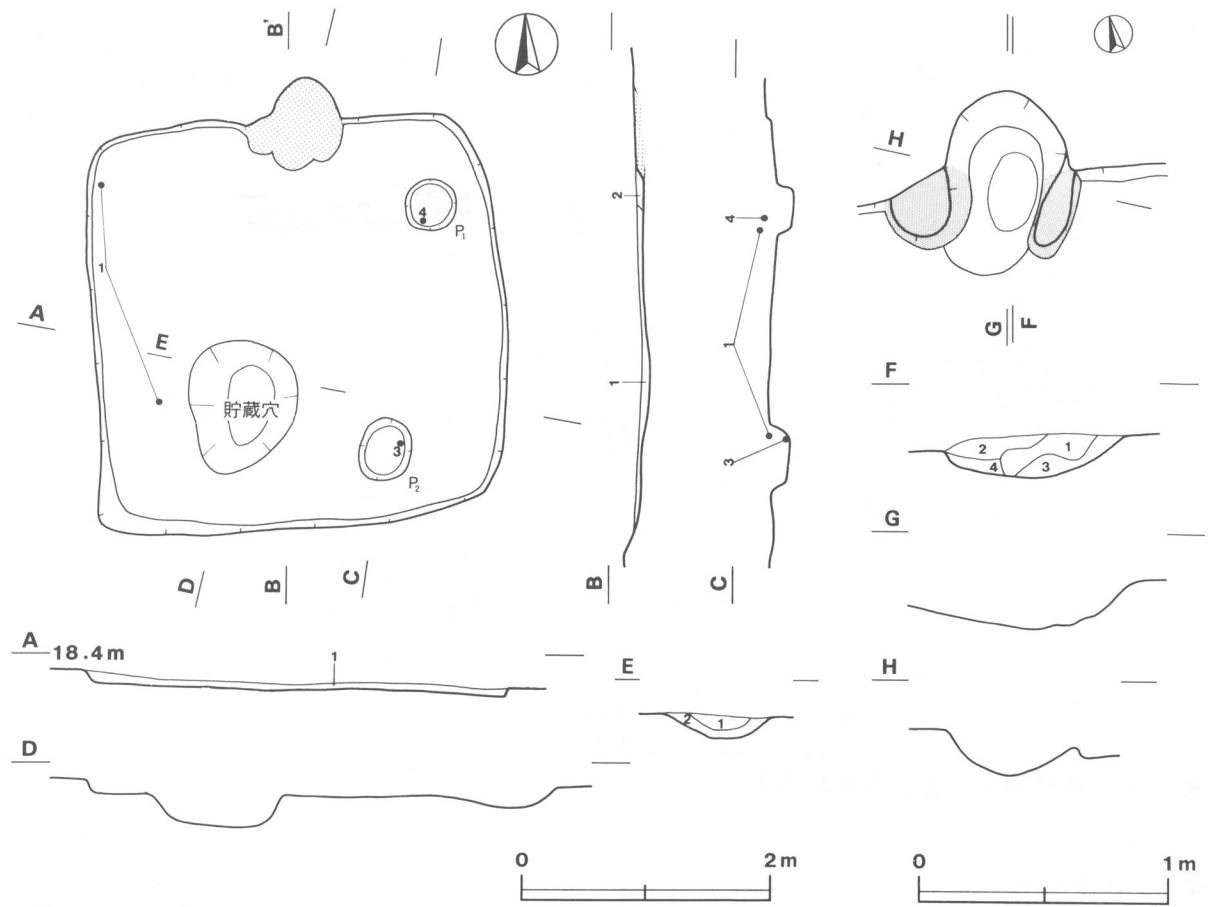
規模と平面形 長軸3.30m，短軸3.24mの方形である。

主軸方向 N-2°-E

壁 壁高は4～20cmで，外傾して立ち上がる。

床 全体的に平坦であり，粘土質の土まじりで，ほぼ全体にわたって踏み固められている。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は長さ76cm，袖幅78cmで，天井部は崩落し，残存しない。壁外への掘り込みは30cmである。袖部は山砂混じりの粘土を貼り付けて構築されている。火床面は床面を22cm掘りくぼめており，火熱を受けて赤変している。煙道は外傾して緩やかに立ち上がる。



第245図 第172号住居跡実測図

竈土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土粒子中量, 焼土中ブロック・炭化粒子少量
- 2 極暗褐色 焼土粒子・焼土小ブロック・炭化物少量, 粘土粒子微量
- 3 極暗褐色 粘土中ブロック中量, 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 4 黒褐色 焼土粒子・焼土小ブロック・炭化粒子・粘土小ブロック少量

ピット 2か所(P₁, P₂)。P₁は径42cmの円形, 深さ18cmで支柱穴と考えられる。P₂は長径52cm, 短径41cmの楕円形, 深さ16cmで, 出入り口施設に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴 南西コーナーに位置する。長径110cm, 短径88cmの楕円形, 深さ25cmで, 断面形は逆台形である。

貯蔵穴土層解説

- 1 極暗褐色 焼土小ブロック・焼土粒子少量, 粘土粒子微量
- 2 暗褐色 粘土粒子多量, 焼土小ブロック・焼土粒子微量

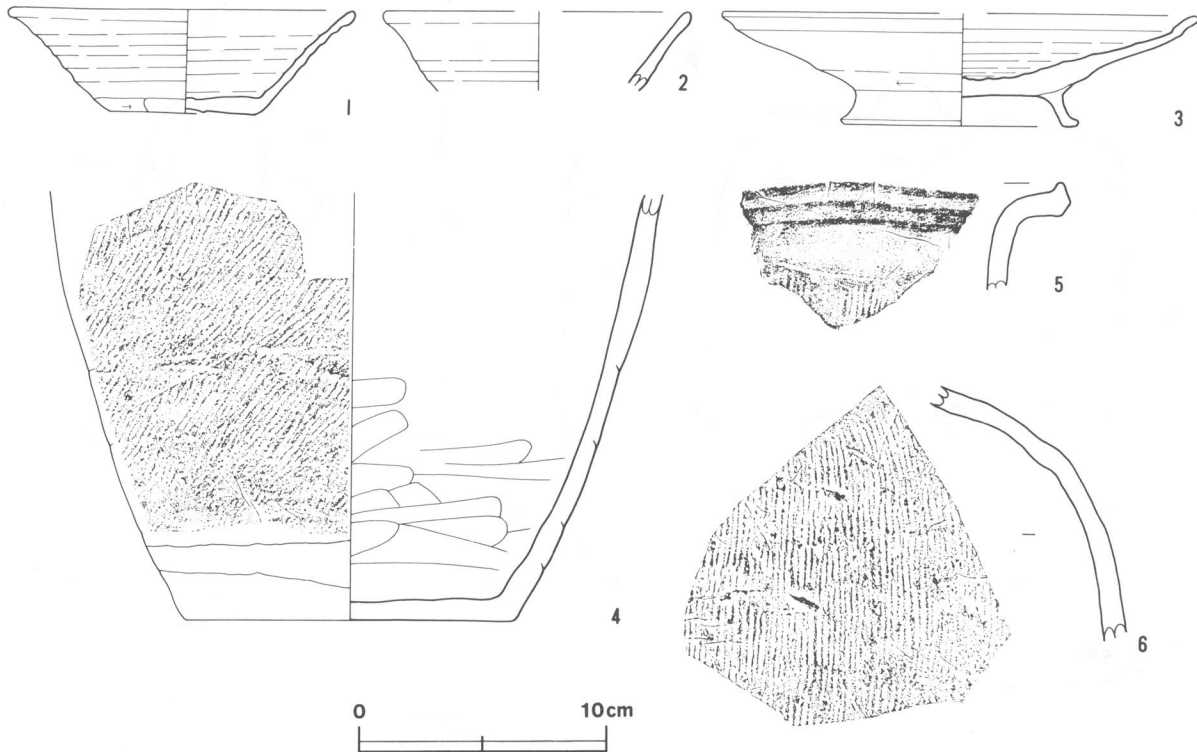
覆土 2層からなり, 人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子中量, 砂粒子少量
- 2 褐色 焼土中ブロック・焼土粒子・炭化粒子中量

遺物 土師器片56点, 須恵器片34点, 鉄滓2点が出土している。第246図1の須恵器杯は北西コーナーと貯蔵穴脇の覆土下層, 2の須恵器杯は覆土中から, 3の須恵器盤はP₂の覆土下層から出土している。4の須恵器甕は, P₁の覆土中層から出土している。5は須恵器甕の口縁部片で, 縦位の平行叩き, 6は須恵器甕の体部片であり, 自然釉がかかっている。それぞれ覆土中から出土している。

所見 本跡の時期は, 出土遺物から平安時代の9世紀中葉と考えられる。



第246図 第172号住居出土遺物実測図

第172号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第246図 1	坏 須恵器	A 13.6 B 4.3 C 5.8	平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	底部内面から体部外面上位ロクロナデ。体部下端手持ちへら削り。底部一方向の手持ちへら削り。	砂粒・石英・雲母 灰褐色 普通	P207 75% 北西側と 貯蔵穴脇覆土中
2	坏 須恵器	A[12.3] B (3.2)	口縁部片。口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面ロクロナデ。	砂粒 黄灰色 普通	P208 10% 南西側覆土中
3	盤 須恵器	A[19.0] B 4.6 D 9.4 E 1.7	体部は直線的に外傾し、口縁部は外反する。高台はハの字状に開く。	底部回転へら削り後、ロクロナデ。口縁部内・外面ロクロナデ。	砂粒・長石・雲母 にぶい褐色 普通	P209 60% P2の覆土下層
4	甕 須恵器	B (17.2) C 13.2	底部・体部片。平底。体部は内彎気味に外傾する。	体部外面斜位の平行叩き。体部下位平行叩き後、ナデ。体部内面ナデ。	砂粒・長石 灰色 普通	P210 50% P1の覆土中層

第177号住居跡 (第247図)

位置 調査6区北部, M15b2区。

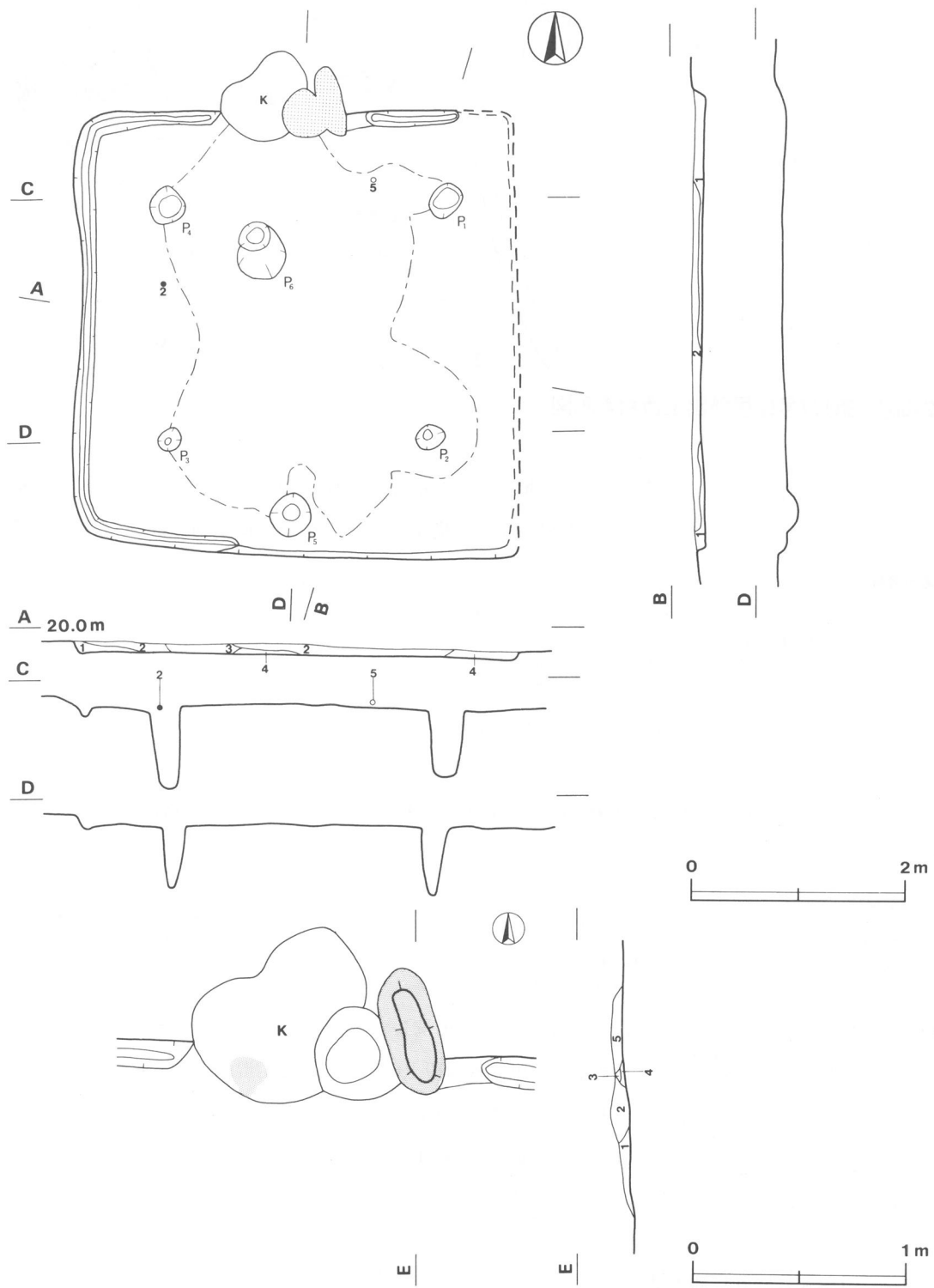
規模と平面形 長軸4.22m, 短軸[4.08]mの方形である。

主軸方向 N-3°-E

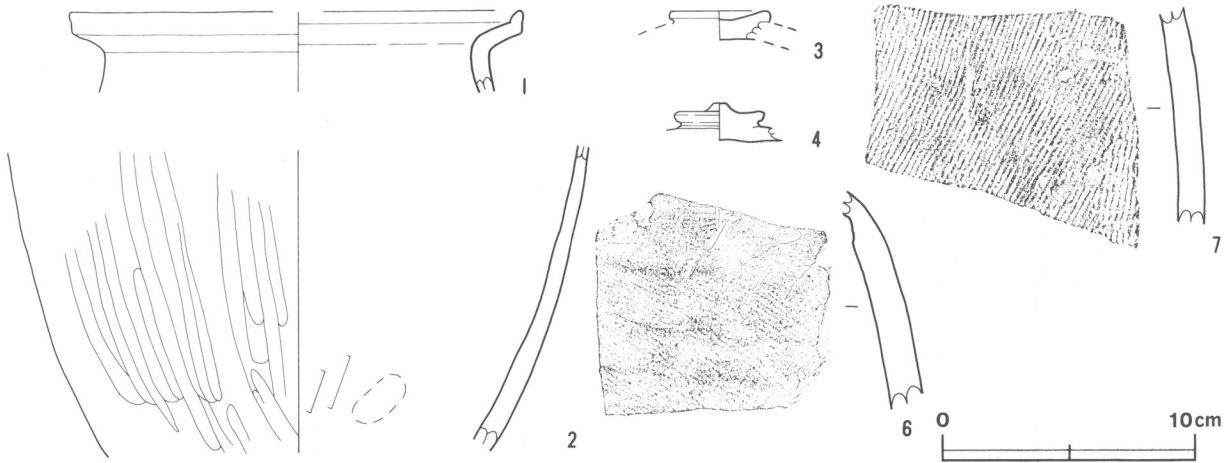
壁 壁高は8~10cmで、外傾して立ち上がる。東壁側は、深く削平されている。

壁溝 北壁と西壁の壁下を巡っている。上幅15~21cm, 下幅4~7cm, 深さ10~13cm, 断面形はU字形である。

床 全体的に平坦で、出入り口施設に伴うピットから竈にかけての中央部が踏み固められている。



第247图 第177号住居跡実測図



第248図 第177号住居跡出土遺物実測図

竈 北壁中央部に付設されている。根による攪乱で、左袖部と煙道部は削平されている。規模は、袖幅 [100] cm, 長さ (45) cmである。袖部は山砂混じりの粘土で構築されている。火床部は径25cmの円形である。

竈土層解説

- 1 暗赤褐色 ローム粒子多量, 焼土粒子少量, 炭化粒子微量
- 2 暗赤褐色 ローム粒子少量, 焼土小ブロック・炭化粒子・粘土粒子微量
- 3 暗赤褐色 焼土粒子・ローム粒子微量
- 4 黒褐色 焼土粒子中量, 炭化物・ローム粒子少量, 焼土小ブロック微量
- 5 黒褐色 焼土粒子少量, 炭化物・ローム粒子微量

ピット 6か所(P₁~P₆)。P₁~P₄は径23~35cm, 深さ60~76cmで、支柱穴と考えられる。P₅は南壁中央の壁際から20cmほど内側に位置し、竈と同一線上に並んでいる。径40cmの円形, 深さ12cmで出入り口施設に伴うピットと考えられる。P₆は、長径55cm, 短径45cmの楕円形, 深さ12cmで、性格は不明である。

覆土 4層からなり、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック少量, 焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・焼土粒子少量
- 3 極暗褐色 ローム小ブロック少量, 焼土粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量

遺物 土師器片197点, 須恵器片24点, 土製品1点が出土している。第248図1の土師器小形甕は覆土中から、2の土師器甕は北西の床面から、3と4の須恵器蓋は覆土中から出土し、混入と考えられる。5の土製支脚は竈右袖部前面部から出土している。6の須恵器甕片は叩きが施され、P₂の覆土中から出土している。7の須恵器甕の体部片は平行叩きが施され、P₆の覆土中から出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から平安時代の8世紀末から9世紀初頭と考えられる。

第177号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第248図 1	小形甕 土師器	A [17.8] B (3.2)	体部から口縁部にかけての破片。体部は緩やかに立ち上がり、口縁部はくの字状に屈曲する。口唇部直下に稜が巡る。	口縁部内・外面横ナデ。内面ナデ。	砂粒・石英・長石・雲母にぶい橙色 普通	P216 5% 覆土中
2	甕 土師器	B (11.9)	体部破片。体部は内彎して立ち上がる。	体部内面ヘラナデ。指頭押圧, ヘラ当て痕あり。体部外面ヘラ磨き。	砂粒・石英・長石・雲母 浅黄色 普通	P217 5% 北西部床面

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第218図 3	蓋 須恵器	F 3.9 G 0.5	蓋のつまみ部。つまみは扁平なボタン状を呈する。	ロクロナデ。	砂粒・雲母 灰白色 普通	P218 5% 覆土中
4	蓋 須恵器	F 3.6 G 1.0	蓋のつまみ部。つまみは中央が突出したボタン状を呈する。	ロクロナデ。	砂粒・石英・長石・ 雲母 灰白色 普通	P219 5% 覆土中

図版番号	種別	計測値			出土地点	備考
		長さ(cm)	径(cm)	重量(g)		
5	支脚	(12.0)	4.8~7.8	(317.0)	竈右袖部前面部覆土中	DP8 実測図なし

第178号住居跡（第249図）

位置 調査6区北部，M15d2区。

規模と平面形 長軸[3.60]m，短軸[3.00]mの長方形と推定される。

主軸方向 N-11°-E

壁 上面は削平され，北西コーナーの一部を確認したのみである。壁高は2～8cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

床 全体的に平坦で，軟らかい。

竈 北壁中央に付設されている。竈の痕跡しか確認できなかった。

ピット 4か所(P₁～P₄)。P₁～P₃の掘り方は径22～35cmの円形，深さ34～57cmで，支柱穴と考えられる。

P₄は南壁中央の壁際から約30cmほど内側に位置し，竈と同一直線上にある。掘り方は長径45cm，短径35cmの楕円形，深さ21cmで，出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 2層からなり，自然堆積である。

土層解説

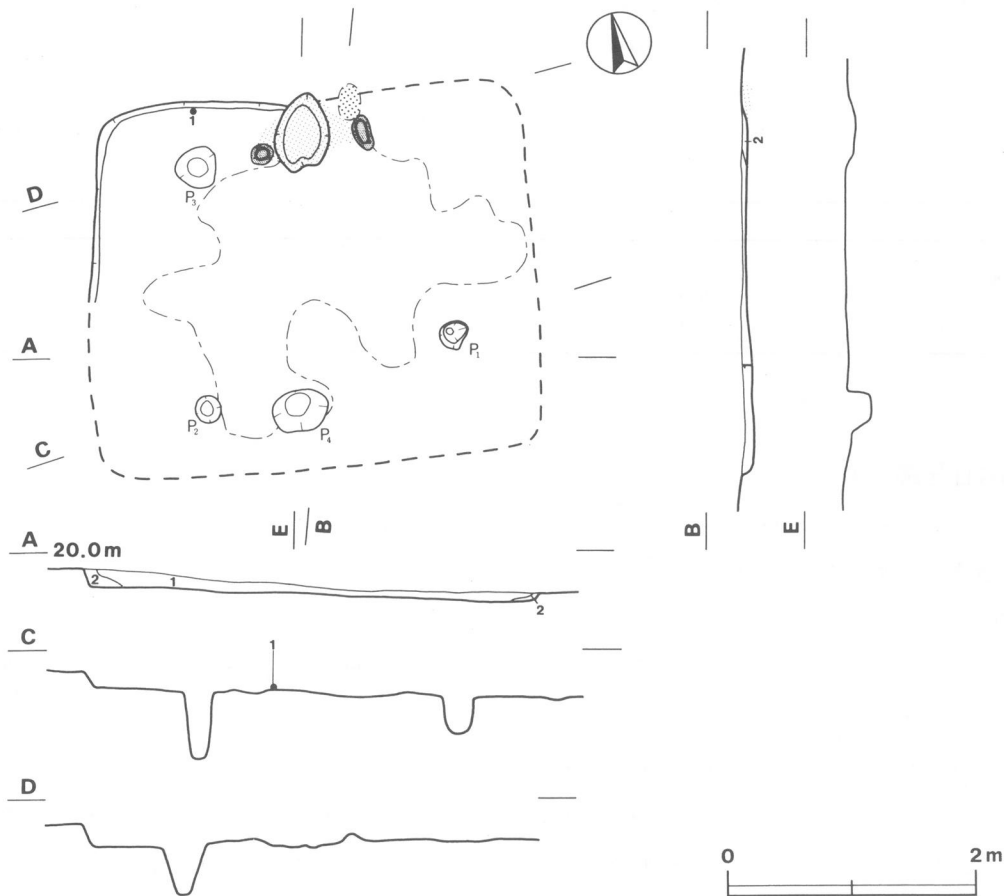
- 1 黒褐色 ローム粒子少量，炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量

遺物 土師器片53点，須恵器片11点，礫1点が出土している。第250図1の土師器甕は，竈左袖部の北壁付近の床面から，2の須恵器坏，3の須恵器蓋は覆土中から出土している。

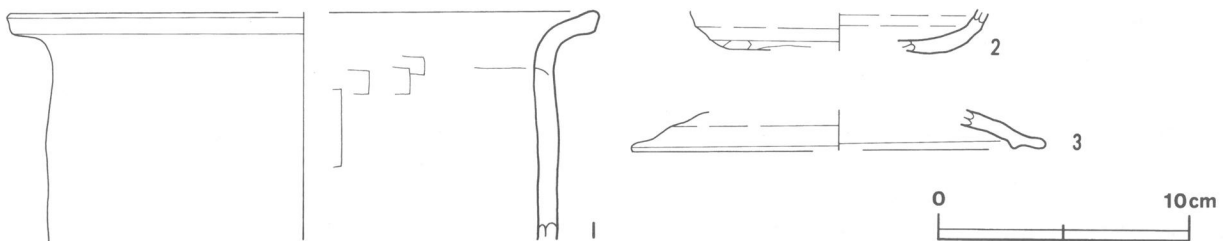
所見 本跡の時期は，土器が細片のため決定し難いが，奈良時代の8世紀前葉であると考えられる。

第178号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第250図 1	甕 土師器	A[23.2] B(9.0)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がる。口縁部は外傾し，端部で直立する。口縁端部外面に稜をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・石英・長石・ 雲母 灰黄褐色 普通	P220 5% 竈左袖部側北壁 床面
2	坏 須恵器	B(1.5) C[8.6]	底部から体部にかけての破片。	口縁部内・外面ロクロナデ。底部手持ちヘラ削り。	砂粒・雲母 オリーブ灰色 普通	P221 5% 覆土中
3	蓋 須恵器	A[16.4] B(1.6)	口縁部片。内面に短いかえりが付く。	口縁部内・外面ロクロナデ。	砂粒・雲母 灰白色 普通	P222 5% 覆土中



第249図 第178号住居跡実測図



第250図 第178号住居跡出土遺物実測図

第180号住居跡 (第251・252図)

位置 調査6区北部, M14c9区。

重複関係 第152・181号住居跡を掘り込んでいることから, 本跡は第152・181号住居跡より新しく, 本跡の上部に第182・195号住居跡が構築していることから, 第182・195号住居跡より古い。

規模と平面形 長軸4.50m, 短軸4.48mの方形である。

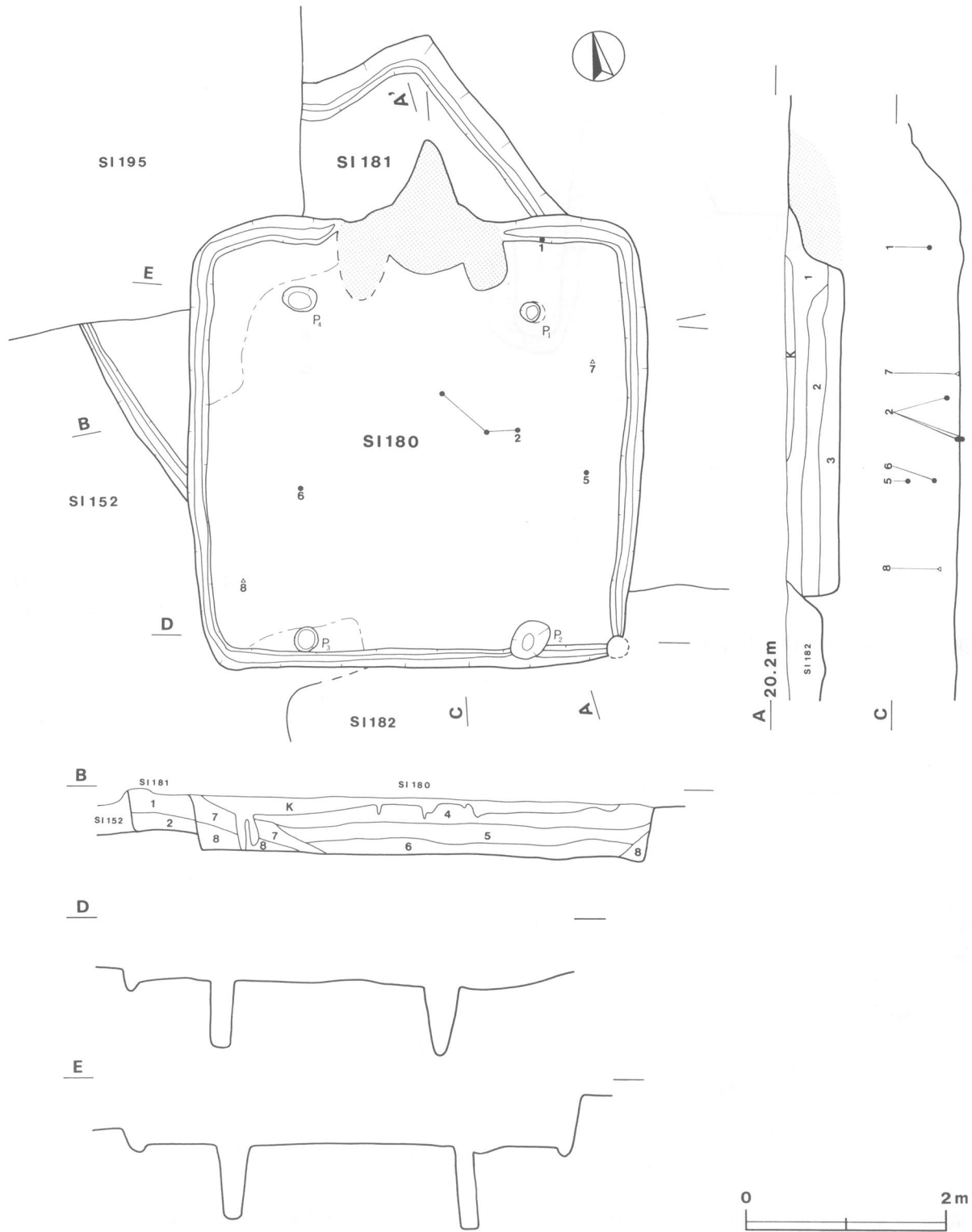
主軸方向 N-11°-E

壁 壁高は20~52cmで, 外傾して立ち上がる。

壁溝 上幅16~30cm, 下幅4~11cm, 深さ4~12cm, 断面形はU字形で, 全周している。

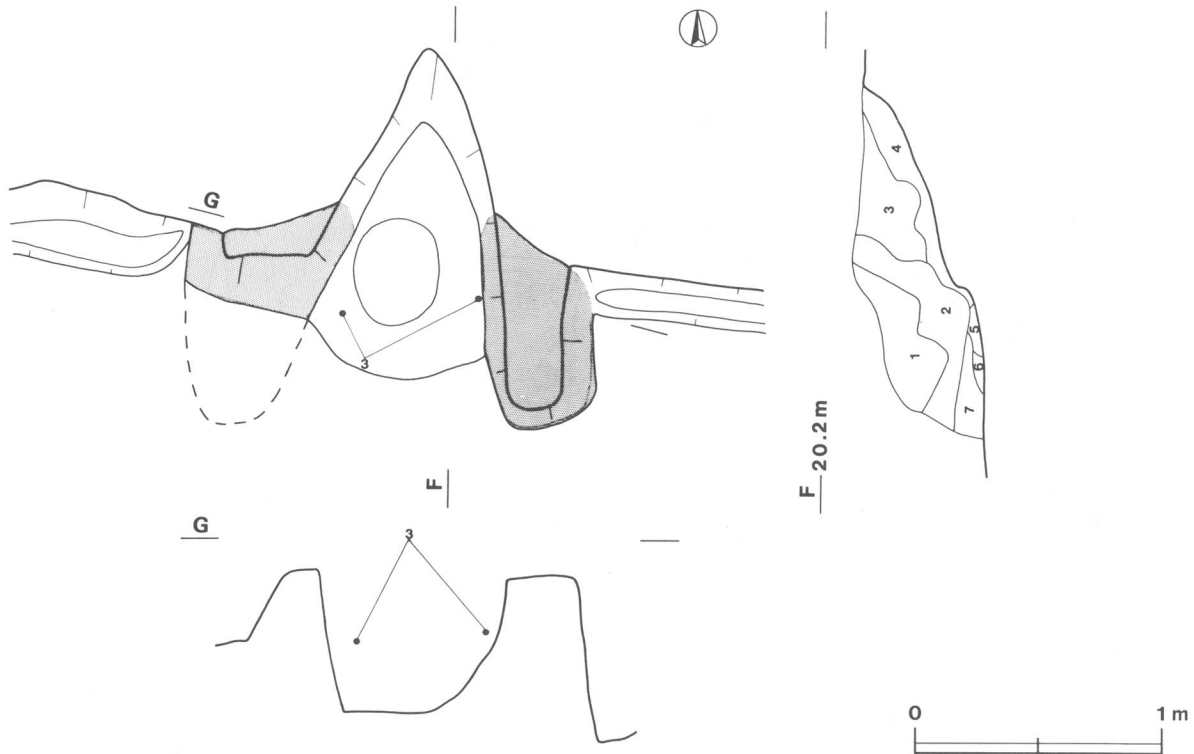
床 全体的に平坦で, 出入り口ピットから竈にかけての広い範囲が踏み固められている。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は袖幅160cm, 長さ132cm, 壁外への掘り込みは80cmで, 平面形は逆U



第251図 第180・181号住居跡実測図

字形である。左袖部は削平されているが、山砂混じりの粘土を北壁に貼り付けて構築されている。火床部は長径43cm、短径35cmの楕円形で、床面を10cmほど掘りくぼめている。燃焼部奥から煙道部へは25度の角度で緩やかに立ち上がる。



第252図 第180号住居跡竈実測図

竈土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子中量, 炭化粒子微量
- 2 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子・山砂・粘土少量
- 3 極暗褐色 焼土粒子中量, 炭化物少量, 粘土微量
- 4 黒褐色 焼土粒子多量, 焼土小ブロック中量, 炭化物・粘土少量
- 5 極暗褐色 炭化物多量, 焼土粒子少量
- 6 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子中量, 粘土少量
- 7 極暗褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子中量, 粘土少量

ピット 4か所(P₁~P₄)。P₁~P₄は径20~43cmの円形, 深さ68~73cmで, 支柱穴と考えられる。

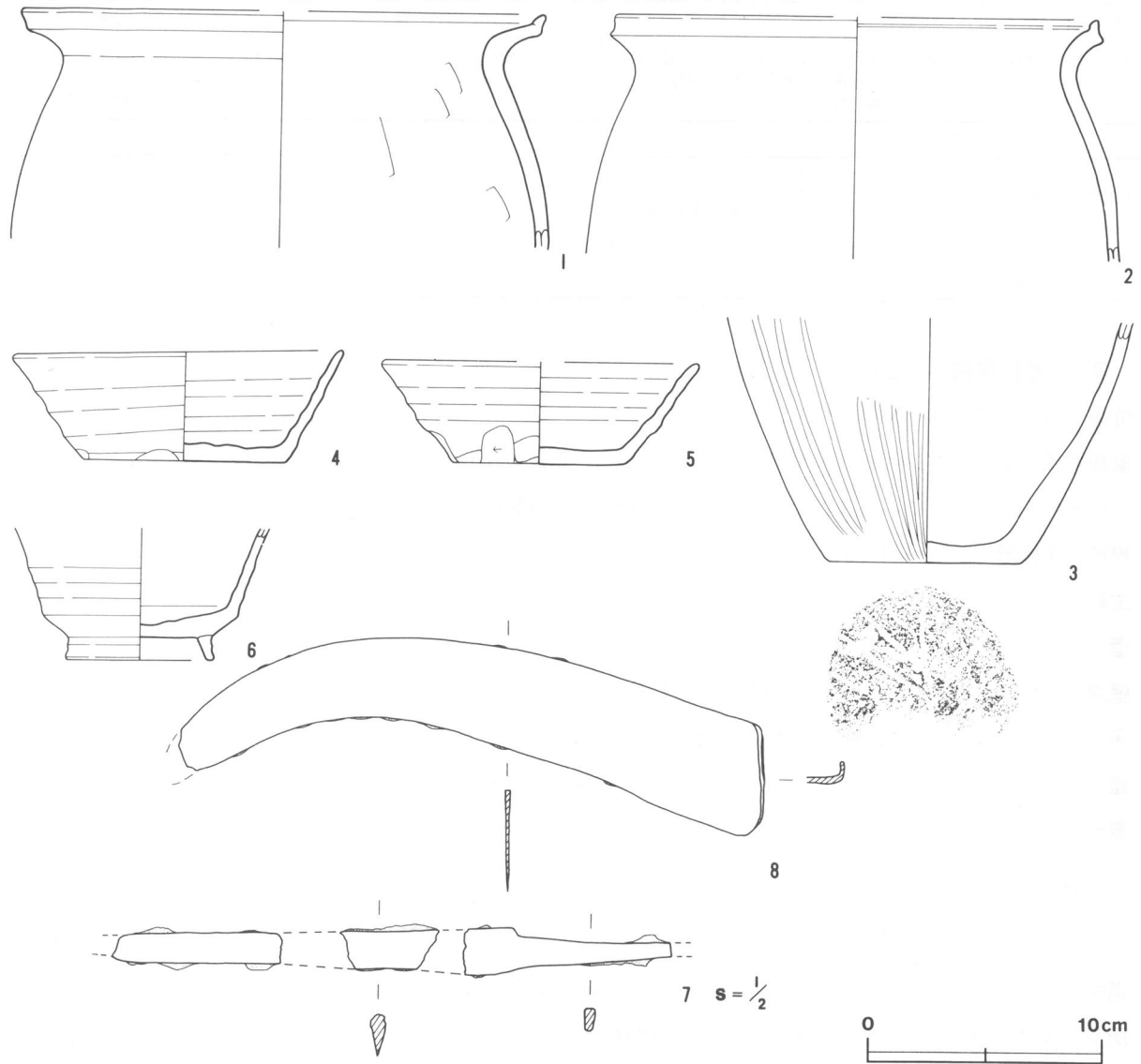
覆土 8層からなり, 自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子中量
- 2 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子中量, ローム小ブロック・ローム粒子少量, 焼土小ブロック微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 黒褐色 焼土粒子・炭化物少量
- 5 暗褐色 焼土粒子多量, 炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 6 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子多量, ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 7 黒褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物多量
- 8 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子多量

遺物 土師器片475点, 須恵器片75点, 鉄滓1点が出土している。第253図1の土師器甕は北壁側覆土中層から, 2の土師器甕はほぼ中央の床面から, 3の土師器甕は竈内覆土中層から, 4の須恵器坏は覆土下層から, 5の須恵器坏は東側覆土上層から, 6の須恵器高台付坏は西側覆土中層からそれぞれ出土している。7の刀は覆土下層から, 8の鉄鎌は, 南西コーナー覆土中層から出土している。

所見 本跡の時期は, 出土遺物から平安時代の8世紀後葉と考えられる。



第253図 第180号住居跡出土遺物実測図

第180号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第253図 1	甕 土師器	A[22.4] B(10.2)	体部から口縁部にかけての破片。口縁端部は上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面ロクロナデ。体部内面ヘラナデ。	砂粒・石英・長石・雲母にぶい黄橙色 普通	P235 20% 北壁側覆土中層
2	甕 土師器	A[20.8] B(10.4)	体部から口縁部片。体部は丸みをもって立ち上がり、最大径を中位にもつ。口縁部は外反し、端部は上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・雲母にぶい赤褐色 普通	P236 20% 中央部床面
3	甕 土師器	B(10.5) C 8.2	底部から体部にかけての破片。平底。体部は内彎気味に外傾する。	体部外面ヘラ磨き。体部内面ナデ。底部木葉痕。	砂粒・長石・雲母明赤褐色 良好	P237 25% 竈内覆土中層
4	坏 須恵器	A 14.0 B 4.9 C 8.6	体部・口縁部一部欠損。平底。体部は直線的に外傾する。	口縁部・体部ロクロナデ。底部回転ヘラ切り。体部下端手持ちヘラ削り。	砂粒・長石・雲母黄灰色 普通	P238 95% 覆土下層
5	坏 須恵器	A[13.4] B 4.4 C 7.4	底部から口縁部片。平底。体部は直線的に外傾する。	口縁部・体部ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。	長石・石英・雲母黄灰色 普通	P239 40% 東側覆土上層

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第253図 6	高台付坏 須恵器	B(5.7) D 6.2 E 1.0	体部・口縁部一部欠損。平底。高台は直線的に開く。体部は直線的に外傾する。	口縁部・体部ロクロナデ。	長石・石英・雲母 灰黄色 普通	P240 40% 西側覆土中層

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
7	刀子	(13.5)	1.5	0.4	(12.0)	覆土下層	M24
8	鎌	(24.9)	4.8	1.0	(127.0)	南西コーナー覆土中層	M25

第181号住居跡（第251図）

位置 調査6区北部，N14b9区。

重複関係 第152号住居跡を掘り込んでいることから，本跡は第152号住居跡より新しく，本跡が第180・195号住居跡に掘り込まれていることから，第180・第195号住居跡より古い。

規模と平面形 一边が[4.70]mの方形と推定される。

主軸方向 [N-28°-W]

壁 壁高は3～20cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝 上幅10～34cm，下幅3～10cmで，壁が残存する北東コーナーと南西コーナー壁下を巡っている。

床 全体的に平坦で，北コーナー付近が踏み固められている。

竈 北壁中央部に付設されていたとみられるが，第195号住居跡によって壊されている。

覆土 2層からなり，人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子多量，ローム中・小ブロック中量，焼土粒子少量

遺物 4軒が重複しているため，本跡に伴う遺物を確認することができなかった。

所見 本跡の時期は，遺構の重複関係から平安時代と考えられる。

第182号住居跡（第254・255図）

位置 調査6区北端部，M14d9区。

重複関係 第183号住居跡に掘り込まれていることから，第183号住居跡より古く，本跡の上部に第152・180号住居跡が構築していることから，第152・180号住居跡より，新しい。

規模と平面形 長軸[5.05]m，短軸4.93mの方形である。

主軸方向 N-5°-W

壁 壁高は32～38cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

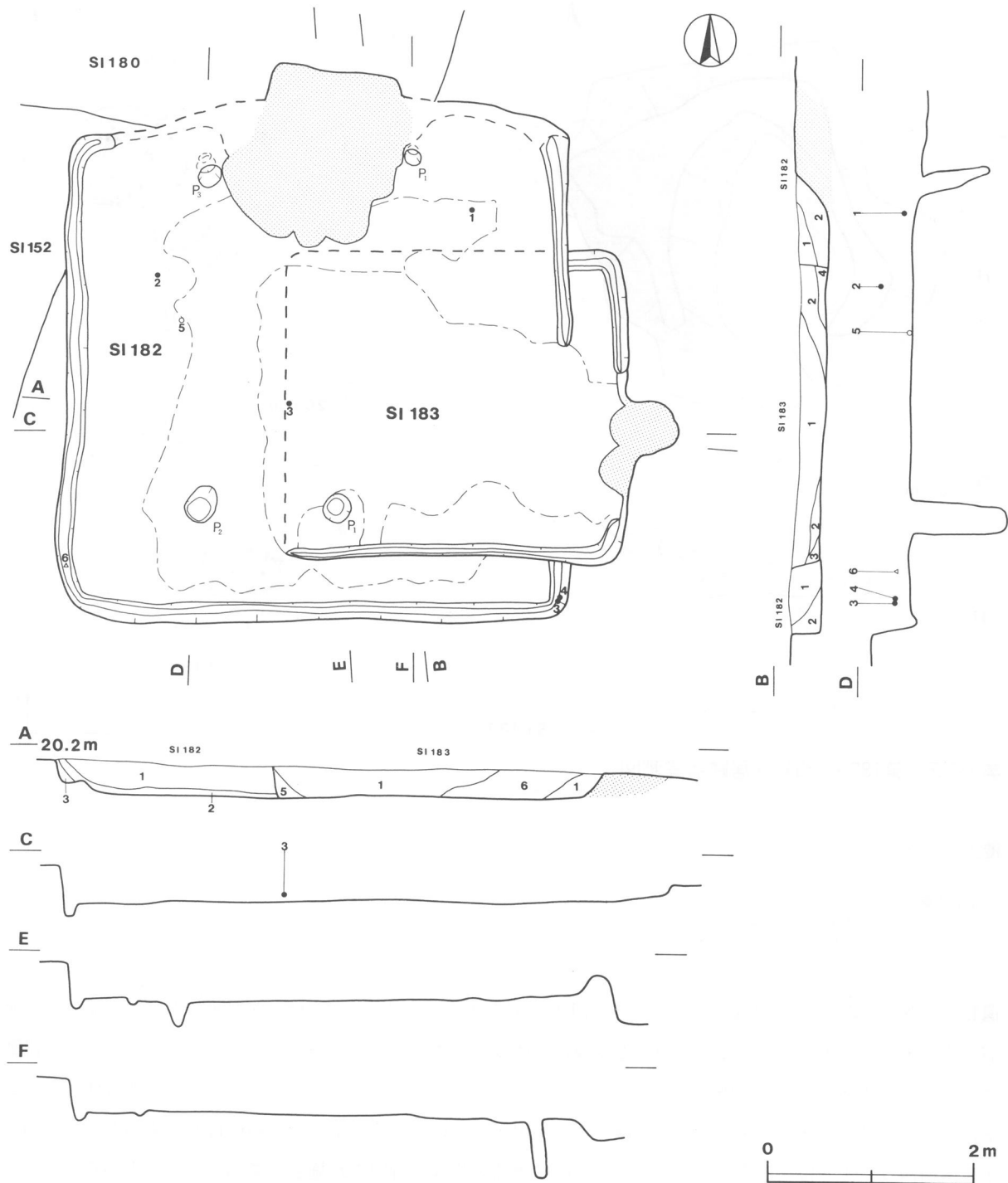
壁溝 第180号住居跡に壊されている北壁を除いて，ほぼ全壁下を巡っている。上幅15～25cm，下幅5～10cm，深さ8～10cm，断面形はU字形である。

床 全体的に平坦で，踏み固められている。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は袖幅180cm，長さ185cmで，壁外への掘り込みは37cmである。袖部は山砂混じりの粘土で構築されている。

竈土層解説

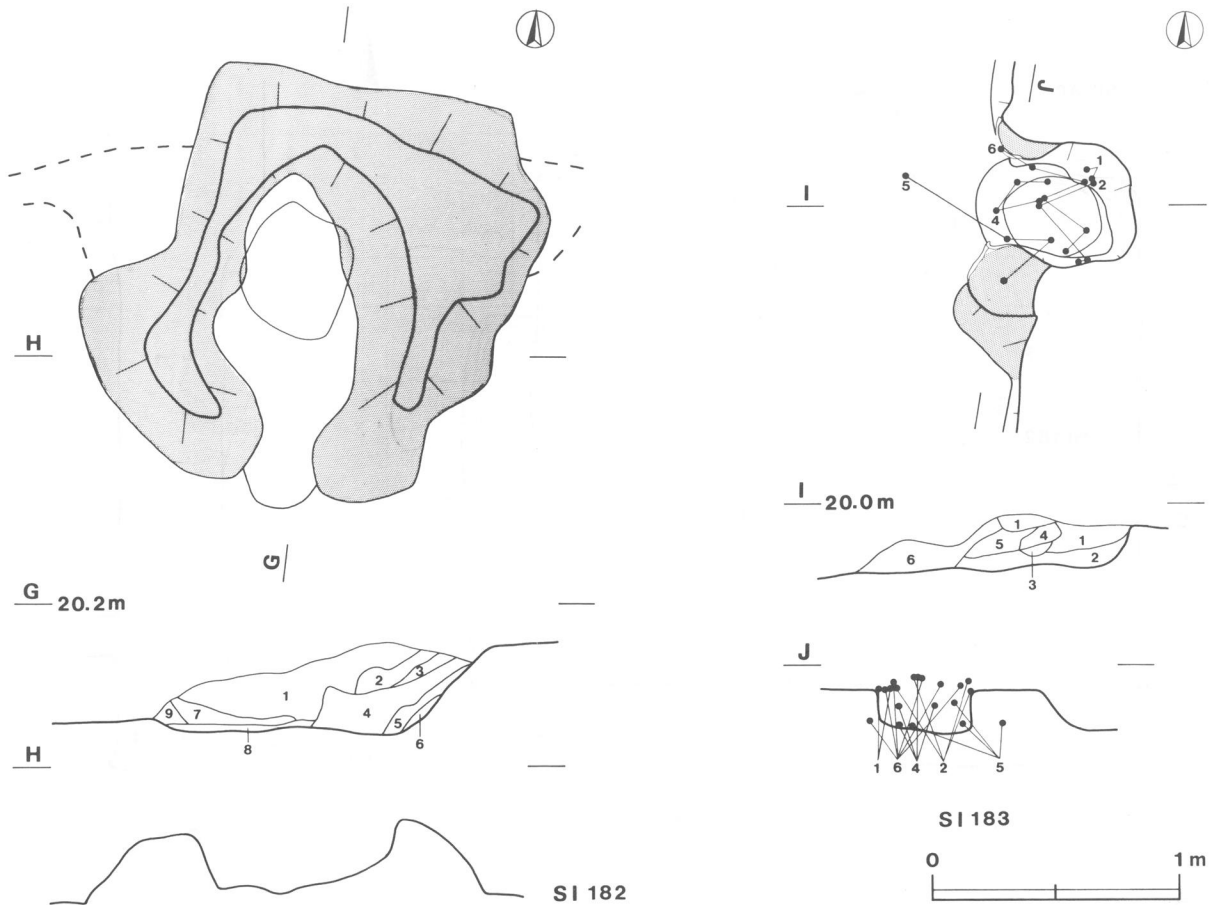
- 1 褐色 炭化粒子・ローム粒子微量



第254図 第182・183号住居跡実測図

- 2 黒褐色 焼土粒子中量, 炭化粒子・ローム粒子微量
- 3 黒褐色 粘土粒子・山砂少量, 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子微量
- 4 暗褐色 炭化粒子中量, 焼土粒子・焼土小ブロック少量, 粘土小ブロック微量
- 5 暗赤褐色 焼土粒子多量, 炭化粒子・ローム粒子少量, 粘土粒子・山砂微量
- 6 暗赤褐色 焼土粒子多量, 炭化粒子・ローム粒子微量
- 7 暗褐色 炭化粒子・焼土粒子・ローム粒子微量
- 8 黒褐色 炭化粒子中量, 焼土粒子少量, ローム粒子微量
- 9 暗褐色 焼土粒子中量, 炭化粒子・ローム粒子微量

ピット 3か所(P₁~P₃)。P₁~P₃は、径15~28cmの円形、深さ56~92cmで、主柱穴と考えられる。



第255図 第182・183号住居跡竈実測図

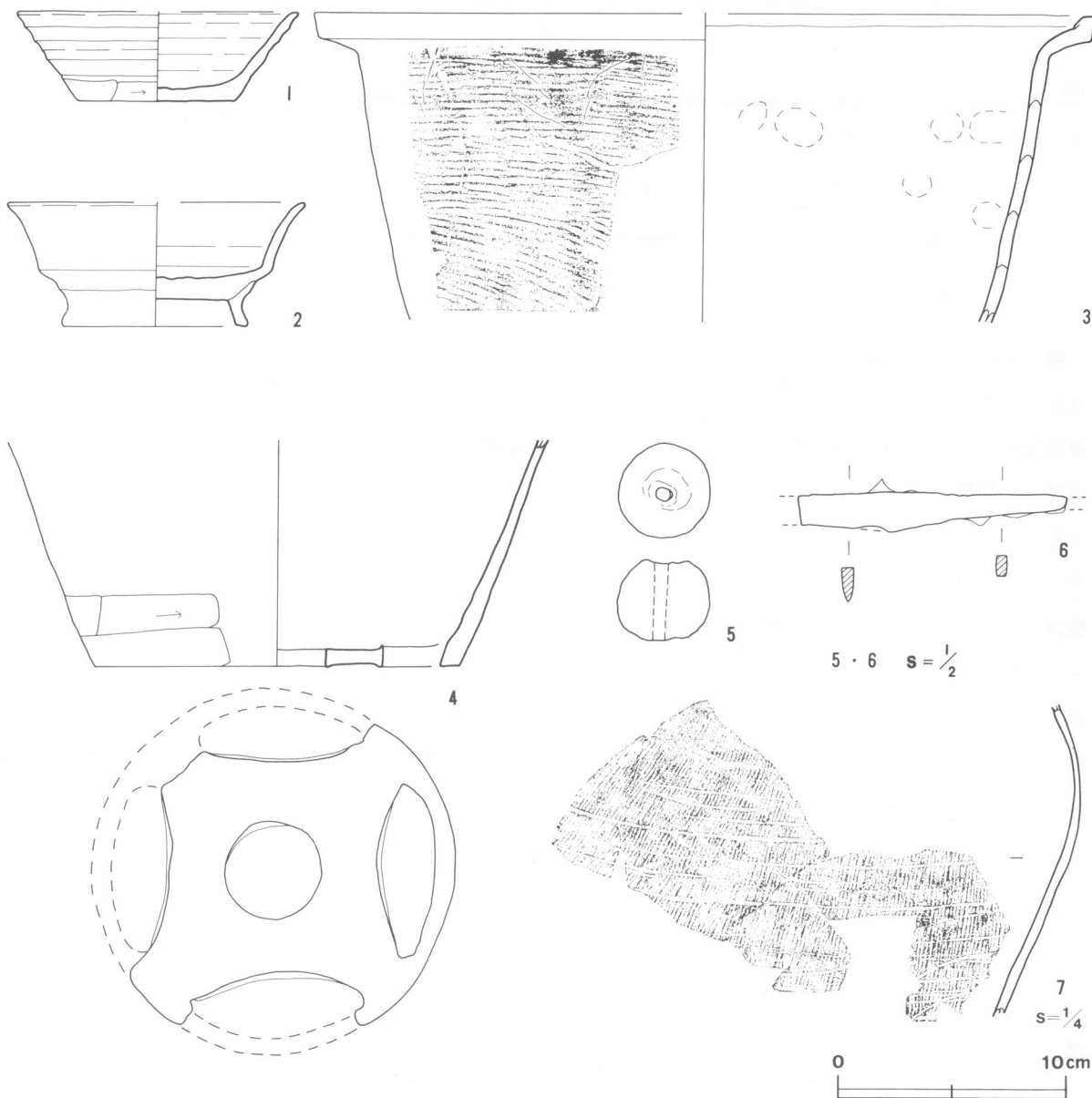
覆土 3層からなり、人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 焼土小ブロック中量、焼土粒子・ローム粒子少量
- 2 暗褐色 焼土粒子・ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量

遺物 土師器片226点、須恵器片86点、土製品1点、鉄製品1点が出土している。第256図1の須恵器坏は、竈前面東側床面から出土している。2の須恵器高台付坏は、北西側の覆土上層から出土している。3の須恵器甕は口縁部から体部にかけての破片であり、南東コーナー覆土中から出土している。4の須恵器甕は体部から底部にかけての破片であり、南東コーナー覆土中から出土している。5の土玉は、西壁付近の床面から、6の刀子は、南西コーナー覆土から出土している。7の須恵器甕片は平行叩きが施されており、覆土中から出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から平安時代の9世紀前葉と考えられる。



第256図 第182号住居跡出土遺物実測図

第182号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第256図 1	坏 須恵器	A[12.4] B 4.0 C 6.8	体部から口縁部にかけての破片。体部は外傾して立ち上がる。	内・外面ロクロナデ。体部下端ヘラ削り。底部不定方向のヘラ削り。	石英・長石・雲母 黄灰色 普通	P 241 45% 竈前面部東側床面
2	高台付坏 須恵器	A[13.0] B 5.5 D 8.0 E 1.2	底部と体部の境は稜をなして屈曲し、体部は外傾して立ち上がる。口縁部は、わずかに外反する。高台はハの字状に開く。	底部内面から体部外面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け。	砂粒・石英・長石 灰色 普通	P 242 55% 北西側覆土上層
3	甕 須恵器	A[34.4] B(10.6)	体部から口縁部にかけての破片。体部は緩やかに外反しながら立ち上がり、口縁部はくの字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位の平行叩き。体部内面指頭押圧。輪積み痕。	砂粒・雲母 灰色 普通	P 243 10% 南東コーナー覆土
4	甕 須恵器	B(10.0) C[16.0]	底部から体部下半の破片。体部は直線的に立ち上がる。	体部下端部・穿孔部ヘラ削り。体部下端ヘラ削り。	石英・長石・雲母 黄灰色 普通	P 244 15% 南東コーナー覆土

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	径(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
第256図5	土玉	2.4	2.8	0.4	18.0	西壁付近床面	D P9

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
6	刀子	(7.9)	(1.2)	0.5	(8.0)	南西コーナー覆土下層	M26

第183号住居跡（第254・255図）

位置 調査6区北部，M14d9区。

重複関係 第182号住居跡を掘り込んでいることから，第182号住居跡より新しい。

規模と平面形 長軸[3.33]m，短軸3.06mの方形である。

主軸方向 N-92°-E

壁 壁高は18～32cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 南壁から北東コーナーの壁下を巡っている。上幅11～20cm，下幅4～6cm，深さ4～7cmである。

床 中央部がわずかに高く，踏み固められている。

ピット 1か所(P₁)。P₁は径15cmの円形，深さ27cmで，主柱穴と考えられる。

竈 東壁やや南側に付設され，規模は長さ100cm，袖幅110cmで，壁外への掘り込みは64cmである。袖部は山砂混じりの粘土で構築されている。火床部は長径40cm，短径32cmの楕円形である。

竈土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 炭化粒子中量，焼土粒子・砂少量
- 3 暗赤褐色 焼土粒子・焼土小ブロック・焼土中ブロック多量
- 4 灰褐色 粘土ブロック中量，砂少量
- 5 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子中量
- 6 黒褐色 ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量

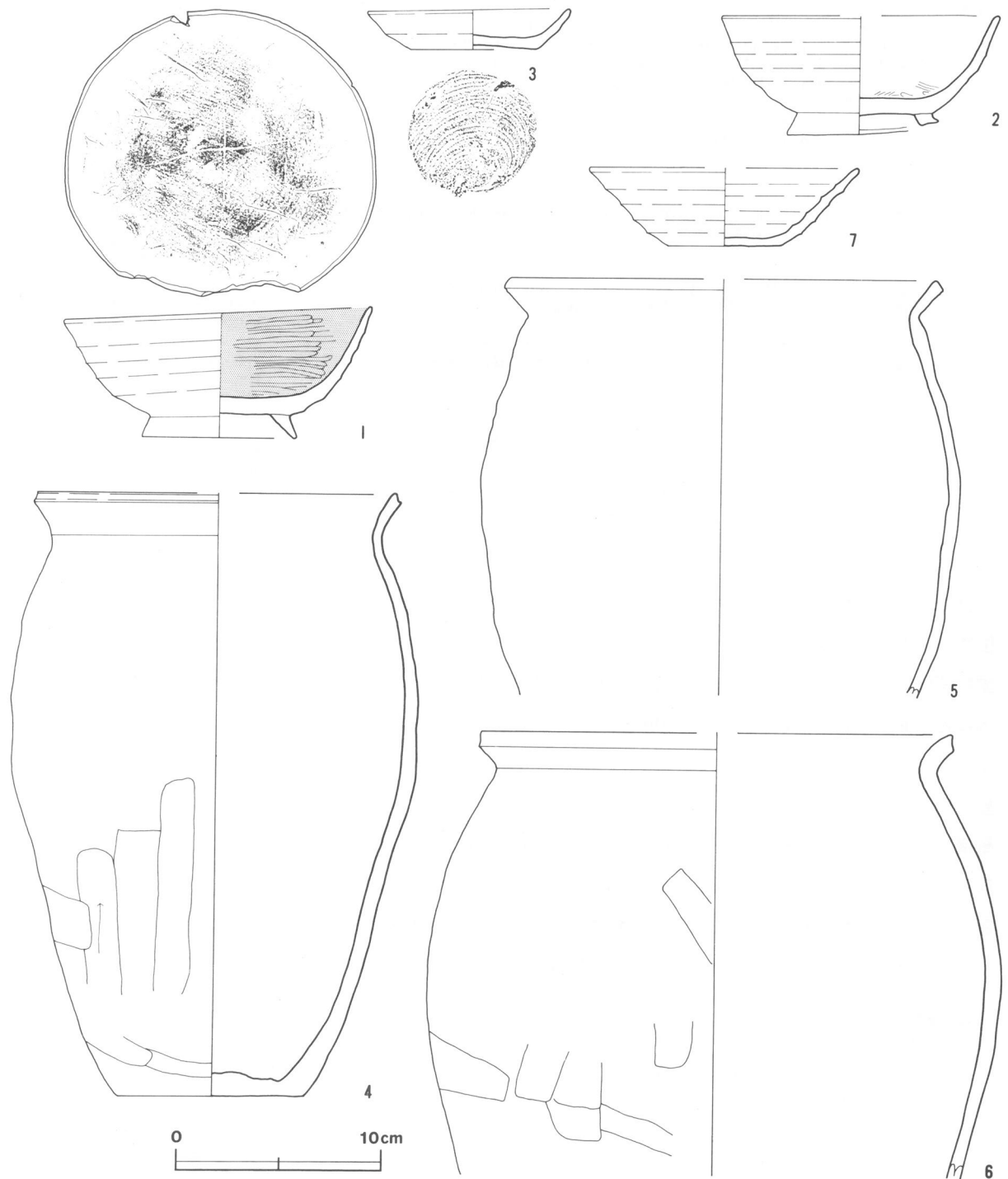
覆土 6層からなり，人為堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 極暗褐色 ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子・ローム小ブロック微量
- 3 極暗褐色 ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量，焼土粒子微量
- 5 極暗褐色 ローム粒子中量
- 6 暗褐色 ローム粒子少量，焼土粒子・ローム小ブロック・粘土粒子微量

遺物 土師器片376点，須恵器片105点，鉄滓5点，礫2点が出土している。第257図1，2の土師器高台付椀は，竈内から出土している。3の土師器小皿は，西壁覆土下層から出土している。4～6の土師器甕は，竈内焚き口前面部付近から出土している。7の須恵器坏は覆土中から出土し，混入と考えられる。

所見 本跡の時期は，出土遺物から平安時代の10世紀以降と考えられる。



第257図 第183号住居跡出土遺物実測図

第183号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第257図 1	高台付碗 土師器	A 15.0 B 6.5 D 7.4 E 1.1	口縁部一部欠損。高台はハの字状に開く。体部は内彎気味に外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ナデ、内面ヘラ磨き。底部内面にヘラ記号。内面黒色処理。	長石・雲母 外面にぶい橙色 内面黒色 普通	P245 90% 竈内

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第257図 2	高台付椀 土師器	A [13.4] B 5.8 D 7.3 E 1.1	底部から口縁部にかけての破片。高台は短く、ハの字状に開く。体部は内彎気味に外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。底部回転ヘラ削り後、ナデ。内面ヘラ磨き。	石英・長石 にぶい橙色 普通	P246 70% 竈内
3	小皿 土師器	A 9.8 B 2.0 C 6.2	平底。体部は外傾して立ち上がる。	底部内面から体部外面上位ロクロナデ。底部回転系切り。	石英・長石 橙色 普通	P247 100% 西壁覆土下層
4	甕 土師器	A [17.4] B 29.5 C 9.0	平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部下半ヘラ削り。	長石・赤色粒子 橙色 普通	P248 35% 竈内
5	甕 土師器	A [20.9] B (20.3)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・石英・長石・ 赤色粒子・雲母 にぶい橙色 普通	P249 30% 竈前面部
6	甕 土師器	A [23.0] B (21.7)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部下半ヘラ削り。	石英・長石 橙色 普通	P250 25% 竈前面部
7	坏 須恵器	A [13.0] B 3.8 C [5.6]	底部から口縁部片。体部は内彎気味に外傾する。	口縁部内・外面ロクロナデ。	石英・長石・雲母 灰黄色 普通	P251 25% 覆土中

第184号住居跡（第258図）

位置 調査6区北部，M15e₂区。

重複関係 第15号溝に掘り込まれており，第15号溝より古い。

規模と平面形 長軸3.76m，短軸3.20mの長方形である。

主軸方向 N-91°-E

壁 壁高は5～12cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝 南東コーナーの壁下の一部で確認され，上幅10～15cm，下幅4～7cmである。

床 全体的に平坦で，竈の前面から中央部にかけて踏み固められている。

竈 東壁やや南側に付設されている。両袖は壊されており遺存状況は悪く，規模は，長さ80cmで，壁外への掘り込みは56cmである。長径50cm，短径18cmの楕円形の火床部が残っている。

竈土層解説

- 1 極暗赤褐色 焼土粒子多量
- 2 暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子中量
- 3 暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子中量，粘土粒子少量
- 4 暗赤褐色 粘土粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量
- 5 暗褐色 炭化粒子中量
- 6 暗褐色 粘土粒子中量
- 7 黒褐色 炭化粒子多量，焼土粒子中量

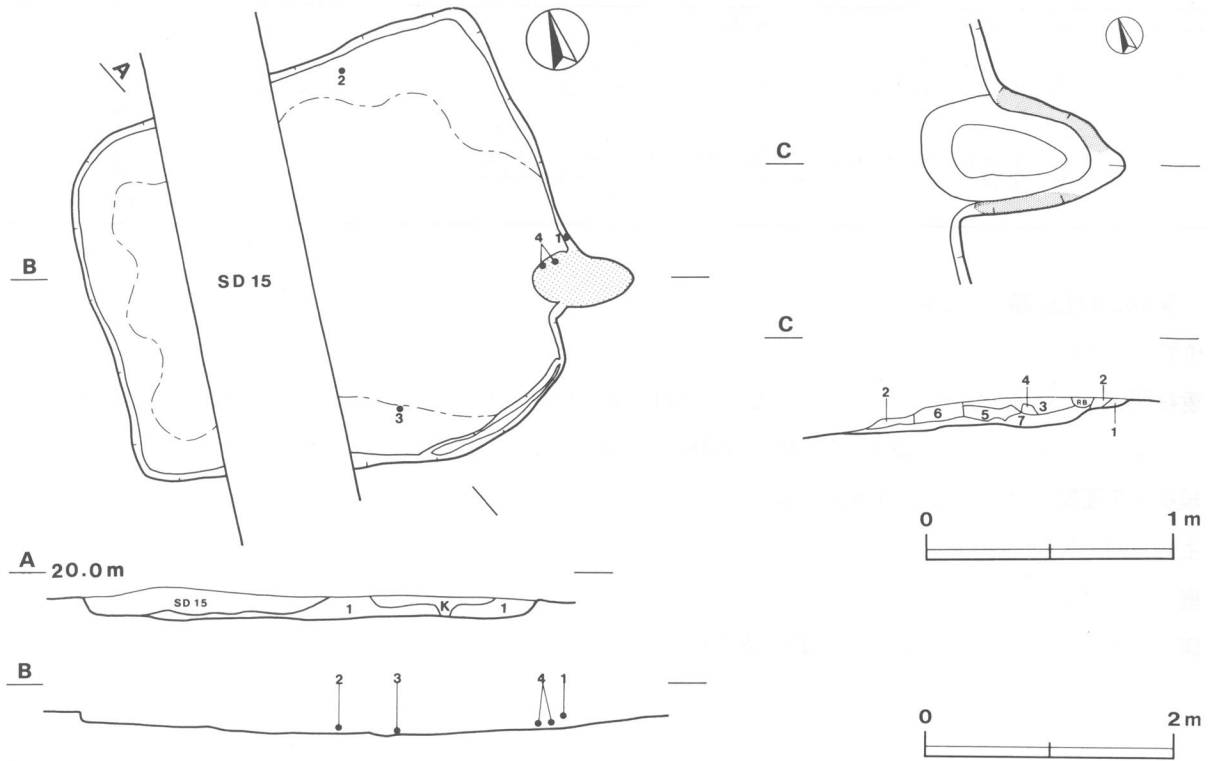
覆土 単一層からなり，人為堆積である。

土層解説

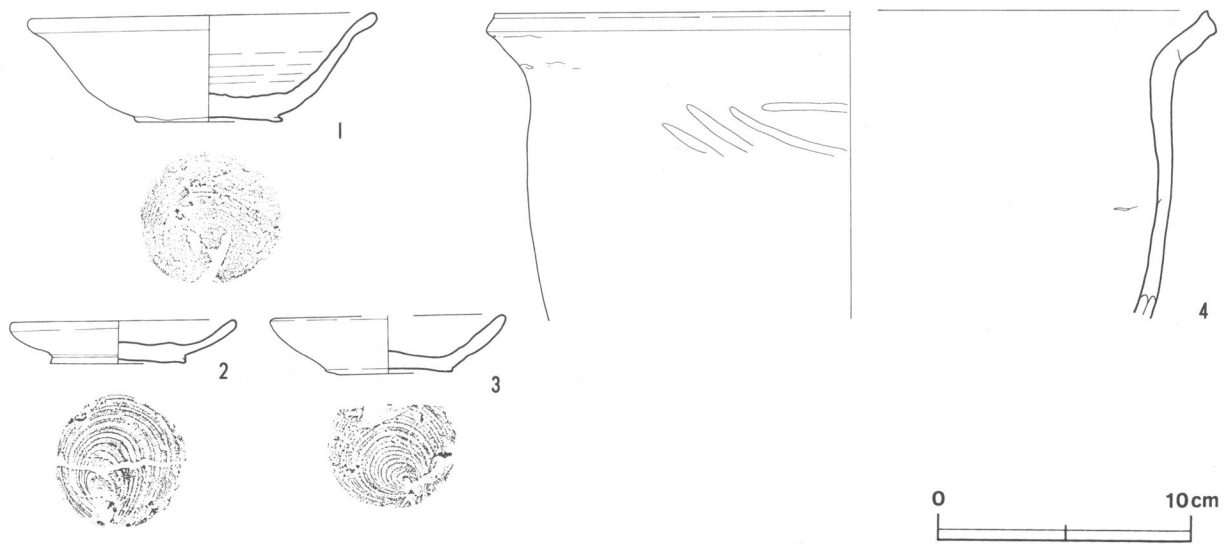
- 1 極暗褐色 ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量

遺物 土師器片173点，須恵器片9点，礫5点が出土している。第259図1の土師器坏は，竈左壁側上層から，2の土師器小皿は，北壁際覆土下層，3の土師器小皿は，南側覆土下層からそれぞれ出土している。4の土師器甕は，竈焚口部から出土している。

所見 本跡の時期は，出土遺物から平安時代の10世紀以降と考えられる。



第258図 第184号住居跡実測図



第259図 第184号住居跡出土遺物実測図

第184号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第259図 1	坏 土師器	A 13.6 B 4.3 C 5.8	体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	底部から口縁部内・外面ロクロナデ。底部回転系切り。	砂粒にぶい褐色 普通 外面煤付着	P252 70% 竈左壁側上層
2	小皿 土師器	A 8.7 B 1.8 C 5.4	体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部内・外面ロクロナデ。底部回転系切り。	砂粒 黄橙色 普通	P253 95% 北壁際覆土下層

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第259図 3	小皿 土師器	A [9.0] B 2.3 C 5.0	底部から口縁部にかけての破片。体部は外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面ロクロナデ。底部回転系切り。	砂粒 浅黄橙色 普通 外面煤付着	P254 50% 南側覆土下層
4	甕 土師器	A [28.2] B (12.2)	体部・口縁部片。体部は内彎し、頸部はくの字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ。体部外面棒状工具による当て具痕有り。	砂粒・石英・雲母 にぶい橙色 普通	P255 20% 竈焚口部

第185号住居跡（第260図）

位置 調査6区北部，M14f0区。

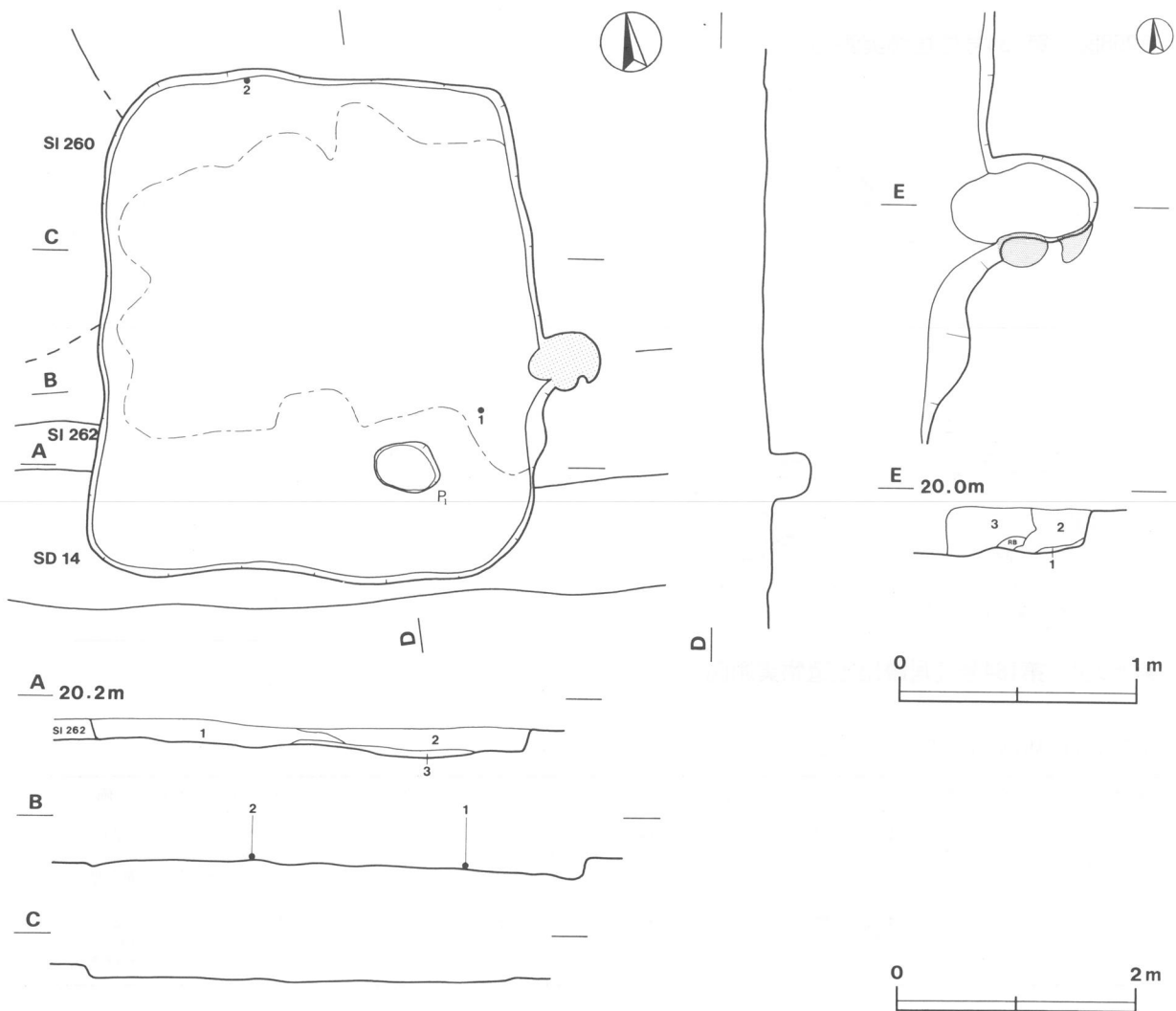
重複関係 本跡は第260号住居跡を掘り込み，第14号溝に掘り込まれていることから，第260号住居跡より新しく，第14号溝より古い。第262号住居跡との関係は不明である。

規模と平面形 長軸4.22m，短軸3.70mの長方形である。

主軸方向 N-98°-E

壁 壁高は3～12cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

床 全体的に平坦で，中央部がよく踏み固められている。



第260図 第185号住居跡実測図

竈 東壁やや南東コーナー寄りに付設されている。削平されており，火床部，煙道部，天井部共に壊されている。規模は長さ62cmで，右袖部がわずかに残り，山砂混じりの粘土で構築されている。

竈土層解説

- 1 灰黄褐色 焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 黒赤褐色 焼土粒子多量，炭化粒子少量，山砂・粘土微量
- 3 黒褐色 炭化物・粘土少量，焼土粒子微量

ピット 1か所(P₁)。P₁は長径58cm，短径40cmの楕円形，深さ32cmで，支柱穴と考えられる。

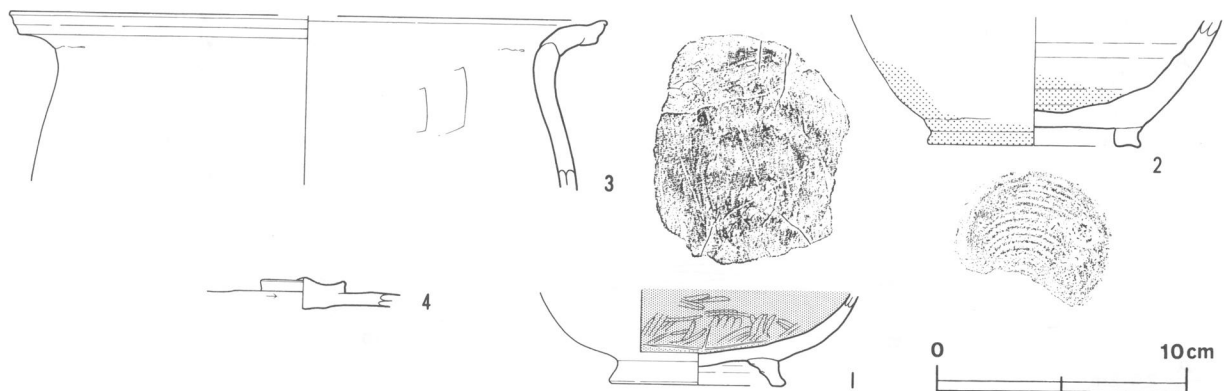
覆土 3層からなり，自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・ローム小ブロック少量
- 3 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・ローム小ブロック少量，炭化粒子微量

遺物 土師器片608点，須恵器片66点，陶器片4点が出土している。第261図1の土師器高台付坏は，東側床面から出土し，2の灰釉陶器長頸瓶の底部片は，北壁床面から出土している。3の土師器甕，4の須恵器蓋は，それぞれ覆土中から出土し，混入と思われる。

所見 本跡の時期は，出土遺物から平安時代の10世紀以降と考えられる。



第261図 第185号住居跡出土遺物実測図

第185号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第261図 1	高台付坏 土師器	B(3.7) D 7.0 E 1.0	高台部から体部にかけての破片。高台部はハの字状に開く。	底部内面へラ磨き。底部回転へラ削り後，高台貼り付け。内面黒色処理。底部内面にへラ記号。	砂粒・長石・雲母 外面にぶい黄褐色 内面黒色 普通	P256 30% 東側床面
2	長頸瓶 灰釉陶器	B(5.1) D 8.4 E 0.6	底部から体部にかけての破片。体部は緩やかに内彎して立ち上がる。高台は短く，ハの字状に開く。	内・外面クロナデ。底部回転糸切り。体部内・外面，高台部外面に釉が施されている。	砂粒・長石 黄灰色 良好	P257 20% 北壁床面
3	甕 土師器	A[23.6] B(6.7)	体部から口縁部にかけての破片。頸部はくの字状に外反する。端部はわずかに上方つまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。内面へラナデ。	砂粒・石英・長石 橙色 良好	P258 5% 覆土中
4	蓋 須恵器	B(1.3) F 3.2 G 0.6	蓋のつまみ部。つまみは扁平なボタン状を呈する。	天井部回転へラ削り。	砂粒・石英・雲母 黄灰色 良好	P259 10% 覆土中

第186号住居跡（第262図）

位置 調査6区北部，M14go区。

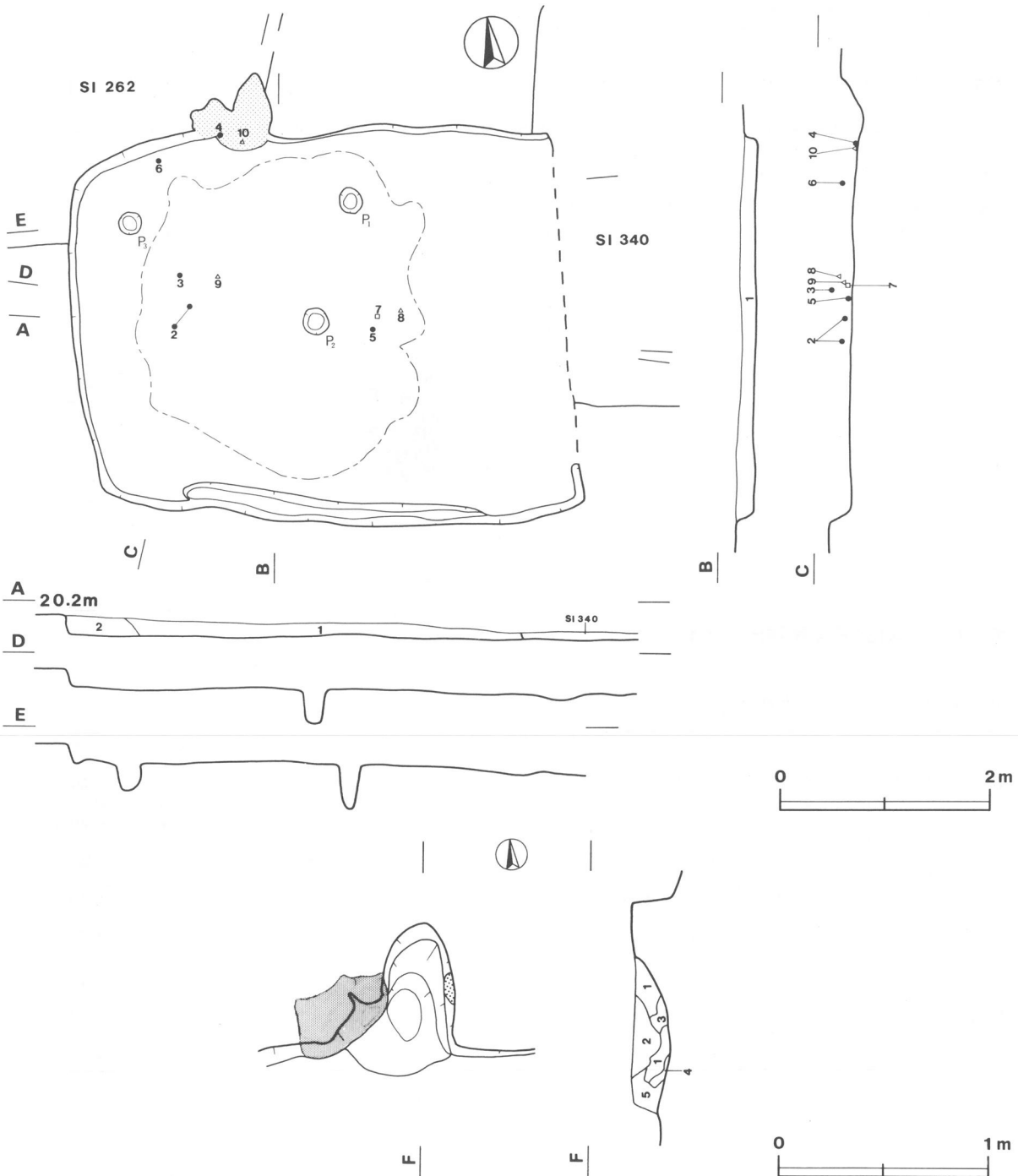
重複関係 第262・340号住居跡を掘り込んでいることから，第262・340号住居跡より新しい。

規模と平面形 長軸4.65m，短軸3.32mの長方形である。

主軸方向 N-3°-E

壁 壁高は16~20cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝 南壁下の一部で確認した。上幅10~30cm，下幅4~14cmである。断面形はU字形である。



第262図 第186号住居跡実測図

床 全体的に平坦で、特に中央部付近が踏み固められている。

竈 北壁の西側に付設されている。規模は長さ75cm、袖幅76cm、壁外への掘り込みは57cmで、平面形は逆U字形である。右袖部は削平されているが、山砂混じりの粘土を北壁に貼り付けて構築されている。火床部は、長さ25cm、短径15cmの楕円形で、深さ5cmほど掘りくぼめられている。

竈土層解説

- | | |
|---------------------------------------|---------------------------------------|
| 1 極暗褐色 焼土粒子多量, 炭化粒子中量 | 4 黒褐色 焼土粒子中量, 炭化物少量, ローム小ブロック・ローム粒子微量 |
| 2 極暗褐色 焼土粒子中量, 炭化粒子・粘土少量 | 5 極暗褐色 焼土粒子少量, 炭化物微量 |
| 3 黒褐色 焼土粒子中量, 炭化物少量, ローム小ブロック・ローム粒子微量 | |

ピット 3か所(P₁~P₃)。P₁~P₃は径21~25cmの円形、深さ24~44cmで、支柱穴と考えられる。

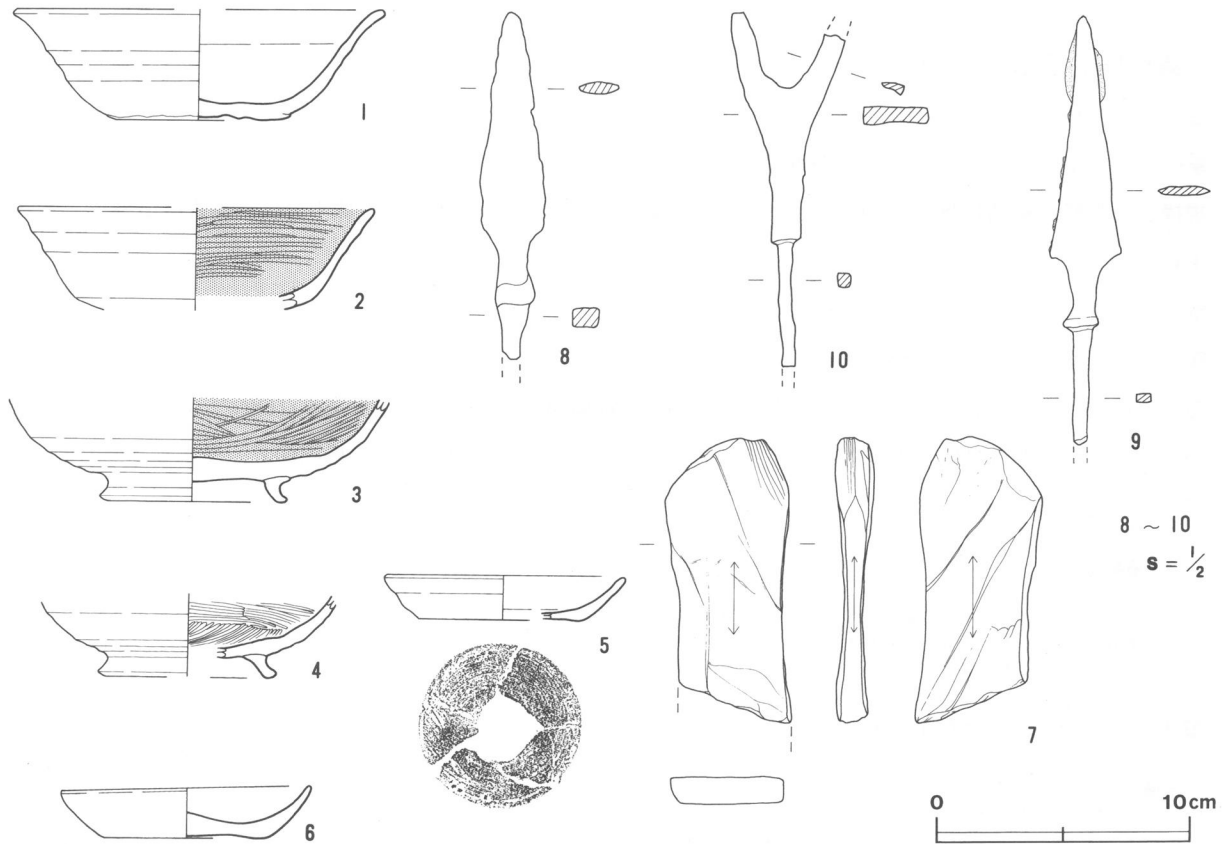
覆土 2層からなり、自然堆積と考えられる。

土層解説

- | |
|--|
| 1 極暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 極暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量, 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 |

遺物 土師器片456点、須恵器片11点、灰釉陶器片2点が出土している。第263図1の土師器坏は北側覆土中から、2の土師器坏は、内面が黒色処理されており中央部西側覆土下層から、3の土師器高台付坏は、内面が黒色処理されており、中央部やや西側覆土上層から出土している。4の土師器高台付坏は、竈内から出土している。5の土師器小皿は、中央部覆土下層から出土している。6の土師器小皿は、北壁側覆土中層から出土している。7の砥石は中央部覆土下層から出土している。8の鉄鏃は、中央部覆土中層、9の鉄鏃は、中央部やや西側覆土中層、10の鉄鏃は、竈内焚口部から出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から平安時代の10世紀以降と思われる。



第263図 第186号住居跡出土遺物実測図

第186号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第263図 1	坏土師器	A[14.4] B 4.4 C[7.2]	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部・体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒・石英・長石にぶい黄橙色普通	P 260 30% 覆土中
2	坏土師器	A[14.0] B(4.1)	体部・口縁部片。体部はわずかに内彎しながら立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ヘラ磨き。内面黒色処理。	細粒・雲母 外面灰褐色・内面黒色普通	P 261 20% 中央西側覆土下層
3	高台付坏土師器	B(4.1) D 6.9 E 0.9	高台部から体部にかけての破片。ハの字状に開く高台が付く。体部は内彎して立ち上がる。	体部外面ロクロナデ。内面ヘラ磨き。内面黒色処理。	砂粒・雲母・赤色粒子 外面にぶい橙色 内面黒色普通	P 264 40% 中央西側覆土上層
4	高台付坏土師器	B(3.3) D[6.6] E 0.8	底部・体部破片。体部はわずかに内彎しながら立ち上がる。	体部外面ロクロナデ。体部内面ヘラ磨き。	砂粒・赤色粒子 橙色 良好	P 265 20% 竈内
5	小皿土師器	A 9.4 B 1.8 C 6.4	底部欠損。体部は直線的に立ち上がり、口縁部に至る。	体部内・外面ロクロナデ。底部回転糸切り後、ナデ。	砂粒・長石・雲母・赤色粒子 橙色 普通	P 266 90% 中央部覆土下層
6	小皿土師器	A 9.7 B 2.1 C 6.4	口縁部一部欠損。体部は直線的に外傾して立ち上がる。	体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ切り後、無調整。	砂粒・雲母・赤色粒子 にぶい橙色 普通	P 267 90% 北壁側覆土中層

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
7	砥石	(11.4)	4.9	1.6	(92.0)	中央部覆土下層	Q19 凝灰岩
8	鉄鏝	(9.2)	1.7	0.3~0.5	(12.0)	中央部覆土中層	M27
9	鉄鏝	(11.4)	1.9	0.2	(12.0)	中央部やや西側覆土中層	M28
10	鉄鏝	(9.4)	3.0	0.8	(15.0)	竈内焚口部	M29

第187号住居跡（第264図）

位置 調査6区北西部，M16c1区。

重複関係 第199号住居跡が上部に構築されていることから，第199号住居跡より古い。

規模と平面形 長軸4.38m，短軸(1.50)mの長方形と考えられる。住居跡の東側半分は，調査区域外である。

主軸方向 N-20°-E

壁 壁高は約36~46cmで，外傾して立ち上がる。

床 ほぼ全面が踏み固められている。

竈 北壁の中央に付設されている。規模は長さ99cm，袖幅93cm，壁外への掘り込みは68cmである。山砂混じりの粘土を北壁に貼り付けて構築されている。火床部は，長径42cm，短径30cmの楕円形で，深さ6cmほど掘りくぼめられている。

竈土層解説

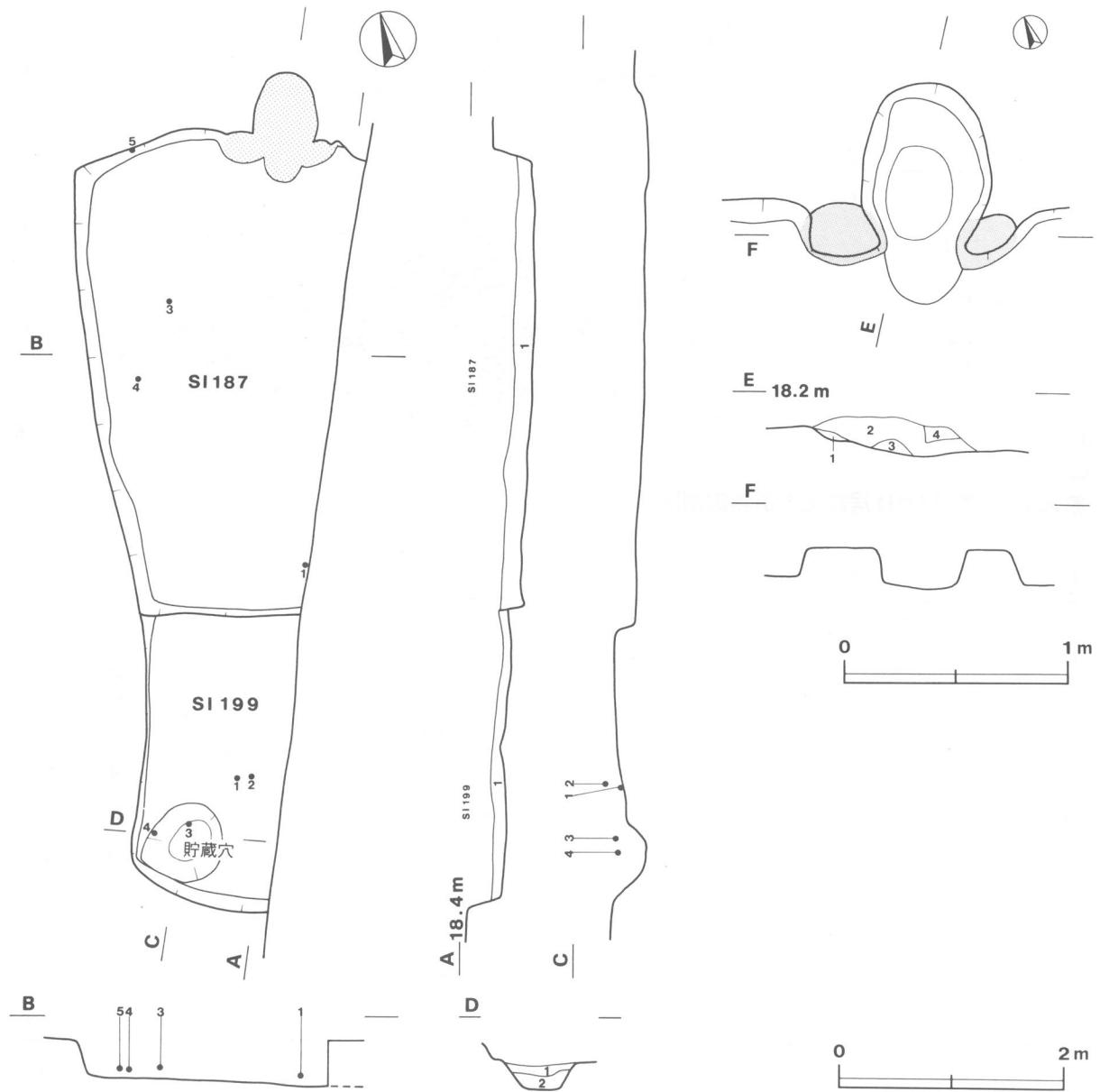
- 1 黒褐色 焼土粒子中量，炭化粒子少量
- 2 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子中量，炭化粒子・粘土少量
- 3 極暗褐色 焼土粒子多量，炭化物・炭化粒子少量
- 4 黒褐色 焼土粒子多量，炭化粒子少量，ローム粒子微量

覆土 単一層で，人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 炭化粒子・焼土粒子中量，ローム小ブロック少量

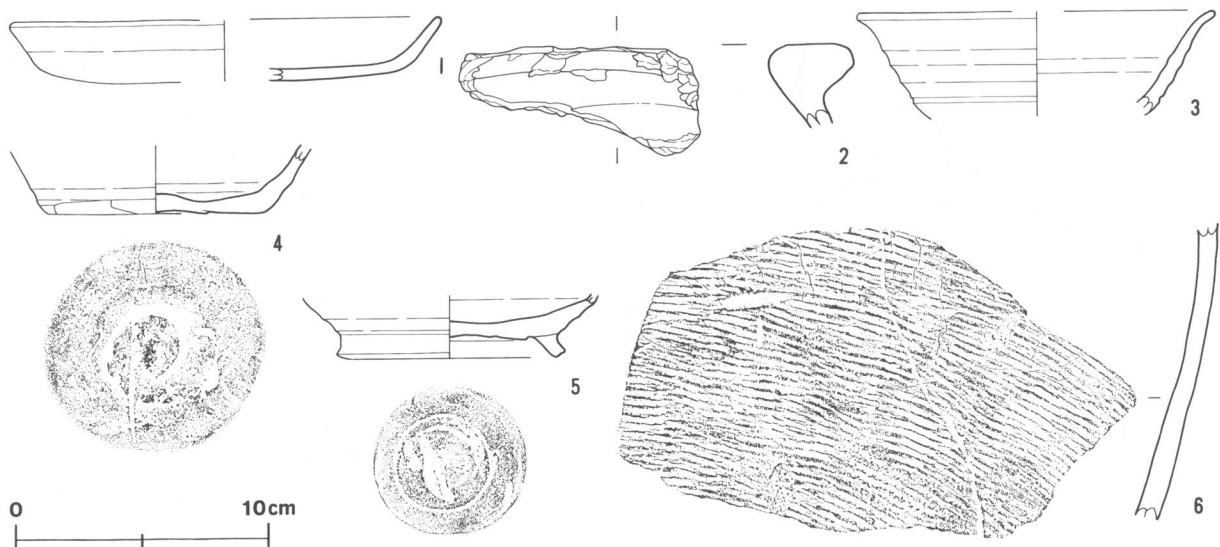
遺物 土師器片188点，須恵器片3点，陶器片1点が出土している。第265図1の土師器皿は，南側覆土下層か



第264図 第187・199号住居跡実測図

ら出土し、混入と考えられる。2の土師器置き竈は、覆土中から出土している。3の須恵器坏は、西側覆土下層から出土している。4の須恵器坏は、西壁側中央部覆土下層から出土している。5の須恵器高台付坏は、北西コーナー覆土下層から出土している。6の須恵器甕は、平行叩きが施され、覆土中から出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から奈良時代の8世紀後葉と考えられる。



第265図 第187号住居跡出土遺物実測図

第187号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第265図 1	皿 土師器	A[16.8] B 2.5 C[12.6]	体部は緩やかに内彎して立ち上がり、口縁部に至る。	体部内・外面横ナデ。底部外面ヘラ削り。	砂粒・石英・長石にぶい橙色普通	P268 20% 南側覆土下層
2	置き竈 土師器	A[28.0] B(4.3)	鏝の一部。鏝は外反する。	体部外面ナデ。煤付着。	砂粒・長石・雲母にぶい褐色普通	P270 5% 覆土中
3	坏 須恵器	A[14.0] B(4.2)	口縁部片。体部はゆるやかに内彎して立ち上がり、口縁端部で外反する。	口縁部・体部外面ロクロナデ。	砂粒・長石・雲母にぶい黄橙色普通	P271 5% 西側覆土下層
4	坏 須恵器	B(2.7) C 8.6	底部から体部にかけての破片。体部は直線的に立ち上がる。	体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部回転ヘラ切り後、雑なナデ。	長石・雲母灰白色普通	P272 20% 西壁側中央
5	高台付坏 須恵器	B(2.5) D 9.2 E 1.0	体部は内彎しながら外方に開く。高台はハの字状に開く。	内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒・長石・雲母暗灰色良好	P273 20% 北西コーナー 覆土下層

第188号住居跡（第266図）

位置 調査6区北部，L14j₄区。

重複関係 第194号住居跡を掘り込んでおり，第194号住居跡より新しい。

規模と平面形 長軸3.40m，短軸2.80mの長方形である。

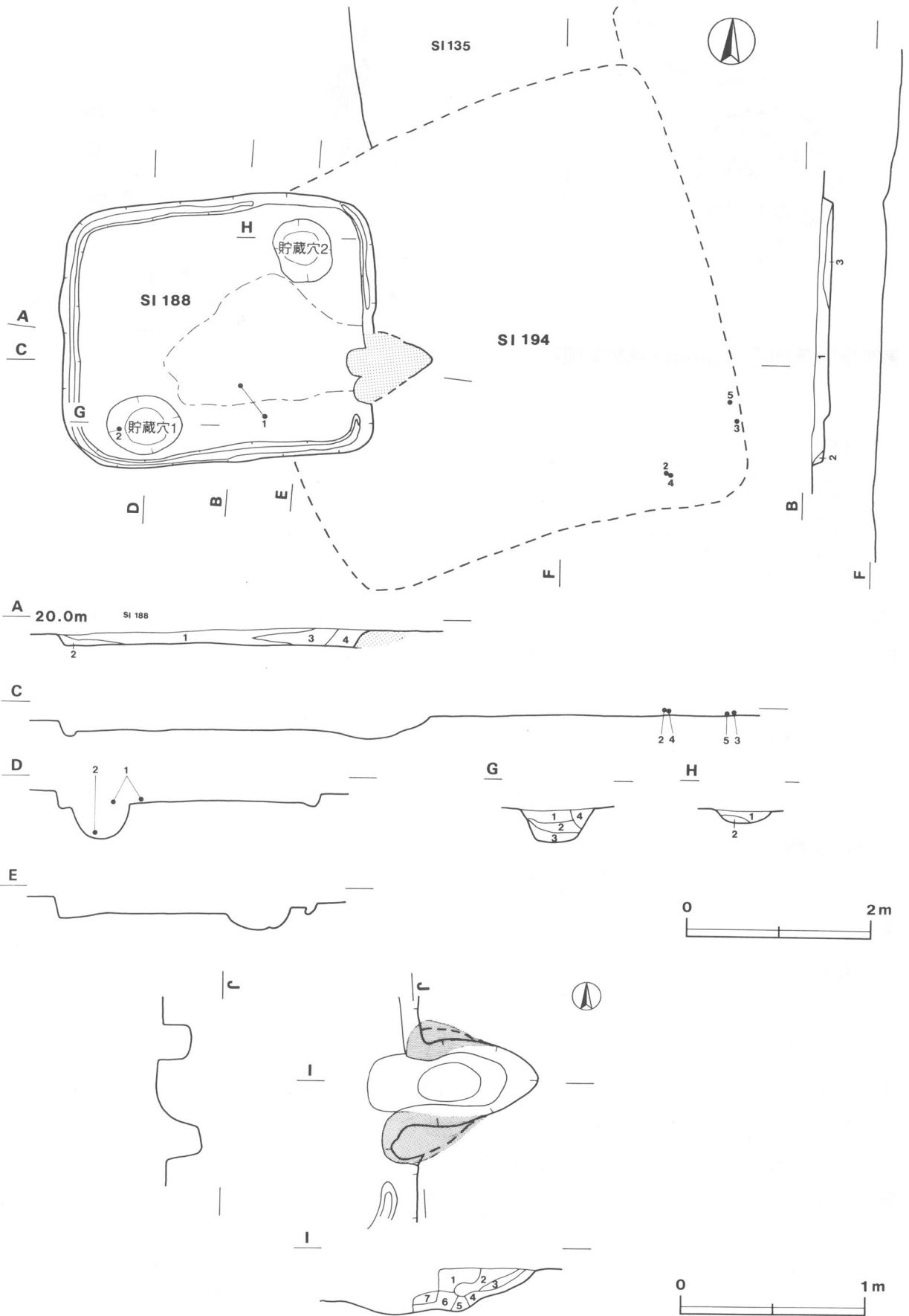
主軸方向 N-90°-E

壁 壁高は8～18cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

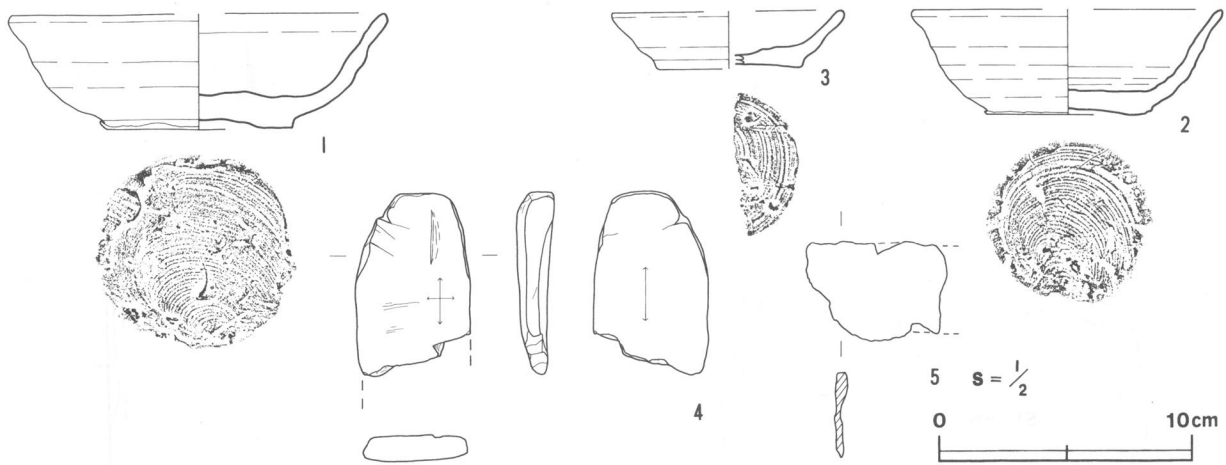
壁溝 上幅8～11cm，下幅3～8cm，深さ3～5cm，断面形は逆台形である。竈を除き壁下を巡っている。

床 全体的に平坦で，竈から中央部付近が踏み固められている。

竈 東壁南側に付設されている。規模は長さ93cm，袖幅76cmで，壁外への掘り込みは66cmである。袖部は山砂混じりの粘土で構築されている。火熱を受けた内壁は，一部焼けて赤色に硬化しており，長期間使用されたものと思われる。火床部は，長径35cm，短径20cmの楕円形で，4cmほど掘りくぼめられている。



第266图 第188・194号住居跡実測图



第267図 第188号住居跡出土遺物実測図

竈土層解説

- 1 黒褐色 粘土粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子・砂少量
- 2 黒褐色 焼土粒子・ローム粒子・砂中量, 粘土中ブロック少量
- 3 暗赤褐色 焼土粒子・砂中量, 炭化粒子・ローム粒子・粘土粒子少量
- 4 暗赤褐色 焼土粒子・ローム粒子・炭化粒子少量
- 5 極暗褐色 焼土粒子・ローム粒子少量
- 6 極暗褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子少量
- 7 極暗褐色 焼土粒子・ローム粒子中量

貯蔵穴 2か所確認され、貯蔵穴1は、南西コーナーに位置する。長径82cm、短径62cmの楕円形、深さ38cmで、断面形は皿状である。貯蔵穴2は、北東コーナーに位置する。長径70cm、短径60cmの楕円形、深さ20cmで、断面形は皿状である。

貯蔵穴1土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 粘土粒子少量, 炭化粒子・ローム粒子微量
- 4 暗褐色 粘土中ブロック少量, ローム粒子微量

貯蔵穴2土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子・焼土粒子微量

覆土 4層からなり、人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量
- 2 黒褐色 ローム粒子中量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量, ローム中・小ブロック中量
- 4 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量

遺物 土師器片126点、須恵器片17点が出土している。第267図1の土師器坏は、中央部南側下層から出土している。2の土師器坏は、貯蔵穴覆土下層から横位で出土している。3の土師器小皿は、竈内覆土中から出土している。4の砥石、5の不明鉄製品は、覆土中からそれぞれ出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から平安時代の10世紀以降と考えられる。

第188号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第267図 1	坏土師器	A[14.8] B 4.1 C 7.8	平底。突出した底部から、体部は内彎しながら大きく外に開く。口縁部は外反する。	内・外面ロクロナデ。底部回転糸切り後、無調整。	砂粒・長石・雲母にぶい橙色普通	P274 60% 中央部南側下層
2	坏土師器	A[12.3] B 4.2 C 6.4	体部は丸みをもって立ち上がり、口縁部は外反する。	内・外面ロクロナデ。底部回転糸切り。	砂粒・長石・赤色粒子にぶい黄橙色普通	P275 30% 貯蔵穴覆土下層
3	小皿土師器	A[9.0] B 2.3 C[5.8]	平底。突出した底部から、内彎気味に立ち上がり、口縁部に至る。端部は丸くおさまる。	内・外面ロクロナデ。底部回転糸切り後、無調整。	砂粒・長石・赤色粒子にぶい橙色普通	P276 20% 竈内覆土中

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
4	砥石	(7.2)	4.6	1.5	(53.0)	覆土中	Q21 凝灰岩
5	不明鉄製品	(3.7)	2.6	0.3	(4.5)	覆土中	M30

第189号住居跡（第268図）

位置 調査6区北部，L14j2区。

重複関係 第212号住居跡を掘り込んでいることから，第212号住居跡より新しい。

規模と平面形 長軸3.70m，短軸3.31mの長方形である。

主軸方向 N-2°-W

壁 壁高は約32~40cmで，外傾して立ち上がる。

床 支柱穴の内側が踏み固められている。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は長さ111cm，袖幅108cmで，壁外への掘り込みは30cmである。袖部，煙道部の残存状況は良好であり，袖部は粘土と山砂を混ぜて構築されている。火床部は長径34cm，短径24cmで8cmほど掘りくぼめられている。燃焼部奥から煙道部は，約30度の角度で立ち上がる。

竈土層解説

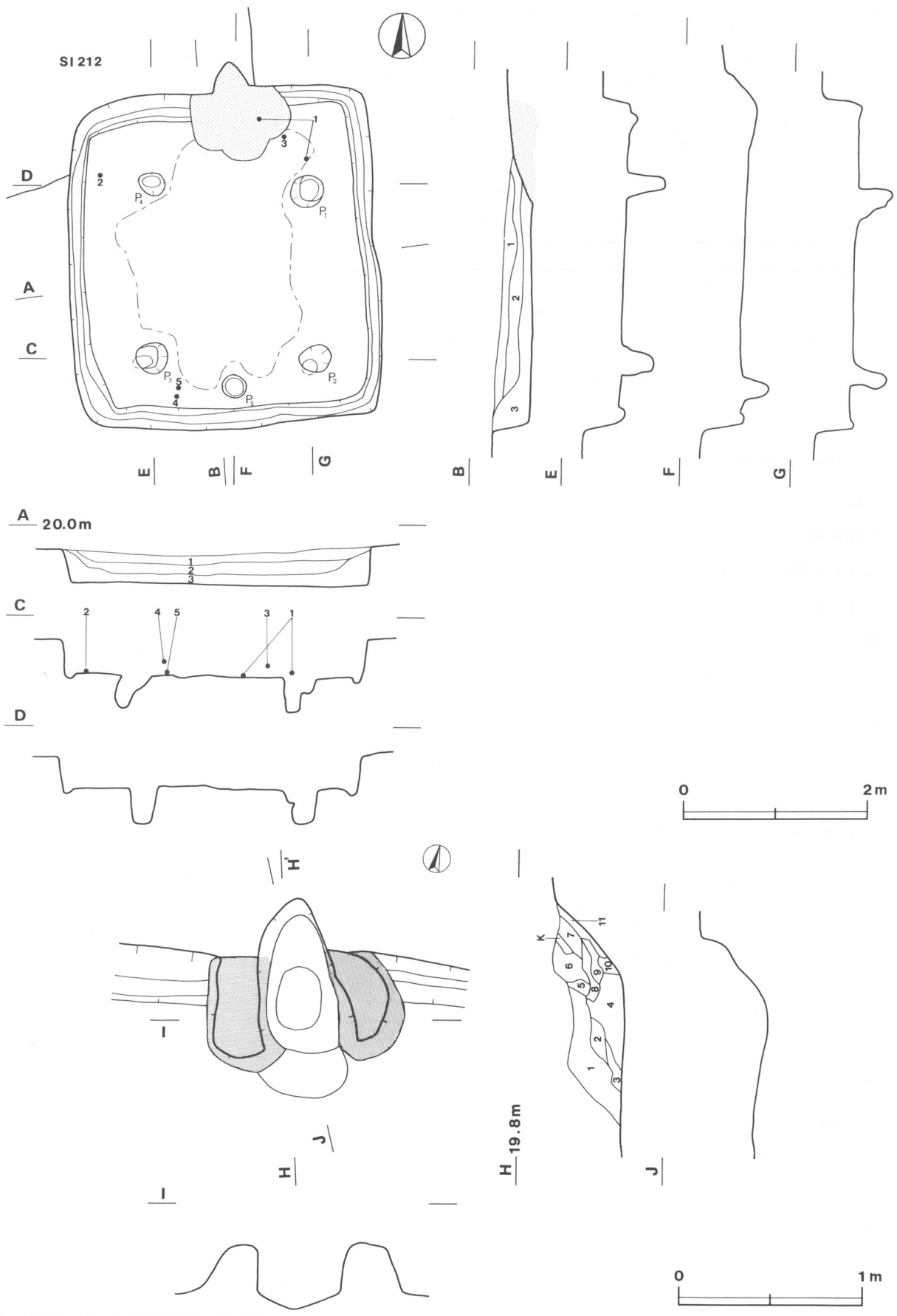
- 1 暗褐色 ローム粒子多量，砂少量，焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗赤褐色 焼土粒子多量，炭化粒子・ローム粒子微量
- 3 黒褐色 炭化粒子中量，ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子少量
- 4 赤褐色 焼土粒子・焼土小ブロック中量
- 5 暗赤褐色 焼土粒子少量，粘土粒子微量
- 6 赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子多量，炭化粒子・ローム粒子少量
- 7 橙褐色 焼土粒子少量，炭化粒子・ローム粒子・粘土小ブロック微量
- 8 赤褐色 焼土粒子・焼土小ブロック少量，砂微量
- 9 暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子・砂少量
- 10 赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量
- 11 暗褐色 ローム粒子多量，焼土粒子・ローム小ブロック少量

覆土 3層からなり，人為堆積と考えられる。

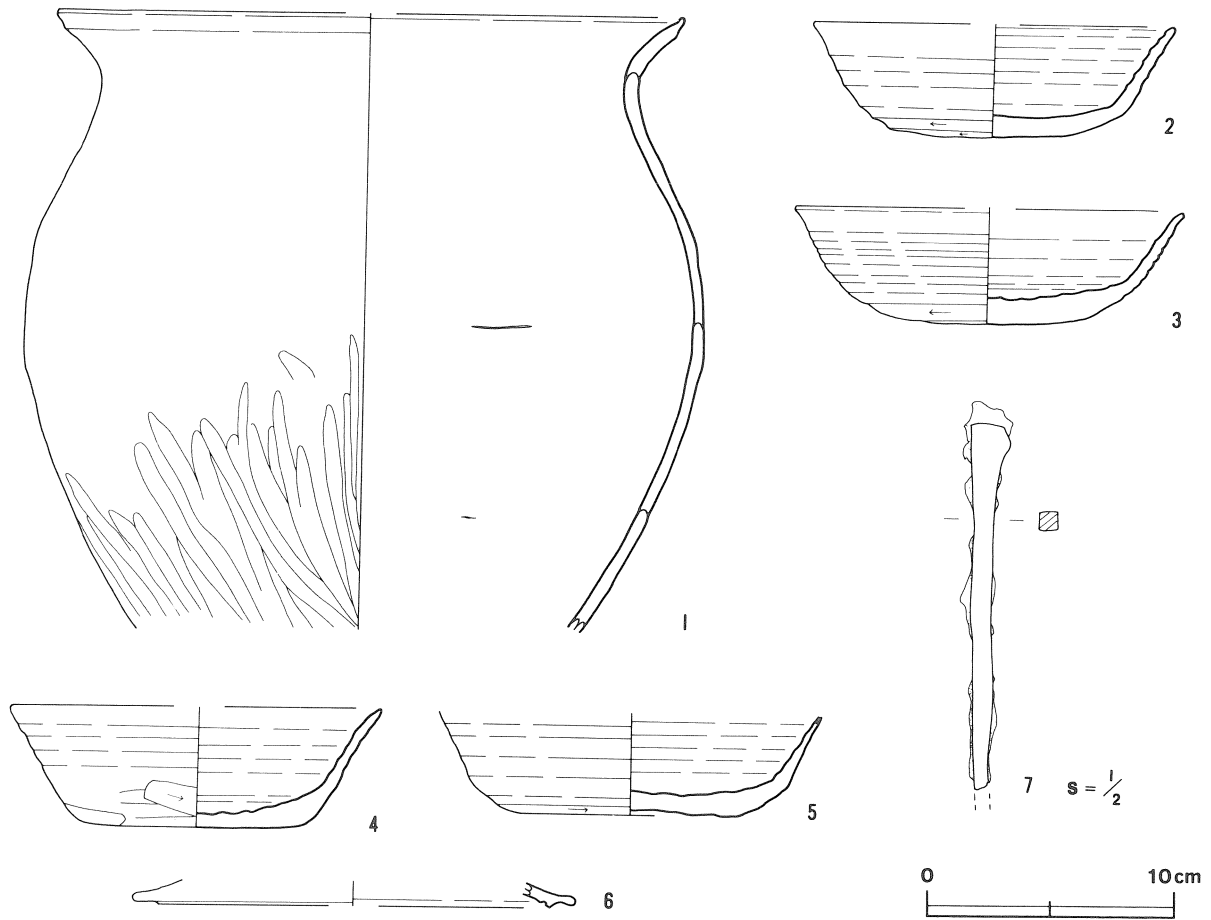
土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量，焼土粒子微量
- 2 極暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

ピット 5か所(P₁~P₅)。P₁，P₃の柱穴掘り方は，径36cmの円形，深さ37~39cmで，断面形は逆台形である。P₂，P₄は長径35cm，短径25cmの楕円形，深さ38cmで，断面形は逆台形である。いずれも支柱穴と考えられる。P₅は南壁中央の壁際から約10cmほど内側に位置し，竈と同一直線上にある。掘り方は径25cmの円形，深さ29cmで，出入り口施設に伴うピットと考えられる。



第268图 第189号住居跡実測図



第269図 第189号住居跡出土遺物実測図

遺物 土師器片92点、須恵器片10点が出土している。第269図1の土師器甕は、東壁側覆土下層から、2の須恵器坏は、北西側床面から、3の須恵器坏は、竈右袖部前面覆土中層から、4の須恵器坏は、南壁側覆土中層から、5の須恵器坏は、南壁側覆土下層から出土している。6の須恵器蓋は、南側覆土中から出土している。7の不明鉄製品は覆土中から出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から奈良時代の8世紀前葉であると考えられる。

第189号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第269図 1	甕 土師器	A[25.0] B(24.9)	体部から口縁部の破片。体部は緩やかに内彎して立ち上がる。口縁部はくの字状に折れ、端部は上方につまみ上げ、口唇部に稜線が巡る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面下半へら磨き。	砂粒・石英・赤色粒子にぶい橙色普通	P277 30% 東壁側覆土下層
2	坏 須恵器	A[14.4] B 4.5 C 7.2	丸みを帯びた平底。体部は緩やかに直線的に開きながら立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。	内・外面ロクロナデ。底部回転へら削り。	石英・長石・雲母 灰黄褐色 普通	P278 60% 北西側床面
3	坏 須恵器	A[15.6] B 4.7 C 8.1	丸みを帯びた平底。体部は外に開きながら立ち上がり、口縁部は外反する。	内・外面ロクロナデ。底部回転へら削り後、棒状工具による当て具痕。	砂粒・長石・雲母 灰黄褐色 普通	P279 80% 竈右袖部 前面覆土中層
4	坏 須恵器	A[14.7] B 4.9 C 8.0	平底。体部は外に開きながら立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	内・外面ロクロナデ。底部回転へら削り。体部下位手持ちへら削り。	砂粒・長石・雲母 灰黄褐色 不良 二次焼成	P280 50% 南壁側覆土中層

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第269図 5	坏 須恵器	B(4.1) C 8.8	平底。体部は開きながら立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り。	砂粒・雲母 灰黄褐色 普通	P 281 60% 南壁側覆土下層
6	蓋 須恵器	A[17.8] B(1.0)	口縁部片。口縁部は短く、丸みがある。内側には短いかえりが付く。	口縁部内・外面ロクロナデ。	砂粒・雲母 灰白色 普通	P 282 5% 南側覆土中

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
7	不明鉄製品	(10.5)	1.3	0.6	(16.0)	覆土中	M31

第191号住居跡（第270図）

位置 調査6区北部，M14a1区。

規模と平面形 長軸3.80m，短軸2.80mの長方形である。

主軸方向 N-73°-E

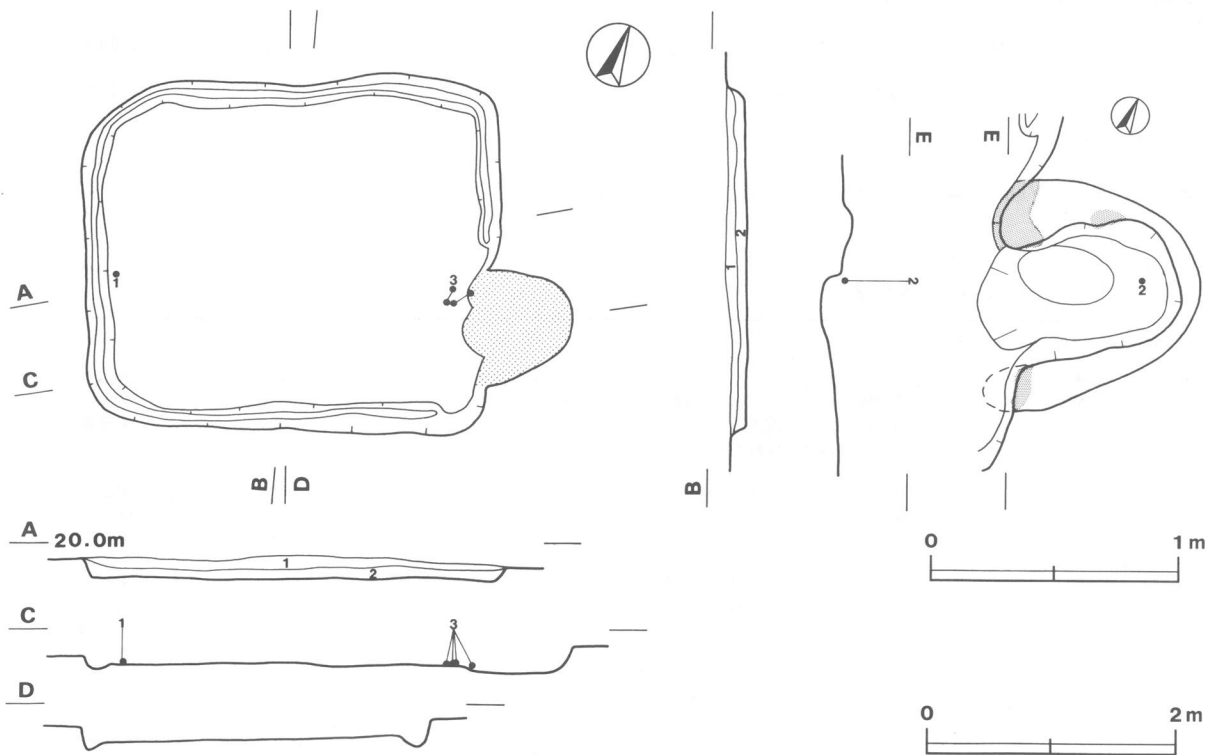
壁 壁高は8～14cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝 上幅13～15cm，下幅4～9cm，深さ4～8cmで，断面形はU字形で，全周している。

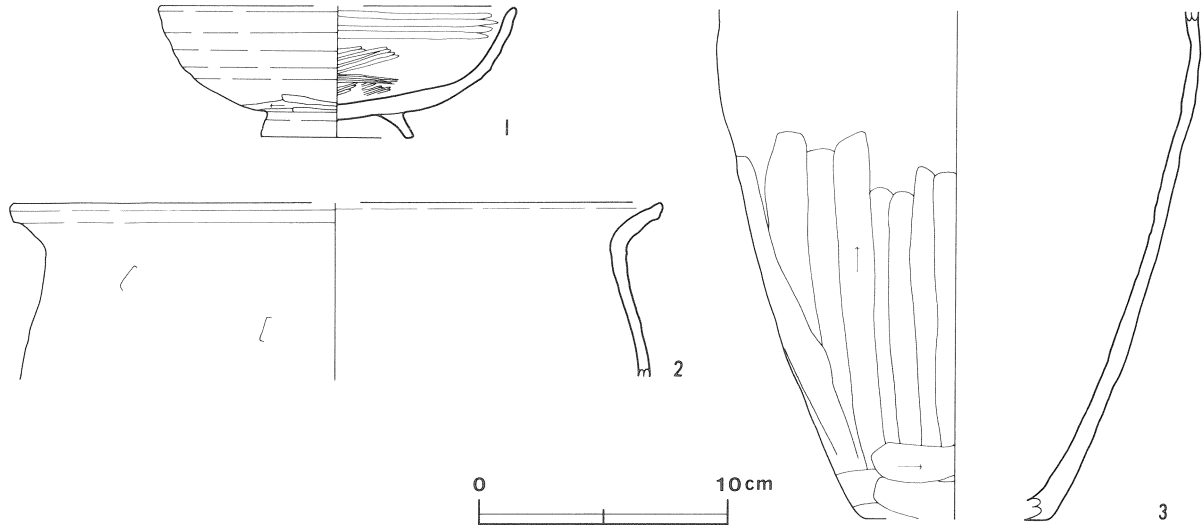
床 全体的に平坦で，踏み固められている。

竈 東壁南東部に付設されている。規模は長さ89cm，袖幅93cm，壁外への掘り込みは67cmで，平面形は逆U字形である。右袖部は削平されているが，粘土を貼り付けて構築している。火床部は，長径38cm，短径23cmの楕円形で，深さ10cmほど掘りくぼめられている。覆土が浅く，竈土層は確認できない。

覆土 2層からなり，自然堆積と考えられる。



第270図 第191号住居跡実測図



第271図 第191号住居跡出土遺物実測図

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子少量, 炭化粒子微量
- 2 極暗褐色 ローム小ブロック中量, ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量

遺物 土師器片273点, 須恵器片15点, 礫3点が出土している。第271図1の土師器高台付坏は西壁中央床面から, 2の土師器甕は, 竈の火床部奥から, 3の土師器甕は竈左袖部前面床面からそれぞれ出土している。竈内から, 雲母片岩が3点出土している。竈土層断面覆土から雲母片岩の流入が見られ, 袖の芯材に使用されたものと考えられる。

所見 本跡の時期は, 出土遺物から平安時代の10世紀以降と考えられる。

第191号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第271図 1	高台付坏 土師器	A[14.4] B 5.3 D 6.2 E 1.0	高台部から口縁部にかけての破片。体部は丸みを持って立ち上がり, 口縁部に至る。高台はハの字状に開く。	体部下端手持ちヘラ削り。底部回転ヘラ削り後, 高台貼り付け。内面ヘラ磨き。	砂粒・長石・雲母 灰褐色 普通	P 284 60% 西壁中央床面
2	甕 土師器	A[26.2] B(7.0)	体部上位から口縁部片。体部は緩やかに立ち上がり, 口縁部は短く外へ開く。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナデ。体部内面ナデ。	砂粒・長石・赤色粒子 橙色 普通	P 285 5% 竈火床部奥
3	甕 土師器	B(20.6) C[7.4]	底部から体部にかけての破片。体部は緩やかに立ち上がる。	体部外面ヘラ削り。体部下端手持ちヘラ削り。	砂粒・石英・長石・赤色粒子 褐色 良好	P 286 20% 竈左袖部前面床面

第192号住居跡 (第272図)

位置 調査6区北西部, M14c2区。

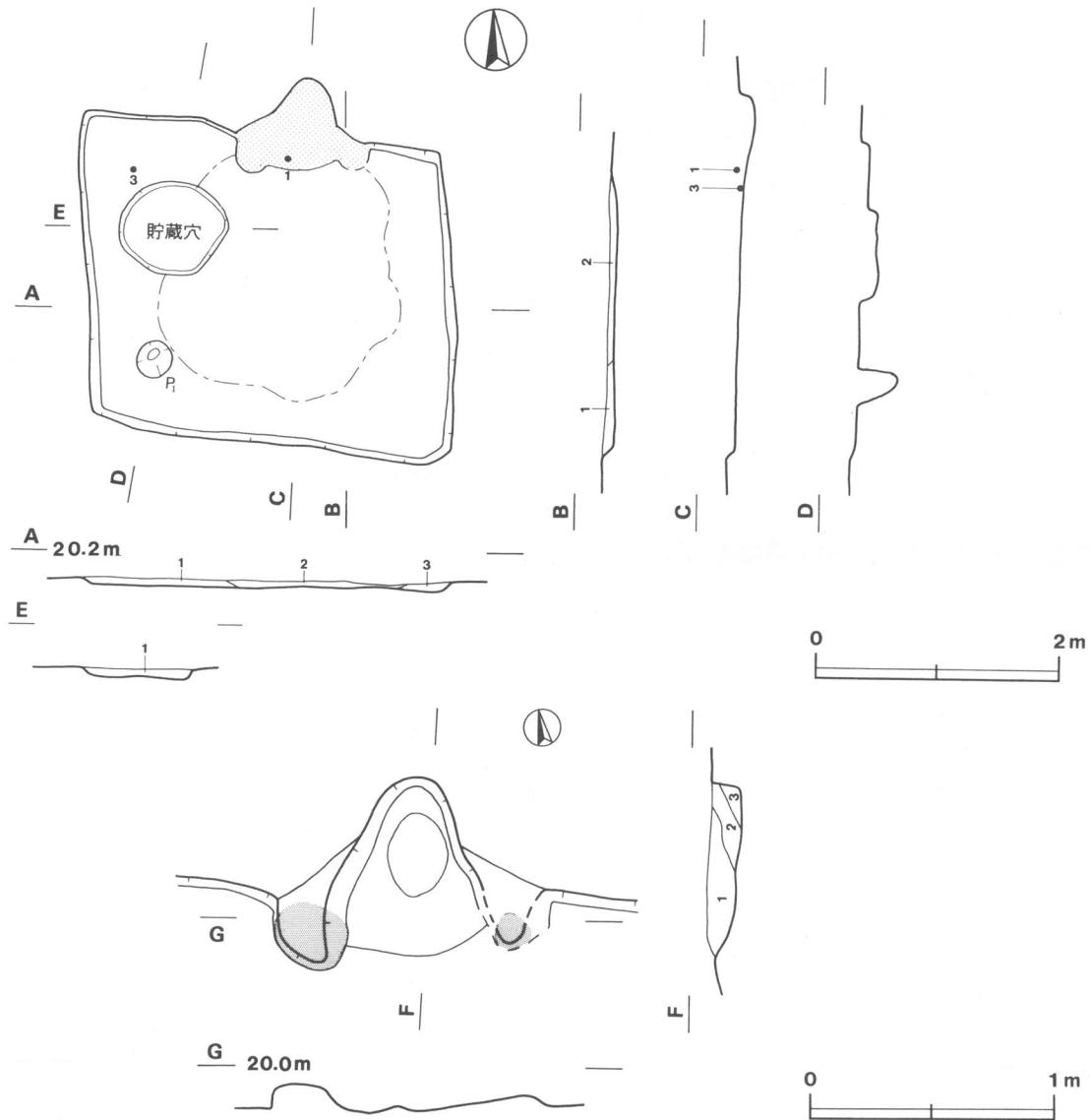
規模と平面形 長軸3.00m, 短軸2.60mの長方形である。

主軸方向 N-10°-E

壁 壁高は4~10cmで, 外傾して立ち上がる。

床 全体的に平坦で, 竈から中央部にかけて踏み固められている。

竈 北壁やや東側に付設されている。規模は長さ72cm, 袖幅101cm, 壁外への掘り込みは67cmで, 平面形は三



第272図 第192号住居跡実測図

角形である。袖部は山砂混じりの粘土を貼り付けて構築されている。火床部は長径35cm,短径24cmの楕円形で、わずかに掘りくぼめられている。燃焼部奥から煙道部へは20度の角度で緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子少量, ローム粒子微量
- 2 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子中量, 炭化粒子少量
- 3 褐色 ローム粒子微量

ピット 1か所(P₁)。P₁は径31cmの円形, 深さ33cmで, 断面形は逆台形で支柱穴と考えられる。

貯蔵穴 北西コーナーに位置する。長径90cm, 短径72cmの楕円形, 深さ14cmで, 断面形は逆台形である。

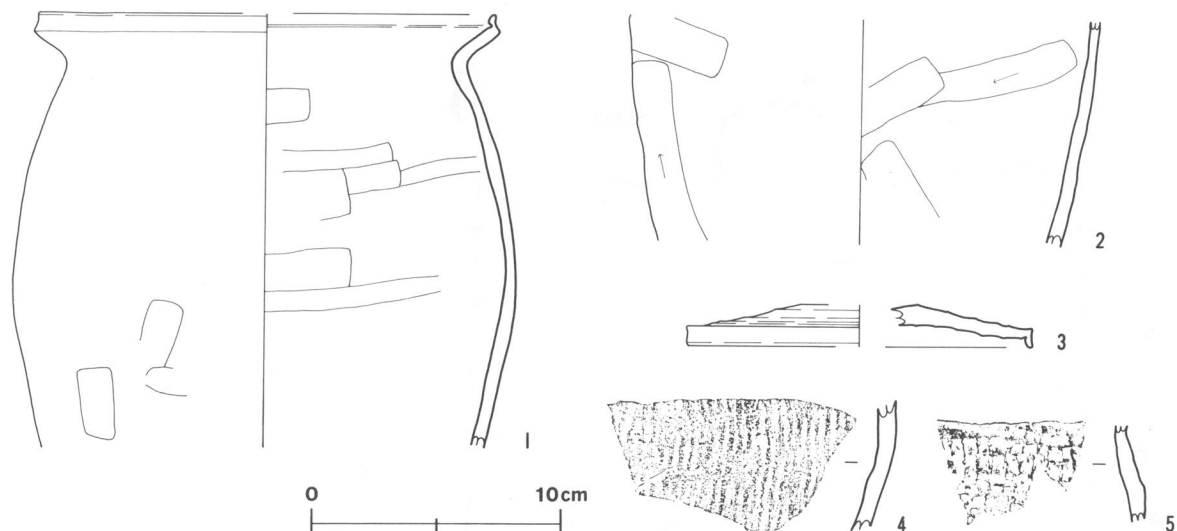
貯蔵穴土層解説

- 1 褐色 焼土粒子・ローム粒子少量

覆土 3層からなり, 人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量, ローム小ブロック微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック中量, 炭化粒子微量



第273図 第192号住居跡出土遺物実測図

遺物 土師器片132点，須恵器片5点が出土している。第273図1の土師器甕は，竈右袖部内から，2の土師器甕は覆土中から，3の須恵器蓋は，北西側の床面からそれぞれ出土している。4の須恵器甕は北東側覆土下層から，5の須恵器甕は覆土中からそれぞれ出土している。

所見 本跡の時期は，出土遺物から平安時代の9世紀中葉と考えられる。

第192号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第273図 1	甕 土師器	A[18.2] B(17.5)	体部から口縁部の破片。体部は緩やかに内彎して立ち上がる。口縁部はくの字状に折れ，端部は上方につまみ上げられ，口唇部に沈線が巡る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後，ナデ。体部内面ヘラナデ。	砂粒・長石・雲母・赤色粒子にぶい褐色普通	P287 15% 竈右袖部内
2	甕 土師器	B(9.1)	体部片。体部は緩やかに外傾して，立ち上がる。	体部内・外面ヘラ削り。	砂粒・長石・雲母 橙色普通	P288 5% 覆土中
3	蓋 須恵器	A[13.8] B(1.7)	つまみ欠損。天井部は低く扁平で器壁が厚い。口縁部は短く屈曲する。	天井部内面から口縁部外面ロクロナデ。天井部外面回転ヘラ削り。	砂粒・雲母 灰白色普通	P289 5% 北西側床面

第193号住居跡（第274図）

位置 調査6区中央部，M14d7区。

重複関係 第152・197・198号住居跡を掘り込んでいることから，本跡は第152・197・198号住居跡より新しい。

規模と平面形 長軸4.90m，短軸4.80mの方形である。

主軸方向 N-15°-E

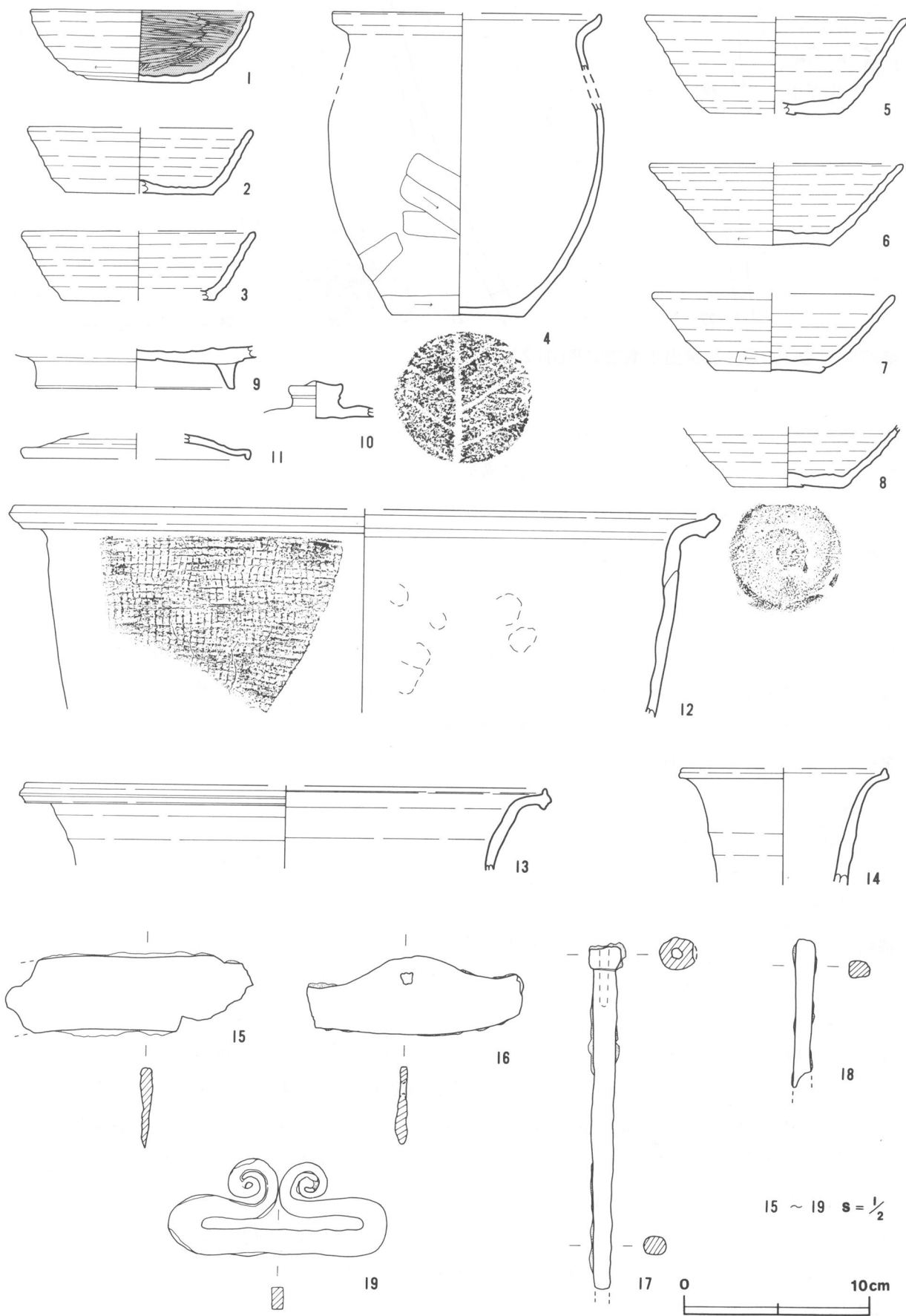
壁 壁高は44cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝 上幅14~33cm，下幅4~8cm，深さ4~9cmで，断面形はU字形で，全周している。

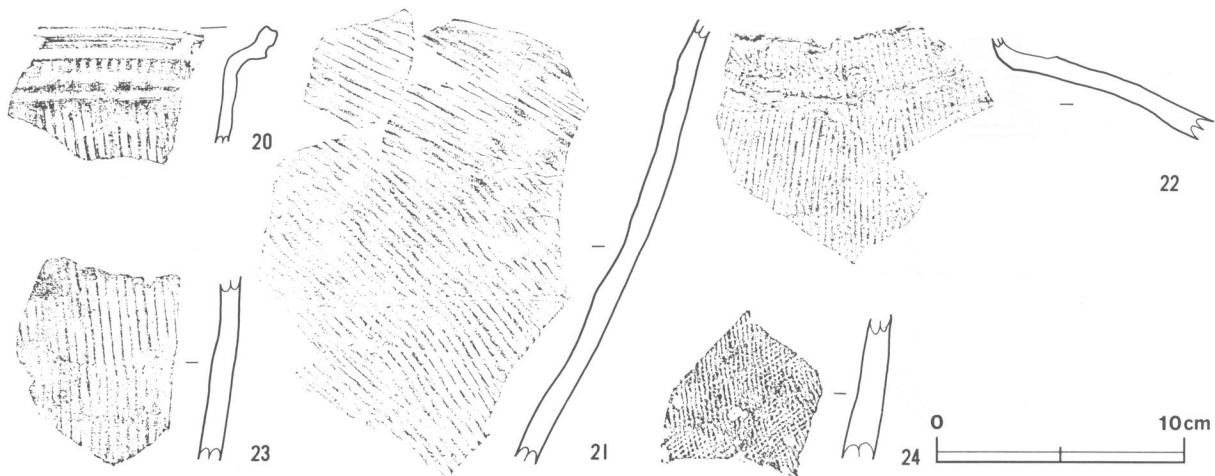
床 全体的に平坦で，南壁から竈にかけての中央部が踏み固められている。



第274图 第193号住居跡実測図



第275图 第193号住居跡出土遺物実測図(1)



第276図 第193号住居跡出土遺物実測図(2)

竈 北壁中央部に付設されている。規模は長さ155cm, 袖幅220cm, 壁外への掘り込みは72cmで, 平面形は三角形である。袖部は山砂混じりの粘土を貼り付けて構築されている。火床部は長径53cm, 短径33cmの不整楕円形で, わずかに7cmほど掘りくぼめられている。燃焼部奥から煙道部へは20度の角度で立ち上がる。

竈土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子少量, 炭化粒子・焼土小ブロック微量
- 2 黒褐色 焼土粒子中量, 炭化粒子少量, 焼土小ブロック微量
- 3 黒褐色 焼土粒子中量, 炭化粒子少量

ピット 4か所(P₁~P₄)。P₁は長径28cm, 短径18cmの楕円形, P₂は長径26cm, 短径20cmの楕円形, 深さ32cm, P₃は長径20cm, 短径16cmの楕円形, 深さ34cm, P₄は長径24cm, 短径20cmの楕円形で, 断面形は逆台形で支柱穴と思われる。P₁とP₄は北壁下の壁溝内にある。

覆土 5層からなり, 自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 極暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 焼土小ブロック微量
- 3 黒褐色 炭化物・炭化粒子中量, ローム粒子少量
- 4 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 5 黒褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量

遺物 土師器片608点, 須恵器片66点, 陶器片4点が出土している。第275図1の土師器坏は, 内面が黒色処理されており, 中央部やや東側覆土上層から出土している。2, 3の土師器坏は, 覆土中から, 4の土師器甕は, 中央部覆土下層から出土している。5の須恵器坏は, 北東コーナーの壁側覆土中層から, 6の須恵器坏は, 南東側覆土上層から, 7, 8の須恵器坏は, 覆土中から, 9の須恵器高台付坏は, 中央部覆土中層から, それぞれ出土している。10, 11の須恵器蓋は, 覆土中から, 12の須恵器甕は, 西側覆土中層から, それぞれ出土している。13の須恵器甕, 14の須恵器長頸瓶の頸部は, 覆土中から, それぞれ出土している。15の鉄鎌は中央部やや南側覆土中層から, 16の火打ち金は南西側覆土中層から, 17の不明鉄製品は, 南東側覆土下層から, 18の不明鉄製品は竈前面部から, 19の不明鉄製品は西側覆土下層から, それぞれ出土している。20の須恵器甕は覆土中から, 21の須恵器甕は竈前面部から, 22の須恵器甕は覆土上層から, 23の須恵器甕は覆土中層から, 24の須恵器甕は覆土中から出土し, それぞれ体部に叩きが施されている。

所見 本跡の時期は, 遺構の形態と出土遺物から平安時代の9世紀中葉と考えられる。

第193号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第275図 1	坏 土師器	A 11.9 B 4.1 C 5.5	底部から口縁部にかけての破片。体部は緩やかに内彎して立ち上がり、口縁部に至る。	内・外面ロクロナデ。内面ヘラ磨き。底部回転ヘラ削り。内面黒色処理。	砂粒・雲母 外面にぶい赤褐色 内面黒色 普通	P 290 70% 中央部やや東側
2	坏 土師器	A[12.1] B 3.6 C[8.0]	底部から口縁部にかけての破片。体部は直線的に立ち上がり、口縁部に至る。	内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り。	砂粒・雲母・赤色粒子 橙色 普通	P 291 10% 覆土中
3	坏 土師器	A[12.6] B 3.7 C[8.2]	体部から口縁部にかけての破片。体部は直線的に立ち上がり、口縁部に至る。	内・外面ロクロナデ。	砂粒・赤色粒子 橙色 普通	P 292 10% 覆土中
4	甕 土師器	A[14.5] B(14.7) C 7.1	体部一部欠損。体部は緩やかな膨らみをもって立ち上がる。口縁部は外方に開く。口縁端部は上方につまみ上げられている。	内・外面ロクロナデ。体部下位ヘラ削り。底部に木葉痕有り。	砂粒・長石・石英・雲母 明赤褐色 良好	P 293 70% 中央部覆土下層
5	坏 須恵器	A[14.1] B 5.3 C[7.0]	底部から体部にかけての破片。平底。体部は開きながら立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り。	砂粒・長石・雲母 灰色 普通 二次焼成	P 295 30% 北東コーナー壁側
6	坏 須恵器	A[13.6] B 4.4 C 6.2	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は直線的に外反して立ち上がる。	体部内・外面ロクロナデ。体部下端回転ヘラ削り。底部一方向のヘラ削り。	砂粒・長石 灰色 普通	P 296 40% 南東側覆土上層
7	坏 須恵器	A[13.0] B 4.2 C 5.7	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部はわずかに内彎気味に立ち上がり、口縁部に至る。	内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部一方向のヘラ削り。	砂粒・長石・赤色粒子 にぶい黄褐色 普通	P 297 40% 覆土中
8	坏 須恵器	B(3.3) C 5.8	底部から体部にかけての破片。平底。体部は直線的に外反して立ち上がる。	内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ切り後、無調整。	砂粒・長石 黄灰色 普通	P 298 30% 覆土中
9	高台付坏 須恵器	B(2.4) D[10.6] E 1.5	高台部片。高台はわずかに外方に開く。	体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り。高台貼り付け。	砂粒・石英・長石・雲母・赤色粒子 黄灰色 普通 煤付着	P 299 15% 中央部覆土中層
10	蓋 須恵器	B(2.0) F 3.0 G 1.4	蓋のつまみ部。つまみは中央が突出したボタン状を呈する。	ロクロナデ。	砂粒・石英 灰色 普通	P 300 5% 覆土中
11	蓋 須恵器	A[12.2] B(1.4)	つまみ欠損。天井部は低く扁平で、口縁部は短く屈曲する。	天井部内面から口縁部外面ロクロナデ。天井部外面回転ヘラ削り。	砂粒・石英 灰色 普通	P 301 5% 覆土中
12	甕 須恵器	A[38.0] B(11.0)	体部上位から口縁部の破片。体部は緩やかに外方に開きながら立ち上がる。口縁部はほぼ直角に外反し、端部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面ロクロナデ。体部内面指頭押圧。体部外面格子目状の叩き。輪積み痕。	砂粒・長石・雲母 にぶい褐色 普通	P 303 10% 西側覆土中層
13	甕 須恵器	A[28.1] B(4.5)	体部上位から口縁部の破片。体部は外方に開きながら立ち上がる。口縁部はほぼ直角に外反し、端部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面ロクロナデ。	細砂 灰色 普通	P 304 5% 覆土中
14	長頸瓶 須恵器	A[10.8] B(6.3)	頸部は外傾して立ち上がり、口縁部は外反する。口縁端部は外上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面ロクロナデ。	石英・長石 灰色 普通	P 305 15% 覆土中

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
15	鎌	(8.8)	3.1	0.4	(18.0)	中央部やや南側覆土中層	M32
16	火打ち金	(7.8)	2.9	0.5	(31.0)	南西側覆土中層 孔径0.4cm	M33
17	不明鉄製品	(12.5)	1.3	1.1	(27.0)	南東側覆土下層	M34
18	不明鉄製品	(5.4)	(0.8)	0.6	(6.0)	竈前面部	M35
19	不明鉄製品	7.8	3.5	0.4	34.0	西側覆土下層	M37

第195号住居跡（第94・95図）

位置 調査6区北部，M14b8区。

重複関係 第150・152・180・181号住居跡を掘り込んでおり，第180号住居跡の上部に構築されていることから，第150・152・180・181号住居跡より新しく，第151号住居跡が上部に構築されていることから，第151号住居跡より古い。

規模と平面形 長軸3.60m，短軸3.45mの方形である。

主軸方向 N-1°-E

壁 壁高は4~12cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝 上幅15~27cm，下幅5~12cm，深さ6~8cmで，断面形はU字形で，ほぼ全周している。

床 全体的に平坦で，出入り口ピットから竈にかけての広い範囲で踏み固められている。

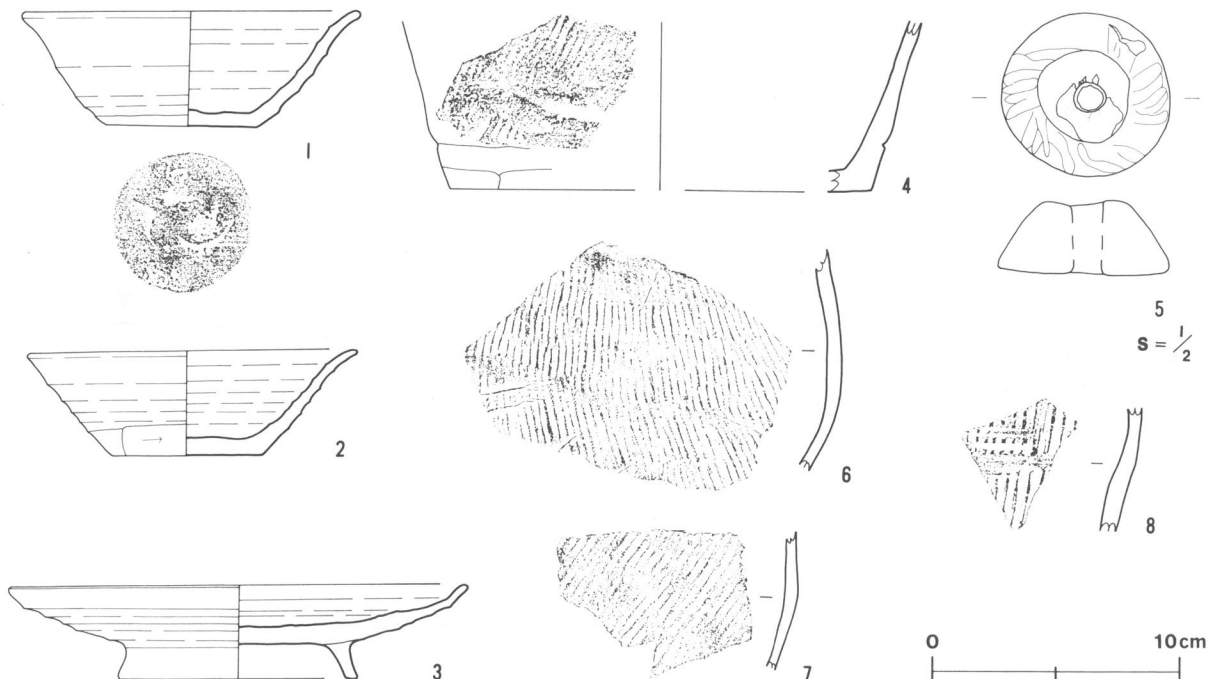
竈 北壁中央部に付設されている。規模は長さ90cm，袖幅105cm，壁外への掘り込みは28cmで，平面形は逆U字形である。袖部は山砂混じりの粘土を北壁に貼り付けて構築されている。火床部は長径24cm，短径19cmの楕円形で，6cmほど掘りくぼめられている。燃烧部奥から煙道部へは25度の角度で緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量
- 2 極暗褐色 焼土粒子・炭化粒子中量，ローム粒子少量
- 3 極暗褐色 焼土粒子多量，炭化物・粘土中量
- 4 黒褐色 焼土粒子多量，炭化物・粘土少量
- 5 黒褐色 焼土粒子・炭化物多量

ピット 1か所(P₁)。P₁は南壁中央の壁際から35cmほど内側に位置し，径33cmの円形，深さ28cmで，出入り口施設に伴うピットと考えられる。

遺物 土師器片175点，須恵器片50点，土製品1点，鉄滓1点が出土している。第277図1の須恵器坏は，北壁東側付近床面から，2の須恵器坏は，南壁中央部覆土上層から斜位でそれぞれ出土している。3の須恵器盤は，南東側床面から出土している。4の須恵器甑は，竈左袖付近床面から出土している。5の紡錘車は，南壁覆土



第277図 第195号住居跡出土遺物実測図

下層から出土している。6～8の須恵器甕体部片は叩きが施されており、覆土中から出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から平安時代の9世紀中葉と考えられる。

第195号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第277図 1	坏 須恵器	A 13.6 B 4.8 C 5.6	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。	内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ切り後、一方向のヘラ削り。	砂粒・赤色粒子・長石・石英・雲母にぶい黄褐色普通	P312 90% 北壁東側付近床面
2	坏 須恵器	A 13.0 B 4.2 C 6.0	体部・口縁部一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。	内・外面ロクロナデ。底部下端回転ヘラ削り。底部回転ヘラ切り後、ナデ。	長石・雲母にぶい褐色普通	P313 90% 南壁中央覆土上層
3	盤 須恵器	A 18.2 B 3.8 D 9.5 E 1.4	口縁部一部欠損。高台部はハの字状に開く。体部は強く開き、口縁部の境に稜を持つ。口縁部は直線的に外傾する。	口縁部から体部にかけて内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ切り。高台貼り付け後、ナデ。	長石・雲母灰色普通	P314 85% 南東側床面
4	甕 須恵器	B (6.8) C [17.0]	底部・体部片。底部から体部にかけて直線的に外傾して立ち上がる。	体部内面ナデ。体部外面斜位の平行叩き。体部下端手持ちヘラ削り。	長石・雲母灰色普通	P315 10% 甕左袖付近床面

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
5	紡錘車	4.5	2.0	0.8	38.0	南壁覆土下層	D P10 粘板岩

第199号住居跡 (第264図)

位置 調査6区北西部, M15dol区。

重複関係 第187号住居跡を掘り込んでいることから、第187号住居跡より新しい。

規模と平面形 長軸(2.60)m, 短軸(1.30)mである。住居跡の東側半分以上は調査区域外のため、平面形は不明である。

長軸方向 [N-25°-E]

壁 壁高は29～34cmで、外傾して立ち上がる。

床 ほぼ全面が踏み固められており、中央部に凹凸がみられる。

貯蔵穴 南西コーナー部に付設されている。長径70cm, 短径65cmの不整楕円形, 深さ10cm, 断面形は逆台形である。

貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子少量, 炭化粒子・粘土粒子微量 2 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子少量, 粘土粒子微量

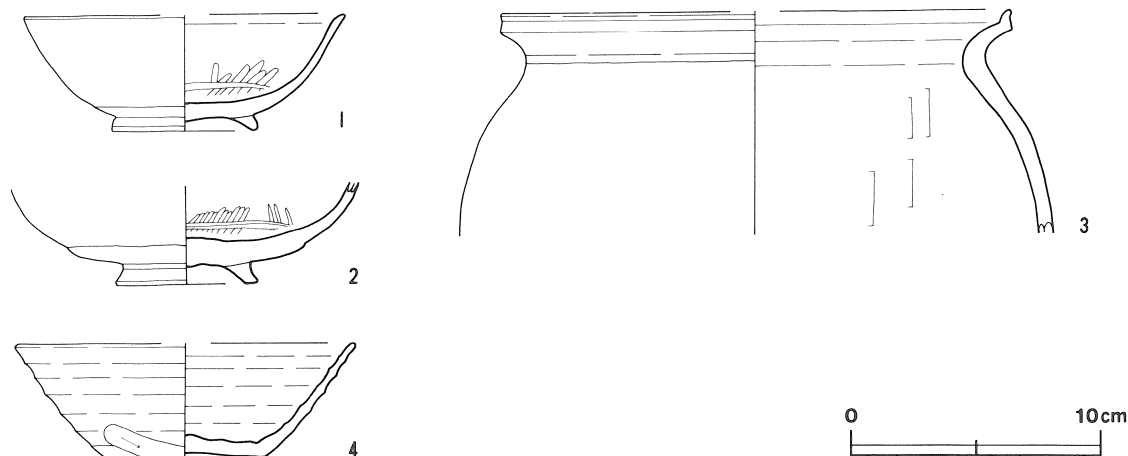
覆土 単一層で、人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子・ローム小ブロック少量

遺物 土師器片5点, 須恵器片1点が出土している。第278図1の土師器高台付坏は、中央部床面から出土している。2の土師器高台付坏は、中央部覆土上層から、3の土師器甕, 4の須恵器坏は、貯蔵穴覆土中層から出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から平安時代の10世紀以降と考えられる。



第278図 第199号住居跡出土遺物実測図

第199号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第278図 1	高台付坏 土師器	A[12.8] B 4.7 D 5.8 E 0.6	底部と体部の境は緩やかな稜をなして立ち上がる。高台は厚く短く、接地面は平坦である。	体部外面ロクロナデ。内面ヘラ磨き。底部回転ヘラ切り後、高台貼り付け。	砂粒・長石・雲母にぶい黄橙色 普通	P341 40% 中央部床面
2	高台付坏 土師器	B(4.0) D 5.6 E 0.9	高台・体部片。体部は内彎して立ち上がる。体部下端に稜を有する。	体部外面ロクロナデ。内面ヘラ磨き。底部回転ヘラ切り後、高台貼り付け。体部下端回転ヘラ削り。	砂粒・長石・雲母にぶい黄橙色 普通	P342 40% 中央部上層
3	甕 土師器	A[30.4] B(9.0)	体部から口縁部の破片。体部は緩やかに立ち上がる。口縁部はくの字状に折れ、端部は短くつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・赤色粒子・雲母にぶい橙色 普通	P343 10% 貯蔵穴覆土中層
4	坏 須恵器	A[13.4] B 4.6 C 6.4	平底。体部は外に開きながら立ち上がる。	内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部一方向の手持ちヘラ削り。	砂粒・長石・雲母 灰白色 普通	P344 30% 貯蔵穴覆土中層

第200号住居跡 (第279図)

位置 調査6区北部, M15as区。

規模と平面形 長軸[3.80]m, 短軸[3.70]mで, 方形と推定される。

主軸方向 [N-5°-W]

壁 壁高は2cm程度である。

床 南西の一部が踏み固められている。

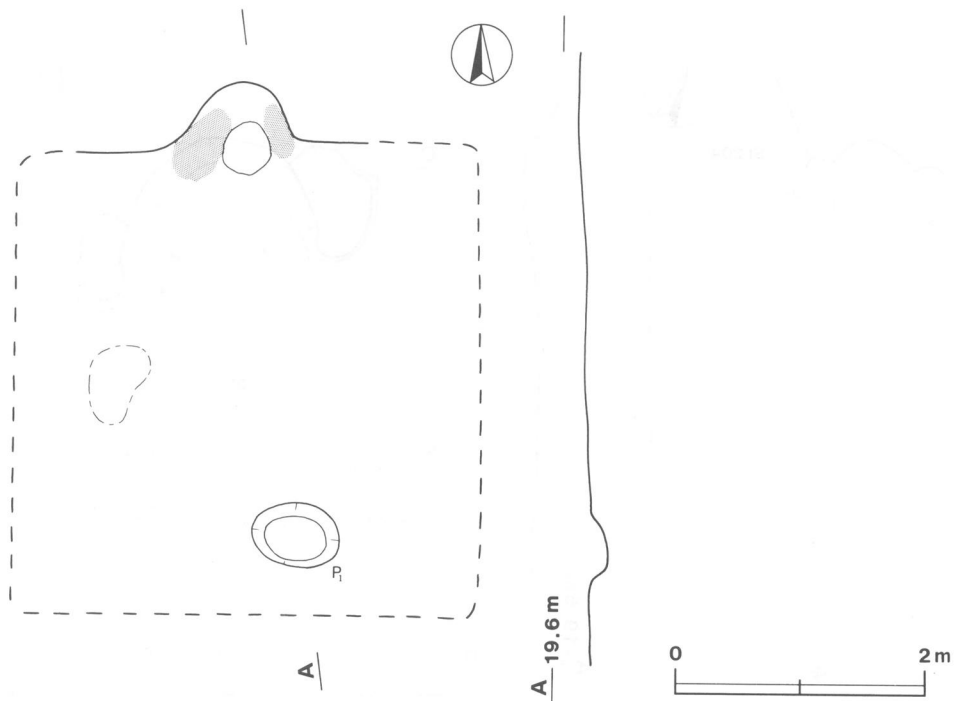
竈 北側の中央やや西側に付設されている。大部分削平されているが, 規模は長さ[77]cm, 袖幅[96]cm, 壁外への掘り込みは[51]cmである。山砂混じりの粘土を貼り付けて構築されている。火床部は, 長径[40]cm, 短径[36]cmの楕円形で, 浅く掘りくぼめられている。

ピット 1か所(P₁)。P₁は長径70cm, 短径50cmの楕円形, 深さ13cm, 断面形はほぼ逆台形で性格は不明である。

覆土 残っていた覆土が浅く土層が確認できなかった。

遺物 土師器片15点, 須恵器片1点が出土している。細片であり, 図示できる遺物はない。

所見 本跡は遺物も少なく, 時期を判断するのは困難であるが, 遺物等から奈良・平安時代と考えられる。



第279図 第200号住居跡実測図

第201号住居跡（第280図）

位置 調査6区北部，L15i4区。

重複関係 第204号住居跡を掘り込んでいることから，第204号住居跡より新しい。また，第6号掘立柱建物跡に掘り込まれており，本跡が古い。

規模と平面形 長軸[3.40]m，短軸[3.40]mの方形と推定される。

主軸方向 [N-30°-E]

床 全体的に平坦で，竈から中央部にかけての範囲が踏み固められている。

竈 北側中央部に付設されている。規模は長さ76cm，袖幅125cm，壁外への掘り込みは48cmである。両袖部は一部削平されているが，山砂混じりの粘土を貼り付けて構築されている。火床部は径18cmの円形で，10cmほど掘りくぼめられている。燃焼部奥から煙道部は15度の角度で緩やかに立ち上がる。

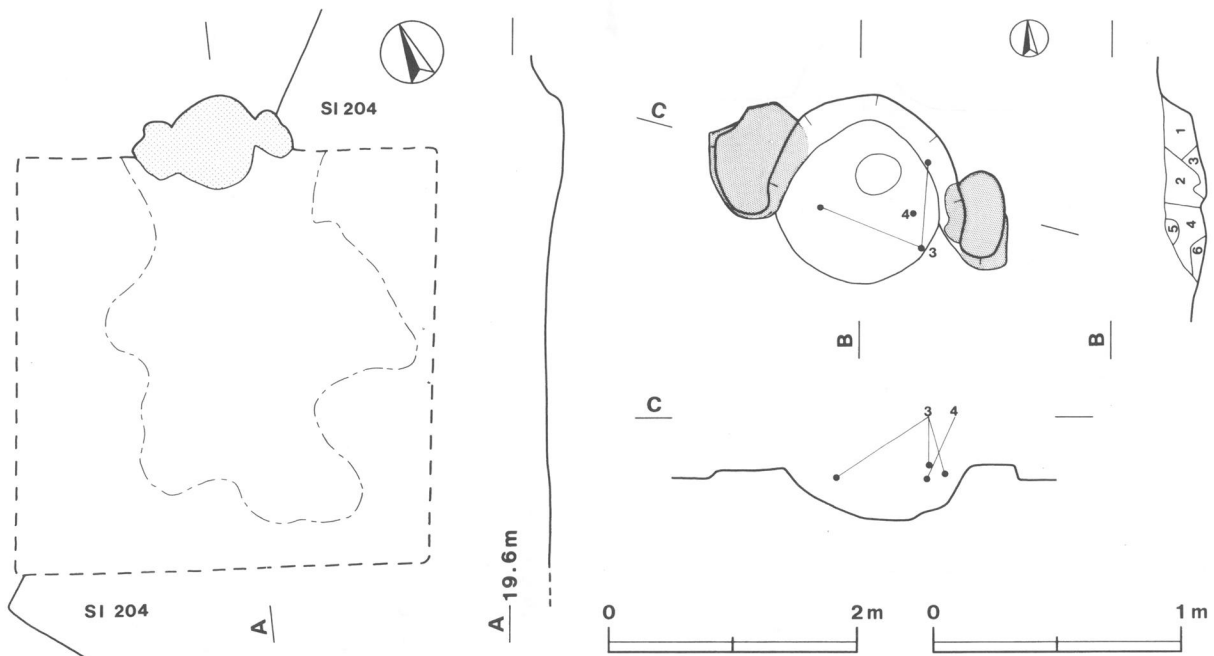
竈土層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子少量，炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 2 暗褐色 焼土粒子中量，炭化粒子・ローム粒子・粘土少量
- 3 暗赤褐色 焼土粒子中量，炭化物少量，ローム粒子微量
- 4 暗赤褐色 焼土粒子多量，炭化物少量，ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 5 暗赤褐色 焼土粒子多量，炭化物・ローム粒子微量
- 6 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子少量，ローム小ブロック・ローム粒子微量

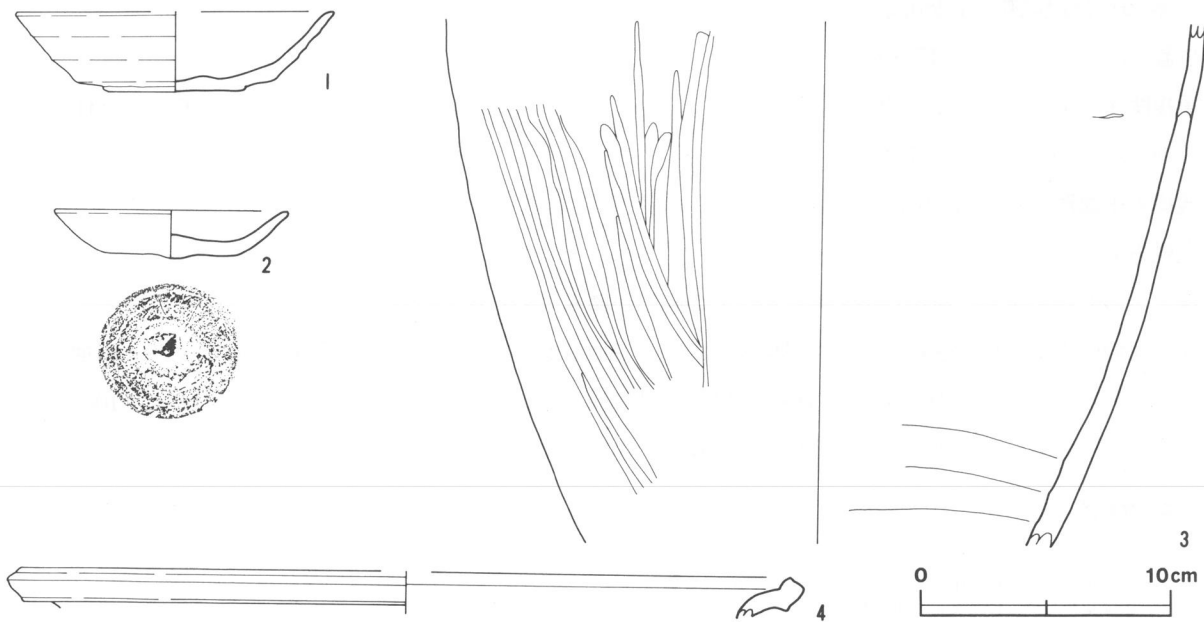
覆土 残っていた覆土が浅く土層が確認できなかった。

遺物 土師器片48点，須恵器片3点が出土している。ほとんどの遺物は竈の覆土内から出土している。第281図1の土師器坏，2の土師器小皿は，覆土中から出土している。3の土師器甕は竈内覆土から出土し，混入と思われる。4の須恵器甕は，竈内覆土から出土している。

所見 本跡の時期は，出土遺物から平安時代の10世紀以降と考えられる。



第280図 第201号住居跡実測図



第281図 第201号住居跡出土遺物実測図

第201号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第281図 1	坏 土師器	A [12.6] B 3.2 C 5.4	底部から口縁部にかけての破片。体部はやや内彎して立ち上がり、口縁部に至る。	体部内・外面ロクロナデ。底部回転系切り後、雑なナデ。	長石・雲母・赤色粒子にふい橙色普通	P 345 30% 覆土中
2	小皿 土師器	A 9.4 B 1.9 C 5.4	平底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ切り後、無調整。	石英・長石・雲母・赤色粒子 橙色普通	P 346 100% 覆土中
3	甕 土師器	B (21.0)	体部片。体部は内彎気味に外傾する。	体部外面ヘラ磨き。体部内面ナデ。輪積み痕。	石英・長石・雲母・赤色粒子 明赤褐色普通	P 347 10% 甕覆土内

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第281図 4	甕 須恵器	A[31.0] B(1.7)	口縁部片。口縁部は外傾して立ち上がる。端部は上方に立ち上がる。	口縁部内・外面ロクロナデ。	砂粒・長石・雲母 明赤褐色 普通	P348 5% 竈覆土内

第202号住居跡 (第282図)

位置 調査6区北部, M15a4区。

重複関係 第203号住居跡を掘り込んでいることから, 第203号住居跡より新しい。

規模と平面形 長軸4.00m, 短軸3.20mの長方形である。

主軸方向 N-3°-E

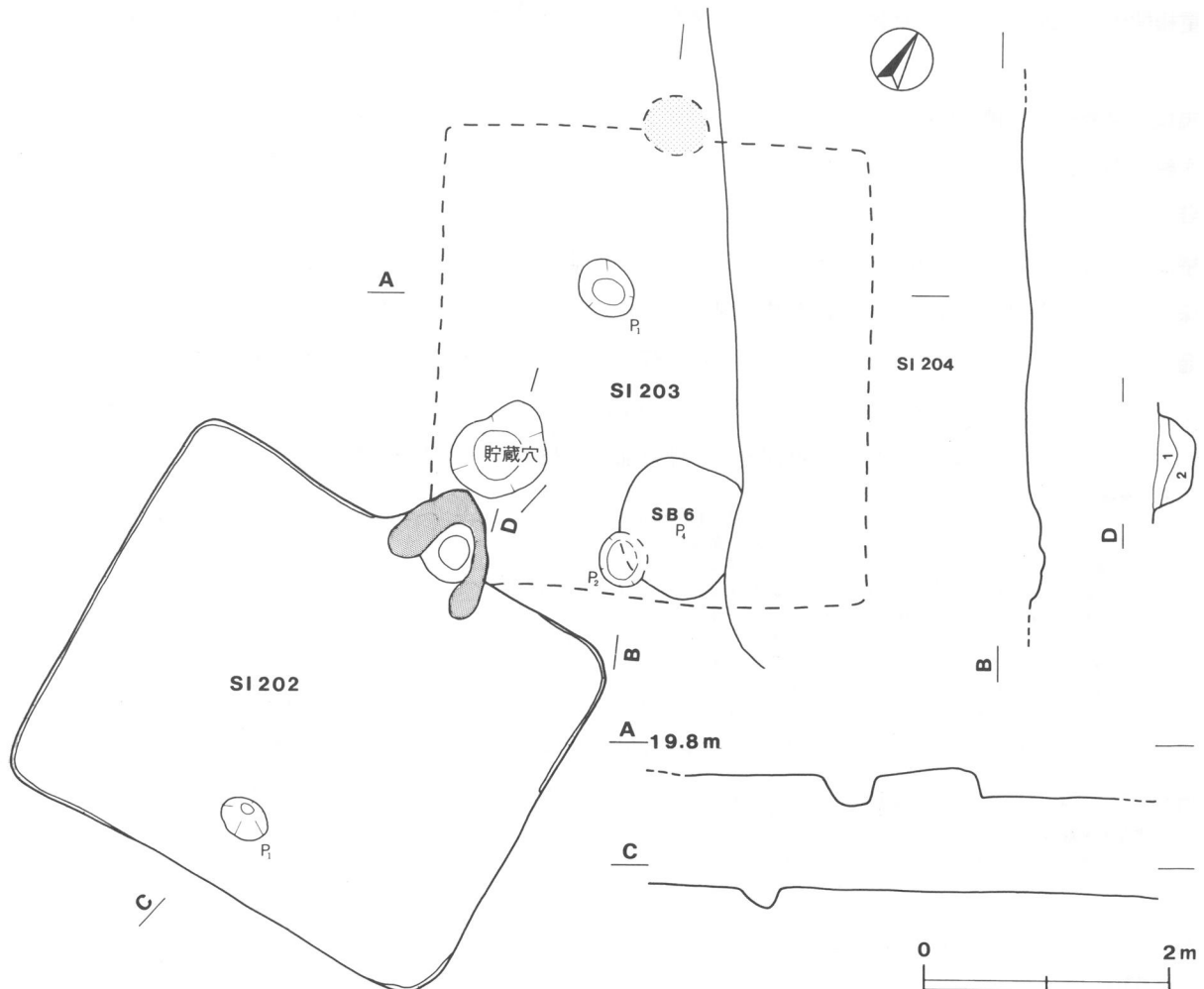
壁 壁高は1~4cmで, 外傾して立ち上がる。

床 全体的に平坦である。

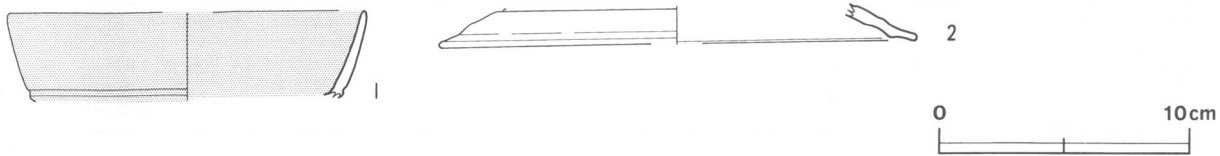
竈 北壁中央部に付設されている。規模は長さ90cm, 袖幅86cm, 壁外への掘り込みは55cmで, 平面形は逆U字形である。袖部は粘土を貼り付けて構築されている。火床部は長径27cm, 短径15cmの楕円形で, わずかに掘りくぼめられている。

ピット 1か所(P₁)。P₁は長径42cm, 短径32cmの楕円形, 深さ16cmであり, 南壁から内側に42cmのところに位置し, 竈と同一線上に並んでいる。出入り口施設に伴うピットと考えられる。

遺物 土師器片44点, 須恵器片1点が出土している。第283図1の土師器坏と2の須恵器蓋は, 西側覆土中か



第282図 第202・203号住居跡実測図



第283図 第202号住居跡出土遺物実測図

ら出土している。

所見 本跡の時期は、遺物も少なく時期を判断するのは困難であるが、平安時代の8世紀前葉と考えられる。

第202号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第283図 1	坏 土師器	A[14.0] B(3.5)	体部から口縁部にかけての破片。体部は直線的に外傾して口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・長石・雲母・赤色粒子 灰褐色普通	P349 30% 西側覆土中
2	蓋 須恵器	A[18.8] B(1.5)	口縁部破片。口縁部は短く、丸みがある。内面に短いかえりが付く。	口縁部外面口口ロナデ。	砂粒・長石・雲母 灰白色普通	P350 5% 西側覆土中

第205号住居跡（第284図）

位置 調査6区中央部，M14i9区。

重複関係 第206・213号住居跡，第144号土坑を掘り込んでいることから，第206・213号住居跡・第144号土坑より新しい。

規模と平面形 長軸5.16m，短軸3.58mの長方形である。

主軸方向 N-125°-E

壁 壁高は8～10cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝 上幅9～23cm，下幅3～7cm，深さ7～12cm，断面形はU字形で，全周している。

床 全体的に平坦で，竈から中央部が踏み固められている。

竈 南東壁中央部に付設されている。規模は長さ87cm，袖幅58cm，壁外への掘り込みは55cmで，平面形は逆U字形である。袖部は山砂混じりの粘土を貼り付けて構築されている。火床部は長径30cm，短径21cmの楕円形で，わずかに掘りくぼめられている。燃焼部奥から煙道部へは20度の角度で立ち上がる。

竈土層解説

- 1 赤褐色 焼土小ブロック多量，ローム粒子・粘土粒子微量
- 2 暗褐色 焼土粒子中量，炭化粒子・ローム粒子微量
- 3 暗褐色 焼土粒子中量，ローム粒子・炭化粒子少量
- 4 暗赤褐色 焼土粒子中量，炭化粒子・ローム粒子少量，焼土中ブロック微量
- 5 暗赤褐色 焼土粒子多量，炭化粒子・ローム粒子少量
- 6 暗赤褐色 粘土粒子中量，焼土粒子・炭化粒子・焼土小ブロック・ローム粒子少量
- 7 黒褐色 ローム粒子・粘土粒子少量，炭化粒子微量
- 8 黒褐色 炭化粒子多量，ローム粒子少量
- 9 黒褐色 ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量

ピット 1か所(P₁)。P₁は径35cmの円形，深さ46cm，断面形は逆台形で主柱穴と考えられる。

貯蔵穴 南東コーナーに位置する。長径75cm，短径62cmの楕円形，深さ36cm，断面形は逆台形である。

貯蔵穴土層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック微量
- 2 極暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子・焼土小ブロック・ローム小ブロック少量

覆土 3層からなり，自然堆積である。

土層解説

- 1 褐色 ローム粒子・粘土粒子微量

- 2 褐色 ローム小ブロック少量, ローム粒子微量
 3 暗褐色 ローム粒子少量

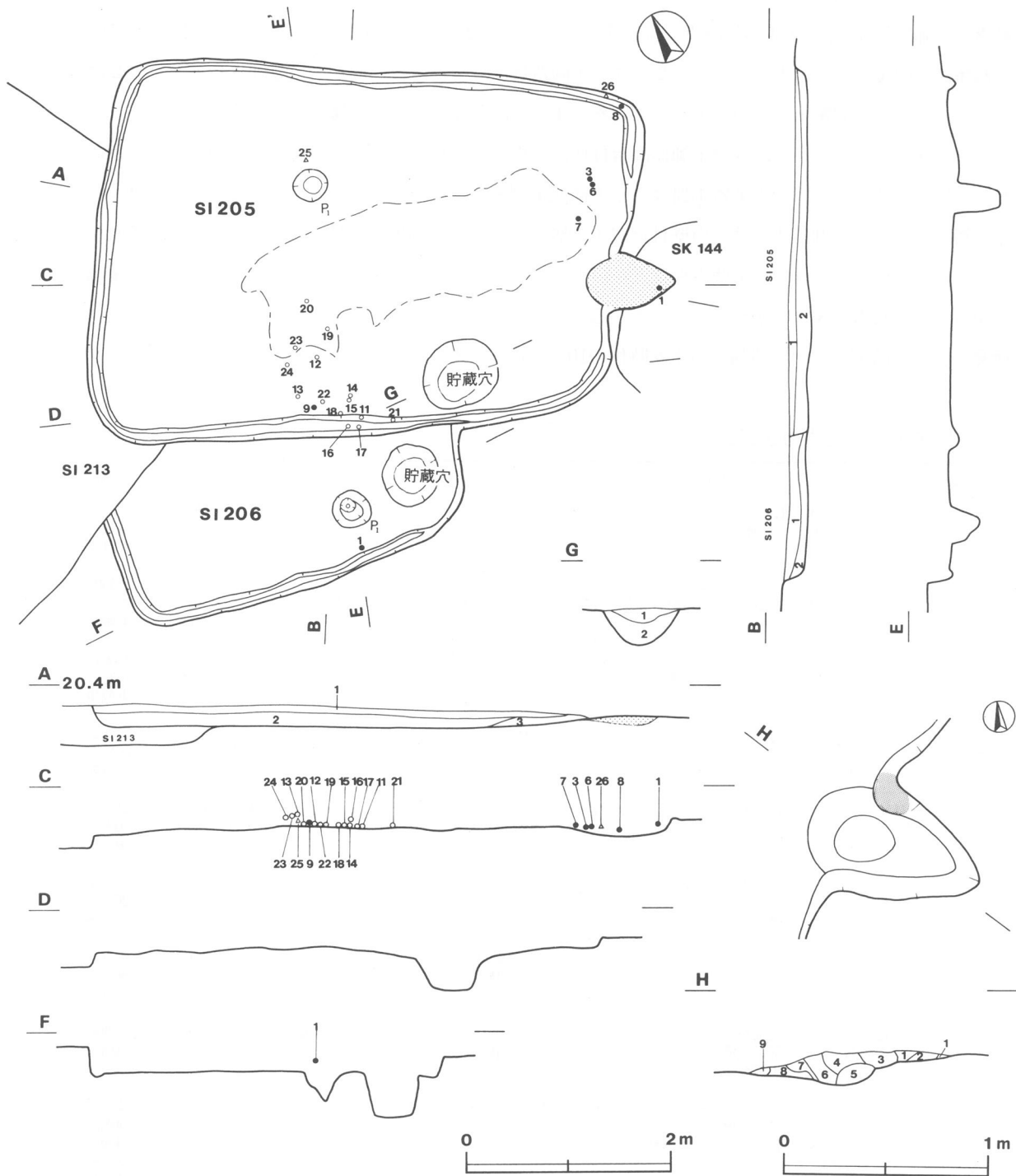
遺物 土師器片528点, 須恵器片38点, 陶器片4点, 土製品2点, 鉄製品2点が出土している。第285図1の土師器坏は竈内覆土から出土している。2, 3の土師器坏は, それぞれ内面が黒色処理されており, 2は東側覆土中から, 3は東側覆土下層から出土している。4の土師器坏は, 東側の覆土中から出土している。5の土師器高台付坏は, 覆土中から, 6の土師器高台付坏は, 内面が黒色処理されており, 北東コーナー付近の覆土下層から出土している。7の土師器小皿は, 中央部北東側覆土下層から, 8の土師器小皿は, 北東壁コーナー覆土下層から, 9の土師器小皿は, 南壁付近覆土下層から, 10の土師器小皿は, 覆土中から, それぞれ出土している。11~24の管状土錘は, 南壁中央付近から出土している。25の鉄鏃は, P₁の北側付近から, 26の鉄釘は, 北東コーナー付近の覆土下層から出土している。

所見 本跡の時期は, 出土遺物から平安時代の10世紀以降と考えられる。

第205号住居跡出土遺物観察表

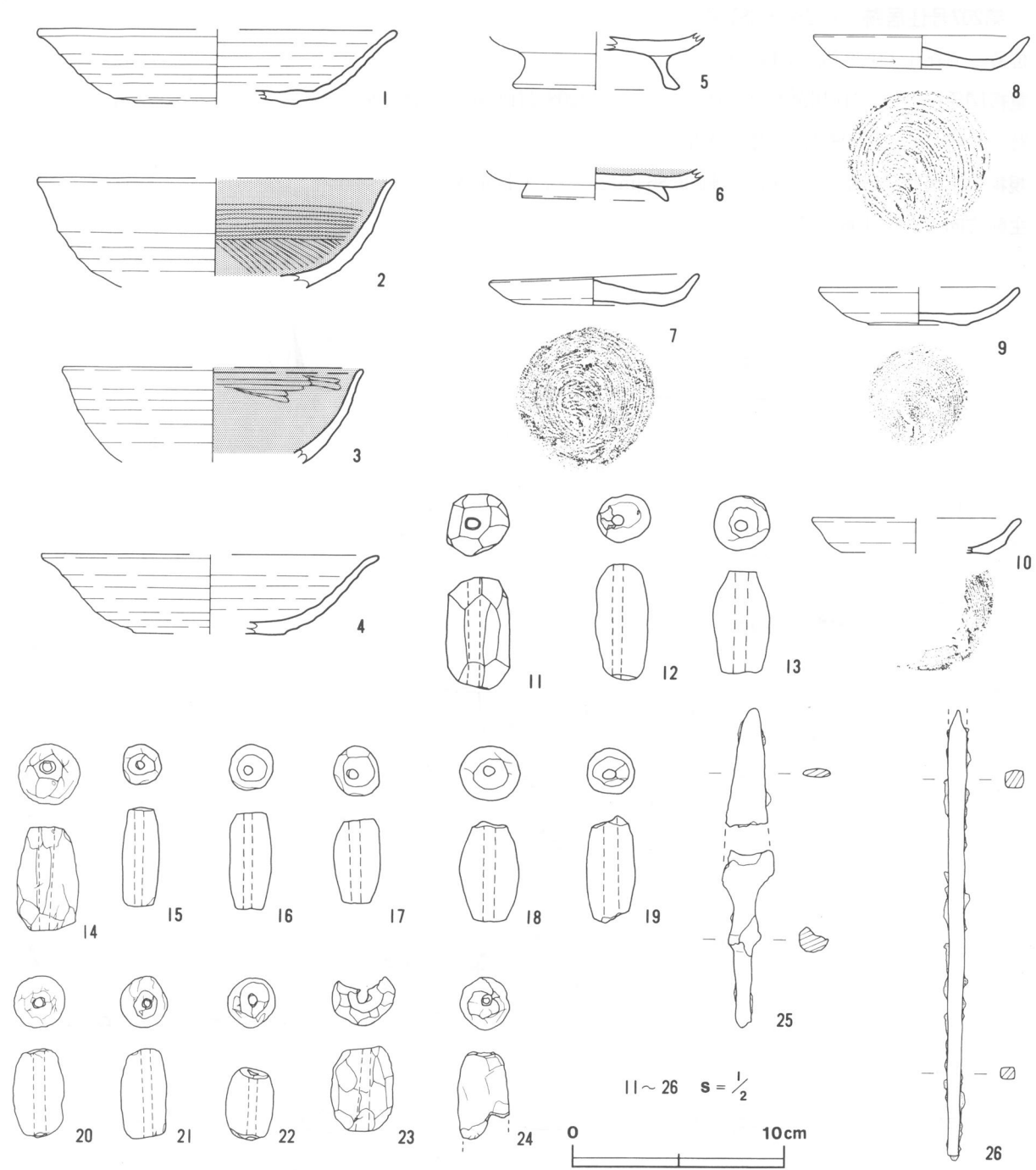
図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第285図 1	坏 土師器	A[16.8] B 3.6 C[7.6]	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は緩やかに内彎しながら立ち上がり, 口縁部に至る。	口縁部・体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り。	砂粒・赤色粒子に ぶい赤褐色 普通	P359 30% 竈内覆土
2	坏 土師器	A[16.8] B(5.3)	体部から口縁部にかけての破片。体部はわずかに内彎しながら外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面ロクロナデ。体部内面ヘラ磨き。内面黒色処理。	砂粒・雲母 外面にぶい褐色 内面黒色 普通	P360 20% 東側覆土
3	坏 土師器	A[14.2] B(4.5)	体部から口縁部にかけての破片。体部はわずかに内彎しながら外傾して立ち上がる。	体部外面ロクロナデ。体部内面ヘラ磨き。内面黒色処理。	砂粒・長石 外面にぶい褐色 内面黒色 普通	P361 20% 東側覆土下層
4	坏 土師器	A[15.8] B 3.8 C[7.2]	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は緩やかに内彎しながら立ち上がり, 口縁部は外反する。	体部内・外面ロクロナデ。底部外面ヘラ削り。	砂粒・雲母・赤色粒子 橙色 普通	P362 30% 東側覆土中
5	高台付坏 土師器	B(2.8) D[8.0] E 1.7	底部・体部片。高台はハの字状に開く。	体部外面ロクロナデ。底部外面回転ヘラ削り。高台貼り付け。	砂粒・雲母 にぶい黄褐色 普通	P363 10% 覆土中
6	高台付坏 土師器	B(1.6) D[7.0] E 0.7	高台部から体部にかけての破片。ハの字状に開く高台が付く。体部は内彎して立ち上がる。	体部外面ロクロナデ。内面ヘラ磨き。内面黒色処理。高台貼り付け。	砂粒・雲母・赤色粒子 外面にぶい橙色 内面黒色 普通	P364 20% 北東コーナー 覆土下層
7	小皿 土師器	A 9.8 B 1.6 C 6.8	口縁部一部欠損。底部は中央部が突出する。口縁部は歪む。	口縁部内・外面ロクロナデ。底部外面回転系切り。	砂粒・石英・長石・雲母 橙色 普通	P365 80% 中央部 北東側覆土下層
8	小皿 土師器	A 10.2 B 1.7 C 6.9	底部から口縁部にかけての破片。体部は内彎しながら外傾する。底部中央部が突出している。	口縁部内・外面ロクロナデ。体部下端回転ヘラ削り。底部回転系切り。	砂粒・石英・長石・雲母 にぶい赤褐色 普通	P366 70% 北東壁 コーナー覆土下層
9	小皿 土師器	A[9.4] B 1.8 C 4.8	底部から口縁部にかけての破片。体部は内彎しながら口縁部に至る。端部外面にわずかな稜を持つ。	体部内・外面ロクロナデ。底部回転系切り。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	P367 50% 南壁付近覆土下層
10	小皿 土師器	A[9.8] B 1.7 C[7.0]	底部から口縁部にかけての破片。体部下端にわずかな稜をもちながら, 外傾して口縁部に至る。	体部内・外面ロクロナデ。底部回転系切り。	砂粒・石英・長石・雲母 橙色 普通	P368 20% 覆土中

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
11	管状土錘	3.6	2.0	0.45	13.0	南壁中央部覆土下層	D P12
12	管状土錘	3.1	1.7	0.4	9.15	中央部床面	D P13
13	管状土錘	3.3	1.8	0.3	10.2	南壁側覆土上層	D P14
14	管状土錘	3.3	1.9	0.5	11.0	南壁中央部側床面	D P15
15	管状土錘	3.1	1.3	0.3	4.94	南壁中央部側床面	D P16
16	管状土錘	3.1	1.5	0.3	6.7	南壁覆土上層	D P17



第284図 第205・206号住居跡実測図

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
第285図17	管状土錘	2.7	1.6	0.35	6.25	南壁側床面	D P 18
18	管状土錘	3.2	1.9	0.35	11.0	南壁側床面	D P 19
19	管状土錘	3.4	1.5	0.5	7.55	南壁中央部床面	D P 20
20	管状土錘	2.9	1.7	0.3~0.4	6.35	中央から南側床面	D P 21
21	管状土錘	2.9	1.6	0.3	6.25	南壁床面	D P 22
22	管状土錘	2.3	1.6	0.3~0.4	4.94	南壁側床面	D P 23



第285図 第205号住居跡出土遺物実測図

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
第285図23	管状土錘	2.7	1.5~2.0	0.4	(6.9)	中央南側覆土上層	D P24
24	管状土錘	(2.8)	1.5~1.7	0.3	(5.55)	中央部南側覆土上層	D P25

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
25	鉄 鏃	(7.4)	(1.7)	0.8	(9.7)	P ₁ の北側付近覆土下層	M40
26	釘	(14.1)	0.6	0.6	(18.0)	北東コーナー付近覆土下層	M41

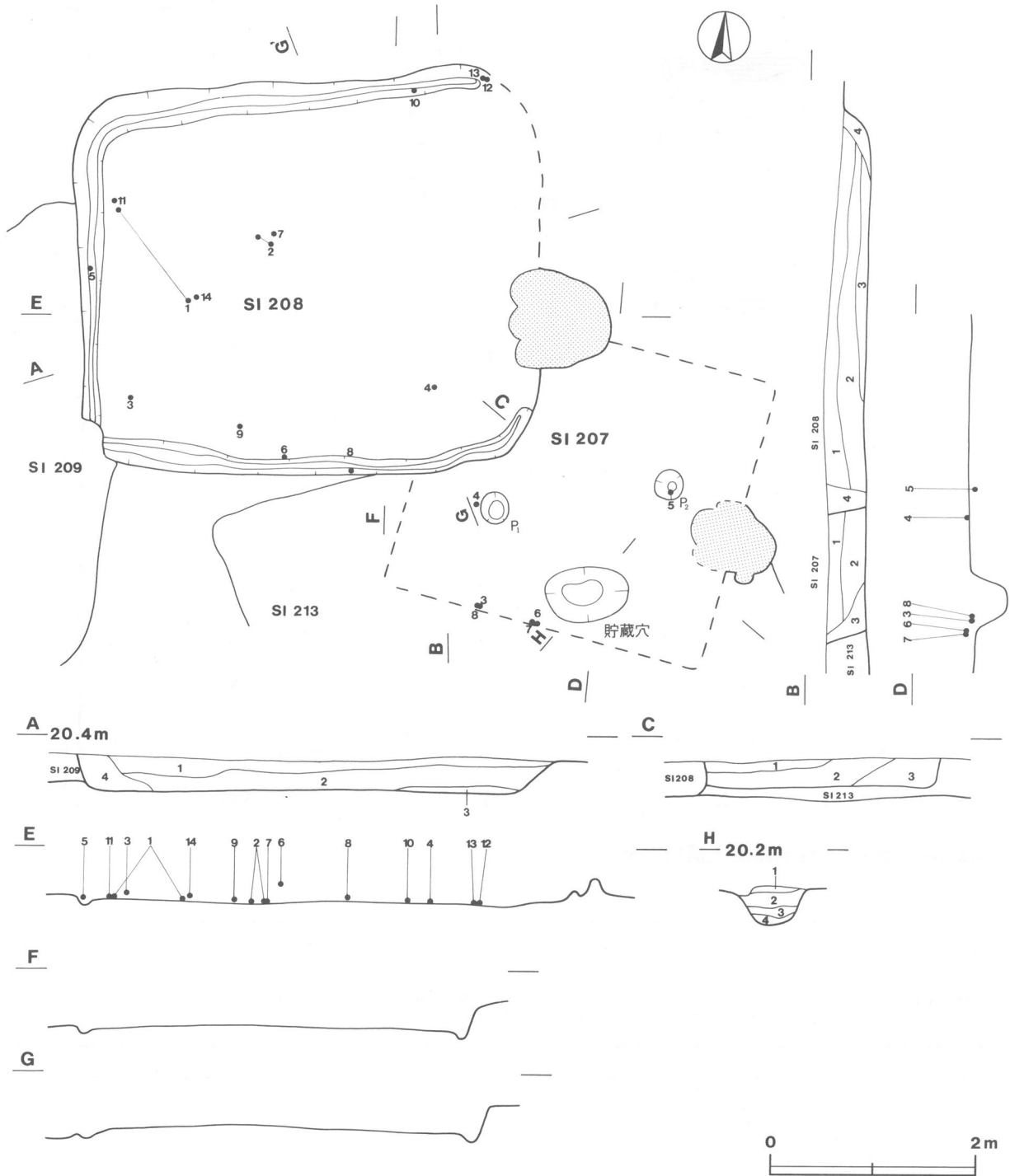
第207号住居跡 (第286・287図)

位置 調査6区中央部, M14_{hs}区。

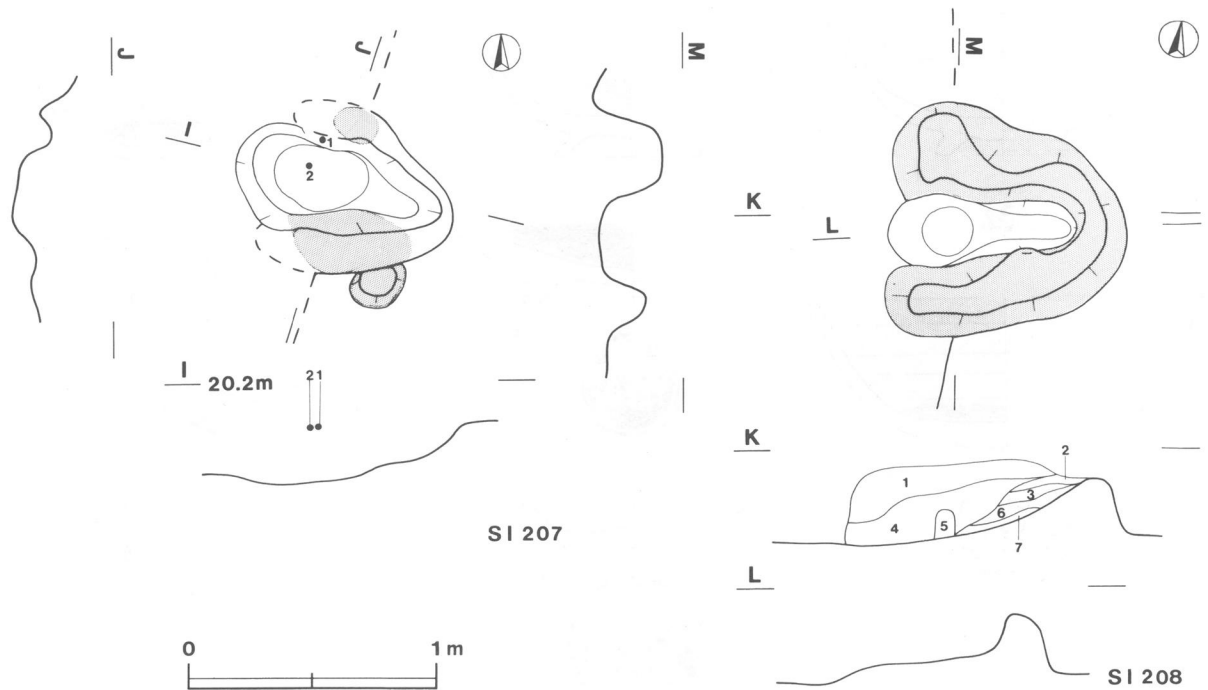
重複関係 第213号住居跡を掘り込んでおり, 第208号住居跡が上部に構築されていることから, 第213号住居跡より新しく, 第208号住居跡より古い。

規模と平面形 長軸[3.16]m, 短軸[2.86]mで, 方形と推定される。

主軸方向 [N-108°-E]



第286図 第207・208号住居跡実測図



第287図 第207・208号竈実測図

床 全体的に平坦で、軟質である。

竈 東側やや南寄りに付設されている。規模は長さ90cm，袖幅70cm，壁外への掘り込みは44cmで，平面形は逆U字形である。両袖部の一部は削平されているが，山砂混じりの粘土を貼り付けて構築されている。火床部は長径39cm，短径25cmの楕円形で，わずかに掘りくぼめられている。

ピット 2か所(P₁，P₂)。P₁，P₂は径30cmの円形で，性格不明のピットである。

貯蔵穴 南東側に位置する。長径83cm，短径53cmの楕円形，深さ39cm，断面形は逆台形である。

貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 炭化粒子・粘土粒子少量，ローム粒子・焼土粒子微量
- 2 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量
- 3 暗褐色 炭化粒子中量，粘土粒子少量，ローム粒子・焼土粒子・ローム小ブロック微量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量

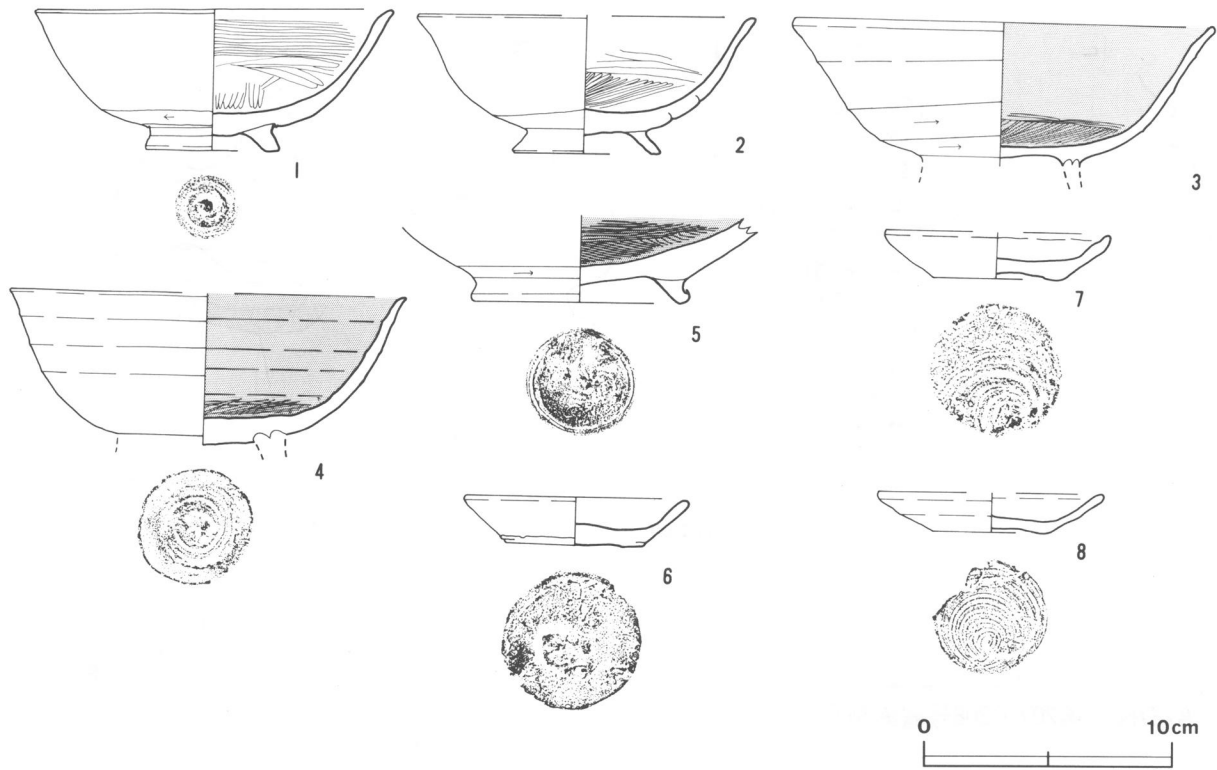
覆土 3層からなり，自然堆積である。

土層解説

- 1 褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
- 3 褐色 ローム粒子・ローム小ブロック微量

遺物 土師器片139点，須恵器片7点が出土している。第288図1の土師器高台付坏は，竈内覆土上層から，2の土師器高台付坏は，竈内火床部から出土している。3の土師器高台付坏は，南側覆土下層から，4の土師器高台付坏は，P₁の西側床面から出土している。5の土師器高台付坏は，P₂内から出土している。6，7の土師器小皿は，南側の覆土上層から出土している。8の土師器小皿は，南側やや西よりの覆土下層から出土している。

所見 本跡の時期は，出土遺物から平安時代の10世紀以降と考えられる。



第288図 第207号住居跡出土遺物実測図

第207号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第288図 1	高台付坏土師器	A 14.1 B 5.8 D 5.4 E 1.0	高台部から体部にかけての破片。ハの字状に開く高台が付く。体部は内彎して立ち上がる。	体部内・外面ロクロナデ。体部下端回転ヘラ削り。底部・体部ヘラ磨き。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	P 373 80% 竈内覆土上層
2	高台付坏土師器	A[13.6] B 5.6 D 6.1 E 1.0	高台部から体部にかけての破片。ハの字状に開く高台が付く。体部は内彎して立ち上がり、口縁部で外反する。	体部内・外面ロクロナデ。底部・体部内面ヘラ磨き。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	P 374 60% 竈内火床部
3	高台付坏土師器	A 16.8 B(5.5)	底部から体部にかけての破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部に至る。	体部内・外面ロクロナデ。底部・体部内面ヘラ磨き。内面黒色処理。	砂粒・雲母 外面にぶい橙色 内面黒色 普通	P 375 60% 南側覆土下層
4	高台付坏土師器	A[16.0] B(6.2)	底部から体部にかけての破片。高台部破損。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部に至る。	体部外面ロクロナデ。体部内面ヘラ磨き。底部回転ヘラ切り。内面黒色処理。	砂粒・長石 外面灰黄褐色 内面黒色 普通	P 376 60% P ₁ の西側床面
5	高台付坏土師器	B(3.5) D 8.2 E 1.0	口縁部欠損。体部は直線的に立ち上がり、口縁部に至る。	体部外面ロクロナデ。体部下端回転ヘラ削り。底部回転ヘラ切り。内面黒色処理。	砂粒・長石・雲母・ 赤色粒子 外面橙色 内面黒色 普通	P 377 40% P ₂ 内
6	小皿土師器	A 8.8 B 2.0 C 5.6	平底。体部は外方に開いて立ち上がり、口縁部に至る。	内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ切り後、無調整。	砂粒・長石・雲母 にぶい橙色 普通	P 378 100% 覆土上層
7	小皿土師器	A[9.0] B 1.9 C 5.2	平底。体部は外方に開いて立ち上がり、口縁部に至る。口縁直下の内側にわずかな稜を持つ。	内・外面ロクロナデ。底部回転系切り後、無調整。	砂粒・雲母・赤色粒子 にぶい橙色 普通	P 379 50% 覆土上層
8	小皿土師器	A[9.0] B 1.6 C 4.5	平底。体部は外方に開いて立ち上がり、口縁部に至る。口縁直下の内側に稜を持つ。	内・外面ロクロナデ。底部回転系切り後、無調整。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	P 380 50% 南側やや西より 覆土下層

第208号住居跡（第286・287図）

位置 調査6区中央部，M14hs区。

重複関係 第207・209・213号住居跡を掘り込んでいることから，第207・209・213号住居跡より新しい。

規模と平面形 長軸4.44m，短軸3.86mの長方形である。

主軸方向 N-87°-E

壁 壁高は20～25cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝 上幅9～34cm，下幅2～14cm，深さ4～6cm，断面形はU字形で，東壁下を除いて巡っている。

床 全体的に平坦で，軟質である。

竈 東壁側やや南寄りに付設されている。規模は長さ99cm，袖幅96cm，壁外への掘り込みは69cmで，平面形は逆U字形である。袖部は山砂混じりの粘土を貼り付けて構築されている。火床部は径20cmの円形で，わずかに掘りくぼめられている。燃焼部奥から煙道部へは20度の角度で立ち上がる。火床部から雲母片岩が出土し，支脚として使用されていたと考えられる。

竈土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子少量，焼土小ブロック微量
- 2 極暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量
- 3 黒褐色 焼土粒子中量，炭化粒子少量
- 4 黒褐色 焼土粒子・焼土中ブロック・炭化粒子・ローム粒子少量
- 5 極暗褐色 焼土粒子多量
- 6 極暗褐色 焼土粒子中量，ローム粒子少量，炭化粒子・焼土小ブロック微量
- 7 黒褐色 焼土粒子中量，粘土粒子少量，炭化粒子微量

覆土 4層からなり，人為堆積である。

土層解説

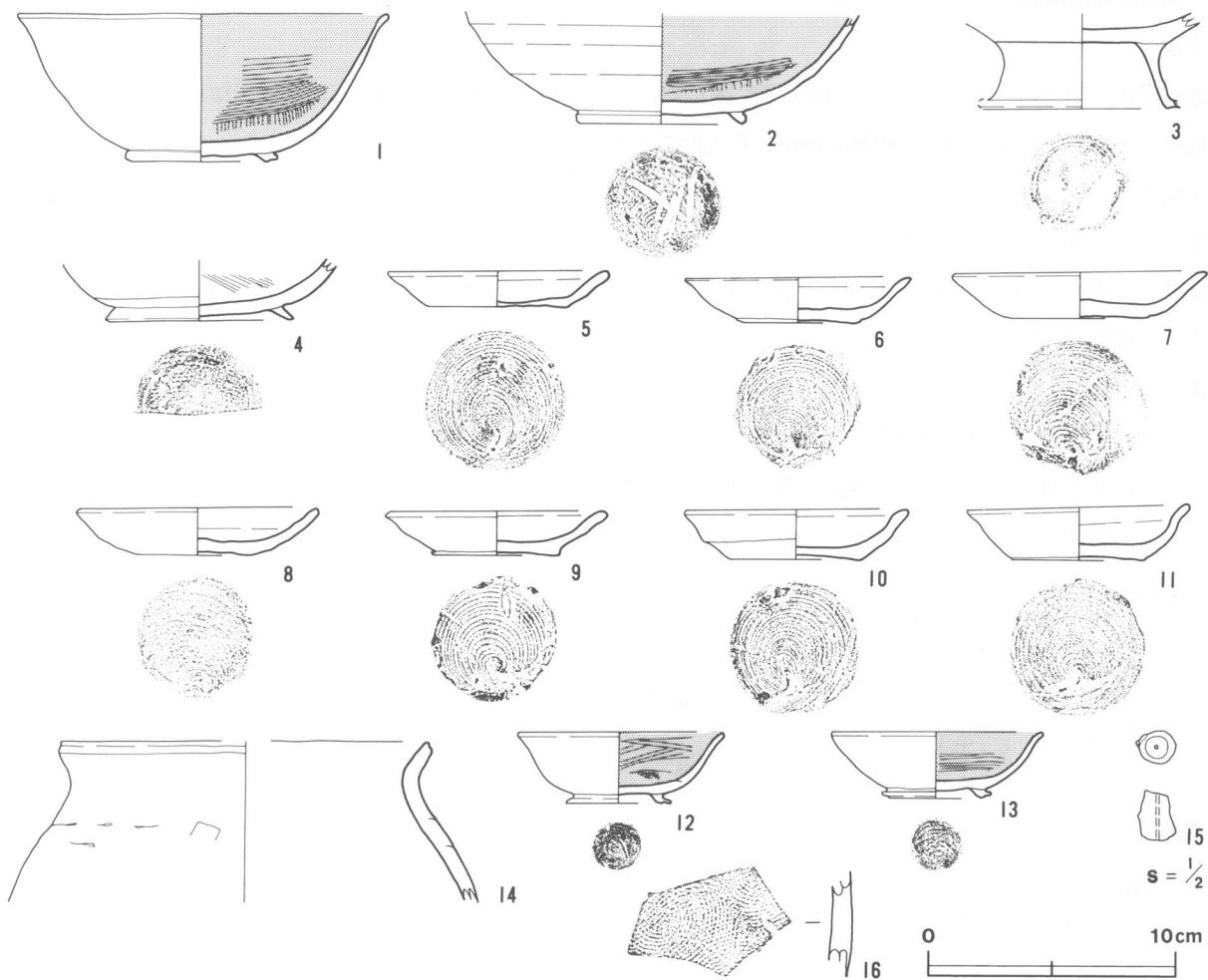
- 1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量
- 2 暗褐色 焼土粒子中量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量，焼土粒子・焼土小ブロック微量
- 4 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子微量

遺物 土師器片942点，須恵器片62点，礫3点，鉄滓2点が出土している。第289図1の土師器高台付碗は，西壁から西側中央にかけての床面から，2の土師器高台付碗は，中央部床面から，3の足高台付杯は，南西コーナーの覆土下層から，4の高台付杯は，南東側床面から，5の土師器小皿は西壁覆土下層から，6の土師器小皿は，南壁付近覆土上層から出土している。7の土師器小皿は，中央部床面から，8の土師器小皿は，南壁覆土下層から，9の土師器小皿は，南壁側覆土下層から，10の土師器小皿は，北東コーナー側覆土下層から，11の土師器小皿は，北西床面から，それぞれ出土している。12，13の高台付小皿は，北東コーナー覆土下層から，14の土師器甕は，中央部西側覆土下層から出土している。15の不明土製品は，南壁中央付近の覆土中から出土している。16の須恵器甕の体部片は，外面に同心円状の叩き痕を有する。

所見 本跡の時期は，出土遺物から平安時代の10世紀以降と考えられる。

第208号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第289図 1	高台付碗 土師器	A 14.9 B 6.0 D 6.2 E 0.4	体部は丸みをもって立ち上がり，口縁部に至る。高台は短く，ラッパ状に開き，わずかに反る。	口縁部・体部外面ロクロナデ。体部内面黒色処理・ヘラ磨き。高台貼り付け後，ナデ。	砂粒・長石 にぶい黄橙色 普通	P381 60% 西側床面
2	高台付碗 土師器	B(4.5) D 6.8 E 0.6	底部・体部片。体部は内彎しながら立ち上がる。高台はハの字状に開く。	体部外面ロクロナデ。体部内面ヘラ磨き。内面黒色処理。底部回転糸切り。	砂粒・石英・長石 外面にぶい橙色 内面黒色 普通	P382 30% 中央部床面



第289図 第208号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第289図 3	足高台坏 土師器	B (3.9) E 2.1	高台部から体部にかけての破片。ハの字状に開く高台が付く。体部はわずかに内彎して立ち上がる。	高台部外面ロクロナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒・長石 にぶい黄橙色 普通	P 383 10% 南西コー ナー覆土下層
4	高台付坏 土師器	B (2.5) D 7.6 E 0.6	底部・体部破片。体部はわずかに内彎しながら外傾する。高台は短く外に開く。	体部外面下端回転ヘラ削り。高台貼り付け。底部回転系切り。	砂粒・雲母・赤色粒 子 橙色 普通	P 384 10% 南東側床面
5	小皿 土師器	A 8.8 B 1.5 C 5.6	体部は直線的に立ち上がり、口縁部に至る。口縁部内面下方にわずかな稜をもつ。	体部内・外面ロクロナデ。底部回転系切り。	砂粒・長石・雲母・ 赤色粒子 橙色 普通	P 385 100% 西壁内覆土下層
6	小皿 土師器	A 9.0 B 1.9 C 5.0	口縁部・体部一部欠損。体部はわずかに内彎しながら立ち上がる。	体部内・外面ロクロナデ。底部回転系切り後、無調整。	砂粒・石英 浅黄橙色 普通	P 386 60% 南壁付近覆土上層
7	小皿 土師器	A 10.0 B 1.9 C 5.6	平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	内・外面ロクロナデ。底部回転系切り。	砂粒・雲母・赤色粒 子 にぶい橙色 普通	P 387 80% 中央部床面
8	小皿 土師器	A 9.5 B 2.0 C 4.6	口縁部一部欠損。体部は内彎しながら外傾して立ち上がる。	内・外面ロクロナデ。底部回転系切り。	砂粒・雲母・赤色粒 子 橙色 普通	P 388 95% 南壁内覆土下層
9	小皿 土師器	A 8.6 B 1.8 C 5.2	平底。体部は外傾してして立ち上がる。口縁部内面下方にわずかな稜をもつ。	内・外面ロクロナデ。底部回転系切り後、無調整。	砂粒・雲母・赤色粒 子 橙色 普通 煤付着	P 389 95% 南壁側覆土下層

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第289図 10	小皿 土師器	A 8.8 B 2.1 C 5.4	平底。体部は内彎しながら立ち上がる。口縁部内面下方にわずかな稜をもつ。	内・外面ロクロナデ。底部回転糸切り後、無調整。	砂粒・石英・長石・赤色粒子 橙色普通	P 390 100% 北東コーナー側覆土下層
11	小皿 土師器	A 8.9 B 2.3 C 5.4	口縁部・体部一部欠損。体部は内彎しながら立ち上がる。	内・外面ロクロナデ。底部回転糸切り後、無調整。	砂粒・長石・雲母・赤色粒子 橙色普通	P 391 80% 北西コーナー側床面
12	高台付小椀 土師器	A 8.1 B 2.9 D 4.2 E 0.4	体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。高台は短く、ハの字状に開き、踏ん張る。	内・外面ロクロナデ。底部回転糸切り後、ヘラ磨き。内面黒色処理。	砂粒・長石 外面にぶい黄橙色 内面黒色 普通	P 392 100% 北東コーナー 覆土下層
13	高台付小椀 土師器	A 8.4 B 2.2 D 4.4 E 0.4	体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。高台は短く、ハの字状に開き、踏ん張る。	内・外面ロクロナデ。底部回転糸切り後、ヘラ磨き。内面黒色処理。	砂粒・長石 外面にぶい黄橙色 内面黒色 普通	P 393 100% 北東コーナー 覆上下層
14	甕 土師器	A [14.8] B (6.5)	体部から口縁部にかけての破片。頸部はくの字状に折れる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ状工具当て具痕有り。体部内・外面ナデ。	砂粒・雲母にぶい橙色普通	P 394 5% 中央部 西側覆土下層

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	径(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
15	不明土製品	1.3	0.9~1.0	0.1	0.86	南壁中央付近覆土中	D P 26

第209号住居跡 (第290図)

位置 調査6区中央部，M14h7区。

重複関係 第272号住居跡を掘り込んでおり，本跡が新しい。また，第208号住居跡に掘り込まれ，第210号住居跡が上部に構築されていることから，第208・210号住居跡より古い。

規模と平面形 長軸4.18m，短軸3.20mの長方形である。

主軸方向 N-20°-E

壁 壁高は28cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝 上幅12~28cm，下幅2~15cm，深さ4~5cm，断面形は逆台形で，南西コーナーと南東コーナーの壁下を巡っている。

床 全体的に踏み固められている。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は長さ105cm，袖幅119cm，壁外への掘り込みは10cmである。右袖部は第208号住居跡に壊されているが，山砂混じりの粘土で構築されている。火床部は長径60cm，短径35cmの楕円形で，5cmほど掘りくぼめられている。燃焼部奥は，5度の緩やかな角度で立ち上がる。

竈土層解説

- | | |
|-------------------------|----------------------|
| 1 極暗褐色 ローム粒子中量，焼土粒子・砂少量 | 4 暗褐色 焼土小ブロック・焼土粒子多量 |
| 2 黒褐色 粘土・砂多量，炭化粒子中量 | 5 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子中量 |
| 3 極暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・砂多量 | |

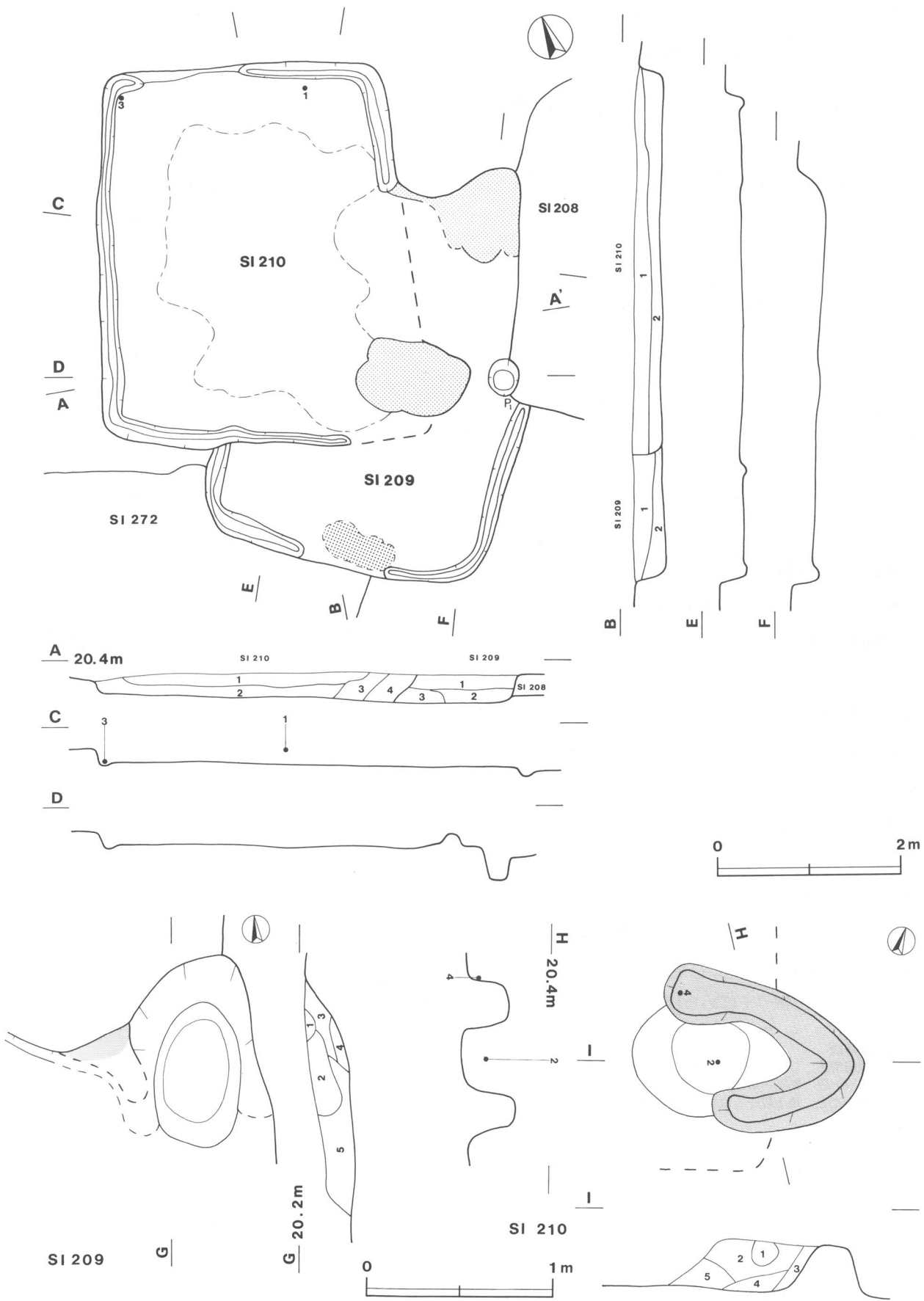
ピット 1か所(P₁)。P₁は，長径38cm，短径33cmの楕円形，深さ34cmで，主柱穴と考えられる。

覆土 3層からなり，人為堆積である。

土層解説

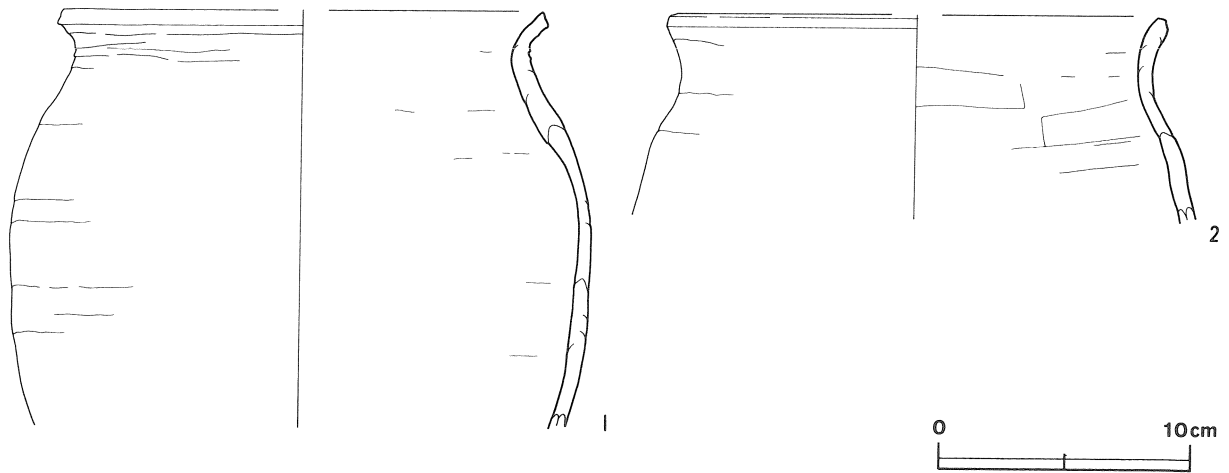
- | | |
|---------------------------|--------------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量 | 3 極暗褐色 焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 2 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量，焼土粒子微量 | |

遺物 土師器片442点，須恵器片57点が出土している。第291図の1土師器甕は，竈内覆土中から出土している。2の土師器甕は，南西側覆土中から出土している。



第290图 第209・210号住居跡実測図

所見 本跡の時期は、出土遺物から平安時代の10世紀以降と考えられる。



第291図 第209号住居跡出土遺物実測図

第209号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第291図 1	甕 土師器	A[19.0] B(16.5)	体部から口縁部にかけての破片。頸部はくの字状に外反する。口縁端部はわずかに上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。内面ヘラナデ。輪積み痕。	砂粒・石英・長石 橙色 二次焼成 普通	P 395 20% 竈内覆土中
2	甕 土師器	A[19.0] B(8.1)	体部から口縁部にかけての破片。頸部はくの字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。内面ヘラナデ。輪積み痕。	砂粒・長石 にぶい褐色 普通	P 396 10% 南西側覆土中

第210号住居跡（第290図）

位置 調査6区中央部，M14h6区。

重複関係 第209号住居跡を掘り込んでいることから、第209号住居跡より新しい。

規模と平面形 長軸4.16m，短軸3.38mの長方形である。

主軸方向 N-100°-E

壁 壁高は14~17cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 上幅10~27cm，下幅3~9cm，深さ4~5cm，断面形は逆台形で、東壁の一部を除いて巡っている。

床 全体的に踏み固められている。

竈 東壁側南東コーナーに付設されている。規模は長さ126cm，袖幅80cm，壁外への掘り込みは49cmで、平面形は逆U字形である。天井部は崩落しているが、袖部は若干削平されてはいるものの、比較的良好で、粘土と山砂で構築されている。火床部は長径45cm，短径32cmの楕円形で、5cmほど掘りくぼめられている。燃焼部奥から煙道部は、85度の角度で立ち上がる。

竈土層解説

- 1 暗褐色 砂・粘土粒子多量，焼土粒子・ローム粒子少量
- 2 暗褐色 焼土粒子多量，炭化粒子・ローム粒子・粘土・砂少量
- 3 暗赤褐色 焼土粒子多量，焼土小ブロック・炭化粒子少量，砂微量
- 4 暗褐色 炭化粒子多量，焼土小ブロック・焼土粒子中量，砂微量
- 5 暗褐色 焼土粒子多量，炭化粒子少量

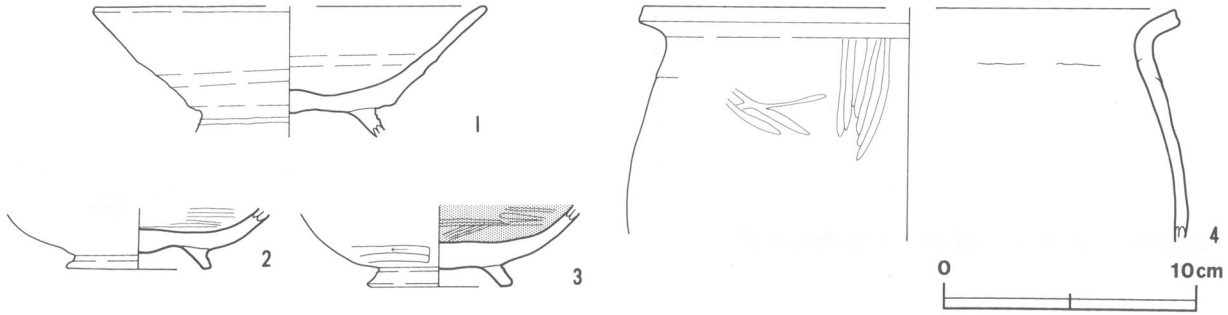
覆土 4層からなり、人為堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量
 2 黒褐色 ローム小ブロック少量, ローム粒子微量
 3 黒褐色 粘土中量, ローム粒子・焼土粒子少量
 4 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック・粘土少量

遺物 土師器片330点, 須恵器片34点が出土している。第292図1の土師器高台付坏は, 北東コーナー覆土上層から, 2の土師器高台付坏は, 竈内覆土中層からそれぞれ出土している。3の土師器高台付坏は, 北西コーナー覆土下層から, 4の土師器甕は, 竈左袖部側覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 本跡の時期は, 出土遺物から平安時代の10世紀以降と考えられる。



第292図 第210号住居跡出土遺物実測図

第210号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第292図 1	高台付坏 土師器	A[15.4] B(5.2) E(1.2)	底部から口縁部にかけての破片。体部は直線的に立ち上がり, 口縁部に至る。	体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ切り後, 高台貼り付け。	砂粒・長石・雲母 浅黄褐色 普通	P397 60% 北東コーナー 覆土上層
2	高台付坏 土師器	B(2.4) D 5.8 E 0.7	高台部から体部にかけての破片。ハの字状に開く高台が付く。体部は内彎して立ち上がる。	体部外面ロクロナデ。底部・体部内面ヘラ磨き。高台貼り付け。	砂粒・雲母・赤色粒子 橙色 普通	P398 30% 竈内覆土中層
3	高台付坏 土師器	B(3.2) D[5.8] E 0.9	高台部から体部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がる。高台はハの字状に開く。	体部外面ロクロナデ。体部内面ヘラ磨き。内面黒色処理。高台貼り付け。体部下端ヘラ削り。	砂粒・長石・雲母 外面黄褐色 内面黒色 普通	P399 30% 北西コーナー 覆土下層
4	甕 土師器	A[21.0] B(9.2)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部はくの字状に外反する。	口縁部内・外面ロクロナデ。体部内面ヘラナデ。体部外面ヘラ磨き。輪積み痕。	砂粒・長石・雲母 にぶい褐色 煤付着 普通	P400 10% 竈左袖部覆土下層

第214号住居跡 (第293図)

位置 調査6区南部, N14c0区。

重複関係 第215・216号住居跡を掘り込んでおり, 第215・216号住居跡より新しく, 第222号住居跡に掘り込まれているので, 第222号住居跡より古い。

規模と平面形 長軸[4.70]m, 短軸3.20mで, 長方形と考えられる。

長軸方向 N-102°-E

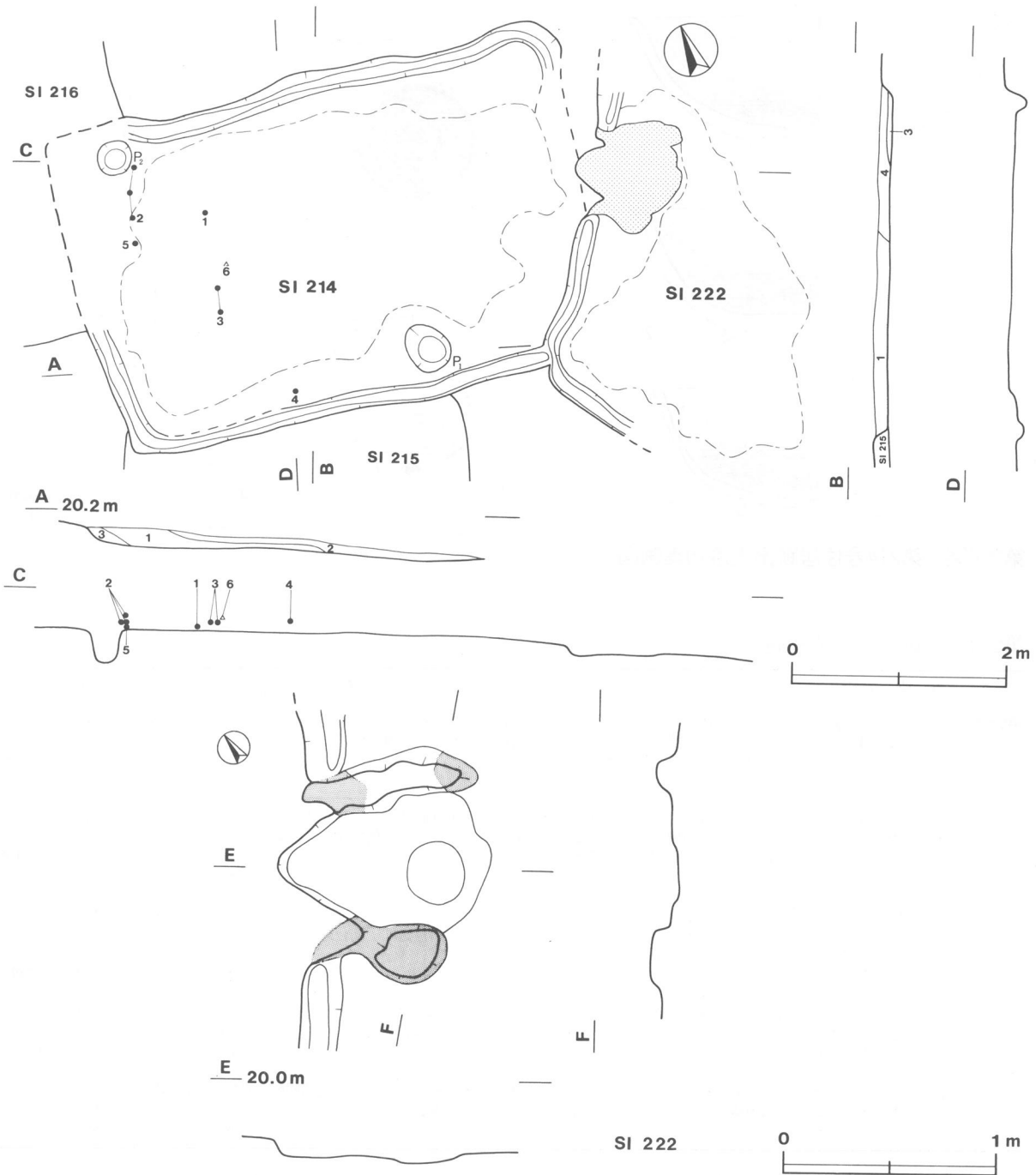
壁 壁高は13cmで, 外傾して立ち上がる。

壁溝 上幅12~27cm, 下幅3~13cm, 深さ4~10cmで, 東西の壁を除いて巡っている。

床 全体的に平坦で, 広い範囲で踏み固められている。

ピット 2か所(P₁, P₂)。P₁は, 長径47cm, 短径37cmの楕円形, P₂は, 径33cmの円形, 深さ32cmで, 主柱穴と考えられる。

覆土 4層からなり, 人為堆積である。



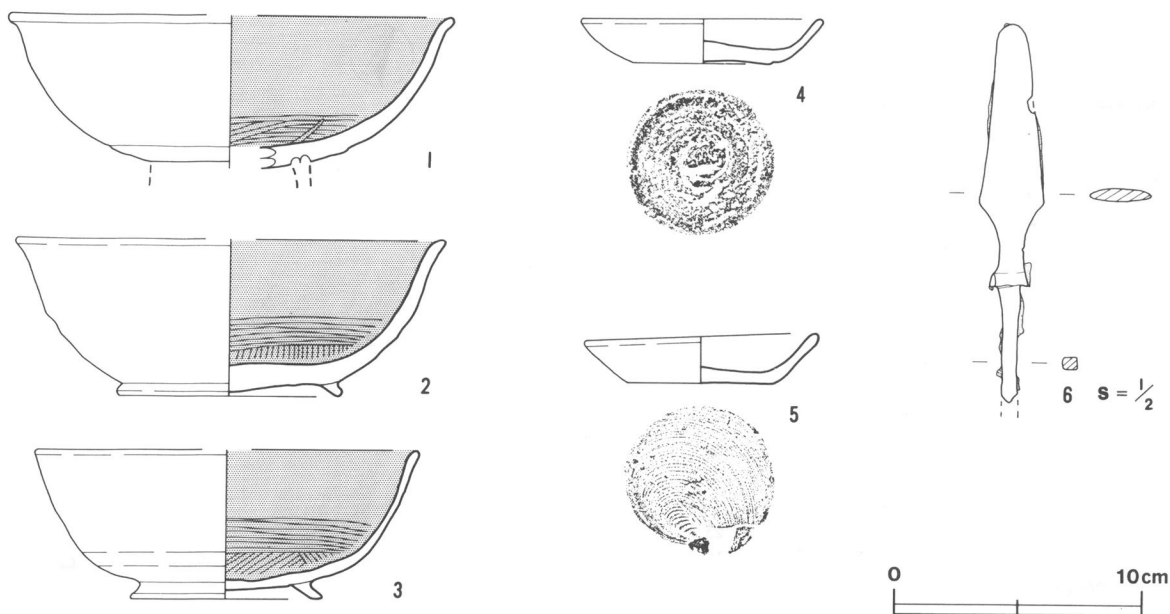
第293図 第214・222号住居跡実測図

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・ローム小ブロック微量
- 3 暗褐色 黒色粒子中量
- 4 黒褐色 ローム粒子中量

遺物 土師器片154点, 鉄製品1点, 石製品1点が出土している。第294図1の土師器高台付坏は, 北西覆土下層から, 2の土師器高台付碗は, 内面が黒色処理され, P₂の東側覆土上層から, 3の土師器高台付碗は, 内面が黒色処理され, 中央部やや西側覆土中層から, 4の土師器小皿は, 南壁西側覆土上層から, 5の土師器小皿は, 西側床面から, それぞれ出土している。6の鉄鏃は, 中央部やや西側覆土上層から出土している。

所見 本跡の時期は, 出土遺物から平安時代の10世紀以降と考えられる。



第294図 第214号住居跡出土遺物実測図

第214号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第294図 1	高台付碗 土師器	A[17.6] B(6.2)	底部から口縁部にかけての破片。体部は緩やかに内彎しながら立ち上がり、口縁部に至る。口縁部は短く外反する。	口縁部・体部外面ロクロナデ。体部内面へラ磨き。内面黒色処理。	砂粒・雲母・赤色粒子 外面にふい褐色 内面黒色 普通	P412 35% 北西側覆土下層
2	高台付碗 土師器	A[17.2] B 6.3 D 9.0 E 0.5	底部から口縁部にかけての破片。体部はわずかに内彎しながら外傾して立ち上がる。高台部はハの字状に開く。	口縁部内・外面ロクロナデ。体部内面へラ磨き。内面黒色処理。高台貼り付け。	砂粒・雲母・赤色粒子 外面橙色 内面黒色 普通	P413 50% P ₂ 東側覆土上層
3	高台付碗 土師器	A[15.5] B 6.0 D 7.6 E 0.7	底部から口縁部にかけての破片。体部はわずかに内彎しながら外傾して立ち上がる。高台部はハの字状に開く。	体部外面ロクロナデ。体部内面へラ磨き。内面黒色処理。高台貼り付け。	砂粒・雲母・赤色粒子 外面にふい褐色 内面黒色 普通	P414 60% 中央部から 西側覆土中層
4	小皿 土師器	A 9.6 B 1.8 C 5.6	底部から口縁部にかけての破片。体部は内彎しながら口縁部に至る。	体部内・外面ロクロナデ。底部回転へラ切り後、無調整。	砂粒・雲母・赤色粒子 褐色 普通	P415 70% 南壁西側覆土上層
5	小皿 土師器	A 9.2 B 2.0 C 6.0	底部から口縁部にかけての破片。体部は直線的に立ち上がり、口縁部に至る。	体部内・外面ロクロナデ。底部回転糸切り後、無調整。	砂粒・石英・雲母・赤色粒子 褐色 普通	P416 70% 西側床面

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
6	鉄 鍔	(10.1)	1.7	0.8	(12.0)	中央部より西側覆土上層	M43

第216号住居跡 (第295図)

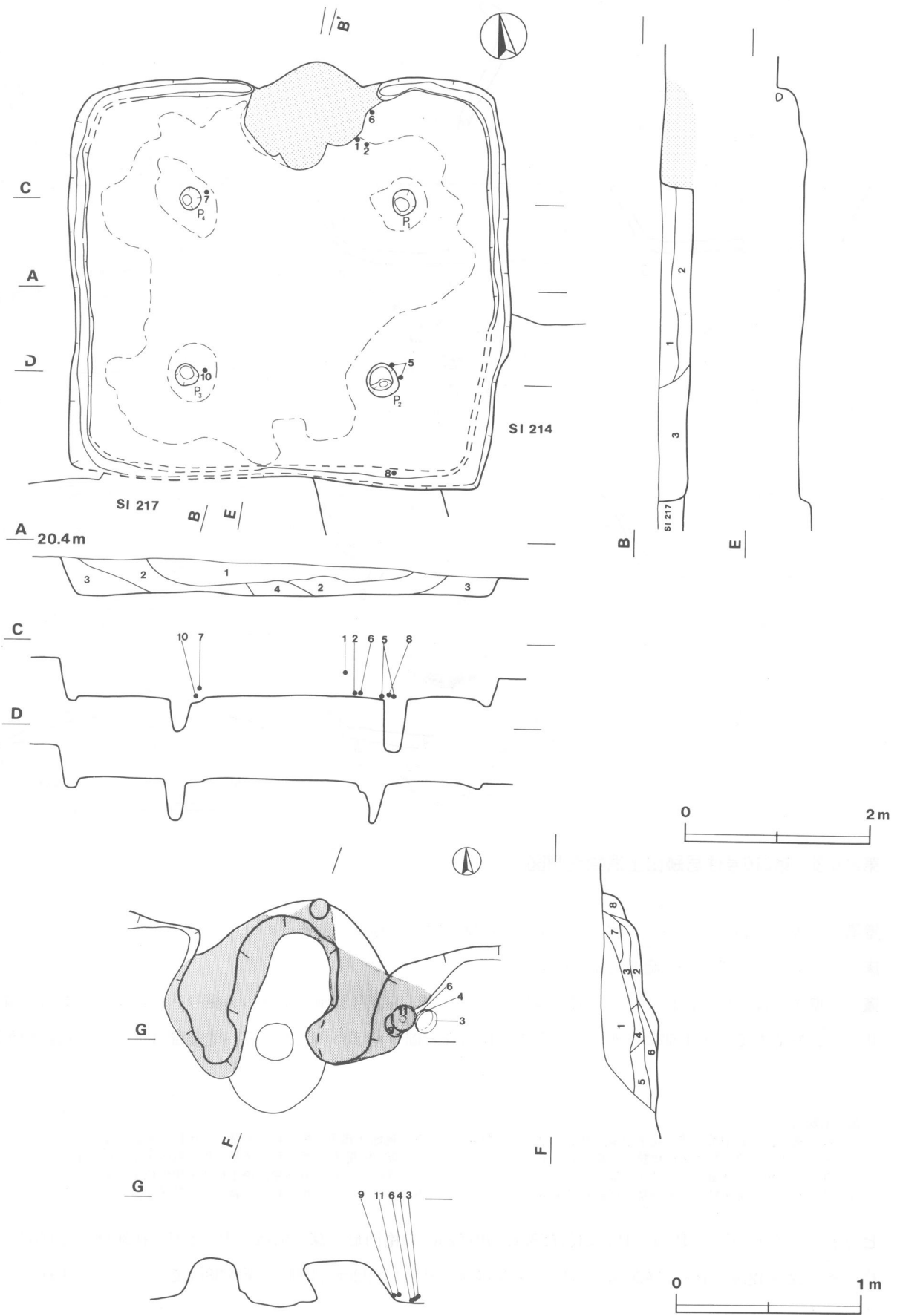
位置 調査6区南部, N14b9区。

重複関係 第214・217号住居跡が上部に構築されていることから、第214・217号住居跡より古い。

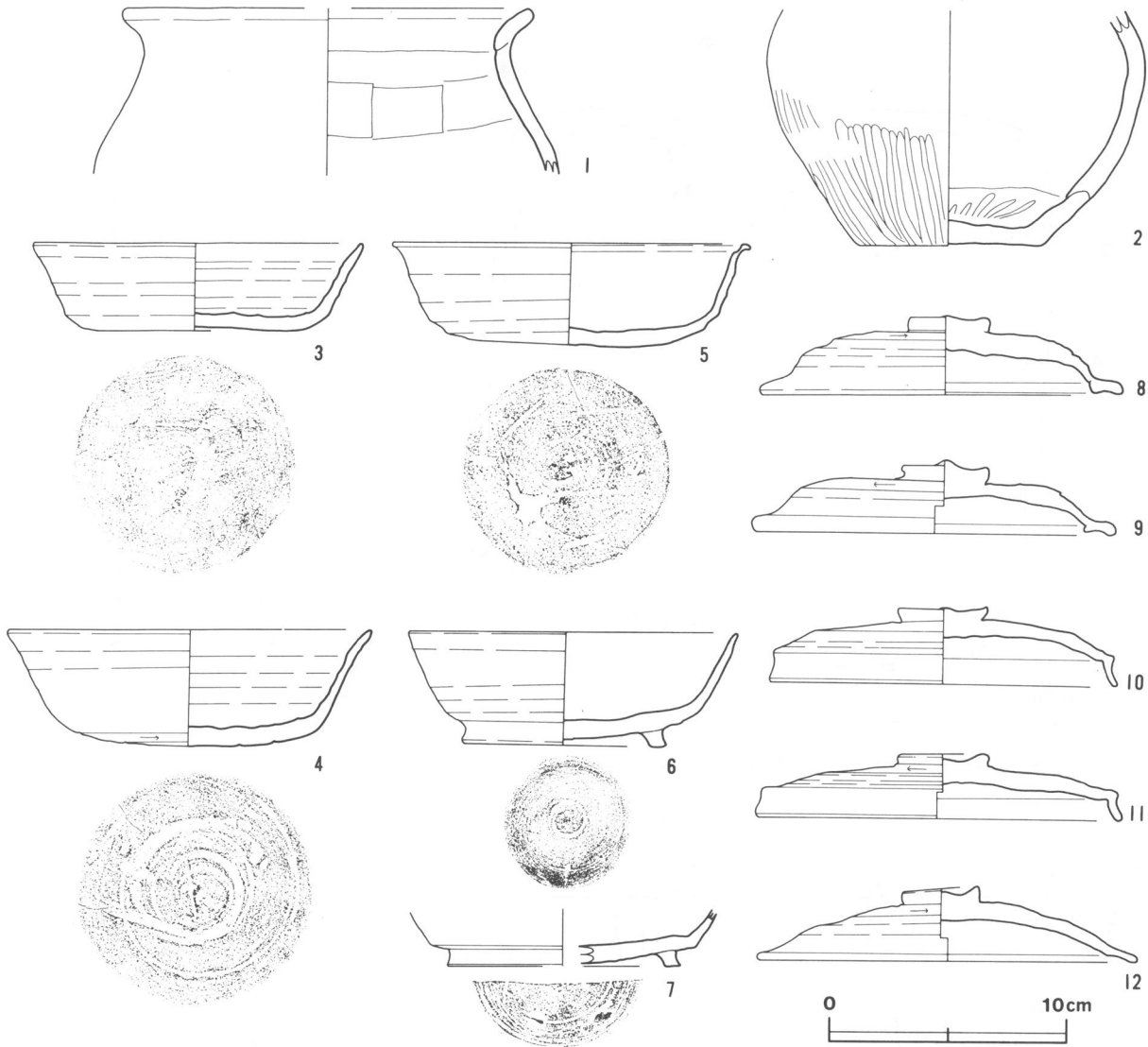
規模と平面形 長軸4.70m, 短軸4.30mの方形である。

主軸方向 N-14°-E

壁 壁高は23~44cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。



第295图 第216号住居跡実測图



第296図 第216号住居跡出土遺物実測図

壁溝 上幅14~25cm, 下幅2~13cmで, 南西部の壁を除いて巡っている。

床 全体的に平坦で, 広い範囲で踏み固められている。

竈 北壁中央部に付設されている。竈の規模は長さ118cm, 袖幅135cm, 壁外への掘り込みは28cmである。遺存状態は良好である。火床部は径20cmの円形で, 15cmほど掘りくぼめられている。煙道部は火床部から緩やかに立ち上がっている。

竈土層解説

- | | |
|------------------------------|----------------------------|
| 1 暗褐色 砂中量, 焼土粒子少量, 焼土小ブロック微量 | 5 極暗赤褐色 焼土粒子多量, 炭化粒子・砂少量 |
| 2 極暗褐色 焼土粒子・炭化粒子多量, 砂少量 | 6 暗赤褐色 焼土粒子多量, 炭化粒子中量, 砂少量 |
| 3 黒褐色 砂多量, 焼土粒子少量 | 7 褐色 砂多量, 焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 4 黒褐色 焼土粒子・砂多量, 炭化粒子少量 | 8 暗褐色 焼土粒子中量, 炭化粒子少量 |

ピット 4か所(P₁~P₄)。P₁は長径28cm, 短径25cmの楕円形, 深さ57cm, P₂は, 長径36cm, 短径33cmの楕円形, 深さ42cm, P₃は径26cmの円形, 深さ44cm, P₄は径22cmの円形, 深さ38cmで, いずれも支柱穴と考えられる。

覆土 4層からなり, 人為堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック微量
- 2 暗褐色 粘土粒子多量, ローム粒子少量, 焼土粒子・ローム小ブロック微量
- 3 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量

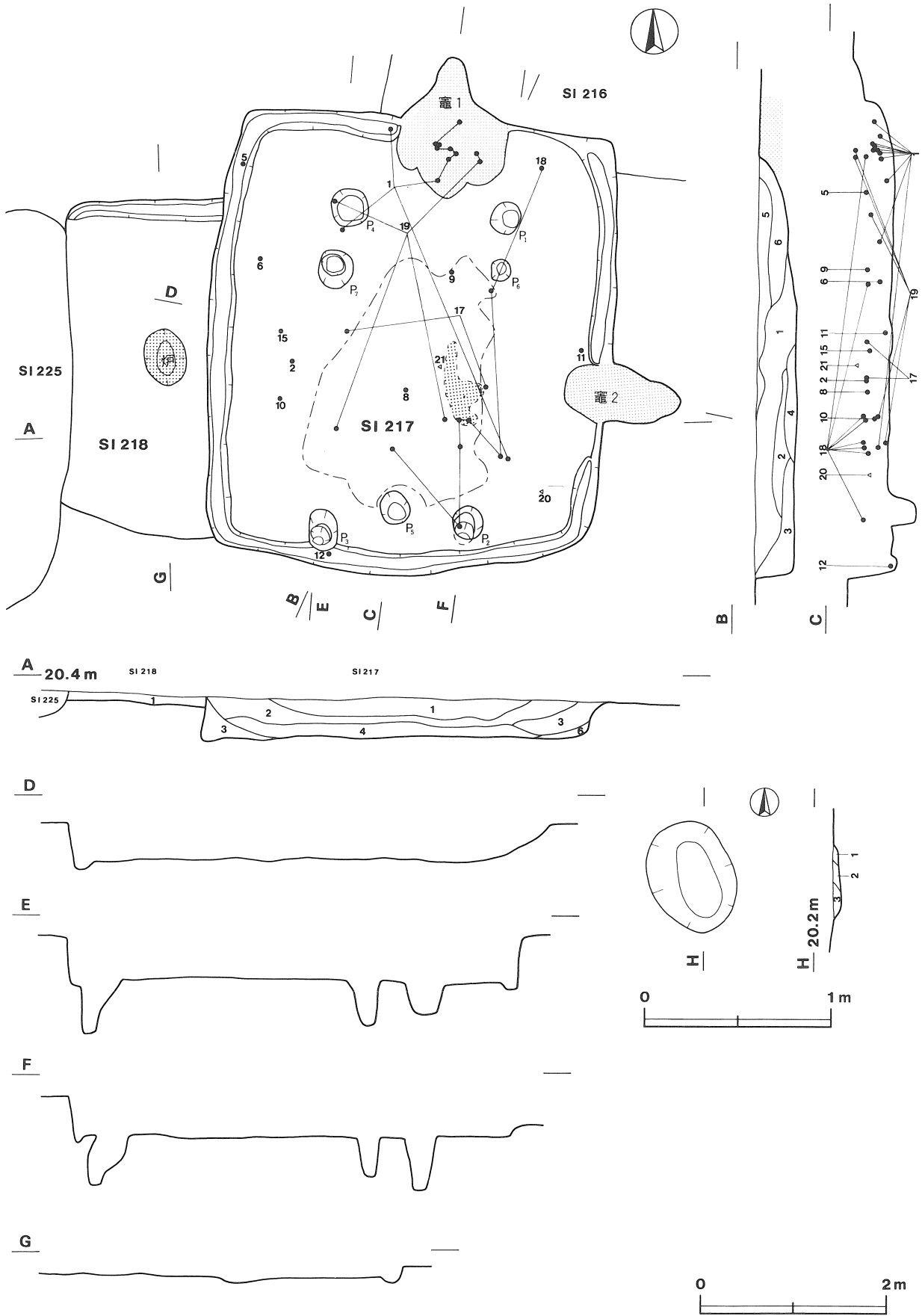
遺物 土師器片311点, 須恵器片59点, 鉄製品1点, 石製品1点が出土している。第296図1の土師器甕は, 竈右袖部覆土上層から, 2の土師器小形甕は, 竈右袖部覆土下層から, 3, 4の須恵器坏と6の土師器高台付坏は, 竈右袖部覆土下層から, 3枚重なってほぼ完形で出土している。5の須恵器坏は, P₂の北東側床面から, 7の土師器高台付坏は, P₄の北側覆土中層から出土している。8の須恵器蓋は, 南壁側床面から, 9の須恵器蓋は, ほぼ完形で, 竈右袖部覆土下層から, 10の須恵器蓋は, P₃の東側覆土下層から, 11の須恵器蓋は, 竈右袖部覆土下層から, ほぼ完形で出土している。12の須恵器蓋は, 竈内から出土している。

所見 本跡の時期は, 出土遺物から奈良時代の8世紀前葉と考えられる。

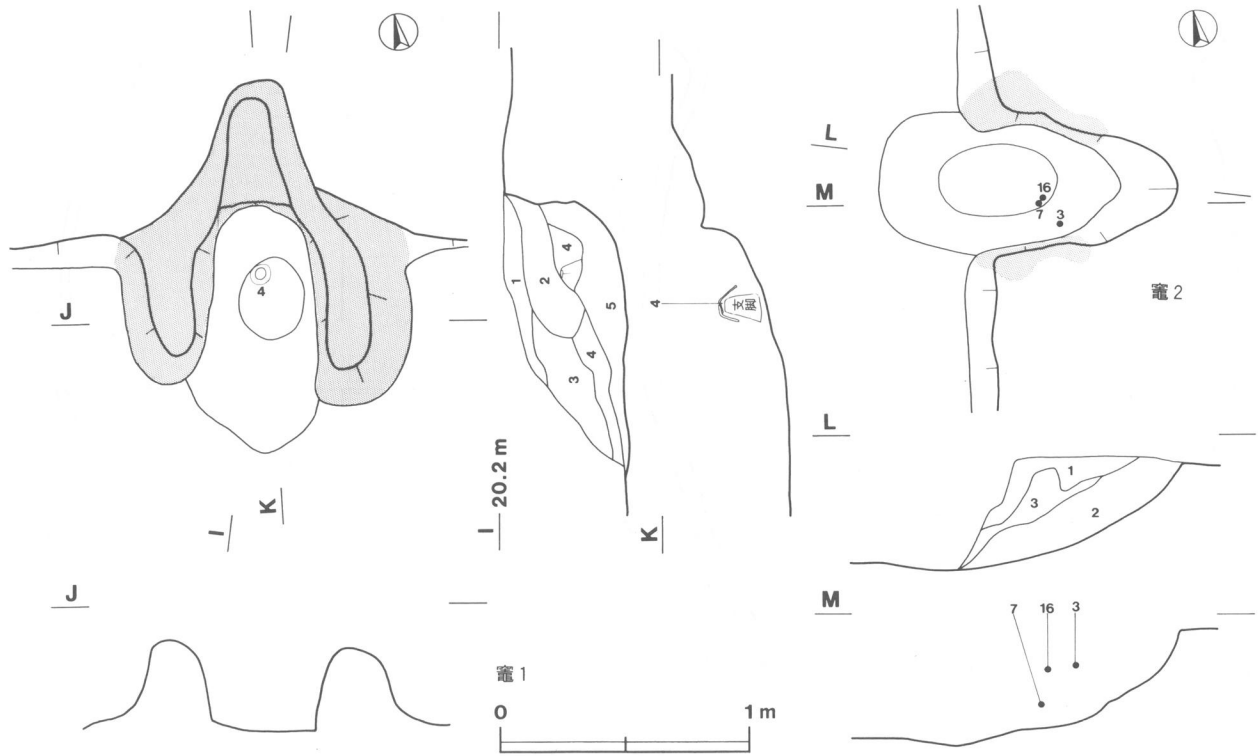
第216号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第296図 1	甕 土師器	A [17.0] B (7.1)	体部から口縁部にかけての破片。体部は緩やかに内彎して立ち上がる。口縁部はくの字状に折れる。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ヘラナデ。	砂粒・石英・長石・雲母 にぶい橙色 普通	P 422 5 % 竈右袖部覆土下層
2	小形甕 土師器	B (10.0) C 7.7	底部から体部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり, 中位に最大径をもつ。	体部内・外面横ナデ。底部内面棒状工具当て痕。体部外面下半ヘラ磨き。底部外面ヘラナデ。	長石・石英・雲母・赤色粒子 灰褐色 普通	P 423 50 % 竈右袖部覆土下層
3	坏 須恵器	A 14.0 B 3.7 C 9.5	平底。体部は外に開きながら立ち上がり, 口縁部に至る。	内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ切り後, ヘラナデ。	砂粒・長石・雲母 灰白色 普通	P 424 100 % 竈左袖側覆土下層
4	坏 須恵器	A 15.3 B 5.0 C 9.9	平底。体部は外に開きながら立ち上がり, 口縁部はわずかに外反する。器壁は薄い。	内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り。	砂粒・長石・雲母 灰白色 普通 二次焼成	P 425 100 % 竈左袖側覆土下層
5	坏 須恵器	A 15.0 B 4.5 C 8.4	平底。体部は開きながら立ち上がり, 口縁部は外反し, 内側に沈線が施されている。体部外面下端に段をもつ。	内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り。	砂粒・長石・雲母 黄灰色 普通	P 426 80 % P ₂ の北東側床面
6	高台付坏 須恵器	A 14.0 B 4.9 D 8.5 E 0.9	丸底気味の底部。底部と体部の境は, 緩やかな稜をなして立ち上がる。高台は厚く, ハの字状に開く。	内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ切り後, 高台貼り付け。	砂粒・長石 灰白色 普通	P 427 100 % 竈右袖部側覆土下層
7	高台付坏 須恵器	B (2.5) D [9.8] E 0.7	高台部片。底部と体部との境で折れ, 体部は直線的に立ち上がる。高台は外に開きふんばる。	底部内面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り後, 高台貼り付け。	砂粒・長石 灰色 普通	P 428 20 % P ₄ 北側覆土中層
8	蓋 須恵器	A 15.2 B 3.4 F 3.2 G 0.7	扁平なつまみを有する。頂部は平坦で, 天井部はドーム状をしている。口縁部内側にわずかなかえりが付く。器壁は厚い。	天井部外面回転ヘラ削り。内・外面ロクロナデ。	石英・長石・雲母・赤色粒子 にぶい黄 橙色 普通	P 431 100 % 南壁側床面
9	蓋 須恵器	A 15.1 B 3.1 F 3.5 G 0.8	扁平なつまみを有する。頂部は平坦で, 天井部はドーム状をしている。口縁部内側にわずかなかえりが付く。	天井部外面回転ヘラ削り。内・外面ロクロナデ。	長石・石英・雲母・赤色粒子 灰黄色 普通	P 432 100 % 竈右袖部覆土下層
10	蓋 須恵器	A 14.8 B 3.3 F 3.2 G 0.7	扁平なつまみを有する。頂部は平坦で, 天井部はドーム状をしている。口縁部内側にかえりが付く。	天井部外面回転ヘラ削り。内・外面ロクロナデ。	砂粒・石英・長石 青灰色 普通	P 433 100 % P ₃ の東側覆土下層
11	蓋 須恵器	A 15.4 B 2.8 F 3.6 G 0.6	天井部は全体的に扁平で, 器高が高い。口縁部内面にかえりが付く。	天井部外面回転ヘラ削り。内・外面ロクロナデ。	砂粒・長石・雲母 灰黄褐色 普通	P 434 100 % 竈右袖部覆土下層
12	蓋 須恵器	A 16.0 B 3.2 F 3.1 G 0.7	口縁部・天井部片。ボタン状の扁平なつまみが付く。口縁部内面にわずかなかえりが付く。	天井部外面回転ヘラ削り。内・外面ロクロナデ。	長石・石英・雲母・赤色粒子 灰白色 普通	P 435 50 % 竈内覆土中

第217号住居跡 (第297・298図)



第297図 第217・218号住居跡実測図



第298図 第217号住居跡竈実測図

位置 調査6区南部, N14c9区。

重複関係 第216号住居跡の上部に構築されており, 第218号住居跡を掘り込んでいるので, 第216・218号住居跡より新しい。

規模と平面形 長軸4.94m, 短軸4.25mの長方形である。

主軸方向 N-18°-E

壁 壁高は38~52cmで, ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 上幅13~32cm, 下幅6~13cm, 深さ5~9cm, 断面形は逆台形で, 全周している。

床 出入り口部から支柱穴の内側がわずかに高く, 踏み固められている。

竈 北壁中央部と東壁やや南側に付設され, 北壁の竈1が古く, 東壁の竈2へ作り替えをしている。竈1の規模は長さ150cm, 袖幅117cm, 壁外への掘り込みは67cmである。袖部は山砂混じりの粘土で構築されている。火床部は長径35cm, 短径26cmの楕円形で, 5cmほど掘りくぼめられている。竈2の規模は, 長さ120cm, 袖幅84cm, 壁外への掘り込みは77cmである。両袖は焚口付近が壊されており遺存状況は悪いが, 火床部は長径48cm, 短径29cmの楕円形である。

竈1土層解説

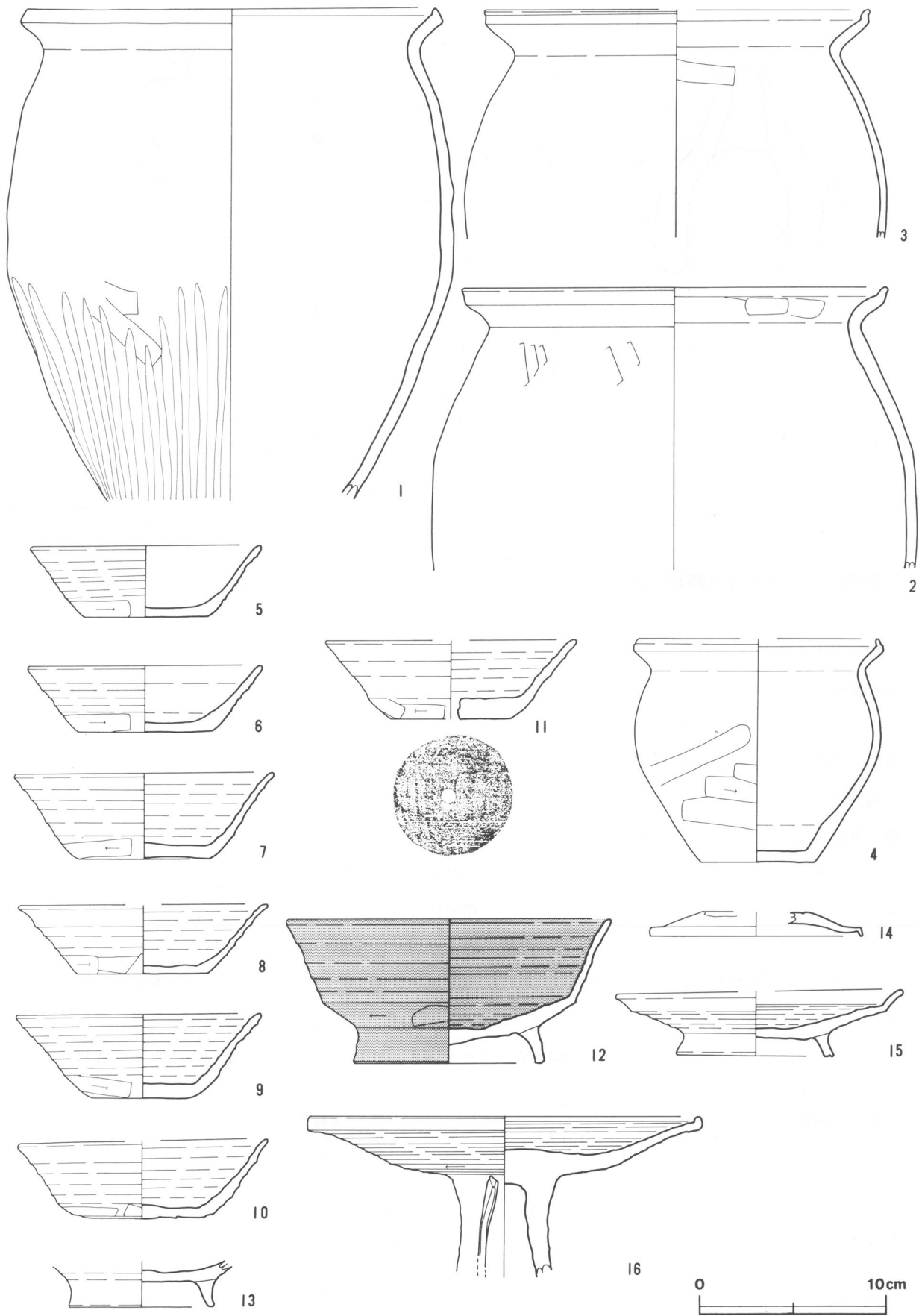
- 1 黒褐色 砂中量, 焼土粒子少量, ローム粒子微量
- 2 黒褐色 砂多量, 焼土粒子・炭化粒子少量, 焼土小ブロック微量
- 3 黒褐色 砂中量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 黒褐色 焼土粒子中量, 焼土小ブロック・炭化粒子・砂少量
- 5 極暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子多量, 焼土小ブロック中量

竈2土層解説

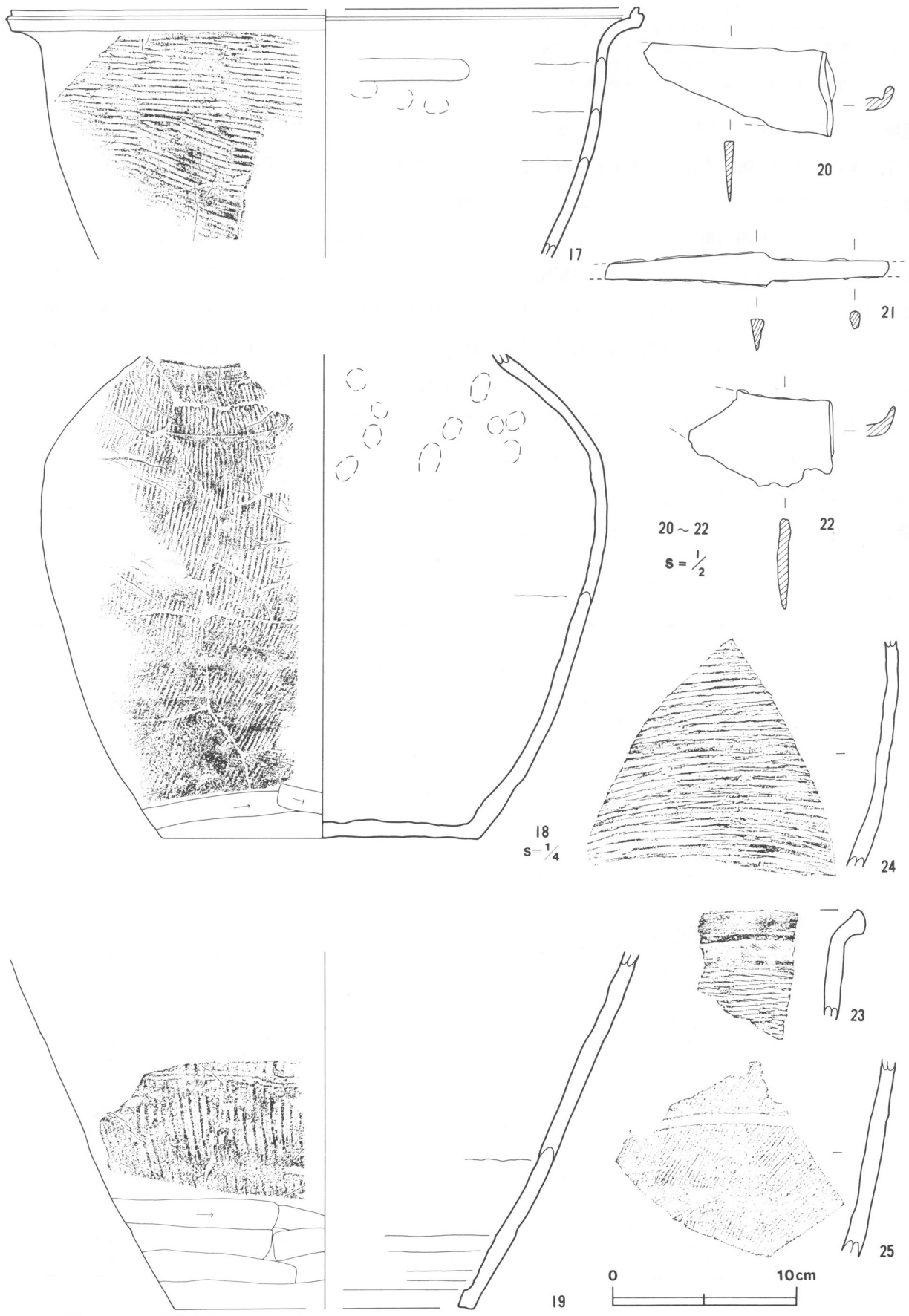
- 1 黒褐色 炭化粒子少量, 焼土粒子微量
- 2 極暗褐色 焼土粒子多量, 焼土中・小ブロック少量
- 3 暗褐色 焼土粒子少量, 炭化粒子微量

ピット 7か所(P₁~P₇)。P₁, P₂, P₄~P₆は径21~41cmの円形, 深さ36~56cm, P₃は長径46cm, 短径30cmの楕円形, 深さ60cmで, P₁~P₄は支柱穴と考えられる。P₅は長径35cm, 短径31cmの楕円形, 深さ28cmで, 出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 6層からなり, 人為堆積である。



第299図 第217号住居跡出土遺物実測図(1)



第300図 第217号住居跡出土遺物実測図(2)

土層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子中量, ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子・焼土粒子微量
- 3 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子中量, ローム粒子少量
- 4 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 5 暗褐色 炭化粒子・ローム粒子・焼土粒子少量
- 6 暗褐色 粘土粒子少量, ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

遺物 土師器片986点, 須恵器片449点, 土製品1点が出土している。第299図1の土師器甕は, 竈1周辺の覆土中層から, 2の土師器甕は, 西側覆土中層から, 3の土師器甕は, 竈2内の覆土中層から, 4の土師器小形甕は, 土製支脚の上部に重なって出土している。5の須恵器杯は, 北西コーナーの覆土中層から出土している。6の須恵器杯は, 西側の覆土から逆位で出土している。8, 9の須恵器杯は, 中央部の覆土中層から, 10の須恵器杯は, 西側の覆土下層から, 11の須恵器杯は, 竈2周辺覆土下層から, 12の須恵器の高台付杯は, 南壁やや西側の壁溝から, 13の須恵器の高台付杯は, P₃の覆土中から出土している。14の須恵器蓋は, 竈2内覆土中から出土している。15の須恵器盤は, 西側の覆土中層から出土している。16の須恵器高盤は, 竈2内中央覆土中層から他の遺物と重なって出土している。17の須恵器甕は, 中央部覆土中層から, 18の須恵器甕は, 北東から南東へかけての覆土中層から, 19の須恵器甕は, 竈1と中央部覆土中層から出土している。20の鉄鎌は, 南東コーナー覆土中層から, 21の刀子は, 中央部覆土上層から, 22の鉄鎌は, P₄の覆土中から出土している。23~25の須恵器甕は, 体部片に叩きが施されており, 覆土上層から出土している。

所見 本跡の時期は, 出土遺物から平安時代の9世紀前葉と考えられる。

第217号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第299図 1	甕 土師器	A 22.0 B (26.5)	体部から口縁部にかけての破片。体部は緩やかに内彎して立ち上がる。口縁部はくの字状に折れ, 端部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ヘラナデ。体部外面にヘラ削り。	砂粒・石英・長石・雲母 橙色 普通	P 437 50% 竈1周辺覆土中層
2	甕 土師器	A 22.8 B (15.2)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部はくの字状に折れ, 端部は外につまみ上げられている。	口縁部外面横ナデ。体部外面ヘラナデ。	石英・長石・雲母・赤色粒子 にぶい橙色 普通	P 438 20% 西側覆土中層
3	甕 土師器	A [20.6] B (12.3)	体部から口縁部にかけての破片。体部は緩やかに内彎して立ち上がる。口縁部はくの字状に折れ, 端部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ヘラナデ。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	P 439 10% 竈2内覆土中層
4	小形甕 土師器	A [12.8] B 12.0 C 6.0	底部から口縁部にかけての破片。体部は外に開きながら立ち上がり, 口縁部はわずかに外反し, 端部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り。	石英・長石・赤色粒子・雲母 明赤褐色 普通	P 440 70% 竈1内覆土中層
5	杯 須恵器	A 12.4 B 6.6 C 3.8	口縁部・体部の一部欠損。平底。体部は開きながら立ち上がり, 口縁部は外反する。	内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部一方向の手持ちヘラ削り。	砂粒・長石・雲母 灰色 普通	P 441 90% 北西コーナー側覆土中層
6	杯 須恵器	A 12.4 B 3.5 C 7.2	平底。体部は開きながら直線的に立ち上がり, 口縁部に至る。	内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部一方向の手持ちヘラ削り。	砂粒・長石・雲母 灰黄色 普通	P 442 100% 西側覆土中層
7	杯 須恵器	A 13.8 B 4.6 C 7.0	口縁部・体部一部欠損。平底。体部は直線的に広がり, 口縁部は外反する。	内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部一方向の手持ちヘラ削り。	砂粒・長石・雲母 黄灰色 普通	P 443 90% 竈2内覆土下層
8	杯 須恵器	A [13.2] B 4.7 C 7.0	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は直線的に立ち上がり, 口縁部はわずかに外反する。	内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部不定方向の手持ちヘラ削り。	長石・雲母・赤色粒子 にぶい橙色 普通	P 444 60% 中央部覆土中層

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第299図 9	坏 須恵器	A 13.0 B 4.5 C 5.5	口縁部・体部一部欠損。平底。体部は直線的に立ち上がり、口縁部に至る。	内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちへら削り。底部一方の手持ちへら削り。	砂粒・石英・長石・雲母 灰色 普通	P 445 90% 中央部覆土中層
10	坏 須恵器	A [13.2] B 4.3 C 7.3	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は直線的に立ち上がり、口縁部に至る。	内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちへら削り。底部不定方向の手持ちへら削り。	砂粒・長石 灰色 普通	P 446 40% 西側覆土下層
11	坏 須恵器	A [13.4] B C 6.4	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は直線的に立ち上がり、口縁部に至る。	内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちへら削り。底部一方の手持ちへら削り。底部中央部に内・外面からの穿孔有り。	砂粒・長石・雲母 灰色 普通	P 447 45% 竈2周辺覆土下層
12	高台付坏 須恵器	A 17.4 B 7.8 D 10.0 E 2.0	口縁部・体部一部欠損。底部と体部との境は稜をなして折れる。高台はわずかに外に開き、ふんばる。	内・外面ロクロナデ。坏部下端回転へら削り後、高台貼り付け。内・外面黒色処理。	長石・雲母・赤色粒子 にぶい褐色 普通	P 448 90% 南壁壁溝
13	高台付坏 須恵器	B (2.5) D E 1.5	高台部片。底部と体部との境で折れ、体部は直線的に立ち上がる。高台は、外に開き、ふんばる。	底部内面ロクロナデ。底部回転へら削り後、高台貼り付け。	長石・雲母・赤色粒子 灰色 普通	P 449 5% P 3の覆土中
14	蓋 須恵器	A 11.4 B (1.3)	口縁部破片。頂部は平坦で、口縁部内側に短いかえりが付く。	天井部外面回転へら削り。内面ロクロナデ。	長石 灰色 普通	P 451 40% 竈2内覆土中
15	盤 須恵器	A [15.3] B 3.7 D 8.4 E 1.7	底部から口縁部にかけての破片。高台は直線的に開く。口縁部は短く外反する。	内・外面ロクロナデ。底部回転へら削り。高台貼り付け。	長石・雲母 灰色 普通	P 454 60% 西側覆土中層
16	高盤 須恵器	A 20.8 B (8.7) E (5.3)	脚部から口縁部にかけての破片。脚部はラッパ状に開き、三方に透かし孔を有する。口縁端部は上方に短く折り曲げられている。	盤部・脚部内・外面ロクロナデ。盤部外面下端回転へら削り。	砂粒・石英・長石・雲母 灰色 普通	P 455 40% 竈2内中央覆土中層
第300図 17	甕 須恵器	A [44.0] B (13.5)	体部から口縁部にかけての破片。体部は緩やかに内彎して立ち上がり、口縁部でくの字状に外反し、端部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面ロクロナデ。体部外面横位の平行叩き。体部内面へらナデ。輪積み痕。指頭押圧。	砂粒・長石・雲母 黄灰色 普通	P 456 5% 中央部覆土中層
18	甕 須恵器	B (34.5) C 22.8	底部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がる。	体部外面平行叩き。輪積み痕。指頭押圧。	長石・石英・雲母・赤色粒子 橙色 不良	P 457 30% 北東から南東にかけての覆土中層
19	甕 須恵器	B (19.3) C [16.2]	底部から口縁部にかけての破片。体部は直線的に外傾して立ち上がる。	体部外面縦位の平行叩き。下端へら削り。輪積み痕。	砂粒・石英・長石・雲母・赤色粒子 にぶい橙色 普通	P 458 20% 竈1と中央部覆土中層

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
20	鎌	(6.9)	3.1	0.3	(22.0)	南東コーナー覆土中層	M44
21	刀子	(10.3)	1.3	0.5	(8.6)	中央部覆土上層	M45
22	鎌	(5.2)	3.5	0.4	(16.0)	P ₄ の覆土中	M48

第219号住居跡（第301図）

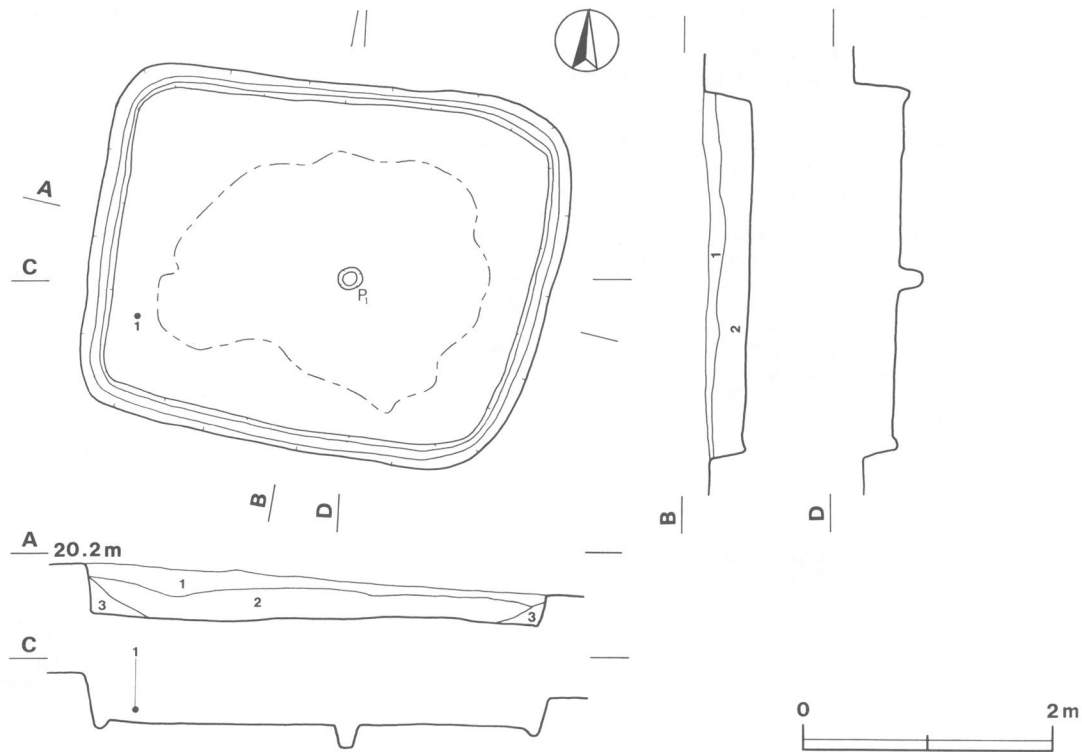
位置 調査6区南部，N14e0区。

規模と平面形 長軸3.68m，短軸2.98mの隅丸長方形である。

長軸方向 N-90°-E

壁 壁高は24～40cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 上幅17～21cm，下幅4～8cmで、全周している。



第301図 第219号住居跡実測図

床 全体的に平坦で、中央部が踏み固められている。

ピット 1か所(P₁)。P₁は、径20cmの円形、深さ18cmで、性格は不明である。

覆土 3層からなり、人為堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック微量
- 2 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量

遺物 土師器片244点、須恵器片47点が出土している。第302図1の土師器坏は、内面が黒色処理されており、南西側の覆土中層から出土している。2、3の須恵器甕は、北西側の覆土中から出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から平安時代の10世紀前半と考えられる。



第302図 第219号住居跡出土遺物実測図

第219号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第302図 1	坏 土師器	A[15.4] B(3.8)	体部から口縁部にかけての破片。体部は直線的に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	体部外面ロクロナデ。体部内面へラ磨き。内面黒色処理。	砂粒・長石 外面明褐色 内面黒色 普通	P459 5% 南西側覆土中層

第220号住居跡（第303図）

位置 調査6区南部，N14es区。

規模と平面形 長軸5.20m，短軸4.56mの方形である。

主軸方向 N-13°-E

壁 壁高は8～44cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 上幅11～30cm，下幅5～12cm，深さ2～10cm，断面形は逆台形で，全周している。

床 出入りロピットから竈にかけて踏み固められている。

竈 北壁中央部に付設されている。竈の規模は長さ130cm，袖幅137cm，壁外への掘り込みは33cmである。袖部の一部は削平されている。

竈土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子中量，焼土小ブロック・炭化粒子少量
- 2 暗赤褐色 焼土粒子中量，ローム粒子・焼土小ブロック少量
- 3 暗赤褐色 焼土粒子多量，炭化粒子中量，粘土・砂微量
- 4 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子中量，粘土・砂少量
- 5 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子中量，炭化粒子・ローム粒子少量，粘土粒子微量
- 6 赤褐色 焼土粒子中量，炭化粒子少量，焼土粒子・ローム粒子・粘土・砂微量
- 7 暗褐色 焼土粒子中量，炭化粒子・焼土小ブロック少量，粘土・砂微量
- 8 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子少量，ローム粒子・ローム小ブロック・灰微量
- 9 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子中量

ピット 6か所（P₁～P₆）。P₁は，長径24cm，短径18cmの楕円形，深さ38cm，P₂は，長径44cm，短径36cmの楕円形，深さ54cm，P₃は，長径45cm，短径34cmの楕円形，深さ54cm，P₄は，長径43cm，短径26cmの楕円形，深さ45cmで支柱穴と思われる。P₆は，径24cmの円形，深さ40cmで性格不明ピットである。P₅は，長径56cm，短径36cmの楕円形，深さ27cmで，出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 4層からなり，人為堆積である。

土層解説

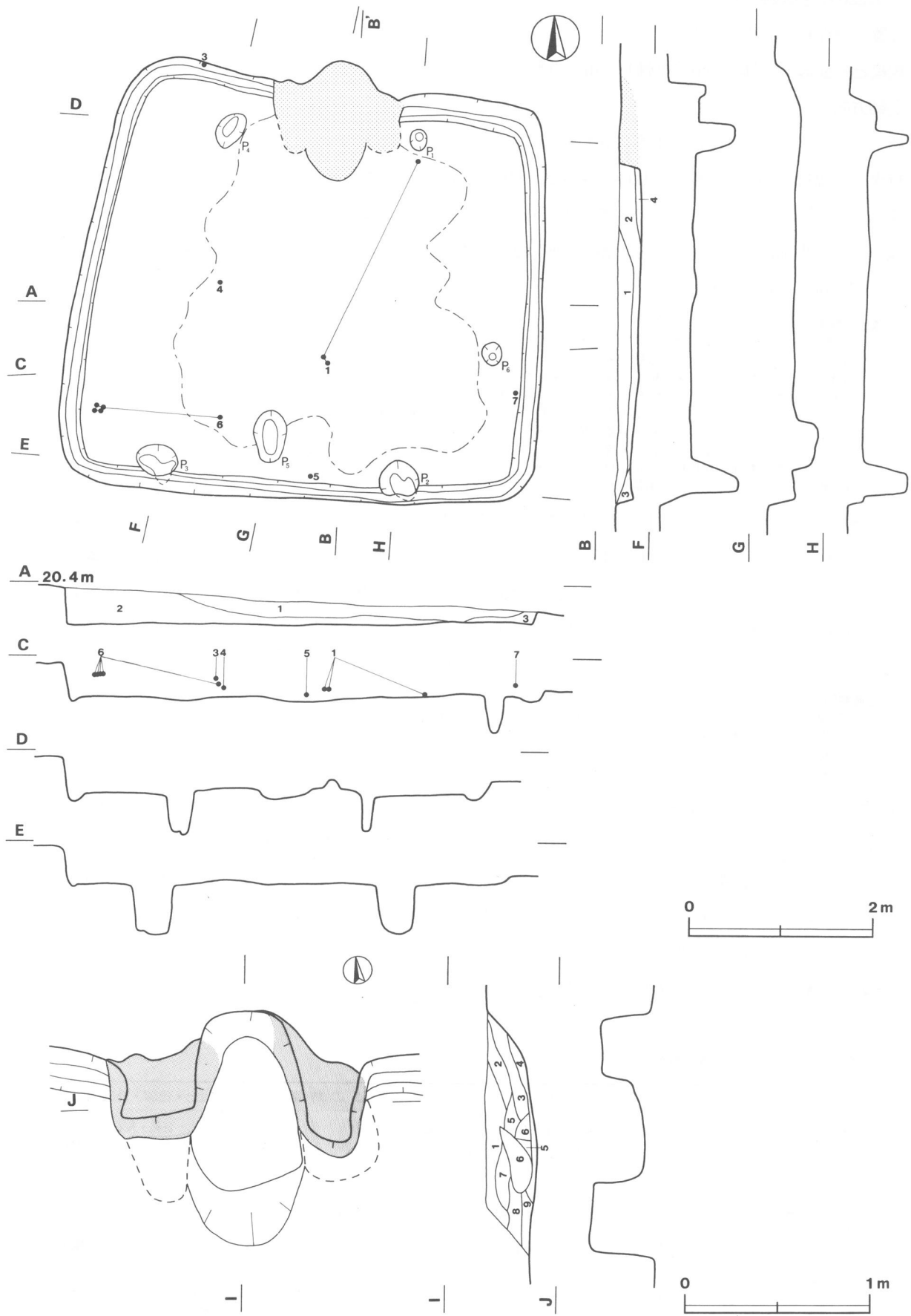
- 1 黒褐色 ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子少量，炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子・焼土小ブロック少量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 炭化粒子中量，ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・焼土小ブロック少量

遺物 土師器片659点，須恵器片231点，鉄滓1点が出土している。第304図1の土師器甕は，P₁付近の覆土下層から，2の土師器甕は，竈付近覆土中から，3の須恵器坏は，北壁覆土中層から横位で出土している。4の須恵器坏は，西側覆土下層から逆位で出土し，5の須恵器坏は，南壁下中央部の覆土下層から，6の須恵器盤は，南西コーナーの覆土中層から，7の須恵器盤は，南東側の覆土中層から出土している。8～10の須恵器甕片は，竈内から竈前面部にかけての覆土中から出土している。

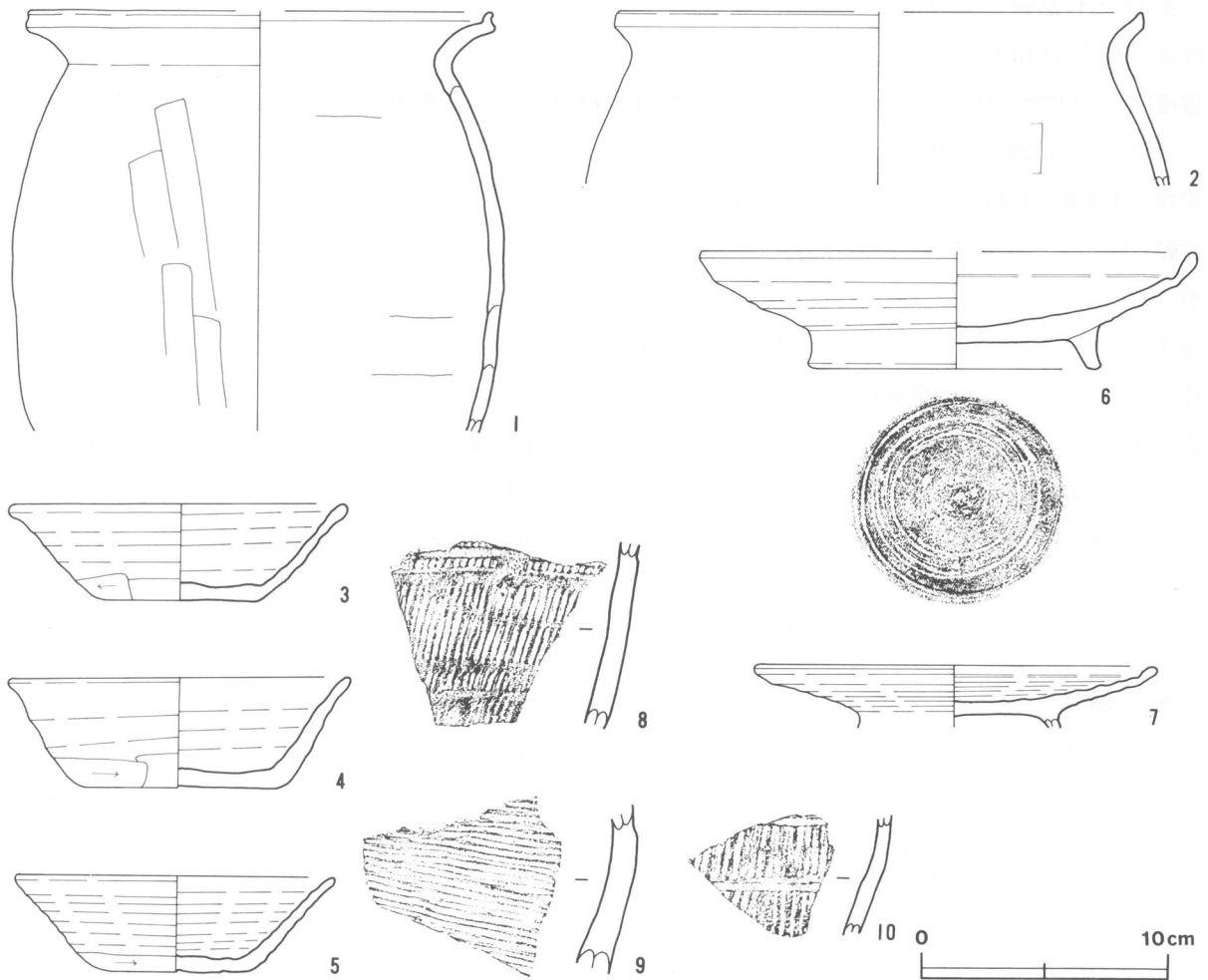
所見 本跡の時期は，出土遺物から平安時代の9世紀前葉と考えられる。

第220号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第304図 1	甕 土師器	A[18.6] B(17.0)	体部から口縁部の破片。体部は緩やかに内彎して立ち上がる。口縁部はくの字状に折れ，端部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ヘラナデ。体部外面ヘラ削り。輪積み痕。	砂粒・石英・長石・赤色粒子にぶい橙色普通	P460 10% P ₁ 付近覆土下層
2	甕 土師器	A[21.2] B(7.0)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり，口縁部はくの字状に折れ，端部は外につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。口縁部の一部に煤付着。	石英・長石・雲母明赤褐色普通	P461 5% 竈付近覆土中
3	坏 須恵器	A 13.3 B 4.0 C 6.3	平底。体部は開きながら立ち上がり，口縁部はやや外反する。	内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部一方向の手持ちヘラ削り。	砂粒・石英・長石褐灰色普通	P462 90% 北壁覆土中層



第303图 第220号住居跡実測图



第304図 第220号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第304図 4	坏 須恵器	A 13.6 B 4.6 C 7.9	平底。体部は開きながら直線的に立ち上がり、口縁部に至る。器壁は厚い。	内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちへら削り。底部不定方向の手持ちへら削り。	砂粒・石英 灰白色 普通	P 463 80% 中央部西側覆土 下層
5	坏 須恵器	A 12.7 B 3.9 C 5.6	平底。体部は直線的に立ち上がり、口縁部に至る。	内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちへら削り。底部回転へら切り。	砂粒・石英・黒色粒子 褐灰色 普通	P 464 70% 南壁中央 部覆土下層
6	盤 須恵器	A [19.8] B 4.7 D 11.4 E 1.6	底部から口縁部にかけての破片。平底。高台は直線的に開く。口縁部は短く外反する。	内・外面ロクロナデ。底部回転へら削り。高台貼り付け。	長石・雲母・赤色粒子 にぶい橙色 普通	P 465 60% 南西コーナー 覆土中層
7	盤 須恵器	A 16.1 B (2.6) E (0.6)	底部から口縁部にかけての破片。口縁部は短く内傾する。	内・外面ロクロナデ。底部回転へら削り。	砂粒・石英 褐灰色 普通	P 466 60% 南東側覆土中層

第221号住居跡（第305図）

位置 調査6区南部，N14c7区。

重複関係 第225号住居跡を掘り込んでおり，第223号住居跡が上部に構築していることから，第225号住居跡より新しく，第223号住居跡より古い。

規模と平面形 長軸4.80m，短軸3.48mの長方形である。

主軸方向 N-4°-W

壁 壁高は47cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 上幅7～38cm，下幅2～9cm，深さ4cm，断面形は逆台形で，ほぼ全周している。

床 全体的に平坦で，両竈周辺が踏み固められて，わずかに高い。

竈 北壁東部と東壁南部に付設され，北壁の竈1が古く，東壁の竈2へ作り替えをしている。竈1の規模は長さ130cm，袖幅139cm，壁外への掘り込みは65cmである。袖部は粘土で構築されている。火床部は長径36cm，短径21cmの楕円形で，8cmほど掘りくぼめられている。竈2の規模は，長さ74cm，袖幅82cm，壁外への掘り込みは34cmである。遺存状況は悪く，火床部は長径25cm，短径22cmの楕円形である。8cmほど掘りくぼめられている。

竈1土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子少量，炭化粒子・粘土微量
- 2 極暗褐色 焼土粒子・焼土小ブロック・粘土少量，炭化粒子微量
- 3 灰褐色 粘土多量，焼土粒子中量，炭化粒子少量
- 4 黒褐色 焼土粒子少量，炭化粒子・粘土微量
- 5 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子中量，焼土小ブロック少量
- 6 極暗褐色 焼土粒子・炭化粒子多量，粘土中量
- 7 黒褐色 炭化粒子中量，焼土粒子・ローム小ブロック・粘土少量
- 8 極暗褐色 ローム粒子・炭化粒子中量，焼土粒子少量
- 9 極暗褐色 焼土粒子多量，炭化粒子中量

竈2土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・ローム小ブロック・粘土少量
- 2 灰褐色 粘土多量
- 3 黒褐色 炭化粒子多量，焼土粒子中量
- 4 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子多量

ピット 1か所(P₁)。P₁は，長径40cm，短径30cmの楕円形，深さ17cmで，性格不明のピットである。

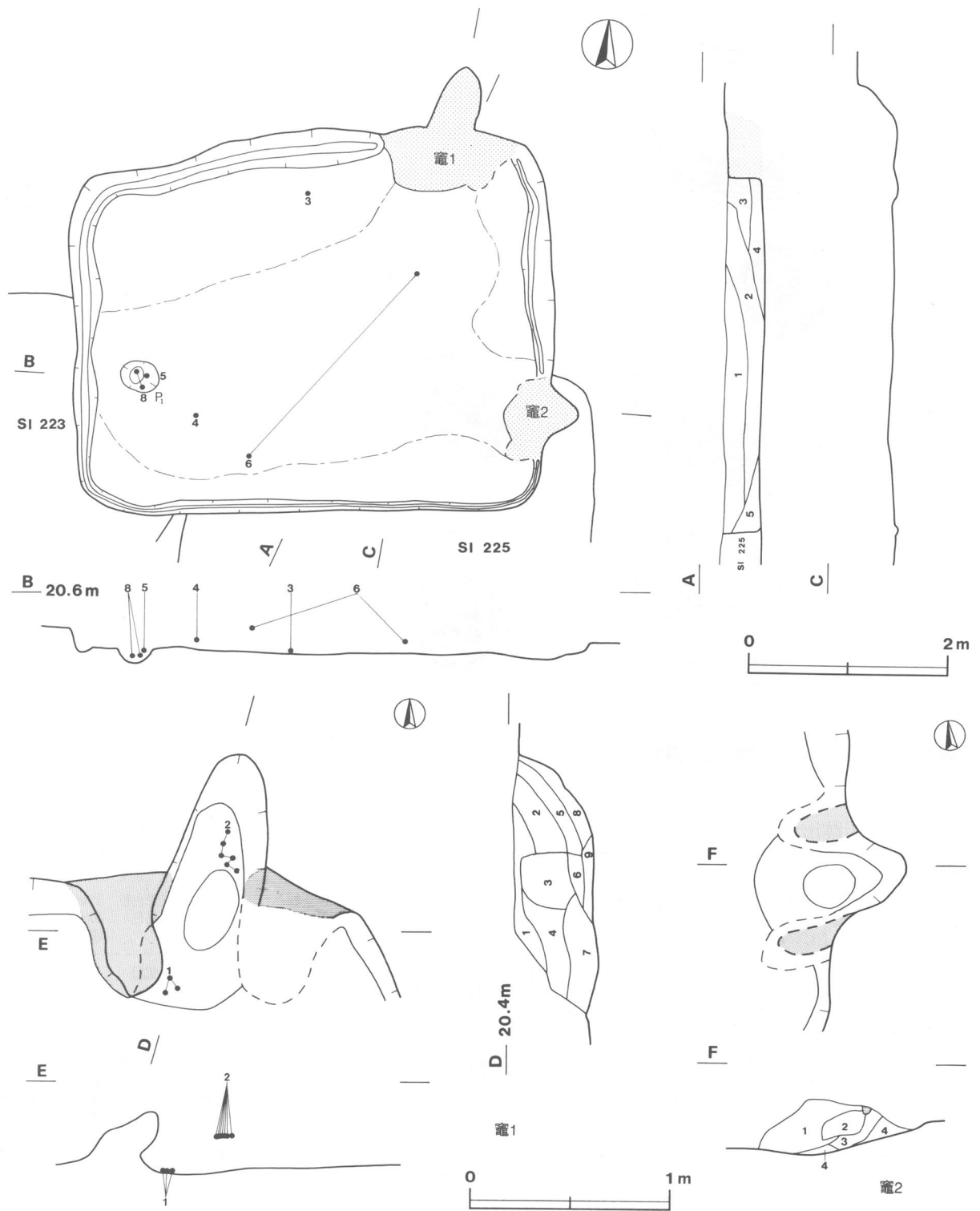
覆土 5層からなり，人為堆積である。

土層解説

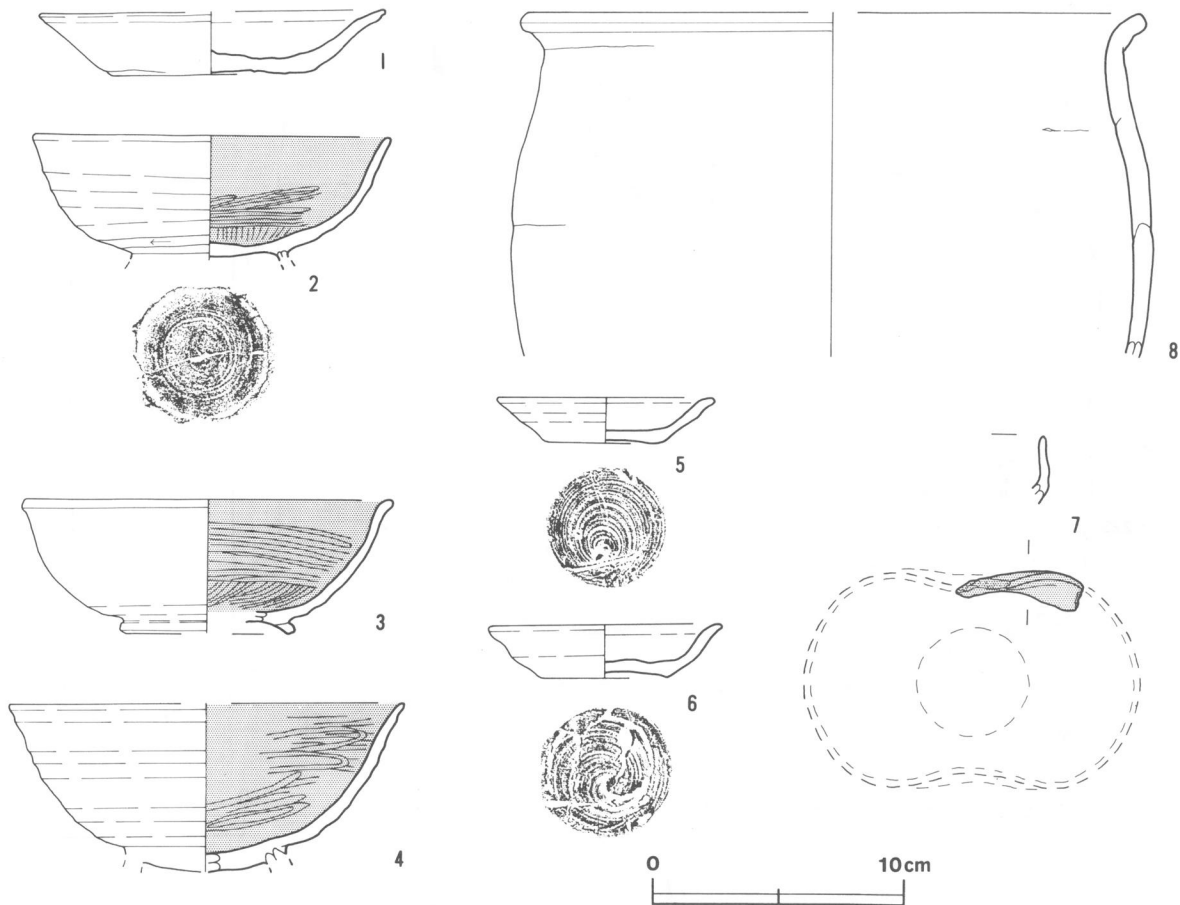
- 1 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック中量，焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量，炭化粒子・焼土粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 黒褐色 ローム粒子少量，ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 5 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子少量，ローム小ブロック微量

遺物 土師器片918点が出土している。第306図1の土師器坏は竈1内覆土下層から出土し，2の土師器高台付椀は，内面が黒色処理され，竈1内覆土中層から出土している。3の土師器高台付椀は，内面が黒色処理され，竈1付近北壁側床面から出土している。4の土師器高台付椀は，内面が黒色処理され，南西側覆土中層から，5の土師器小皿は，完形でP₁内覆土下層から出土している。6の土師器小皿は，北東側と南西側の覆土中層から出土している。7の耳皿は，P₁の覆土中から，8の土師器甕は，P₁内覆土下層から出土している。

所見 本跡の時期は，出土遺物から平安時代の10世紀以降と考えられる。



第305図 第221号住居跡実測図



第306図 第221号住居跡出土遺物実測図

第221号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第306図 1	坏 土師器	A[13.8] B 2.5 C 7.8	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は緩やかに内彎しながら立ち上がり、口縁部は外反する。	内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ切り後、無調整。	砂粒・雲母・赤色粒子にぶい黄褐色 普通	P 468 40% 竈1内覆土下層
2	高台付碗 土師器	A 14.2 B(5.0) E(0.4)	高台部から口縁部にかけての破片。ハの字状に開く高台が付く。体部は内彎して立ち上がり、口縁部にいたる。	体部外面ロクロナデ。内面ヘラ磨き。内面黒色処理。底部回転ヘラ切り後、高台貼り付け。	砂粒・長石・雲母・石英 外面橙色 内面黒色 普通	P 469 70% 竈1内覆土中層
3	高台付碗 土師器	A 14.7 B 5.4 D[7.0] E 0.7	高台部から体部にかけての破片。ハの字状に開く高台が付く。体部は内彎して立ち上がる。	体部外面ロクロナデ。内面ヘラ磨き。内面黒色処理。高台貼り付け。	砂粒・雲母・赤色粒子 外面にぶい橙色 内面黒色 普通	P 470 40% 竈1付近北壁側床面
4	高台付碗 土師器	A[15.8] B(6.7) E(0.3)	底部から体部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部で外反する。	体部外面ロクロナデ。内面ヘラ磨き。内面黒色処理。底部回転ヘラ切り。高台貼り付け。	砂粒・長石・雲母 外面にぶい黄褐色 内面黒色 普通	P 471 30% 南西側覆土中層
5	小皿 土師器	A 8.6 B 2.4 C 4.7	平底。体部は直線的に立ち上がり、口縁部でやや外傾する。	口縁部内・外面ロクロナデ。底部回転系切り後、無調整。	砂粒・長石にぶい橙色 普通	P 472 100% P1内覆土下層
6	小皿 土師器	A 9.2 B 2.2 C 5.1	口縁部一部欠損。体部は直線的に立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面ロクロナデ。底部回転系切り後、無調整。	砂粒・長石にぶい橙色 普通	P 473 70% 北東側と南西側覆土中層
7	耳皿 土師器	B(2.8)	口縁部片。口縁部は内彎し、歪む。	内・外面ヘラミガキ、黒色処理。	砂粒・雲母にぶい黄色 普通	P 476 10% P1内覆土中

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第306図 8	甕 土師器	A[24.6] B(13.9)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ。輪積み痕。	砂粒・石英・長石・雲母にぶい褐色普通	P477 10% P ₁ 内覆土下層

第222号住居跡（第293図）

位置 調査6区南部，N15c₁区。

重複関係 第214号住居跡を掘りこんでおり，第214号住居跡より新しい。

規模と平面形 長軸(2.80)m，短軸(0.90)mで，平面形は不明である。

主軸方向 [N-54°-W]

壁 壁高は10cmで，緩やかに立ち上がる。

壁溝 上幅15～23cm，下幅3～12cmで，南西コーナーの壁下一部を巡っている。

床 全体的に平坦で，竈から南西コーナーにかけて踏み固められている。

竈 北西部中央に付設されている。規模は長さ100cm，袖幅110cm，壁外への掘り込みはほとんどない。火床部は，径25cmの円形で，2cmほど掘りくぼめられている。火床部から煙道部にかけて，灰が多量に残存している。

遺物 土師器片33点が出土している。細片が多く，図示できる遺物はない。竈内から支脚の一部が出土している。

所見 本跡の時期は，土器が細片であり判断するのは困難であるが，重複関係から平安時代の10世紀以降と考えられる。

第223号住居跡（第307図）

位置 調査6区南部，N14c₇区。

重複関係 第221・225・226号住居跡の上部に構築されており，第221・225・226号住居跡より新しい。

規模と平面形 長軸[4.10]m，短軸3.70mの隅丸方形と考えられる。

主軸方向 N-3°-E

壁 壁高は16～22cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

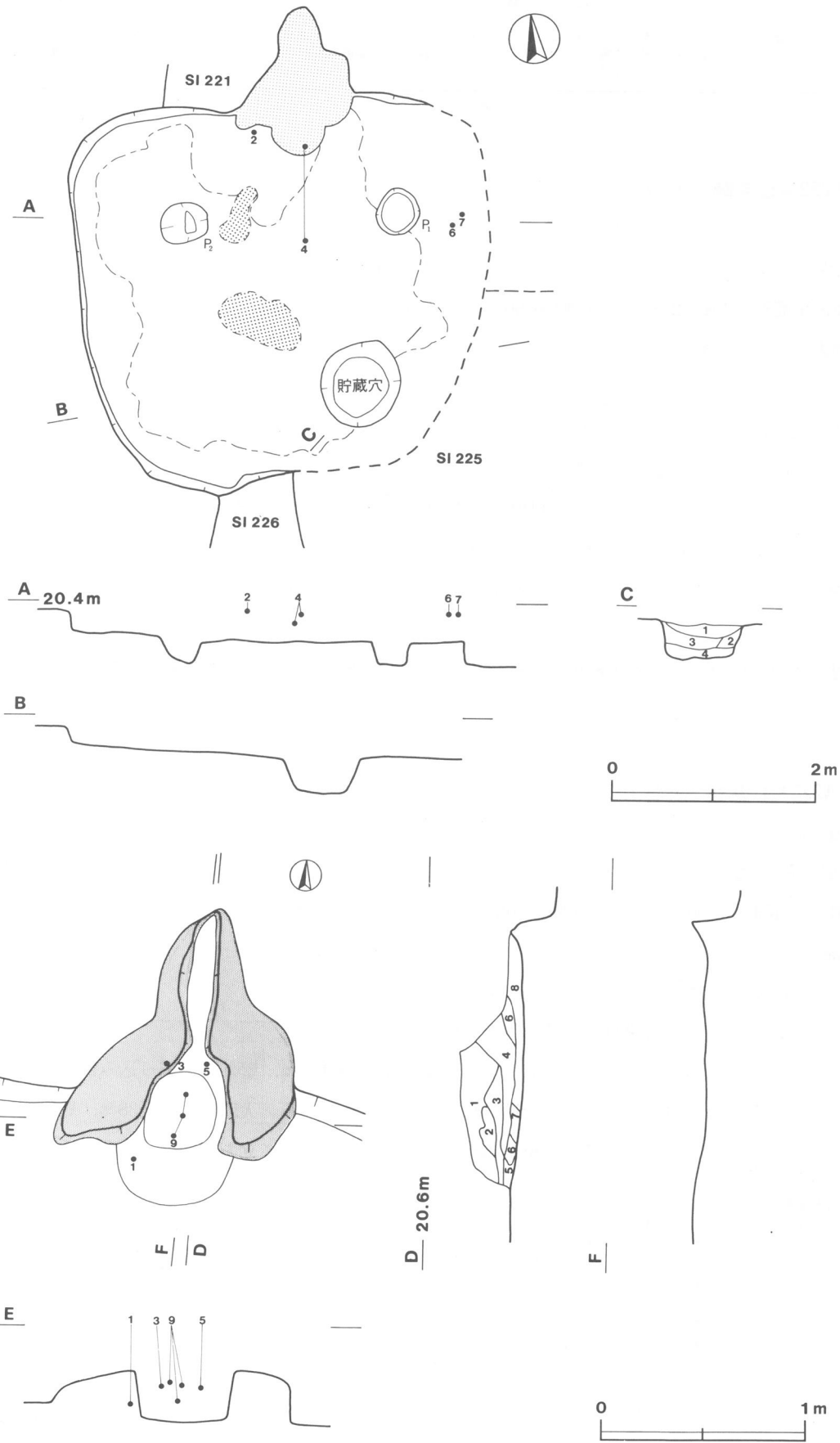
床 全体的に平坦で，中央付近が踏み固められている。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は長さ150cm，袖幅110cm，壁外への掘り込みは97cmで，平面形は三角形である。袖部は山砂混じりの粘土を貼り付けて構築されている。火床部は長径38cm，短径33cmの楕円形で，わずかに掘りくぼめられている。燃焼部奥から煙道部へは緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子中量
- 2 極赤褐色 焼土粒子多量，炭化粒子少量
- 3 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子中量，焼土小ブロック少量
- 4 黒褐色 焼土粒子中量，炭化粒子少量
- 5 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子多量
- 6 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子少量
- 7 赤褐色 焼土粒子多量，炭化粒子・焼土小ブロック中量
- 8 暗赤褐色 焼土粒子・焼土小ブロック多量，炭化粒子中量

ピット 2か所(P₁，P₂)。P₁は径45cmの円形，深さ23cm，断面形は逆台形で主柱穴と考えられる。P₂は長径44cm，短径38cmの楕円形，深さ28cmで主柱穴と考えられる。



第307図 第223号住居跡実測図

貯蔵穴 南東コーナーに位置する。長径88cm, 短径77cmの楕円形, 深さ38cm, 断面形は逆台形である。

貯蔵穴土層解説

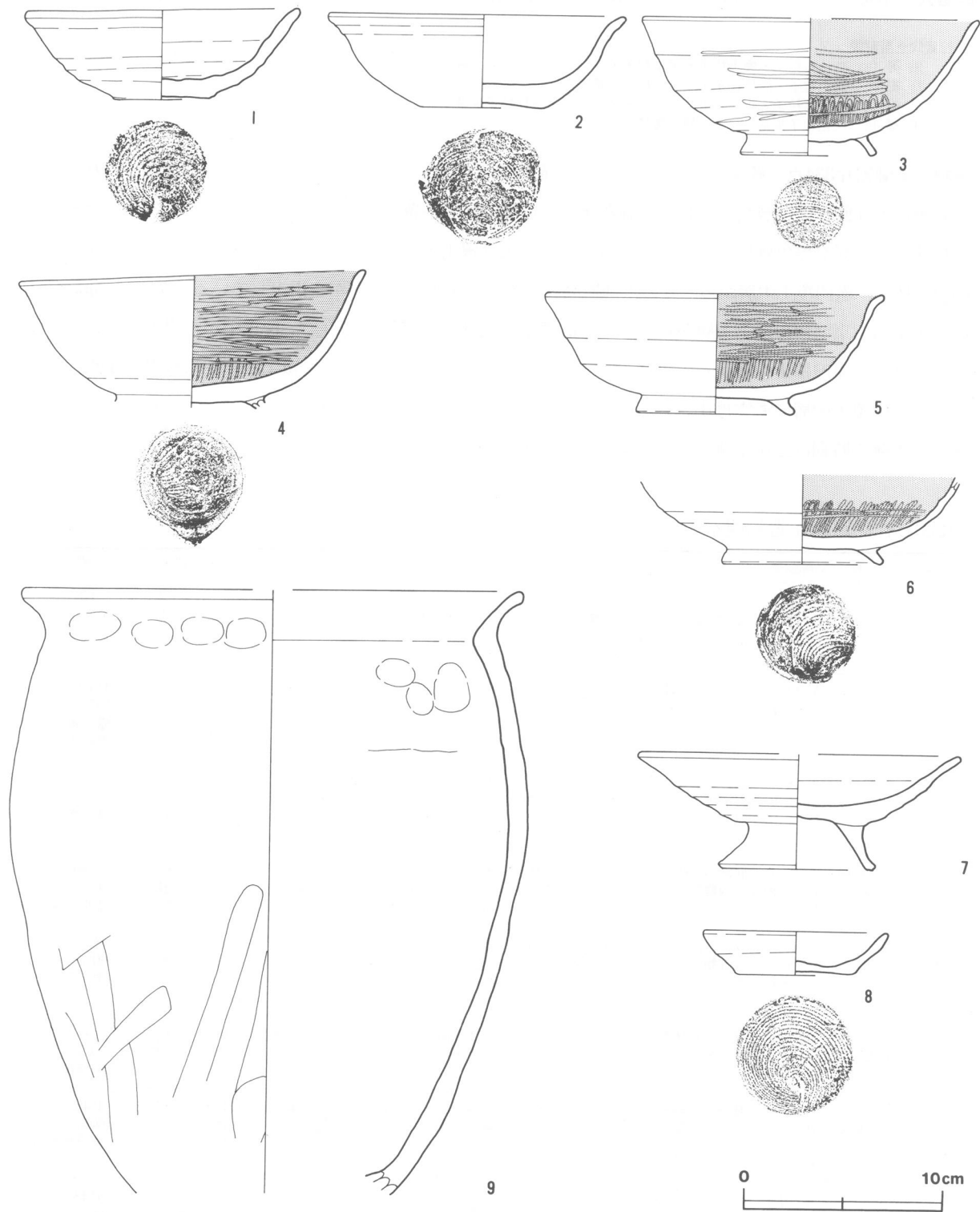
- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック少量
- 2 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 4 黒褐色 炭化粒子少量, ローム粒子微量

遺物 土師器片334点, 礫4点が出土している。竈及びその周辺に遺物が集中している。第308図1の土師器坏は, 竈左袖部側覆土下層から, 2の土師器坏は, 竈左袖前面部覆土上層から出土している。3, 4の土師器高台付碗は, 内面が黒色処理されており, 竈内及び中央部覆土中層から上層にかけて出土している。5の土師器高台付坏は, 竈内覆土中層から, 6の土師器高台付碗は, 東側覆土上層から出土している。7の足高高台坏は, 高台が足高で東壁側の覆土上層から, 8の土師器小皿底部は, 回転系切りで, 覆土中から出土している。9の土師器甕は, 竈内覆土中層から出土している。中央部から南東部にかけての覆土から雲母片岩が4点出土している。竈内覆土中層にも雲母片岩の流入が見られるので, 袖の芯材に使用されたものと考えられる。

所見 本跡の時期は, 出土遺物から平安時代の10世紀以降と考えられる。

第223号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第308図 1	坏 土師器	A 13.5 B 4.6 C 4.8	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は緩やかに内彎しながら立ち上がり, 口縁部は外反する。	内・外面ロクロナデ。底部回転系切り後, 無調整。	砂粒・石英・赤色粒子・長石・雲母 明褐色 普通	P478 80% 竈左袖部 覆土下層
2	坏 土師器	A 14.8 B 4.7 C 6.3	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は緩やかに内彎しながら立ち上がり, 口縁部は外反する。	内・外面ロクロナデ。底部回転系切り。	砂粒・長石・雲母 にぶい黄褐色 普通	P479 70% 竈左袖前面部 覆土上層
3	高台付碗 土師器	A [16.8] B 6.9 D 6.9 E 1.0	高台部から体部にかけての破片。ハの字状に開く高台が付く。体部は内彎して立ち上がる。	体部外面ロクロナデ。内・外面へラ磨き。内面黒色処理。高台貼り付け。	砂粒・石英・長石・雲母 外面にぶい橙色 内面黒色 普通	P480 60% 竈内覆土中層
4	高台付碗 土師器	A 17.1 B (7.2) E (0.6)	底部から体部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部でやや外反する。	体部外面ロクロナデ。内面へラ磨き。内面黒色処理。底部回転へラ切り後, 高台貼り付け。	砂粒・長石・雲母 外面にぶい黄橙色 内面黒色 普通	P481 60% 竈内から 中央部覆土上層
5	高台付坏 土師器	A 16.8 B 6.1 D 8.0 E 0.8	体部は直線的に立ち上がり, 口縁部で外傾する。ハの字状に開く。高台が付く。	体部外面ロクロナデ。内面へラ磨き。内面黒色処理。底部回転系切り後, 高台貼り付け。	砂粒・長石 外面にぶい橙色 内面黒色 普通	P482 60% 竈内覆土中層
6	高台付碗 土師器	B (4.5) D 8.2 E 0.9	底部から体部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がる。高台はハの字状に広がる。	体部外面ロクロナデ。内面へラ磨き。内面黒色処理。底部回転系切り後, 高台貼り付け。	砂粒・長石・雲母 外面にぶい黄褐色 内面黒色 普通	P483 40% 東側覆土上層
7	足高高台坏 土師器	A [16.0] B 5.8 D 8.0 E 2.3	体部は直線的に立ち上がり, 口縁部でやや外傾する。高台はハの字状に開く。	口縁部内・外面ロクロナデ。体部下端回転へラ削り後, 高台貼り付け。	砂粒・長石・雲母 浅黄橙色 良好	P484 60% 東壁側覆土上層
8	小皿 土師器	A 9.1 B 2.2 C 6.0	底部から口縁部にかけての破片。体部は直線的に立ち上がり, 口縁部に至る。	内・外面ロクロナデ。底部回転系切り。	砂粒・雲母 にぶい黄褐色 普通	P485 60% 覆土中
9	甕 土師器	A [24.8] B (30.3)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎しながら立ち上がり, 口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ。体部内・外面指頭押圧。外面へラナデ。	砂粒・石英・長石・雲母 にぶい褐色 普通	P486 40% 竈内覆土中層



第308図 第223号住居跡出土遺物実測図

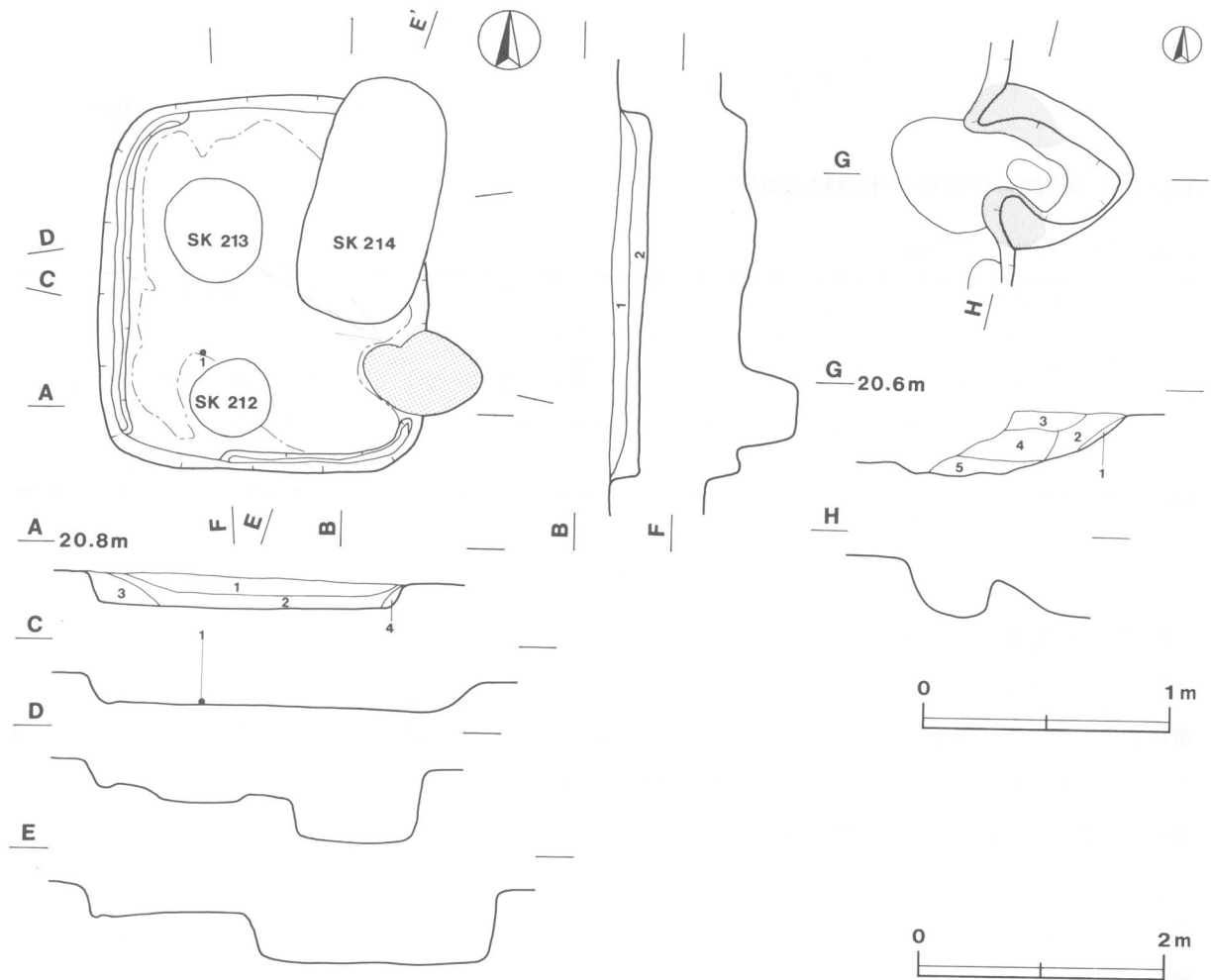
第224号住居跡 (第309図)

位置 調査6区中央部, M14b5区。

重複関係 第212~214号土坑に掘り込まれており, 第212~214号土坑より古い。

規模と平面形 長軸3.04m, 短軸2.63mの長方形である。

主軸方向 N-92°-E



第309図 第224号住居跡実測図

壁 壁高は19～27cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 上幅16～28cm，下幅3～7cm，深さ5cm，断面形はU字形で、北東コーナーを除く，壁下を巡っている。

床 全体的に平坦で、広い範囲で踏み固められている。

竈 東壁南側に付設されている。規模は長さ98cm，袖幅69cm，壁外への掘り込みは48cmである。袖部は山砂混じりの粘土を貼り付け，補強材として雲母片岩などを利用し構築されている。火床部は長径18cm，短径11cmの楕円形で，わずかに掘りくぼめられている。燃焼部奥から煙道部へは緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

- | | |
|------------------------------|-----------------------------------|
| 1 暗赤褐色 焼土粒子中量，焼土小ブロック少量，粘土微量 | 4 黒褐色 焼土粒子・粘土少量 |
| 2 黒褐色 粘土少量，焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 暗赤褐色 焼土粒子中量，粘土少量，炭化粒子・焼土小ブロック微量 |
| 3 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・粘土微量 | |

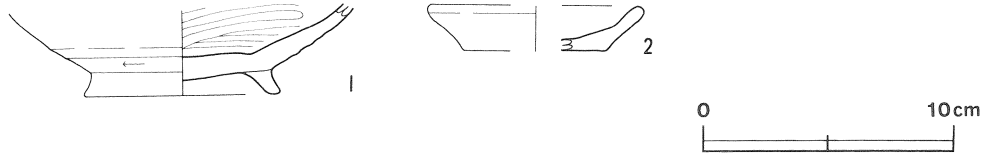
覆土 4層からなり，人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量，ローム大ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子・ローム中ブロック少量，炭化粒子・炭化物微量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 極暗褐色 ローム粒子中量，焼土粒子微量

遺物 土師器片334点，須恵器片79点，陶器片2点が出土している。第310図1の土師器高台付坏は，南西側床面から，2の土師器小皿は，覆土中からそれぞれ出土している。

所見 本跡の時期は，出土遺物から平安時代の10世紀以降と考えられる。



第310図 第224号住居跡出土遺物実測図

第224号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第310図 1	高台付坏 土師器	B〔3.6〕 D 7.8 E 1.0	体部は直線的に立ち上がる。ハの字状に開く高台が付く。	体部外面ロクロナデ。体部下端回転ヘラ削り。内面ヘラ磨き。底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け。	砂粒・長石・赤色粒子・雲母 橙色 普通 煤付着	P487 40% 南西側床面
2	小皿 土師器	A〔8.2〕 B 1.8 C〔5.6〕	底部から口縁部にかけての破片。体部は直線的に立ち上がり、口縁部に至る。	内・外面ロクロナデ。	砂粒・雲母に ぶい黄褐色 普通	P488 5% 覆土中

第225号住居跡（第311図）

位置 調査6区南部，N14c7区。

重複関係 第218・226号住居跡を掘り込んでおり，第221・223号住居跡が上部に構築されていることから，第218・226号住居跡より新しく，第221・223号住居跡より古い。

規模と平面形 長軸4.48m，短軸4.00mの方形である。

主軸方向 N-5°-E

壁 壁高は44～58cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 上幅7～27cm，下幅3～10cmで，ほぼ全周している。

床 全体的に平坦である。竈から出入り口施設に伴うピットにかけて，踏み固められている。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は長さ93cm，袖幅138cm，壁外への掘り込みは33cmで，平面形は逆U字形である。袖部は山砂混じりの粘土を貼り付けて構築されている。

ピット 1か所(P₁)。P₁は，長径30cm，短径28cmの楕円形，深さ22cm，断面形は逆台形で出入り口施設に伴うピットと考えられる。

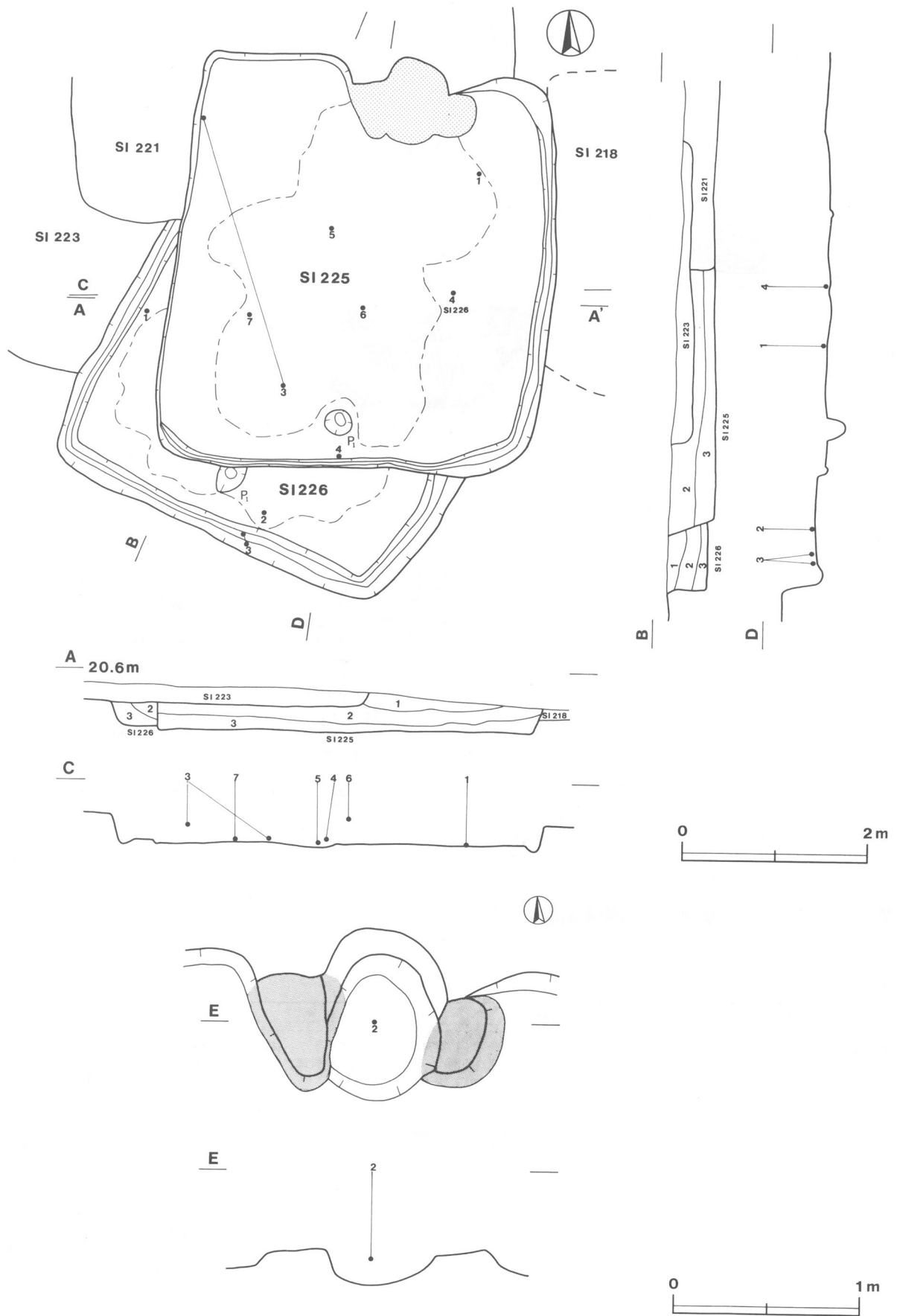
覆土 3層からなり，人為堆積と考えられる。

土層解説

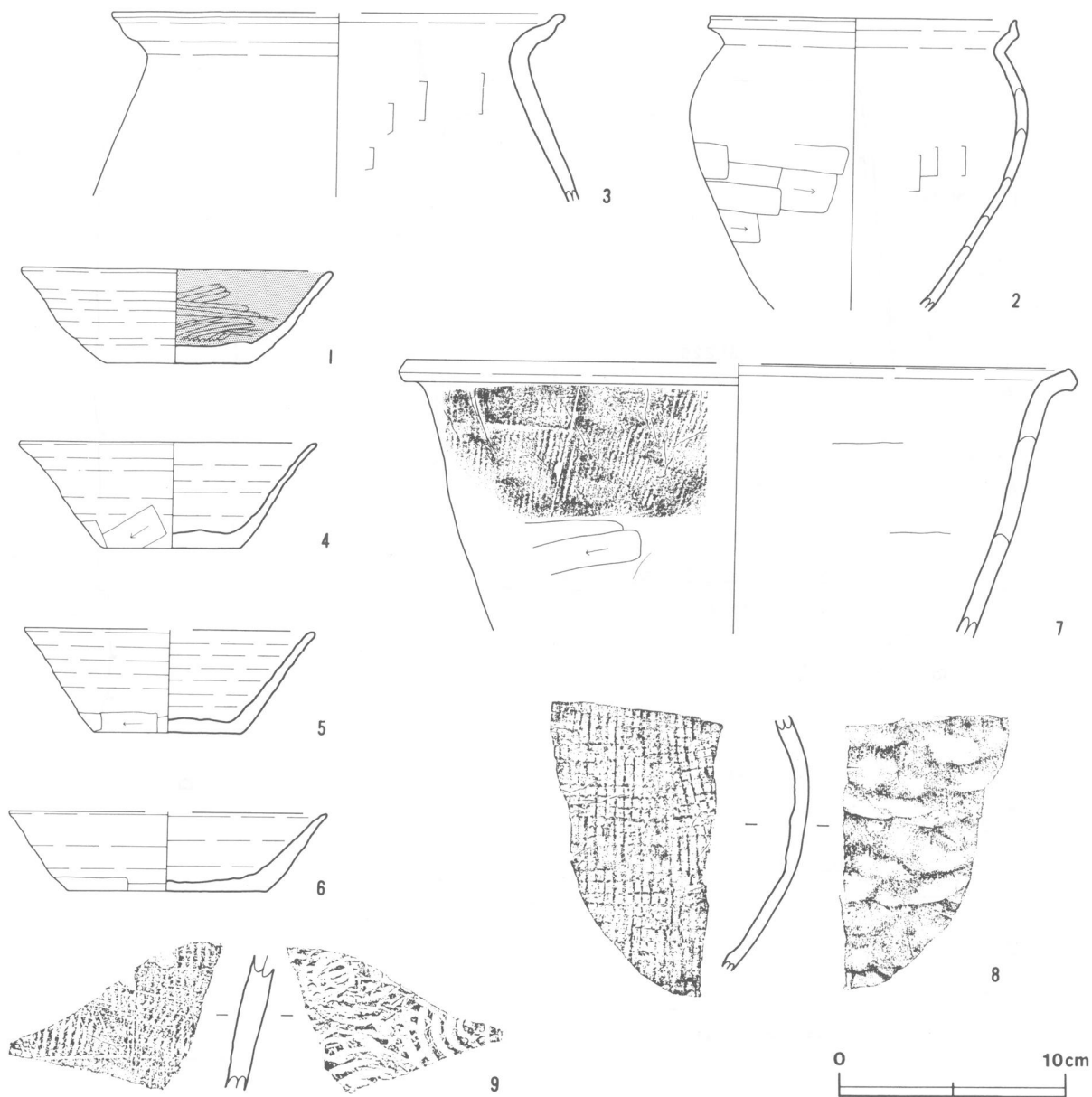
- 1 黒褐色 ローム粒子・ローム中ブロック中量，焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子少量
- 3 黒褐色 ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量

遺物 土師器片307点，須恵器片289点，陶器片8点が出土している。第312図1の土師器坏は，内面が黒色処理され，竈付近床面から正位で出土している。2の土師器小形甕は，竈内中層から，3の土師器甕，4の須恵器坏は，南壁付近の覆土下層から中層にかけて出土している。5，6の須恵器坏は，中央部の覆土下層から上層にかけて出土している。7の須恵器甕は，西側の覆土下層から出土している。8の須恵器甕体部片は，外面に格子目状の叩きが施されており，覆土中から出土している。9の須恵器甕体部片は，内面に同心円状の当て具痕を残している。

所見 本跡の時期は，出土遺物から平安時代の9世紀中葉と考えられる。



第311图 第225・226号住居跡実測図



第312図 第225号住居跡出土遺物実測図

第225号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第312図 1	坏 土師器	A 13.8 B 4.2 C 6.4	底部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部内・外面ロクロナデ。体部内面ヘラ磨き。内面黒色処理。	砂粒・長石・雲母・赤色粒子 外面橙色 内面黒色 普通	P 489 70% 竈付近床面
2	小形甕 土師器	A 13.5 B (13.0)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部でくの字状に外反する。端部はつまみ上げられている。	体部外面ヘラ削り。体部内面ヘラナデ。輪積み痕。	砂粒・石英・長石・雲母 内面赤褐色 普通	P 490 80% 竈内覆土中層
3	甕 土師器	A [20.0] B (8.2)	体部から口縁部にかけての破片。体部からくの字状に外反し、口縁部に至る。	内・外面ロクロナデ。体部内面ヘラナデ。	砂粒・石英・長石・雲母 内面赤褐色 普通	P 491 10% 南壁付近から 北西側覆土中層

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第312図 4	坏 須恵器	A 13.1 B 4.7 C 6.0	平底。体部は直線的に立ち上がり、口縁部はやや外反する。	内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちへら削り。底部へら削り。	砂粒・長石・雲母 灰色 普通	P 492 70% 南壁付近覆土下層
5	坏 須恵器	A [12.8] B 4.6 C 6.6	底部から口縁部にかけての破片。体部は直線的に立ち上がり、口縁部に至る。	内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちへら削り。底部一方向のへら削り。	砂粒・長石・雲母・ 赤色粒子 浅黄色 普通	P 493 50% 中央部覆土下層
6	坏 須恵器	A [14.0] B 3.5 C [8.8]	底部から口縁部にかけての破片。体部は直線的に立ち上がり、口縁部に至る。	内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちへら削り。	砂粒・石英・長石・ 雲母 灰色 普通	P 495 20% 中央部覆土上層
7	甕 須恵器	A [29.6] B (12.0)	体部から口縁部にかけての破片。体部はやや内彎して立ち上がり、口縁部にいたる。端部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面ロクロナデ。体部外面平行叩き。輪積み痕。	砂粒・石英・長石・ 雲母 灰黄色 普通	P 498 5% 西側覆土下層

第226号住居跡（第311図）

位置 調査6区南部，N14d7区。

重複関係 第225号住居跡に掘り込まれ，第223号住居跡が上部に構築されていることから，第223・225号住居跡より古い。

規模と平面形 長軸4.00m，短軸(1.60)mである。大部分が第225号住居跡に掘り込まれていることから，平面形は不明である。

長軸方向 [N-60°-W]

壁 壁高は38～54cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 上幅18～32cm，下幅4～12cmで，深さ6cmで，南西壁下を巡っている。

床 全体的に平坦で，中央部が踏み固められている。

ピット 1か所(P₁)。P₁は，長径(40)cm，短径27cmの楕円形で，出入り口施設に伴うピットと考えられる。

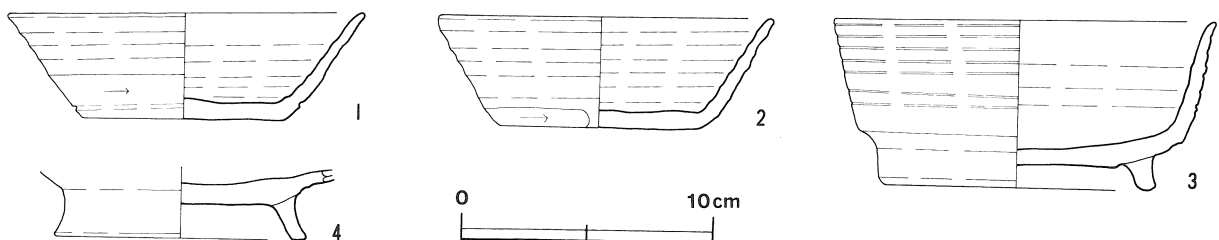
覆土 3層からなり，人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量，ローム中ブロック・炭化粒子微量
- 2 極暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック・炭化粒子少量
- 3 黒褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量

遺物 土師器片8点，須恵器片8点が出土している。第313図1の須恵器坏は，西壁側の覆土下層から，2の須恵器坏は，横位で，南側覆土下層から，3の須恵器の高台付坏は，逆位で南壁中央部の覆土下層から，4の須恵器高台付坏の底部片は北東側覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 本跡の時期は，出土遺物から平安時代の8世紀中葉と考えられる。

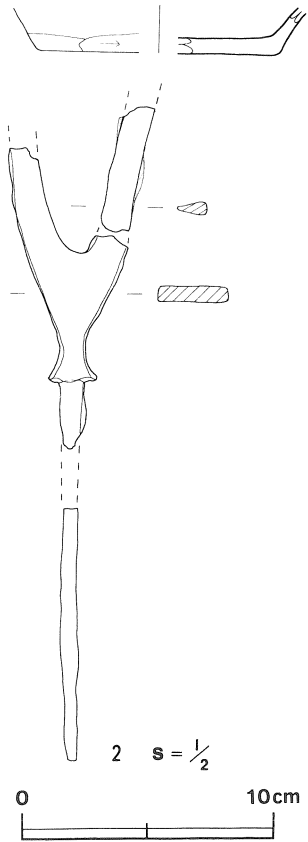


第313図 第226号住居跡出土遺物実測図

第226号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第313図 1	坏 須恵器	A 14.0 B 4.3 C 8.0	口縁部一部欠損。体部は直線的に立ち上がり、口縁部に至る。	内・外面ロクロナデ。手持ちヘラ削り。底部回転ヘラ切り後、一方向のヘラナデ。	砂粒・長石・雲母 灰白色 普通	P 499 95% 西壁覆土下層
2	坏 須恵器	A 13.2 B 4.5 C 8.0	口縁部一部欠損。体部は直線的に立ち上がり、口縁部に至る。	内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部一方向のヘラ削り。	石英・長石・雲母 灰色 普通	P 500 90% 南側覆土下層
3	高台付坏 須恵器	A 15.0 B 6.7 D 11.0 E 1.4	体部・口縁部一部欠損。体部は直線的に立ち上がる。高台はハの字状に開く。	内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け。	長石・雲母 灰色 普通	P 501 80% 南壁中央覆土下層
4	高台付坏 須恵器	B (2.8) D 9.8 E 1.9	高台部片。高台は、外に開きふんばる。	底部内面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け。	砂粒・長石・雲母 灰色 普通	P 502 40% 北東側覆土下層

第227号住居跡 (第315図)



位置 調査6区南部, N14g8区。

規模と平面形 長軸3.01m, 短軸[2.50]mの方形と考えられる。

主軸方向 N-93°-E

壁 壁高は13~24cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 上幅約18~32cm, 下幅約4~12cm, 深さ6cmで、南東コーナーを除く壁下を巡っている。

床 竈から北西にかけて踏み固められている。

竈 東壁やや南側に付設されている。削平されており、袖部の一部の範囲が確認できただけである。

覆土 3層からなり、自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量
- 2 黒褐色 焼土粒子少量, ローム粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子多量

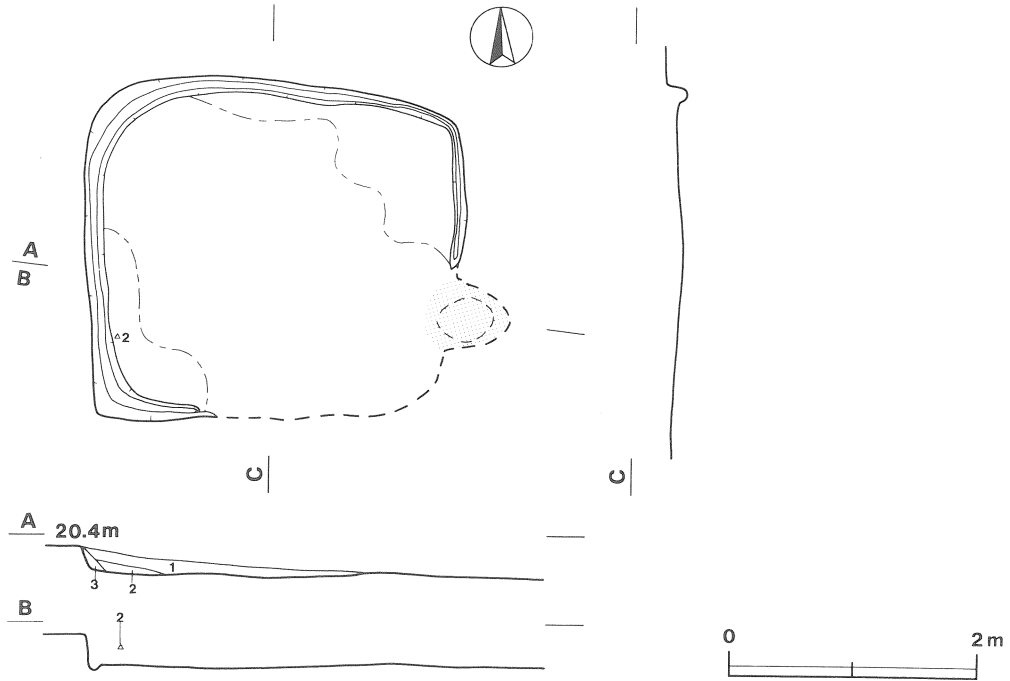
遺物 土師器片20点, 須恵器片2点, 礫2点が出土している。第314図1の須恵器坏は、南西コーナーの覆土中から出土している。2の鉄鏃は、南西コーナー付近の覆土上層から出土している。

所見 本跡は遺物が少なく、時期を判断するのは困難であるが、遺構の形態や出土遺物から平安時代と考えられる。

第314図 第227号住居跡
出土遺物実測図

第227号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第314図 1	坏 須恵器	B (1.9) C [9.6]	底部から体部にかけての破片。体部は直線的に立ち上がる。	内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。	砂粒・長石 灰色 普通	P 503 5% 南西コーナー 覆土中



第315図 第227号住居跡実測図

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第314図2	鉄 鏃	[17.3]	(3.8)	1.0	(25.0)	南西コーナー覆土上層	M50

第229号住居跡 (第316図)

位置 調査6区南部, N14:0区。

重複関係 第13号溝に掘り込まれていることから, 第13号溝より古い。

規模と平面形 長軸3.16m, 短軸[3.14]mで, 平面形は方形であると考えられる。

長軸方向 N-13°-E

壁 壁高は13cmで, 緩やかに立ち上がる。

床 全体的に平坦で, 中央部からやや西側にかけて踏み固められている。

覆土 2層からなり, 堆積状況は不明である。

土層解説

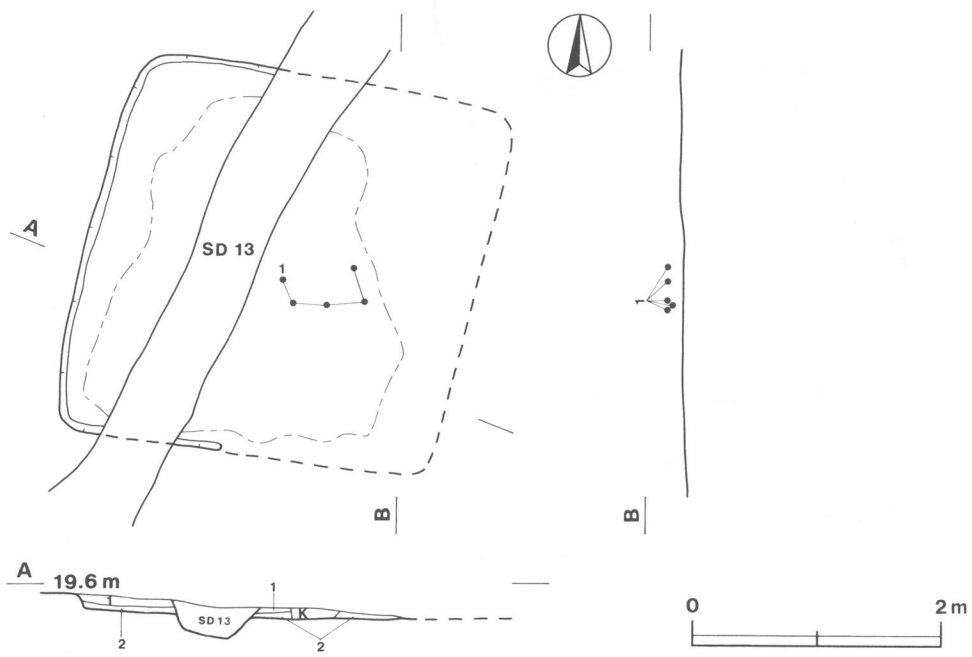
- 1 褐色 ローム小ブロック中量, ローム粒子少量, 焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・焼土粒子少量

遺物 土器器片5点, 須恵器片2点が出土している。第317図1の須恵器甕は, 中央部の覆土上層から出土している。

所見 本跡の時期は, 出土遺物から平安時代の9世紀後半と考えられる。

第229号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第317図 1	甕 須恵器	A[22.6] B(28.5)	体部から口縁部の破片。体部は緩やかに内彎して立ち上がる。口縁部はくの字状に折れる。	体部外面格子目状の叩き。外面一部剥離。	石英・長石・雲母にふい褐色普通	P507 30% 中央部覆土上層



第316图 第229号住居跡実測図



第317图 第229号住居跡出土遺物実測図

第230号住居跡 (第318図)

位置 調査6区南東部, 014a0区。

規模と平面形 長軸3.42m, 短軸3.08mの長方形である。

主軸方向 N-31°-E

壁 壁高は25cmで, 外傾して立ち上がる。

壁溝 上幅7~29cm, 下幅2~8cm, 深さ6cm, 断面形はU字形で, 全周している。

床 全体的に平坦で, 出入り口ピットから竈にかけての中央部が踏み固められている。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は長さ84cm, 袖幅92cm, 壁外への掘り込みはほとんどない。袖部は山砂混じりの粘土を貼り付けて構築されている。火床部は長径25cm, 短径20cmの楕円形で, わずかに掘りくぼめられている。燃焼部奥から煙道部へは緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

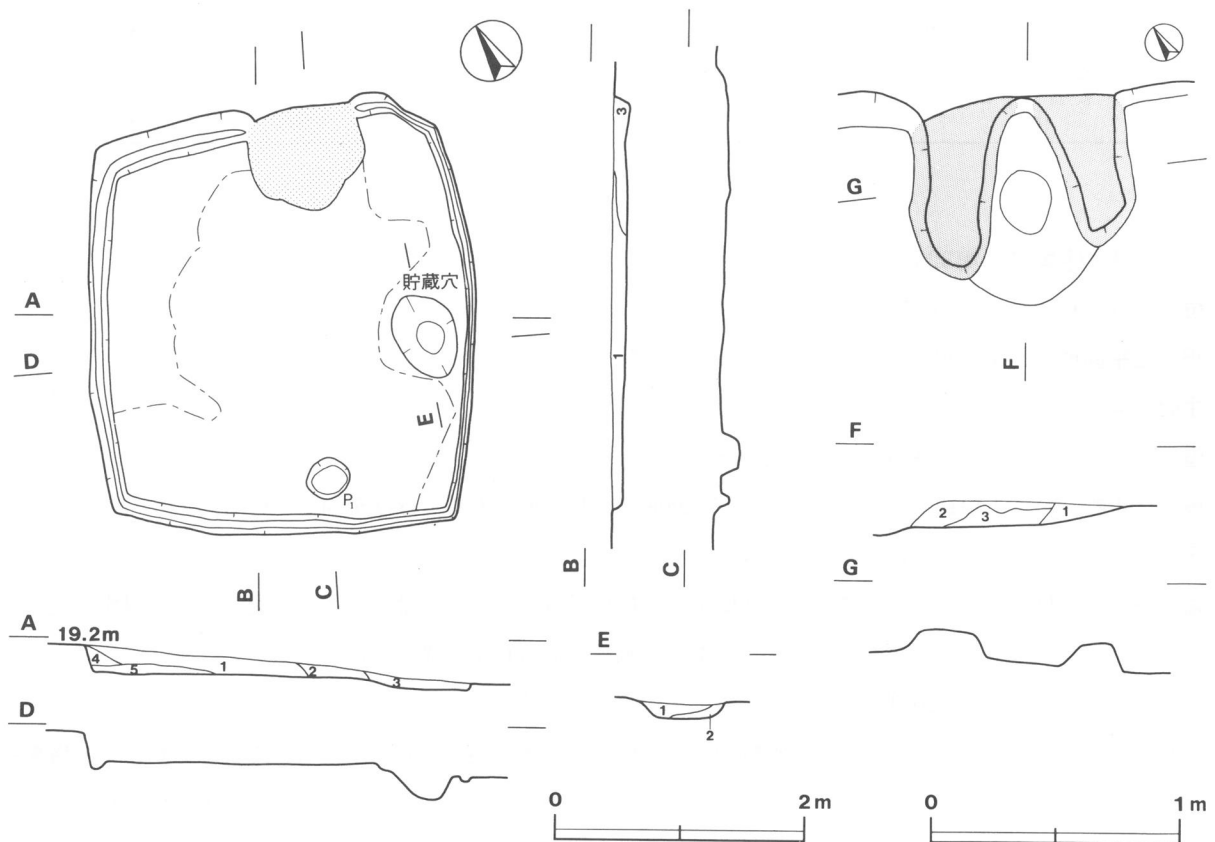
- 1 黒褐色 焼土粒子・焼土小ブロック少量, 炭化粒子微量
- 2 黒褐色 焼土粒子・焼土小ブロック少量
- 3 黒褐色 焼土粒子・焼土小ブロック中量, 炭化粒子少量, 焼土中ブロック微量

ピット 1か所(P₁)。P₁は, 長径36cm, 短径33cmの楕円形, 深さ15cm, 断面形は逆台形で南壁から12cmほど内側に位置し, 出入り口施設に伴うピットと考えられる。

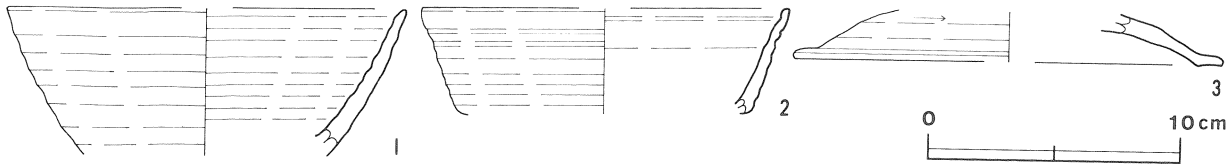
貯蔵穴 南東東壁中央部に位置する。長径70cm, 短径48cmの楕円形, 深さ28cmである。

貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック多量



第318図 第230号住居跡実測図



第319図 第230号住居跡出土遺物実測図

覆土 5層からなり、人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子・ローム中ブロック少量, ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック中量, ローム粒子少量, 焼土粒子微量
- 3 極暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量
- 4 極暗褐色 ローム粒子中量
- 5 黒褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック微量

遺物 土師器片16点, 須恵器片7点が出土している。第319図1, 2の須恵器坏, 3の須恵器蓋は, 南西側の覆土中から出土している。

所見 本跡の時期は, 出土遺物から平安時代の8世紀前葉と考えられる。

第230号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第319図 1	坏 須恵器	A[15.8] B(5.8)	体部から口縁部にかけての破片。体部は直線的に立ち上がり, 口縁部に至る。	内・外面ロクロナデ。	砂粒・長石・雲母 暗灰色 普通	P508 10% 南西側覆土中
2	坏 須恵器	A[14.6] B 4.2 C[11.4]	体部から口縁部にかけての破片。体部は直線的に立ち上がり, 口縁部に至る。	内・外面ロクロナデ。	砂粒・長石・雲母 灰白色 普通	P509 5% 南西側覆土中
3	蓋 須恵器	A[17.0] B(2.0)	口縁部片。頂部は平坦で, 口縁部内側に短いかえりがつく。	天井部外面回転ヘラ削り。内面ロクロナデ。	石英・長石・雲母 灰黄色 普通	P510 5% 南西側覆土中

第232号住居跡 (第320図)

位置 調査6区南部, N14h6区。

規模と平面形 長軸3.36m, 短軸3.24mの方形である。

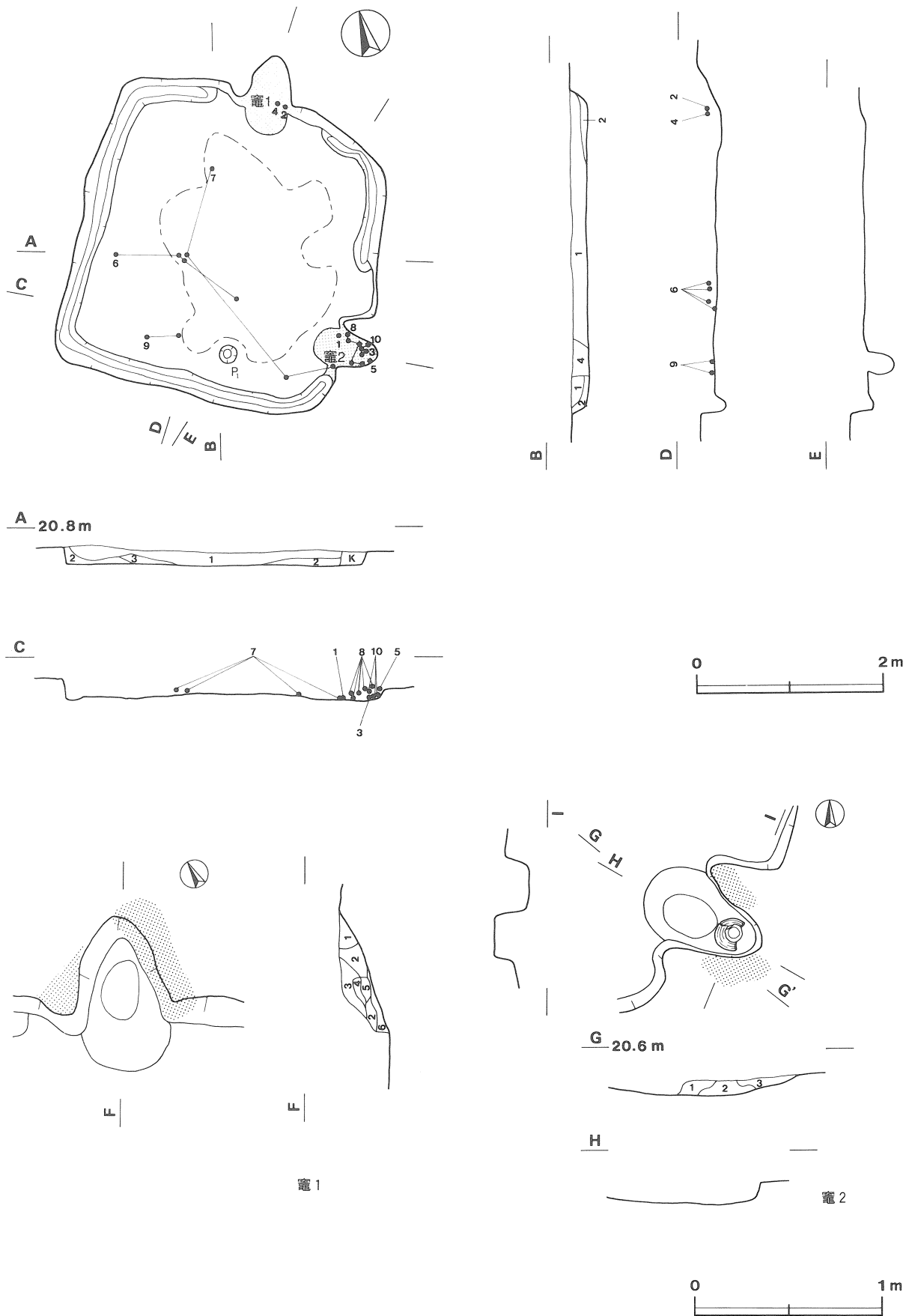
主軸方向 N-29°-E

壁 壁高は14~20cmで, 外傾して立ち上がる。

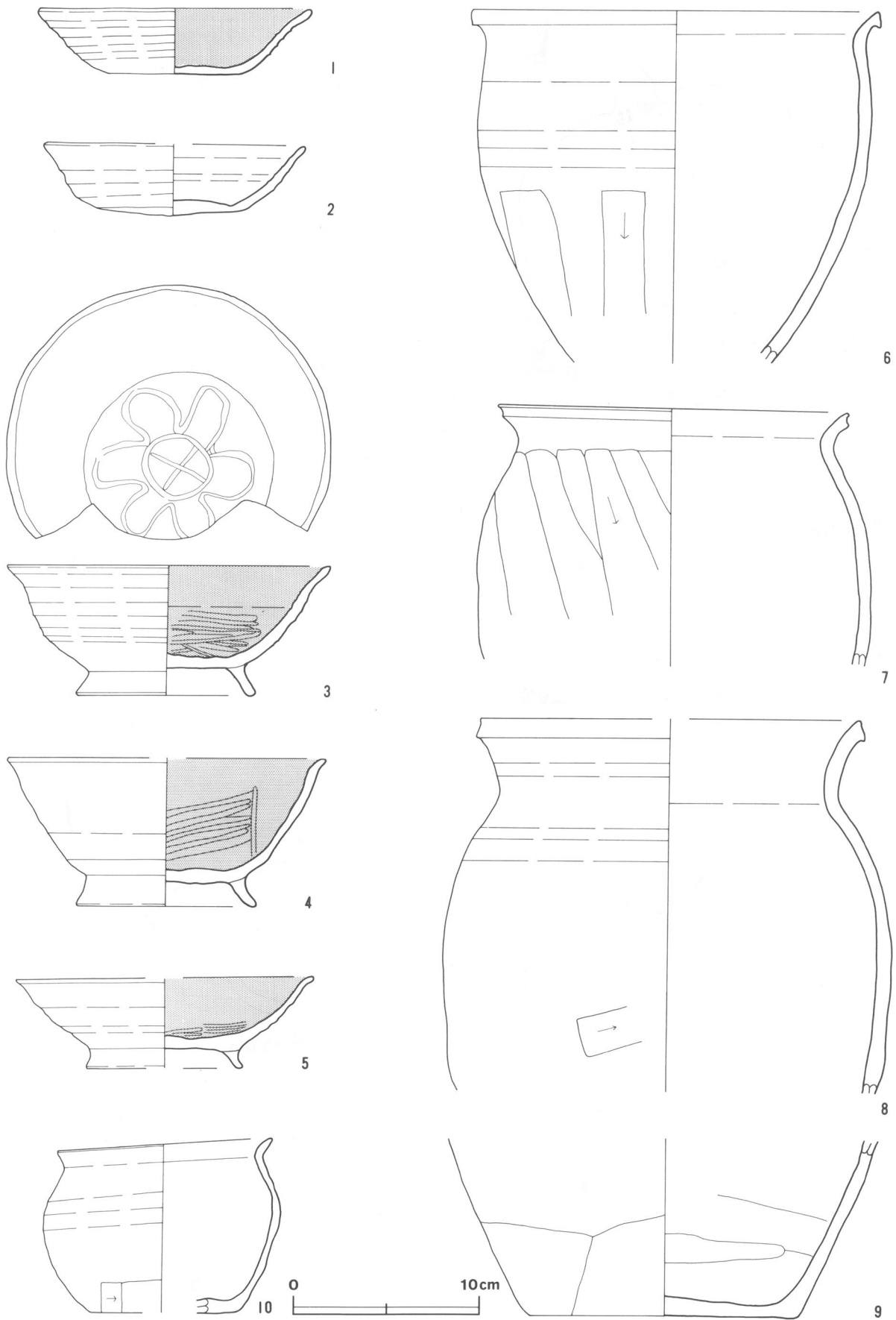
壁溝 上幅20cm, 下幅12cm, 深さ8~12cmで, 断面形はU字形である。ほぼ全周している。

床 全体的に平坦で, 中央部がよく踏み固められている。

竈 竈が二つ付設されている。竈1は, 北壁中央部に付設されている。袖部は遺存状況が悪く, 規模は長さ85cm, 袖幅[50]cm, 壁外への掘り込みは55cmである。袖部は砂質粘土で構築されている。火床部は円形に浅く掘りくぼめられており, 煙道部は火床部から緩やかに立ち上がる。竈2は, 東壁南寄りに付設されている。袖部は遺存状況が悪く, 規模は長さ65cm, 袖幅[40]cm, 壁外への掘り込みは40cmである。袖部は砂質粘土で構築されている。火床部は円形に浅く掘りくぼめられており, 煙道部は火床部から緩やかに立ち上がる。袖部の遺存状況から, 竈1から竈2へ移ったものと推定される。



第320図 第232号住居跡実測図



第321图 第232号住居跡出土遺物実測図

竈1 土層解説

- 1 極暗赤褐色 焼土粒子多量, 炭化粒子中量
- 2 極暗褐色 焼土粒子・炭化粒子中量
- 3 極暗褐色 焼土粒子・砂少量
- 4 灰褐色 砂多量
- 5 極暗赤褐色 焼土粒子多量, 焼土小ブロック・炭化粒子少量
- 6 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子中量

竈2 土層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子中量, 焼土小ブロック少量
- 3 暗赤褐色 焼土粒子多量, 焼土小ブロック中量

ピット 1か所(P₁)。P₁は、径20cmの円形で、深さ31cmである。出入り口施設に伴うピットと考えられる。
覆土 4層からなり、自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量
- 2 極暗褐色 ローム小ブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子微量
- 3 極暗褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子少量
- 4 黒褐色 焼土粒子少量, 炭化粒子・ローム粒子微量

遺物 土師器片203点, 須恵器片19点, 礫1点が出土している。2の須恵器坏, 4の高台付碗が竈1から逆位で、1の土師器坏, 3の高台付碗が竈2から逆位で出土しており、竈祭祀の可能性が考えられる。5の高台付坏, 10の土師器小形甕が竈2から、6の土師器甕は、中央付近の覆土下層からつぶれた状態でそれぞれ出土している。

所見 本跡の時期は、遺構の形態や出土遺物から平安時代の9世紀後葉と考えられる。

第232号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第321図 1	坏 土師器	A 14.5 B 3.6 C 7.0	体部・口縁部一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	体部外面ロクロナデ。底部は回転ヘラ切り後、無調整。内面黒色処理。	砂粒・雲母 外面にぶい黄褐色 内面黒色 普通	P1003 60% 竈2内
2	坏 須恵器	A[13.9] B 3.8 C 8.2	体部・口縁部一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	体部内・外面ロクロナデ。底部は回転ヘラ切り後、ヘラナデ。	砂粒・石英・雲母 にぶい橙色 普通 二次焼成	P1004 40% 竈1内覆土中層
3	高台付碗 土師器	A 17.3 B 6.9 D 9.4 E 1.7	体部・口縁部一部欠損。高台は長くハの字状に開く。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部はやや外反する。	体部外面ロクロナデ。内面ヘラ磨き。底部は回転ヘラ切り後、高台貼り付け。内面ヘラ記号。内面黒色処理。	砂粒・石英・長石・雲母 外面浅黄褐色・内面黒色 普通 二次焼成	P1005 70% 竈2内覆土下層
4	高台付碗 土師器	A[17.0] B 8.0 D 9.6 E 1.7	体部・口縁部一部欠損。高台は長くハの字状に開く。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部はやや外反する。	体部外面ロクロナデ。内面ヘラ磨き。高台貼り付け後、ナデ。内面黒色処理。	砂粒・長石・雲母 外面浅黄褐色 内面黒色 普通 二次焼成	P1006 60% 竈1内覆土中層
5	高台付坏 土師器	A[16.0] B 4.8 D[8.4] E 1.2	底部から口縁部にかけての破片。高台は短くハの字状に開く。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	体部外面ロクロナデ。内面ヘラ磨き。高台貼り付け後、ナデ。内面黒色処理。	砂粒・長石 外面にぶい橙色 内面黒色 普通	P1007 20% 竈2内覆土中層
6	甕 土師器	A 21.8 B(19.2)	底部欠損。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部から体部外面上位ロクロナデ。体部中位から下位ヘラ削り。内面ヘラナデ。	砂粒・石英・長石・雲母 灰褐色 普通 煤付着	P1008 40% 中央部覆土下層
7	甕 土師器	A 18.8 B(13.6)	体部から口縁部片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り。内面は工具によるナデ。	砂粒・石英・長石・雲母 にぶい橙色 普通	P1009 20% 中央部覆土下層
8	甕 土師器	A[20.4] B(20.1)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。端部断面は三角形を呈している。	口縁部から体部外面上位ロクロナデ。体部下位ヘラ削り。内面ナデ。	砂粒・長石・雲母 黄灰色 普通 二次焼成	P1010 30% 竈2内

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第321図 9	甕 土師器	B(9.6) C 14.5	底部片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部外面下端へラ削り。内面ナデ。底部へラナデ。	砂粒・石英・スコリア 橙色 普通 煤付着	P1011 20% 南壁際覆土下層
10	小形甕 土師器	A 11.5 B 9.5 C [7.5]	体部一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部から体部内・外面ロクロナデ。体部下端へラ削り。	砂粒・石英 浅黄橙色 普通	P1012 50% 竈2内覆土下層

第233号住居跡（第322図）

位置 調査6区南部，N14g5区。

重複関係 第142号土坑の上部に構築されており，本跡が新しい。

規模と平面形 長軸4.44m，短軸4.18mの方形である。

主軸方向 N-15°-E

壁 壁高は24～36cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝 上幅15cm，下幅10cm，深さ10cmで，断面形はU字形である。全周している。

床 全体的に平坦で，中央部がよく踏み固められている。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は長さ130cm，袖幅115cm，壁外への掘り込みは55cmである。袖部は砂質粘土で構築されている。火床部は円形に浅く掘りくぼめられており，煙道部は火床部から緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
- 3 赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子多量
- 4 暗赤褐色 焼土中・小ブロック・焼土粒子中量，ローム粒子・炭化粒子微量
- 5 黒褐色 焼土粒子少量，ローム粒子・炭化粒子微量

ピット 6か所(P₁～P₆)。P₁～P₄は，径30～50cmの円形で，深さ44～90cmである。いずれも支柱穴と考えられる。P₅は，長径40cm，短径32cmの楕円形で，深さ54cmである。出入り口施設に伴うピットと考えられる。P₆は，径25cmの円形で，深さ20cmである。性格は不明である。

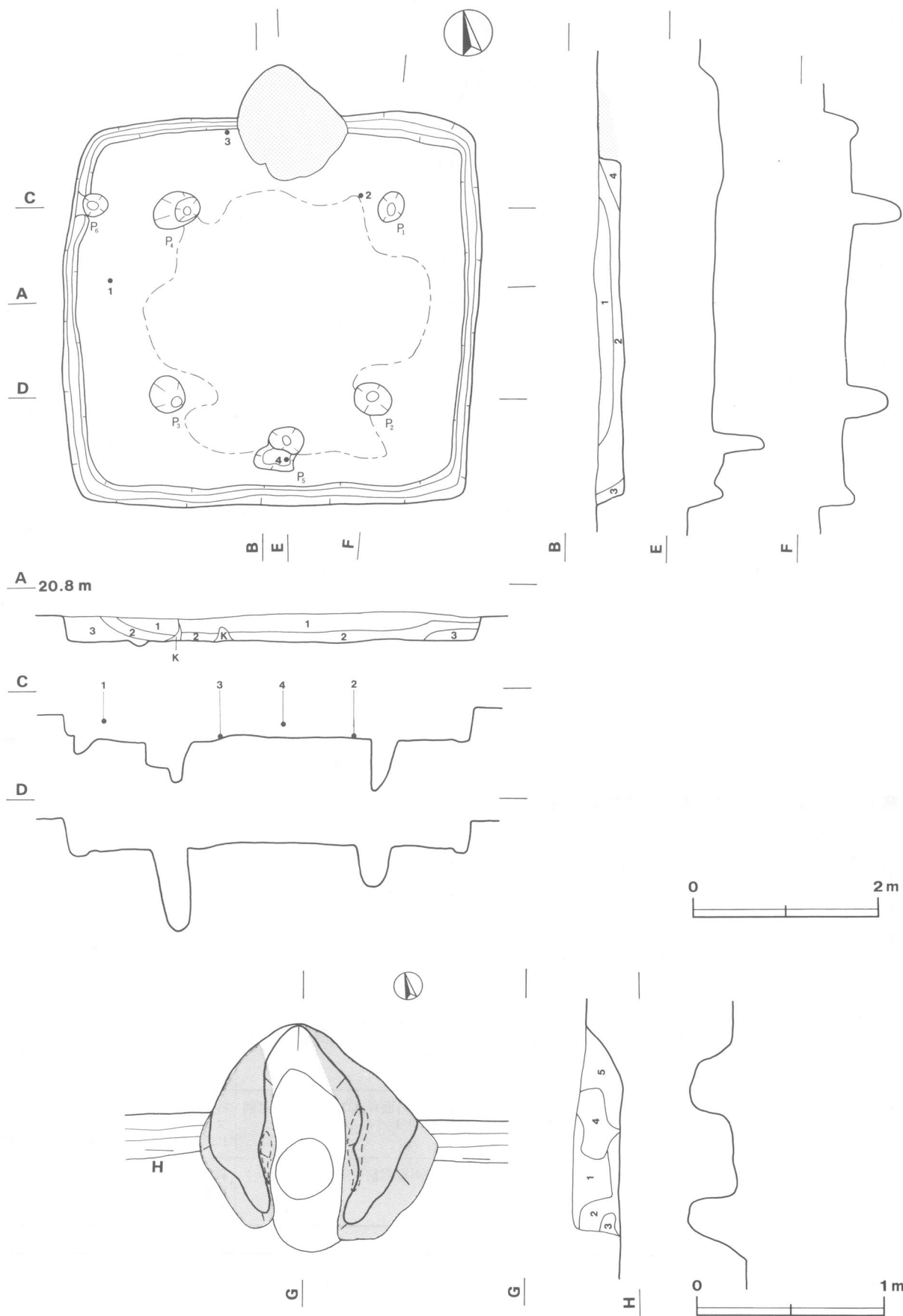
覆土 4層からなり，自然堆積である。

土層解説

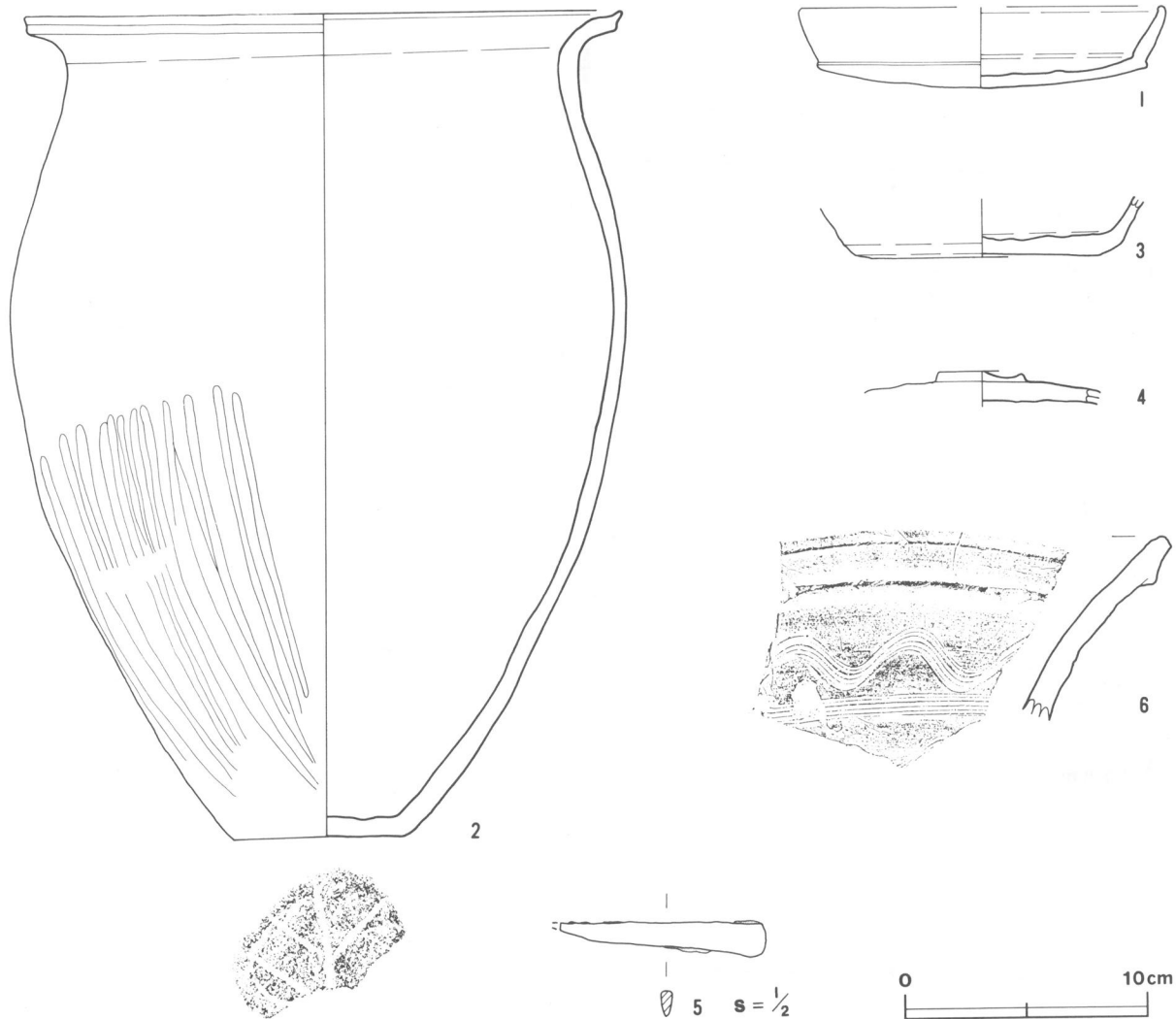
- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子微量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量
- 4 黒褐色 ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量

遺物 土師器片521点，須恵器片28点，鉄製品1点，礫1点が出土している。1の土師器坏は西壁際の覆土中層から，2の土師器甕は竈付近の床面直上から横位のつぶれた状態で，3の須恵器坏は竈付近の覆土下層から，4の須恵器蓋はP₅付近の覆土中層からそれぞれ出土している。6は須恵器甕の口縁部片で，外面には5本櫛歯の波状文と平行文が施されている。

所見 本跡は，遺構の形態や出土遺物から奈良時代の8世紀前葉と考えられる。



第322图 第233号住居跡実測図



第323図 第233号住居跡出土遺物実測図

第233号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第323図 1	坏 土師器	A[15.0] B 3.4 C[13.8]	底部から口縁部にかけての破片。平底。底部と体部との境に稜を持つ。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・石英・長石・雲母 明赤褐色 普通 煤付着	P1013 40% 西壁際覆土中層
2	甕 土師器	A 24.7 B 34.4 C[7.0]	底部・体部一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は強く外反する。端部は上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面縦方向のヘラ磨き。体部内面ナデ。底部に木葉痕。	砂粒・石英・長石・雲母 にぶい黄橙色 普通 煤付着	P1014 60% 竈右袖付近床直
3	坏 須恵器	B[2.5] C 9.0	底部片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面クロナデ。底部は回転ヘラ切り。	砂粒・長石・雲母・スコリア にぶい黄褐色 普通	P1015 40% 竈左袖覆土下層
4	蓋 須恵器	B(1.4) F 3.4 G 0.4	天井部片。ボタン状のつまみがつく。	天井部外面回転ヘラ削り。内面クロナデ。	砂粒・長石・雲母 灰黄色 普通	P1016 20% P 5付近覆土中層

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
5	刀子	(5.6)	1.0	0.4	(4)	覆土中	M1000

第234号住居跡（第324図）

位置 調査6区南部，N14f6区。

重複関係 第236号住居跡，第142号土坑の上部に構築されており，本跡が新しい。

規模と平面形 長軸3.09m，短軸3.08mの方形である。

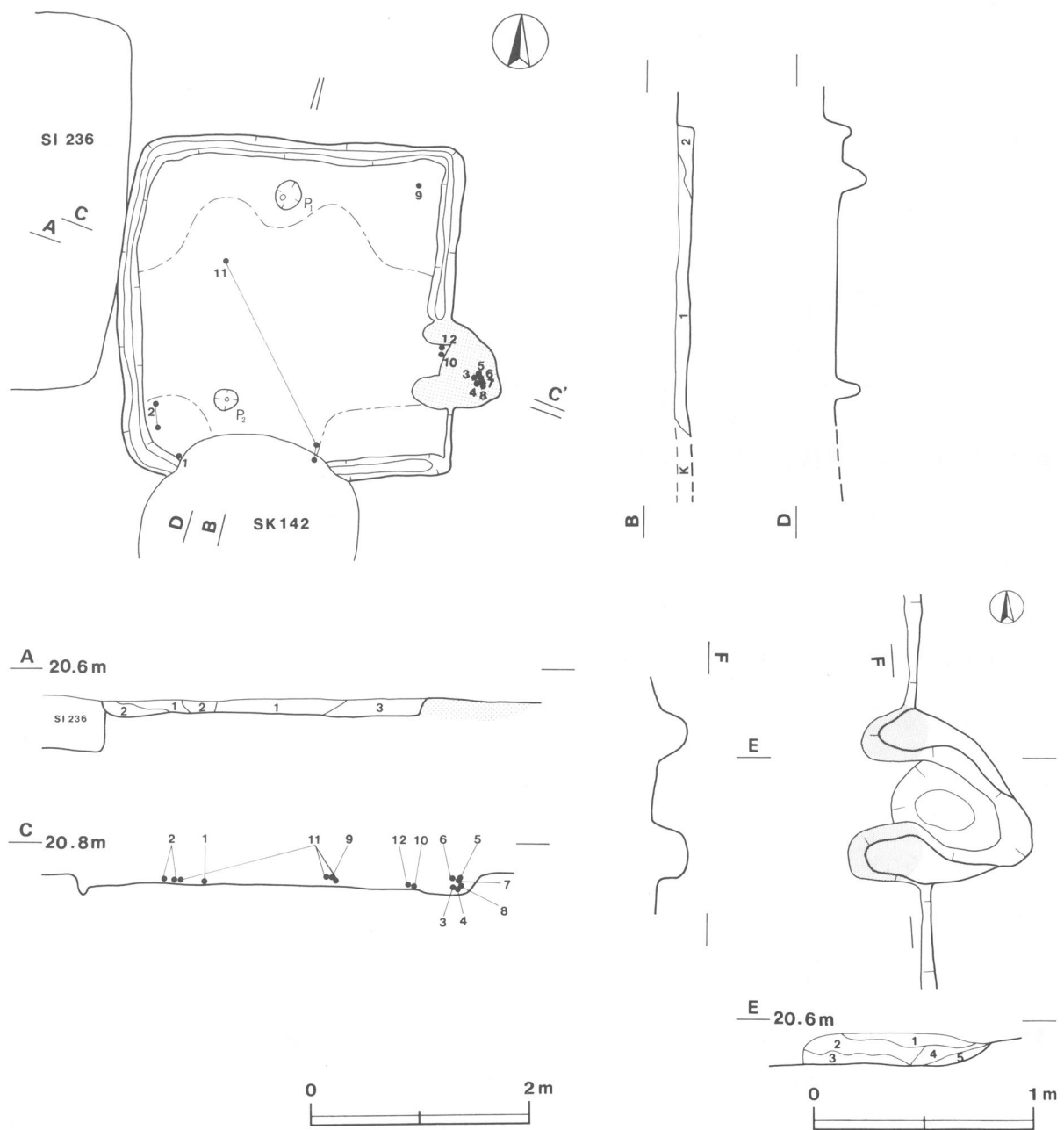
主軸方向 N-93°-E

壁 壁高は16cmで，外傾して立ち上がる。

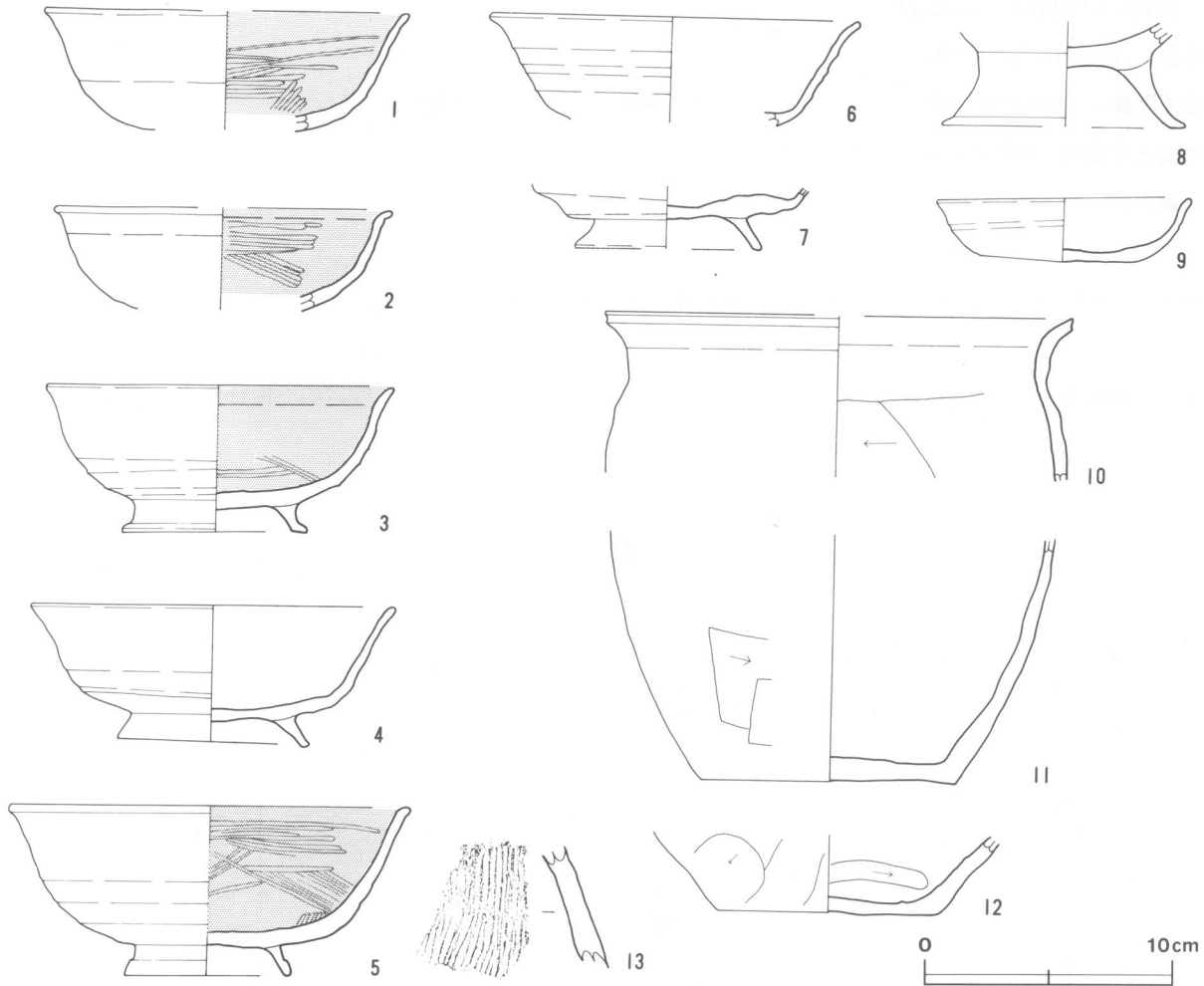
壁溝 上幅12cm，下幅8cm，深さ10cmで，断面形はU字形である。ほぼ全周している。

床 全体的に平坦で，中央部がよく踏み固められている。南壁付近に攪乱を受けている。

竈 東壁南東コーナー寄りに付設されている。規模は長さ85cm，袖幅75cm，壁外への掘り込みは45cmである。



第324図 第234号住居跡実測図



第325図 第234号住居跡出土遺物実測図

袖部は砂質粘土で構築されている。火床部は円形に浅く掘りくぼめられ、煙道部は火床部から緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 砂多量, 焼土粒子少量, 炭化粒子・ローム粒子微量
- 3 暗褐色 砂多量, 焼土粒子・炭化粒子中量
- 4 暗赤褐色 砂中量, 焼土粒子少量
- 5 暗褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量

ピット 2か所(P₁, P₂)。P₁, P₂は、径20~25cmほどの円形で、深さ22~32cmである。いずれも支柱穴と考えられる。

覆土 3層からなり、自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量, ローム中・小ブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子多量, ローム中・小ブロック中量
- 3 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量, ローム小ブロック微量

遺物 土師器片119点, 須恵器片24点, 鉄滓1点が出土している。1の土師器碗は南西コーナー付近の床面直上から正位で、2の土師器碗は、南西コーナー付近覆土下層から出土している。9の土師器小皿は北東コーナー付近から、10の土師器甕は竈内から、11の土師器甕が中央付近の覆土下層からそれぞれ出土している。また竈内から6の土師器坏、4, 7の土師器高台付坏、3, 5の土師器高台付碗、8の土師器足高高台坏が、上位か

ら5, 6, 7, 3, 8, 4の順に重なり逆位で出土しており, 竈祭祀の可能性が考えられる。13は須恵器甕の体部片で, 外面には縦位の平行叩きが施されている。

所見 本跡の時期は, 遺構の形態や出土遺物から平安時代の10世紀以降と考えられる。

第234号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第325図 1	碗 土師器	A[14.6] B(4.8)	体部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部はわずかに外反する。	口縁部から体部外面ロクロナデ。体部内面へラ磨き。内面黒色処理。	砂粒・石英・長石・雲母・スコリア 外面にぶい橙色 内面黒色 普通	P1017 25% 南西コーナー付近床面直上
2	碗 土師器	A[13.6] B(4.1)	体部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部はわずかに外反する。	口縁部から体部外面ロクロナデ。体部内面へラ磨き。内面黒色処理。	砂粒・長石・雲母 外面橙色・内面黒色 普通 二次焼成	P1018 25% 南西コーナー付近覆土下層
3	高台付碗 土師器	A 13.9 B 6.0 D 7.5 E 1.3	口縁部一部欠損。高台は長く, ハの字状に開く。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部はわずかに外反する。	口縁部から体部外面ロクロナデ。内面へラ磨き。体部下端回転へラ削り。高台貼り付け後, ナデ。内面黒色処理。	砂粒・石英 外面にぶい黄橙色 内面黒色 良好 二次焼成	P1019 95% 竈内
4	高台付坏 土師器	A 14.6 B 5.7 D 7.8 E 1.2	体部一部欠損。高台は長く, ハの字状に開く。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部はわずかに外反する。	口縁部から体部外面ロクロナデ。高台貼り付け後, ナデ。	砂粒・石英・長石・雲母 外面にぶい赤褐色 不良	P1020 85% 竈内
5	高台付碗 土師器	A 16.1 B 6.8 D 6.9 E 1.3	体部一部欠損。高台は長く, ハの字状に開く。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部はわずかに外反する。	口縁部から体部外面ロクロナデ。高台貼り付け後, ナデ。内面黒色処理。	砂粒・長石・雲母・スコリア 外面にぶい橙色・内面黒色 良好 二次焼成	P1021 80% 竈内
6	坏 土師器	A 14.8 B(4.4)	体部から口縁部片。体部は内彎気味に立ち上がり, 口縁部はわずかに外反する。	口縁部から体部内・外面ロクロナデ。	砂粒・長石・雲母 にぶい褐色 不良	P1022 35% 竈内
7	高台付坏 土師器	B(2.5) D[7.3] E 1.3	底部片。高台はハの字状に開く。	底部内・外面ロクロナデ。高台貼り付け後, ナデ。	砂粒・石英・雲母 灰褐色 普通	P1023 15% 竈内
8	足高台坏 土師器	B(4.3) D[9.9] E 3.0	底部片。高台は長く, ハの字状に強く開く。	高台貼り付け後, ナデ。	砂粒・長石・雲母・スコリア 橙色 普通	P1024 15% 竈内
9	小皿 土師器	A 10.2 B 2.8 C 6.6	平底。体部は外傾して立ち上がり, 口縁部はわずかに外反する。	口縁部から体部内・外面ロクロナデ。底部回転へラ削り。	砂粒・雲母・スコリア 橙色 普通 煤付着	P1025 95% 北東コーナー付近覆土中層
10	甕 土師器	A[18.8] B(6.5)	口縁部片。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面へラナデ。	砂粒・石英・長石・雲母 橙色 普通 煤付着	P1026 5% 竈内
11	甕 土師器	B(10.0) C 10.2	底部から体部にかけての破片。平底。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部外面下端へラ削り。内面ナデ。底部へラ削り。	砂粒・長石・雲母 にぶい橙色 普通 煤付着	P1027 15% 中央部覆土下層
12	甕 土師器	B(3.3) C 9.0	底部片。平底。	体部下端へラ削り。内面ナデ。底部外面へラ削り。	石英・長石・雲母 にぶい橙色 普通 煤付着	P1028 5% 竈内

第236号住居跡（第327図）

位置 調査6区南部，N14e5区。

重複関係 第234・237号住居跡が上部に構築されており，本跡が古い。

規模と平面形 長軸4.00m，短軸3.49mの長方形である。

主軸方向 N-7°-E

壁 壁高は42~60cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝 南壁下を除いて巡っている。上幅15cm，下幅10cm，断面形はU字形である。

床 全体的に平坦で，中央部がよく踏み固められている。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は長さ110cm，袖幅105cm，壁外への掘り込みは50cmである。袖部は砂質粘土で構築されている。火床部は円形に浅く掘りくぼめられ，煙道部は火床部から外傾して立ち上がり，上面で平坦部をもち，さらに緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

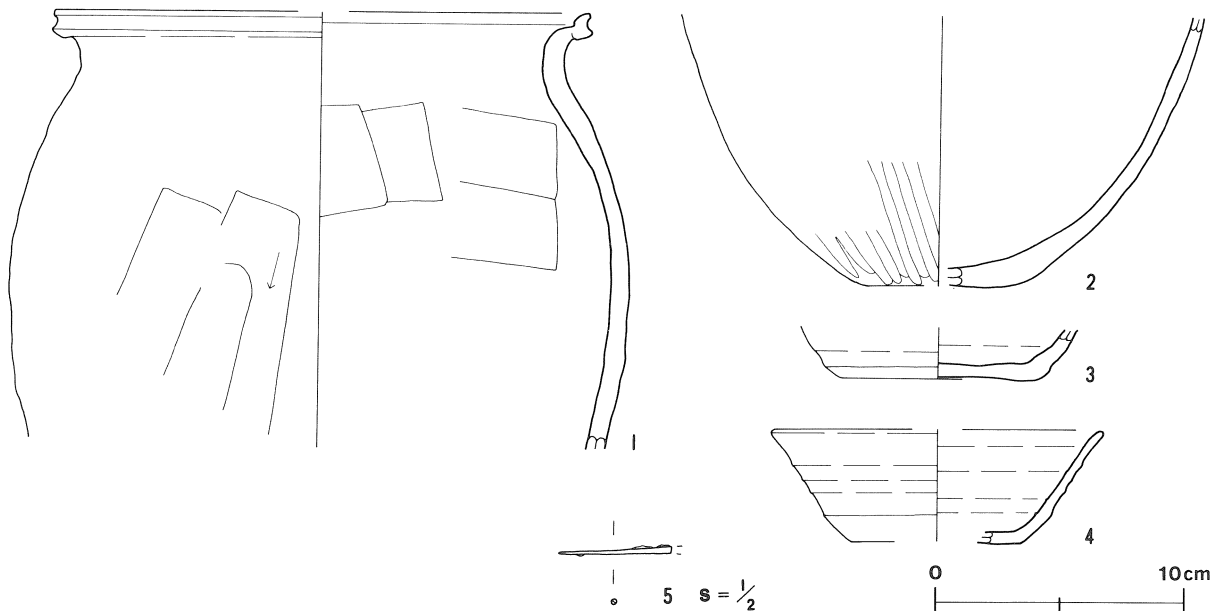
- 1 黒褐色 焼土小ブロック・焼土粒子少量
- 2 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子中量
- 3 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子少量
- 4 極暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子中量
- 5 極暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子少量

覆土 4層からなり，自然堆積である。

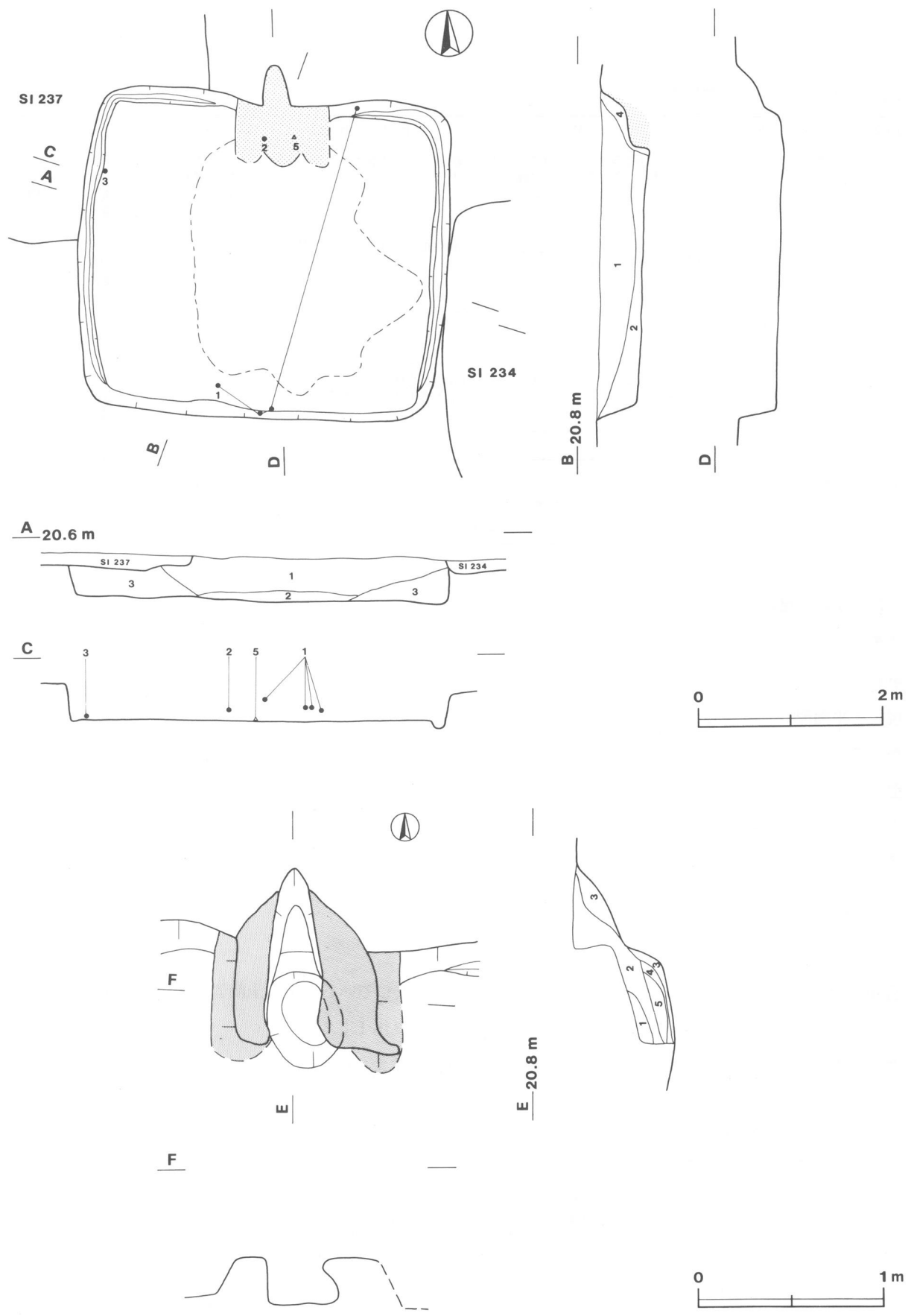
土層解説

- 1 黒褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
- 3 黒褐色 ローム粒子中量，ローム中・小ブロック微量
- 4 暗褐色 ローム小ブロック・炭化粒子・焼土粒子少量

遺物 土師器片197点，須恵器片14点，縄文土器片2点，鉄製品1点，礫1点が出土している。3の須恵器坏は西壁際の覆土下層から，2の土師器甕は竈内から，1の土師器甕は，竈付近と南壁際から，5の鉄製針が竈内からそれぞれ出土している。



第326図 第236号住居跡出土遺物実測図



第327图 第236号住居跡実测图

所見 本跡に伴う遺物は少なく、明確な時期を断定することはできないが、遺構の形態や出土遺物から平安時代の9世紀前葉と考えられる。

第236号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第326図 1	甕 土師器	A[21.4] B(17.6)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。端部は上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ヘラナデ。	砂粒・長石・雲母にぶい橙色 普通 煤付着	P1033 20% 竈付近と南壁際 覆土中層
2	甕 土師器	B(10.9) C[5.6]	底部から体部にかけての破片。平底。体部は内彎して立ち上がる。	体部外面下位縦方向のヘラ磨き。	砂粒・石英・長石・雲母にぶい橙色 普通 煤付着	P1034 10% 竈内
3	坏 須恵器	B(2.1) C 7.9	底部片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	底部回転ヘラ切り後、ヘラ削り。	砂粒・長石・雲母・スコリアにぶい黄色 普通	P1031 30% 西壁際覆土下層
4	坏 須恵器	A[13.2] B 4.5 C[7.0]	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部から体部内・外面クロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部ヘラ削り。	石英・長石 オリーブ黒色 普通	P1035 20% 覆土中

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
5	針	(3.0)	0.2	0.1	(0.14)	竈内	M1001

第237号住居跡（第328図）

位置 調査6区南部，N14e4区。

重複関係 第236号住居跡の上部に構築されており，本跡が新しい。

規模と平面形 長軸2.96m，短軸2.53mの長方形である。

長軸方向 N-6°-W

壁 壁高は15cmで，緩やかに立ち上がる。

床 全体的に平坦で，中央部がよく踏み固められている。

覆土 2層からなるが，覆土が浅く堆積状況は不明である。

土層解説

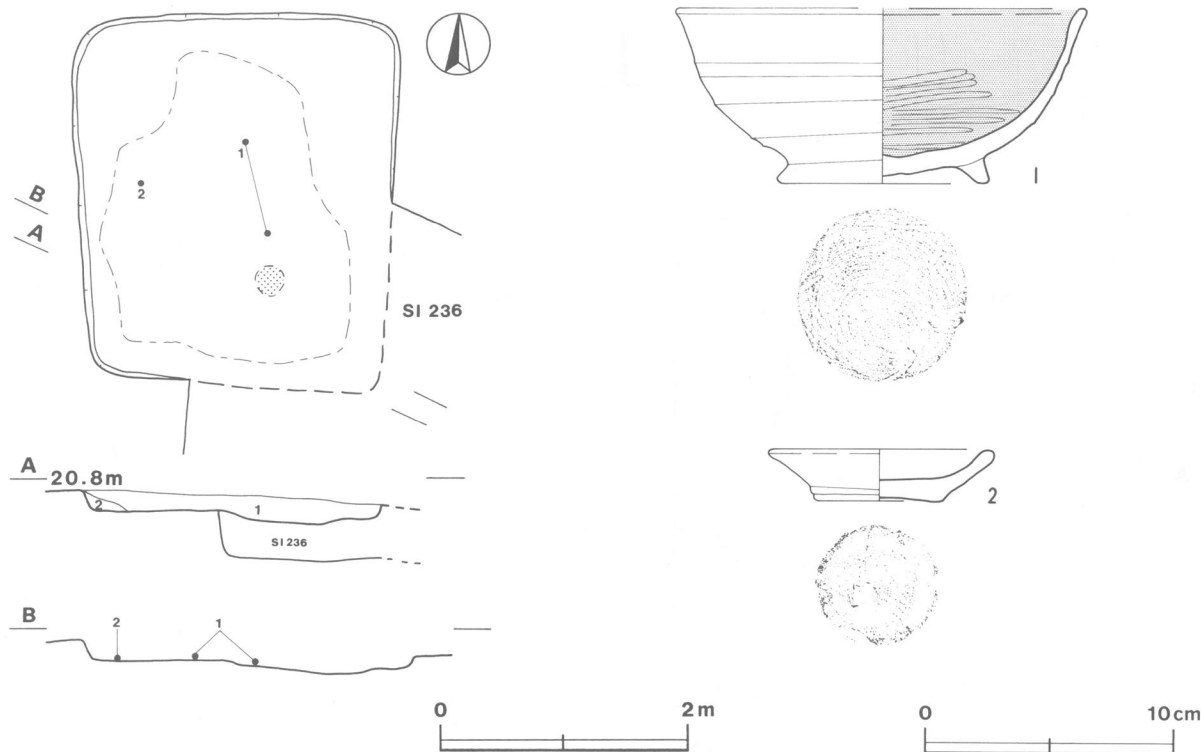
- 1 黒褐色 ローム小ブロック少量，ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子中量

遺物 土師器片172点，須恵器片17点，不明鉄製品2点が出土している。1の土師器高台付椀は中央付近の覆土下層から，2の土師器小皿は西壁際の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 本跡の時期は，出土遺物から平安時代の10世紀以降と考えられる。

第237号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第328図 1	高台付椀 土師器	A[16.1] B 7.0 D 8.0 E 1.1	体部一部欠損。高台は短く，ハの字状に開く。体部は内彎して立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。	口縁部から体部外面クロナデ。内面ヘラ磨き後，黒色処理。底部は回転系切り後，高台貼り付け。	砂粒・雲母 外面にぶい赤褐色 内面黒色 普通	P1036 50% 中央部覆土下層
2	小皿 土師器	A 8.9 B 2.1 C 5.0	体部一部欠損。平底。体部は外方に開いて立ち上がり，口縁部に至る。	口縁部から体部内・外面クロナデ。底部回転系切り。	砂粒・石英・長石・雲母にぶい橙色 普通 鉄滓付着	P1037 60% 西壁際覆土下層



第328図 第237号住居跡・出土遺物実測図

第238号住居跡 (第329図)

位置 調査6区南部, N14g3区。

重複関係 第239号住居跡に掘り込まれており, 本跡が古い。

規模と平面形 長軸[4.28]m, 短軸3.58mの長方形と推定される。

主軸方向 N-5°-E

壁 壁高は20~32cmで, 外傾して立ち上がる。

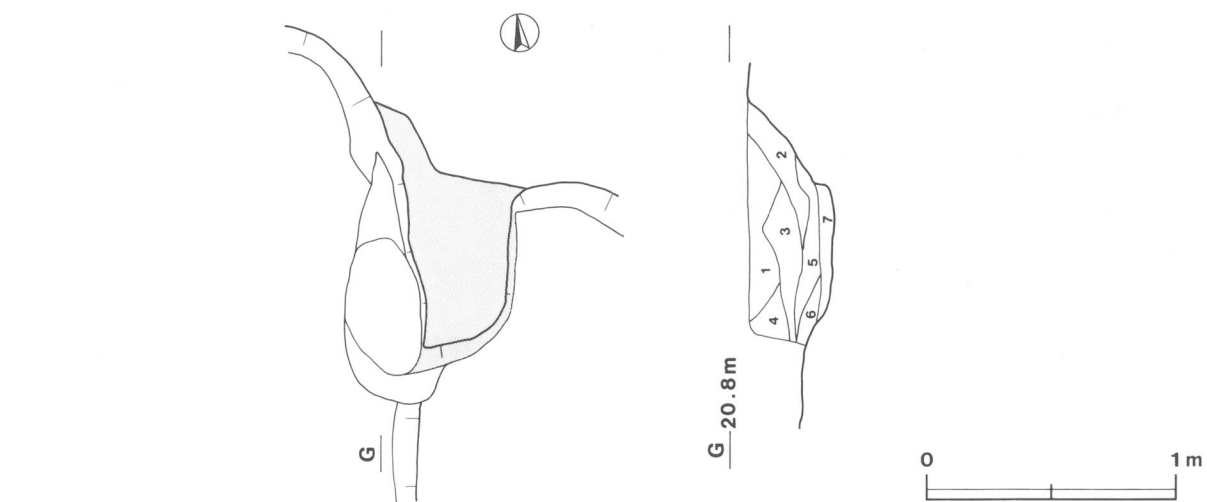
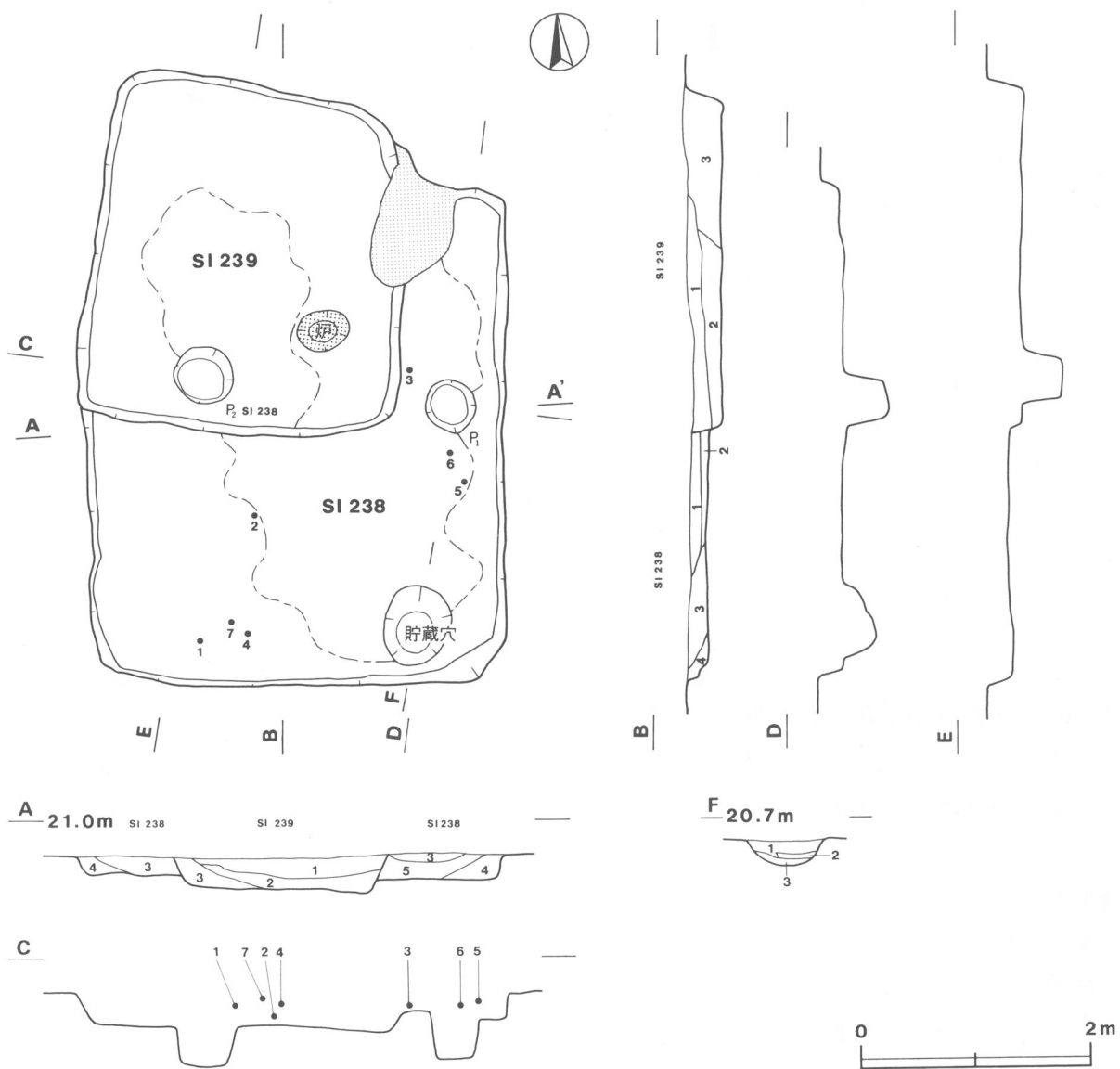
床 全体的に平坦で, 中央部がよく踏み固められている。

竈 北壁北東コーナー寄りに付設されている。第239号住居跡に左袖部を掘り込まれて遺存状況は悪く, 規模は長さ120cm, 袖幅[65]cm, 壁外への掘り込みは35cmである。袖部は砂質粘土で構築されている。火床部は楕円形に10cmほど掘りくぼめられており, 煙道部は火床部から緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子少量, ローム中ブロック微量
- 2 黒褐色 炭化粒子少量, 焼土小ブロック・焼土粒子微量
- 3 黒褐色 焼土中ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量, ローム中ブロック微量
- 4 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子微量
- 5 黒褐色 焼土小ブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子少量
- 6 黒褐色 焼土中・小ブロック・炭化粒子多量
- 7 暗赤褐色 焼土中・小ブロック・炭化粒子多量

ピット 2か所(P₁, P₂)。P₁, P₂は, 径45~55cmの円形で, 深さ35~37cmである。いずれも支柱穴と考えられる。



第329图 第238・239号住居跡実测图

貯蔵穴 南東コーナー部に付設されている。長径70cm，短径55cmの楕円形で，深さ27cmである。断面形は皿状をしている。

貯蔵穴土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量，炭化粒子微量
- 2 黒褐色 炭化粒子・ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック微量

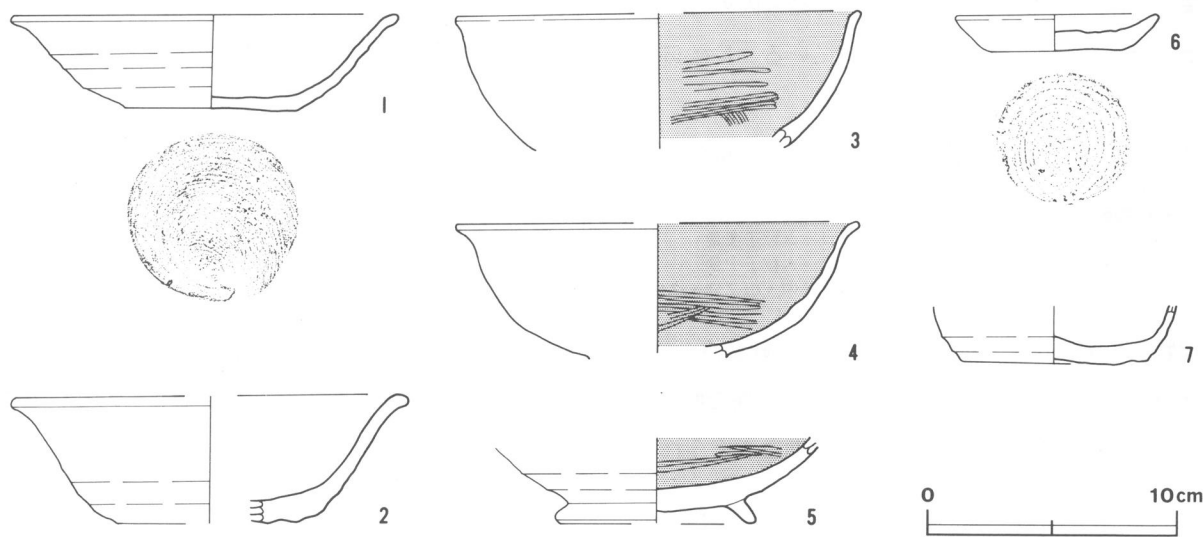
覆土 5層からなり，自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム大・中・小ブロック少量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量
- 3 黒褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子少量
- 4 極暗褐色 ローム大ブロック・ローム粒子少量
- 5 極暗褐色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子少量

遺物 土師器片200点，須恵器片38点，礫8点，鉄滓1点が出土している。1の土師器坏は南東壁際の覆土中層から逆位で，2の土師器坏は中央付近の覆土下層から逆位で，3の土師器碗が竈付近の覆土中層から，4の土師器高台付坏，7の土師器坏が南壁際の覆土上層から，5の土師器高台付坏，6の土師器小皿が東壁際の覆土中層から正位でそれぞれ出土している。

所見 本跡の時期は，遺構の形態や出土遺物から平安時代の10世紀以降と考えられる。



第330図 第238号住居跡出土遺物実測図

第238号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第330図 1	坏 土師器	A 15.3 B 3.8 C 6.8	体部一部欠損。体部は内彎気味に外傾し，口縁部は外反する。	口縁部から体部内・外面ロクロナデ。底部回転糸切り後，無調整。	雲母・スコリア 橙色 普通	P1039 80% 南東壁際覆土中層
2	坏 土師器	A[15.6] B 5.2 C[7.2]	底部から口縁部の破片。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は外反する。	口縁部から体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ切り後，無調整。	砂粒・雲母・スコリア にぶい褐色 普通 煤付着	P1040 40% 中央付近覆土下層
3	碗 土師器	A[16.2] B(5.5)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり，口縁部に至る。	口縁部から体部外面ロクロナデ。内面ヘラ磨き後，黒色処理。	砂粒・雲母・スコリア 外面にぶい橙色 内面黒色 普通 外面煤付着	P1041 20% 竈付近覆土中層

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第330図 4	高台付坏 土師器	A[16.6] B(5.2)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部から体部外面ロクロナデ。内面ヘラ磨き後、黒色処理。	砂粒・雲母 外面にぶい橙色 内面黒色 普通	P1042 10% 南壁際覆土上層
5	高台付坏 土師器	B(3.4) D[7.8] E 1.0	底部から体部にかけての破片。高台はハの字状に、短く開く。体部は内彎して立ち上がる。	体部外面ロクロナデ。内面ヘラ磨き後、黒色処理。高台貼り付け後、ナデ。	砂粒・雲母・スコリア 外面にぶい橙色 内面黒色 普通	P1043 10% 東壁際覆土中層
6	小皿 土師器	A 8.1 B 1.4 C 5.0	平底。体部は外方に開いて立ち上がり、口縁部に至る。	底部から口縁部内・外面ロクロナデ。底部回転系切り後、無調整。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通 煤付着	P1044 95% 東壁際覆土中層
7	坏 土師器	B(2.3) C[7.5]	底部片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	底部から体部内・外面ロクロナデ。底部ヘラ切り後、無調整。	砂粒・雲母 にぶい褐色 普通 煤付着	P1045 30% 南壁際覆土上層

第239号住居跡（第329図）

位置 調査6区南部，N14g₂区。

重複関係 第238号住居跡を掘り込んでおり，本跡が新しい。

規模と平面形 長軸3.01m，短軸2.71mの長方形である。

主軸方向 N-17°-E

壁 壁高は32cmで，外傾して立ち上がる。

床 全体的に平坦で，中央部がよく踏み固められている。

炉 南東コーナー寄りに付設されている。長径45cm，短径35cmの楕円形で，10cmほど掘りくぼめた，地床炉である。

覆土 3層からなり，ロームブロックを多量に含み人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子多量
- 2 黒褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子中量
- 3 黒褐色 ローム粒子中量，ローム大・中・小ブロック少量

遺物 土師器片151点，須恵器片12点，礫2点が出土しているが，本跡に伴う遺物は確認できなかった。

所見 本跡に伴う遺物はなく，明確な時期を断定することはできないが，第238号住居跡を掘り込んでいることから，平安時代の10世紀以降の時期と考えられる。

第240号住居跡（第331図）

位置 調査6区南部，N14i₂区。

重複関係 第243号住居跡の上部に構築されており，本跡が新しい。

規模と平面形 長軸3.10m，短軸2.58mの長方形である。

主軸方向 N-90°-E

壁 壁高は18~22cmで，外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦で，全体によく踏み固められており，中央部に凹凸が見られる。

竈 東壁中央部に付設されている。袖部の遺存状況は悪く，規模は長さ140cm，袖幅[55]cm，壁外への掘り込みは40cmである。袖部は砂質粘土で構築されている。火床部は円形に浅く掘りくぼめられており，煙道部は削平され不明である。

竈土層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子少量, 炭化粒子・焼土粒子微量
- 2 暗褐色 焼土粒子中量, 炭化粒子・ローム粒子微量
- 3 暗赤褐色 焼土粒子中量, 焼土小ブロック・炭化粒子・ローム粒子少量
- 4 暗赤褐色 焼土粒子多量, 炭化粒子少量, ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 5 暗赤褐色 焼土粒子中量, 炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 6 暗褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子少量, 炭化粒子微量

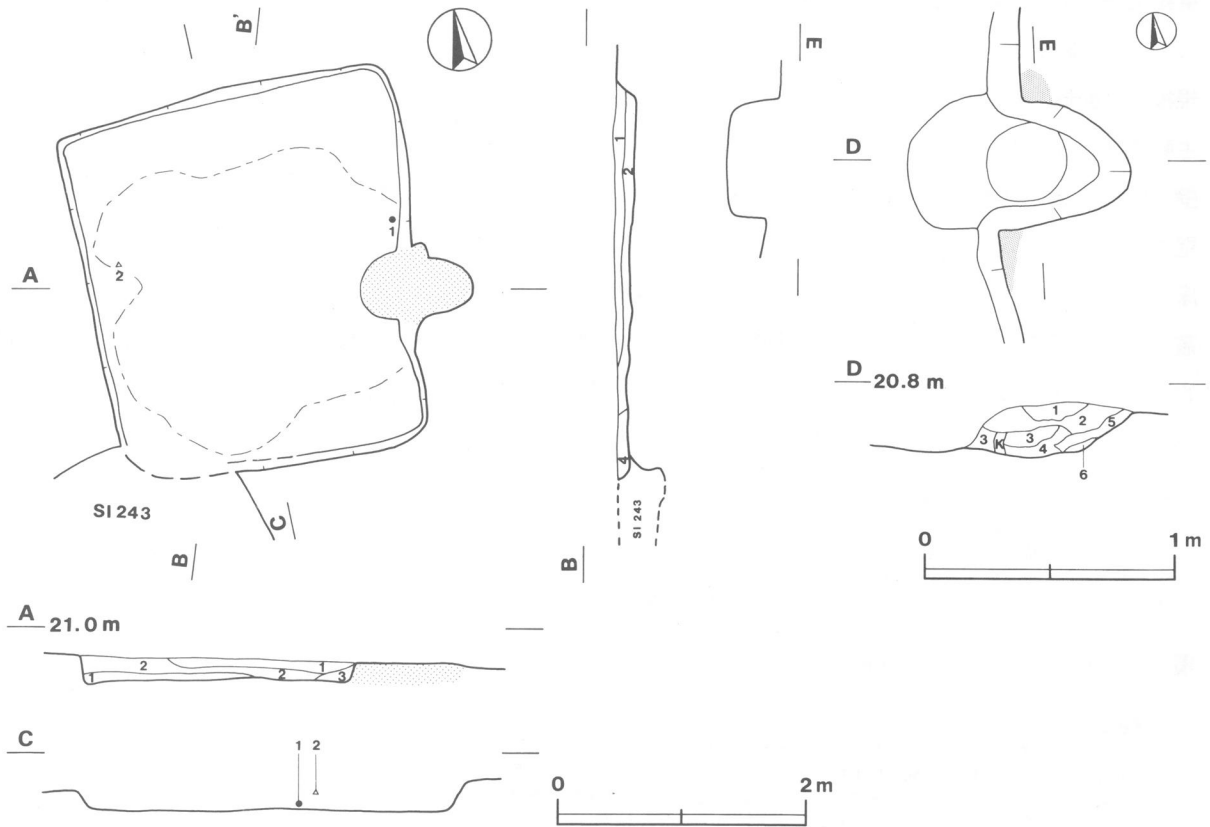
覆土 4層からなり, 自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・ローム大・中・小ブロック・ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量, 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量
- 3 極暗褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック少量
- 4 黒褐色 焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量

遺物 土師器片167点, 須恵器片19点, 陶器片1点, 鉄製品1点が出土している。1の土師器小皿は東壁際の覆土下層から正位で, 2の不明鉄製品が西壁際の覆土中層からそれぞれ出土している。3は須恵器甕の体部片で, 外面には平行叩きが施されている。

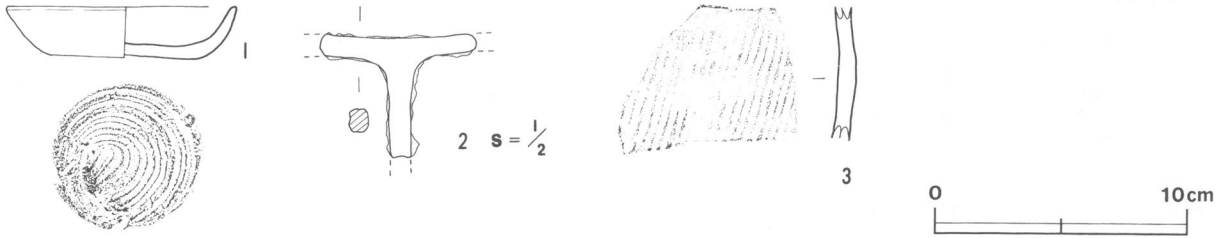
所見 本跡の時期は, 遺構の形態や出土遺物から平安時代の10世紀以降と考えられる。



第331図 第240号住居跡実測図

第240号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第332図 1	小皿 土師器	A 9.1 B 2.2 C 5.7	口縁部一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり, 口縁部に至る。	口縁部から体部内・外面クロナデ。底部回転系切り。	石英・長石・雲母 橙色 普通	P1046 90% 東壁際覆土下層



第332図 第240号住居跡出土遺物実測図

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第332図2	不明鉄製品	(3.4)	4.1	0.5	(6)	西壁際覆土中層	M1002

第241号住居跡 (第333図)

位置 調査6区南部, N14i1区。

重複関係 第243号住居跡の上部に構築されており, 本跡が新しい。また第242号住居跡が上部に構築されているので, 本跡が古い。

規模と平面形 長軸3.42m, 短軸3.37mの方形である。

主軸方向 N-1°-E

壁 壁高は28~34cmで, 外傾して立ち上がる。

壁溝 上幅10~15cm, 下幅7~10cm, 深さ5cmで, 断面形はU字形である。全周している。

床 全体的に平坦で, 竈前面から中央部がよく踏み固められている。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は長さ85cm, 袖幅105cm, 壁外への掘り込みは15cmである。袖部は砂質粘土で構築されている。火床部は楕円形に浅く掘りくぼめられており, 煙道部は火床部から外傾して立ち上がる。

竈土層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子少量, 焼土小ブロック・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 焼土粒子少量, 焼土小ブロック・炭化粒子・ローム小ブロック微量
- 3 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子中量, 焼土小ブロック少量
- 4 黒褐色 炭化粒子多量, 焼土小ブロック・焼土粒子少量

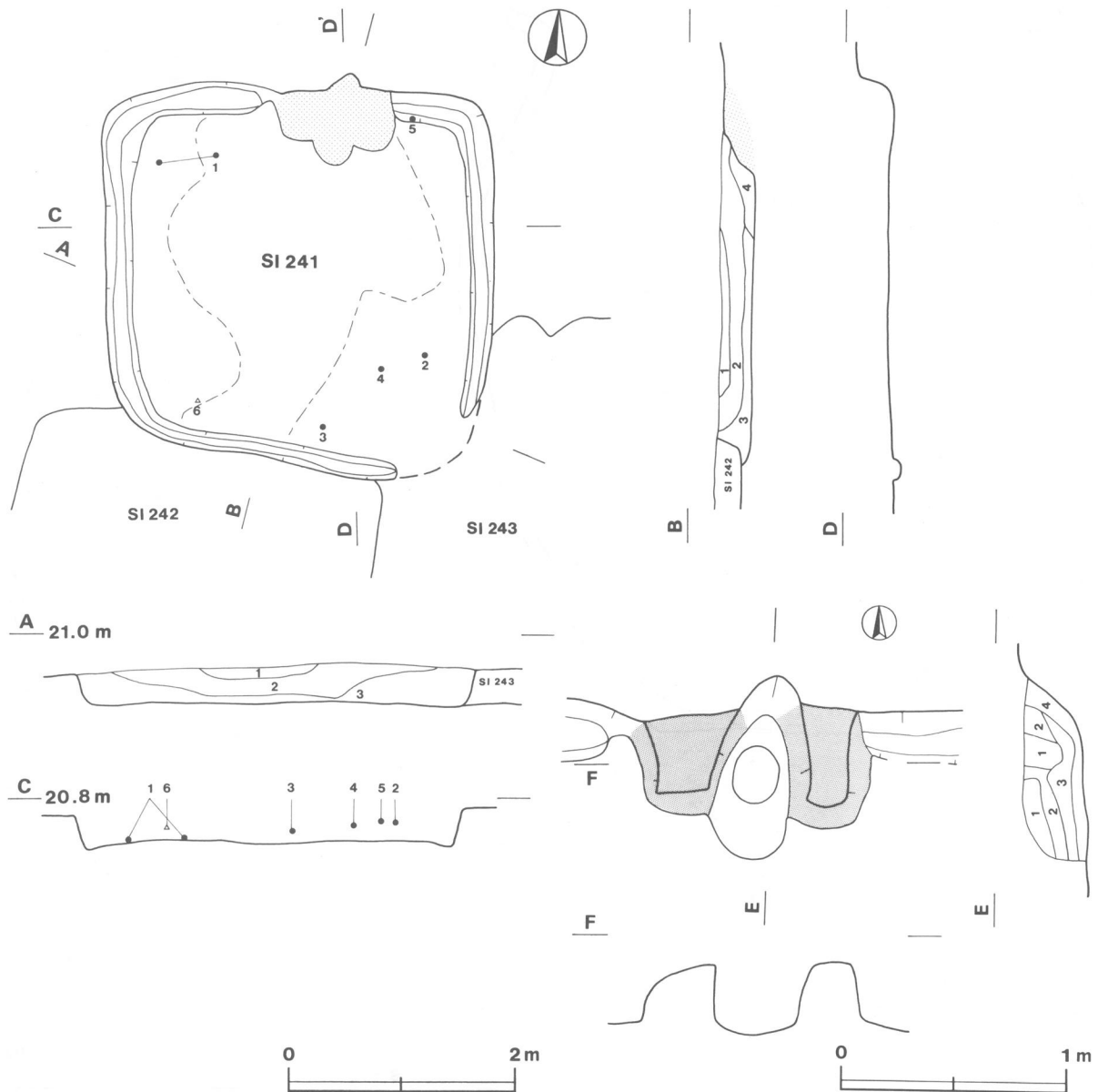
覆土 4層からなり, 自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック少量
- 3 極暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 黒褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量

遺物 土師器片112点, 須恵器片19点, 鉄製品1点, 礫3点が出土している。1の土師器甕は北西コーナー付近の覆土下層から横位のつぶれた状態で, 2の土師器甕は東壁際の覆土中層から, 3の須恵器坏は南壁際の覆土中層から正位で, 5の須恵器鉢は竈右袖付近の覆土中層からそれぞれ出土している。4は混入と考えられる。7は須恵器甕の体部片で, 外面には横位の平行叩きが施されている。

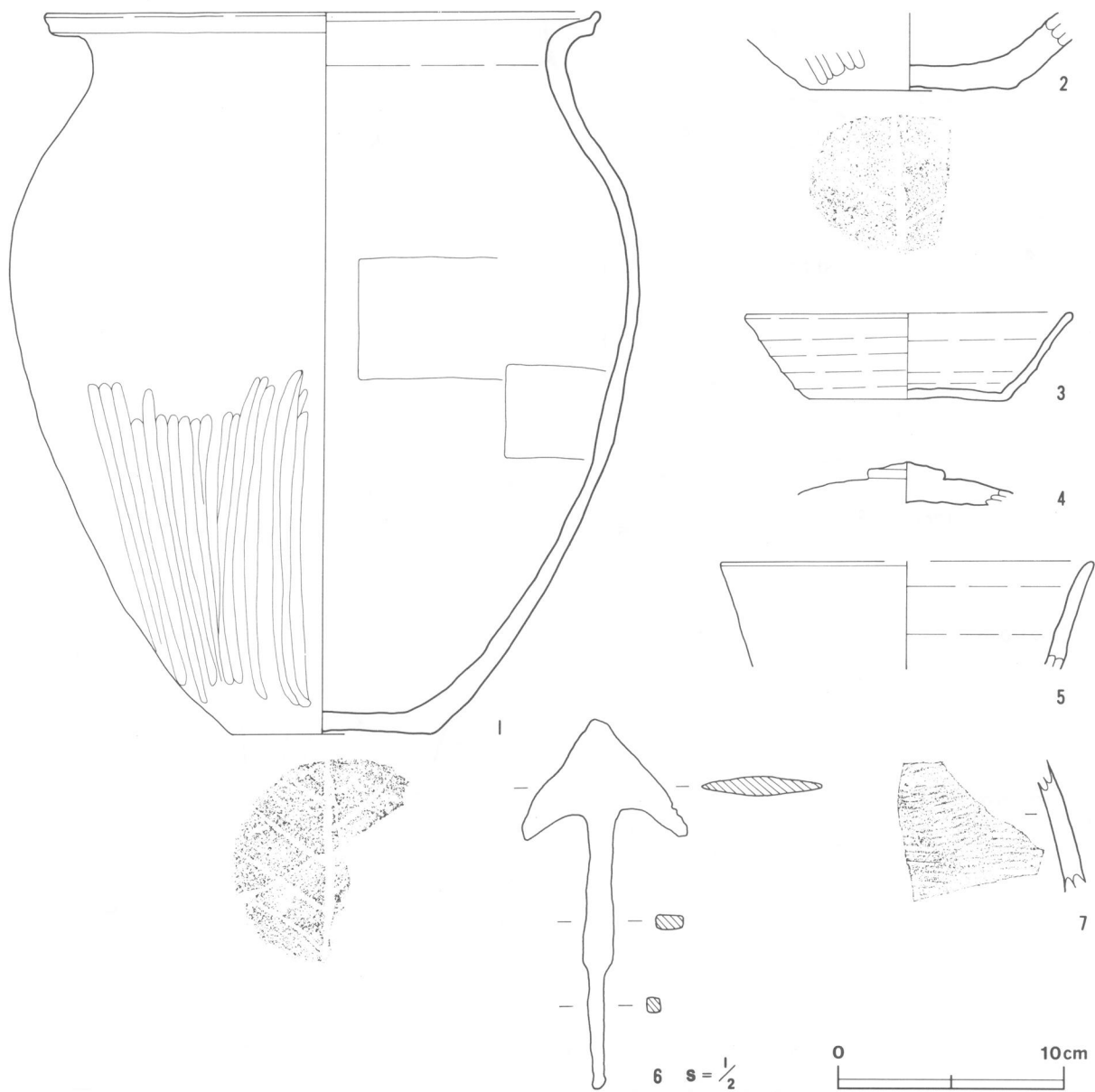
所見 本跡の時期は, 遺構の形態や出土遺物から奈良時代の8世紀中葉と考えられる。



第333図 第241号住居跡実測図

第241号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第334図 1	甕 土師器	A 24.6 B 32.2 C 9.0	平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は強く外反する。端部は上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面縦方向のヘラ磨き。体部内面ヘラナデ。底部に木葉痕。	砂粒・石英・長石・雲母 明赤褐色 普通 煤付着	P 1047 90% 北西コーナー付近覆土下層
2	甕 土師器	B (3.5) C [9.2]	底部片。平底。体部は内彎して立ち上がる。	体部外面ヘラ磨き。底部に木葉痕。	砂粒・石英・長石・雲母 橙色 普通	P 1048 5% 東壁際覆土中層
3	坏 須恵器	A 14.2 B 3.9 C 8.8	平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部から体部内・外面クロナデ。底部外面、井桁状の手持ちヘラ削り。	石英・長石・雲母 灰色 良好	P 1049 100% 南壁際覆土中層
4	蓋 須恵器	B (1.8) F 3.4 G 0.7	天井部片。ボタン状のつまみがつく。	天井部外面回転ヘラ削り。内面クロナデ。	砂粒・長石・雲母 灰黄色 普通	P 1050 20% 南東コーナー付近覆土中層
5	鉢 須恵器	A [16.6] B (4.8)	口縁部片。口縁部は外反する。	口縁部内面横ナデ。	砂粒・長石 灰褐色 良好 外面自然釉	P 1051 5% 竈右袖付近覆土中層



第334図 第241号住居跡出土遺物実測図

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考	
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第334図6	鉄 鏃	11.0	4.9	0.6	21	南壁際付近中層	M1003	95%

第242号住居跡 (第335図)

位置 調査6区南部, N14j1区。

重複関係 第241・243号住居跡の上部に構築されており, 本跡が新しい。

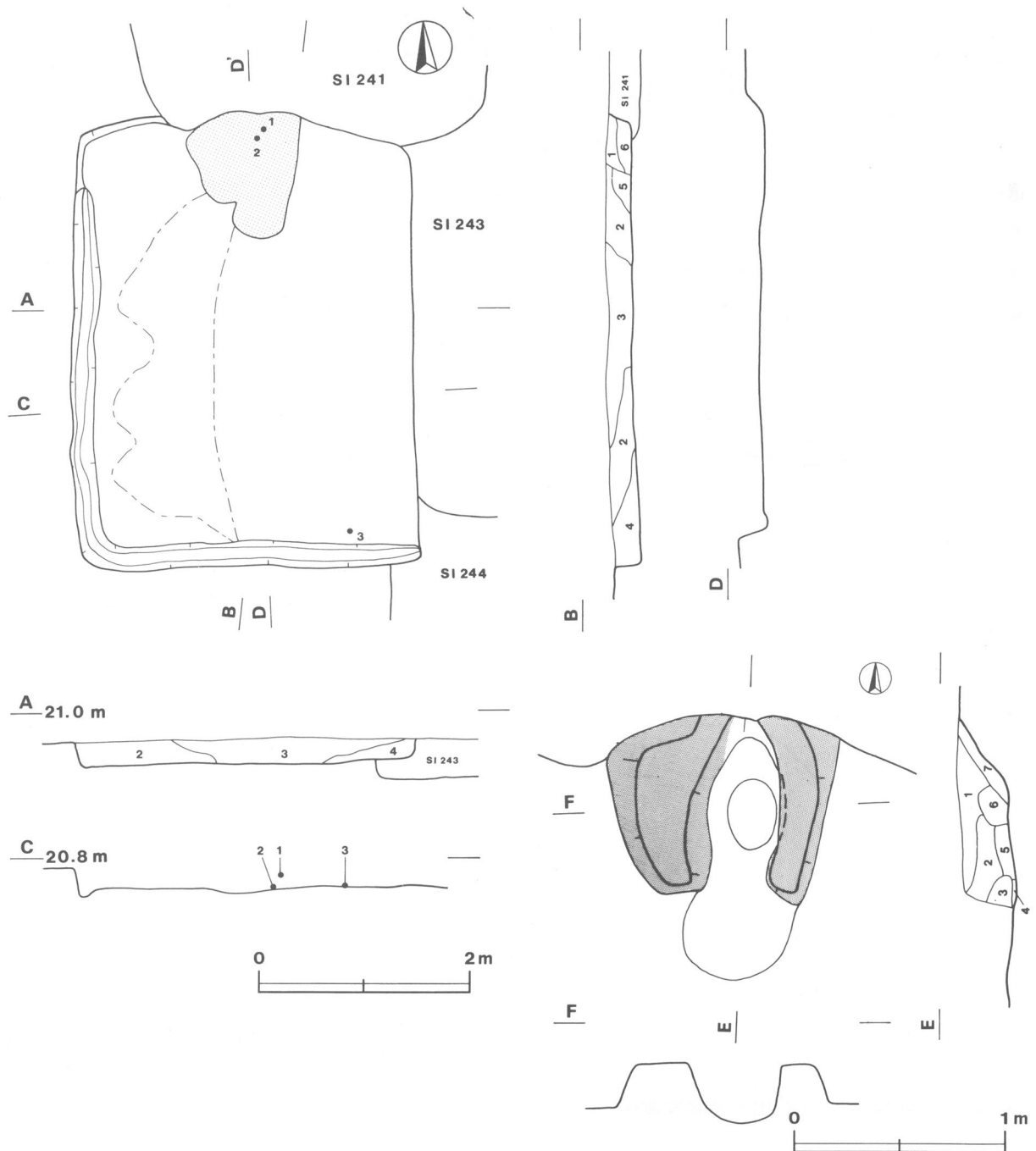
規模と平面形 長軸4.26m, 短軸[3.24]mの長方形と推定される。

主軸方向 N-9°-E

壁 壁高は20~25cmで, 外傾して立ち上がる。

壁溝 西壁下から南壁下にかけて確認した。上幅15~20cm, 下幅10cm, 深さ8cmで, 断面形はU字形である。

床 全体的に平坦で, 西側一部はよく踏み固められている。



第335図 第242号住居跡実測図

竈 北壁中央部に付設されている。規模は長さ125cm、袖幅110cm、壁外への掘り込みは5cmである。袖部は砂質粘土で構築されている。火床部は、楕円形に浅く掘りくぼめられており、煙道部は火床部から緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子・砂少量、焼土小ブロック・炭化粒子・ローム粒子微量
- 2 暗褐色 焼土粒子中量、炭化粒子・ローム粒子・砂少量
- 3 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量
- 4 灰色 焼土粒子・炭化粒子中量
- 5 暗褐色 焼土小ブロック・炭化粒子・ローム粒子少量
- 6 暗赤褐色 焼土粒子中量、焼土中ブロック・炭化粒子・ローム粒子少量
- 7 暗褐色 焼土小ブロック・炭化粒子少量、ローム粒子微量

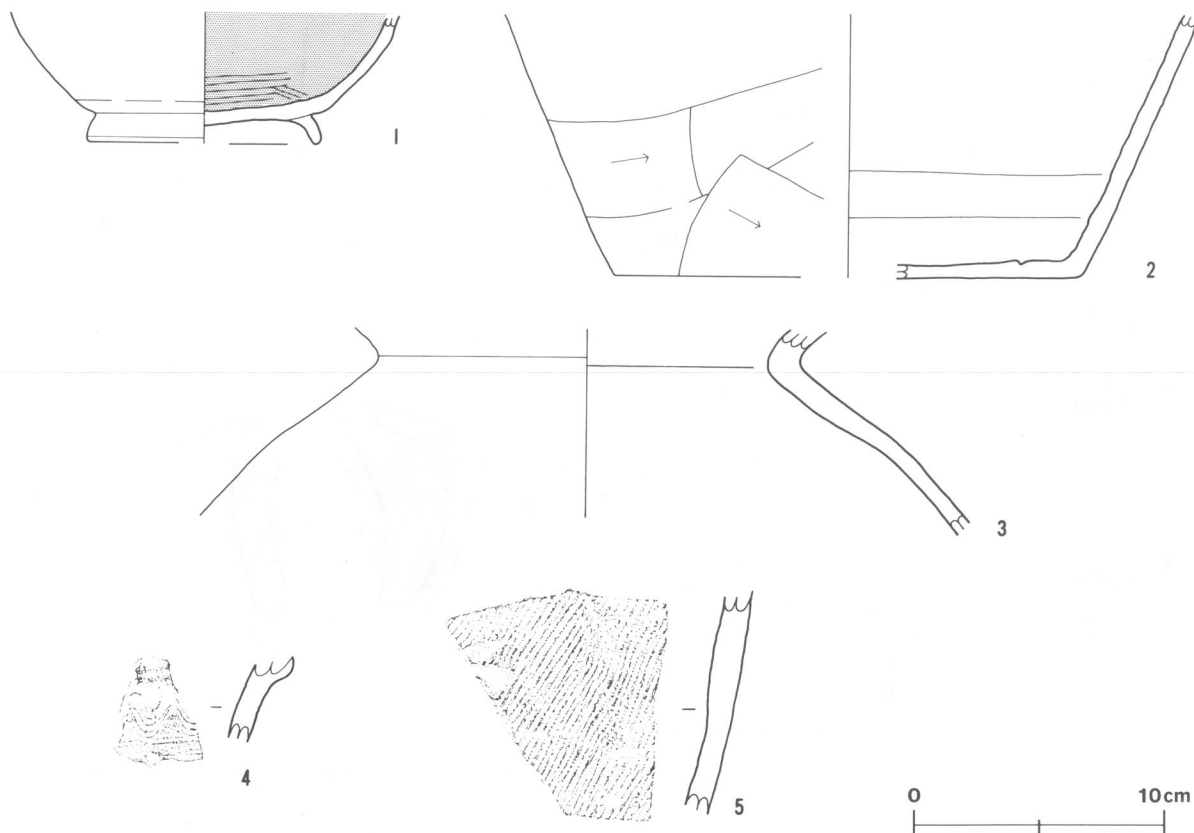
覆土 6層からなり、自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子・ローム粒子少量、焼土小ブロック・炭化粒子微量
- 2 極暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 極暗褐色 焼土小ブロック・炭化粒子・ローム粒子少量
- 4 黒褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化物・ローム小ブロック微量
- 5 暗褐色 焼土粒子中量、炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 6 黒褐色 焼土粒子・ローム粒子少量、炭化粒子微量

遺物 土師器片186点、須恵器片43点、陶器片1点、礫2点が出土している。1の土師器高台付碗、2の須恵器甕は竈内から出土している。3は混入である。4は須恵器甕の口縁部片で、外面には4本櫛歯の波状文が施されている。5は須恵器甕の体部片で、外面には平行叩きが施されている。

所見 本跡の時期は、遺構の形態や出土遺物から平安時代の9世紀後葉と考えられる。



第336図 第242号住居跡出土遺物実測図

第242号住居跡出土遺物観察表

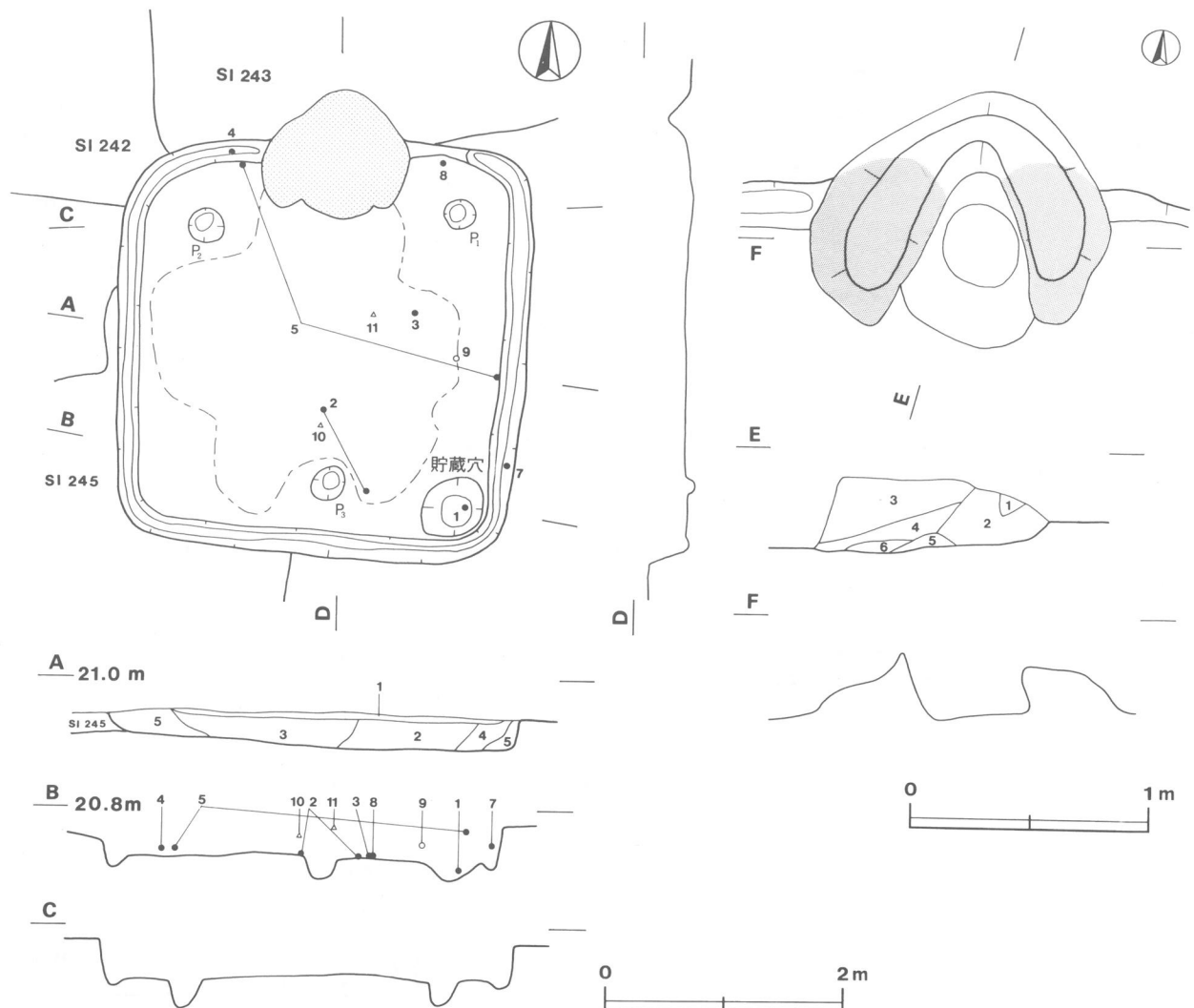
図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第336図 1	高台付椀 土師器	B (5.2) D [9.0] E 1.2	底部から体部にかけての破片。高台はハの字状に開く。体部は内彎して立ち上がる。	体部外面ロクロナデ。内面へら磨き。高台貼り付け後、ナデ。内面黒色処理。	石英・長石・雲母 外面にぶい橙色 内面黒色 普通	P1052 20% 竈内
2	甕 須恵器	B (10.6) C [18.8]	底部から体部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部外面平行叩き。体部下端へら削り。内面ナデ。	石英・長石・雲母 にぶい橙色 普通	P1053 10% 竈内
3	甕 須恵器	B (7.6)	頸部片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 黄灰色 普通 外面自然釉	P1054 5% 南東コー ナー付近覆土下層

第244号住居跡 (第337図)

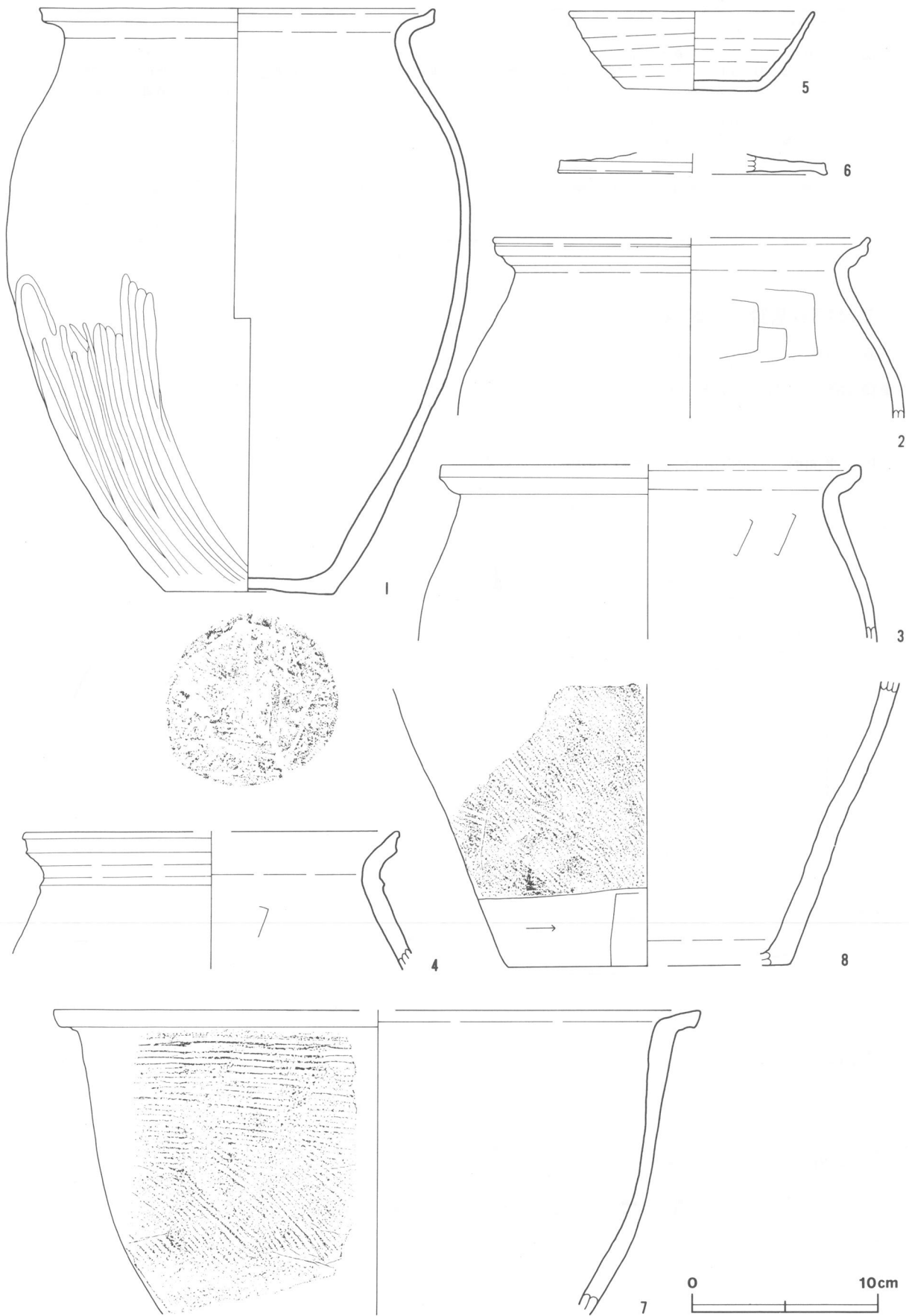
位置 調査6区南部, O14a2区。

重複関係 第242・245号住居跡が上部に構築されており, 本跡が古い。また第243号住居跡の上部に本跡が構築されているので, 本跡が新しい。

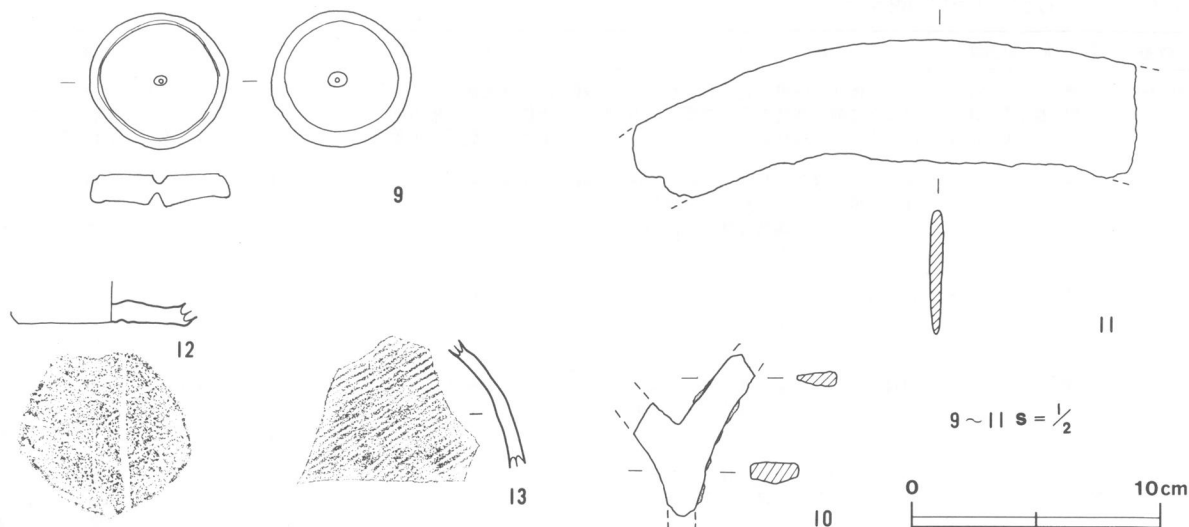
規模と平面形 長軸3.55m, 短軸3.44mの方形である。



第337図 第244号住居跡実測図



第338图 第244号住居跡出土遺物実測図(1)



第339図 第244号住居跡出土遺物実測図(2)

主軸方向 N-0°

壁 壁高は20~34cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 上幅15cm、下幅10cm、深さ5cmで、断面形はU字形である。全周している。

床 全体的に平坦で、中央部がよく踏み固められている。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は長さ90cm、袖幅125cm、壁外への掘り込みは30cmである。袖部は砂質粘土で構築されている。火床部は円形に浅く掘りくぼめられており、煙道部は火床部から外傾して立ち上がる。

竈土層解説

- 1 極暗赤褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック微量
- 2 極暗褐色 焼土粒子中量、炭化粒子少量
- 3 極暗褐色 焼土粒子・ローム粒子少量、焼土小ブロック・ローム小ブロック微量
- 4 黒褐色 焼土粒子中量、炭化粒子少量
- 5 暗赤褐色 焼土粒子多量、焼土小ブロック中量
- 6 黒褐色 炭化粒子多量、焼土粒子中量

ピット 3か所(P₁~P₃)。P₁、P₂は、径25cmの円形で、深さ20~25cmである。いずれも支柱穴と考えられる。P₃は、径25cmの円形で、深さは18cmである。出入り口施設に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴 南東コーナー部に付設されている。径50cmの円形で、深さは16cmである。断面形は皿状をしている。

覆土 5層からなり、自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子・焼土粒子微量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量、焼土小ブロック・焼土粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化物・ローム中ブロック微量
- 4 極暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物微量
- 5 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子・ローム中ブロック微量

遺物 土師器片557点、須恵器片88点、土製品1点、鉄製品2点、礫1点が出土している。1の土師器甕は貯蔵穴内覆土中層から横位で、3の土師器甕は中央付近の覆土下層から、4の土師器甕、5の須恵器坏は北壁際の覆土中層から、7の須恵器甕は東壁際の覆土中層から、8の須恵器甕は北壁際の覆土下層から、10の鉄鎌、11の鉄鎌は中央付近の覆土中層からそれぞれ出土している。12は土師器甕の底部片で、底部には木葉痕が施されている。13は須恵器甕の体部片で、外面には斜方向の平行叩きが施されている。

所見 本跡の時期は、遺構の形態や出土遺物から奈良時代の8世紀後葉と考えられる。

第244号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第338図 1	甕 土師器	A 21.3 B 31.7 C 9.1	平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は強く外反する。端部は上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面中位から下位にかけて縦方向のヘラ磨き。内面ナデ。底部に木葉痕。	砂粒・石英・長石・雲母 にぶい褐色 普通 外面煤付着	P1064 99% 貯蔵穴内 覆土中層
2	甕 土師器	A[21.2] B(9.8)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は強く外反する。端部は外上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ヘラナデ。	砂粒・石英・長石・雲母 にぶい橙色 普通	P1065 30% P3付近覆土下層
3	甕 土師器	A[22.6] B(9.4)	口縁部片。口縁部は外反する。端部は上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ヘラナデ。	石英・長石・雲母 橙色 普通	P1066 20% 中央付近覆土下層
4	甕 土師器	A[20.2] B(7.5)	口縁部片。口縁部は外反する。端部はわずかに外上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・雲母・スコリア 橙色 普通 外面煤付着	P1067 10% 北壁際覆土中層
5	坏 須恵器	A 13.2 B 4.3 C 7.2	体部一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部から体部にかけて内・外面ロクロナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・長石・雲母・スコリア 暗灰黄色 普通 外面煤付着	P1068 70% 北壁際覆土中層
6	蓋 須恵器	A[14.4] B(1.1)	口縁部片。端部は短く折り返されている。	口縁部内・外面ロクロナデ。	砂粒・石英・雲母 灰色 普通	P1069 10% 覆土中
7	甕 須恵器	A[35.0] B(16.5)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎気味に立ち上がり、頸部は強く外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面平行叩き。	砂粒・石英・長石 灰色 普通	P1070 5% 東壁際覆土中層
8	甕 須恵器	B(15.2) C[15.2]	底部から体部にかけての破片。体部は直線的に外傾する。	体部外面平行叩き。体部下端ヘラ削り。内面ナデ。	砂粒・石英・長石 褐灰色 普通	P1071 10% 北壁際覆土下層

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第339図9	不明土製品	3.6	3.7	0.9	13	中央付近覆土中層	D P1001
10	鉄 鎌	(4.5)	(3.2)	0.6	(7)	中央付近覆土中層	M1004
11	鎌	(13.6)	4.2	0.4	(46)	中央付近覆土中層	M1005

第245号住居跡 (第340図)

位置 調査6区南部, O14a1区。

重複関係 第244号住居跡の上部に構築されており, 本跡が新しい。

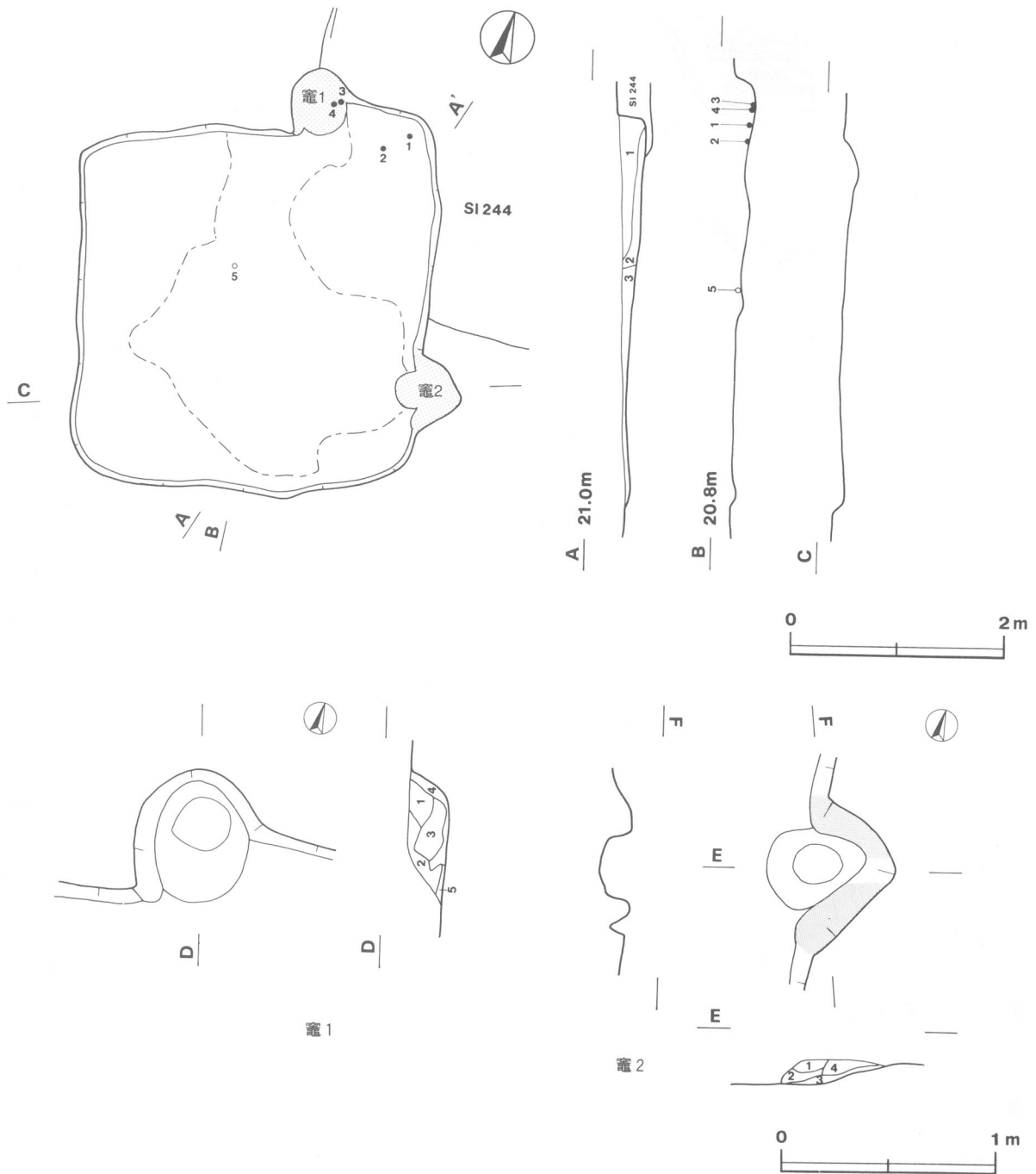
規模と平面形 長軸3.42m, 短軸3.28mの方形である。

主軸方向 N-13°-W

壁 壁高4~10cmで, 緩やかに立ち上がる。

床 ほぼ平坦で, 竈から中央部にかけて踏み固められている。

竈 竈が二つ付設されている。竈1は, 北東コーナー寄りに付設されている。袖部の遺存状況は悪く, 規模は長さ60cm, 袖幅(70)cm, 壁外への掘り込みは35cmである。右袖部の内側には, 補強材として土師器甕が貼り付けてある。火床部は円形に浅く掘りくぼめられており, 煙道部は, 火床部から緩やかに立ち上がる。竈2は, 南東コーナー寄りに付設されている。袖部の遺存状況は悪く, 規模は長さ60cm, 袖幅(65)cm, 壁外への掘り込みは30cmである。火床部は楕円形に浅く掘りくぼめられており, 煙道部は火床部から外傾して立ち上がる。竈の遺存状況から, 竈2から竈1へ移ったものと推定される。



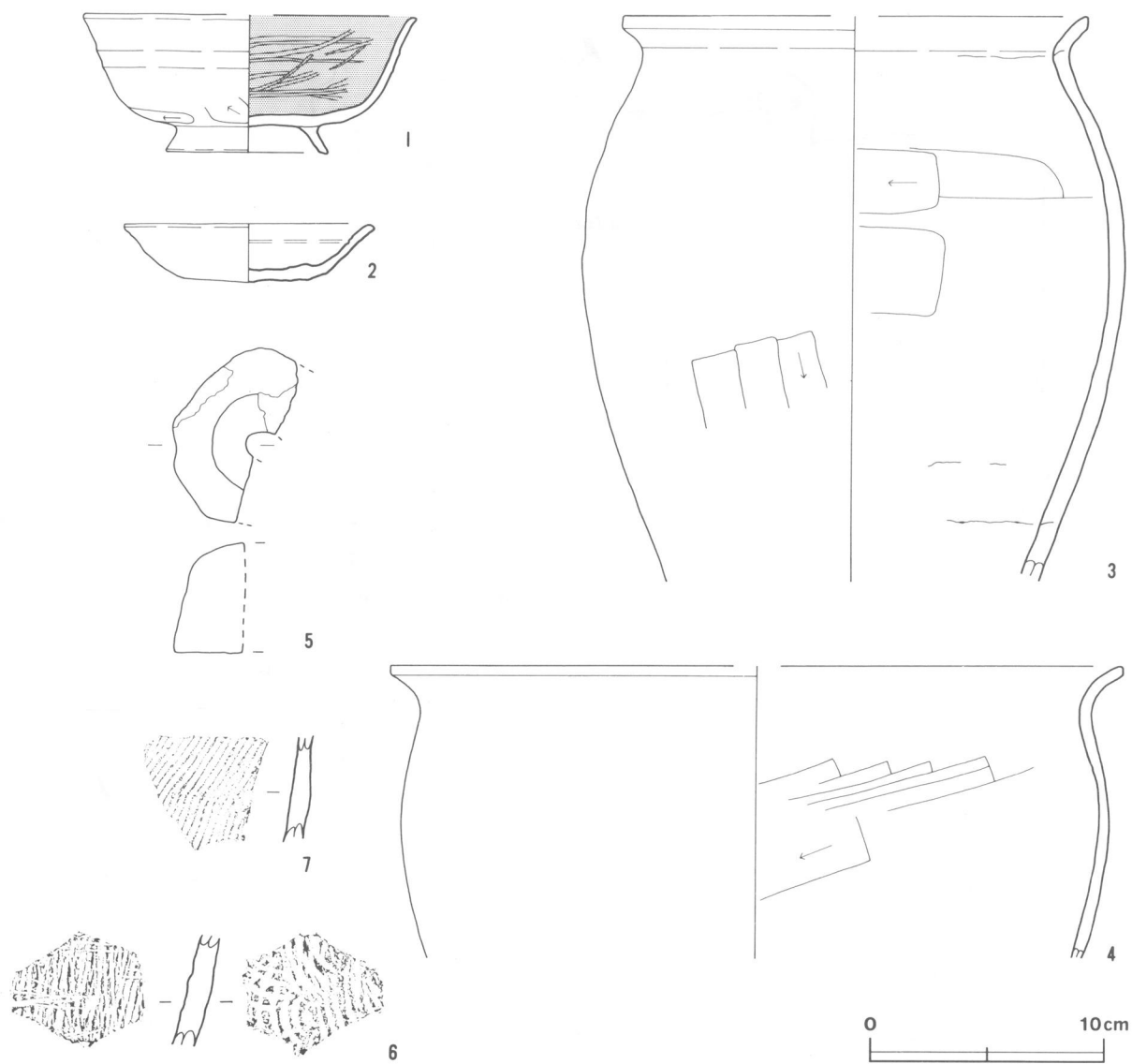
第340図 第245号住居跡実測図

竈1 土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子微量
- 2 黒褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・ローム粒子微量
- 3 極暗褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量
- 4 黒褐色 焼土粒子中量, 炭化粒子少量
- 5 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子微量

竈2 土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子少量, 炭化粒子・ローム粒子微量
- 2 暗褐色 焼土粒子中量, 炭化粒子少量, ローム粒子微量
- 3 暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量
- 4 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量



第341図 第245号住居跡出土遺物実測図

覆土 3層からなり、自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 極暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物 土師器片66点、須恵器片30点、土製品1点、鉄製品1点、礫1点が出土している。1の土師器高台付碗、2の土師器小皿は北東コーナー付近の床面直上から逆位で出土している。3、4の土師器甕は竈右袖部の補強材である。5の土製紡錘車は中央付近の覆土下層から出土している。6は須恵器甕の体部片で、外面には縦位の平行叩きが、内面には同心円当て具痕が施されている。7は須恵器甕の体部片で、外面には縦位の平行叩きが施されている。

所見 本跡の時期は、遺構の形態や出土遺物から平安時代の10世紀以降と考えられる。

第245号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第341図 1	高台付碗 土師器	A[14.0] B 6.4 D 7.0 E 1.1	体部一部欠損。高台はハの字状に開く。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部から体部外面ロクロナデ。体部外面下端手持ちヘラ削り。体部内面ヘラ磨き。高台貼り付け後、ナデ。内面黒色処理。	砂粒・雲母 外面にぶい黄褐色 内面黒色 普通	P1072 50% 北東コーナー付近床直
2	小皿 土師器	A 10.6 B 2.6 C 5.4	体部一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部から体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ切り後、無調整。	砂粒・石英・長石・雲母 雲母 橙色 不良 二次焼成	P1073 80% 北東コーナー付近床直
3	甕 土師器	A[20.0] B(24.3)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り。内面ヘラナデ。輪積み痕がみられる。	石英・長石・雲母・スコリア 橙色 普通 外面煤付着	P1074 40% 袖部補強材
4	甕 土師器	A[31.4] B(12.5)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。内面ヘラナデ。	砂粒・石英・長石・雲母 にぶい橙色 普通	P1075 20% 袖部補強材

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
5	紡錘車	5.1	(3.1)	[0.8]	(44)	中央付近覆土下層	D P1002 40%

第246号住居跡 (第342図)

位置 調査6区南部, N13f区。

規模と平面形 床面の一部と竈を確認しただけで、規模や平面形は明確でないが、長軸[3.80]m、短軸[2.75]mの長方形と推定される。

主軸方向 [N-76°-E]

床 竈の前面がよく踏み固められている。

竈 東壁中央部に付設されている。削平により遺存状況は悪く、規模は長さ(75)cm、袖幅(55)cm、壁外への掘り込みは(50)cmである。火床部は楕円形に5cmほど掘りくぼめられている。火床部は削平され不明である。

竈土層解説

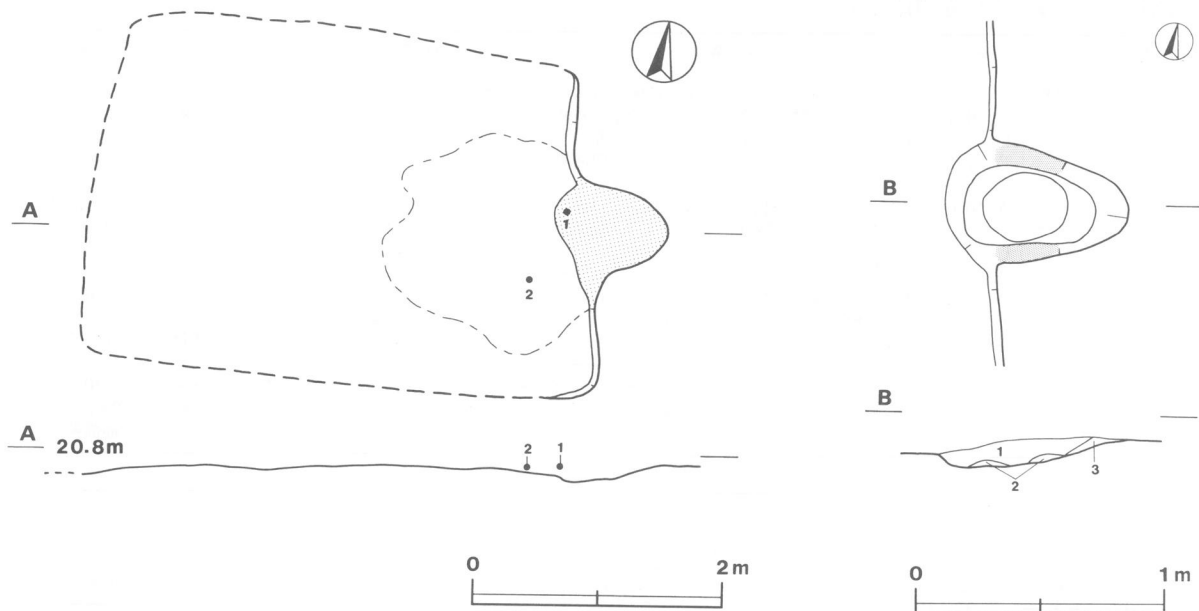
- 1 黒褐色 焼土粒子多量、炭化粒子中量
- 2 極暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子多量、炭化粒子・焼土中ブロック少量
- 3 暗褐色 焼土粒子中量、炭化粒子微量

遺物 土師器片52点、須恵器片4点、縄文土器片1点が出土している。1の土師器高台付坏は竈内から、2の土師器高台付碗は竈付近の覆土下層からそれぞれ出土している。

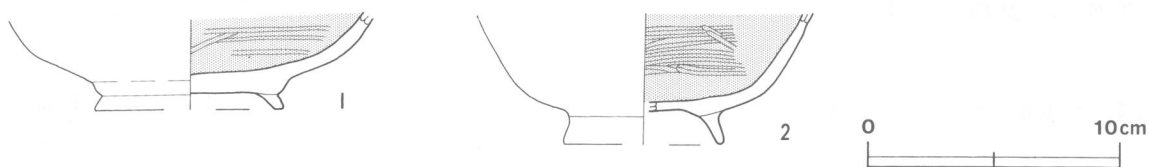
所見 本跡の時期は、出土遺物から平安時代で10世紀以降と考えられる。

第246号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第343図 1	高台付坏 土師器	B(3.6) D[7.4] E 0.6	底部から体部にかけての破片。高台はハの字状に開く。体部は内彎して立ち上がる。	体部外面ロクロナデ。体部内面ヘラ磨き。高台貼り付け後、ナデ。内面黒色処理。	砂粒・石英・長石・雲母 外面にぶい赤褐色 内面黒色 普通 二次焼成	P1076 30% 竈内覆土下層
2	高台付碗 土師器	B(5.2) D[6.4] E 1.1	底部から体部にかけての破片。高台はハの字状に開く。体部は内彎して立ち上がる。	体部外面ロクロナデ。体部内面ヘラ磨き。高台貼り付け後、ナデ。内面黒色処理。	砂粒・長石 外面にぶい黄褐色 内面黒色 普通	P1077 25% 竈付近覆土下層



第342図 第246号住居跡実測図



第343図 第246号住居跡出土遺物実測図

第247号住居跡（第344図）

位置 調査6区南部，N13j0区。

重複関係 第248号住居跡を掘り込んでおり，本跡が新しい。

規模と平面形 長軸3.26m，短軸3.00mの方形である。

主軸方向 N-0°

壁 壁高は43~46cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝 上幅7cm，下幅5cm，深さ7cmで，断面形はU字形である。全周している。

床 ほぼ平坦で，全体に踏み固められている。

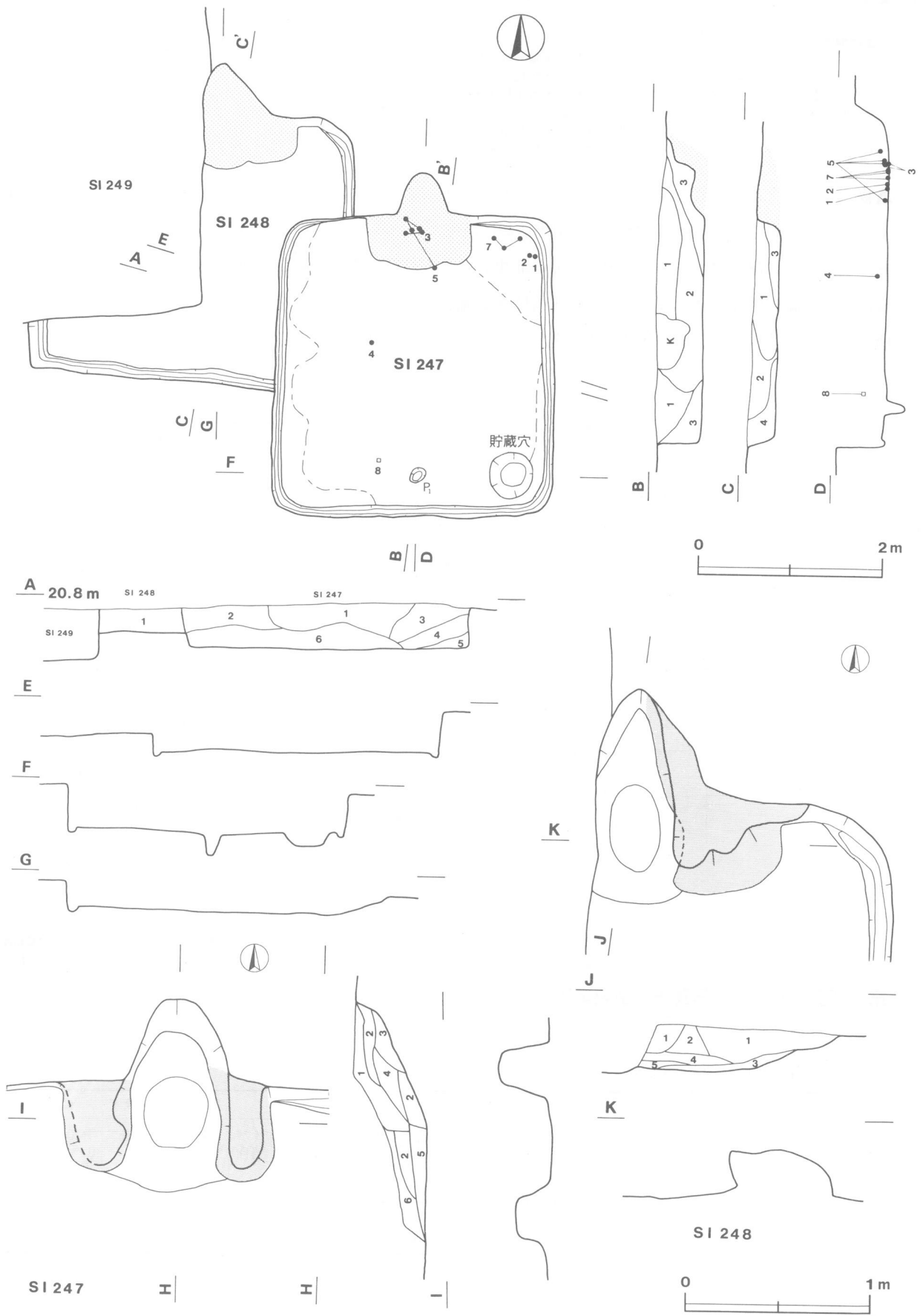
竈 北壁中央部に付設されている。規模は長さ105cm，袖幅115cm，壁外への掘り込みは50cmである。袖部は砂質粘土で構築されている。袖の内壁は，火熱を受けて赤変している。火床部は円形に浅く掘りくぼめられており，煙道部は火床部から外傾して立ち上がる。

竈土層解説

- 1 黒褐色 砂多量，炭化粒子少量
- 2 黒褐色 焼土粒子・砂多量
- 3 極暗褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・砂多量，炭化粒子少量
- 4 極暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・砂多量
- 5 暗赤褐色 炭化物・砂多量，焼土粒子中量
- 6 極暗褐色 砂多量

ピット 1か所(P₁)。P₁は，径15cmの円形で，深さ22cmである。出入り口施設に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴 南東コーナー部に付設されている。径50cmの円形で，深さ15cmである。断面形は皿状である。



第344図 第247・248号住居跡実測図

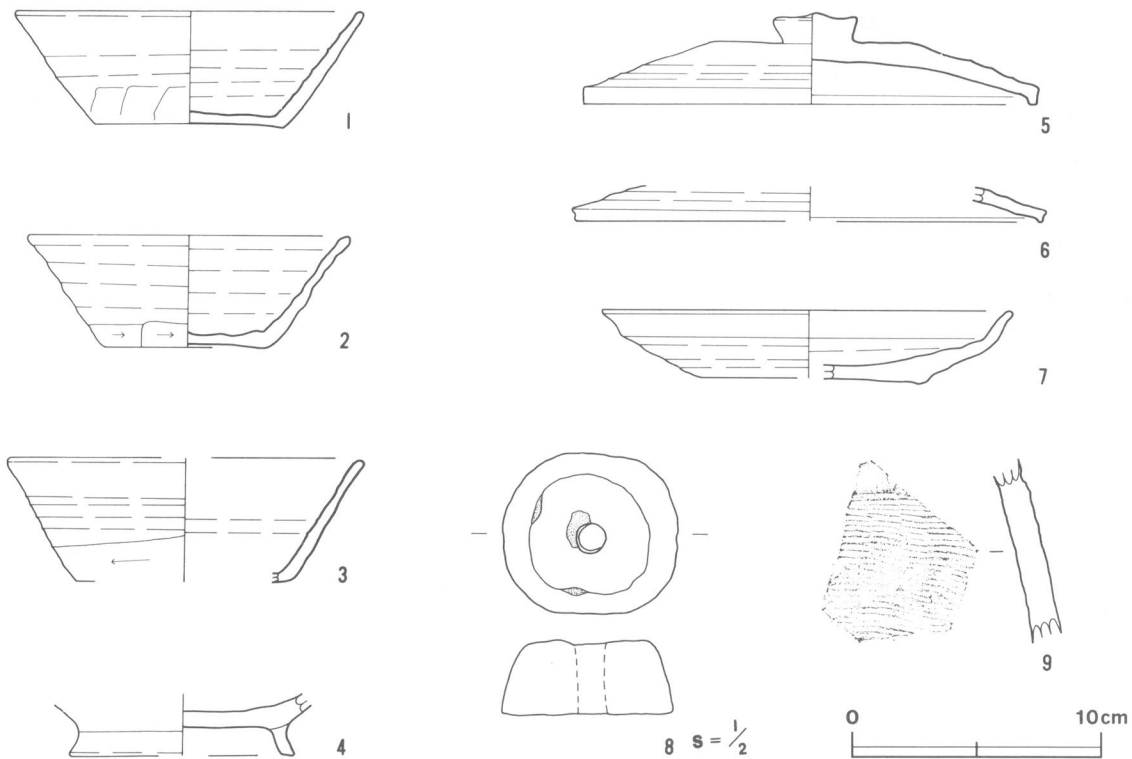
覆土 6層からなり、ロームブロックが多量に含まれ人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量
- 3 黒褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 極暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量, ローム中ブロック・炭化粒子・焼土粒子微量
- 5 極暗褐色 ローム小ブロック・炭化粒子・焼土粒子微量
- 6 極暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量, 炭化物・炭化粒子微量

遺物 土師器片29点, 須恵器片85点, 石製品1点が出土している。1, 2の須恵器坏は北東コーナー付近の覆土下層より逆位で, 3の須恵器坏, 5の須恵器蓋は竈内より, 4の須恵器高台付坏は中央付近の覆土中層より, 6の須恵器蓋は覆土中より, 7の須恵器皿は北東コーナー付近の覆土下層から逆位でそれぞれ出土している。9は須恵器甕の体部片で, 外面に横位の平行叩きが施されている。

所見 本跡の時期は, 遺構の状態や出土遺物から平安時代の9世紀前葉と考えられる。



第345図 第247号住居跡出土遺物実測図

第247号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第345図 1	坏 須恵器	A 14.0 B 4.7 C 7.6	口縁部一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり, 口縁部に至る。	口縁部から体部内・外面ロクロナデ。体部外面下端ヘラ削り。底部一方向のヘラ削り。	砂粒・長石・雲母 暗灰黄色 良好 煤付着	P1079 95% 北東コーナー付近覆土下層
2	坏 須恵器	A 13.0 B 4.5 C 6.1	口縁部一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり, 口縁部に至る。	口縁部から体部内・外面ロクロナデ。体部外面下端手持ちヘラ削り。底部ヘラ削り。	砂粒・石英・長石・雲母 灰色 普通	P1080 90% 北東コーナー付近覆土下層

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第345図 3	坏 須恵器	A [14.2] B 5.0 C [8.6]	体部から口縁部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部から体部内・外面ロクロナデ。体部外面下端手持ちヘラ削り。底部ヘラ削り。	砂粒・長石・雲母 灰黄色 普通	P1081 20% 竈内
4	高台付坏 須恵器	B (2.5) D [9.0] E 1.1	底部片。高台はハの字状に開く。	体部内・外面ロクロナデ。高台貼り付け後、ナデ。	砂粒・長石 灰色 普通	P1082 20% 中央付近覆土中層
5	蓋 須恵器	A 18.3 B 3.6 F 3.4 G 1.1	口縁部一部欠損。扁平な擬宝珠状のつまみが付く。天井部は笠型である。口縁部は短く折り返されている。	天井部回転ヘラ削り。口縁部・体部内面ロクロナデ。	砂粒・長石・雲母・ スコリア にぶい橙色 普通	P1083 70% 竈内
6	蓋 須恵器	A [18.8] B (1.4)	口縁部片。口縁部は短く折り返されている。	口縁部内・外面ロクロナデ。	砂粒・長石 灰色 普通	P1084 20% 覆土中
7	皿 須恵器	A 16.5 B 2.9 C [8.7]	体部一部欠損。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部から体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り。	石英・長石 黄灰色 普通	P1085 50% 北東コー ナー付近覆土下層

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
8	紡錘車	4.3~4.6	2.0	0.8	56	南壁覆土下層	Q1000 凝灰岩 90%

第249号住居跡（第346・347図）

位置 調査6区南部，N13i8区。

重複関係 第248号住居跡を掘り込んでおり，本跡が新しい。

規模と平面形 長軸5.10m，短軸4.98mの方形である。

主軸方向 N - 2° - W

壁 壁高は48~52cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 上幅25~30cm，下幅15~20cm，深さ15cmで，断面形はU字形である。ほぼ全周している。

床 ほぼ平坦で，全体が踏み固められており，出入り口付近には盛り上がり部分がみられる。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は長さ220cm，袖幅140cm，壁外への掘り込みは95cmである。袖部は砂質粘土で構築されている。両袖部内には，補強材として土師器甕が入れてある。火床部は楕円形に浅く掘りくぼめられており，火熱を受けて赤変している。煙道部は火床部から緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

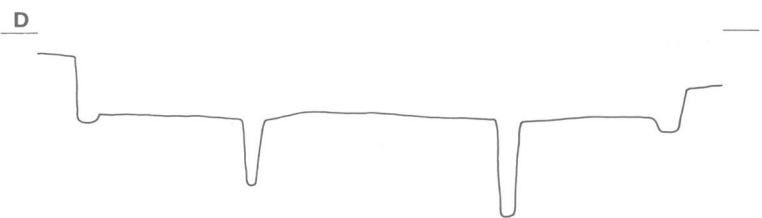
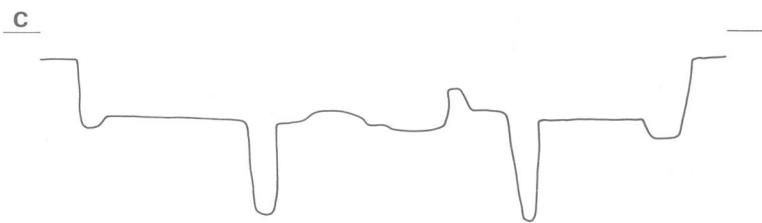
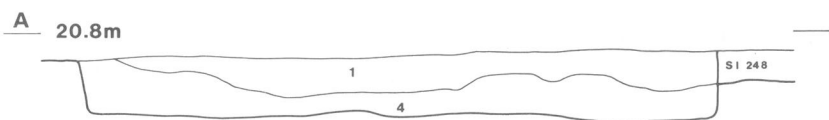
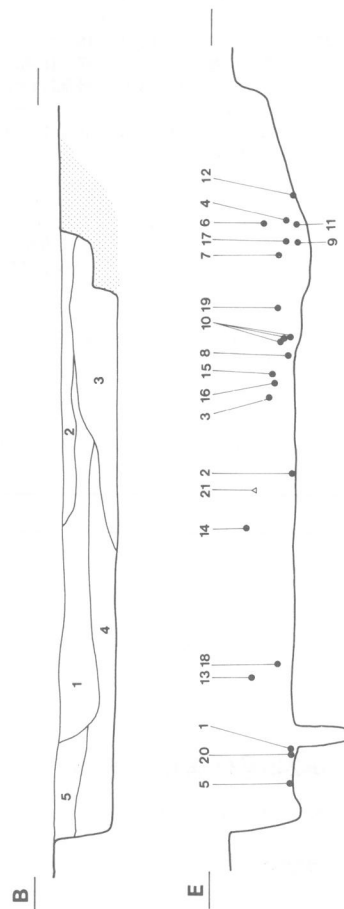
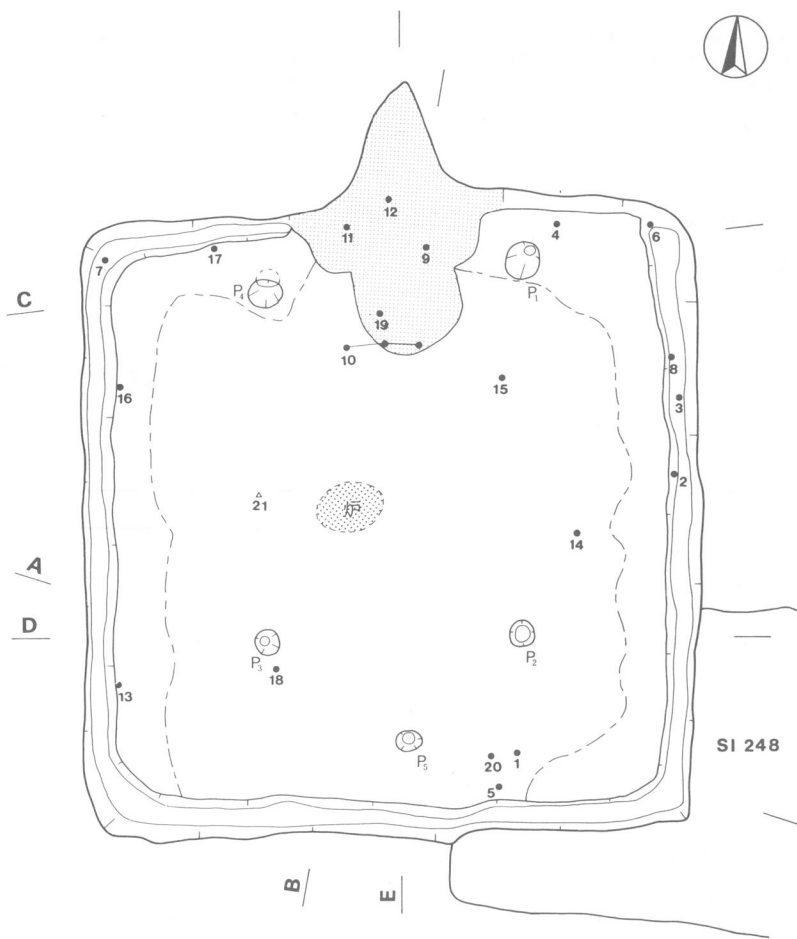
- 1 にぶい赤褐色 焼土粒子中量，焼土中・小ブロック・炭化粒子・ローム粒子少量
- 2 暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子少量
- 3 暗赤褐色 焼土中ブロック中量，焼土粒子・炭化粒子少量
- 4 極暗赤褐色 焼土粒子中量，炭化物少量
- 5 灰黄褐色 炭化粒子・ローム小ブロック少量

ピット 5か所(P₁~P₅)。P₁~P₄は，径20~25cmの円形，深さ53~85cmである。いずれも主柱穴と考えられる。P₅は，径15cmの円形，深さ47cmである。出入り口施設に伴うピットと考えられる。

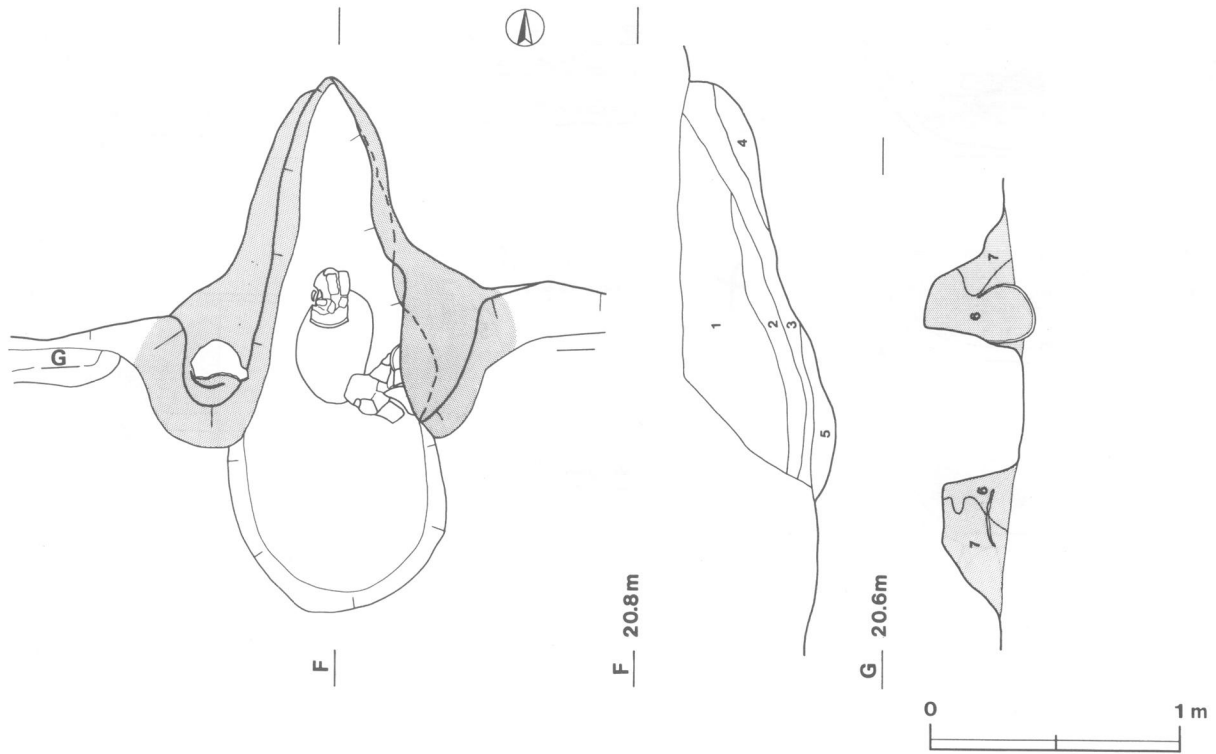
覆土 5層からなり，人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量
- 2 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム中・小ブロック・ローム粒子微量
- 3 極暗褐色 焼土中・小ブロック・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 4 極暗褐色 炭化物・炭化粒子少量，焼土粒子・ローム粒子微量
- 5 極暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子微量



第346图 第249号住居跡实测图



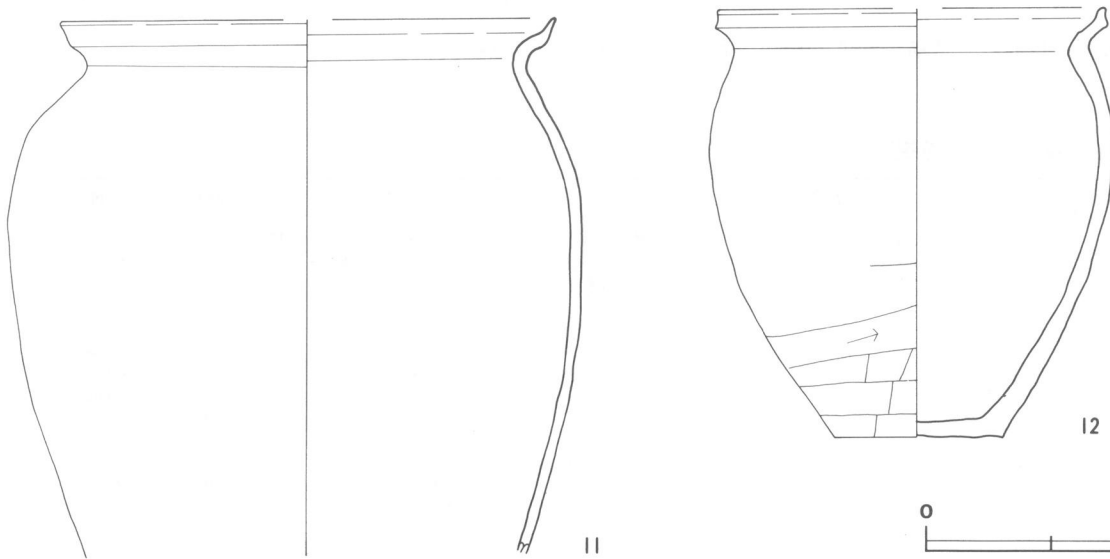
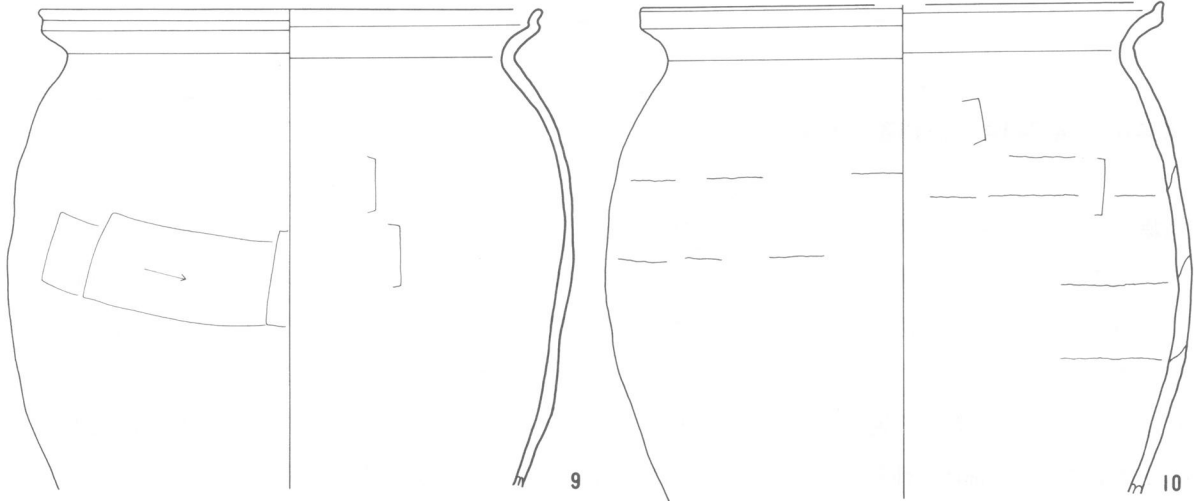
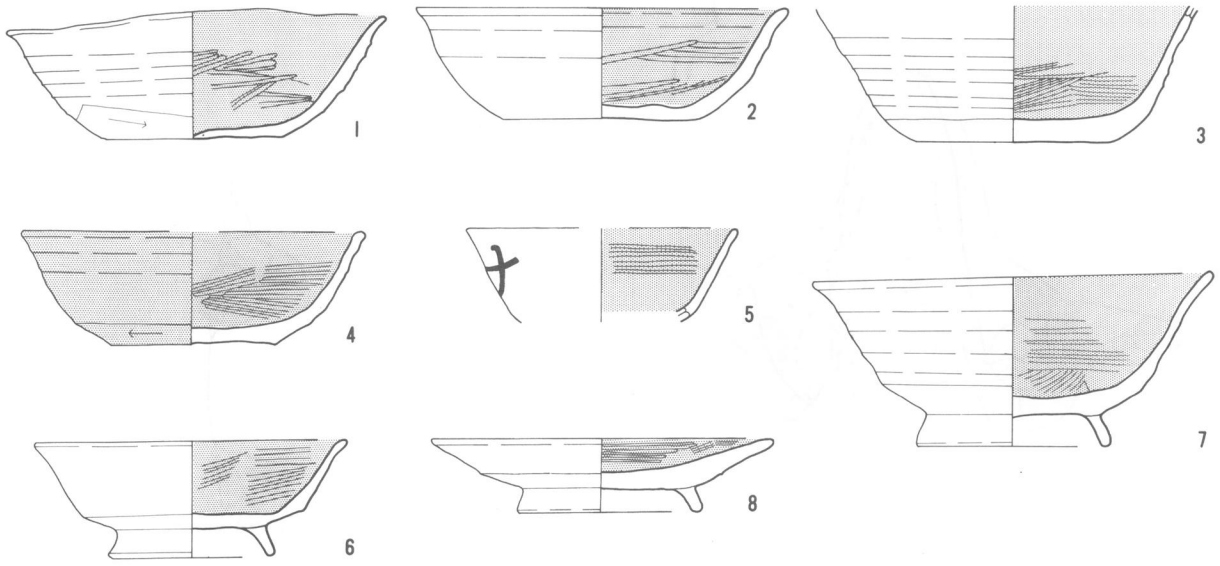
第347図 第249号住居跡竈実測図

遺物 土師器片1694点、須恵器片445点、灰釉陶器1点、土製品1点、鉄製品1点、礫9点が出土している。1の土師器坏は南壁際の覆土下層から逆位で、2の土師器坏は東壁際の覆土下層から正位で、3の土師器坏は東壁際の覆土中層から正位で、4の土師器坏は北壁際の覆土下層から逆位で、6の高台付坏は北東コーナー付近の覆土中層から逆位で、7の土師器高台付椀は北西コーナー付近の覆土下層から逆位で、8の土師器高台付皿は東壁際の覆土下層から逆位でそれぞれ出土している。9の土師器甕は竈右袖部の補強材として逆位で、11の土師器甕は竈左袖部の補強材に用いられていた。12の土師器小形甕は支脚として使用され竈内から逆位で出土している。20の須恵器小形甕が南壁際の覆土下層から正位で出土している。16の灰釉陶器長頸瓶が西壁際覆土中層から出土している。22は須恵器甕の体部片で、外面には横位後、縦位の平行叩きが施されている。

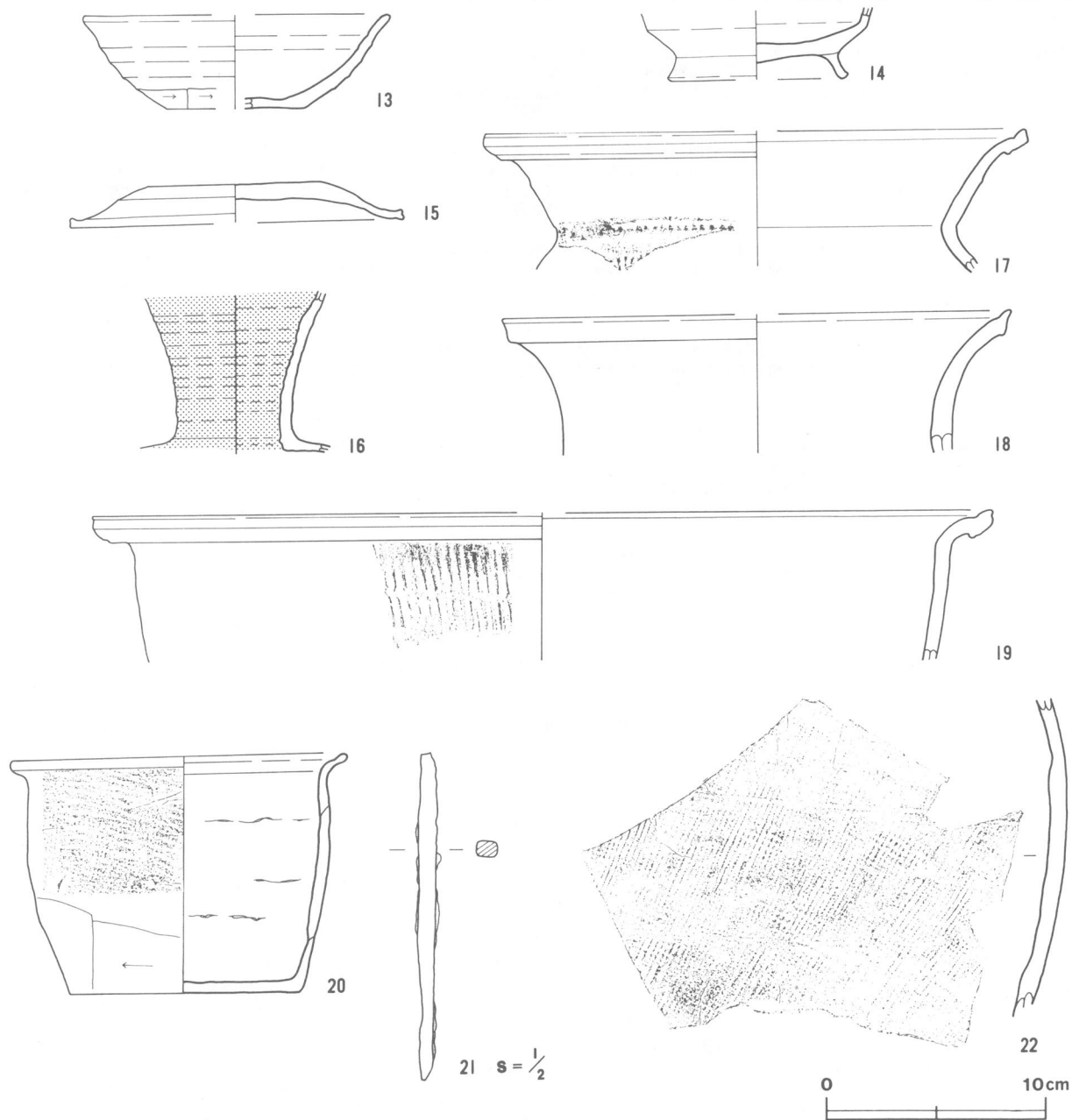
所見 本跡の時期は、遺構の状態や出土遺物から平安時代の9世紀後葉と考えられる。

第249号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第384図 1	坏 土師器	A 15.2 B 5.2 C 7.1	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部から体部外面ロクロナデ。体部外面下端ヘラ削り。内面ヘラ磨き。底部一方向のヘラ削り。内面黒色処理。	砂粒・長石・雲母・スコリア 外面橙色・内面黒色 普通 煤付着	P1086 90% 南壁際覆土下層
2	坏 土師器	A 15.0 B 4.5 C 8.0	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部から体部内・外面ロクロナデ。体部外面下端ナデ。内面ヘラ磨き。底部一方向のヘラ削り。内面黒色処理。	砂粒・長石・雲母・スコリア 外面にぶい橙色・内面黒色 普通 煤付着	P1087 90% 東壁際覆土下層
3	坏 土師器	B (5.2) C 7.6	底部から体部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部外面ロクロナデ。体部外面下端ヘラ削り。内面ヘラ磨き。底部ヘラ削り。内面黒色処理。	砂粒・雲母 外面にぶい橙色・内面黒色 普通	P1088 70% 東壁際覆土中層



第348図 第249号住居跡出土遺物実測図(1)



第349図 第249号住居跡出土遺物実測図(2)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第348図 4	坏 土師器	A [13.6] B 4.5 C 6.4	体部一部欠損。平底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部から体部外面ロクロナデ。体部外面下端回転ヘラ削り。内面ヘラ磨き。底部ヘラ削り。内・外面黒色処理。	砂粒・長石・雲母 黒色 普通	P1089 60% 北壁際覆土下層
5	坏 土師器	A [10.7] B (3.7)	口縁部片。口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部外面ロクロナデ。内面ヘラ磨き。内面黒色処理。体部外面に墨書。	砂粒・長石・雲母 外面にぶい黄橙色 内面黒色 普通	P1090 5% 南壁際覆土下層
6	高台付坏 土師器	A 12.5 B 4.7 D 6.6 E 1.3	高台はハの字状に開く。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部から体部外面ロクロナデ。内面ヘラ磨き。底部高台貼り付け後、ナデ。内面黒色処理。	砂粒・長石・雲母・ スコリア 外面橙色 内面黒色 普通	P1091 100% 北東コーナー 付近覆土中層

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第348図 7	高台付碗 土師器	A 16.0 B 7.0 D 7.6 E 1.3	体部一部欠損。高台は長く、ハの字状に開く。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部から体部外面ロクロナデ。体部下端回転ヘラ削り。内面ヘラ磨き。底部高台貼り付け後、ナデ。内面黒色処理。	砂粒・石英・雲母・スコリア 外面浅黄橙色 内面一部黒色 普通 二次焼成	P1092 80% 北西コーナー付近覆土下層
8	高台付皿 土師器	A 13.6 B 3.1 D 7.3 E 1.2	高台はハの字状に開く。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部から体部外面ロクロナデ。体部下端回転ヘラ削り。内面ヘラ磨き。底部高台貼り付け後、ナデ。内面黒色処理。	砂粒・石英・雲母・スコリア 外面にぶい橙色 内面黒色 普通	P1093 100% 東壁際覆土下層
9	甕 土師器	A 20.0 B (19.1)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。端部は外上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り。内面ヘラナデ。体部磨減。	砂粒・石英・長石・雲母にぶい橙色 普通 二次焼成	P1094 50% 甕右袖補強材
10	甕 土師器	A [20.8] B (19.7)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。端部は上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り。内面ヘラナデ。輪積み痕。	砂粒・石英・長石・雲母にぶい橙色 普通 外面煤付着	P1095 30% 甕左近覆土下層
11	甕 土師器	A [19.9] B (21.6)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、上位に最大径を持つ。口縁部は外反し、端部は外上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り。内面ナデ。	砂粒・石英・雲母にぶい橙色 普通 外面煤付着	P1096 20% 甕左袖補強材
12	小形甕 土師器	A [15.5] B 17.3 C 6.8	体部・口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は外反する。端部は上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り。内面ナデ。外面の磨減が著しい。	砂粒・石英・長石・雲母 橙色 普通 二次焼成	P1097 60% 甕内支脚転用
第349図 13	坏 須恵器	A [13.8] B 4.3 C [6.4]	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	口縁部から体部ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部ヘラ削り。	砂粒・石英・長石・雲母 灰黄褐色 普通 外面煤付着	P1098 20% 西壁際覆土中層
14	高台付坏 須恵器	B (3.2) D [8.0] E 1.1	底部片。高台はハの字状に開く。	体部ロクロナデ。高台貼り付け後、ナデ。	砂粒・石英・長石 灰色 普通	P1099 10% 中央部覆土上層
15	蓋 須恵器	A [15.2] B 1.8	天井部片。天井部は笠型をしている。口縁部は折り返されている。	天井部回転ヘラ削り。内面・口縁部内・外面ロクロナデ。	砂粒・石英・長石 灰色 普通	P1100 30% 甕付近覆土中層
16	長頸瓶 灰釉陶器	B (7.3)	頸部片。頸部は外反しながら立ち上がる。	頸部内・外面ロクロナデ。	砂粒・長石 灰色 良好	P1101 5% 黒笹90号窯式 西壁際覆土中層
17	甕 須恵器	A [25.0] B (6.2)	口縁部片。口縁部は外傾して立ち上がり、口縁部上位に稜を持つ。	口縁部内・外面ロクロナデ。体部外面平行叩き。	砂粒・石英・長石・雲母 黒褐色 普通	P1102 5% 北壁際覆土下層
18	甕 須恵器	A [23.4] B (6.3)	口縁部片。口縁部は外反して立ち上がり、端部はややつまみ上げられている。	口縁部内・外面ロクロナデ。	砂粒・石英・長石 灰色 普通	P1103 5% P3付近覆土下層
19	甕 須恵器	A [41.4] B (6.8)	体部から口縁部にかけての破片。体部は外傾しながら立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面ロクロナデ。体部外面平行叩き。	砂粒・石英・長石・雲母 灰色 普通	P1104 5% 甕付近覆土下層
20	小形甕 須恵器	A 15.2 B 10.9 C 10.4	体部一部欠損。平底。体部は外傾気味に立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面ロクロナデ。体部外面ヘラ削り。内面ナデ。輪積み痕。	砂粒・石英・長石・雲母 灰黄色 普通	P1105 70% 南壁際覆土下層

図版番号	種別	計 測 値				出 土 地 点	備 考
		長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
21	釘	(10.0)	0.7	0.5	(10)	中央覆土下層	M1006 70%

第251号住居跡（第139図）

位置 調査6区南西部，N13h9区。

重複関係 第250号住居跡を掘り込んでおり，本跡が新しい。

規模と平面形 長軸3.88m，短軸3.88mの方形である。

主軸方向 N-5°-E

壁 壁高は40～43cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝 上幅8～12cm，下幅5～7cm，深さ6cmで，断面形はU字形である。全周している。

床 ほぼ平坦で，全体的によく踏み固められている。

竈 北壁中央部に付設されている。袖部の遺存状況は悪く，規模は長さ115cm，袖幅[90]cm，壁外への掘り込みは30cmほどである。袖部は砂質粘土で構築されている。火床部は楕円形状に浅く掘りくぼめられ，煙道部は火床部から緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

- 1 極暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量，焼土小ブロック・ローム小ブロック微量
- 2 極暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック少量
- 3 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量，焼土小ブロック・炭化物微量
- 4 極暗褐色 ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子微量
- 5 暗褐色 炭化粒子中量，焼土粒子・ローム粒子微量
- 6 極暗褐色 炭化粒子中量，焼土粒子・炭化物・ローム粒子少量

ピット 5か所（P₁～P₅）。P₁～P₄は，径35～50cmほどの円形，深さ38～48cmで，いずれも支柱穴と考えられる。P₅は，径30cmの円形，深さ33cmである。出入口口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 7層からなり，自然堆積である。

土層解説

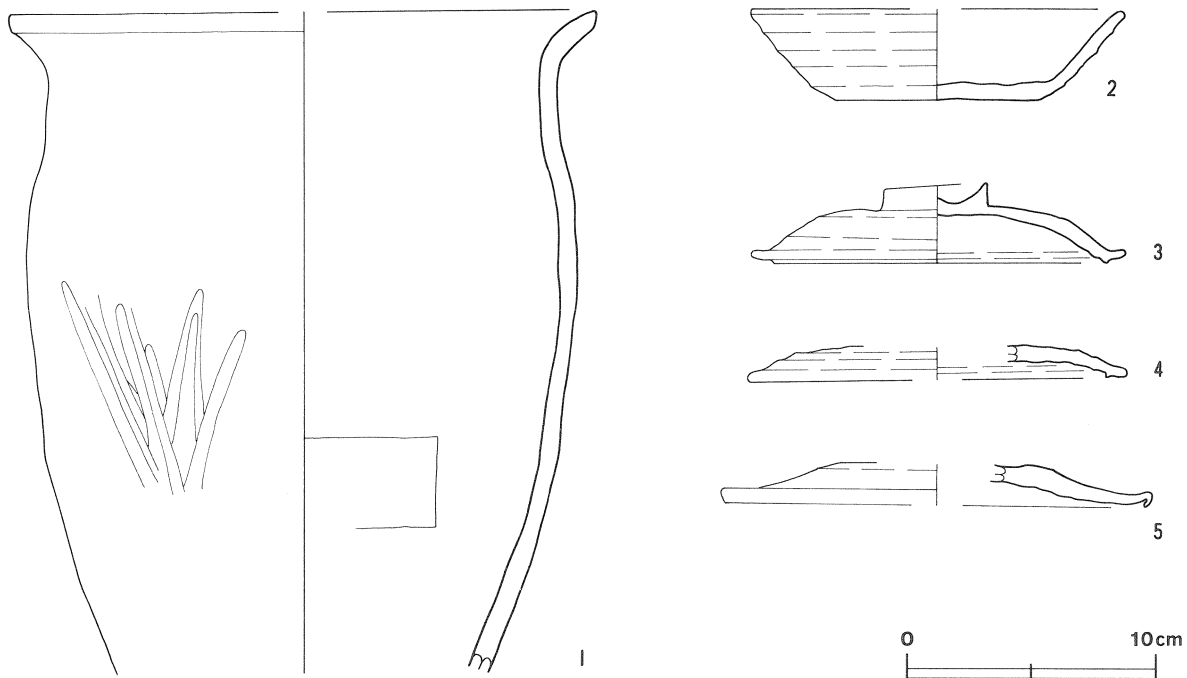
- 1 極暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土小ブロック・炭化物微量
- 2 黒褐色 ローム粒子中量，焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・ローム小ブロック微量
- 3 極暗褐色 ローム粒子中量，炭化粒子・焼土粒子・ローム小ブロック少量
- 4 極暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量，炭化粒子・焼土粒子微量
- 5 極暗褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 6 暗褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子少量，焼土小ブロック・焼土粒子微量
- 7 極暗褐色 ローム粒子少量，焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物微量

第251号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第350図 1	甌 土師器	A[23.6] B(26.6)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ磨き。内面へラナデ。	砂粒・石英・長石・雲母 にぶい橙色 普通 外面煤付着	P1108 30% 竈左袖部覆土下層
2	坏 須恵器	A[14.6] B 3.6 C[8.0]	底部から口縁部の破片。体部は外傾して立ち上がり，口縁部に至る。	口縁部から体部内・外面ロクロナデ。底部回転へラ切り。	砂粒・長石・雲母 灰色 普通	P1109 20% 竈内
3	蓋 須恵器	A 14.9 B 3.2 F 4.1 G 0.9	ボタン状のつまみが付く。天井部は皿形をしている。口縁部内面に短いかえりが付く。	天井部回転へラ削り。口縁部内・外面ロクロナデ。体部内面ロクロナデ。	砂粒・石英・長石・雲母 黄灰色 普通	P1110 100% 北東コーナー付近覆土下層
4	蓋 須恵器	A[15.0] B(1.4)	口縁部から天井部にかけての破片。天井部は皿形をしている。口縁部内面に短いかえりが付く。	天井部回転へラ削り。口縁部ロクロナデ。体部内面ロクロナデ。	砂粒・長石・雲母 灰色 普通	P1111 60% 覆土中
5	蓋 須恵器	A[17.0] B(1.6)	口縁部片。天井部は笠形をしている。口縁部は短く折り返されている。	天井部内・外面ロクロナデ。口縁部内・外面ロクロナデ。	砂粒・長石・雲母・スコリア 灰黄色 普通	P1112 30% 覆土中

遺物 土師器片225点、須恵器片7点が出土している。1の土師器甕は竈左袖部付近の覆土下層から、2の須恵器杯は竈内から、3の須恵器蓋は北東コーナー付近の覆土下層から逆位で、4、5の須恵器蓋は覆土中からそれぞれ出土している。

所見 本跡の時期は、遺構の状態や出土遺物から奈良時代の8世紀前葉と考えられる。



第350図 第251号住居跡出土遺物実測図

第252号住居跡（第351図）

位置 調査6区南部，O13b₀区。

規模と平面形 長軸3.54m，短軸[2.58]mの長方形と推定される。

主軸方向 N-86°-E

壁 壁高は8～22cmで，外傾して立ち上がる。

床 全体的に平坦で，中央部がよく踏み固められている。

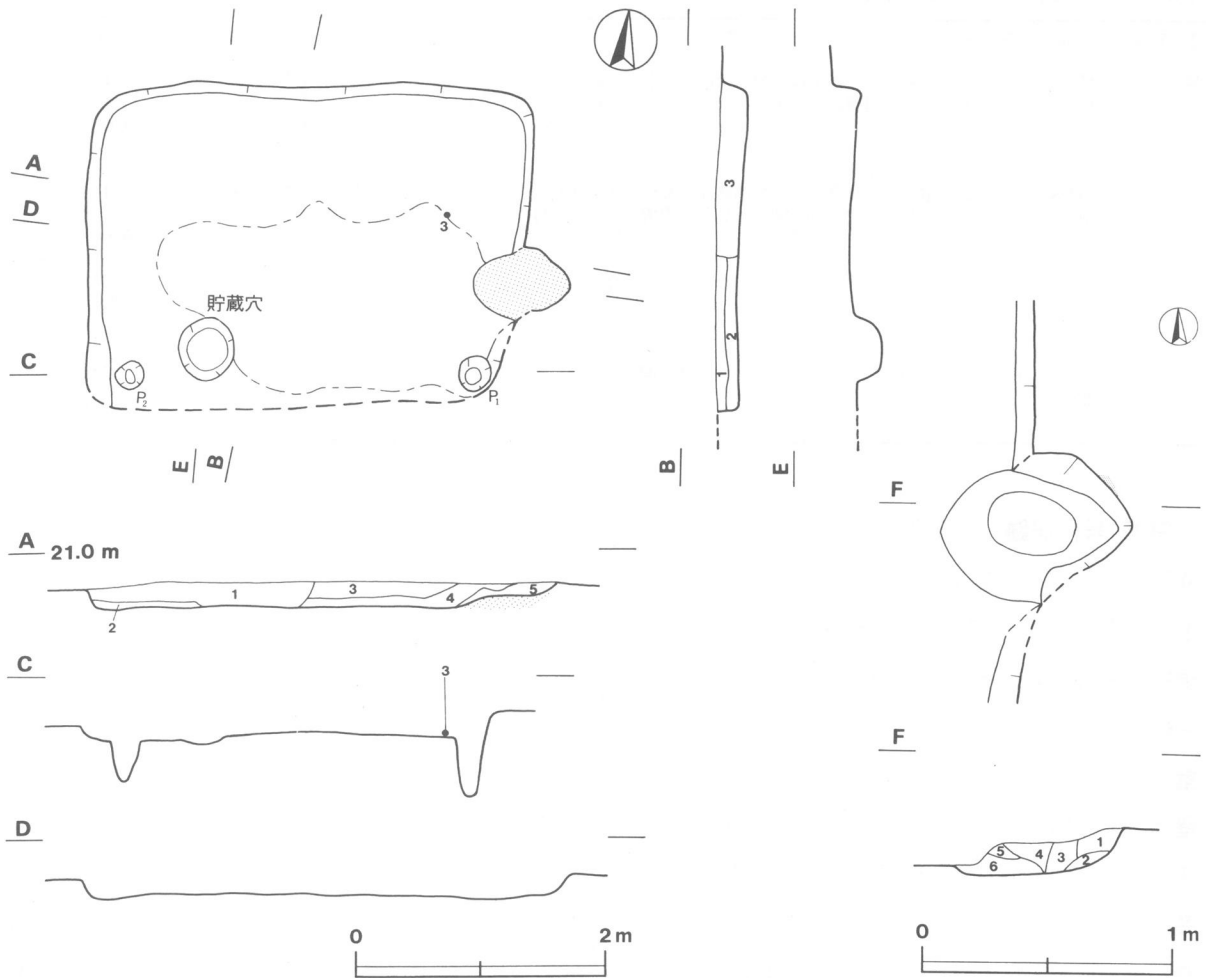
竈 東壁中央部に付設されている。袖部の遺存状況は悪く，規模は長さ90cm，袖幅[55]cm，壁外への掘り込みは35cmである。火床部は5cmほど掘りくぼめられ，煙道部は火床部から緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

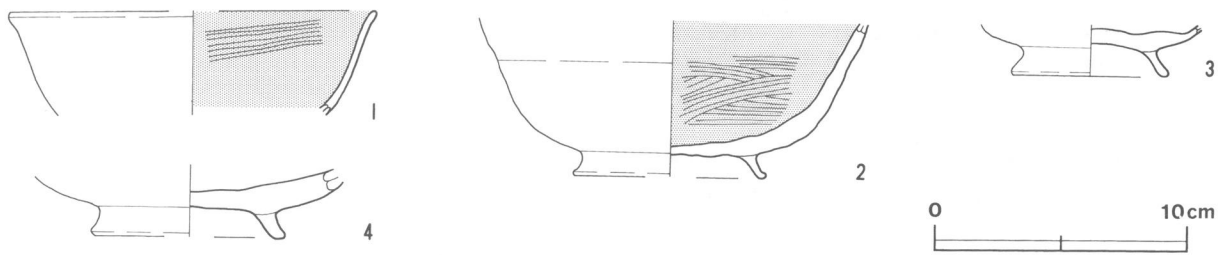
- 1 極暗褐色 ローム粒子・焼土粒子中量
- 2 極暗赤褐色 焼土小ブロック中量
- 3 極暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量
- 4 暗赤褐色 ローム粒子少量，炭化粒子微量
- 5 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子少量
- 6 極暗赤褐色 ローム粒子少量，ローム中ブロック微量

ピット 2か所(P₁，P₂)。P₁，P₂は，径25～30cmの円形，深さ33～47cmで支柱穴と考えられる。

貯蔵穴 南西コーナー部に付設されている。長径50cm，短径45cmの楕円形で，深さ22cmである。断面形は皿状をしている。



第351図 第252号住居跡実測図



第352図 第252号住居跡出土遺物実測図

覆土 5層からなり、人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子微量
- 3 黒褐色 ローム小ブロック少量, ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 5 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子少量

遺物 土師器片228点, 須恵器片22点が出土している。3の土師器高台付坏は竈付近の覆土下層から, 1の土師器坏, 2の土師器高台付碗, 4の高台付坏は覆土中からそれぞれ出土している。

所見 本跡の時期は, 遺構の形態や出土遺物から平安時代の10世紀以降と考えられる。

第252号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第352図 1	坏土師器	A[14.4] B(4.1)	口縁部片。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部外面ロクロナデ。体部内面へラ磨き。内面黒色処理。	砂粒・石英・長石・雲母 外面にぶい黄橙色・内面黒色 普通	P1113 10% 覆土中
2	高台付碗土師器	B(6.2) D[7.2] E 1.0	底部から体部にかけての破片。高台は短くハの字状に開く。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部外面ロクロナデ。内面へラ磨き。高台貼り付け後、ナデ。内面黒色処理。	砂粒・長石・雲母 外面にぶい黄褐色 内面黒色 普通	P1114 20% 覆土中
3	高台付坏土師器	B(1.9) D 6.0 E 1.0	底部片。高台は短く、ハの字状に開く。	高台貼り付け後、ナデ。	砂粒・石英・長石・雲母 にぶい黄褐色 普通	P1115 10% 竈付近覆土下層
4	高台付坏土師器	B(2.8) D[7.2] E 1.1	底部片。高台は短く、ハの字状に開く。	高台貼り付け後、ナデ。	砂粒・石英・長石・雲母 にぶい黄褐色 普通	P1116 5% 覆土中

第254号住居跡（第353図）

位置 調査6区南西部，N13js区。

重複関係 第253・255号住居跡を掘り込んでおり，本跡が新しい。

規模と平面形 長軸3.68m，短軸3.50mの方形である。

主軸方向 N-5°-E

壁 壁高は38～46cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 上幅15cm，下幅10cm，深さ7cmで，断面形はU字形である。全周している。

床 全体的に平坦で，中央部がよく踏み固められている。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は長さ120cm，袖幅130cm，壁外への掘り込みは35cmである。袖部は砂質粘土で構築されている。火床部は円形状に浅く掘りくぼめられ，煙道部は火床部から緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

- 1 褐 色 ローム粒子中量，焼土粒子少量
- 2 暗赤褐色 焼土粒子多量，炭化粒子・ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量
- 4 黒褐色 ローム粒子中量，炭化粒子・焼土粒子少量
- 5 暗褐色 ローム小ブロック中量，焼土小ブロック・炭化粒子少量
- 6 灰褐色 ローム粒子中量
- 7 暗赤褐色 焼土粒子・炭化物・ローム中ブロック少量
- 8 にぶい赤褐色 焼土粒子中量，炭化粒子微量
- 9 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム中ブロック・ローム粒子少量

ピット 1か所(P₁)。P₁は，径25cmの円形，深さ10cmで，出入り口施設に伴うピットと考えられる。

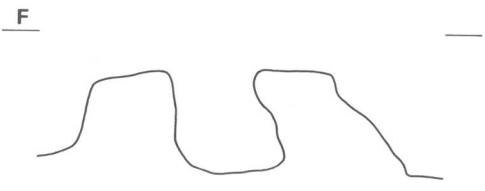
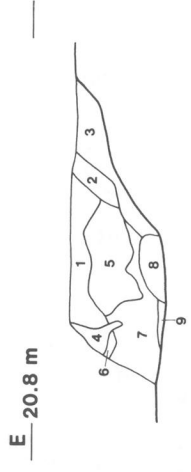
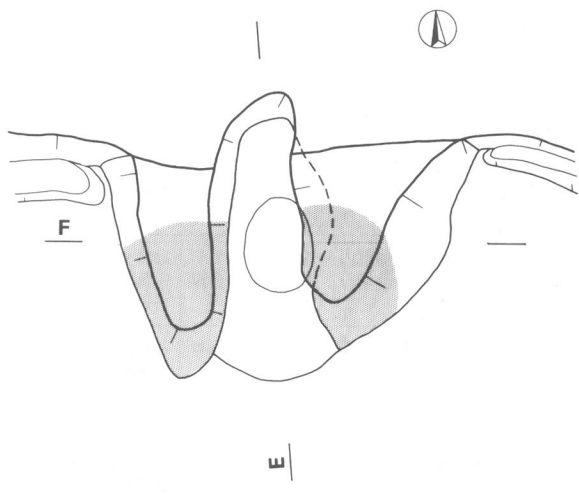
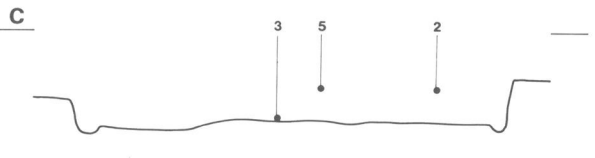
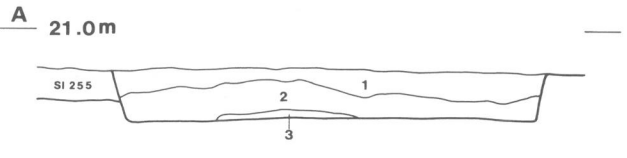
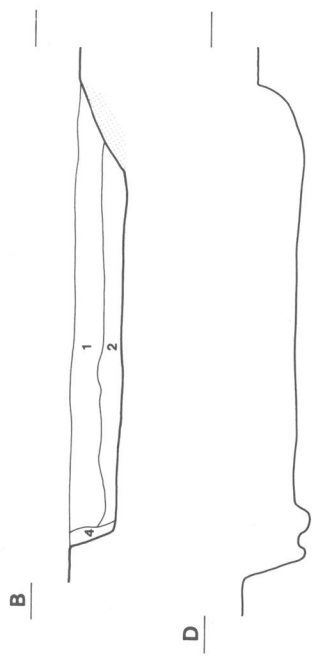
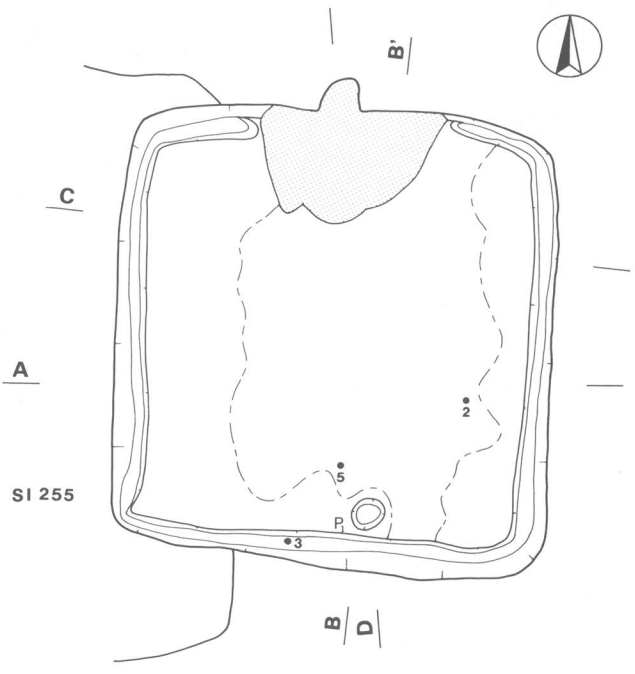
覆土 4層からなり，人為堆積である。

土層解説

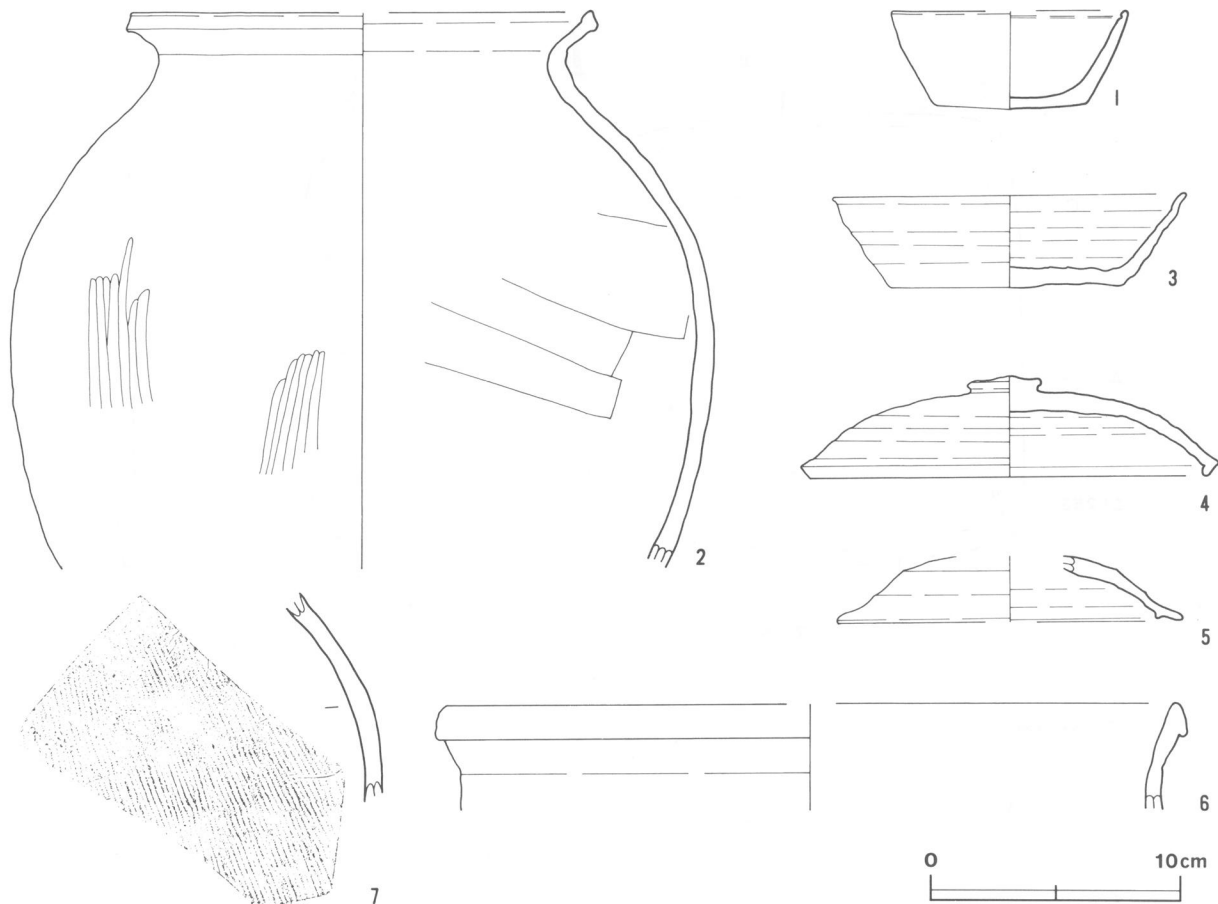
- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子微量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化物・焼土粒子微量
- 3 極暗褐色 ローム粒子少量，炭化粒子・焼土粒子微量
- 4 黒褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

遺物 土師器片567点，須恵器片80点が出土している。1の土師器坏は覆土中から，2の土師器甕は東壁際の覆土下層から，3の須恵器坏は南壁際床面直上から横位で，4の須恵器蓋は覆土中からそれぞれ出土している。7は須恵器甕の体部片で，外面には縦位の平行叩きが施されている。

所見 本跡の時期は，遺構の形態や出土遺物から奈良時代の8世紀前葉と考えられる。



第353图 第254号住居跡実測図



第354図 第254号住居跡出土遺物実測図

第254号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第354図 1	坏 土師器	A [9.4] B 4.0 C 6.2	体部一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。口縁部内面には沈線が巡る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナデ。底部ヘラナデ。	砂粒・石英・長石・雲母 橙色 良好	P1122 80% 覆土中
2	甕 土師器	A [18.4] B (22.5)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。端部は上方につまみあげられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ磨き。内面ヘラナデ。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	P1118 20% 東壁際覆土下層
3	坏 須恵器	A 14.2 B 3.8 C 9.3	口縁部一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部から体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ切り。内・外面に火襷。	砂粒・長石・雲母 灰黄褐色 普通	P1119 80% 南壁際床直
4	蓋 須恵器	A 15.8 B 4.1 F 2.9 G 0.7	口縁部一部欠損。擬宝珠のつまみが付く。天井部は皿形をしている。口縁部は短く折り返されている。	天井部回転ヘラ削り。口縁部内面ロクロナデ。	砂粒・長石 灰黄褐色 良好	P1125 75% 覆土中
5	蓋 須恵器	A [14.0] B (2.6)	口縁部片。天井部は笠形をしている。口縁部内面に短いかえりが付く。	口縁部・内面ロクロナデ。	砂粒・長石・雲母 灰黄褐色 普通	P1120 10% P1付近覆土中層
6	甕 須恵器	A [29.5] B (4.3)	口縁部片。口縁部は外反する。口縁部断面は三角形を呈している。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・雲母 灰黄色 普通	P1121 5% 覆土中

第257号住居跡（第355図）

位置 調査6区南西部，N13i7区。

重複関係 第258号住居跡の上部に構築されており，本跡が新しい。

規模と平面形 本跡の西部は調査区域外に延びており，東西軸(1.50)m，南北軸(2.50)mで，平面形は不明である。

主軸方向 [N-90°-E]

壁 壁高は13cmで，外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦で，竈前面がよく踏み固められている。

竈 東壁中央部に付設されている。規模は長さ105cm，袖幅90cm，壁外への掘り込みは65cmである。袖部は砂質粘土で構築されている。火床部は円形に浅く掘りくぼめられ，煙道部は火床部から緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子微量
- 2 黒褐色 焼土小ブロック・炭化粒子・ローム粒子微量
- 3 極暗褐色 焼土粒子・ローム粒子少量，炭化粒子微量
- 4 極暗褐色 焼土小ブロック中量，焼土粒子・ローム粒子少量
- 5 黒褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量
- 6 黒褐色 炭化粒子・焼土粒子・ローム粒子少量

覆土 3層からなり，自然堆積である。

土層解説

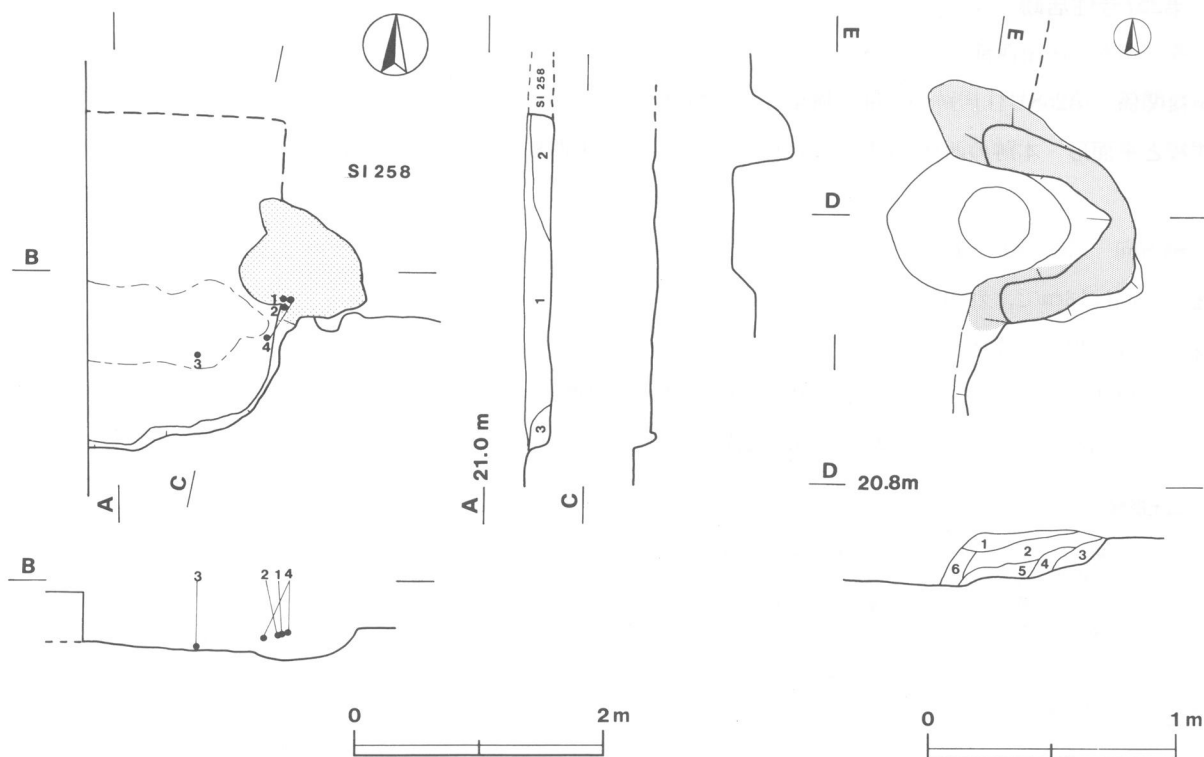
- 1 黒褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック微量
- 2 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量
- 3 極暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子微量

遺物 土師器片103点，須恵器片17点が出土している。1の土師器坏，2の土師器高台付碗は竈内から横位で，3の土師器高台付碗は竈付近の床面直上から正位で，4の土師器高台付碗は竈付近の覆土中層から，5の土師器小皿は覆土中からそれぞれ出土している。

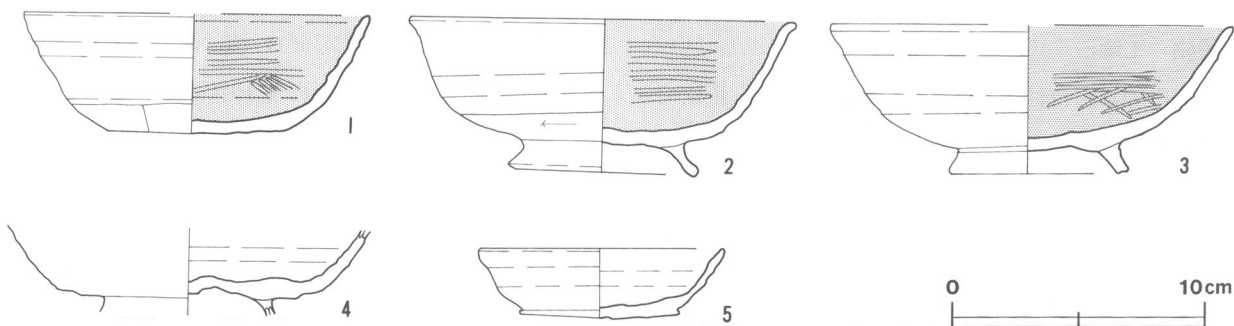
所見 本跡の時期は，遺構の形態や出土遺物から平安時代の10世紀以降と考えられる。

第257号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第356図 1	坏 土師器	A [13.7] B 4.7 C 7.1	体部一部欠損。平底。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部に至る。	口縁部から体部外面ロクロナデ。体部下端手持ちへら削り。内面へら磨き。底部回転へら切り後，ナデ。内面黒色処理。	砂粒・石英・長石・雲母・スコリア 外面橙色・内面黒色普通	P1129 60% 竈内
2	高台付碗 土師器	A 15.2 B 6.2 D 7.2 E 1.4	口縁部一部欠損。高台はハの字状に開く。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。	口縁部から体部外面ロクロナデ。体部下端回転へら削り。内面へら磨き。高台貼り付け後，ナデ。内面黒色処理。	砂粒・石英・長石・雲母 外面橙色・内面黒色普通	P1130 90% 竈内
3	高台付碗 土師器	A [16.0] B 5.9 D 7.0 E 1.2	体部一部欠損。高台は短く，ハの字状に開く。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部に至る。	口縁部から体部外面ロクロナデ。体部内面へら磨き。高台貼り付け後，ナデ。内面黒色処理。	砂粒・長石・スコリア 外面橙色・内面黒色普通	P1131 60% 竈付近床直
4	高台付碗 土師器	B (3.5)	底部片。高台はハの字状に開く。	高台貼り付け後，ナデ。	砂粒・石英・長石・雲母・スコリア にぶい橙色 不良	P1132 30% 竈付近覆土中層
5	小皿 土師器	A 9.6 B 2.8 C 6.1	平底。体部は外傾しながら立ち上がり，口縁部に至る。	口縁部から体部内・外面ロクロナデ。底部回転へら切り後，無調整。	砂粒・スコリア 橙色普通	P1133 100% 覆土中



第355図 第257号住居跡実測図



第356図 第257号住居跡出土遺物実測図

第258号住居跡 (第357図)

位置 調査6区南西部, N13h7区。

重複関係 第257号住居跡が上部に構築されており, また第184号土坑に掘り込まれているので, 本跡が古い。

規模と平面形 本跡の西部は調査区域外に延びているが, 長軸5.02m, 短軸[4.30]mで, 平面形は方形と推定される。

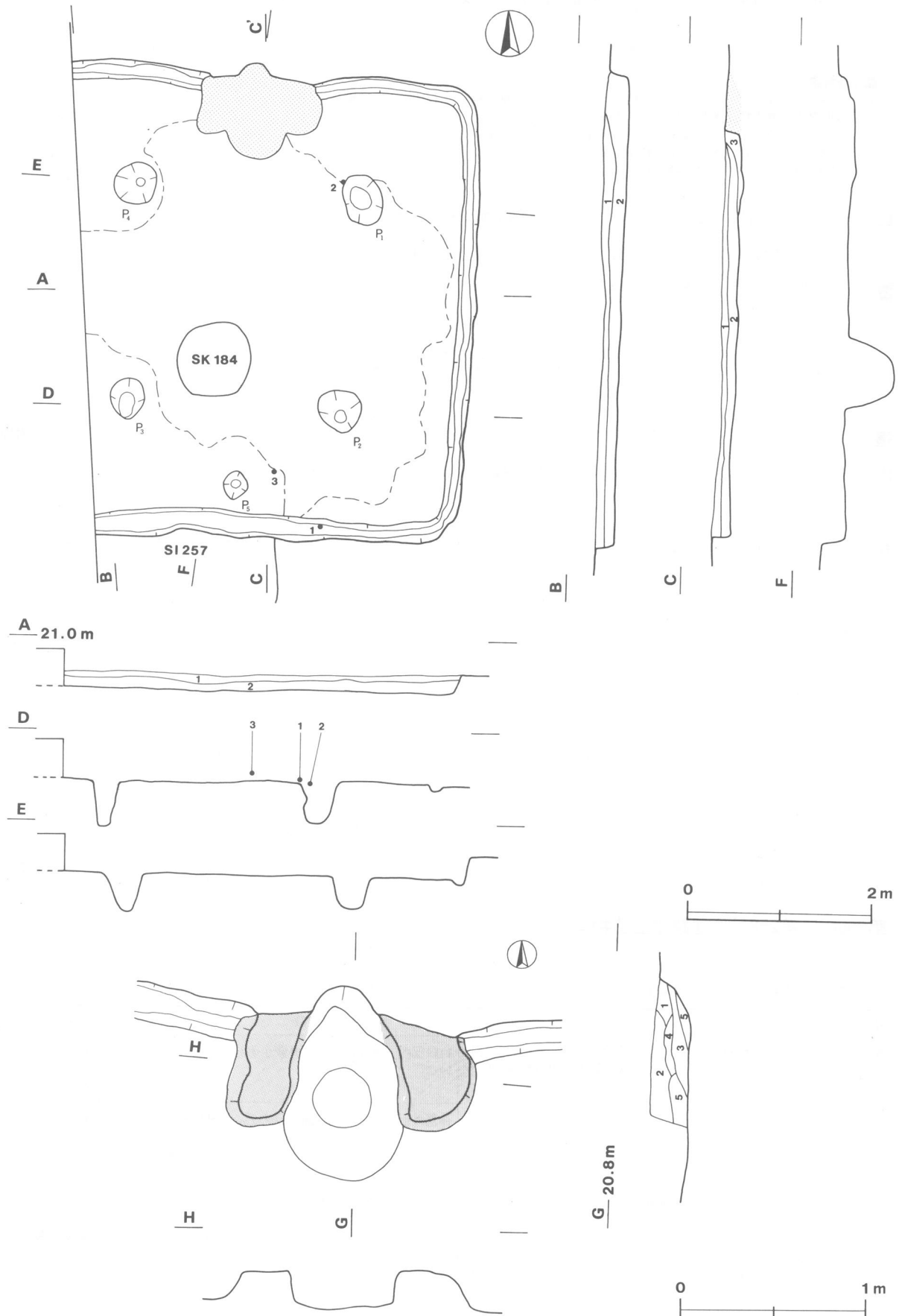
主軸方向 N-5°-E

壁 壁高は16~25cmで, 外傾して立ち上がる。

壁溝 調査区域外が不明であるほかは, 全周している。上幅12cm, 下幅10cm, 深さ6cmで, 断面形はU字形である。

床 ほぼ平坦で, 全体的によく踏み固められており, 中央部に凹凸がみられる。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は長さ105cm, 袖幅130cm, 壁外への掘り込みは10cmほどである。袖部



第357图 第258号住居跡実測図

は、砂質粘土で構築されている。火床部は円形状に浅く掘りくぼめられ、煙道部は火床部から緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

- 1 黒褐色 焼土小ブロック・炭化粒子・ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
- 2 暗赤褐色 焼土粒子多量、炭化粒子中量
- 3 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子多量、炭化粒子中量
- 4 暗褐色 焼土粒子多量、炭化粒子少量
- 5 黒褐色 炭化粒子中量、焼土粒子少量

ピット 5か所(P₁～P₅)。P₁～P₄は、径45cmほどの円形、深さ34～51cmで、いずれも支柱穴と考えられる。P₅は、径25cmの円形、深さ31cmで、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

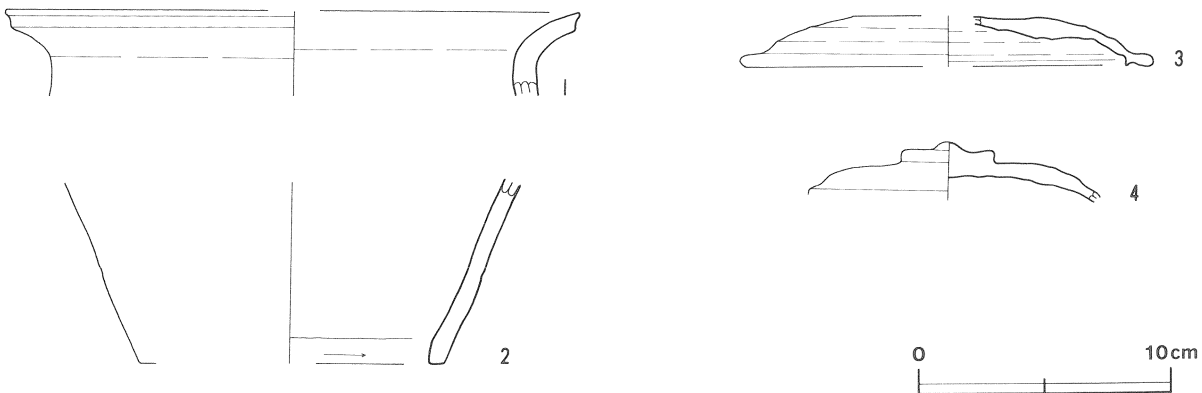
覆土 3層からなり、自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子微量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化物・炭化粒子・焼土粒子微量
- 3 極暗褐色 ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子少量

遺物 土師器片293点、須恵器片12点、不明鉄製品2点が出土している。1の土師器甕、3の須恵器蓋は南壁際の覆土下層から、2の土師器甕はP₁付近の覆土下層から、4の須恵器蓋は覆土中からそれぞれ出土している。

所見 本跡の時期は、遺構の形態や出土遺物から奈良時代の8世紀前葉と考えられる。



第358図 第258号住居跡出土遺物実測図

第258号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第358図 1	甕 土師器	A[22.6] B(3.3)	口縁部片。口縁部は外反して立ち上がり、口縁部上位に明瞭な稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。磨滅が著しい。	砂粒・石英・長石・雲母 灰褐色 普通	P1134 5% 南壁際覆土下層
2	甕 土師器	B(7.1) C[12.0]	体部下位の破片。体部は外傾して立ち上がる。単孔式。	体部外面ヘラ削り。内面ヘラナデ。	砂粒・石英・長石・雲母・スコリアにふい黄橙色 普通 煤付着	P1135 10% P ₁ 付近覆土下層
3	蓋 須恵器	A[16.0] B(2.0)	天井部片。天井部は笠形をしている。口縁部内面に短いかえりが付く。	天井部外面回転ヘラ削り。口縁部内・外面ロクロナデ。	砂粒・雲母・スコリア 灰白色 良好	P1136 30% 南壁際覆土下層
4	蓋 須恵器	B(2.4) F 3.6 G 0.8	口縁部欠損。擬宝珠状のつまみが付く。	天井部外面回転ヘラ削り。内面ロクロナデ。	砂粒・石英・長石・雲母 灰白色 普通	P1137 50% 覆土中

第261号住居跡（第147・148図）

位置 調査6区中央部，M14f8区。

重複関係 第260号住居跡を掘り込んでおり，本跡が新しい。また本跡の上部に第262号住居跡，第14号溝が構築されており，本跡が古い。

規模と平面形 長軸5.21m，短軸5.10mの方形である。

主軸方向 N-11°-E

壁 壁高は30～50cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝 上幅15～20cm，下幅10～20cm，深さ10cmで，断面形はU字形である。全周している。

床 全体的に平坦で，中央部がよく踏み固められており，出入り口付近に盛り上がりが見られる。

竈 北壁中央部に付設されている。遺存状況が良好で，煙道部を確認した。規模は長さ96cm，袖幅110cm，壁外への掘り込みは15cmである。袖部は砂質粘土で構築されている。火床部は円形に浅く掘りくぼめられ，煙道部は火床部から外傾して立ち上がり，途中から緩やかな角度に変わる。

竈土層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子微量
- 2 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量，焼土小ブロック微量
- 3 暗赤褐色 焼土粒子多量，炭化粒子・ローム粒子少量
- 4 褐色 ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子微量
- 5 暗赤褐色 焼土粒子多量，炭化粒子・ローム粒子微量
- 6 灰褐色 焼土粒子・炭化粒子中量，ローム粒子少量
- 7 にぶい褐色 焼土粒子・炭化粒子中量，焼土小ブロック・ローム粒子微量
- 8 褐色 焼土粒子・炭化粒子少量，焼土小ブロック・ローム粒子微量
- 9 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子少量，焼土小ブロック・ローム粒子微量
- 10 黒褐色 炭化粒子多量，焼土粒子・ローム粒子少量

ピット 6か所(P₁～P₆)。P₁～P₄は，長径40～70cm，短径35～45cmの楕円形で，深さ39～54cmである。

いずれも主柱穴と考えられる。P₅は，径30cmの円形，深さ28cmで，出入り口に伴うピットと考えられる。P₆は，35cmの円形，深さ18cmで，性格は不明である。

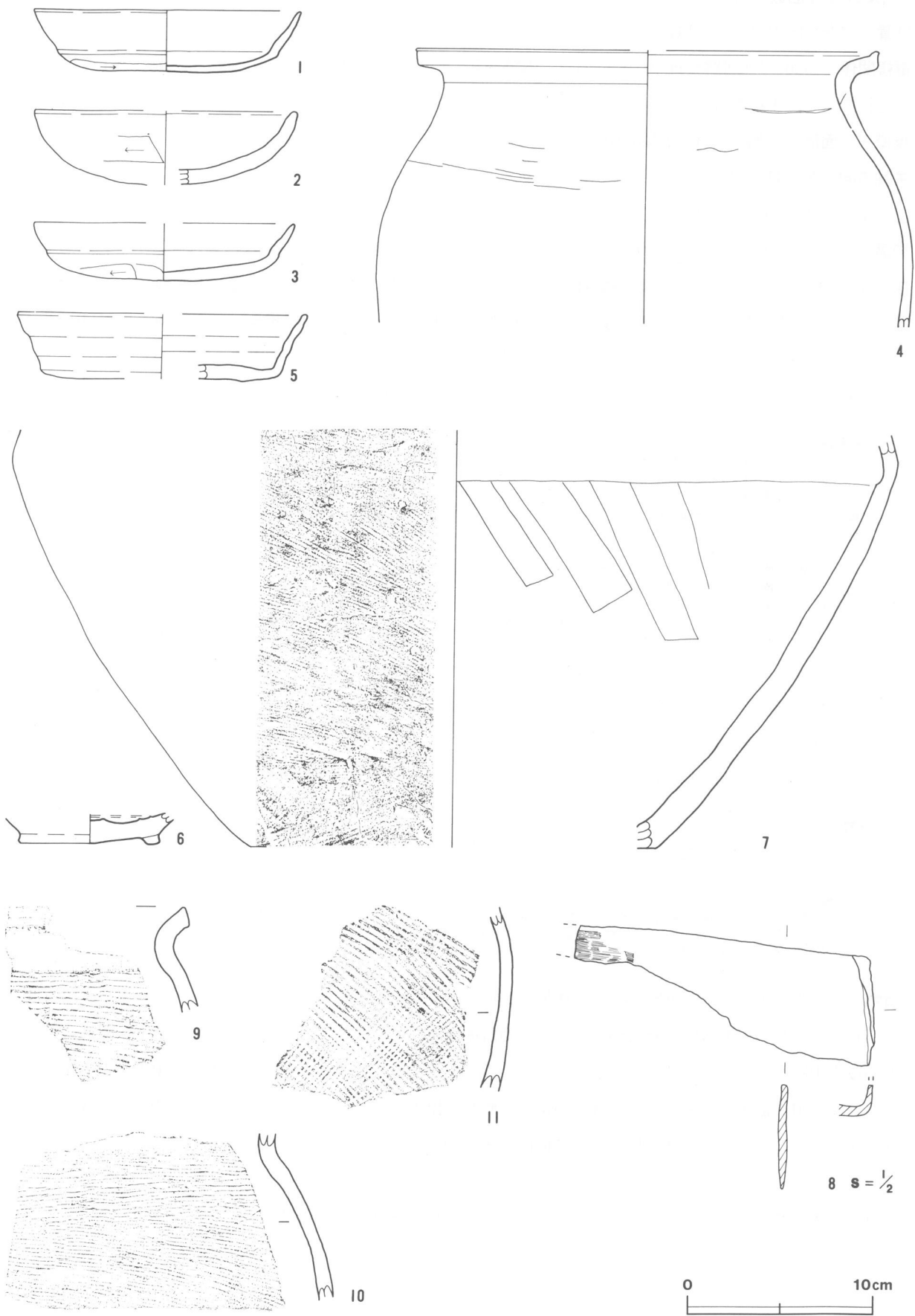
覆土 7層からなり，自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 2 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム中ブロック・ローム粒子微量
- 3 黒褐色 焼土小ブロック・ローム粒子少量，炭化粒子・焼土粒子微量
- 4 黒褐色 ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
- 5 暗褐色 焼土粒子中量，炭化粒子・ローム粒子少量
- 6 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量
- 7 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子中量

遺物 土師器片1023点，須恵器片63点，鉄製品2点が出土している。1の土師器坏は北東コーナーの床面直上から斜位で，2の土師器坏は竈内から，3の土師器坏は竈付近の覆土下層から正位で，4の土師器甕は中央付近の覆土中層から，5の須恵器坏は中央付近の床面直上から正位で，6の須恵器長頸瓶は中央付近の覆土中層から，7の須恵器甕は北東コーナー付近の覆土下層から出土している。9，10，11は須恵器甕の口縁部から体部にかけての破片である。9，10は外面に横位の平行叩きが施されている。11は縦位後，横位の平行叩きが施されている。

所見 本跡の時期は，遺構の形態や出土遺物から奈良時代の8世紀前葉と考えられる。



第359图 第261号住居跡出土遺物実測図

第261号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第359図 1	坏 土師器	A 14.3 B 3.4	口縁部一部欠損。丸底。底部と体部との境に稜を有する。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・石英・長石・雲母 灰黄褐色 普通 煤付着	P1142 80% 北東コーナー付近床直
2	坏 土師器	A[14.0] B 4.0	底部から口縁部にかけての破片。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底部外面ヘラ削り。	砂粒・雲母にぶい橙色 普通	P1143 40% 竈内
3	坏 土師器	A[14.0] B 3.1	底部から口縁部にかけての破片。丸底。底部と体部との境に稜を有する。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。底部ヘラ削り。	砂粒・石英・長石・雲母 灰黄褐色 普通 煤付着	P1144 30% 竈付近覆土下層
4	甕 土師器	A[25.0] B(14.8)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。端部は上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底部外面ヘラ削り。内面ナデ。輪積み痕。	砂粒・石英・長石・雲母にぶい褐色 普通	P1145 20% 中央付近覆土中層
5	坏 須恵器	A[15.6] B 3.6	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部から体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒・雲母・スコリア 灰黄褐色 普通	P1146 20% 中央付近床直
6	長頸瓶 須恵器	B(1.5) D[7.4] E 0.5	底部片。高台は短く直線的に開く。器壁は厚い。	体部内・外面ロクロナデ。高台貼り付け後、ナデ。	砂粒 灰色 普通	P1147 20% 中央付近覆土中層
7	甕 須恵器	B(22.5) C[22.0]	体部片。体部は外傾して立ち上がる。	体部外面平行叩き。内面ヘラナデ。	砂粒・石英・長石・雲母 灰色 普通	P1148 20% 北東コーナー付近覆土下層

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
8	鎌	(11.2)	3.9	0.5	(42)	覆土中	M1009

第262号住居跡（第360図）

位置 調査6区中央部，M14_{g9}区。

重複関係 第186号住居跡，第14号溝に掘り込まれており，本跡が古い。また本跡は第261号住居跡の上部に構築されているので，本跡が新しい。第185号住居跡との新旧関係は第14号溝に掘り込まれているので不明である。

規模と平面形 長軸[4.80]m，短軸3.26mの長方形と推定される。

主軸方向 N-97°-E

壁 壁高は29~48cmで，外傾して立ち上がる。

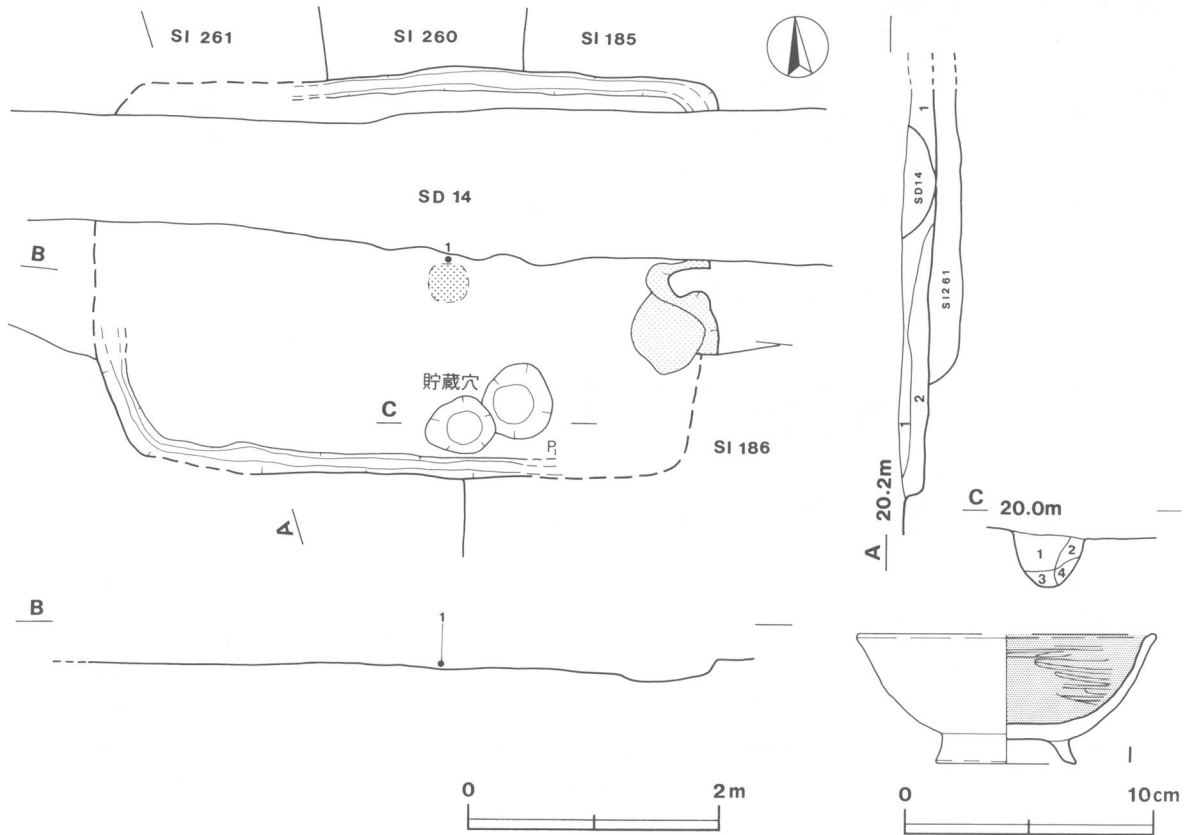
壁溝 掘り込まれている部分を除き確認した。上幅15cm，下幅10cm，深さ10cmほどで，断面形はU字形である。

床 全体的に平坦で，軟らかい。

竈 東壁中央部に付設されている。右袖部から火床部にかけて第186号住居跡に掘り込まれており，遺存状況は悪い。規模は長さ70cm，袖幅[120]cm，壁外への掘り込みは15cmである。袖部は粘土の残存状況から，砂質粘土で構築されていたと考えられる。

ピット 1か所(P₁)。P₁は，径60cmの円形で，深さ29cmである。性格は不明である。

貯蔵穴 南壁寄りに付設されている。長径55cm，短径45cmの楕円形で，深さ47cmである。断面形は皿状をしている。



第360図 第262号住居跡・出土遺物実測図

第262号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第360図 1	高台付碗 土師器	A [12.0] B 5.2 D 5.1 E 1.0	体部一部欠損。高台はハの字状に開く。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部から体部外面ロクロナデ。内面ヘラ磨き。高台貼り付け後、ナデ。内面黒色処理。	砂粒・長石・雲母 外面にぶい橙色 内面黒色 普通	P1149 50% 中央付近床直

貯蔵穴土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 極暗赤褐色 ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物少量
- 3 黒褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量
- 4 暗褐色 ローム大・小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量

覆土 2層からなるが、覆土が浅く堆積状況は不明である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック少量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量

遺物 土師器片136点、須恵器片6点が出土している。1の土師器高台付碗は中央部の床面直上から正位で出土している。

所見 本跡の時期は、遺構の形態や出土遺物から平安時代の10世紀以降と考えられる。

第264号住居跡（第362図）

位置 調査6区中央部，M14f6区。

重複関係 第265号住居跡を掘り込んでおり，また第198号住居跡，第2号大形堅穴状遺構の上部に構築されているので，本跡が新しい。

規模と平面形 長軸[3.00]m，短軸2.72mの長方形と推定される。

主軸方向 N-90°-E

壁 壁高は6～12cmで，緩やかに立ち上がる。

床 ほぼ平坦で，全体的に軟らかい。

竈 東壁に2か所付設されている。北側の竈1の規模は長さ62cm，袖幅50cm，壁外への掘り込みは35cmほどである。袖部は，砂質粘土で構築されている。火床部は楕円形状に10cmほど掘りくぼめられ，中央に雲母片岩の支脚が置かれていた。煙道部は削平により不明である。南側の竈2の規模は長さ85cm，袖幅65cm，外壁への掘り込みは25cmほどである。火床部は円形に浅く掘りくぼめられ，煙道部は削平され不明である。竈1と竈2の新旧関係は不明である。

竈2土層解説

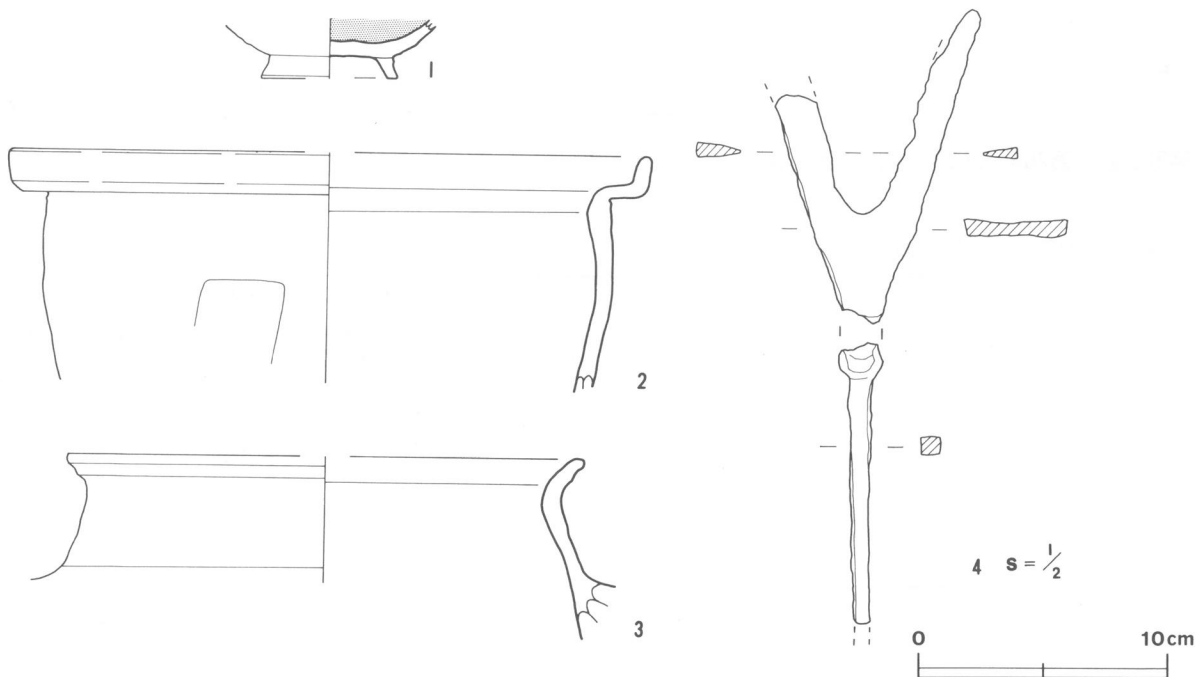
- | | | | |
|-------|---------------------|-------|-----------------------------|
| 1 褐色 | ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 暗褐色 | 焼土粒子中量，焼土小ブロック・炭化粒子・ローム粒子少量 |
| 2 黒褐色 | 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子微量 | 5 暗褐色 | 炭化粒子・焼土粒子・ローム粒子少量 |
| 3 褐色 | 焼土粒子少量，炭化粒子・ローム粒子微量 | 6 暗褐色 | 炭化粒子・ローム粒子少量，焼土粒子微量 |

ピット 2か所(P₁，P₂)。P₁は，径22cmの円形，深さ29cmである。P₂は，径30cmほどの円形，深さ13cmで，いずれも性格は不明である。

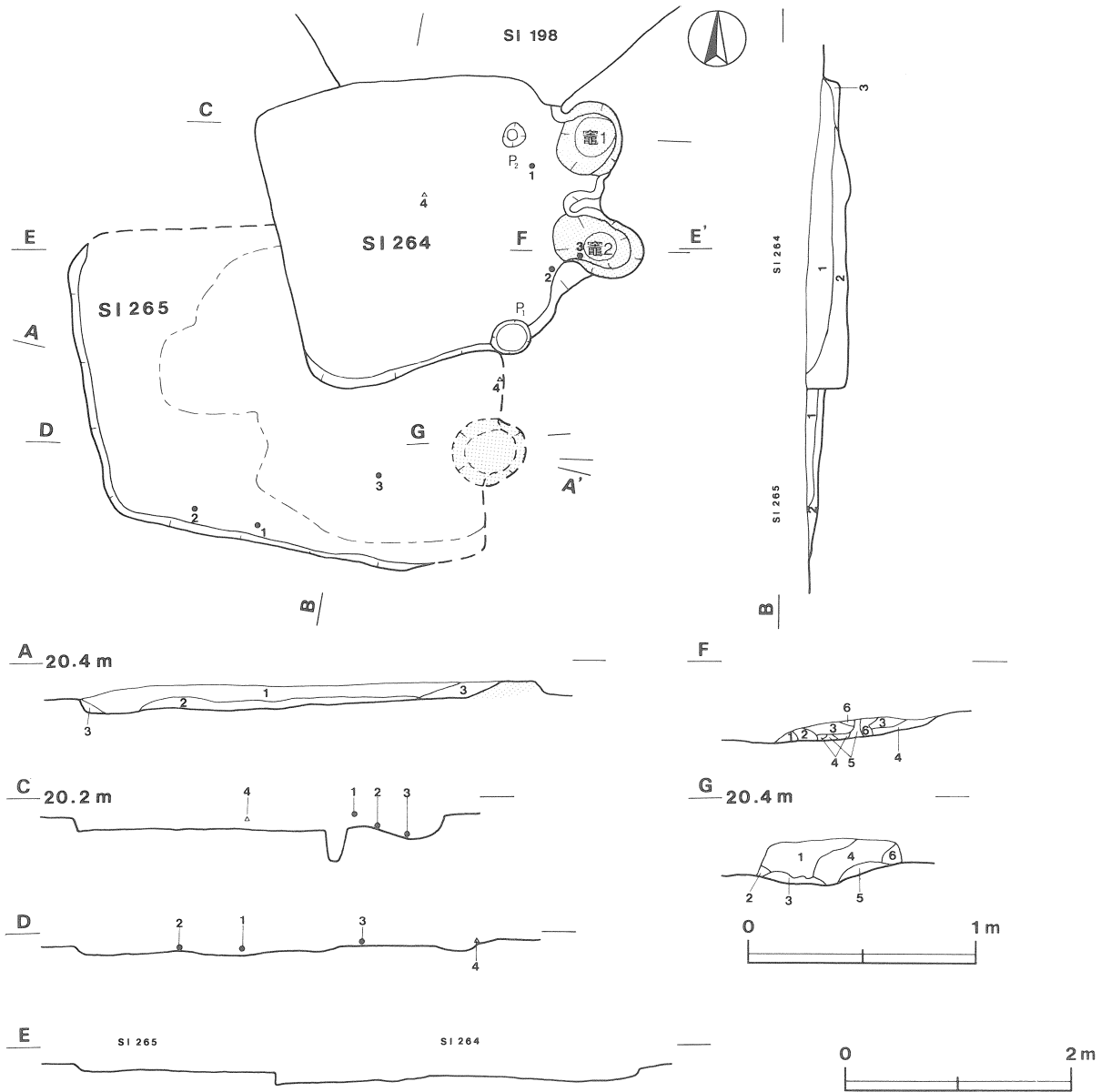
覆土 3層からなるが，覆土が浅く堆積状況は不明である。

土層解説

- | | |
|--------|----------------------------|
| 1 極暗褐色 | 焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子微量 |
| 2 極暗褐色 | ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 | 焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子微量 |



第361図 第264号住居跡出土遺物実測図



第362図 第264・265号住居跡実測図

第264号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第361図 1	高台付坏 土師器	B(2.1) D[5.5] E 0.9	底部片。高台はハの字状に開く。	体部外面ロクロナデ。内面ヘラ磨き。 高台貼り付け後、ナデ。内面黒色処理。	砂粒・石英・スコリア 外面にぶい橙色 内面黒色 普通	P1150 10% 竈1付近覆土中層
2	甕 土師器	A[25.4] B(9.3)	口縁部片。口縁部は強く外反し、端部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	P1151 5% 竈2付近覆土下層
3	羽釜 土師器	A[20.6] B(5.1)	頸部はやや内傾し、口縁部は外反する。体部上位に鈔がつく。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通 外面煤附着	P1152 5% 竈2内覆土下層

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
4	鉄鏝	(16.6)	5.4	0.5	(2.6)	中央付近覆土中層	M1011 70%

遺物 土師器片230点、須恵器片16点、礫1点、種子1点が出土している。1の土師器高台付坏は竈1付近の覆土中層から、2の土師器甕は竈2付近の覆土下層から、3の土師器羽釜は竈2内覆土下層から、4の鉄鏃は中央付近の覆土中層からそれぞれ出土している。

所見 本跡の時期は、遺構の形態や出土遺物から平安時代の10世紀以降と考えられる。

第265号住居跡（第362図）

位置 調査6区中央部，M14f5区。

重複関係 第264号住居跡に掘り込まれており，本跡が古い。また第2号大形堅穴状遺構の上部に構築されているので，本跡が新しい。

規模と平面形 長軸[3.70]m，短軸[3.10]mの長方形と推定される。

主軸方向 [N-90°-E]

壁 壁高は4~6cmで，緩やかに立ち上がる。

床 ほぼ平坦で，中央部が踏み固められている。

竈 東壁中央部に付設されている。削平により残存が悪く，規模は長さ[65]cm，袖幅[55]cm，壁外への掘り込みは[40]cmほどである。火床部は楕円形状に浅く掘りくぼめられており，煙道部は削平され不明である。

竈土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子少量，炭化粒子・ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子少量，ローム粒子・焼土小ブロック微量
- 4 黒褐色 焼土粒子中量，焼土小ブロック・炭化粒子・ローム粒子少量
- 5 赤褐色 焼土粒子多量，焼土大ブロック少量
- 6 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子少量，焼土中ブロック・ローム粒子微量

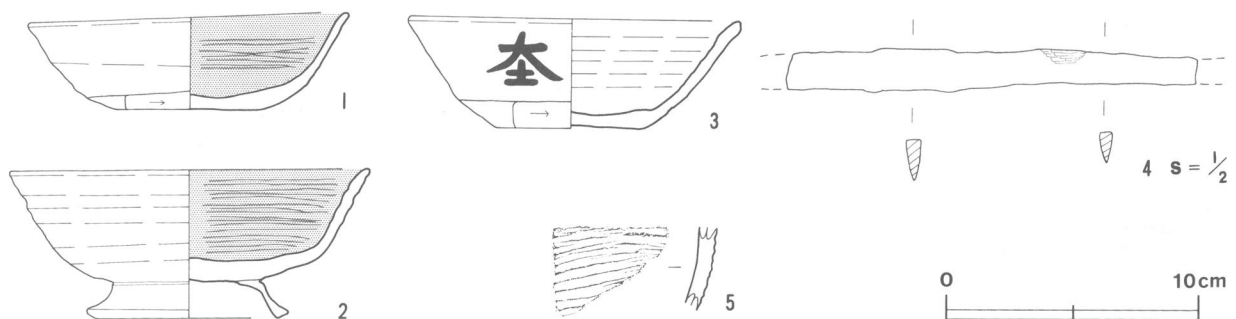
覆土 3層からなるが，覆土が浅く堆積状況は不明である。

土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 極暗褐色 ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子微量

遺物 土師器片520点，須恵器片28点，鉄製品1点が出土している。1の土師器坏は南壁際の覆土下層から逆位で，2の土師器高台付坏は南壁際の床面直上から正位で，3の須恵器坏は中央付近の覆土下層から，4の刀子は東壁際の覆土下層からそれぞれ出土している。5は須恵器甕の体部片で，外面には横位の平行叩きが施されている。

所見 本跡の時期は，遺構の形態や出土遺物から平安時代の10世紀前葉と考えられる。



第363図 第265号住居跡出土遺物実測図

第265号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第363図 1	坏 土師器	A 12.5 B 3.9 C 5.6	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎 気味に立ち上がり、口縁部に至る。	体部外面ロクロナデ。内面ヘラ磨き。 体部下端手持ちヘラ削り。内面黒色 処理。	砂粒・長石・スコリ ア 外面橙色 内面黒色 普通	P1153 90% 南壁際覆土下層
2	高台付坏 土師器	A 14.0 B 5.9 D 7.0 E 1.6	体部一部欠損。高台は長くハの字状 に開く。体部は内彎気味に立ち上 がり、口縁部に至る。	口縁部から体部外面ロクロナデ。内 面ヘラ磨き。高台貼り付け後、ナデ。 内面黒色処理。	砂粒・長石・雲母 外面橙色 内面黒色 普通	P1154 70% 南壁際床直
3	坏 須恵器	A 12.9 B 4.3 C 5.8	体部一部欠損。平底。体部は外傾し て立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部から体部内・外面ロクロナデ。 体部下端手持ちヘラ削り。底部ヘラ 削り調整。体部外面に墨書。	砂粒・雲母・スコリ ア にぶい橙色 良好 煤付着	P1155 90% 中央付近覆土下層

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
4	刀子	(10.9)	1.2	0.4	(13)	東壁際覆土下層	M1012

第266号住居跡（第364図）

位置 調査6区中央部，M14e5区。

重複関係 第198・267号住居跡を掘り込んでおり，本跡が新しい。また第263号住居跡，第14号溝が上部に構築されており，本跡が古い。

規模と平面形 長軸3.24m，短軸3.10mの方形である。

主軸方向 N-0°

壁 壁高は25～42cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝 上幅15cm，下幅10cm，深さ8cmで，断面形はU字形である。全周している。

床 全体的に平坦で，中央部がよく踏み固められている。

竈 北壁中央部に付設されている。竈の遺存状況が良好で，煙道が確認された。規模は長さ120cm，袖幅105cm，壁外への掘り込みは45cmである。袖部は砂質粘土で構築されている。火床部は円形に浅く掘りくぼめられ，煙道部は火床部から緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

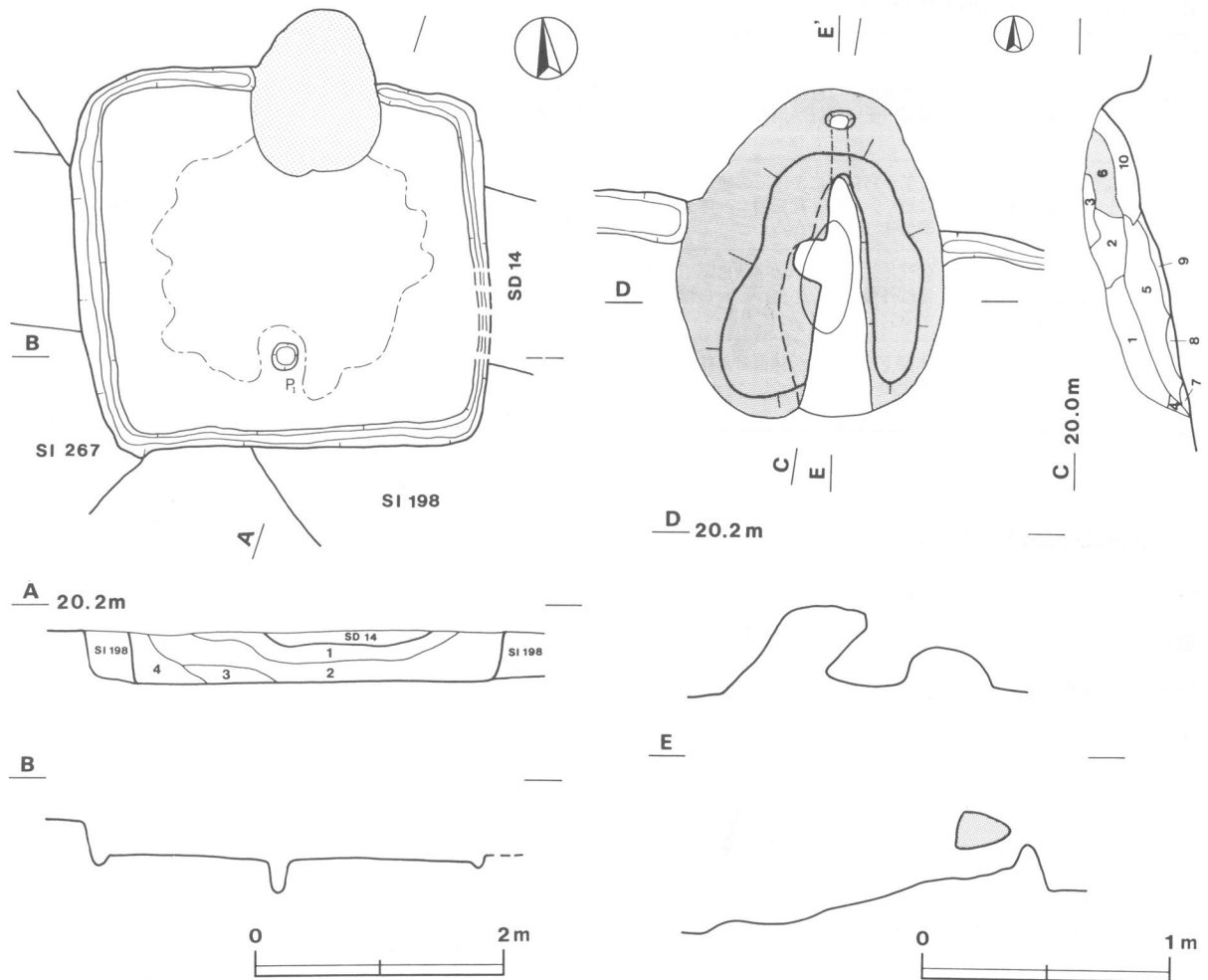
- 1 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量
- 2 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子少量，ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 3 暗褐色 焼土粒子・ローム粒子少量，炭化粒子・ローム小ブロック微量
- 4 黒褐色 焼土粒子・ローム粒子少量，炭化粒子微量
- 5 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子少量，焼土小ブロック・ローム粒子微量
- 6 暗褐色 焼土粒子少量，炭化粒子・ローム粒子微量
- 7 黒褐色 炭化粒子中量，焼土粒子・ローム粒子少量
- 8 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子中量，焼土小ブロック少量
- 9 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子中量，炭化物少量
- 10 暗褐色 焼土粒子少量，炭化粒子・ローム粒子微量

ピット 1か所(P₁)。P₁は，径24cmの円形で，深さ27cmである。出入り口施設に伴うピットと考えられる。

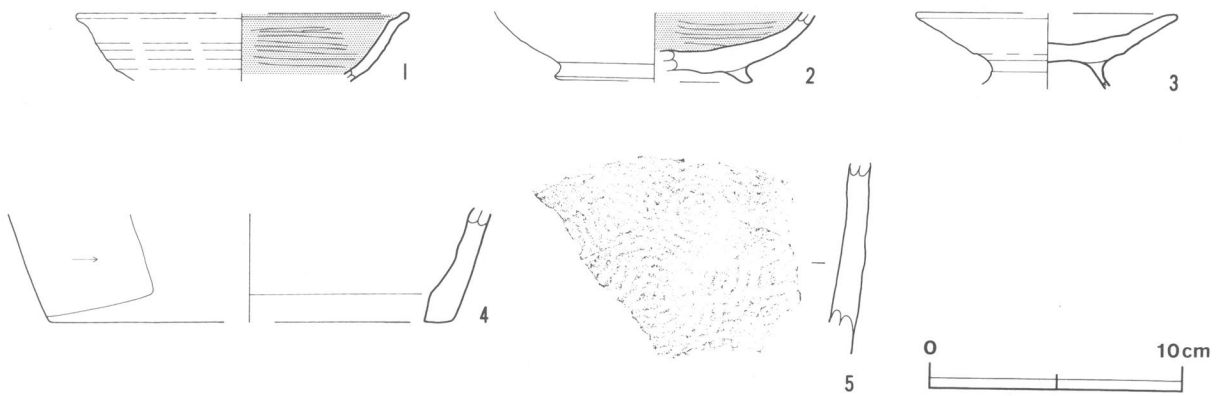
覆土 4層からなり，自然堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，ローム大・中ブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック微量
- 3 暗褐色 焼土粒子多量，炭化粒子・炭化物・ローム粒子少量
- 4 黒褐色 炭化粒子多量，ローム粒子・炭化物中量，焼土粒子・ローム小ブロック少量



第364図 第266号住居跡実測図



第365図 第266号住居跡出土遺物実測図

遺物 土師器片357点，須恵器片1点，陶器片1点が出土している。1の土師器坏，2の土師器高台付坏，3の土師器高台付小皿，4の須恵器甑は覆土中からそれぞれ出土している。5は須恵器甑の体部片で，外面に同心円当て具痕が施されている。

所見 本跡の時期は，遺構の形態や出土遺物から平安時代の10世紀以降と考えられる。

第266号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第365図 1	坏土師器	A[13.0] B(2.7)	口縁部片。口縁部はやや外反し、口縁部内面に沈線が巡る。	口縁部外面ロクロナデ。内面ヘラ磨き。内面黒色処理。	砂粒・石英・スコリア 外面橙色 内面黒色 普通	P1156 5% 覆土中
2	高台付坏土師器	B(2.8) D[7.2] E 0.7	底部から体部にかけての破片。高台は短く、ハの字状に開く。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部外面ロクロナデ。内面ヘラ磨き。高台貼り付け後、ナデ。内面黒色処理。	砂粒・長石・スコリア 外面浅黄色 内面黒色 普通	P1157 20% 覆土中
3	高台付小皿土師器	A[10.3] B(2.8) E(0.8)	体部片。高台はハの字状に開く。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部から体部内・外面ロクロナデ。	砂粒・雲母・スコリア 浅黄橙色 普通	P1158 30% 覆土中
4	甑須恵器	B(4.3) C[15.6]	体部下位の破片。体部は外傾して立ち上がる。	体部外面下端ヘラ削り。	砂粒・石英・長石 褐灰色 普通	P1159 5% 覆土中

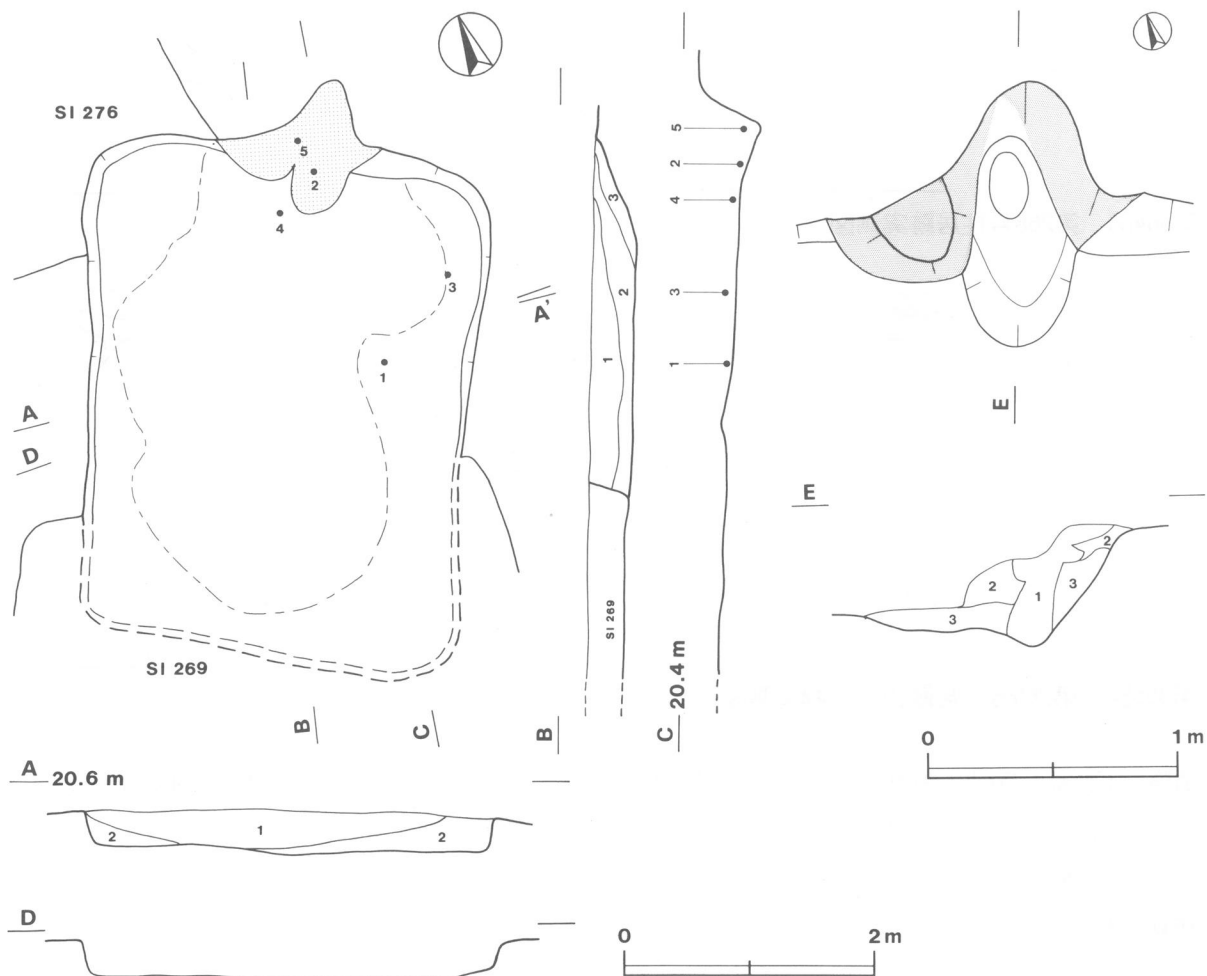
第268号住居跡 (第366図)

位置 調査6区中央部, M14j8区。

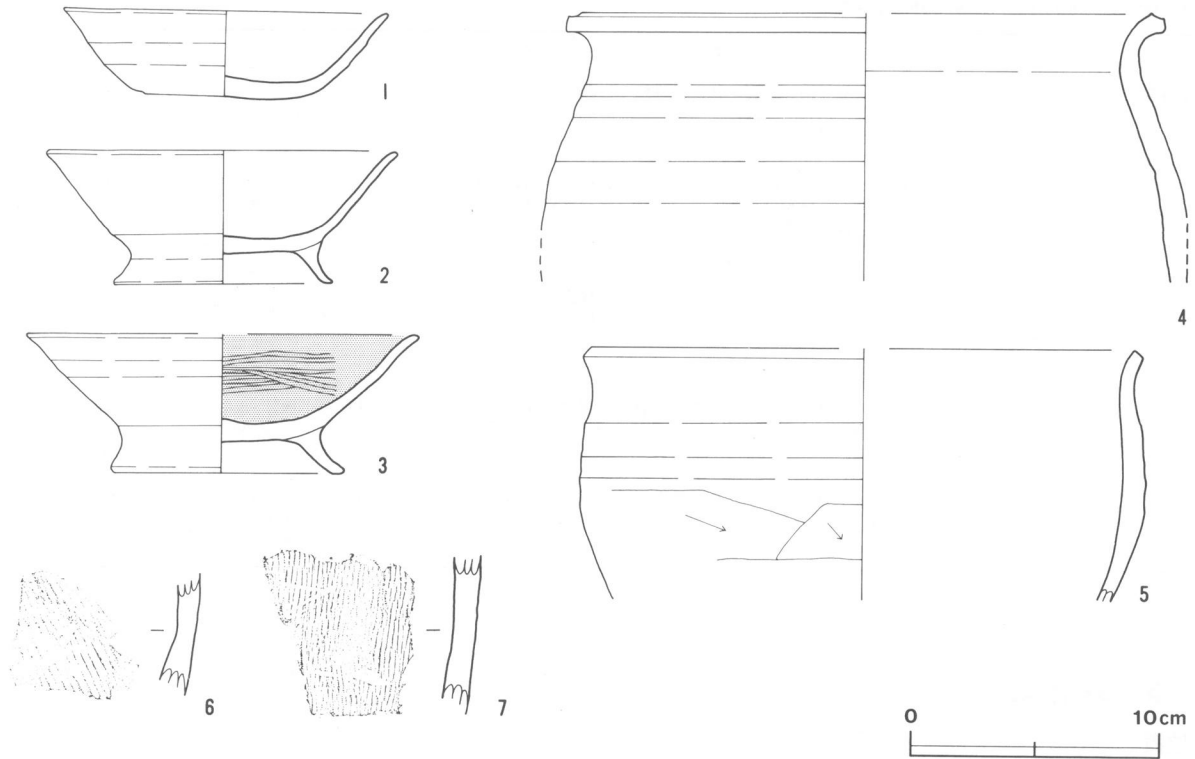
重複関係 第269・276号住居跡が上部に構築されており, 本跡が古い。

規模と平面形 長軸[4.00]m, 短軸3.28mの長方形と推定される。

主軸方向 N-28°-E



第366図 第268号住居跡実測図



第367図 第268号住居跡出土遺物実測図

壁 壁高は22～31cmで、外傾して立ち上がる。

床 全体的に平坦で、中央部がよく踏み固められている。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は長さ110cm、袖幅100cm、壁外への掘り込みは40cmである。袖部は砂質粘土で構築されている。火床部には攪乱がみられたが、円形に浅く掘りくぼめられており、煙道部は火床部から外傾して立ち上がる。

竈土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子少量
- 2 黒褐色 焼土粒子多量、焼土小ブロック・炭化粒子中量、焼土中ブロック微量
- 3 極暗褐色 焼土小ブロック・焼土粒子多量、焼土中ブロック中量、炭化粒子少量

覆土 3層からなり、自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子・ローム中ブロック微量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、ローム中ブロック少量、ローム大ブロック微量
- 3 極暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・ローム小ブロック微量

遺物 土師器片199点、須恵器片27点が出土している。1の土師器坏は中央付近の覆土下層から正位で、2の土師器高台付坏、5の土師器鉢は竈内から、3の土師器高台付坏は東壁際の覆土下層から逆位で、4の土師器甕は竈付近の覆土下層から出土している。6、7は須恵器甕の体部片で、外面には縦位の平行叩きが施されている。

所見 本跡の時期は、遺構の形態や出土遺物から、平安時代の10世紀以降と考えられる。

第268号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第367図 1	坏 土師器	A 13.0 B 3.5 C 5.8	口縁部一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部から体部内・外面ロクロナデ。底部ヘラ削り後、無調整。	砂粒・石英・雲母 橙色 普通	P1166 70% 中央付近覆土下層
2	高台付坏 土師器	A 14.0 B 5.3 D 8.7 E 1.0	口縁部一部欠損。高台は長く、ハの字状に開く。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部から体部内・外面ロクロナデ。高台貼り付け後、ナデ。	砂粒・石英・長石 浅黄橙色 普通	P1167 95% 竈内
3	高台付坏 土師器	A[15.6] B 5.6 D[9.2] E 1.5	体部一部欠損。高台は長く、ハの字状に開く。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部から体部外面ロクロナデ。高台貼り付け後、ナデ。内面黒色処理。	砂粒・石英 外面にぶい橙色 内面黒色 普通	P1168 50% 東壁際覆土下層
4	甕 土師器	A[23.0] B(10.8)	口縁部から体部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ロクロナデ。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	P1169 10% 竈付近覆土下層
5	鉢 土師器	A[22.0] B(10.1)	口縁部から体部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り。	砂粒・雲母 黒褐色 普通 煤付着	P1170 10% 竈内

第269号住居跡（第368図）

位置 調査6区中央部，N14b7区。

重複関係 第268号住居跡の上部に構築されており，本跡が新しい。

規模と平面形 長軸4.06m，短軸3.92mの方形である。

主軸方向 N-10°-E

壁 壁高は18～35cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝 北壁下を除き確認した。上幅15cm，下幅10cm，深さ6cmで，断面形はU字形である。

床 全体的に平坦で，東壁から中央部にかけてよく踏み固められている。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は長さ122cm，袖幅95cm，壁外への掘り込みは75cmである。袖部は砂質粘土で構築されており，右袖部には雲母片岩が補強材として入っている。火床部は楕円形に浅く掘りくぼめられており，煙道部は火床部から外傾して立ち上がる。

竈土層解説

- 1 極暗褐色 炭化粒子少量，焼土粒子・ローム粒子微量
- 2 黒褐色 焼土粒子中量，炭化粒子・ローム粒子少量
- 3 極暗褐色 焼土粒子・炭化粒子少量，焼土小ブロック・ローム粒子微量
- 4 黒褐色 炭化粒子中量，焼土粒子少量，ローム粒子微量
- 5 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量
- 6 黒褐色 焼土粒子多量，炭化粒子少量，焼土小ブロック・ローム粒子微量

貯蔵穴 南東コーナー部に付設されている。長径90cm，短径80cmの楕円形で，深さ20cmである。断面形は皿状をしている。

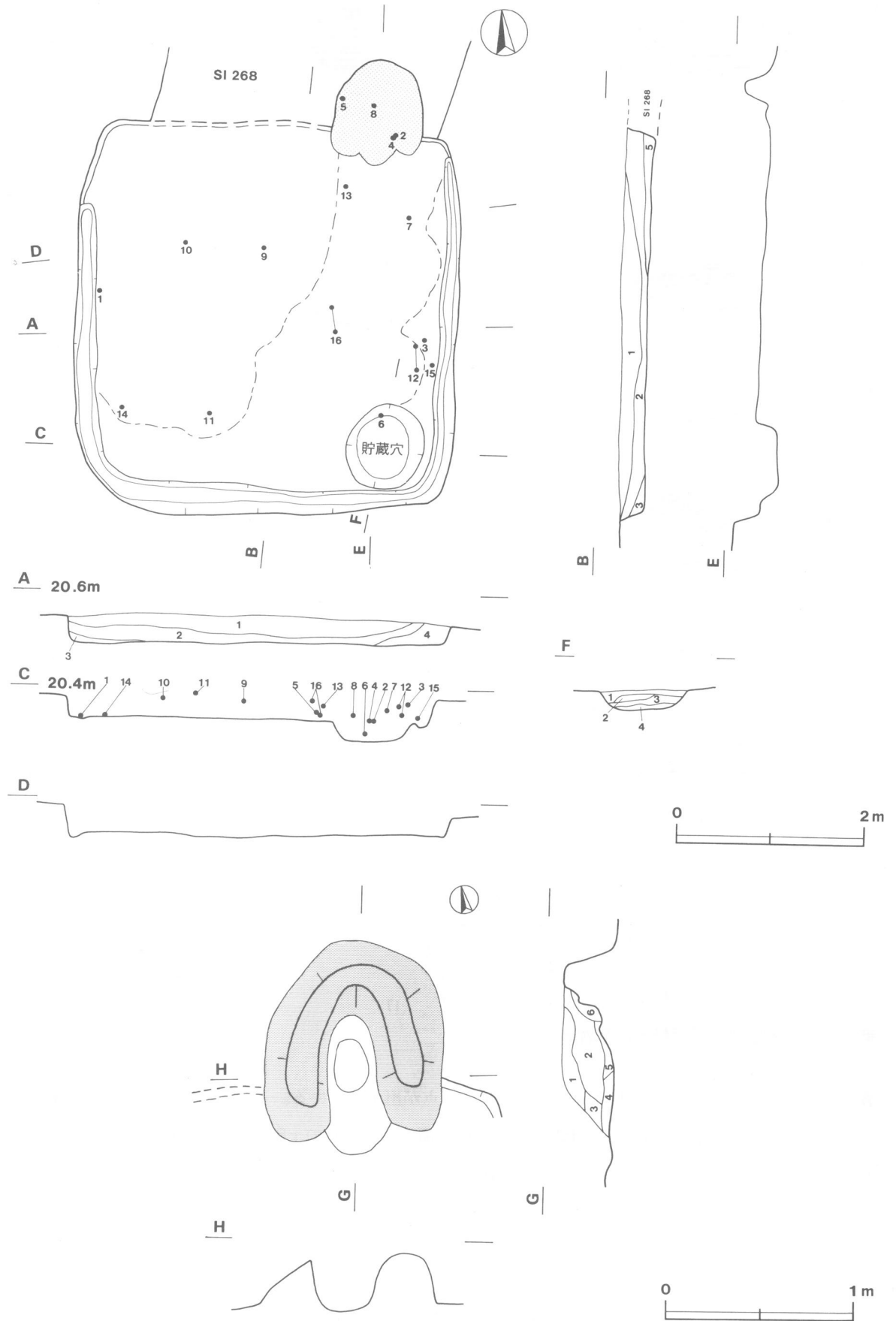
貯蔵穴土層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量
- 2 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子少量，ローム粒子微量
- 3 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子少量，ローム粒子微量
- 4 暗褐色 焼土粒子多量，焼土小ブロック・炭化粒子中量，ローム粒子少量

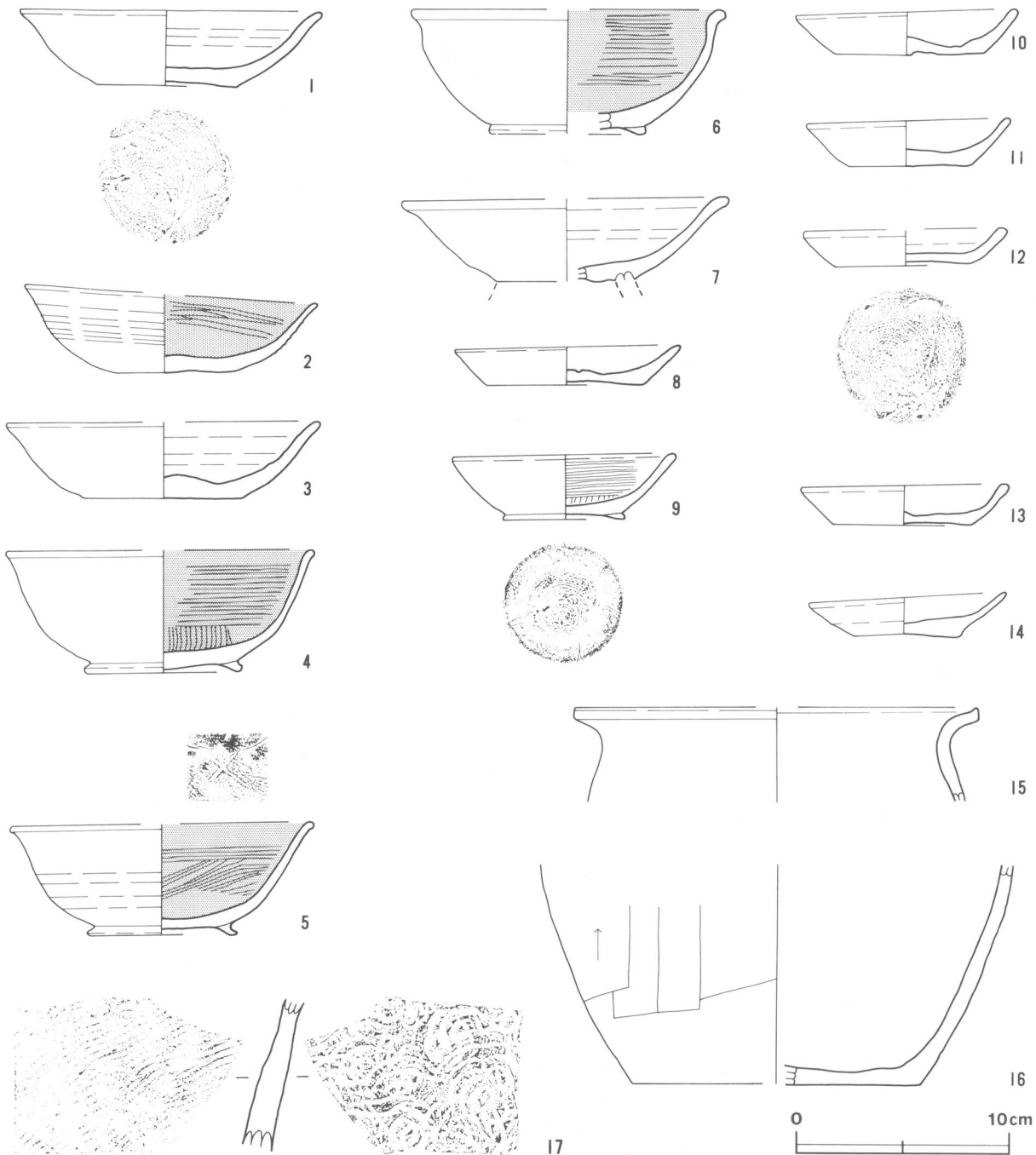
覆土 5層からなり，自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子・ローム中ブロック少量
- 2 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 3 極暗褐色 ローム粒子多量，ローム小ブロック微量
- 4 黒褐色 ローム粒子中量，焼土粒子少量
- 5 黒褐色 炭化粒子中量，ローム粒子少量，焼土粒子微量



第368图 第269号住居跡実測图



第369図 第269号住居跡出土遺物実測図

遺物 土師器片651点、須恵器片60点、不明鉄製品2点が出土している。1の土師器坏は西壁際の覆土下層から正位で、2の土師器坏、4、5の土師器高台付碗は竈内から、6の土師器高台付碗は貯蔵穴内から、8の土師器小皿は竈内から逆位で、9の土師器小形高台付坏、10の土師器小皿は中央付近の覆土中層から逆位で、13の土師器小皿は竈付近の中層から正位で、14の土師器小皿は南西コーナー付近の床面直上から正位でそれぞれ出土している。17は須恵器甕の体部片で、外面には横位の平行叩きが、内面には同心円当て具痕が施されている。

所見 本跡の時期は、遺構の形態や出土遺物から平安時代の10世紀以降と考えられる。

第269号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第369図 1	坏 土師器	A 14.3 B 3.6 C 6.7	平底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部から体部内・外面ロクロナデ。底部回転系切り後、無調整。	砂粒・雲母 黒褐色 普通	P1171 100% 西壁際覆土下層
2	坏 土師器	A[13.7] B 3.8	体部一部欠損。平底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部から体部外面ロクロナデ。体部内面へラ磨き。底部回転へラ切り。内面黒色処理。	砂粒 外面にぶい橙色 内面黒色 普通	P1172 40% 竈内
3	坏 土師器	A[14.7] B 3.7 C 7.4	底部から体部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	体部内・外面ロクロナデ。底部回転へラ切り。	砂粒・雲母 にぶい褐色 普通	P1173 30% 東壁際覆土中層
4	高台付碗 土師器	A[14.4] B 5.7 D 7.2 E 0.5	体部一部欠損。高台は短く、強く開く。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部から体部外面ロクロナデ。内面へラ磨き。高台貼り付け後、ナデ。内面黒色処理。	砂粒・雲母 外面にぶい褐色 内面黒色 良好	P1174 60% 竈内
5	高台付碗 土師器	A[14.0] B 5.2 D 6.9 E 0.5	体部一部欠損。高台は短く開く。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部から体部外面ロクロナデ。内面へラ磨き。高台貼り付け後、ナデ。内面黒色処理。内面にへラ記号。	砂粒・雲母・スコリア 外面橙色・内面黒色 普通	P1175 60% 竈内
6	高台付碗 土師器	A[14.7] B 5.9 D[7.2] E 0.5	底部から口縁部にかけての破片。高台は短く、開くように付く。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部から体部外面ロクロナデ。体部内面へラ磨き。高台貼り付け後、ナデ。内面黒色処理。	砂粒・長石・雲母・スコリア 外面にぶい橙色・内面黒色 普通	P1176 40% 貯蔵穴内
7	高台付坏 土師器	A[15.3] B(3.9)	底部から口縁部にかけての破片。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部から体部内・外面ロクロナデ。高台貼り付け後、ナデ。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	P1177 40% 竈付近覆土中層
8	小皿 土師器	A 10.7 B 1.9 C 7.3	平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部から体部内・外面ロクロナデ。底部外面回転へラ切り後、ナデ。	砂粒・雲母・スコリア にぶい褐色 普通	P1178 99% 竈内逆位
9	小形 高台付坏 土師器	A 10.6 B 3.1 D 5.7 E 0.4	体部一部欠損。高台は短く開く。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部から体部外面ロクロナデ。体部内面へラ磨き。底部回転系切り。高台貼り付け後、ナデ。	砂粒・雲母・スコリア にぶい褐色 普通	P1179 80% 中央付近覆土中層
10	小皿 土師器	A 10.5 B 2.3 C 7.0	体部一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部から体部内・外面ロクロナデ。底部回転へラ切り後、無調整。	砂粒・雲母・スコリア 明赤褐色 普通	P1180 70% 中央付近 覆土中層
11	小皿 土師器	A 9.5 B 2.3 C 5.7	体部一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部から体部内・外面ロクロナデ。底部外面回転へラ切り後、無調整。	砂粒・石英・雲母 褐色 普通	P1181 70% 南西コー ナー付近覆土上層
12	小皿 土師器	A[9.5] B 1.6 C 6.2	体部一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部から体部内・外面ロクロナデ。底部回転系切り。	砂粒・雲母・スコリア 褐色 普通	P1182 50% 東壁際覆土中層
13	小皿 土師器	A 9.7 B 2.0 C 6.3	体部一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部から体部内・外面ロクロナデ。底部回転系切り。	砂粒・雲母・スコリア 褐色 普通	P1183 50% 竈付近覆土中層
14	小皿 土師器	A 9.4 B 2.1 C 4.8	体部一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部から体部内・外面ロクロナデ。底部回転系切り。	砂粒・雲母 にぶい褐色 普通	P1184 60% 南西コー ナー付近床直
15	甕 土師器	A[19.0] B(4.4)	口縁部片。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・石英・長石・雲母 にぶい褐色 普通	P1185 5% 東壁際覆土下層
16	甕 土師器	B(10.3) C[13.4]	底部から体部にかけての破片。平底。体部は内彎して立ち上がる。	体部外面へラ削り。内面ナデ。	砂粒・石英・雲母 にぶい褐色 普通	P1186 10% 中央付近覆土中層

第270号住居跡（第370図）

位置 調査6区中央部，M14j5区。

重複関係 第149号土坑に掘り込まれており，本跡が古い。

規模と平面形 長軸3.71m，短軸3.27mの長方形である。

主軸方向 N-95°-E

壁 壁高は7~28cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝 上幅15cm，下幅8cm，深さ5cmで，断面形はU字形である。全周している。

床 全体的に平坦で，中央部がよく踏み固められている。

竈 東壁南東コーナー寄りに付設されている。規模は長さ98cm，袖幅85cm，壁外への掘り込みは50cmである。袖部は砂質粘土で構築されている。火床部は円形に浅く掘りくぼめられており，煙道部は火床部から緩やかに立ち上がる。

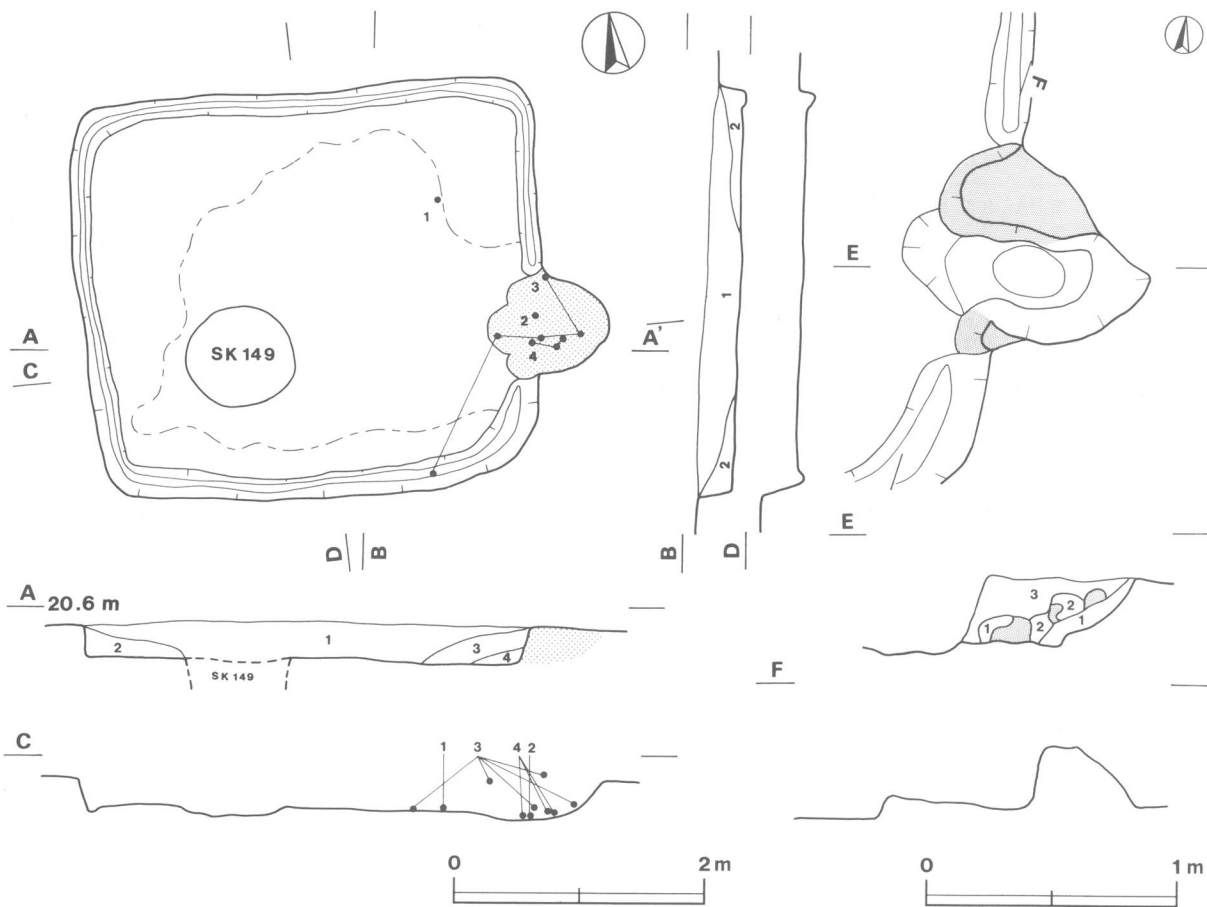
竈土層解説

- | | |
|---------------------------|---------------------|
| 1 黒褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子多量 | 3 黒褐色 焼土粒子中量，炭化粒子少量 |
| 2 黒褐色 焼土粒子多量，炭化粒子中量 | |

覆土 4層からなり，自然堆積である。

土層解説

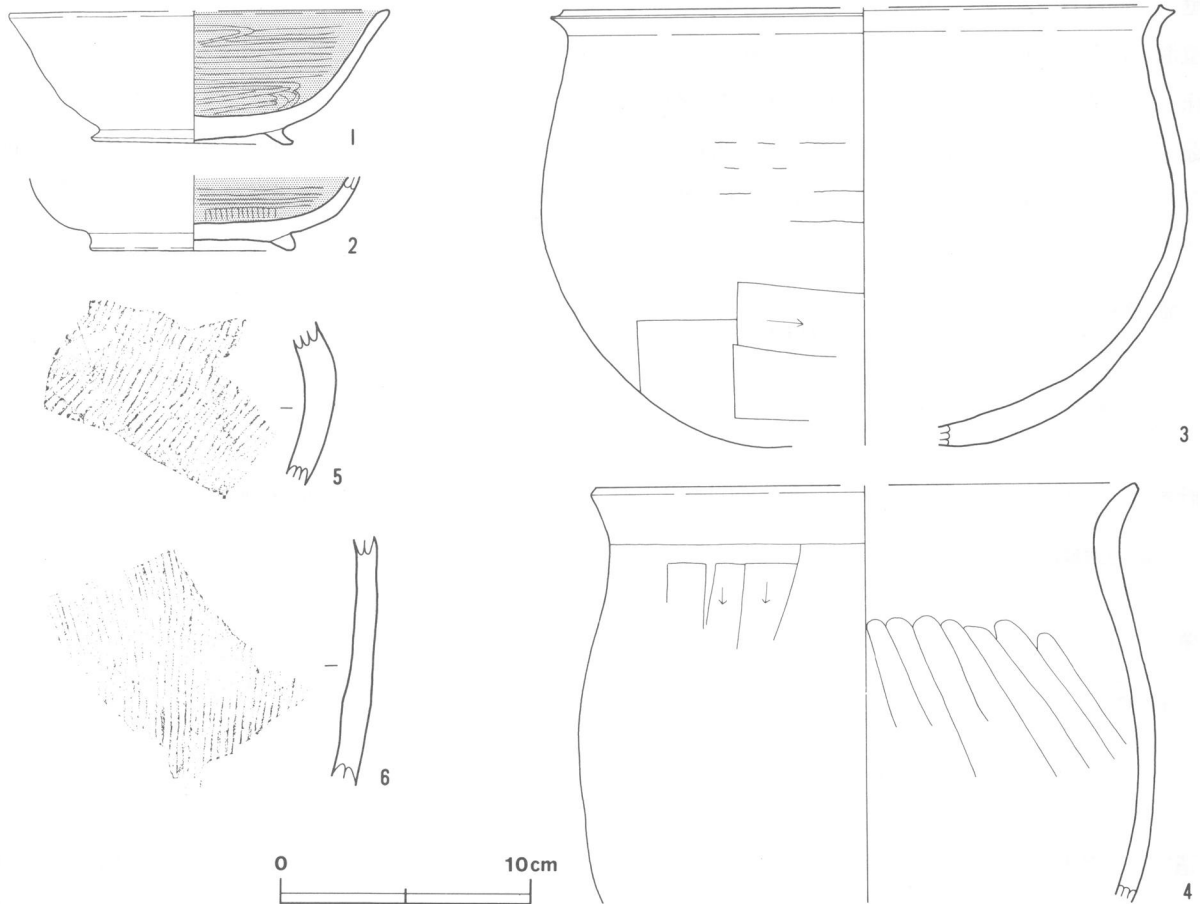
- | | |
|---------------------------|---------------------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量 | 3 黒褐色 ローム粒子少量 |
| 2 黒褐色 ローム粒子中量 | 4 黒褐色 ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子中量 |



第370図 第270号住居跡実測図

遺物 土師器片454点、須恵器片59点、不明鉄製品2点が出土している。1の土師器高台付碗は北東コーナー付近の床面直上から正位で、2の土師器高台付坏、3の土師器鉢、4の土師器甕は竈内からそれぞれ出土している。5は須恵器甕の体部片で、外面に格子目叩きが施されている。6は須恵器甕の体部片で、外面には縦位の平行叩きが施されている。

所見 本跡の時期は、遺構の形態や出土遺物から平安時代の10世紀以降と考えられる。



第371図 第270号住居跡出土遺物実測図

第270号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第371図 1	高台付碗 土師器	A[14.9] B 5.3 D 7.8 E 0.6	体部一部欠損。高台は短く大きく開く。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部から体部外面ロクロナデ。体部内面へラ磨き。底部回転糸切り。高台貼り付け後、ナデ。内面黒色処理。	砂粒・雲母 外面にぶい橙色 内面黒色 良好	P1187 50% 北東コーナー 付近床直
2	高台付坏 土師器	B(2.9) D 7.8 E 0.7	底部片。高台は短く、ハの字状に開く。	体部外面ロクロナデ。内面へラ磨き。底部回転糸切り。高台貼り付け後、ナデ。内面黒色処理。	砂粒・石英・雲母 外面にぶい橙色 内面黒色 良好	P1188 40% 竈内
3	鉢 土師器	A[24.0] B 17.6	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はやや外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り。内面ナデ。	砂粒・石英・雲母 外面にぶい橙色 普通 外面煤付着	P1189 30% 竈内
4	甕 土師器	A[21.6] B(16.7)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はやや外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面縦方向のへラ削り。内面ナデ。	砂粒・石英・長石 外面にぶい橙色 普通	P1190 30% 竈内

第271号住居跡（第373図）

位置 調査6区中央部，M14i5区。

重複関係 第272・277号住居跡の上に構築されており，本跡が新しい。また第148号土坑に掘り込まれているので，本跡が古い。

規模と平面形 長軸4.20m，短軸3.30mの長方形である。

主軸方向 N-3°-E

壁 壁高は11~28cmで，緩やかに立ち上がる。

壁溝 西壁下で確認した。上幅12cm，下幅5~8cm，深さ5cmで，断面形はU字形である。

床 全体的に平坦で，竈前面から中央部がよく踏み固められている。

竈 北東コーナー寄りに付設されている。規模は長さ110cm，袖幅85cm，壁外への掘り込みは53cmである。袖部は砂質粘土で構築されている。火床部は楕円形に浅く掘りくぼめられており，煙道部は火床部から外傾して立ち上がる。

竈土層解説

- 1 極暗褐色 焼土中ブロック多量，焼土粒子中量，焼土小ブロック・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム大ブロック中量，炭化粒子少量，焼土粒子微量
- 3 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子少量
- 4 黒褐色 焼土粒子少量
- 5 極暗褐色 焼土粒子・炭化粒子多量

貯蔵穴 東壁中央部に付設されている。径60cmの円形で，深さ38cmである。断面形は鍋底状をしている。

貯蔵穴土層解説

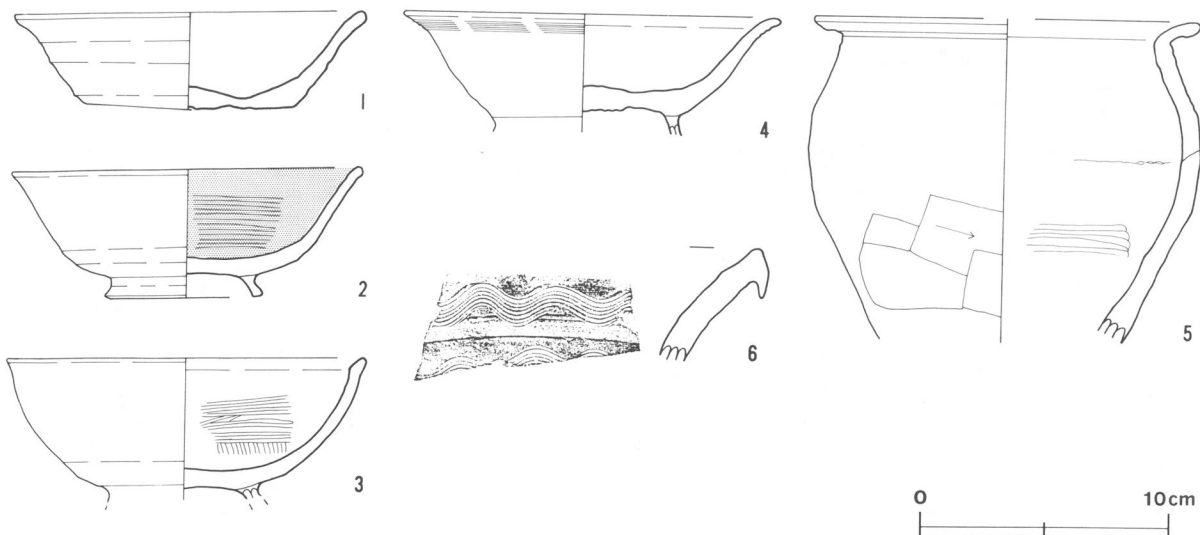
- 1 黒褐色 ローム粒子中量，炭化粒子・ローム小ブロック微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量，炭化粒子微量

覆土 4層からなり，自然堆積である。

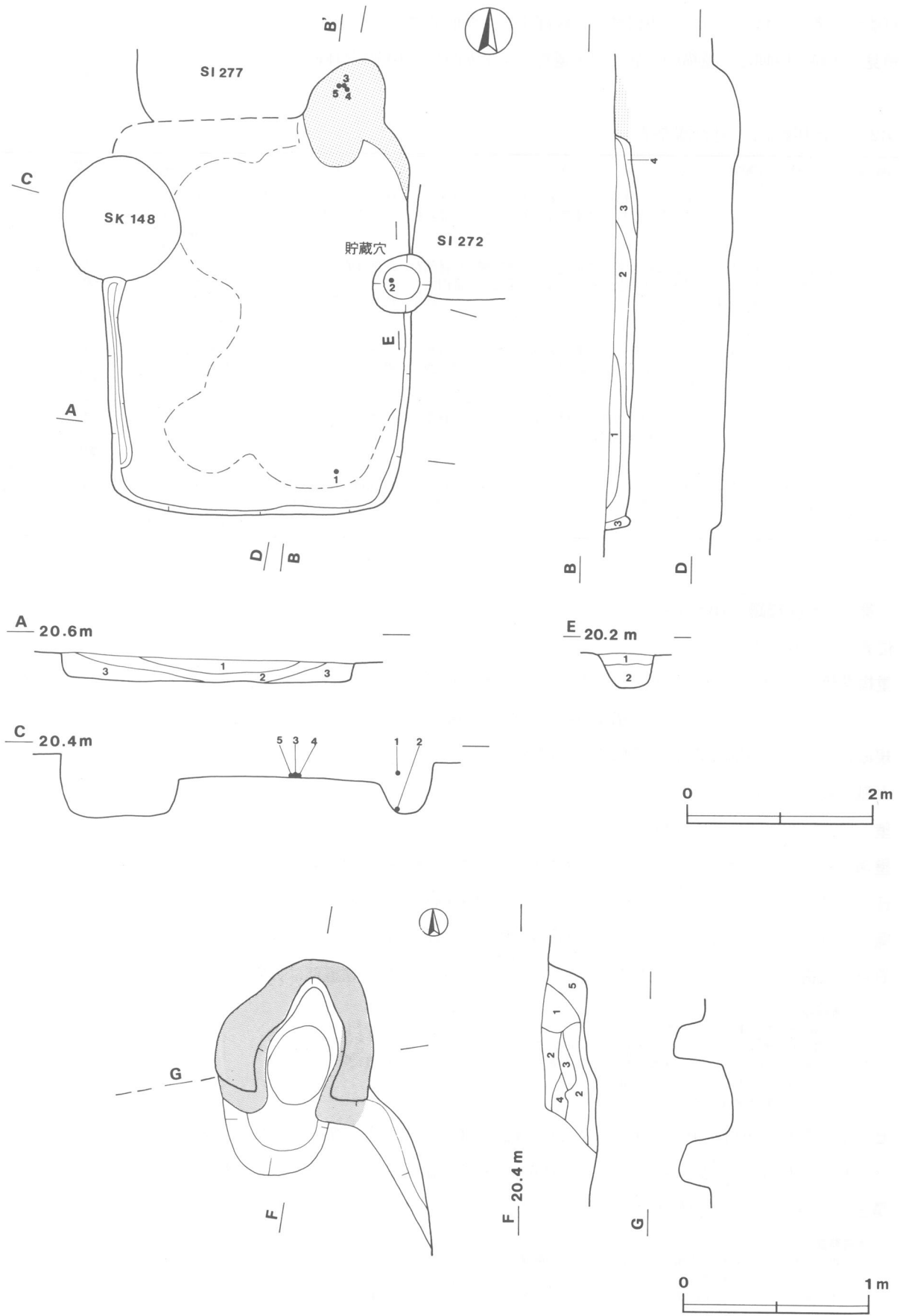
土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量，ローム中ブロック微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量
- 3 黒褐色 ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量
- 4 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子・ローム小ブロック少量

遺物 土師器片131点，須恵器片27点，縄文土器片1点，礫1点が出土している。1の土師器坏は南東コーナー付近の覆土下層から，2の土師器高台付坏は貯蔵穴内の覆土下層から正位でそれぞれ出土している。3の土師



第372図 第271号住居跡出土遺物実測図



第373图 第271号住居跡実測図

器高台付碗，4の土師器高台付坏，5の土師器小形甕が重なりあって逆位で竈内から出土しており，竈祭祀の可能性が考えられる。6は須恵器甕の口縁部片で，外面には8本櫛歯の波状文が施されている。

所見 本跡の時期は，遺構の形態や出土遺物から平安時代の10世紀以降と考えられる。

第271号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第372図 1	坏 土師器	A 14.1 B 4.1 C 8.3	体部一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。	口縁部から体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ切り後，無調整。	砂粒・長石・雲母・スコリア 橙色 普通 煤付着	P1191 60% 南東コーナー付近覆土下層
2	高台付坏 土師器	A 14.1 B 5.5 D 6.4 E 0.9	高台はハの字状に開く。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部に至る。	口縁部から体部外面ロクロナデ。体部内面ヘラ磨き。高台貼り付け後，ナデ調整。内面黒色処理。	砂粒・石英・長石・雲母・スコリア 外面橙色・内面黒色 普通	P1192 100% 貯蔵穴内覆土下層
3	高台付碗 土師器	A 14.4 B (5.7)	高台・体部一部欠損。体部は内彎して立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。	口縁部から体部外面ロクロナデ。体部内面ヘラ磨き。体部下端回転ヘラ削り。	砂粒・長石・雲母 橙色 良好	P1193 80% 竈内
4	高台付坏 土師器	A 15.1 B (4.8)	高台欠損。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。	口縁部から体部内・外面ロクロナデ。	砂粒・長石・スコリア 橙色 不良	P1194 60% 竈内
5	小形甕 土師器	A [15.4] B (13.1)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり，口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り。内面ヘラナデ。輪積み痕。	砂粒・石英・長石・雲母 橙色 普通	P1195 40% 竈内

第272号住居跡（第374図）

位置 調査6区中央部，M14i6区。

重複関係 第209号住居跡に掘り込まれており，第271・277号住居跡が上部に構築されているので，本跡が古い。また第274号住居跡の上部に構築されており，本跡が新しい。

規模と平面形 長軸3.90m，短軸3.87mの方形である。

主軸方向 N-0°

壁 壁高は32～37cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝 上幅10～15cm，下幅5～8cm，深さ6cmで，断面形はU字形である。全周している。

床 全体的に平坦で，出入り口から中央部がよく踏み固められている。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は長さ95cm，袖幅130cm，壁外への掘り込みは20cmである。袖部は砂質粘土で構築されている。火床部は円形に浅く掘りくぼめられ，煙道部は火床部から外傾して立ち上がる。

竈土層解説

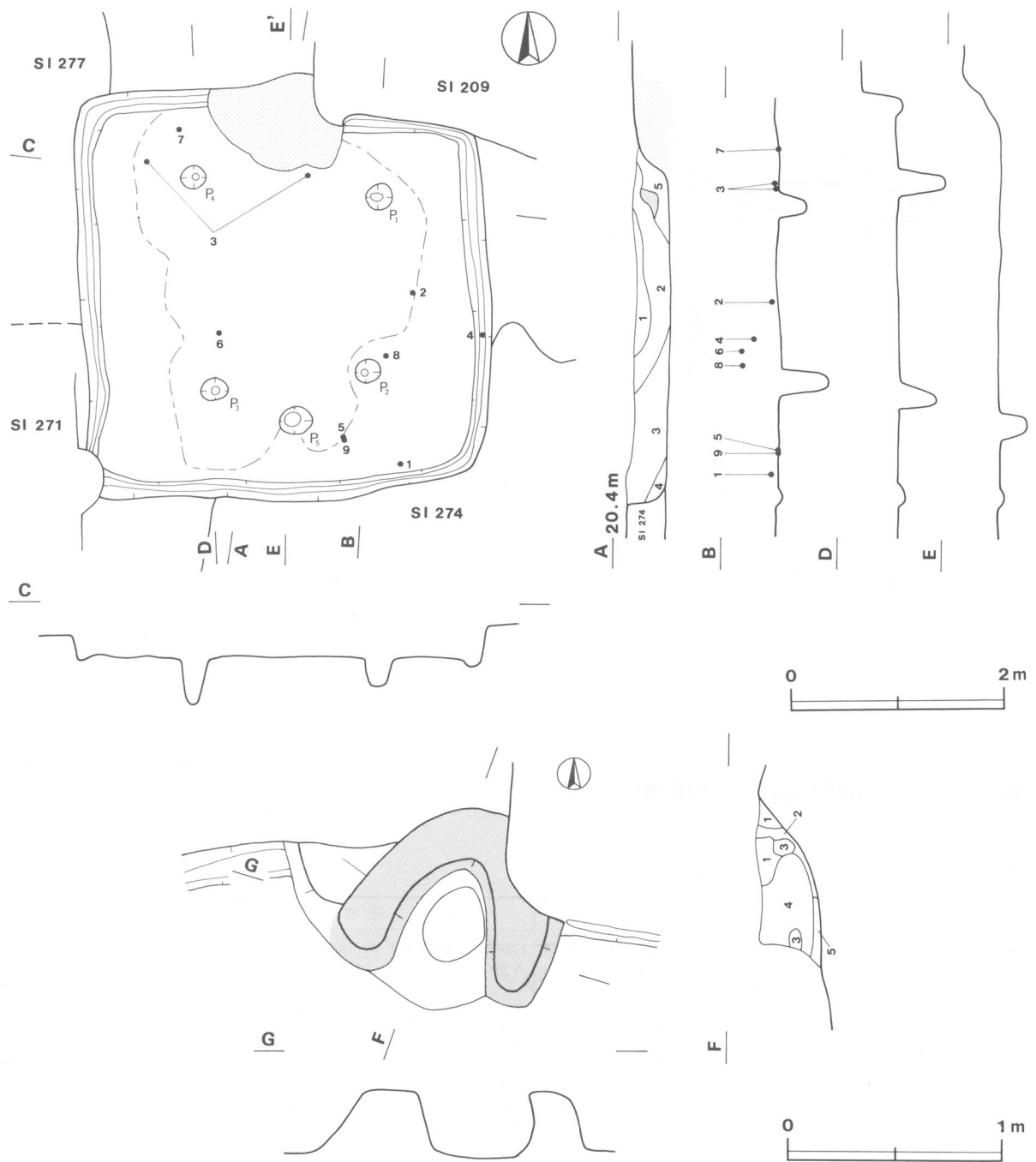
- 1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 3 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子多量，焼土中ブロック・炭化粒子中量
- 4 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子中量
- 5 暗褐色 粘土多量

ピット 5か所(P₁～P₅)。P₁～P₄は，径25～30cmの円形で，深さ29～47cmである。いずれも主柱穴と考えられる。P₅は，径25cmの円形で，深さ28cmである。出入り口に伴うピットと考えられる。

覆土 5層からなり，自然堆積である。

土層解説

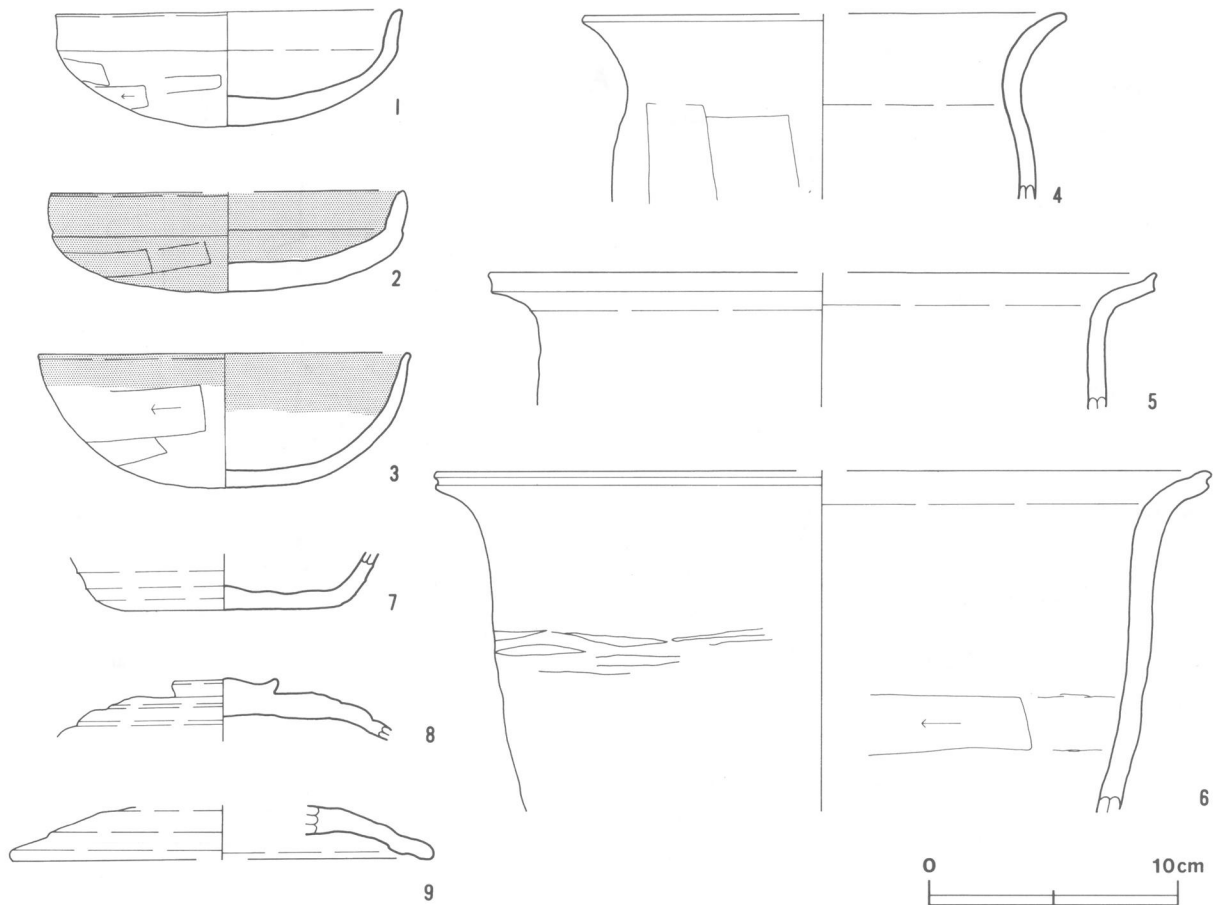
- 1 黒褐色 ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
- 2 黒褐色 ローム粒子中量，焼土粒子・ローム小ブロック少量
- 3 極暗褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 黒褐色 ローム粒子少量，ローム中・小ブロック微量
- 5 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量，ローム小ブロック微量



第374図 第272号住居跡実測図

遺物 土師器片141点，須恵器片40点が出土している。1の土師器坏は南東コーナー付近の覆土下層から正位で，2の土師器坏は東壁際の覆土下層から正位で，3の土師器碗は竈付近の覆土下層から，7の須恵器坏は竈左袖部付近の床面直上から逆位で，9の須恵器蓋はP₅付近の床面直上から正位でそれぞれ出土している。

所見 本跡の時期は，遺構の形態や出土遺物から奈良時代の8世紀前葉と考えられる。



第375図 第272号住居跡出土遺物実測図

第272号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第375図 1	坏 土師器	A 13.8 B 4.7	口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部と体部との境に稜を持つ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底部外面へラ削り。	砂粒・雲母・スコリア ア 橙色 普通	P1196 95% 南東コー ナー付近覆土下層
2	坏 土師器	A[14.0] B 3.9	体部一部欠損。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部と体部との境に稜を持つ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底部外面へラ削り。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・スコリア 内・外面黒色 普通	P1197 50% 東壁際覆土下層
3	碗 土師器	A 14.7 B 5.5	底部一部欠損。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。体部・底部外面へラ削り。内・外面の一部黒色処理。	砂粒・石英・スコリア ア 橙色 普通	P1199 60% 竈付近覆土下層
4	甕 土師器	A[19.4] B(7.5)	口縁部片。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・スコリア 明赤褐色 普通 煤付着	P1200 20% 覆土中
5	甕 土師器	A[26.8] B(5.4)	口縁部片。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・石英・長石・ スコリア 橙色 普通	P1201 5% P5付近覆土下層
6	甕 土師器	A[31.2] B(13.7)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面へラ削り。	砂粒・石英・長石・ 雲母・スコリア 橙色 普通 煤付着	P1203 10% 中央付近覆土上層
7	坏 須恵器	B(2.2) C 8.0	底部片。体部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面クロナデ。底部多方向のへラ削り。	砂粒・石英・長石・ 雲母 灰黄色 普通	P1204 30% 左袖部付近床直
8	蓋 須恵器	B(2.5) F 4.3 G 0.6	天井部片。ボタン状のつまみが付く。天井部は皿形をしている。	天井部回転へラ削り。内面クロナデ。	砂粒・石英・長石・ 雲母 明褐色 普通	P1205 20% 中央付近覆土上層

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第375図 9	蓋 須恵器	A[17.0] B(2.2)	天井部から口縁部にかけての破片。 天井部は皿形をしている。口縁部の かえりは短い。	天井部回転ヘラ削り。口縁部・内面 ロクロナデ。	長石・雲母・スコリア 灰黄褐色 普通	P1206 20% P5付近床直

第273号住居跡（第376図）

位置 調査6区南西部，N14c1区。

重複関係 第299・305号住居跡の上部に構築されており，本跡が新しい。

規模と平面形 床の一部と竈を確認しただけで，規模や平面形は不明である。

主軸方向 [N-90°-E]

床 削平により不明である。

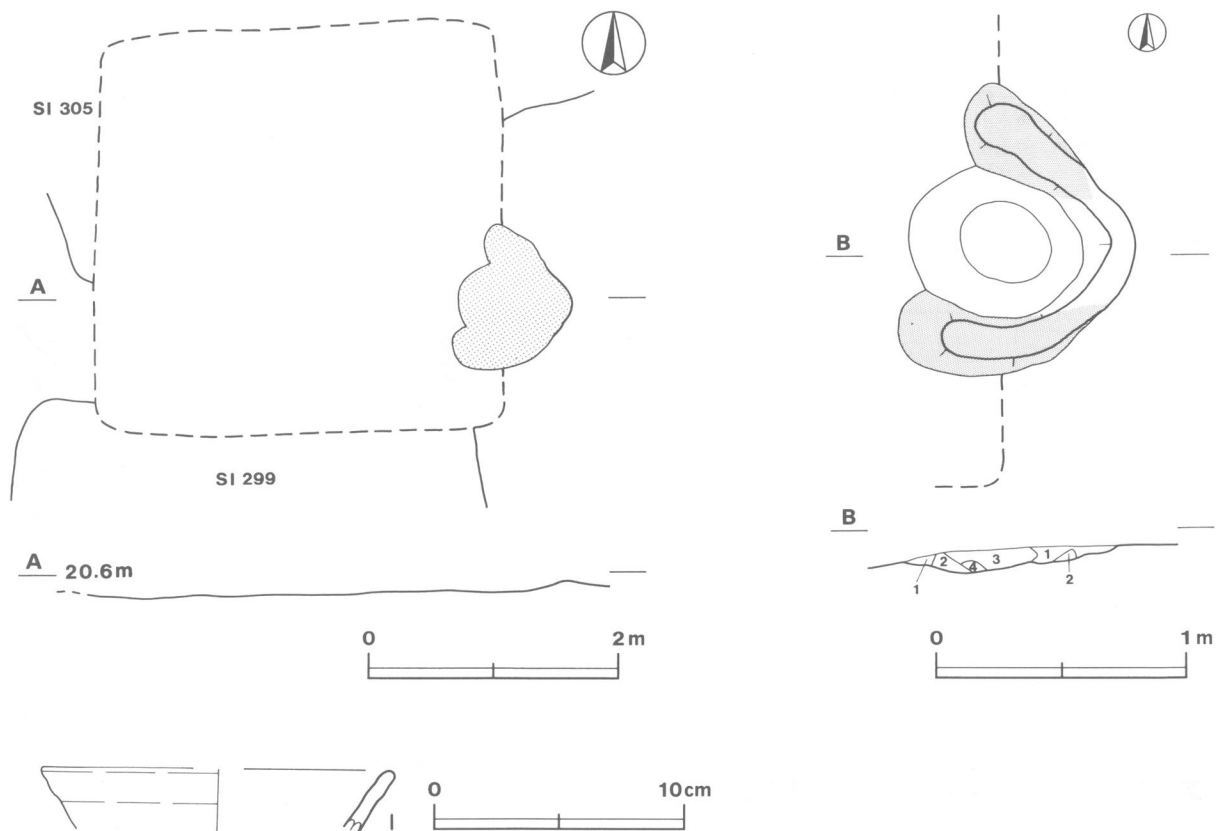
竈 東壁に付設されている。削平により袖部の遺存状況は悪く，規模は長さ(90)cm，袖幅(120)cmである。袖部は砂質粘土で構築されている。火床部は楕円形に浅く掘りくぼめられており，煙道部は削平され不明である。

竈土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土粒子中量，焼土小ブロック少量，炭化粒子微量
- 2 暗赤褐色 焼土粒子多量
- 3 暗赤褐色 焼土粒子中量，焼土小ブロック・炭化粒子少量，ローム粒子微量
- 4 暗赤褐色 焼土粒子多量，焼土小ブロック少量，炭化粒子微量

遺物 土師器片117点，須恵器片14点が出土しているが，ほとんどが細片である。1の須恵器坏は混入である。

所見 本跡に伴う遺物が少なく，明確な時期を断定できないが，遺構の形態から平安時代の10世紀以降と考えられる。



第376図 第273号住居跡・出土遺物実測図

第273号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第376図 1	坏 須恵器	A[14.2] B(2.5)	口縁部片。口縁部は外傾する。	口縁部内・外面ロクロナデ。	砂粒・長石・スコリアに ぶい黄橙色 普通	P1207 10% 覆土中

第275号住居跡 (第378図)

位置 調査6区中央部, M14j7区。

重複関係 第274号住居跡の上部に構築されており, 本跡が新しい。また第276号住居跡と重複しているが, 新旧関係は不明である。

規模と平面形 第276号住居跡の床面と本跡南部の床面の高さが同じで, 規模や平面形はとらえられなかった。また第275・276号住居跡は, 同一住居跡の可能性もある。

主軸方向 N-4°-E

壁 壁高は26~28cmで, 外傾して立ち上がる。

壁溝 北壁下から東壁下にかけて確認した。上幅15~20cm, 下幅10~12cm, 深さ7cmほどで, 断面形はU字形である。

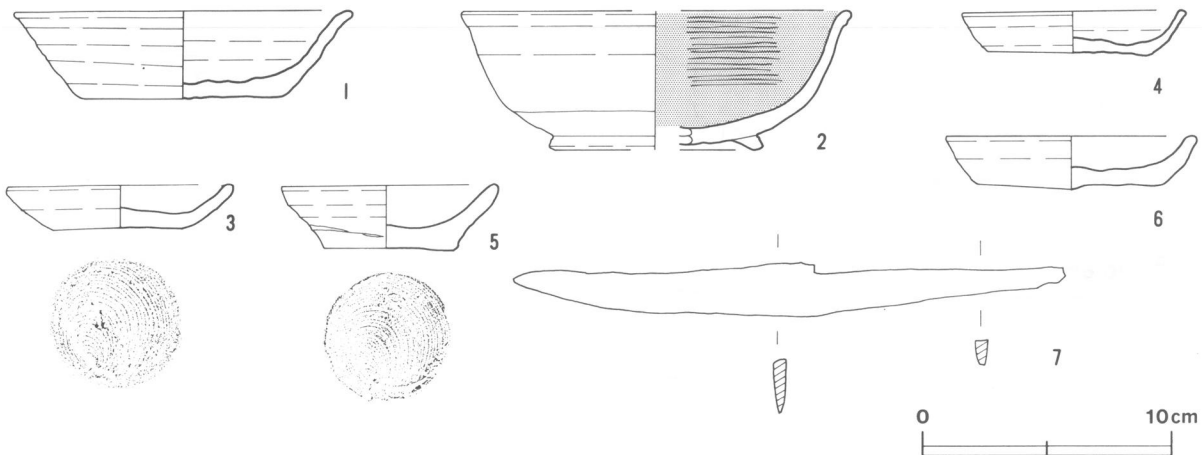
床 全体的に平坦で, 竈前面がよく踏み固められている。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は長さ150cm, 袖幅60cm, 壁外への掘り込みは82cmである。袖部は砂質粘土で構築されており, 両袖部内には補強材として雲母片岩が入っている。火床部は楕円形に浅く掘りくぼめられ, 煙道部は火床部から緩やかに立ち上がる。

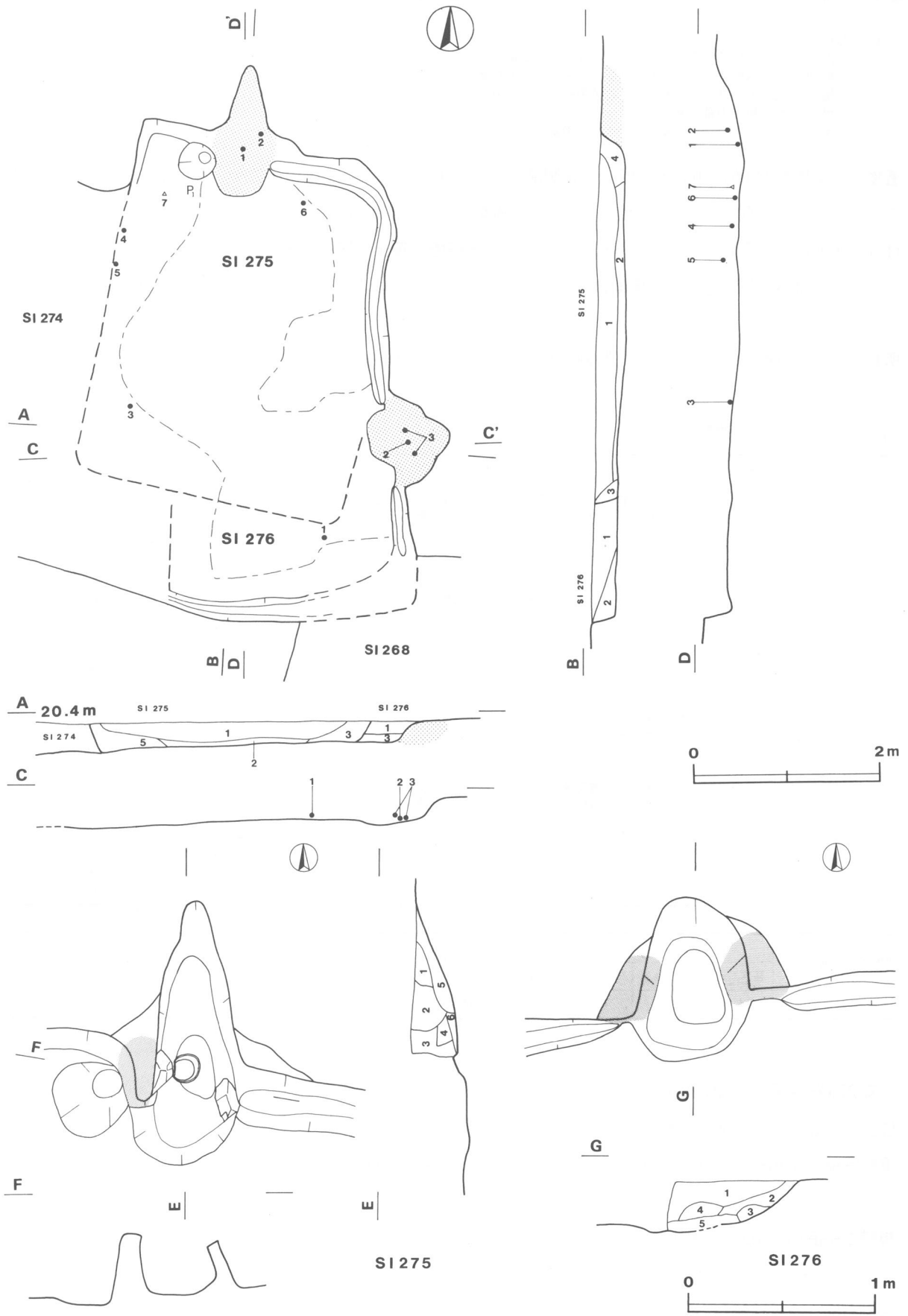
竈土層解説

- 1 極暗赤褐色 焼土粒子多量, 炭化粒子中量
- 2 暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子多量
- 3 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子少量
- 4 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子多量
- 5 極暗赤褐色 焼土粒子多量, 炭化粒子中量
- 6 暗赤褐色 炭化粒子多量, 焼土粒子少量

ピット 1か所(P₁)。P₁は, 径20cmの円形で, 深さ31cmである。性格は不明である。



第377図 第275号住居跡出土遺物実測図



第378図 第275・276号住居跡実測図

覆土 5層からなり、ロームブロックが混じり人為堆積と推定される。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量, ローム中・小ブロック少量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土小ブロック・焼土粒子微量
- 3 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量, ローム中ブロック少量
- 4 黒褐色 焼土粒子中量, 焼土小ブロック・ローム小ブロック少量
- 5 黒褐色 ローム小ブロック多量, 焼土粒子中量

遺物 土師器片333点, 須恵器片27点, 鉄製品1点が出土している。1の須恵器坏, 2の土師器高台付椀は竈内から出土している。1は正位で出土しており, 竈祭祀の可能性が考えられる。3の土師器小皿は南西コーナー付近の床面直上から正位で, 4, 5の土師器小皿は西壁際の覆土下層と覆土中層から, 4は正位で, 5は逆位で, 6の土師器小皿は竈付近の床面直上から逆位で, 7の刀子は北西コーナー付近の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 本跡は規模や平面形が不明で時期を断定しにくい, 出土遺物から平安時代の10世紀以降と考えられる。

第275号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第377図 1	坏 須恵器	A 13.6 B 3.7 C 8.0	体部一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり, 口縁部に至る。	口縁部から体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒・雲母・スコリア 橙色 普通	P1212 95% 竈内
2	高台付椀 土師器	A[15.7] B 5.5 D[8.6] E 0.7	底部から口縁部にかけての破片。高台は短く, ハの字状に開く。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部はわずかに外反する。	口縁部から体部外面横ナデ。体部内面へラ磨き。体部下位回転ヘラ削り調整。高台貼り付け後, ナデ。内面黒色処理。	砂粒・長石・雲母・スコリア 外面橙色・内面黒色 普通	P1213 40% 竈内
3	小皿 土師器	A 9.0 B 1.9 C 5.2	平底。体部は外傾して立ち上がり, 口縁部に至る。	口縁部から体部内・外面ロクロナデ。底部回転糸切り。	砂粒・長石・雲母・スコリア 橙色 普通	P1214 100% 南西コーナー付近床直
4	小皿 土師器	A 9.0 B 1.8 C 6.4	平底。体部は外傾して立ち上がり, 口縁部に至る。	口縁部から体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒・雲母・スコリア 橙色 普通	P1215 100% 西壁際覆土下層
5	小皿 土師器	A 8.8 B 2.7 C 5.3	平底。体部は内彎気味に立ち上がり, 口縁部に至る。器壁は厚い。	口縁部から体部内・外面ロクロナデ。底部回転糸切り。	砂粒・長石・雲母に ぶい黄橙色 普通	P1216 100% 西壁際覆土中層
6	小皿 土師器	A 10.0 B 2.2 C 7.2	平底。体部は外傾して立ち上がり, 口縁部に至る。	口縁部から体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒・長石・雲母・スコリア 橙色 普通	P1217 100% 竈付近床直

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
7	刀子	14.8	1.5	0.3	16	北西コーナー付近覆土下層	M1014 95%

第276号住居跡 (第378図)

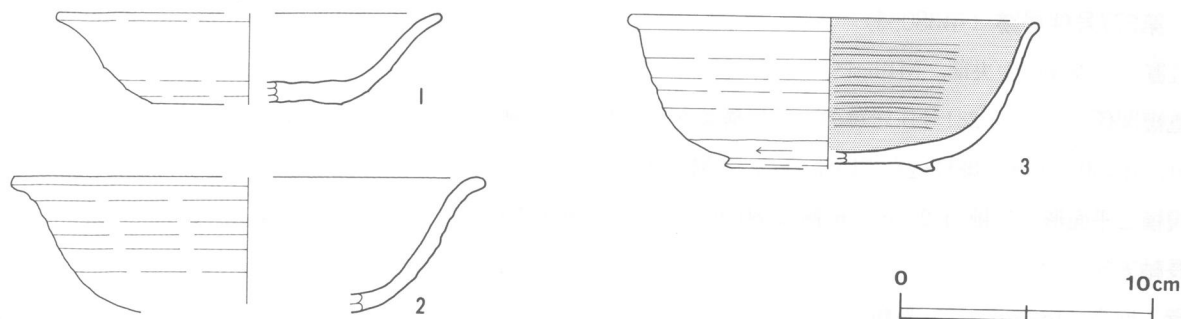
位置 調査6区中央部, M14j7区。

重複関係 第268・274号住居跡の上に構築されており, 本跡が新しい。また第275号住居跡と重複しているが, 新旧関係は不明である。

規模と平面形 第275号住居跡中央部の床面と本跡床面の高さが同じで, 規模や平面形はとらえられなかった。また第275・276号住居跡は同一住居跡の可能性もある。

主軸方向 [N-90°-E]

壁 壁高は20~30cmで, 外傾して立ち上がる。



第379図 第276号住居跡出土遺物実測図

第276号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第379図 1	坏 土師器	A[15.2] B 3.1 C[7.5]	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はやや外反する。	口縁部から体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒・石英・雲母にぶい褐色 普通 内面煤付着	P1218 25% 竈付近覆土下層
2	碗 土師器	A[18.8] B(5.3)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はやや外反する。	口縁部から体部内・外面ロクロナデ。	砂粒・長石・雲母にぶい黄橙色 普通	P1219 20% 竈内
3	高台付碗 土師器	A 16.3 B 6.1 D[8.3] E 0.4	体部一部欠損。高台は短くハの字状に開く。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はやや外反する。	口縁部から体部外面ロクロナデ。内面ヘラ磨き。高台貼り付け後、ナデ。内面黒色処理。	砂粒・長石・雲母・スコリア 外面にぶい橙色・内面黒色 普通	P1220 45% 竈内

壁溝 東壁下で確認した。上幅15～20cm，下幅10～12cm，深さ7cmほどで，断面形はU字形である。

床 全体的に平坦で，竈前面がよく踏み固められている。

竈 東壁に付設されている。規模は長さ95cm，袖幅95cm，壁外への掘り込みは55cmである。袖部は砂質粘土で構築されている。火床部は楕円形に浅く掘りくぼめられ，煙道部は火床部から緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量
- 2 黒褐色 焼土粒子中量，炭化粒子・ローム粒子少量，焼土小ブロック・炭化物微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量，炭化粒子・焼土粒子微量
- 4 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量
- 5 暗褐色 焼土粒子多量，炭化粒子中量，ローム粒子微量

覆土 3層からなり，自然堆積と推定される。

土層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量
- 2 黒褐色 炭化粒子多量，ローム小ブロック少量
- 3 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量

遺物 土師器片122点，須恵器片22点が出土している。1の土師器坏は竈付近の覆土下層から，2の土師器碗，3の土師器高台付碗は竈内からそれぞれ出土している。

所見 本跡は規模や平面形が不明で時期を断定しにくい，出土遺物から平安時代の10世紀以降と考えられる。

第277号住居跡（第380図）

位置 調査6区中央部，M14h5区。

重複関係 第272・281号住居跡の上部に構築されており，本跡が新しい。また第271号住居跡が上部に構築され，第150号土坑が掘り込んでいるので，本跡が古い。

規模と平面形 長軸[3.25]m，短軸[2.80]mの長方形と推定される。

長軸方向 [N-0°]

壁 壁高は18~26cmで，外傾して立ち上がる。

床 全体的に平坦で，軟らかい。

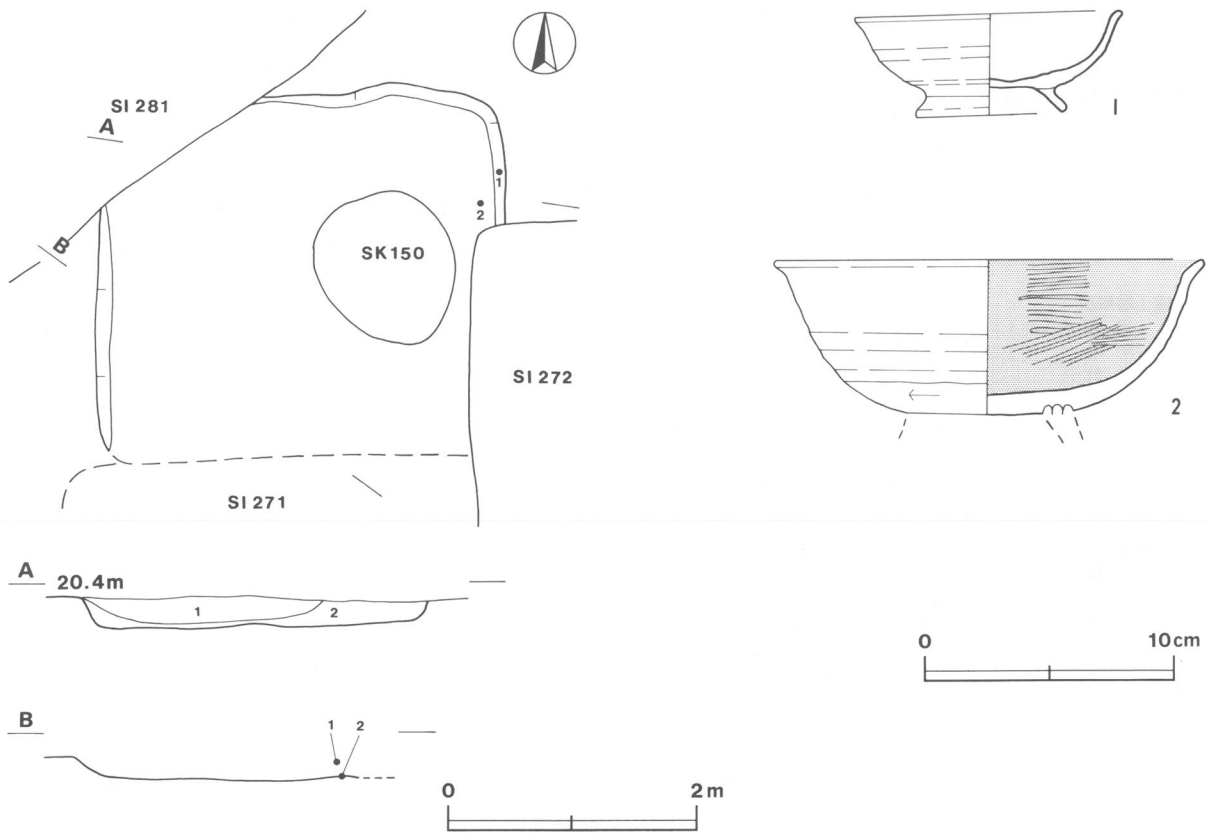
覆土 2層からなるが，覆土が浅く堆積状況は不明である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量

遺物 土師器片116点，須恵器片10点が出土している。1の土師器高台付坏は東壁際の覆土中層から逆位で，2の土師器高台付碗は東壁際の覆土下層から斜位でそれぞれ出土している。

所見 本跡の時期は，出土遺物から平安時代の10世紀以降と考えられる。



第380図 第277号住居跡・出土遺物実測図

第277号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第380図 1	高台付坏 土師器	A 10.8 B 4.2 D 6.0 E 1.1	高台はハの字状に開く。体部は内彎 気味に立ち上がり、口縁部はわずかに 外反する。	口縁部から体部内・外面クロナデ。 高台貼り付け後、ナデ。	砂粒・雲母・スコリア 橙色 普通	P1221 100% 東壁際覆土中層
2	高台付碗 土師器	A 17.3 B(6.2)	高台欠損。体部は内彎して立ち上がり、 口縁部はわずかに外反する。	口縁部から体部外面クロナデ。内 面ヘラ磨き。内面黒色処理。	砂粒・石英・長石・ 雲母 外面にぶい橙 色 内面黒色 普通	P1222 85% 東壁際覆土下層

第278号住居跡（第381図）

位置 調査6区中央部，M14i2区。

重複関係 第279号住居跡を掘り込んでおり，本跡が新しい。また第151号土坑に掘り込まれているので，本跡が古い。

規模と平面形 長軸3.38m，短軸2.87mの長方形である。

主軸方向 N-85°-E

壁 壁高は30～35cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝 上幅12cm，下幅8cm，深さ5cmで，断面形はU字形である。ほぼ全周している。

床 全体的に平坦で，竈前面がよく踏み固められている。

竈 東壁南東コーナー寄りに付設されている。規模は長さ92cm，袖幅65cm，壁外への掘り込みは50cmである。袖部は砂質粘土で構築されている。火床部中央には雲母片岩の支脚が置かれている。火床部は円形に浅く掘りくぼめられ，煙道部は火床部から外傾して立ち上がる。

竈土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子・ローム粒子少量，焼土小ブロック・ローム小ブロック微量
- 2 暗赤褐色 焼土粒子多量
- 3 極暗褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量，炭化粒子・炭化物微量
- 4 極暗褐色 焼土粒子・炭化物少量
- 5 暗褐色 焼土粒子中量，焼土小ブロック・炭化粒子少量

貯蔵穴 南西コーナー部に付設されている。径50cmの円形で，深さ20cmである。断面形は皿状をしている。

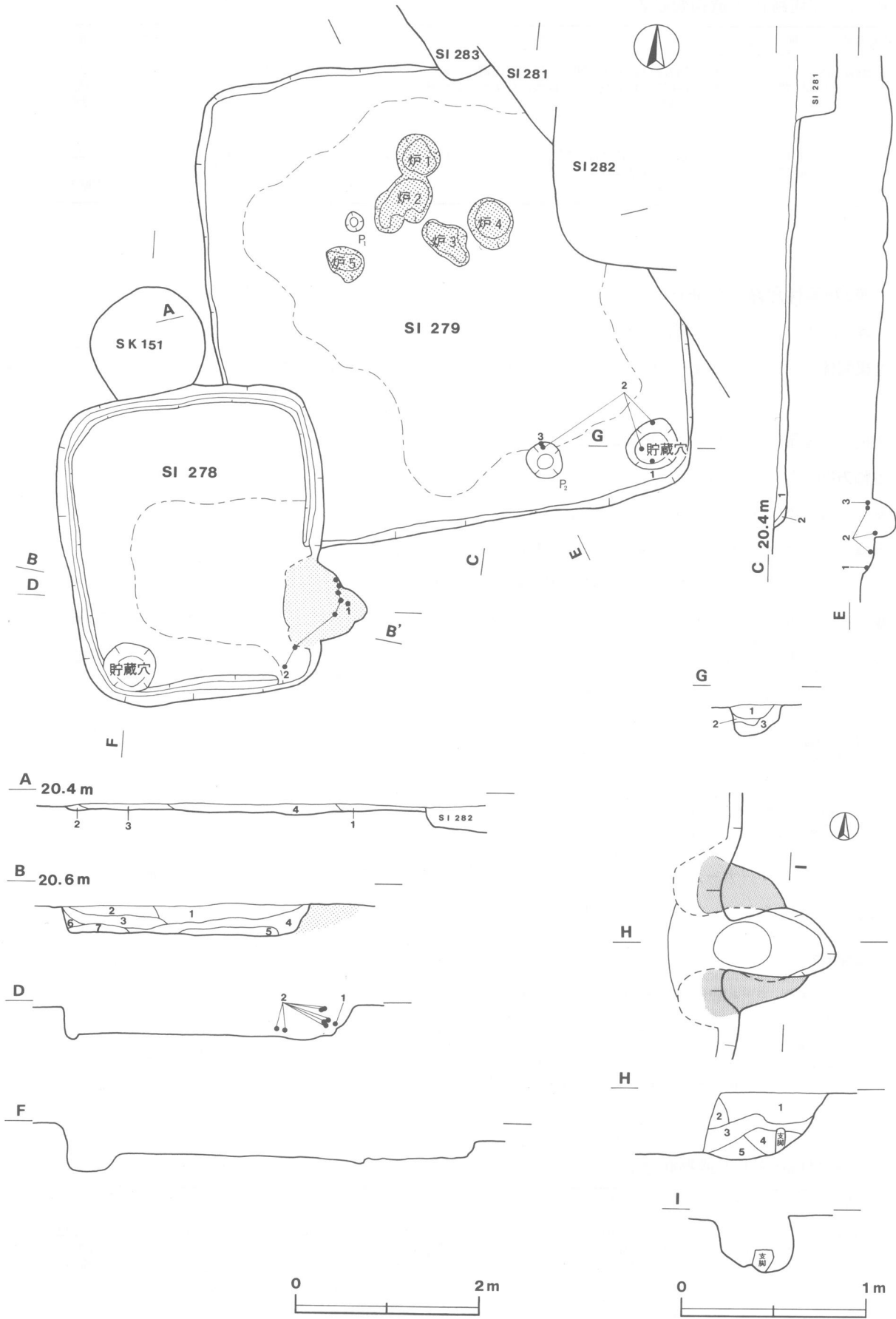
覆土 7層からなり，ブロック状の堆積で人為堆積と考えられる。

土層解説

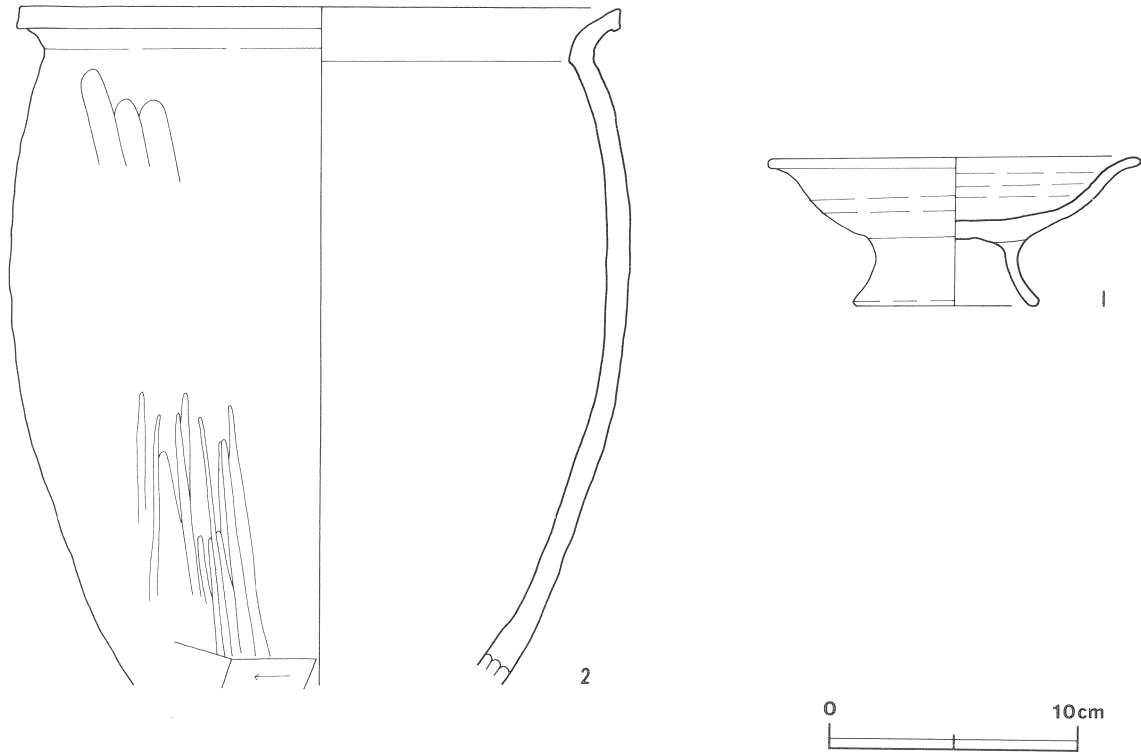
- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量，ローム中ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 極暗褐色 ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子・炭化物・ローム中ブロック少量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量，炭化粒子少量
- 4 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量
- 5 極暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量，炭化粒子・焼土粒子微量
- 6 黒褐色 ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
- 7 暗褐色 炭化物中量，炭化粒子・ローム中・小ブロック微量

第278号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第382図 1	足高台坏 土師器	A 15.0 B 6.1 C 7.3 E 2.8	高台一部欠損。高台は長くハの字状 に開く。体部は内彎気味に立ち上がり、 口縁部はやや外反する。	口縁部から体部内・外面クロナデ。 高台貼り付け後，ナデ。	砂粒・長石・雲母・ スコリア 橙色 普通 外面煤付着	P1223 90% 竈内
2	甕 土師器	A 24.1 B(27.3)	体部から口縁部にかけての破片。体 部は内彎して立ち上がり，口縁部は 外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面中 位から下位にかけて，縦方向のヘラ 磨き。内面ナデ。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通 外面煤付着	P1224 50% 竈内・甕付近



第381图 第278・279号住居跡実測図



第382図 第278号住居跡出土遺物実測図

遺物 土師器片187点，須恵器片25点，礫1点が出土している。1の土師器足高台坏は竈内から，2の土師器甕は竈内とその付近からそれぞれ出土している。

所見 本跡の時期は，遺構の形態や出土遺物から平安時代の10世紀以降と考えられる。

第282号住居跡（第383図）

位置 調査6区中央部，M14h4区。

重複関係 第280号住居跡に掘り込まれており，本跡が古い。また第279・281・283号住居跡の上部に構築されているので，本跡が新しい。

規模と平面形 長軸[6.48]m，短軸[4.50]mの長方形と推定される。

主軸方向 [N-0°]

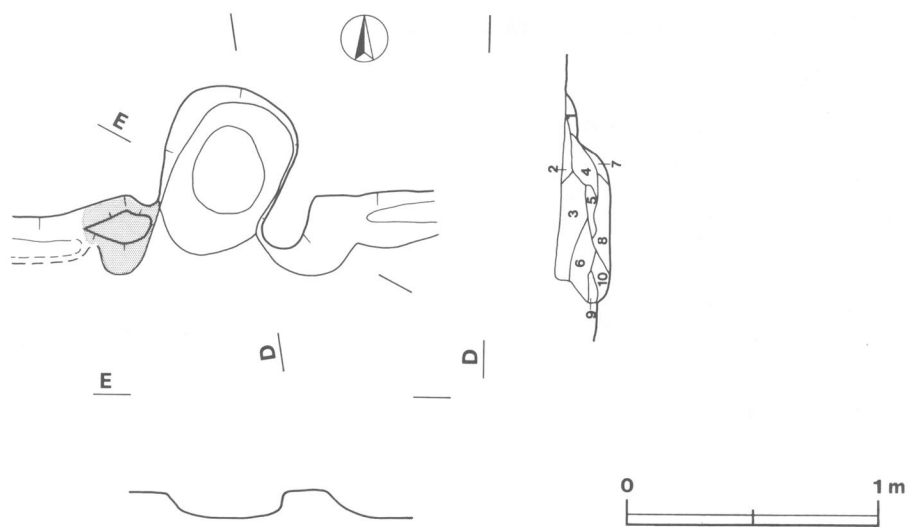
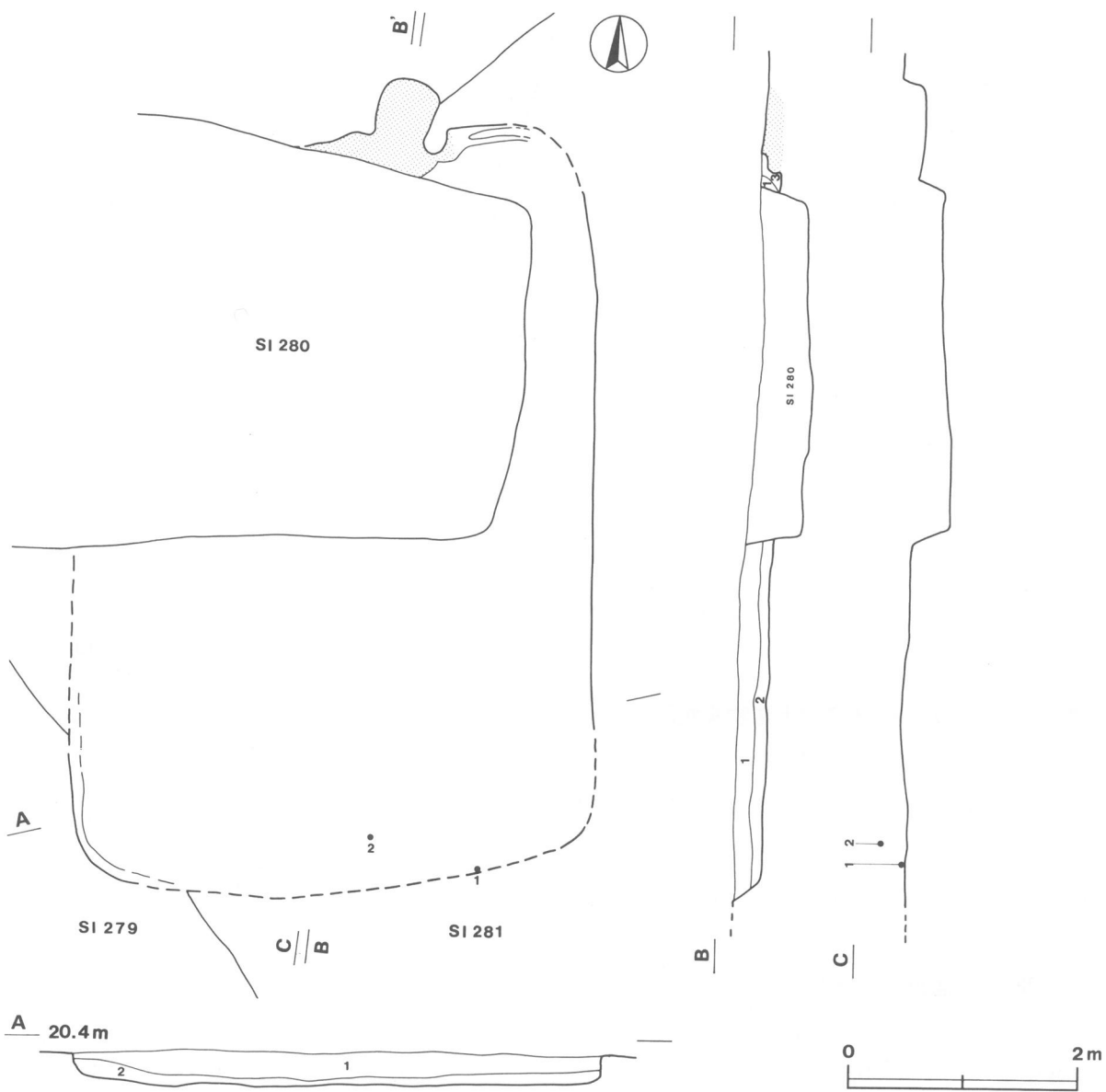
壁 壁高は20～32cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝 北壁下で確認した。上幅15cm，下幅8cm，深さ5cmで，断面形はU字形である。

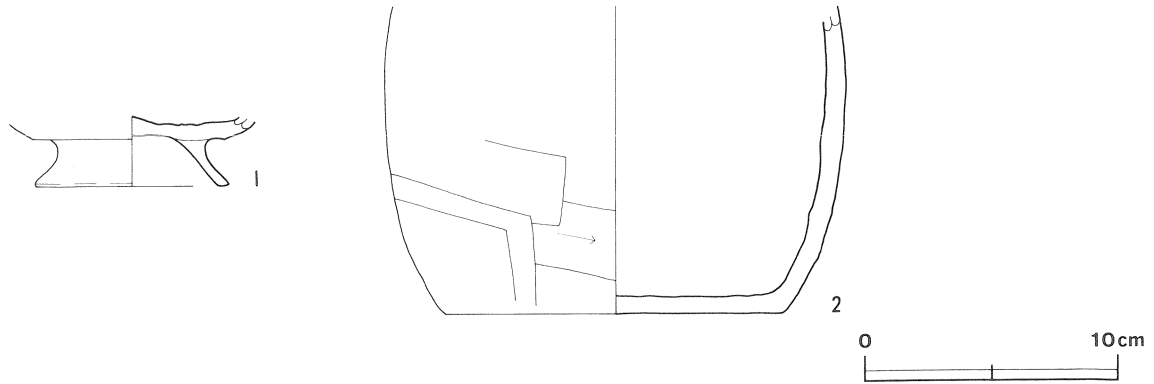
床 はほぼ平坦と思われる。竈前面が踏み固められている。

第282号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第384図 1	高台付碗 土師器	B(2.5) D 7.7 E 1.7	底部片。高台はハの字状に開く。	体部内・外面ロクロナデ。高台貼り付け後，ナデ。	石英・長石・雲母にぶい橙色普通	P1258 10% 南壁際覆土下層
2	甕 土師器	B(12.2) C[13.4]	底部から体部にかけての破片。平底。体部は内彎して立ち上がる。	体部外面ヘラ削り。内面ナデ。	砂粒・長石にぶい橙色普通	P1259 10% 南壁際覆土下層



第383图 第282号住居跡実測図



第384図 第282号住居跡出土遺物実測図

竈 北壁中央部に付設されている。袖部の遺存状況は悪く、規模は長さ65cm、袖幅110cm、壁外への掘り込みは45cmである。袖部は砂質粘土で構築されており、袖部内には補強材として雲母片岩が用いられている。火床部は円形に12cmほど掘りくぼめられており、煙道部は削平され不明である。

竈土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土粒子中量, ローム小ブロック・ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 2 黒褐色 焼土小ブロック・焼土粒子少量, 炭化粒子・ローム粒子微量
- 3 黒褐色 焼土小ブロック・焼土粒子少量, 炭化粒子・ローム小ブロック微量
- 4 暗褐色 焼土小ブロック・焼土粒子少量, 炭化粒子・ローム粒子微量
- 5 暗赤褐色 焼土粒子中量, 炭化粒子・ローム粒子少量
- 6 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子少量, ローム粒子微量
- 7 暗赤褐色 焼土粒子中量, 炭化粒子・ローム粒子少量
- 8 極暗赤褐色 焼土粒子中量, 焼土小ブロック・炭化粒子・ローム粒子少量
- 9 褐色 焼土粒子少量, 炭化粒子微量
- 10 極暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量

覆土 3層からなり、ロームブロックがみられ人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック微量

遺物 土師器片292点, 須恵器片38点が出土している。1の土師器高台付椀, 2の土師器甕は南壁際の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 本跡の時期は、遺構の形態や出土遺物から平安時代の10世紀以降と考えられる。

第284号住居跡 (第385図)

位置 調査6区中央部, M14i4区。

重複関係 第285号住居跡, 第165号土坑に掘り込まれており, 本跡が古い。また第281号住居跡の上部に構築されているので, 本跡が新しい。

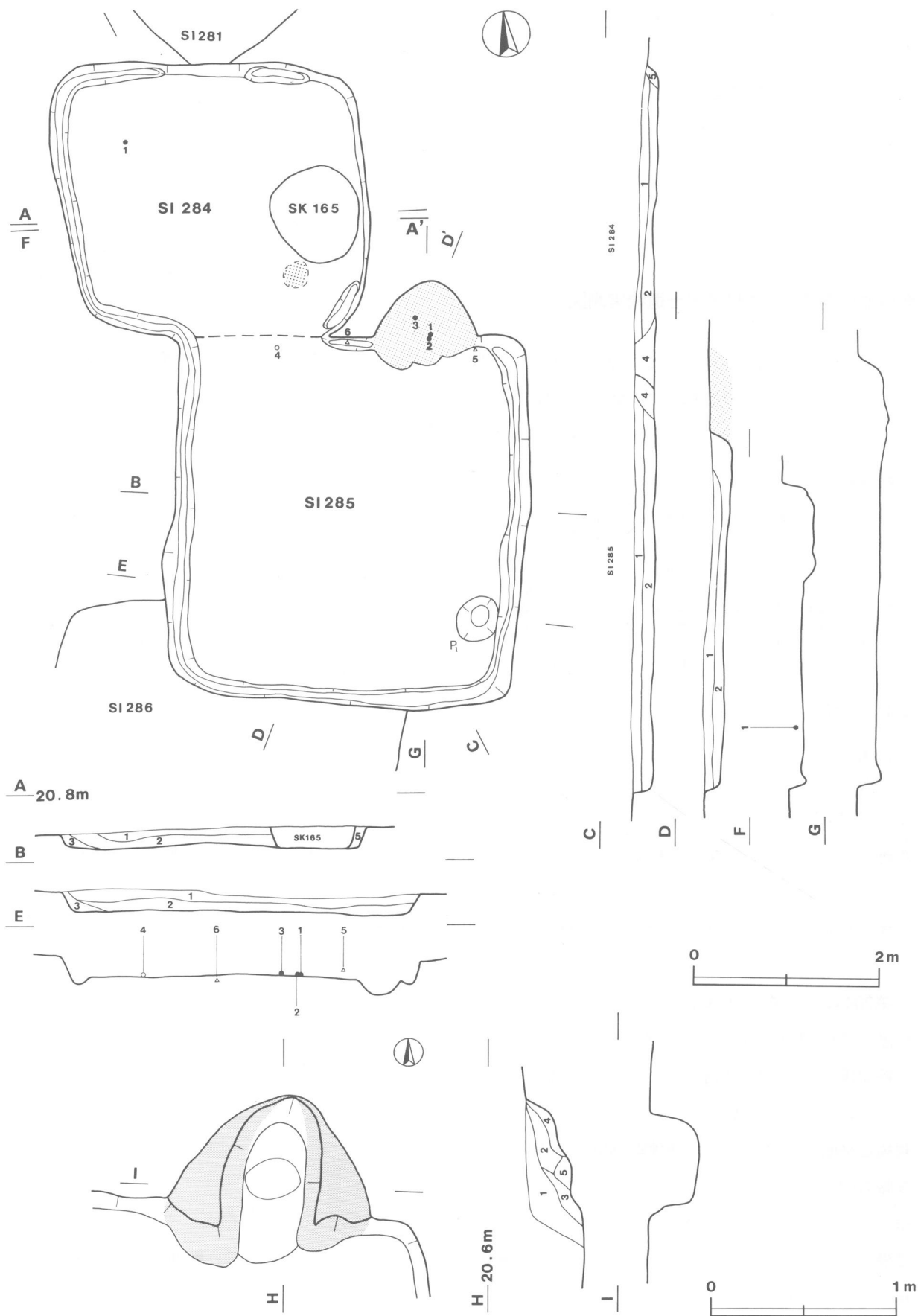
規模と平面形 長軸3.32m, 短軸2.93mの長方形である。

長軸方向 N-4°-E

壁 壁高は14~23cmで, 外傾して立ち上がる。

壁溝 北壁下から西壁下にかけて巡っている。上幅10cm, 下幅8cm, 深さ5cmほどで, 断面形はU字形である。

床 全体的に平坦で, 軟らかい。



第385图 第284・285号住居跡実測図

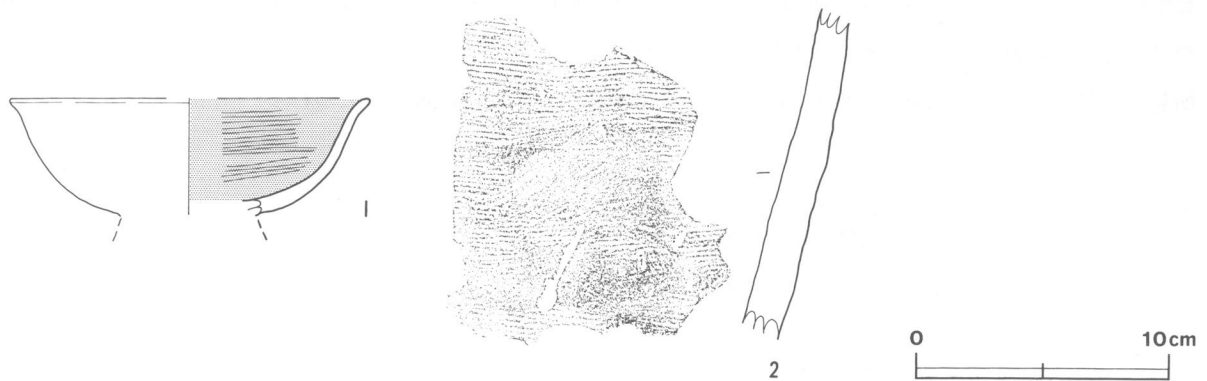
覆土 5層からなり、自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化物・炭化粒子・ローム小ブロック微量
- 3 極暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・ローム中ブロック微量
- 4 極暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・ローム小ブロック微量
- 5 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物 土師器片298点、須恵器片33点が出土している。1の土師器高台付椀は西壁際の覆土下層から出土している。2は須恵器甕の体部片で、外面には横位の平行叩きが施されている。

所見 本跡に伴う遺物が少なく明確な時期を断定できないが、第285号住居跡に掘り込まれていることから平安時代の10世紀中葉以前の時期と考えられる。



第386図 第284号住居跡出土遺物実測図

第284号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第386図 1	高台付椀 土師器	A[14.2] B(4.5)	体部片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部から体部外面ロクロナデ。体部内面へラ磨き。内面黒色処理。	砂粒・長石・雲母 外面にぶい黄橙色 内面黒色 普通	P1260 10% 西壁際覆土下層

第285号住居跡 (第385図)

位置 調査6区中央部, M14j4区。

重複関係 第284・286号住居跡を掘り込んでおり、本跡が新しい。

規模と平面形 長軸3.83m, 短軸3.83mの方形である。

主軸方向 N-8°-E

壁 壁高は16~25cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 上幅15cm, 下幅10cm, 深さ8cmほどで、断面形はU字形である。ほぼ全周している。

床 全体的に平坦で、竈前面がよく踏み固められている。

竈 北壁北東コーナー寄りに付設されている。規模は長さ95cm, 袖幅105cm, 壁外への掘り込みは60cmである。袖部は砂質粘土で構築されている。火床部は楕円形に浅く掘りくぼめられ、火床部中央には雲母片岩の支脚が付設されている。煙道部は火床部から外傾して立ち上がる。

竈土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量
- 2 極暗褐色 焼土粒子中量, 炭化粒子少量
- 3 極暗褐色 炭化粒子・ローム粒子中量
- 4 暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子多量
- 5 極暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子多量

ピット 1か所(P₁)。P₁は径50cmの円形で、深さ19cmである。性格は不明である。

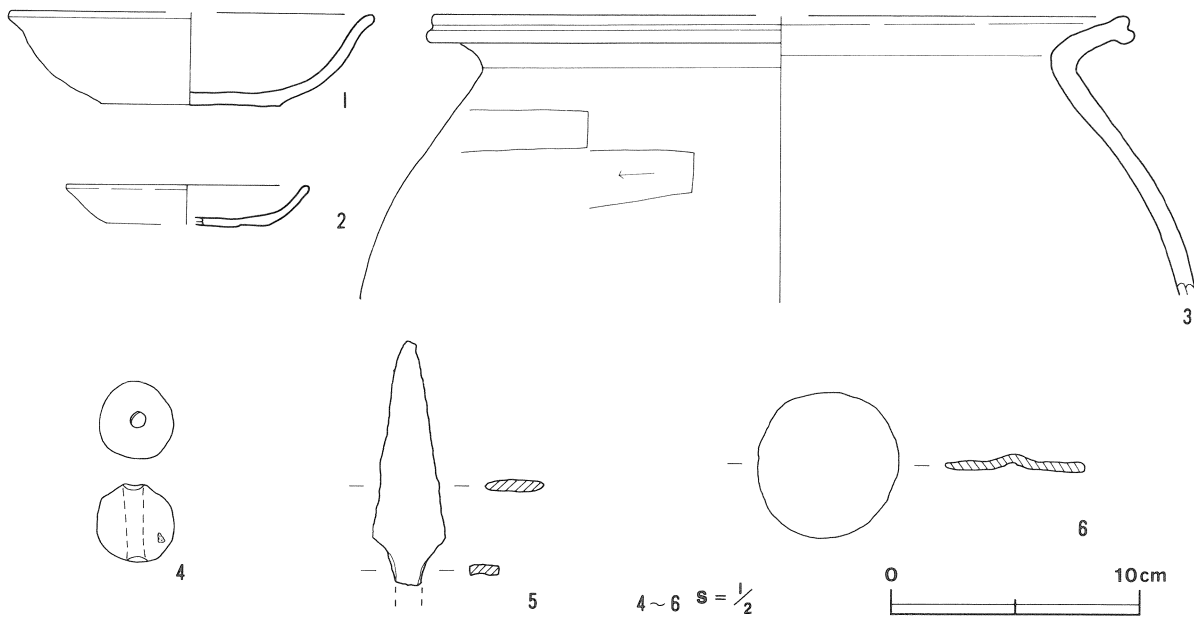
覆土 4層からなり、自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子・焼土小ブロック・炭化粒子・炭化物・ローム粒子・ローム小ブロック微量
- 2 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子・ローム小ブロック微量
- 3 極暗褐色 炭化粒子・ローム粒子微量
- 4 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子・ローム小ブロック少量

遺物 土師器片468点、須恵器片53点、鉄製品2点、土製品1点が出土している。1の土師器坏、3の土師器甕が竈内から、2の土師器小皿が竈内から逆位で、5の鉄鏃が北東コーナー付近の覆土下層から、6の不明鉄製品が北壁際の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 本跡の時期は、遺構の形態や出土遺物から平安時代の10世紀以降と考えられる。



第387図 第285号住居跡出土遺物実測図

第285号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第387図 1	坏 土師器	A[14.4] B 3.7 C 7.1	体部一部欠損。平底。体部は内彎気味に外傾し、口縁部はわずかに外反する。	口縁部から体部内・外面ロクロナデ。底部回転糸切り。	砂粒・石英・長石・雲母にぶい 普通 外面煤付着	P1261 40% 竈内
2	小皿 土師器	A 9.6 B 1.6 C[6.3]	底部一部欠損。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部から体部内・外面ロクロナデ。	砂粒・雲母にぶい 普通 外面煤付着	P1262 80% 竈内
3	甕 土師器	A[27.6] B(11.5)	口縁部片。口縁部は強く外反する。口縁部上位に稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り。内面ナデ。	石英・長石・雲母にぶい 普通 外面煤付着	P1263 10% 竈内

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		径(cm)	長さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
第387図4	土玉	2.1	2.0	0.4	7	北壁際覆土下層	D P 1003 100%

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
5	鉄鏝	(6.6)	1.9	0.3	(8)	北東コーナー付近覆土下層	M1017 60%
6	不明鉄製品	3.8	3.9	0.3	(10)	北壁際覆土下層	M1018

第287号住居跡（第159図）

位置 調査6区中央部，N14b3区。

重複関係 第286号住居跡を掘り込んでおり，本跡が新しい。

規模と平面形 長軸3.75m，短軸3.22mの長方形である。

主軸方向 N-92°-E

壁 壁高は16～23cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝 上幅20cm，下幅10cm，深さ6cmほどで，断面形はU字形である。全周している。

床 全体的に平坦で，竈前面が踏み固められている。

竈 東壁南東コーナー寄りに付設されている。規模は長さ90cm，袖幅95cm，壁外への掘り込みは40cmである。

袖部は砂質粘土で構築されている。火床部は円形に浅く掘りくぼめられ，煙道部は火床部から緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子少量，焼土小ブロック・焼土中ブロック微量
- 2 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子中量，焼土小ブロック少量，焼土中ブロック微量
- 3 黒褐色 炭化粒子中量，焼土粒子・焼土小ブロック少量
- 4 極暗褐色 焼土粒子・炭化粒子中量，焼土小ブロック少量
- 5 暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子多量

貯蔵穴 北壁中央部に付設されている。径70cmの円形で，深さ10cmほどである。断面形は皿状をしている。

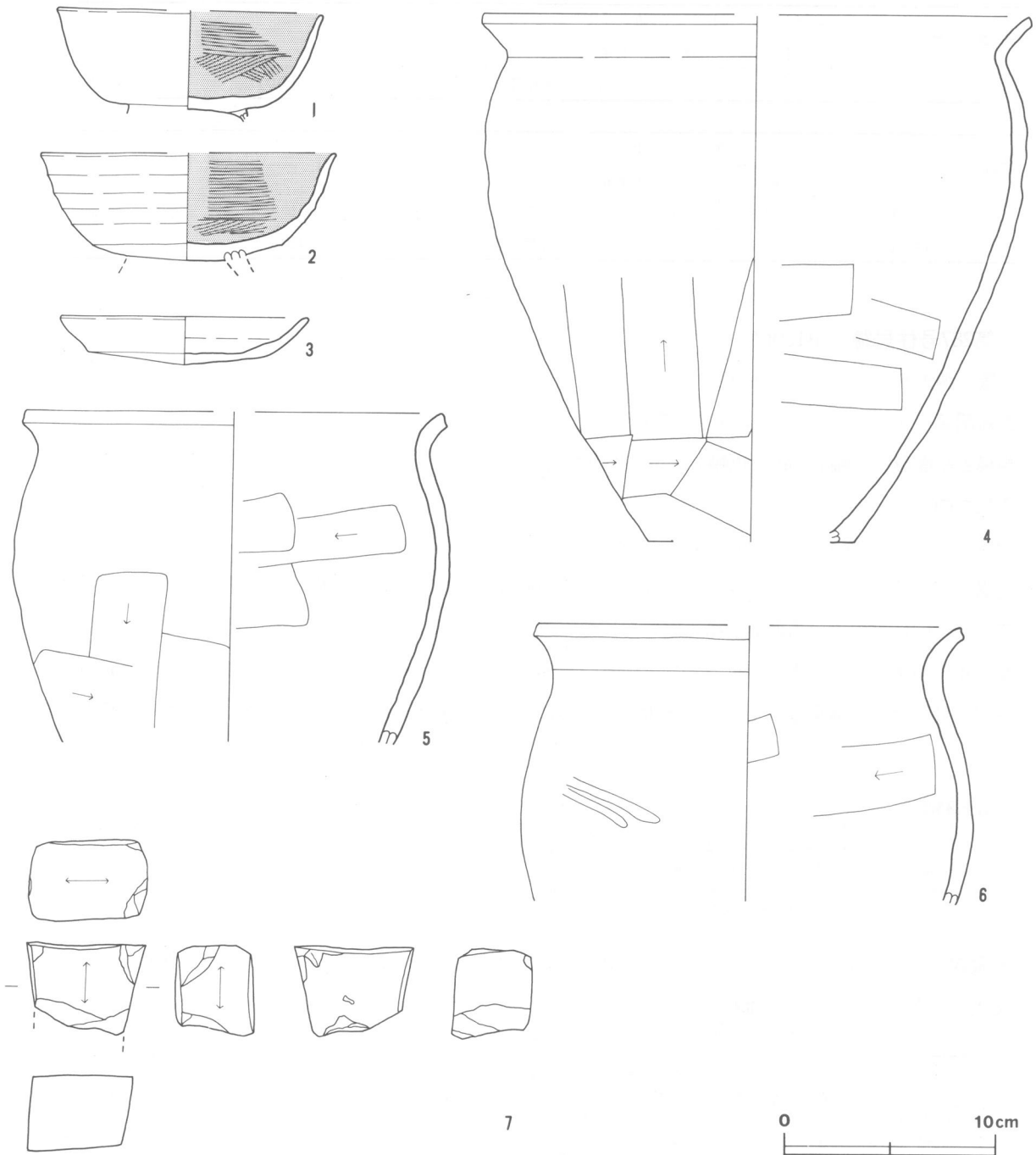
覆土 6層からなり，人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量，炭化粒子・焼土粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック微量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量，焼土粒子・ローム小ブロック微量
- 4 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 5 極暗褐色 ローム粒子少量，ローム中・小ブロック微量
- 6 黒褐色 ローム粒子少量

遺物 土師器片157点，須恵器片41点，石製品1点が出土している。1の土師器高台付椀，3の土師器小皿は竈内から，2の土師器高台付椀は南壁際覆土下層から，4の土師器甕は竈左袖付近の覆土下層から，5の土師器甕は中央付近の覆土中層から，6の土師器甕は中央付近の覆土下層から，7の砥石は竈左袖付近の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 本跡の時期は，遺構の形態や出土遺物から平安時代の10世紀以降と考えられる。



第388図 第287号住居跡出土遺物実測図

第287号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第388図 1	高台付碗 土師器	A[12.5] B(5.1) E(0.6)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部から体部外面ロクロナデ。内面ヘラ磨き。内面黒色処理。	石英・長石 外面にぶい橙色 内面黒色 普通	P1266 40% 竈内
2	高台付碗 土師器	A[13.8] B(5.2)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部から体部外面ロクロナデ。内面ヘラ磨き。内面黒色処理。	砂粒・長石 外面にぶい橙色 内面黒色 普通	P1267 20% 南壁際覆土下層

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第388図 3	小皿 土師器	A 11.6 B 2.3 C 8.6	体部一部欠損。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部から体部内・外面クロナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒・石英・長石・雲母 橙色 普通 外面煤付着	P1265 70% 竈内
4	甕 土師器	A[26.0] B 24.9 C[9.8]	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り。内面ヘラナデ。	砂粒・長石 橙色 普通 内・外面煤付着	P1268 40% 左袖付近覆土下層
5	甕 土師器	A[19.6] B(15.3)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り。内面ヘラナデ。	砂粒・長石 灰褐色 普通 内・外面煤付着	P1269 30% 中央付近覆土中層
6	甕 土師器	A[20.0] B(13.0)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り。内面ヘラナデ。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通 内・外面煤付着	P1270 20% 中央付近覆土下層

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
7	砥石	(4.4)	(5.6)	3.6	(118)	左袖付近覆土下層	Q1001 凝灰岩

第291号住居跡（第165図）

位置 調査6区南部，N14c3区。

重複関係 第289・290号住居跡を掘り込んでおり，本跡が新しい。

規模と平面形 長軸3.40m，短軸3.28mの方形である。

主軸方向 N-9°-E

壁 壁高は35～45cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 上幅10～15cm，下幅5～10cm，深さ10cmほどで，断面形はU字形である。全周している。

床 全体的に平坦で，中央部がよく踏み固められている。

竈 北壁北東コーナー寄りに付設されている。規模は長さ80cm，袖幅125cm，壁外への掘り込みは25cmである。

竈部は砂質粘土で構築されている。火床部は楕円形に浅く掘りくぼめられ，煙道部は火床部から外傾して立ち上がる。

竈土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子少量，炭化粒子微量
- 2 極暗褐色 焼土粒子中量，炭化粒子少量
- 3 黒褐色 焼土粒子多量，炭化粒子中量
- 4 暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子多量，焼土小ブロック中量
- 5 暗赤褐色 焼土粒子多量，焼土小ブロック中量，焼土中ブロック少量
- 6 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子多量

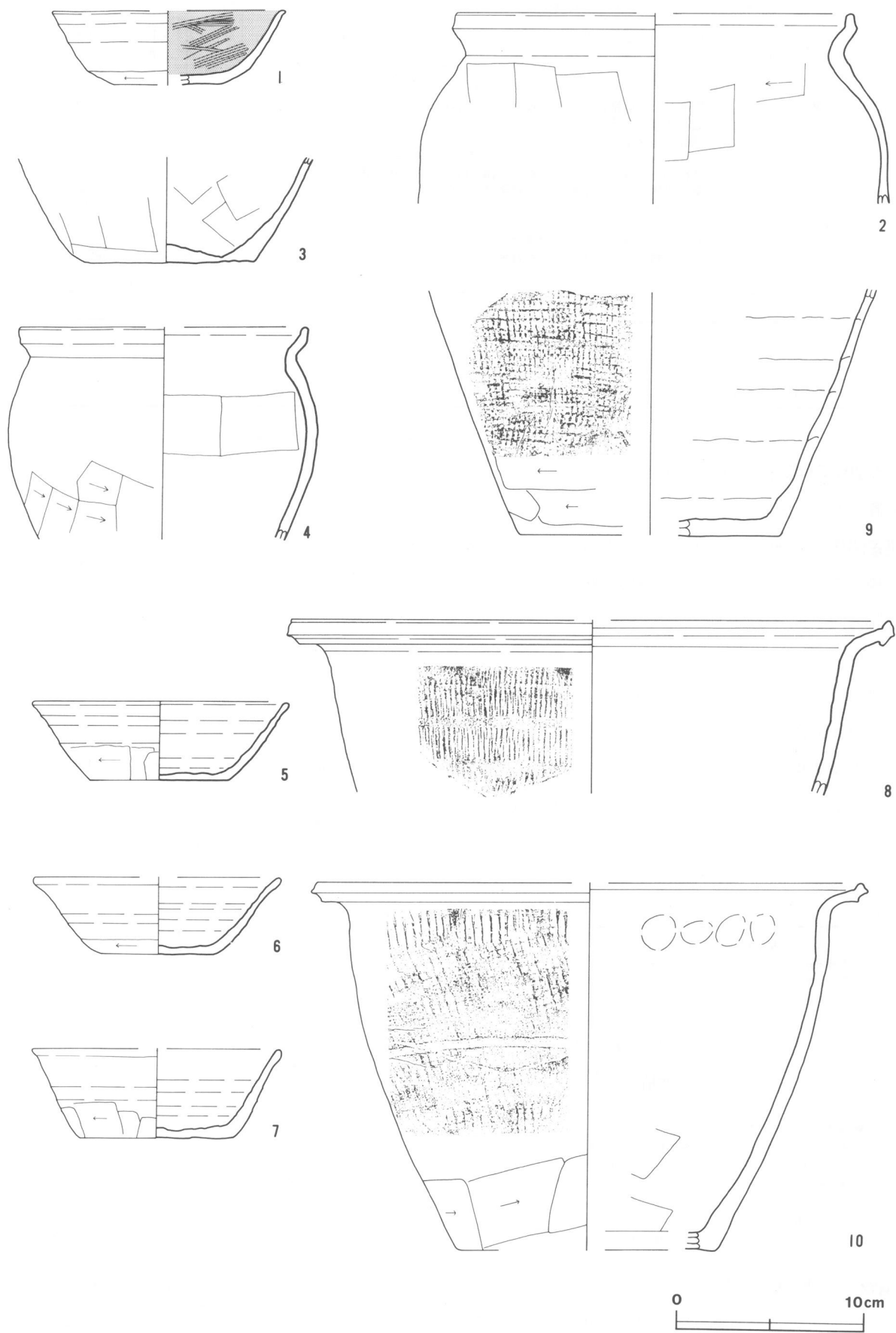
ピット 1か所(P₁)。P₁は径30cmの円形で，深さ25cmである。出入り口に伴うピットと考えられる。

覆土 6層からなり，自然堆積である。

土層解説

- 1 黒色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック少量，焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・ローム粒子微量
- 3 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量
- 4 黒褐色 焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量，炭化粒子微量
- 5 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
- 6 暗褐色 ローム粒子中量，焼土粒子少量

遺物 土師器片330点，須恵器片98点が出土している。1の土師器坏は南壁際の覆土下層から，6の須恵器坏は中央付近の覆土下層から，10の須恵器甕は東壁際の覆土下層からそれぞれ出土している。その他は覆土上層からの出土が多く，住居廃棄後の投げ込みと考えられる。



第389図 第291号住居跡出土遺物実測図

所見 本跡の時期は、遺構の形態や出土遺物から平安時代の9世紀前葉と考えられる。

第291号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第389図 1	坏 土師器	A[12.4] B 4.0 C[5.8]	体部・口縁部一部欠損。平底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部に至る。	体部外面ロクロナデ。内面ヘラ磨き。体部下端回転ヘラ削り。内面黒色処理。	砂粒・石英・長石・雲母・スコリア 外面橙色・内面黒色 普通	P1289 35% 南壁際覆土下層
2	甕 土師器	A[21.2] B(10.2)	口縁部片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。端部は上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り。内面ヘラナデ。	砂粒・石英・長石・雲母・スコリア 橙色 普通	P1290 20% 中央付近覆土上層
3	甕 土師器	B(5.7) C 9.3	底部片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部外面下端ヘラ削り。内面ナデ。外面煤付着。磨滅が著しい。	砂粒・石英・長石・雲母 橙色 普通 二次焼成	P1291 10% 北東コーナー 覆土下層
4	小形甕 土師器	A[15.2] B(11.4)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り。内面ヘラナデ。	砂粒・石英・長石・雲母 明赤褐色 普通 煤付着	P1292 20% 東壁際覆土中層
5	坏 須恵器	A 13.4 B 4.2 C 7.4	体部一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部から体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部ヘラ削り。	砂粒・長石・雲母 黄灰色 良好	P1293 70% 西壁際覆土上層
6	坏 須恵器	A[15.2] B 4.1 C 6.0	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部から体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部ヘラ削り。	砂粒・石英・雲母 暗褐色 普通 煤付着	P1294 40% 中央付近覆土下層
7	坏 須恵器	A[13.0] B 4.8 C 8.2	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部から体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部ヘラ削り。	石英・長石 灰黄褐色 良好	P1295 30% 中央付近覆土上層
8	甕 須恵器	A[32.0] B(9.2)	体部から口縁部にかけての破片。体部は外傾して立ち上がり、口縁部は強く外反する。端部断面は三角形を呈している。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面縦方向の平行叩き。	砂粒・長石・雲母 黄灰色 普通	P1296 10% 中央付近覆土上層
9	甕 須恵器	B(13.2) C[14.0]	底部から体部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部外面中位格子目叩き。下位ヘラ削り。内面ナデ。輪積み痕。	石英・長石 灰白色 普通	P1297 40% 北西コーナー 覆土上層
10	甗 須恵器	A[29.0] B 19.6 C[13.6]	体部から口縁部にかけての破片。多孔式。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は強く外反する。口縁部に稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面縦方向の平行叩き。体部下端ヘラ削り。内面ヘラナデ。内面に指頭押圧。	石英・長石・雲母・スコリア にぶい褐色 普通 煤付着	P1298 35% 東壁際覆土下層

第293号住居跡（第167・168図）

位置 調査6区南部，N14d2区。

重複関係 第292号住居跡を掘り込んでおり、本跡が新しい。また第155・168号土坑に掘り込まれているので、本跡が古い。

規模と平面形 長軸4.28m，短軸4.12mの方形である。

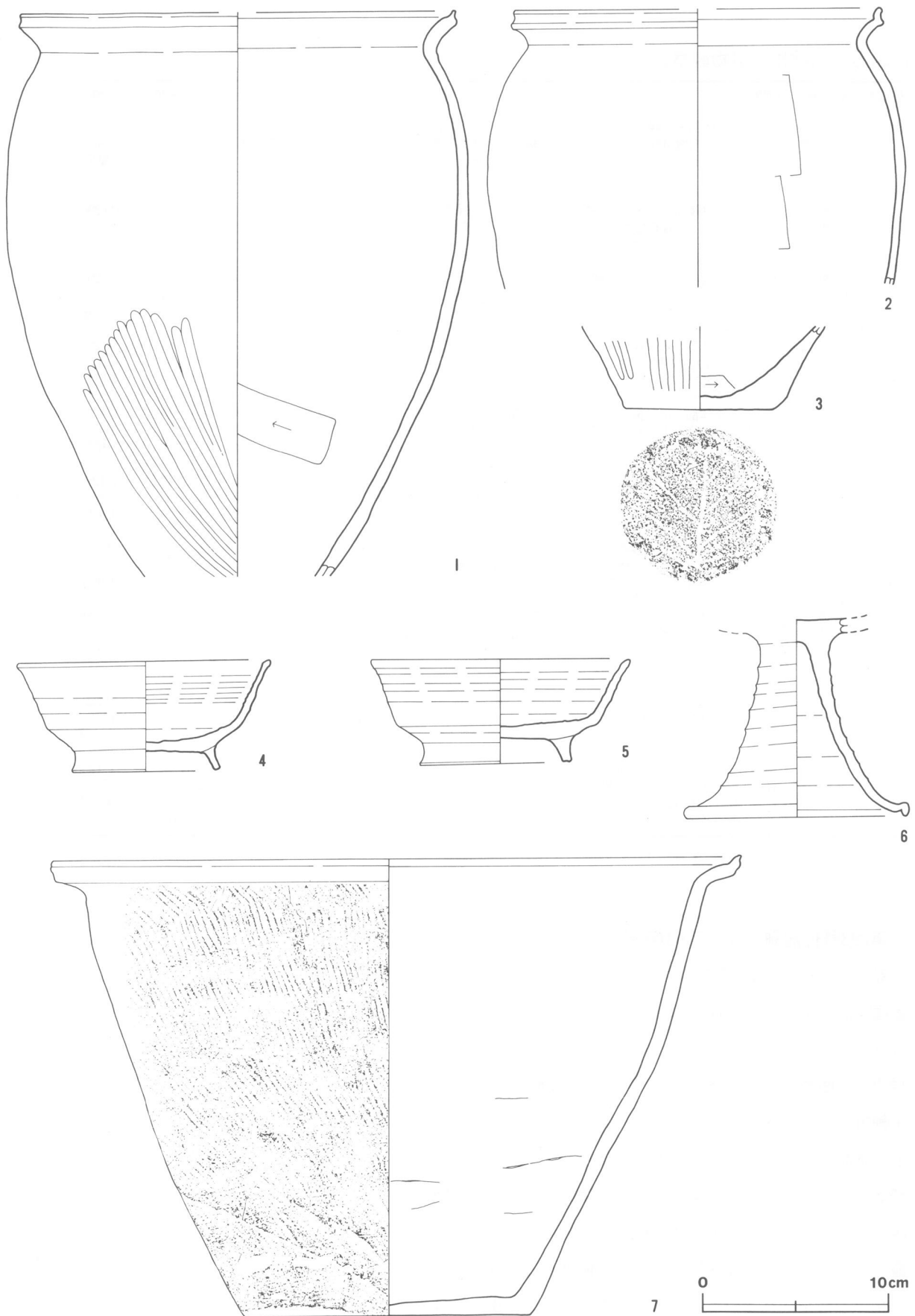
主軸方向 N-3°-E

壁 壁高は29~58cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

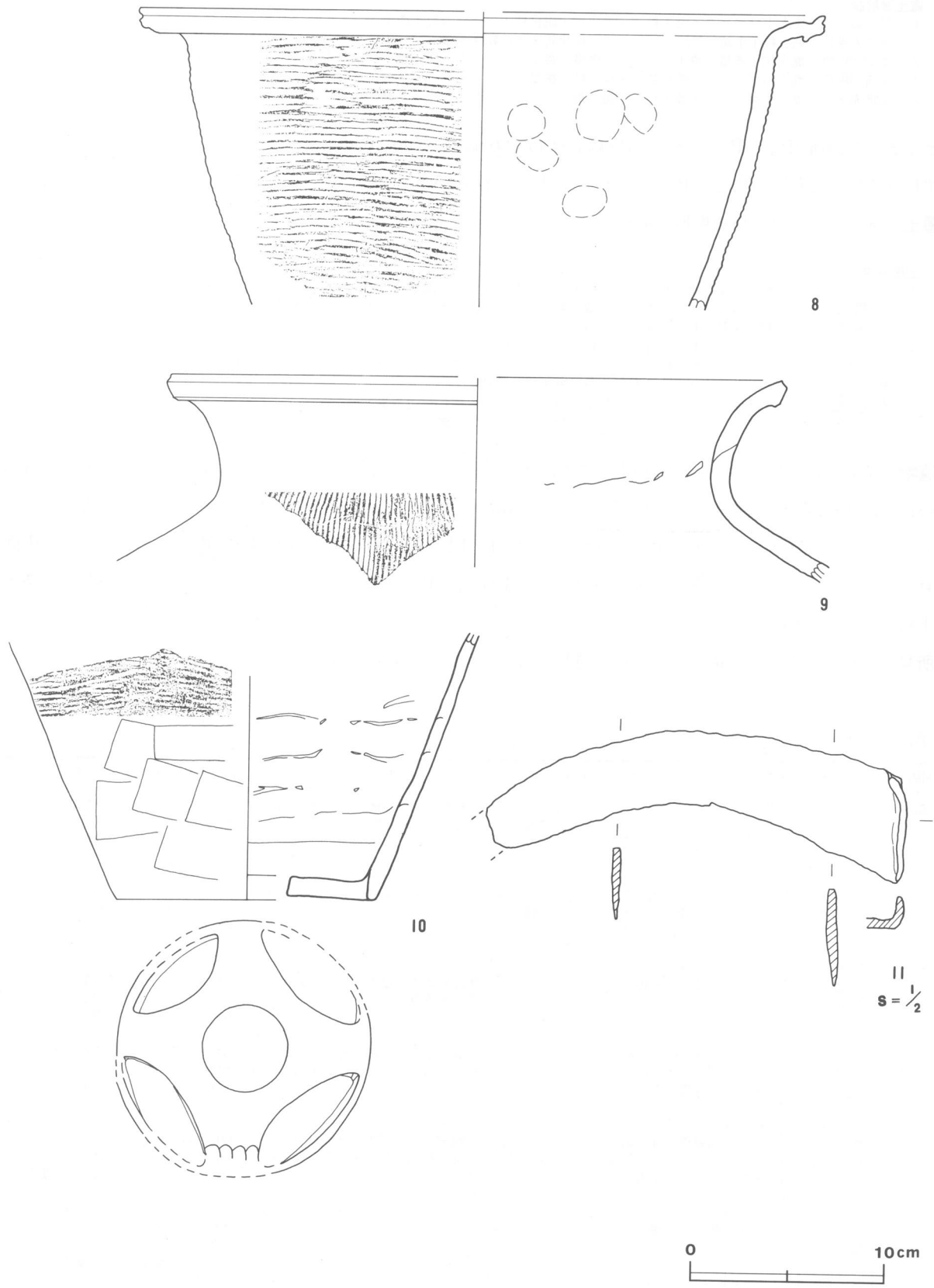
壁溝 上幅10~15cm，下幅5~10cm，深さ10cmほどで、断面形はU字形である。全周している。

床 全体的に平坦で、中央部が踏み固められている。出入り口付近には高まりが見られる。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は長さ115cm，袖幅145cm，壁外への掘り込みは38cmである。袖部は砂質粘土で構築されている。火床部は楕円形に浅く掘りくぼめられ、煙道部は火床部から外傾して立ち上がる。



第390図 第293号住居跡出土遺物実測図(1)



第391図 第293号住居跡出土遺物実測図(2)

竈土層解説

- 1 黒褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・ローム粒子微量
- 2 極暗赤褐色 焼土粒子中量, 焼土小ブロック・炭化物・炭化粒子少量, ローム粒子・ローム小ブロック微量
- 3 極暗褐色 焼土粒子多量, 焼土小ブロック中量, 焼土中ブロック・炭化物・炭化粒子少量, ローム粒子微量
- 4 極暗褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 5 極暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子中量, 焼土中ブロック・炭化粒子少量

ピット 3か所(P₁~P₃)。P₁, P₂は長径45~80cm, 短径40~65cmの楕円形で, 深さ41~58cmである。いずれも支柱穴と考えられる。P₃は径32cmの円形で, 深さ25cmである。出入り口に伴うピットと考えられる。

覆土 8層からなり, 自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック微量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子・ローム中ブロック微量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量, 粘土微量
- 4 極暗褐色 炭化粒子・ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化物微量
- 5 極暗褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量, 焼土中ブロック・炭化粒子・炭化物・ローム中ブロック微量
- 6 極暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量, 焼土粒子微量
- 7 極暗褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 8 黒褐色 焼土小ブロック・焼土粒子少量, 炭化粒子・ローム粒子微量

遺物 土師器片391点, 須恵器片115点, 鉄製品1点が出土している。1の土師器甕は竈内から, 4の須恵器高台付坏は北壁際の覆土下層から正位で, 5の須恵器高台付坏はP₃付近の覆土下層から逆位でそれぞれ出土している。6の高坏脚部は火床部中央に置かれ支脚に転用されている。7の須恵器甕は南西コーナー付近の床面直上から横位のつぶれた状態で, 10の須恵器甕は竈付近の覆土下層から, 11の鉄鎌は北西コーナー付近の覆土中層からそれぞれ出土している。

所見 本跡の時期は, 遺構の形態や出土遺物から平安時代の8世紀後葉と考えられる。

第293号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第390図 1	甕 土師器	A [23.2] B (30.4)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部は外反する。端部は上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面下位縦方向のヘラ磨き。内面ヘラナデ。	砂粒・石英・長石・雲母 にぶい橙色 普通 煤付着	P1301 30% 竈内
2	甕 土師器	A [19.8] B (15.0)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部は外反する。端部は上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。内面ヘラナデ。	石英・長石 にぶい赤褐色 普通	P1302 15% 覆土中
3	甕 土師器	B (4.5) C 7.8	底部片。平底。	体部外面下位縦方向のヘラ磨き。底部に木葉痕。	砂粒・石英・長石・雲母 橙色 普通 二次焼成	P1303 10% 覆土中
4	高台付坏 須恵器	A 13.4 B 5.9 D 8.0 E 1.2	口縁部一部欠損。高台はハの字状に開く。体部は外傾して立ち上がり, 口縁部に至る。	口縁部から体部内・外面クロナデ。底部回転ヘラ切り後, 高台貼り付け。	砂粒・石英・長石 青灰色 良好	P1304 95% 北壁際覆土下層
5	高台付坏 須恵器	A 13.8 B 5.7 D 8.1 E 1.2	口縁部一部欠損。高台はハの字状に開く。体部は外傾して立ち上がり, 口縁部に至る。	口縁部から体部内・外面クロナデ。底部回転ヘラ切り後, 高台貼り付け。	砂粒・石英・長石 灰色 良好	P1305 90% P ₃ 付近覆土下層
6	高坏 須恵器	B (10.6) D 12.0	脚部片。脚部は長く, ラッパ状に開く。	脚部内・外面クロナデ。	砂粒・石英・長石 灰色 良好 二次焼成	P1306 40% 支脚転用
7	甕 須恵器	A 36.9 B 24.7 C 15.4	体部から口縁部一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり, 口縁部は強く外反する。口縁部上位に稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面縦方向の平行叩き。内面ヘラナデ。	砂粒・石英・長石 灰色 良好	P1307 60% 南西コーナー 付近床直

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第391図 8	甕 須恵器	A[35.6] B(15.3)	体部から口縁部にかけての破片。体部は外傾して立ち上がり、口縁部は強く外反する。口縁部上位に稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横方向の平行叩き。内面に指頭押圧。	砂粒・石英・長石 灰色 良好	P1308 15% 北東コーナー・中央付近覆土下層
9	甕 須恵器	A[31.6] B(9.7)	口縁部片。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面縦方向の平行叩き。輪積み痕。	砂粒・石英・長石 灰色 良好	P1309 10% 中央付近覆土上層
10	甕 須恵器	B(13.7) C 13.3	底部から体部にかけての破片。多孔式。体部は外傾して立ち上がる。	体部外面横方向の平行叩き。体部下端ヘラ削り。内面ヘラナデ。	石英・長石・雲母 灰黄色 普通	P1310 40% 甕付近覆土下層

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
11	鎌	(14.6)	5.1	0.4	(42)	北西コーナー付近覆土中層	M1019

第294号住居跡（第392図）

位置 調査6区南部，N14e2区。

重複関係 第295号住居跡の上部に構築されており，本跡が新しい。

規模と平面形 長軸4.12m，短軸3.38mの長方形である。

主軸方向 N-3°-W

壁 壁高は14～22cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝 西壁下に確認した。上幅15～20cm，下幅8～12cm，深さ8cmほどで，断面形はU字形である。

床 第295号住居跡の上部に張り床をして構築されている。全体的に平坦で，竈前面がよく踏み固められている。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は長さ100cm，袖幅80cm，壁外への掘り込みは65cmである。袖部は砂質粘土で構築されている。火床部は楕円形に10cmほど掘りくぼめられ，煙道部は火床部から緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子中量，焼土小ブロック・炭化粒子少量，炭化物微量
- 2 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子少量，炭化物微量
- 3 黒褐色 焼土粒子多量，炭化粒子中量
- 4 黒褐色 焼土粒子多量，焼土小ブロック・炭化粒子中量，炭化物微量
- 5 黒褐色 焼土粒子少量

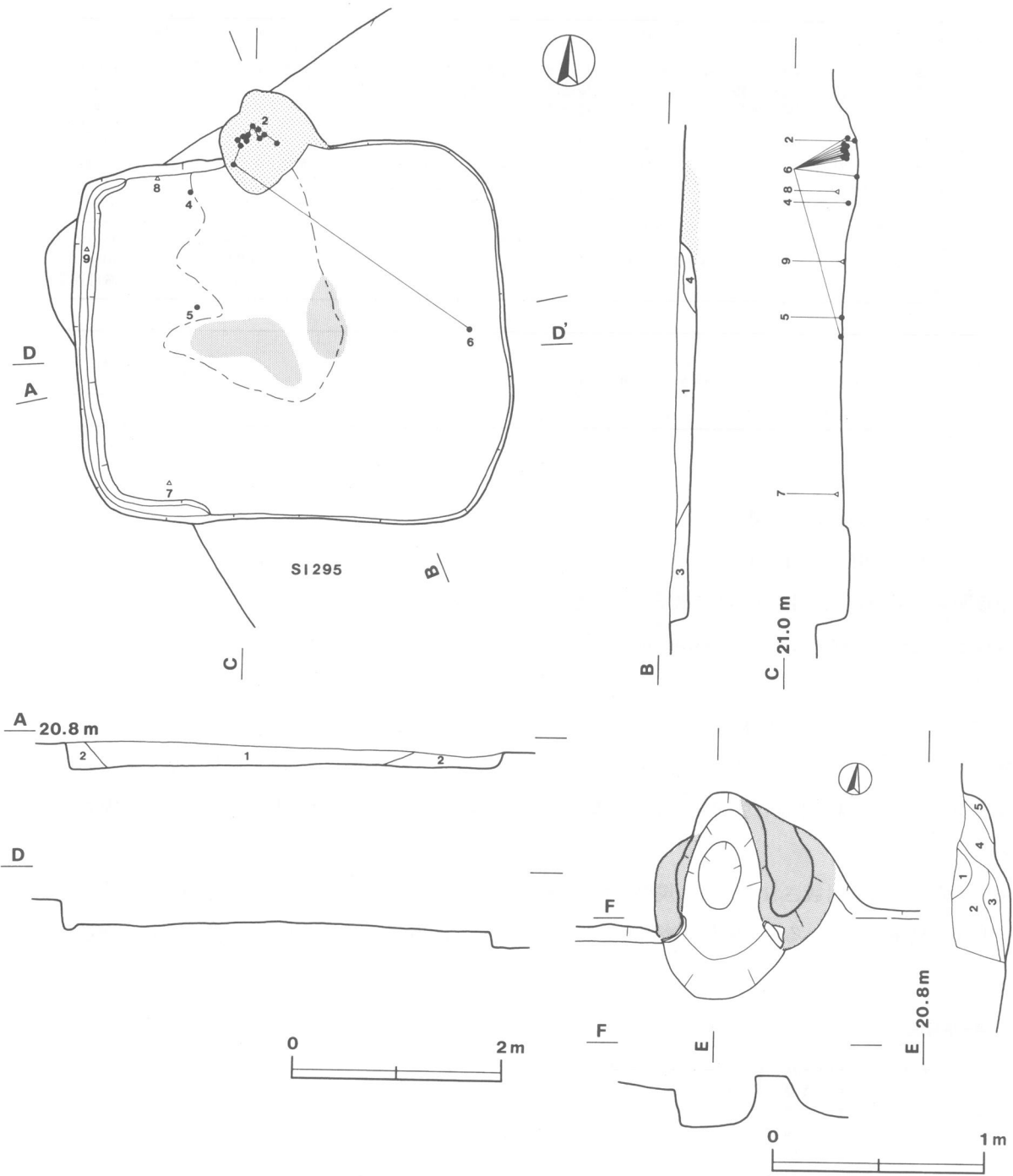
覆土 4層からなり，自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 炭化物少量，焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子微量
- 2 黒褐色 炭化粒子・ローム粒子微量
- 3 極暗褐色 炭化粒子・ローム粒子微量
- 4 黒褐色 炭化粒子少量，焼土粒子・炭化物・ローム粒子微量

遺物 土師器片214点，須恵器片21点，鉄製品3点が出土している。1の土師器坏，3の土師器高台付坏は覆土中から，2の土師器高台付坏は竈内から逆位で，4の土師器高台付坏は北壁際の覆土下層から逆位で，5の土師器甕は中央付近の床面直上から，6の土師器甕は竈内から，7の鉄鎌は南西コーナー付近の覆土下層から，8の鉄斧は北壁際の覆土下層から，9の刀子は西壁際の覆土下層からそれぞれ出土している。

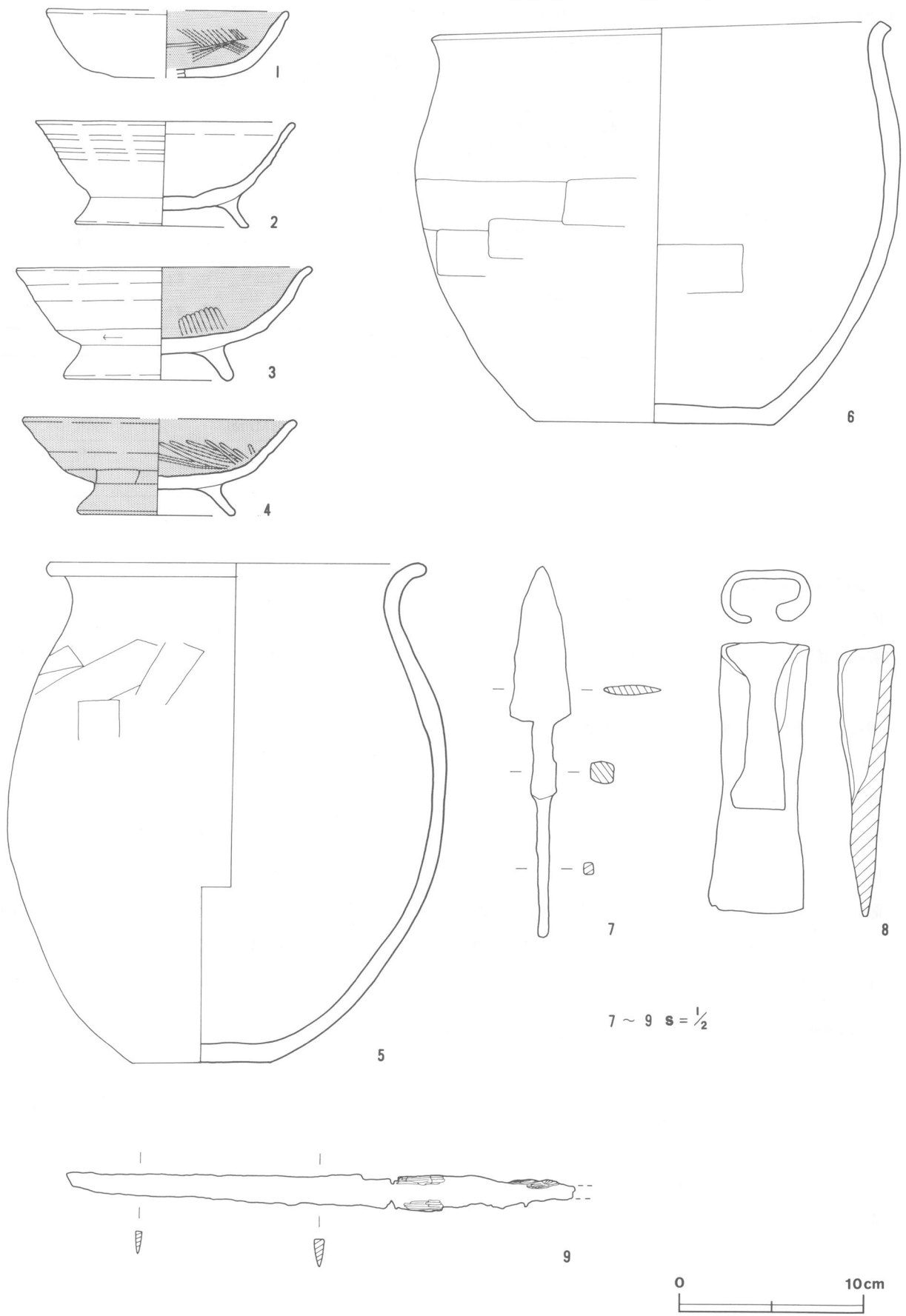
所見 本跡の時期は，遺構の形態や出土遺物から平安時代の9世紀後葉と考えられる。



第392図 第294号住居跡実測図

第294号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第393図 1	坏 土師器	A [13.0] B 3.6 C [5.6]	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部から体部外面ロクロナデ。体部下端へラ削り。内面へラ磨き。底部回転糸切り。内面黒色処理。	砂粒・雲母 外面にぶい橙色 内面黒色 普通	P 1311 40% 覆土中
2	高台付坏 土師器	A 14.0 B 5.8 D 9.3 E 1.5	口縁部一部欠損。高台は長く、ハの字状に開く。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部から体部内・外面ロクロナデ。高台貼り付け後、ナデ。	砂粒・石英・雲母・スコリア にぶい橙色 普通	P 1312 85% 竈内



7 ~ 9 s = 1/2

第393図 第294号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第393図 3	高台付坏 土師器	A 15.9 B 6.2 D 9.0 E 1.9	体部一部欠損。高台は長く、ハの字状に開く。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部から体部外面ロクロナデ。体部内面へラ磨き。高台貼り付け後、ナデ。体部下位回転へラ削り。脚部内面を除き内面黒色処理。	砂粒・雲母 内・外面黒色 普通	P1313 70% 覆土中
4	高台付坏 土師器	A[14.6] B 5.2 D 8.2 E 1.7	体部から口縁部にかけての破片。高台は長く、ハの字状に開く。体部は外傾して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部から体部外面ロクロナデ。体部内面へラ磨き。高台貼り付け後、ナデ。体部下位回転へラ削り。脚部内面を除き内・外面黒色処理。	砂粒・石英・雲母 内・外面黒色 良好	P1314 50% 北壁際覆土下層
5	甕 土師器	A 20.0 B 27.0 C[7.4]	体部・口縁部一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り。内面ナデ。	砂粒・石英・長石・ 雲母 にぶい黄褐色 普通 煤付着	P1315 70% 中央付近床直
6	甕 土師器	A 25.0 B 22.0 C 13.0	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はやや外反する。	口縁部内・外面ロクロナデ。体部外面へラ削り。内面ナデ。底部へラ削り。	砂粒・長石・雲母・ スコリア 浅黄褐色 普通 煤付着	P1316 70% 竈内

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
7	鉄 鍬	13.4	2.2	0.8	24	南西コーナー覆土下層	M1020 95%
8	鉄 斧	9.8	3.4	2.0	111	北壁際覆土下層	M1021 95%
9	刀 子	(18.4)	1.4	0.4	(20)	西壁際覆土下層	M1022 95%

第296号住居跡（第394図）

位置 調査6区南部，N13e0区。

重複関係 第298・309号住居跡を掘り込んでおり，本跡が新しい。また第297号住居跡に掘り込まれているので，本跡が古い。

規模と平面形 長軸4.18m，短軸3.78mの方形である。

主軸方向 N-15°-E

壁 壁高は30～52cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝 上幅20cm，下幅12cm，深さ5cmほどで，断面形はU字形である。全周している。

床 全体的に平坦で，竈前面から出入り口にかけてよく踏み固められている。

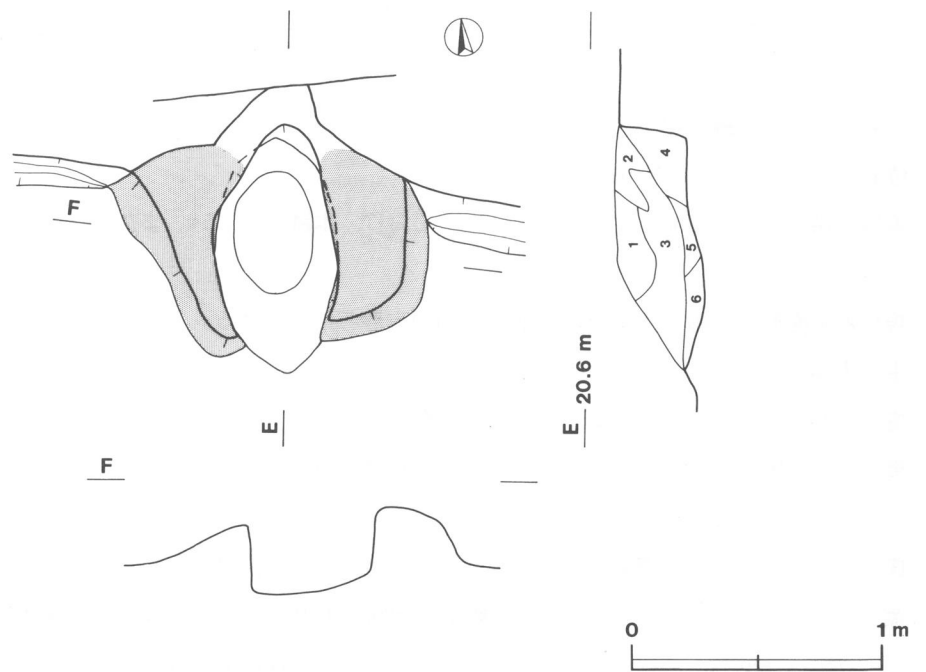
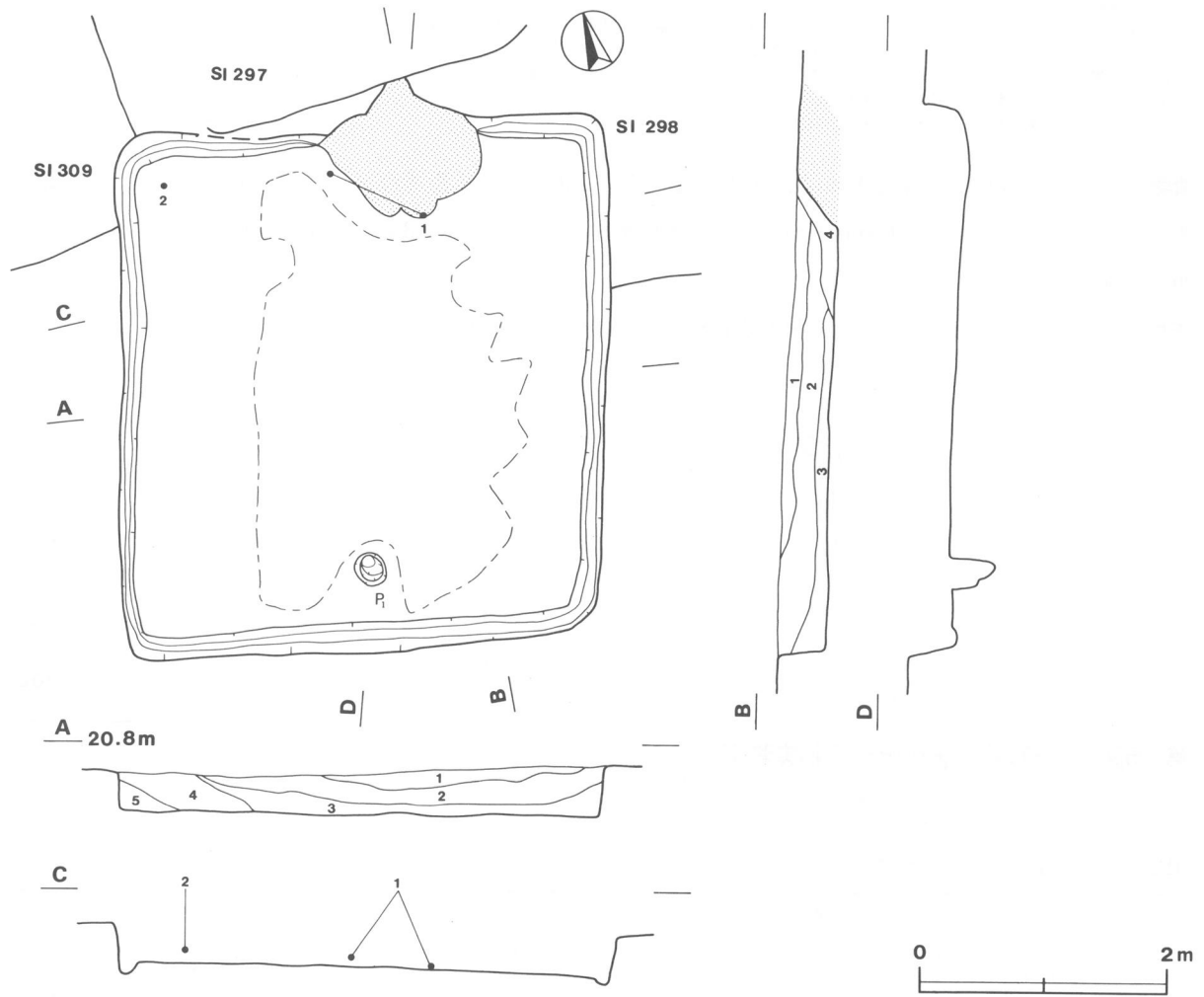
竈 北壁中央部に付設されている。規模は長さ120cm，袖幅120cm，壁外への掘り込みは45cmである。袖部は砂質粘土で構築されている。火床部は楕円形に浅く掘りくぼめられ，煙道部は火床部から緩やかに立ち上がり，途中で角度を変えて外傾して立ち上がる。

竈土層解説

- 1 黒褐色 粘土多量
- 2 黒褐色 焼土粒子・粘土中量
- 3 黒褐色 粘土多量，焼土小ブロック・焼土粒子中量
- 4 暗赤褐色 焼土粒子多量，炭化粒子中量，焼土小ブロック少量
- 5 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子中量
- 6 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子中量

ピット 1か所(P₁)。P₁は径25cmの円形で，深さ37cmである。出入り口に伴うピットと考えられる。

覆土 5層からなり，自然堆積である。



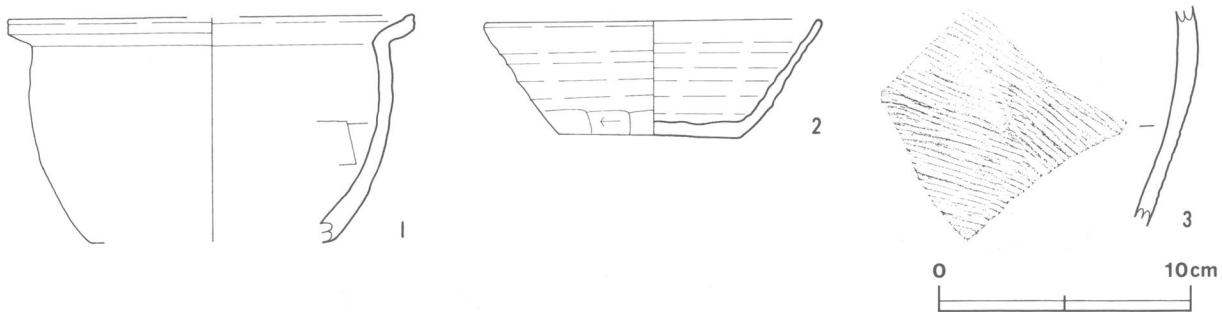
第394图 第296号住居跡実測图

土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック中量, ローム中ブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量, ローム中ブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子少量
- 3 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量, 炭化粒子・焼土粒子微量
- 4 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子多量
- 5 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量

遺物 土師器片250点, 須恵器片39点が出土している。1の土師器小形甕は竈付近の覆土下層から, 2の須恵器坏は北西コーナー付近の床面直上から逆位でそれぞれ出土している。3は須恵器甕の体部片で, 外面に平行叩きが施されている。

所見 本跡の時期は, 遺構の形態や出土遺物から平安時代の8世紀後葉と考えられる。



第395図 第296号住居跡出土遺物実測図

第296号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第395図 1	小形甕 土師器	A[16.0] B 8.9 C[9.6]	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。内面ヘラナデ。磨滅が著しい。	砂粒・石英・長石・雲母 灰黄褐色 普通	P1322 30% 竈付近覆土下層
2	坏 須恵器	A 13.4 B 4.5 C 7.2	口縁部一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり, 口縁部に至る。	口縁部から体部内・外面クロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部多方向のヘラ削り。	砂粒・雲母 灰色 良好	P1323 95% 北西コーナー付近床直

第297号住居跡 (第396図)

位置 調査6区南部, N13a0区。

重複関係 第296・298号住居跡を掘り込んでおり, 本跡が新しい。また第299号住居跡に掘り込まれているので, 本跡が古い。

規模と平面形 長軸[3.20] m, 短軸3.16mの方形と推定される。

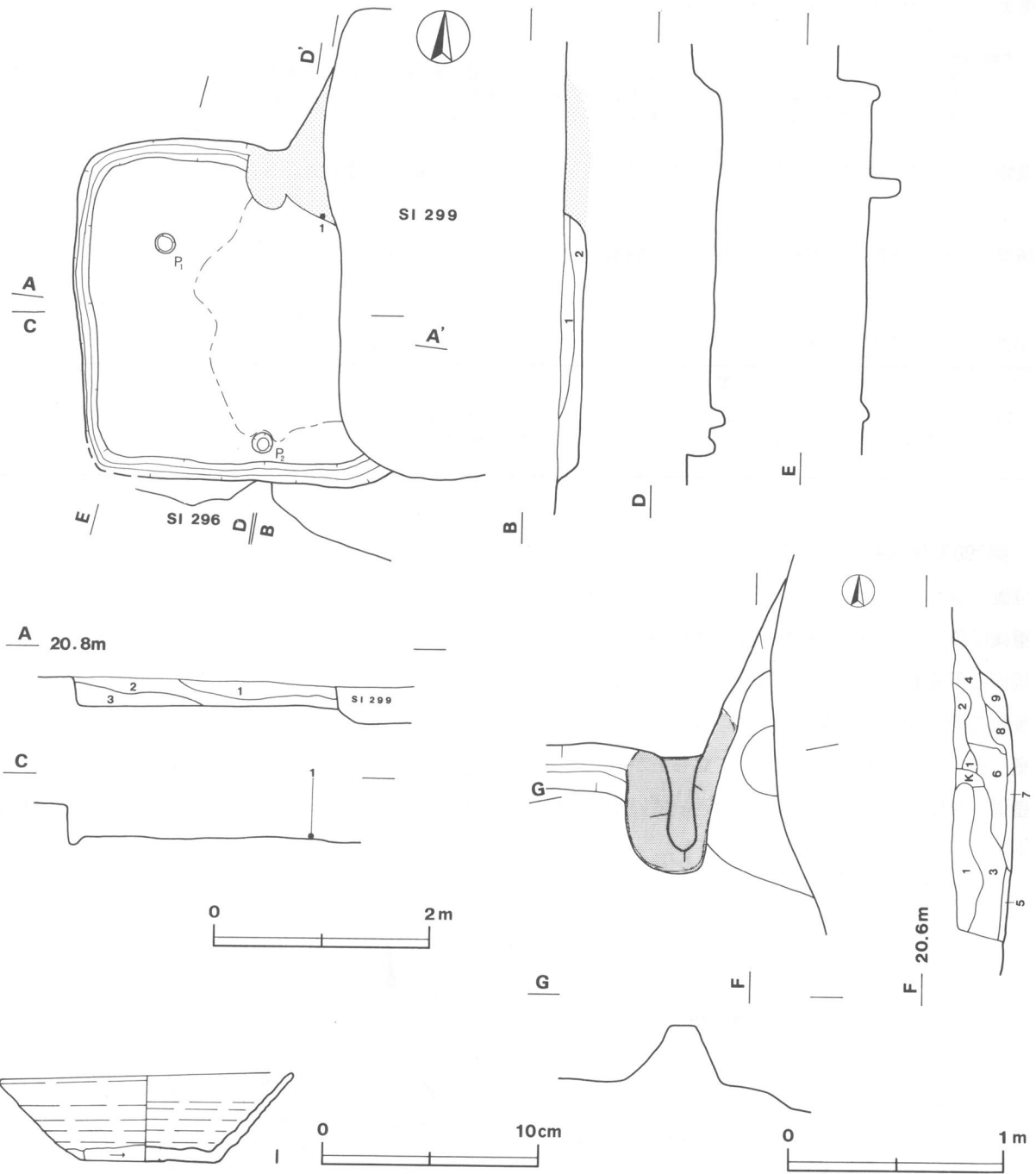
主軸方向 N-4°-W

壁 壁高は24~34cmで, 外傾して立ち上がる。

壁溝 第299号住居跡に掘り込まれている部分を除き巡っている。上幅10~15cm, 下幅5~10cm, 深さ10cmほどで, 断面形はU字形である。

床 全体的に平坦で, 竈前面から出入り口にかけてよく踏み固められている。

竈 北壁中央部に付設されている。右袖部は第299号住居跡に掘り込まれて遺存状況は悪く, 規模は長さ140cm, 袖幅(80)cm, 壁外への掘り込みは80cmである。袖部は砂質粘土で構築されている。火床部は楕円形に浅く掘りくぼめられ, 煙道部は火床部から外傾して立ち上がる。



第396図 第297号住居跡・出土遺物実測図

竈土層解説

- 1 黒褐色 炭化粒子少量, 焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 2 暗褐色 焼土粒子中量, 炭化粒子・ローム粒子少量
- 3 黒褐色 焼土粒子・ローム粒子少量, 炭化粒子・ローム小ブロック微量
- 4 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 5 極暗褐色 焼土粒子・ローム粒子少量, 炭化粒子・ローム小ブロック微量
- 6 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子中量, ローム粒子少量, 焼土中ブロック微量
- 7 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子多量, ローム粒子少量
- 8 黒褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子・焼土粒子微量
- 9 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量

ピット 2か所(P₁, P₂)。P₁は径20cmの円形で, 深さ28cmである。主柱穴と考えられる。P₂は径20cmの円形で, 深さ13cmである。出入り口に伴うピットと考えられる。

覆土 3層からなり、自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量, ローム中ブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子・ローム中ブロック微量
- 3 黒褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック少量

遺物 土師器片145点, 須恵器片44点が出土している。1の須恵器坏は竈付近の床面直上から正位で出土している。

所見 本跡の時期は、遺構の形態や出土遺物から平安時代の9世紀中葉と考えられる。

第297号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第396図 1	坏 須恵器	A 13.6 B 4.4 C 6.4	平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部から体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちへら削り。底部多方向のへら削り。	砂粒・雲母 灰白色 良好	P1324 100% 竈付近床直

第298号住居跡 (第397図)

位置 調査6区南部, N14e1区。

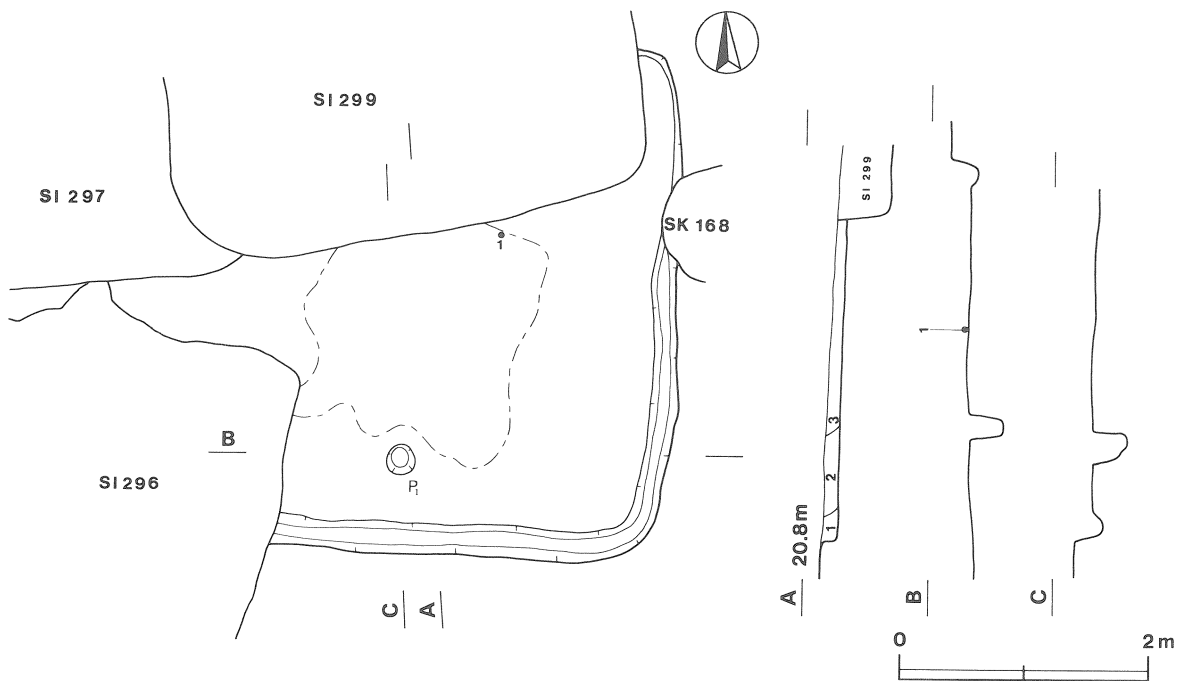
重複関係 第296・297・299号住居跡, 第168号土坑に掘り込まれているので, 本跡が古い。

規模と平面形 東西軸(3.10)m, 南北軸4.12mで, 平面形は不明である。

長軸方向 N-3°-W

壁 壁高は14~16cmで, 外傾して立ち上がる。

壁溝 東壁下から南壁下にかけて巡っている。上幅15~20cm, 下幅10cm, 深さ8cmほどで, 断面形はU字形である。



第397図 第298号住居跡実測図